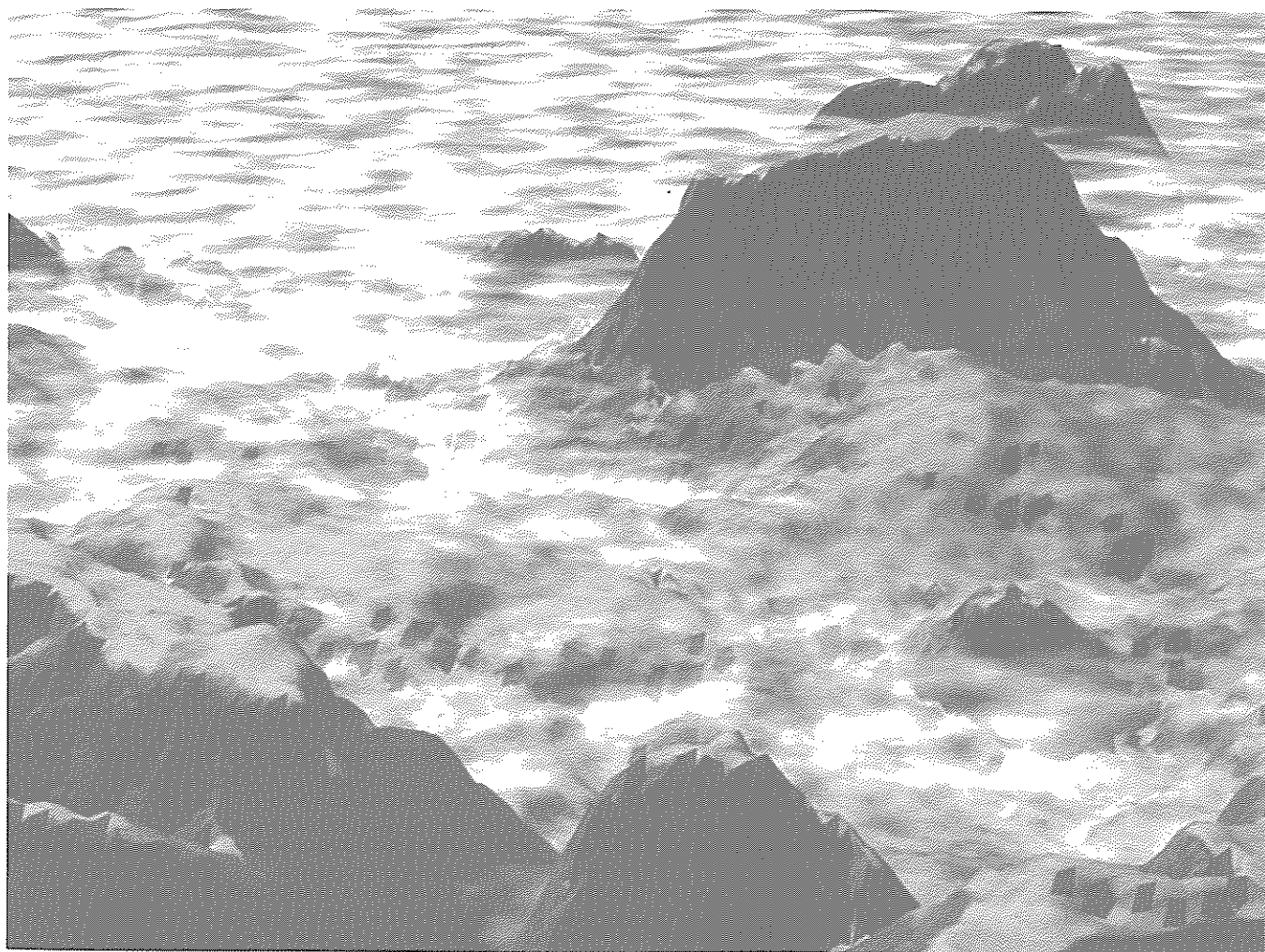


平成13年5月31日・6月1日
教育研究会要録

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

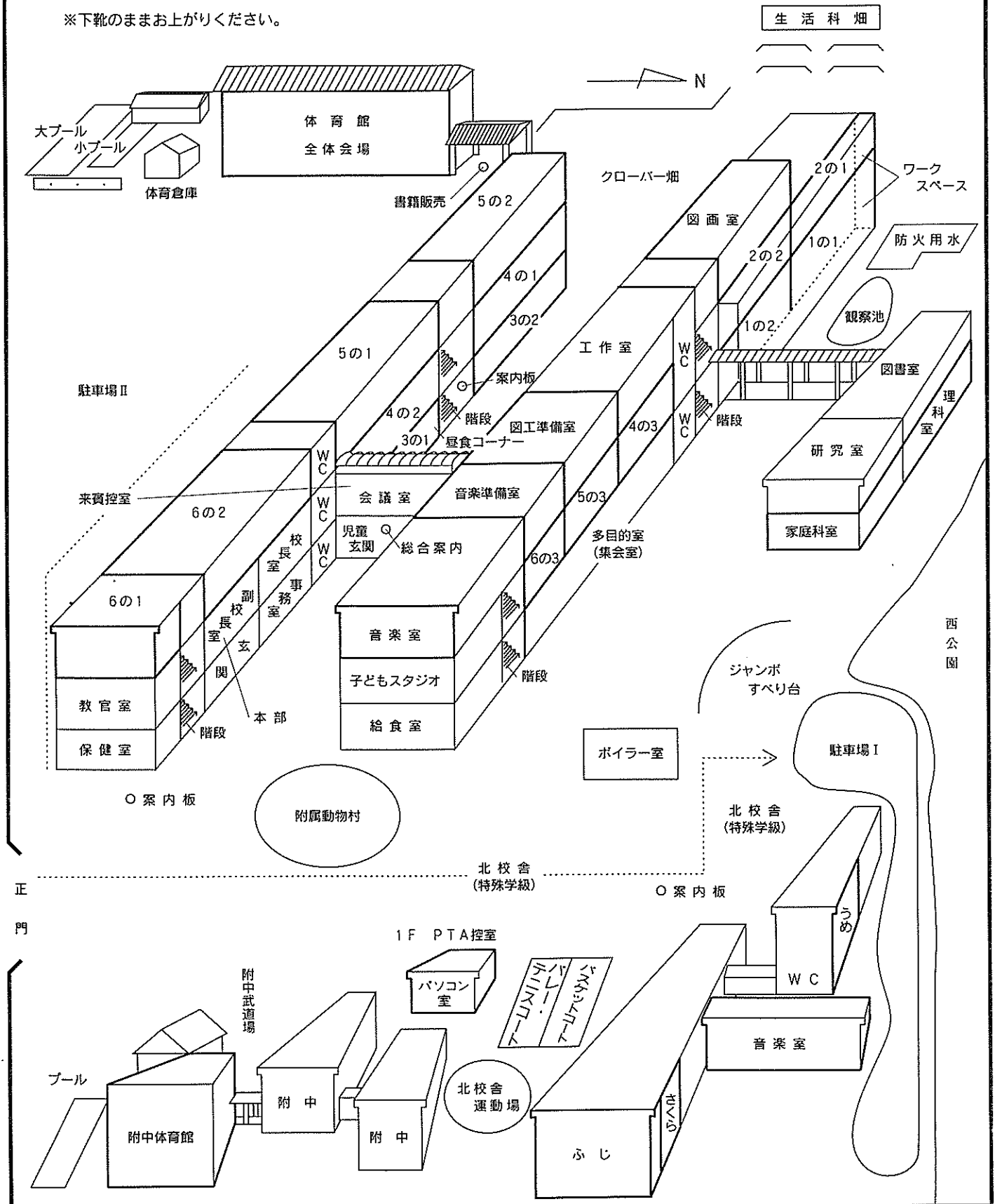
——調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化——



福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。



ご あ い さ つ

福岡教育大学 学 長 菰 口 治

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校の平成13年度研究発表会の開催にあたりまして、ひとことごあいさつを申し上げます。

本年度の研究発表会は主題を「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ―調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化―」と設定し、その研究成果を世に問うものがあります。昨年度の副主題「―知恵と心情を育む教科・総合の調和的展開―」を発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

現在、各附属学校は、その役割についても、先行研究実験校としての任務を確かに果たしていくことが何よりも大切なことの一つであると考えております。なかでも、大学と連携した研究開発はますます必要であり、その成果がこの研究発表会を通してそれぞれの公立学校に還元されるものであることが求められています。

本年度の研究発表会では、附属教官による公開授業・大学教官と附属教官による共同授業・教科等の発表・本県の公立、附属学校の先生方を招いての教育フォーラム・提案学習指導全体協議会・全体講演と2日間にわたって、多彩な内容となっております。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず、わが国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはありません。参会された皆様方のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが、ご多忙の中、ご講演をお引き受けくださいました奈須正裕先生に深く感謝申し上げます。また、司会者・指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にもお礼申し上げます。今回の研究発表会を機会に附属学校を中心に、大学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと願っております。関係する皆様の一層のご支援をお願い致しまして、ごあいさつと致します。

は じ め に

現在、新世紀における新しい教育改革が、国民的な課題として進められています。教育内容の厳選や「総合的な学習の時間」の創設などが盛り込まれた新学習指導要領は、いよいよ来年度から全面実施となります。

本校では、これまでに平成6年度から3年間、文部省の研究開発学校の指定を受け、子供たちに「生きる喜びを生み出す」教育課程の創造をめざし、教科の再編、内容の改訂を試みて参りました。この成果につきましては、著書「21世紀の教科・領域への挑戦『新時代の授業を創る』」（明治図書刊）として、既に発刊しています。

平成9年度からは、これらの研究をもとに、人間教育の在り方に目を向け、「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」という主題を掲げて研究に取り組んで参りました。そのなかでは、「知恵と心情を育む教科・総合的な学習の調和的展開」という副主題を設定し、知恵と心情を併せて培う学習の在り方の究明に取り組んで参りました。特に、文化の拡充を担う教科と、生活の更新を担う総合的な学習とに、共通する学習方法原理を取り入れることで、調和的な展開を図ってきました。これらの研究の成果につきましては、著書「調和的に展開する教科・総合的な学習『新世紀の学力づくり』」（明治図書）を本研究発表会と同時発刊しております。

本年度は、さらにこの研究を発展すべく、「調和的に展開する教科領域・総合的な学習像の明確化」を副主題に「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」に取り組んでいるところです。

この研究発表会がより多くの方々のご指導・ご支援のもとに展開できていることを深く感謝申し上げますとともに、今後とも各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成13年5月

校 長 中 谷 雅 彦

目 次

ごあいさつ	1
はじめに	2
目 次	3
日程と内容（第1日目）	4
日程と内容（第2日目）	6
本校研究のあゆみ	8
公開授業及び全体会の部	
第 1 日 目	
学習指導案（午前）	9
全 体 会	2 6
学習指導案（午後）	2 9
教育フォーラム	4 4
第 2 日 目	
学習指導案（午前）	4 5
保健部実践提案協議会	7 2
学習指導協議会	7 3
全 体 会	7 4
学習指導案（午後）【提案学習指導】	7 7
提案学習指導全体協議会	9 0
全体講演	9 1
研究紀要の部	
研究紀要目次	9 4
研究紀要	9 6
おわりに	2 5 1

新世紀の学校づくり！そのグランド・デザインを描く！！

研究主題

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ー調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化ー

第1日目 5月31日(木)の日程

◇学 習 指 導 (9:30~10:15)

学年組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	算 数 科	かたちしらべをしよう	澤 村 重 則	1年2組
2年2組	体 育 科	あそぼう！まねっこパーク	岩 城 一 磨	附中体育館
4年1組	あらつ学習(総合)	あらつの虫がたくさん住める西公園にしよう	原 ク ミ	4年1組
5年2組	算 数 科	図形をしきつめよう	小 森 晃	5年2組
4~6年3組	帰国合同国際交流タイム	WE LOVE OUR SCHOOLー海外での学校体験を生かして調べようー	石 硯 昭 雄 島 崎 儀 郎	子供スタジオ

大学教官との共同学習指導

6年1組	音 楽 科	音楽のかたちや仕組みを研究しよう！	原田大志助教授 豊 村 雅 義	音 楽 室
------	-------	-------------------	--------------------	-------

障害児教育学習指導

さくら組	体 育 科	さくら組ネット・サッカーをしよう	舩 元 俊 文	北校舎運動場
梅 組	生 活 単 元 学 習	ちびっ子大工さんになって、すてきなにわをつくろう	谷 崎 和 一 郎	北校舎中庭

◇あ い さ つ (10:30~10:45)

福岡教育大学学長 菰 口 治
学 校 長 中 谷 雅 彦

◇主 題 発 表 (10:50~11:10)

- ・豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造
ー調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化ー

研 究 主 任 吉 田 正 樹

◇教 科 等 発 表 (11:10~11:50)

- ・自ら求め創る喜びを味わう図画工作科学習
ー材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの展開ー

図画工作科部 北 田 尚 雄

- ・仲間と共に学校生活を築く特別活動
ー集団と自己を見つめる学級活動の展開ー

特 別 活 動 部 矢 野 俊 次

◇児 童 発 表 (11:50~12:00)

- ・受け継ぐ我ら 新世紀のハーモニー
ー6学年児童による音楽発表ー

指 導 者 豊 村 雅 義

◇学 習 指 導（13：30～14：15）

学 年 組	教 科 領 域 等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	生 活 科	ぐんぐんのびる！ぼく・わたし -せいちょうにつきをはじめよう-	石 田 耕 一	1年1組
3年1・2組	算 数 科	ぜんぶでいくつ	野 田 真 功	2年7-クラス
4年2組	体 育 科	4の2オリジナルネットボールを楽しもう	稲 津 一 徳	附中体育館
5年1組	社 会 科	魚の宝庫，博多漁港	高 野 誠 一	5年2組
6年2組	総合（あらつ学習）	始めよう！附小IT革命（校内LANの活用）	野 口 信 介	パソコン室

通常学級と障害児学級との図画工作科学習交流授業／大学教官との共同学習指導

2年1組 ふじ組	図 画 工 作 科	カラフルいろいろカップがあつまると！	吉 井 宏 教授 北 田 尚 雄・舩 元 俊 文	工 作 室
-------------	-----------	--------------------	-----------------------------	-------

◇教育フォーラム（14：30～16：30）

テ ー マ 「実践紹介！特色ある教育課程はこうしてつくる！」

コメンテーター 福岡教育大学 助 教 授 寺 岡 聖 豪

・ 福岡市立博多小学校実践紹介

－「博多学習」を中核に据えた教育課程の創造－

提 案 者 研究主任 今 林 康 治

・ 春日市立春日野小学校実践紹介

－総合的な道德教育の展開－

提 案 者 統括学年主任 田 中 義 人
研究主任 早 野 年 博

・ 福岡教育大学教育学部附属小倉小学校実践紹介

－学び方の基礎を重視した教育課程の展開－

提 案 者 研究主任 白 石 毅

・ 本校実践紹介

－教科領域・総合的学習が調和的に展開する教育課程の創造－

提 案 者 本校研究主任 吉 田 正 樹

コーディネーター 本校研究副主任 石 田 耕 一

◇あ い さ つ

副 校 長 久 門 隆

第2日目 6月1日(金)の日程

◇学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
1年1組	算 数 科	かずあてあそび	野 田 真 功	1年1組
2年1組	学 級 活 動	みんなでつくろう!「おもひえパーティー2001」	矢 野 俊 次	2年1組
2年2組	生 活 科	カランドパークで「かえっこショップ」をひらこう!	石 田 耕 一	子供スタジオ
3年1組	国 語 科	ぼくの、わたしの冒険ワールド	平 島 健 二	4年1組
3年2組	社 会 科	福岡市でつくり出されるもの	藤 野 俊 明	3年2組
4年1組	体 育 科	リズムダンス・レボリューション21	岩 城 一 磨	附中体育館
4年2・3組	音 楽 科	サンバでアミーゴ!われら附小サンバ隊	原 ク ミ	音楽室
5年1・3組	家 庭 科	家族に喜ばれるものをつくろう	木 村 真 美	家庭科室
5年2組	図 画 工 作 科	アルミとチューブのファクトリー	北 田 尚 雄	図 画 室
6年1組	理 科	進む地下汚染...福岡の水は大丈夫?	野 口 信 介	理 科 室
6年2・3組	道 徳	学校をわたしたちの手で【4-(1)】	石 硯 昭 雄	6年2組

障害児教育学習指導

さくら組	算 数 科	すうパズルをして、かみしばいをつくろう	塩 田 利 彦	北校舎音楽室
梅 組	国 語 科	ぼくの わたしの お話絵本をつくろう	原 口 和 美	梅組教室

◇保健養護部実践提案部会 (9:15~11:00)

・自らよりよい健康生活を創る保健学習

ー生活習慣を調べ、ライフスキルを形成していく活動の展開ー

会 場	提 案 者	司 会 者	指 導 助 言 者
5年2組	本校養護教諭 森 田 常 子	志摩町立志摩中学校 教諭 難 端 今 村 由 香	福岡県立看護専門学校 講師 筑 紫 味 子 福岡教育大学 教授 照 屋 博 行

◇学習指導協議会 (10:10~11:00)

会 場	教科領域等	司 会 者	指 導 助 言 者
4年1組	国 語 科	三橋町立二ツ河小学校 教諭 松 藤 秀 子	久山町立山田小学校 校長 古 川 千 年 福岡教育大学 教授 前 田 眞 澄
3年2組	社 会 科	大川市立宮前小学校 教諭 宮 崎 隆 行	前原市立南風小学校 校長 家 宇 治 正 幸 福岡教育大学 教授 中 野 和 光
1年1組	算 数 科	久留米市立山川小学校 教諭 塚 本 齊	春日市立春日野小学校 校長 吉 富 修 福岡教育大学 教授 飯 田 慎 司
理 科 室	理 科	福岡市立有住小学校 教諭 松 島 文 城	太宰府市立水城小学校 校長 平 石 信 敏 福岡教育大学 教授 宮 脇 亮 介
2年2組	生 活 科	福岡市立七隈小学校 教諭 松 田 伸 治	瀬高町立南小学校 校長 堤 直 樹 福岡教育大学 教授 寺 岡 聖 豪
音 楽 室	音 楽 科	福岡市立月隈小学校 教諭 津 本 修 一	大刀洗町立菊池小学校 校長 大 橋 鉄 雄 福岡教育大学 教授 岩 崎 洋 一
附属中学校 体育館	体 育 科	福岡市立四箇田小学校 教諭 笠 宏 照	大野城市立大野北小学校 校長 大 橋 直 徳 福岡教育大学 教授 池 田 修
工 作 室	図画工作科	福岡市立飯倉小学校 教諭 樺 島 穰	福岡市立愛宕小学校 校長 田 中 和 隆 福岡教育大学 教授 吉 井 宏
1年2組	家 庭 科	福岡市立八田小学校 教諭 篠 原 裕 子	福岡市立室見小学校 校長 田 中 光 子 福岡教育大学 教授 柳 昌 子
6年2・3組	道 徳	古賀市立千鳥小学校 教諭 堤 一 浩	柳川市立柳河小学校 校長 松 石 正 夫 福岡教育大学 教授 堺 正 之
2年1組	特 別 活 動	粕屋町立粕屋中央小学校 教諭 野 中 慎 治	北筑後教育事務所 指導主事 中 原 浩 福岡教育大学 教授 元 兼 正 浩
さくら組教室	障害児教育	福岡市立長住小学校 教諭 西 原 敦 子	教育振興部義務教育課障害児教育室 指導主事 谷 口 慎 二 福岡教育大学 教授 昇 地 勝 人

◇あ い さ つ (11:10~11:20)

初等教育委員長 山 口 喬
学 校 長 中 谷 雅 彦

◇主 題 発 表 (11:20~11:40)

・豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

ー調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化ー

研究副主任 石 田 耕 一

◇障害児教育発表(11:40~12:00)

・楽しい生活を共に創り出す生活単元学習

ー個の役割が広がる集団活動の展開ー

障害児教育研究部 谷 崎 和 一 郎

◇教 科 発 表 (12:00~12:20)

・自然のきまりを思考する楽しさを味わう理科学習

ー自然とのかかわり方を追究する学習の展開ー

理 科 部 野 口 信 介

◇提 案 学 習 指 導 (13:00~13:45)

学 年 組	教 科 領 域 等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	音 楽 科	なかよしおながくかいをひらこう	豊 村 雅 義	音 楽 室
3年2組	理 科	豆電球に明かりをつけよう	手 島 宏 樹	理 科 室
4年1組	国 語 科	めざせ！プレゼンター！ースライドを使って説明文を説明しようー	吉 田 正 樹	パソコン室
5年1組	あらつ学習（総合）	給食から見直そう！私たちの日常生活	稲 津 一 徳	子供スタジオ
6年1組	あらつ学習（総合）	卒業研究をはじめよう	高 野 誠 一	6年1組

障害児教育学習指導

ふ じ 組 さ くら 組 梅 組	合同生活単元学習	みんなでハーブガーデンをつくろう	谷 崎 和 一 郎・舩 元 俊 文 塩 田 利 彦・原 口 和 美	北 校 舎 中 庭
------------------------	----------	------------------	--------------------------------------	--------------

◇児 童 発 表 (14:00~14:15)

・受け継ぐ我ら 新世紀のハーモニー

ー6学年児童による音楽発表ー

指 導 者 豊 村 雅 義

◇提案学習指導全体協議会 (14:15~15:00)

・「調和的に展開する教科領域・総合的学習像」

ー提案学習指導をもとに、奈須先生と考える！ー

提 案 者 手 島 宏 樹 稲 津 一 徳

高 野 誠 一 豊 村 雅 義

提 案 ・ 司 会 者 吉 田 正 樹

指導助言者 立教大学 助教授 奈 須 正 裕 先生

◇全 体 講 演 (15:00~16:30)

・演題 「子供中心で創る調和的カリキュラムと学力保障」

講 師 立教大学 助教授 奈 須 正 裕 先生

(前 国立教育施策研究所 総括研究官)

◇あ い さ つ

副 校 長 久 門 隆

本校研究のあゆみ

年度			
23	○学習効果判定の理論と実際	57	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみ — 「学ぶ喜びを生み出す授業」 (北大路書房から出版)
24	○カリキュラムの構成と実際	58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 個が生きる課題づくり —
26	○学習深化の指導	59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 — 学習実態の多様性に即応する学習指導 —
27	○学習深化の指導	60	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 子どもの個性が生きる指導 —
28	○学習深化をめざす指導	61	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 (明治図書から出版)
29	○学習指導における諸問題の再検討	62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 学習の個性化をめざす学習過程 —
30	○学習指導における新課題の再検討	63	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 — 「学習の個性化」をめざす授業の改造 — 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 (明治図書から出版)
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明	平成 元年	○個が生きる授業の創造 — 自己理解の学習過程 —
32	○組織化をめざす学習指導法の究明	2年	○個が生きる授業の創造 — 考えを確かにする活動構成 —
33	○組織化をめざす学習指導法の究明	3	○個が生きる授業の創造 — 考えを深める自己吟味活動を通して — 「個が生きる授業づくり」(北大路書房から出版)
34	○学習指導の系統化	4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 — 思い・願いをもって問いつづける 活動づくり —
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題	5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 — 思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開 —
36	○考える子どもを育てる指導法の究明	6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 — 自分のよさを実感する表現活動の展開 —
37	○考える力をのばす学習指導法の考察	7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 新しい教育課程における教科領域の 学習の具体化 —
38	○考える力をのばす学習指導法の考察	8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 子供主体の活動からみる教育課程の編成 — 「新時代の授業を創る」(明治図書から出版)
39	○考える力をのばす学習指導法の考察	9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 — 子供主体の活動からみる教育課程の編成 —
40	○考える力をのばす学習指導法の考察	10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 活動や体験を基盤にした学習の総合化 — 「学習創造」(算数・人間・障害児教育) 出版
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」 (明治図書から出版)	11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 子供と創る教科・総合的学習の展開 — 「学習創造」(理科・図画工作・音楽) 出版
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」 (明治図書から出版)	12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 — 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の 調和的展開 — 「学習創造」(国語・体育) 出版
44	○現代化をめざす指導法の究明 — 教材の現代的価値と児童の実態と 反応に基づく指導内容の検討 —	13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 — 調和的に展開する教科領域・総合的 学習像の明確化 — 調和的に展開する教科・総合的学習「新世紀 の学力づくり」(明治図書) 出版
45	○現代化をめざす指導法の究明 — 基本的内容にせまらせる学習の開発 —		
46	○現代化をめざす指導法の究明 — ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ —		
47	○現代化をめざす指導法の究明 — 学習の連帯化をはかる指導のしくみ —		
48	○現代化をめざす指導法の究明 — 連帯性を育てる学習指導のしくみ —		
49	○現代化をめざす指導法の究明 — 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ — 「学習を連帯化する指導法」 (明治図書から出版)		
50	○現代化をめざす指導法の究明 — 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ —		
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 — 操作を通した学習の構造化 —		
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 — 操作を通した学習指導の展開 — 「できるまで育てる」(秀巧社から出版)		
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 — 交流でよりよい操作を身につける 学習指導 — 「自由活動の時間」(秀巧社から出版)		
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 — 教材の価値にせまらせる操作学習の評価 —		
55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 見直し活動を生かした操作学習の深化 —		
56	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 — 自己を見直し、考えを深める 指導のしくみ —		

公開授業及び全体会の部

第 1 日 目 午 前 の 部
公 開 授 業 指 導 案

第1学年2組 算数科学習指導案

指導者 澤 村 重 則

単 元 かたちしらべをしよう

指 導 観

- 本単元は、身の回りにある具体物を観察したり構成したりしながら、具体物がもっている色、大きさ、材質など様々な属性に関係なく、形のみに着目し、形のもつ特徴をとらえることができるようにしていくことをねらいとしている。ここでの主な学習内容は、①立体図形がもつ面の特徴である平面や曲面によって分類すること、②立体図形の面の形や数、角の形状や数といった特徴を自分の言葉で表現すること、③立体図形を構成する面の形を取り出すことである。
- 本学級の子供たちは、これまでの生活経験のなかでお菓子やいろいろな品物の入っている箱の形を見てきている。また、積み木遊びで、作った形やそれぞれの積み木の形をいろいろな物に見立てた経験をしてきている。このような子供たちは、機能面に着目した見方をした経験をもっている。そこで、このような様々な見方を生かし、同じ図形と認められる物をなかまにし、その形のもつ特徴をもとに名前をつけたり特徴を言葉で表現したりしながら、日常生活の中に存在する様々な物の形を認め、特徴をとらえることができるようにする。
- 本単元の指導にあたっては、図形のもつ特徴に気づくとともに、図形に興味関心をもち、図形の見方の基礎となる経験をさせたい。そのために、ワクワクランドをつくるストーリーのなかで立体図形の特徴を生かした形づくりをさせる。まずつかむ段階では、絵にかかれた乗り物の形を、設計図をもとに、提示された立体図形を組み合わせる。次に調べる段階では、提示されたロボットをつくるのに必要な部品として、ブラックボックスの中にある直方体や立方体、円柱を手で触り、触ったときの面の形、角の形状や数などの感触をもとに取り出しながらかつくり上げる。最後にまとめる段階では、立体図形の面の形を写し取りながらワクワクランドの設計図をつくる。

目 標

- 1 いろいろな具体物を用いて形作りをすることを通して、立体図形のもつ平面や曲面、面の形や数、角の形状や数といった特徴に気づくことができる。 (創造性)
- 2 立体図形のもつ特徴を生かしながらワクワクランドづくりに取り組み、図形に親しみをもつことができる。 (主体性・人間性)

計 画 (約3時間)

階	つかむ段階(1 綱)	調べる段階(1 綱)	まとめる段階(1 綱)
活動と内容	1 積み木や箱、空き缶、容器などを使って、ワクワクランドの乗り物(自動車、ヨット)をつくる。 ○ 立体図形を面のもつ平たい、曲がっているといった特徴から分類すること	2 ワクワクランドの案内役のロボットをブラックボックスから形を選んで取り出しながらかつくる。(本時) ○ 立体図形の面の数、角の形や数といった特徴をとらえること	3 ワクワクランドにあったらよいものを考え、立体から形を写して設計図をつくる。 ○ 立体図形の面の形を取り出すこと
手だて	※ 乗り物の設計図 ※ 直方体、立方体、円柱、球の準備	※ 直方体、立方体、円柱などが混じったブラックボックス ※ ロボットの設計図	※ 遊園地の写真の提示 ※ 形を取り出すための直方体、立方体、円柱などの積み木の提示

本時の目標

- ロボットをつくるのに必要な部品をブラックボックスから選び出すために、立体図形に触れながら各々の特徴を調べることができる。

準備 モデルのロボット、ロボットの設計図、いろいろな積み木が入ったブラックボックス、ロボットを構成する部品の見通しと取り出すときの特徴を表現する学習ノート

学習指導の過程

活 動 と 内 容

子供の思考の流れ

1 モデルのロボットを見て、めあてについて話し合う。

(1) ワクワ克蘭ドからの手紙をもとに、案内役のロボットをつくることを知り、モデルのロボットをつくるための部品を調べる。

○ モデルを構成している直方体、立方体などの特徴に気づくこと

※ モデルとなるロボットを提示、観察させる。

(2) ブラックボックスから必要な部品を取り出す試しの活動を行いめあてについて話し合う。

○ 立体図形の角の形状や数、面の形に着目すること

※ ブラックボックスの中の形を手で触って選ぶきまりを知らせる。

めあて

ふくろからほしいかたちをとりだして、ろぼっとをつくろう。

2 ブラックボックスからロボットづくりに必要な部品を取り出ししながら、自分のロボットをつくる。

(1) 2人1組でブラックボックスからロボットづくりに必要な図形を選び出す。

○ 立体図形の面の形状や数、角の形状や数に着目すること

あたま	くび	うで	どう	あし
立方体(小)	円柱(短)	直方体(平)	立方体(大)	円柱(長)

※ ブラックボックスの中から手に触れた感触で図形を選択させる。

(2) 取り出した形を使ってロボットを構成しながら、モデルと同じになるように選択をくり返す。

○ 立体図形の面の形の違いに着目すること

例(あたま) モデルとなる箱

取り出した箱

※ モデルとなる箱と取り出した箱を対比させることで、特徴の違いに気づかせる。

3 ブラックボックスから必要な立体図形を取り出すときの特徴について話し合い、ロボットのつくり方をまとめる。

○ 立体図形の特徴である面や角の形状、数を取り出すこと

※ 選んだときに気を付けた面の形や角の形状などについて話し合わせる。

○ ワクワ克蘭ドからどんな手紙が届いたのかな。

○ ロボットをつくるのだな。

○ どんな形でできているのかな。

○ 筒の形や箱の形でできているぞ。

○ 見えない袋からでも形が取り出せそうだ。

○ 面だけでなく角の形をさわってみれば形がわかるぞ。

○ 角がなくて丸くなっているから筒の形だ。

○ くびのところは短い筒の形だから、丸くなっているところが短いのにしよう。

○ 角がとがっていて四角いところがまわりにあるから箱の形だ。

○ うでのはこは、平たくなった箱にしよう。

○ あたまの形が少し違うから替えよう。

○ 手で触るとき、角のところをさわるとどんな形かわかるよ。

○ 長いを選ぶときは、手に持ったとき、触れるところがたくさんあるといいよ。

第2学年2組 体育科学習指導案

指導者 岩 城 一 磨

単 元 あそぼう！まねっこパーク(表現遊び)

指 導 観

- 本単元のねらいは、いろいろな動物の中から表現対象を選び、まねっこパークで遊び、新しい動きを付加しながらみんなで楽しく動物そのものになりきって踊れるようになることである。このことにより表現遊びの模倣の動きや行い方の工夫を発揮し、友達とかかわりながら最初にイメージした動きを更新していくものである。また、本単元の主な内容は、①表現対象である動物になりきって跳んだり、回ったり、はったり、素早く走ったりなどの特徴のある動きを楽しみながら身に付け発揮していくこと。②友達との活動による「〇〇が〇〇しているところ」などの場面の設定の工夫から、動きの視点を把握し、新たな動きを創りながら自分たちのまねっこパークで遊ぶことである。
- 本学級の子供たちは、動物の動きをまねることに強い関心を示し、好きな動物についてたずねると、体を使った動作や音声でまねをしながら伝えようとする姿がある。それは、そのものになりきってまねる楽しさを無意識のうちに味わおうとしているからであると考えられる。また、子供たちは第1学年の学習のなかで様々な動作化、模倣演技などを体験し、動物になって表現することを体験しており、動物を模倣することを素直に受け入れることができる。そこで、本単元は、動物になりきって自由に模倣する表現遊びの楽しさを味わえるこの期に、即興表現と創造表現を繰り返し、楽しくなりきって踊る活動を行い、自ら運動へのかかわる子供を育てる上で大変意義深いと考える。
- 本単元の指導にあたっては、イメージした動物の動きを広げることを通して自分たちの模倣表現を創らせていきたい。そのためにはまず、みいだす段階では、いろいろな動物の動きを捉えるためのビデオ視聴や即興表現を行う。さらに各動物の動きの速さの違いを比較することで動きの速さ、遅さ、タイミングなどの動きの視点をもつ。次に、ひろげる段階では、自分のもっている動きに新たな動きを付加しながら、模倣表現をさせていく。そのためには、①まねっこカードによる動物を即興的に模倣する即興表現、②まねっこパークの場に対応する動きを創る創造表現を行っていく。最後にあじわう段階では、楽しくまねっこパークで遊び、イメージした動きの広がりを実感させる。

目 標

- 1 友達と一緒に動物を模倣するなかで、跳んだり、回ったり、はったり、素早く走ったりする特徴的な動きを身に付け、まねっこパークで楽しく遊ぶことができる。(創造性・主体性)
- 2 まねっこパークで遊ぶことを通して、動物になりきって踊ることを楽しみ、模倣表現の動き、行い方を広げ、自ら運動にかかわることができる。(人間性)

計 画 (約9時間)

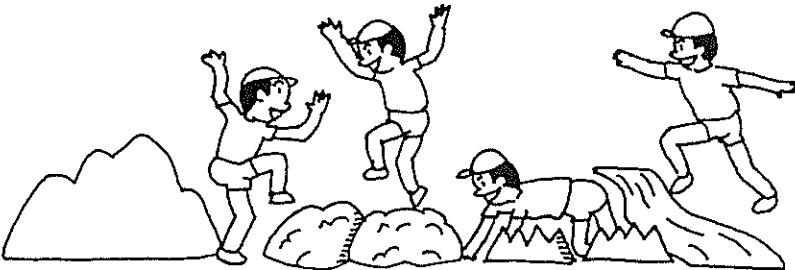
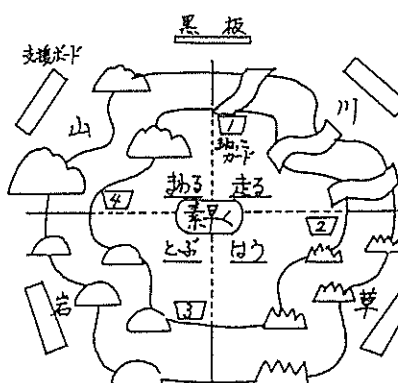
課	第1次みいだす段階(3時間)	第2次ひろげる段階(5時間)		第3次あじわう段階(1時間)
活動と内容	1 まねっこパークに出あい、表現遊びを見通す。 (1) 即興表現で楽しむ。① ○ 動きのイメージ把握 (2) 時間的視点を把握する② ○ 動きの視点の把握	2 まねっこパークで動物のまねをして楽しく踊り遊ぶ。⑤(本時4/5) (1) 遅い動物のまねっこをし遊ぶ② ○ イメージした遅い動きの広がり	(2) 素早い動物のまねっこをして遊ぶ③ ○ イメージした素早い動きの広がり	3 まねっこパークで遊び楽しさを実感する。① ○ まねっこパークで遊び、動きの広がりを実感して評価し、運動へのかかわりを更新すること
	※ 即興的な動きを体験する活動、動きの視点を取り出し把握する比較活動	※ 動きを付加するために表現対象(象,かば,亀,コアラ,ライオン,馬,猿,ウサギ等)を選び、まねっこパークで遊ぶ表現活動		※ まねっこパークで遊び、学習を振り返り自分の動きを見つめる発表活動

本時の目標

- 1 動物になりきって踊る動きを具体化するために、素早い動きを自分たちの動きに付加することができる。 (創造性・主体性)
- 2 まねっこパークで遊び、楽しく踊り、友達同士でお互いに見合うことができる。 (人間性)

準備 まねっこカード、支援ボード、学習ノート、テープレコーダー、効果音テープ

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 前時のまねっこパークについて想起し、本時めあてをもつ。 (1) 素早い動きの動物について話し合い、めあてをつかむ。 ○ ペアで遊んだ動物模倣の動きの想起とめあての把握 ※ 流れ図で、前時を振り返り、本時活動の意識づけをする。 めあて 友だちといっしょにまねっこをくふうし、もっとたのしくまねっこパークであそぼう。 2 具体的・特徴的な動きでなりきって模倣表現し、素早さなどの時間的視点を入れて即興的に踊る楽しさを味わう。 (1) まねっこしたい動物を決め、模倣し踊る。 ○ 今できる動きで動物の即興表現 ※ まねっこカードで即興的に踊らせ、最初の動物を決める。 (2) まねっこカードの動きを組み合わせ、動物を模倣し、動きの工夫を自分たちのまねっこに付加しながら踊り遊ぶ。 ○ 把握した動きをまねっこに付加する創造表現 ・まねっこパークの場で素早い動きで跳ぶ、回る、はう、素早く走る動物の模倣表現の発揮 〔活動例〕 川、草、岩、山などの場でできる動きを付加して踊り遊ぶ。  ※ 場の動きに対応するまねっこの動きをペアの友達と見せ合うことで自己の動きの広がり意識させる。 3 本時学習をまとめ、次回のまねっこパークの予告をする。 ○ まねっこパークで遊ぶことの楽しさや動きの広がりへの評価に向かう学習の振り返り ・自分たちのまねっこの楽しさ、動きの工夫 ・まねっこパークの感想の発表 ※ モデル演示を交えながら、達成感が得られるように振り返らせ、交流させる。	○ 前の時間は、素早い動きの動物をまねっこしたぞ。今日動物を決めてまねっこパークで楽しく遊ぼう。 〔まねっこパークの場の図〕  ○ 跳んだり、回ったり、はったり、素早く走ったりの動きの組み合わせを使おう。 ○ 場にに合わせて動きを工夫してまねることができるかな。 ○ まねっこカードの動きを工夫して表そう。 ○ 動きの支援ボードを活用すると、いろいろな動きが生まれるぞ。 ○ ペアの友達と見せ合って交流すると動きが変わるぞ。 ○ 友達と協力し合ってまねると楽しいまねっこパークになるぞ。 ○ 次の時間もまねっこパークで楽しく踊り遊ぼう。

第4学年1組 あらつ学習指導案

指導者 原 ク ミ (T1) 手 島 宏 樹 (T2)

単 元 あらつの虫がたくさん住める西公園にしよう！！

指 導 観

- 本学級の子供たちは、第3学年のあらつ学習「ふやそう！守ろう！カブトムシ！」において、幼虫であるカブトムシとの出会いをきっかけに、カブトムシを守ろう会の方々と共に西公園をカブトムシが住みやすい環境にしようと活動を行ってきた。その継続的な活動の中で、子供たちは「もっと他の虫も住める西公園にしたい」という求めを抱いている。このような子供たちに、カブトムシだけではなく、その他の虫たちが住みやすい西公園にしようという課題を設定し、学習を展開させていく。このことは、西公園に住む虫について調べたり、その虫たちがたくさん住める環境づくりについての情報を収集したりする主体性、虫たちが住みやすい西公園にするために多面的に見たり考えたりする創造性、虫をふやし命を守ろうとする活動に価値を感じる人間性を育んでくことができると考える。
- 本単元は、第3学年あらつ学習「ふやそう！まもろう！カブトムシ」との発展的な連動を図ったものである。ねらいは、西公園をたくさんの虫が住める環境にするための計画を立て、その計画を遂行するために情報を収集したり、自分たちが追究吟味した計画を実践したりする活動を意欲的に行うことである。子供が創り出す内容としては①これまでの学習経験を生かして、西公園に住む虫の生態調べや環境づくりに取り組むこと②他の虫のことを考えた環境づくりを計画し実践すること③西公園の虫の生態を調べいろいろな虫に適した環境について考えること④自分が行ってきた活動に価値を感じたり自信をもったりすることである。
- 本単元の展開においては、「虫たちが住みやすい西公園にしたい」という子供の強い求めを基盤にして、自己吟味・自己追究・自己更新をくり返しながら虫に適した環境づくりを実践できるようにしていきたい。そのために、課題設定の段階では、3年生でのカブトムシ復活大作戦の活動を振り返りよさを実感するとともに、「もっと他の虫たちの住処をつくりたい」という思いから課題を設定する活動。課題追究の段階では、西公園に住む虫の生態や虫が住む環境、食物などを調べ、自分が増やしたい虫グループを編成し実際に虫たちが住める環境を整えるためにはどのようにすればよいのか、多様な方法で情報を収集し、実践可能な計画を立てる活動。課題達成の段階では、計画をもとに共同実践したり、自分たちの活動を他者へと発信したりする活動を設定する。

目 標

- 1 たくさんの虫が住む西公園にするために、多様な方法で情報収集したり住処づくりを実践するための計画や内容をくり返し追究・吟味したりしながら、意欲的に課題解決に取り組むことができる。
(主体性・創造性)
- 2 西公園に対する愛着を深めるとともに、自分たちの活動のよさを自覚したり活動に対する価値を実感したりして、自分への自信を高めることができる。
(人間性)

計 画 (約17時間)

課 題 設 定 (3時間)	課 題 追 究 (6時間)	課 題 達 成 (8時間)
1 思いや願いから課題を設定する。 (1) 今までの活動を振り返り、よさを話し合う。 ② ○ 満足感や達成感を味わうこと (2) 課題について話し合う。 本時 ① ○ 思いや願いから課題を設定すること	2 必要な情報を収集し、他の虫たちが住みやすい環境にする計画を立てる。 (1) 全体的な活動の計画を立てる。 ① ○ 活動に対する見通しをもつこと (2) 西公園に住む虫の生態について調べる。 ④ ○ 虫の種類や数、住処の環境、食物などについて多様な方法で調べ、情報を収集すること (3) グループごとに実践の計画を立てる。 ① ○ 種類や数、環境、食物などの西公園全体を考えた計画立案及び吟味すること	3 計画を実践し、他者へと発信する。 (1) 自分たちが立てた計画を実践する。 ⑦ ○ 課題を達成する満足感や達成感を味わうこと (2) 他者へと発信する。 ① ○ 表現方法を工夫して自分たちの活動のよさを伝えること
※ これまでの活動によさを味わうことができる資料の提示 ※ 子供の求めに応じたGTの招聘	※ 体験的な追究や資料収集の観点からの支援 ※ 守ろう会の方々とプランを吟味する活動の設定 ※ 相互評価の効果的な活用	※ 守ろう会の方々と共同実践の場の設定 ※ 発信する場の設定

本時の目標

- 1 カブトムシ復活大作戦の経験やG Tからの情報をもとに、これからの活動の進め方について考え、達成課題を設定することができる。(主体性・創造性)
- 2 西公園に少なくなってきた虫や絶滅種と言われる虫を復活させようとする取り組みがあつて、虫がたくさん住める西公園にしたいという思いをもつことができる。(人間性)

準備 児童；あらつ学習ノート

教師；カブトムシ復活大作戦の活動をまとめたもの、前時学習までの流れ図、西公園の拡大マップ、少なくなってきた虫の写真や資料、他の虫のことを考えている子供の作文

学習指導の過程

予 想 さ れ る 活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 前時までの学習を振り返り、本時学習のめあてを話し合う。 ○ これからの活動を決めるための話し合いに意欲をもつこと ※ これまでのカブトムシ復活大作戦の活動をまとめたものと幼虫を腐葉土場にはなしている様子のV T Rを提示する。 めあて これからどのような活動を行っていくのかを話し合おう。 2 これからの活動について、G Tの先生方と一緒に話し合う。 (1) これからの活動でどんなことがしたいと思っているのか、互いの考えを出し合う。 ○ カブトムシだけではなく、他の虫をふやしたり守ったりしたいという自分の思いを明確にすること ※ 西公園で、虫たちとかかわっている子供たちの姿の写真や他の虫のことを考えている子供の作文を提示する。 (2) G Tの先生方の話を聞き、これからの活動について話し合い、達成課題を設定する。	○ この前の時間には、カブトムシ復活大作戦のビデオを見て自分たちの活動がとてもよかったことを振り返ったね。 ○ 今日は、これからどんなことをしていくのかを決めなくちゃ。 ○ ゲストの先生方のお話も聞けるので楽しみだな。 ○ 私は、カブトムシの他の虫たちのことを考えて活動をしていきたいな。 ○ ぼくは、カブトムシ復活大作戦を続けて、もっとカブトムシを増やしたいな。
【予想される課題設定までの話し合いの流れ】 これからどうするのか。 カブトムシ復活大作戦を継続する。 今まで一生懸命取り組んできて、よいところがたくさんあったから 他の虫をふやしたり守ったりする。 前に、西公園にいるおじさんから他の虫のことも考えないといけなと言われてから どんな虫をふやしていきたいのかな。 【GTの方々のお話】 ◇ わたしたちは、昔のように虫がたくさんいる西公園にしたいなと思って活動しています。 ◇ わたしは小さい頃から西公園に住んでいるけど虫がだんだん少なくなってきたと思います。 ◇ 全国的に、絶滅種と言われる虫がいるんだよ。 【予想される子供の反応】 ○ この前、西公園に行ったとき、ミカドアゲハがいたよね。あんなきれいな虫がたくさんいるといいな。 ○ 少なくなってきた虫を増やしたり、守ったりしていきたいな。 ○ 昔のような西公園になるといいな。 昔のように、たくさんの虫が住める西公園にしよう。	
※ G Tには、他にも西公園で少なくなってきた虫がいることや全国的に絶滅種と呼ばれ、その復活の取り組みを行っている方々がいらっしゃるなどのお話をしていただく。 3 次時の活動について話し合う。 ○ 次時では、全体的な計画をたてる必要があることをとらえ、活動に対する意欲をもつこと	○ 西公園にもそういう虫がいるのかな。 ○ 西公園にどんな虫がいるのか、そしてどんな虫が少なくなっているのかを調べないといけな。

第5学年2組 算数科学習指導案

指導者 小 森 晃

単 元 図形をしきつめよう

指 導 観

- 本単元のねらいは、基本図形である三角形の内角の和(180°)をもとにして他の多角形の内角の和を調べたり、平面の敷き詰めが可能な図形と内角の関係を調べたりして三角形や平行四辺形、台形、ひし形の性質についての見方を豊かにすることである。2つの合同な三角形を使った四角形の構成や敷き詰め、観察などを通して基本的な平面図形の性質を調べていく本單元には次のような内容がある。①合同な三角形を敷き詰めながら内角の和を求めること、②三角形の内角をもとに平行四辺形、台形、ひし形などいろいろな四角形の内角の和を求めること、③三角形や四角形の性質など既習の数理をもとに直観を働かせながら新たな性質を生み出す経験を豊かにすることである。
- 本学級の子供たちは、これまでに図形の辺や頂点、角についてそれらの大きさや数と形との関係について調べてきている。さらに直線の平行、垂直の関係をもとに平行四辺形やひし形、台形といった図形についても長方形や正方形との違いをとらえてきている。図形どおしの関係については対応する構成要素の異同を調べることで合同な図形かそうでないかを判別することができるようになってきている。これらの上に立って本單元では既習の図形を内角の和といった新たな観点から調べることによって、これまで気づかなかった三角形と平行四辺形、ひし形、台形との関係や図形の内角の和のきまりについて整理していく。このことは対象を見ていく観点を多様にすることで直観が働きやすくなり、見通しをもった活動を通して数理を生み出す経験を豊かにすることとなる。
- 本單元においては既習の数理をもとに直観を働かせてもった見通しに沿って、図形の組み合わせや敷き詰めといった算数的活動を連続させ、内角の和という新たな観点から図形の性質を明らかにしていくことができるようにする。そのために、まずつかむ段階ではいろいろな三角形を合同なもののどうし敷き詰めてできた模様から、3つの角が直線上に集まっていること(180°)をつかむようにする。次に調べる段階では三角形の敷き詰め模様からとりだした平行四辺形、ひし形、台形などの内角の和について調べ、四角形の内角が(360°)になっていることを明らかにする。最後にまとめる段階では他の多角形についての内角の求め方や辺の数と内角の大きさの関係をまとめていく。

目 標

- 1 三角形や四角形の内角の和について、直観を働かせて共通する性質をまとめることができる。
- 2 合同な三角形を組み合わせでつくりだした図形を使った敷き詰めを通して、平行四辺形や台形、ひし形の性質を取り出すことができる。

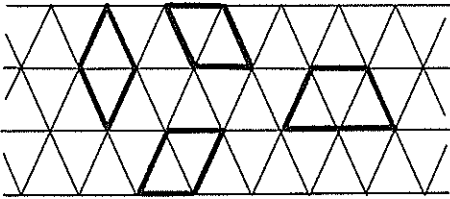
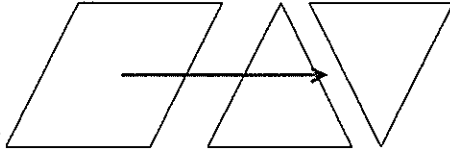
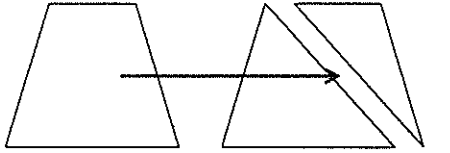
計 画 (約3時間)

階	第1次 つかむ・見通し段階(1時間)	第2次 調べる段階(1時間)	第3次 まとめる段階(1時間)
活動と内容	1 合同な三角形どおしを敷き詰めたり作図したりして内角を調べる。① ○ 合同な三角形の3つの角を集めると必ず直線となり、内角の和が 180° となること	2 敷き詰め模様の区切りを工夫していろいろな図形に切り抜いたり、それらの内角の和を調べたりする。①本時 ○ 敷き詰め模様から切り出したいろいろな四角形の内角の和が 360° となること	3 三角形を組み合わせでできる多角形を敷き詰めながら敷き詰められない理由をまとめる。① ○ いろいろな多角形の内角の和を調べて、多角形の性質をまとめること
手だて	※ 形の異なる数種類の三角形カードを用いた敷き詰めと作図をさせる。	※ 三角形の敷き詰め模様からいろいろな四角形を切り出して内角を調べさせる。	※ 多角形を敷き詰めたり内角の和を求めたりして、関係をまとめさせる。

本時の目標

- 敷き詰め模様の区切りを工夫していろいろな四角形をつくりだすことができる。
- 平行四辺形、ひし形、台形などの内角の和について、既習の三角形の内角の和から直観を働かせて予想したり、三角形の内角の和をもとに調べたりすることができる。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 前時に敷き詰め模様づくりを通して調べた三角形の内角の和について話し合い、平行四辺形やひし形、台形と比較して内角の和を予想してめあてをつかむ。 (1) 既習の三角形の内角の和について想起する。 ○ 三角形は3つの角度が1直線に集まり180°となること (2) 敷き詰め模様から切り出した平行四辺形やひし形、台形の内角の和について予想し、それらを調べていくめあてをつかむ。 ○ 四角形の内角の和を予想し、本時学習のめあてをつかむこと ※ 直観を働かせた予想の根拠を話し合い調べ方の見通しをもつ。 めあて しき詰め模様に隠れた四角形の内角の和について調べよう。 2 これまでに作ってきた敷き詰め模様から、いろいろな四角形を切り出して、それらの内角の和を調べる。 (1) 合同な三角形の敷き詰め模様の区切りを工夫して、いろいろな四角形の形に切り出す。  ○ 三角形の組み合わせから直線どおしの平行をとらえること ※ 平行四辺形やひし形、台形の定義について流れ図で提示しておき、定義に照らして確かめさせる。 (2) 切り出した図形の内角の和について、既習の三角形の内角の和をもとに調べる。  ○ 平行四辺形やひし形、台形など四角形の内角の和について三角形の内角の和をもとに調べること  ※ どんな三角形でも内角の和は180°になっている既習の数理をもとに平行四辺形やひし形、台形など四角形がどのように三角形を組み合わせでできているかを説明させる。 3 四角形の内角の和についてまとめる。 ○ どんな四角形でも内角の和が360°になること ※ 平行四辺形やひし形、台形やその他の四角形がいつでも2つの三角形に分けられることから内角の大きさをまとめさせる。	○ 三角形の角度は3つ合わせると180°だったね。 ○ どんな形の三角形でもいつも180°になるなんて不思議だね。 ○ 平行四辺形とかは角の数が三角形より多いからきっと内角の和も180°より多くなると思うよ。 ○ 平行四辺形は三角形が2つでできているから、内角の和は2倍かな。 ○ 三角形の敷き詰め模様って、よくみるといろいろな図形が隠れているんだね。 ○ ひし形もできるよ。 ○ 台形もあるね。 ○ ちゃんと平行になっているか確かめてみよう。 ○ 平行四辺形は三角形が2つでできているから内角の和は180°の2倍になって360°だ。 ○ ひし形は三角形が4つだから180°の4倍で720°になるのかな？ ○ おかしいよ。三角形が4つだけど真ん中に集まったところは計算に入れちゃいけないんだ。 ○ 平行四辺形もひし形も台形も他の四角形もいつも内角は360°なんだ。

第4・5・6学年3組 国際交流タイム学習指導案

指導者 T1石硯 昭雄 T2島崎 儀朗

単 元 WE LOVE OUR SCHOOL -海外での学校体験を生かして調べよう-

指 導 観

- 本学級の子供たちは、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、スイス、シンガポール、中華人民共和国、中華民国、ミャンマーといった国々での生活体験をもち、それぞれの国の言語を身につけたりその国の生活習慣や遊び、食事などの文化に触れ親しんだりしてきている。そして、これからも海外の友達や文化と交流していきたいという願いをもっている。帰国後は、外国とは違う日本の学校生活に戸惑ったり驚いたりしながらも次第に慣れ親しみ、学校への愛着を深めてきている。外国と日本の両方のよさを見つめさせることで帰国子女としての自分に自信と誇りをもたせたい。
- 本単元は、自らの戸惑い体験の発端となった外国と日本の学校生活の違いに対する興味・関心を生かし、世界の学校生活について、身につけた外国語の力や海外での体験を生かしながら調べていく総合的な学習である。自らの学校生活を追究対象とすることで、①外国の学校生活との違いから疑問や関心を抱いたことを自ら課題設定し、自分の体験や文献・HP閲覧、外国の友だちとの電子メールのやりとりなどの情報活用を行いながら追究すること、②外国の学校生活と日本の学校生活の違いから感じ考えた双方のよさを自分なりにまとめていくこと、③それぞれの国のよさについて交流を通して追究・吟味するなかで、お互いの国のよさを認め合い、自分が過ごした国や我が国への理解と愛着を深めること、④海外と日本の両方のよさを知っている帰国子女である自分への自信を深めることといった学習内容を子供自らが生み出し、学習を展開することができると考える。
- 本単元の展開にあたっては、子供自らが海外生活での自分の体験や身につけた外国語の力、あるいは外国の友達との交友関係を活用しながら追究し、両方の文化や人間を大切にすることに対して意欲を高め、自国・他国への理解と愛情や自分への自信をさらに育んでいけるよう支援する。

導入では、日本と外国の学校生活や日常生活の違いから疑問に感じたことを話し合い、自分がいた国と日本の学校生活の違い、それぞれの国の学校生活の違いを調査・交流する追究課題を見いださせる。追究段階においては子供の求めに応じて、情報手段活用の支援、調査内容のまとめ方における外国語活用を含んだ表現方法の支援を行う。実践段階においては、ワークショップ形式での発表会を行い、外国語活用の楽しさや相互理解の喜びを感じさせ、達成感をもたせるようにしたい。

目 標

- 海外での生活体験や身につけた外国語の力を生かして追究課題を多様な情報手段を用いて追究し、友達と互いの国のよさを話し合い、自国・他国への理解や愛情を深めることができる。

計 画 (約14時間)

予 想 さ れ る 活 動 と 内 容	課 題 を 設 定 す る	課 題 を 追 究 す る	課 題 を ま と め る
	1 外国と日本の学校生活の違いについて話し合う。(3時間) ○ 双方の共通性・独自性についての気づき ○ 疑問や関心を体験や情報活用から調査する追究課題の明確化と追究方法の焦点化	2 滞在国別グループで課題を追究する。 (1) 自分の体験をまとめ直したり文献やHP閲覧・電子メール等の情報手段を活用したりして課題を追究する。(4時間+課外) ○ 目的に応じた情報活用と追究 (2) 調べたこと・考えたことを外国語等も活用して表現物にまとめる。(4時間) ○ 外国語活用における特性伸張 ○ 交流を意識した内容と表現の吟味	3 発表会「WE LOVE OUR SCHOOL」を催し追究内容を話しあう。(3時間) (1) 発表会を催し、友達と話し合う。(本時①) ○ 相互理解と愛着の深化 (2) 実践結果をまとめる② ○ 学級の財産化
支 援	※ 戸惑い体験の洗い出し ※ 滞在国の学校の写真やテキスト等の資料化	※ 外国の情報を得るための適切な情報手段活用の支援 ※ 本校理解のためのHP活用や人的支援	※ ワークショップ形式での発表会の場の設定 ※ 相互評価シートの活用

本時の目標

- 発表会「WE LOVE OUR SCHOOL」を開いて、調べたことや考えたことを友達と交流し、自国・他国双方への理解と愛情を深めることができる。

準 備 児童表現物 滞在国紹介マップ 相互評価シート OHP スクリーン

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 追究してきたことを振り返り、本時のめあてを話し合う。 ○ 違いへの驚きや疑問から課題を設定したことの想起 ○ 発表会の目的の明確化 — めあて — 日本と外国の学校生活のそれぞれのよさについて、調べたことや考えたことをもとに発表会をひらき、話し合おう。	○ 日本に帰ったとき外国の学校との違いに驚いたことがあったよ。 ○ 附属小のこんなところが日本の学校のよさだと思うけど友達はどう考えているかな。 ○ □□さんは私がいた国の学校の様子を見てどう感じるのかな。私ははそれぞれよさがあると思うけど。 ○ 友達がいた国の学校は私がいた国の学校とはずいぶん違うな。他の人から見たらどう見えるのだろう。 ○ 違うところもあるけれど学校としてのよさには似ているところもあるよ。 ○ どの学校も、つくった人や利用する人等みんなの思いがこもっているんだね。 ○ それぞれの学校のよさはそれぞれの国のくらし方や考え方の違いから生まれているんだね。 ○ 附属小の□□というよさは、日本のよさにつながっているんだね。 ○ 調べたことを、これから入ってくる新しい友達にも教えてあげたいし、外国の方や他校の人にも紹介したいな。
2 表現物を生かしてワークショップを開き、話し合う。 (1) 友達に自分の調べたことや考えを伝える。 ○ 外国語活用を伴う追究内容の発信 ※ 言語のみに頼らないよう図や写真を重視して発表させる。 (2) 他のグループの発表を聴き、自分の考えと比べる。 ○ 友達の追究内容の把握 ○ 調査内容の独自性や、共通性への気づき (3) 友達の発表に対して感じたことや考えたことを伝える。 ○ 発表に対する相互評価の伝達 ○ 肯定的評価による達成感の感受 ※ 相互評価シートを用いて内容と表現方法の観点から伝えさせる。	
3 お互いの発表を聞いて感じたことや考えたことを話しあう。 ○ 日本と外国の学校のよさに対する自分の考えの付加・修正、強化 ○ 友達の考えの享受による自国・他国の文化の理解 ○ それぞれの国々による考えの違いの受容と愛情の深化 ※ 日本の学校のよさ、外国の学校のよさとして感じている部分に焦点化して見直させる。 ※ 学年に応じて根拠を付加させる。	
4 追究の生かし方への見通しについて話し合う。 ○ 追究内容の自己・相互評価に向けての見通しの把握 ※ 追究結果を帰国子女学級の財産とし学校のホームページに載せていくことや、交流学級の友達への発表の見通しをもたせる。	

第6学年1組 音楽科学習指導案

指導者 豊村雅義
大学教官 原田大志

題材 音楽のかたちや仕組みを研究しよう！ ～弦楽曲の味わいを中心に～

指導観

- 本題材のねらいは、バイオリンなどの弦楽器の音色の美しさを感じ取るとともに、主な旋律の変化や対照、楽曲全体の構成に気をつけて聴き味わうことができるようにすることである。具体的な内容は、①バイオリンの音色美や旋律形の変化が醸し出す旋律美、構成美などを味わうこと、②旋律の変化や対照、協奏と独奏の繰り返しによる楽曲の構成、音色の特徴などをとらえて鑑賞すること、③弦楽器の音色や楽曲の構成などに関心を持ち、意欲的に鑑賞活動に取り組むこと、などである。音色や旋律の変化や対照、楽曲の構成を理解した上で鑑賞活動を進めることは、音楽のよさをより深く感じ取ることにつながり、音楽とのかかわりを豊かにしていく上で意義深い。
- 本学級の子供たちは、音楽の美しさを味わったり、音楽によって様々な気持ちを伝えることができるよさがあることを感じたりする人間性を育んできている。また、音楽活動を意欲的に進める主体性の育ちも見られるようになってきた。その中で、自分たちのイメージに合わせて、表現を工夫したり、出合った楽曲の曲想と音色などとの関係をとらえて聴き味わったりする創造性も身に付けつつある。これらのことから、楽器の音色を生かした旋律形の変化を鑑賞する活動を中心として、楽曲の構成美を研究的に追究していく音楽活動を展開することで、音色や旋律形の変化による音楽の美しさ・面白さ（旋律美・構成美など）を感じ取り、聴く喜びを深めることができる。
- 本題材の指導にあたっては、音楽の専門家である大学教官と交流しながら鑑賞を進め、楽器の音色の美しさや楽曲の構成の巧みさをとらえさせていくようにしたい。であう段階では、ヴィヴァルディ作曲の協奏曲集「四季」より「春」のCDを鑑賞させ、感じ取ったことを自由に出し合わせる。そして曲の場面の移り変わりについて話し合わせ、構成や音色など、自分の関心を明らかにさせる。ふかめる段階では、もっと楽曲や楽器のことについて知りたいという子供の求めに応じて、演奏学の大学教官と交流しながら鑑賞を進めさせる。そして、バイオリンの音色や旋律形の変化による楽曲構成と、曲想の関係をとらえさせる。あじわう段階では、他の弦楽曲など鑑賞を広げるとともに、聴き味わう楽しみ方について交流させ、今後の鑑賞活動への期待を膨らませていく。

目標

- 1 バイオリンなどの弦楽器の音色、旋律の変化や対照などの楽曲の構成に関心を持ち、その美しさを味わいながら意欲的に鑑賞活動を進めることができる。（人間性・主体性）
- 2 音色や旋律の変化・対照などを感じ取り、楽曲構成をとらえて鑑賞することができる。（創造性）

計画（約6時間）

段階	であう（1時間）	ふかめる（3時間）	あじわう（2時間）
活動と内容	1 「四季」より「春」第1楽章と出会い、弦楽器の音色や楽曲構成などを調べて鑑賞を深める課題意識をもつ。 ○音色や構成を追究する課題把握	2 大学教官と交流しながら鑑賞を深める。 ○楽曲構成の把握と構成美の感受 ○音色美の感受（本時2/3） ○構成に気を付けて聴き広げること	3 様々な楽曲を持ち寄るなどして鑑賞を広げ、聴く楽しみ方の広がり味わう。 ○楽曲を理解して聴くよさの感受
手だて	※ 感受の違いを明確にする学習ノートを用いての鑑賞の場 ※ 主題の変奏が明らかになるスコア（拡大楽譜）の提示	※ 大学教官を招聘し、演奏していただく交流したりする場の設定 ※ 模擬演奏体験の設定 ※ 「四季」の他楽章の鑑賞の設定	※ 音源の提供 ※ 鑑賞活動の深まりをとらえさせる自己評価・相互評価の活動設定

本時の目標

- 1 旋律形の変化による楽曲構成をとらえ、各場面でのバイオリンの様々な奏法による音色の変化が醸し出す美しさを感じ取り、意欲的に鑑賞を進めていくことができる。（人間性・主体性）
 - 2 各場面のバイオリンの奏法と音色の変化に気を付けながら聴き味わうことができる。（創造性）
- 準備 模擬演奏用バイオリン、弓、音源

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 前時学習を振り返り、本時のめあてを話し合う。 (1) 前時に鑑賞した「四季」より「春」第1楽章の一部を聴き、感じたことを出し合う。 ○ 楽曲構成についての想起（独奏と協奏の繰り返し） (2) 楽曲の構成やバイオリンの音色について発表し合い、本時のめあてを話し合う。 ○ 各場面における楽器の音色の変化への関心の高まり ※ 大学の原田先生に主な場面を実際に演奏していただきながら話し合わせ、楽曲構成と音色の関係に目を向けさせる。 めあて 楽器の音色や旋律の変化をどのように生かして「春」が表現されているか、考えながら聴き味わおう。 2 大学の原田先生の演奏を聴いたり、質問したりしながら、各場面のバイオリンの音色の変化を聴き味わいながら、「四季」より「春」第1楽章の鑑賞を進める。 (1) 大学の原田先生に、バイオリンのことや楽曲の構成について質問したり、説明を聞いたり、ある旋律を抜き出して聴いたりしながら鑑賞する。 ○ 各場面における音色の変化をとらえて鑑賞すること  ※ 各旋律形の拡大譜をもとに、原田先生に各場面の特徴やバイオリンの奏法などについて説明してもらったり、各場面ごとに演奏していただいたりしながら鑑賞を進めさせる。 (2) バイオリンの模擬演奏体験をしたり、奏法の違いと音色の変化を確かめながら、バイオリンの演奏を鑑賞する。 ○ 各場面に応じたバイオリンの音色の変化を感じ取り、バイオリンや弦楽曲への関心を高めること ※ バイオリンの演奏を体験させたり、弓を動かす（ボウイング）真似をしたりしながら、原田先生のバイオリン演奏を鑑賞する場を設定する。 3 「春」第1楽章の全曲を聴き、次時について話し合う。 ○ 鑑賞を広げる次時への意欲を高めること ※ 「春」第1楽章を全曲鑑賞し、「四季」の他の楽曲についての予想を話し合わせたり、一部を聴かせたりする。	○ 「四季」より「春」は協奏部分と独奏部分が繰り返して出てきて春の様子を表現している曲だったね。 ○ 4年生の時、「白鳥」の学習でチェロについて調べて楽しかったけれど、バイオリンも詳しく知りたいね。 ○ それぞれの場面で、バイオリンなどの弦楽器が、どんなふうに演奏されているのかを調べて聴くと楽しそうだね。 ○ 最初の旋律と小鳥がさえずる場面の旋律を演奏してもらって聴き比べてみたいね。 ○ バイオリンの演奏の仕方が変わると、小鳥の鳴き声になったり雷になったりして感じが変わるんだね。 ○ それぞれの場面でバイオリンの音がうまく使われているんだね。 ○ 曲の仕組みが分かると、より深く楽しめるんだね。 ○ バイオリンの色々な演奏の仕方を知りたいな。 ○ バイオリンは演奏の仕方が変わると音色も変化して面白いね。 ○ ヴィヴァルディは、弦楽器の音をうまく組み合わせて「春」を表現しているね。 ○ 「夏」など他の季節の曲も聴いてみたいね。

第3・4学年さくら組 体育科学習指導案

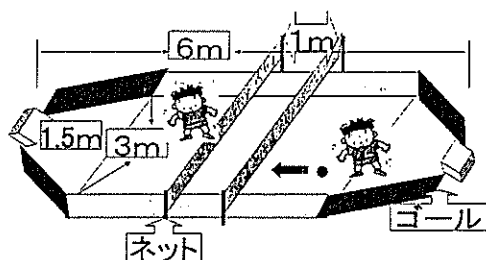
指導者 舩 元 俊 文

題 材 「さくらぐみネットサッカー」をしよう (ゲーム)

指 導 観

○ 本学級の子供たちは精神年齢4歳から6歳程度の3年生(男1名・女2名)、4年生(男2名・女1名)の計6名で構成されている。子供たちはこれまでに、基本の運動を中心に、固定施設やマットを使ったり、折り返しリレー遊びをしたりしながら多様な運動経験をしてきている。ゲームについては、「鬼遊び」や、中当てのころがしドッジボールなど、簡単な攻守を交替してのゲームを通して、ゲームを楽しむ上で必要な簡単なきまりや役割分担などを経験してきている。しかし、その遊び方は、投げたりころがしたりといった、ものに働きかけながら楽しむ子供から、勝ち負けのきまりを意識しながら楽しむ子供とその楽しみ方は様々である。

○ 本題材「さくらぐみネットサッカー」は、ネットで仕切られたコートの中で、ネットの下を通してボールをけり合い得点を競い合うゲームで、お互いにけり合い時間内にたくさんゴールに入れた方が勝ちという攻守分離型のゲームである。ねらいとしては、相手やボールを意識できるような動作補助や声かけを受け入れたりしながら、ける、とめるという動きを広げ、必要なきまりを守りながら、友達と一緒に楽しく運動することである。具体的な学習内容は、①ける、とめるといった多様な運動経験をすること、②手順や交代方法勝ち負けのきまりを守ってゲームをすること、③けり方やとめ方を工夫しながら友達と協力しながら活動することである。以上のことは、ボールを使った運動に対する興味・関心を高め、集団に参加しようとする態度やゲームにかかわるときの基本的な姿勢を育てることにつながる。このことは、子供たちの日常的な運動経験を広げ、生涯体育の基礎を培う上で意義深い。

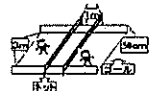
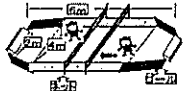


○ 本題材の支援としては、①子供たちが視覚的にも分かりやすく、意識できるような手順や方法、勝ち負けなどのきまりを提示すること、②ネットで仕切られた場を提示することで、一人一人が自分のける方向や場所を意識できるようにすること。③子どもの意識が持続し、動きを広げることができるように順次場を変化させること。④1時間ごとに変化した場に応じた動きが意識できるような個に応じた声かけ・動作援助・モデル演示を行っていくこと。このように、教材、活動構成、教師の働きかけという3点から支援の工夫を行っていく。

目 標

- 1 きまりを守りながらみんなで楽しくさくらぐみサッカーをすることができる。
- 2 場が変化していく中で、ける、とめるといった動きを広げることができる。

計 画 (約5時間)

時 間	であう (1時間)	ひろげる (3時間)	いかす (1時間)
活 動 内 容	1 新しいゲームを体験する。 ○ 手順や方法勝ち負けのきまりを知ること ○ ける方向を意識すること	2 みんなで楽しくさくらぐみサッカーをする。 (1) 1対1でゲームをする。① ○ 相手やゴールを意識してボールをけること  (2) ゴールが狭くなった場でゲームをする ① ○ ゴールを意識しとめる動きを広げること  (3) ゴールが広がった場でゲームをする ① ○ 左右に動いてボールをとめる動きを広げること (本時) 	3 学習してきたことを生かしてゲーム大会をする。 ○ できるようになったけり方やとめ方をゲームの中で生かすこと
手 だ て	※ ネットで仕切った場の設定 ※ けり方とめ方の動作補助	※ ねらってける、前後左右に移動しながらとめる、素早くける、などの身につけさせたい動きを引き出せるような変化した場の設定 ※ 身につけさせたい動きが引き出せるようなモデル演示や動作補助	※ 今まで体験してきた場の設定 ※ 動きへの賞賛励ましの声かけ

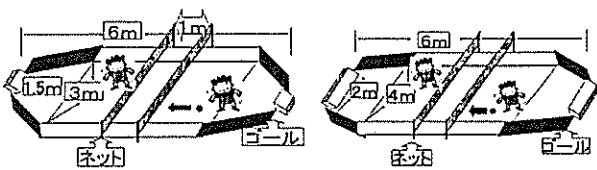
本時の目標

- 前後や左右に素早く移動してボールをとめたり、相手のいない方をねらってけったりしながら楽しくさくらぐみサッカーをすることができる。

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
ける動き	ゴールの方向にけったり、動作補助を受け、相手と反対の方向にけったりすることができる。	ゴールの方向にけったり、相手のいない方向にけったりすることができる。	ゴールを意識し、ねらってけったり、相手を意識して素早くけったりすることができる。
とめる動き	ボールを意識できるような動作補助を受け入れて、前後に移動してとめることができる。	方向を示す声かけを受け入れて前後左右に移動したり、とめたりすることができる。	ころがってくるボールをとめたり、素早く前後左右に移動してとめたりすることができる。

準備 ボール、得点板、ネット、ついたて、ゴールなど

学習指導の過程

活動と内容			個の活動を促す支援
1 本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 前時行ったゲームを想起し、手順や方法、勝ち負けのきまりや動きを想起すること ○ 変化した場に出会い、本時学習のめあてについて話し合い見通しをもつこと めあて ころがってくるボールをよこにうごいてとめたりけったりしながらたのしくさくらぐみサッカーをしよう。 ○ 目的意識をもつこと 2 変化した場で楽しくサッカーをする。 (1) 変化した場で試しのゲームをする。 ○ 移動してボールをとめること			1 ゲームへの意欲を引き出す支援 ○ 前時活動を想起できる場の設定 ○ きまりやゲームのやり方が意識できるモデル演示  ※コートの横幅が、3 mから4 mへ ゴールの幅が1.5 mから2 mへ変化 ○ 変化した場の設定 2 動きをひろげながらゲームをする個に応じた支援 ○ 個に応じた教師の働きかけ <u>Aグループ</u>：手を引いて、どこに動いたらいいかを意識できるような動作補助。ボールがどこにあるかを意識するような声かけ。けり方やとめ方を意識できるような動作補助や声かけなど。 <u>Bグループ</u>：移動してのとめ方を意識できるモデル演示や、移動する方向を意識できるような声かけ。ゴールや相手を意識してねらってけるモデル演示や、動作補助など。 <u>Cグループ</u>：ボールを意識したとめ方や、素早く前後に移動する促しの声かけや、ボールを見ながら移動するモデル演示。素早くけることを意識できる直接ころがってくるボールをけるモデル演示。相手を意識して、素早くけったりできるような声かけを行う。
Aグループ	Bグループ	Cグループ	
・ 教師の動作補助を受けながらボールをとめようとする	・ 教師の声かけを受けながらボールをとめる	・ ボールやとんでくるボールを意識してとめる	
(2) 2チームに分かれてゲームをする。 ○ ける動き、素早く移動してとめる動きを広げること			
Aグループ	Bグループ	Cグループ	
・ 声かけを受けてボールを意識し、移動したり、相手コートにボールをけったりすること	・ 転がってくるボールを意識してとめたり、相手を意識してボールをけったりすること	・ 相手やゴールを意識してボールをけったり、素早く移動してとめたりすること	
3 本時学習のまとめをする。 ○ 得点板で、ゲームを振り返ること ・ ゲームをして楽しかったことやできるようになったことを発表する。			3 学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 得点板や発表の場の設定 ○ できるようになった動きに対する賞賛

第5・6学年梅組 生活単元学習指導案

指導者 谷 崎 和 一 郎

単 元 ちびっこだいくさんになって すてきなにわをつくろう

指 導 観

- 本校特殊学級の子供たちは、精神年齢3歳程度から8歳程度の5年生3名と6年生4名の計7名で構成されている。子供たちは、今までに花を花壇や鉢に植えたり、野菜を畑に植えたりするなど、栽培活動を経験してきている。また、花や野菜の名前が分かるように札を立てるなど、「ここにこんなものがあつたらいいな。」といった意識のもとに、簡単な制作活動を経験してきている。その中で、見通しをもち、仲間と協力して活動に取り組むことができるようになってきている。
- 本単元のねらいは、すてきな庭をつくろうという目的意識をもって、煉瓦の道や柵作りなどの製作活動にかかわる課題を解決し、作った庭で友達と共に楽しく過ごすことである。主な学習内容は、①目的や課題を意識し、見通しをもつこと、②手順表を見たり、人に尋ねたりして課題に取り組むこと、③煉瓦や木材、釘、ドライバーなどの扱い方を身に付けること、④友達と協力して活動すること、⑤目的達成の満足感を味わうこと、などである。これらの内容を学習することは、身近な対象への興味・関心、目的達成のために必要な情報を収集・活用する力、集団活動に取り組む態度などの生活力を培うとともに、現在及び将来の生活をよりよく更新していくことにつながると考える。
- 本単元の指導にあたっては、意欲的に製作活動に取り組むことができるように、目的意識をもって活動に取り組むための活動構成、友達と必然的に力を合わせる場の設定、活動の手順やポイントをとらえることができる個に応じた手順表や声かけ、モデル演示などの観点から支援を工夫する。
具体的には、①魅力的な庭と出合う→友達と協同で敷石や柵を作る→作った庭で友達と過ごす、といった一連の活動構成、②たくさんの煉瓦を敷き詰めたり、長い柵を設置したりする場の設定、③敷石や柵の作り方を個に応じて提示する手順表や声かけなどの支援を行う。

目 標

- 1 「ちびっこだいくさんいになってすてきなにわをつくろう」という目的意識をもち、手順表をもとに柵作りや煉瓦の道作りの課題に取り組み、作った庭で友達と楽しく過ごすことができる。
- 2 制作活動に取り組む中で、煉瓦や板材、釘、金槌などの取り扱い方、自分の役割への意識、友達とのかかわり方などを身につけることができる。

計 画 (約4時間)

時 間	であう (1時間)	ふかめる (2時間)	いかす (1時間)
活 動 と 内 容	1 庭に出合い、 庭作りの計画を 立てる。 ○ 煉瓦の道や柵 を作ることを意 識すること	2 道や柵作りに取り組む。 (1) 煉瓦を敷いて通り道を作る。 ① ○ たくさんの煉瓦を敷き詰めること (2) 柵を作って設置する。 ① (本時) ○ 長い柵を友達と一緒にもちながら、 土に埋め込むこと	3 ふじ組やさくら組の友 達を招待する。 ○ 頑張ったことを伝える こと ○ 目的達成の満足感を味 わうこと
手 だ て	※ 柵や小道のあ る庭の写真の提示 ※ 必要な材料や 道具の提示	※ 金槌やドライバーの使い方の提示 ※ 個に応じた手順表や補助具の提示 ※ たくさんの煉瓦敷き詰めたり長い柵 を設置したりする場の設定	※ 案内や説明などの役割 を分担して友達を招待す る場の設定 ※ 友達や教師からの賞賛

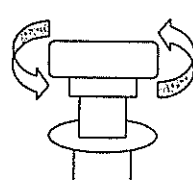
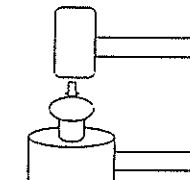
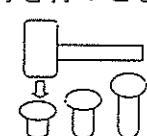
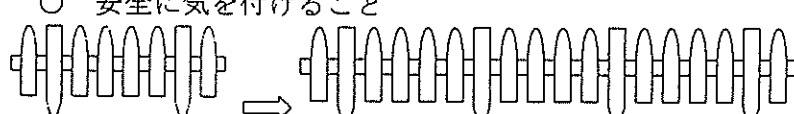
本時の目標

- 手順表や補助具を使って柵を作り、友達と協力して柵を設置することができる。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
○ 補助具を使ってネジを回すこと ○ 友達と一緒に柵を運んだり支えたりすること	○ 補助具を使って釘を打つこと ○ 進んで、柵をもったり、穴に埋めたりすること	○ 自分で釘を打つこと ○ 全体を意識し、指示を出しながら柵を設置すること

準 備 板材 釘 金槌 ネジ 釘打ちやネジ回しの補助具 個に応じた手順表 など

学習指導の過程

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 本時の学習のめあてについて話し合う。 ○ 長い柵を作るために協力することを意識すること ○ 活動の手順を大まかにとらえること めあて みんなでちからをあわせて ながいさくをつくろう。			1 本時学習への目的意識を明確化する支援 ○ 長い板材の提示 ○ 活動の手順絵の提示 ○ 教師によるモデル演示
2 柵を作って、設置する。			2 意欲的に柵作りに取り組むための支援 ○ 釘を安全に打つための補助具の提示 ○ 少ない力でネジを回すための補助具の提示 ○ つなげられる柵の提示 ○ 少しずつ長い柵を作る活動の設定 ○ 個に応じた手順表の提示
Aグループ	Bグループ	Cグループ	
(1) 自分の分担の柵を作り、友達の柵とつなげる。			
○ 補助具を使ってネジを回すこと  ※蛇口のようにひねってネジをしめられるもの	○ 補助具を使って釘を打つこと  ※くぎを離れた場所から支えることができるもの	○ 金槌をまっすぐ振り下ろして釘を打つこと  ※あらかじめくぎをさしておき、徐々に高くしていく。	○ 釘を安全に打つための補助具の提示 ○ 少ない力でネジを回すための補助具の提示 ○ つなげられる柵の提示 ○ 少しずつ長い柵を作る活動の設定 ○ 個に応じた手順表の提示
(2) 柵を土に埋め込む。			
○ 友達と協力して柵を運んだり、埋めたりすること			
・友達と一緒に板材を運ぶこと	・自分から進んで行動すること	・全体を意識しながら行動すること	Aグループ：場面の写真と行動の写真を対応づけたもの Bグループ：文字入りの行動の写真を順番に位置づけたもの Cグループ：行動を記した文カードを順番に位置づけたもの
○ 柵が安定するように、柱のまわりを踏み固めること ○ 安全に気を付けること  ※ 作った柵をつなげ、花壇に並べることで、活動を評価できるようにする。 ※ 柵の長さを徐々に長くし、一人一人が作る部分が長くなるようにする。			○ 安全面を意識させる教師のモデル演示 ○ 柱を埋め込むための穴の設定 ○ 個に応じた声かけ、モデル演示、動作援助
※ (1)～(2)の活動を繰り返し行う。			
3 活動を振り返り、本時学習のまとめをする。 ○ 友達の活動のよさを認めたり、自分の活動への自信をもったりすること ○ ふじ組やさくら組を招待する意欲を高めること			3 活動への満足感を味わわせる支援 ○ 出来上がった柵を見て感想を出し合う場の設定 ○ 教師の賞賛

全体会（１日目）

○ あいさつ

学 長 菰 口 治
学 校 長 中 谷 雅 彦

◇ 主題発表

「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」
—調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化—

研究主任 吉 田 正 樹

◇ 教科等発表

○ 図画工作科

「自ら求め創る喜びを味わう図画工作科学習」
—材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの展開—

図画工作科部 北 田 尚 雄

○ 特別活動

「仲間と共に学校生活を築く特別活動」
—集団と自己を見つめる学級活動の展開—

特別活動部 矢 野 俊 次

○ 児童発表

受け継ぐ我ら 新世紀のハーモニー
— 6年生児童による音楽発表—

指 導 者 豊 村 雅 義

◇ ヌ モ

第 1 日 目 午 後 の 部
公 開 授 業 指 導 案

第1学年1組 生活科学学習指導案

指導者 石 田 耕 一

単 元 ぐんぐんのびる、ぼく・わたし～「1ねん1くみせいちょうにつき」をはじめよう～
指 導 観

- 本学級の子供たちは、入学以来、大きな期待と様々な気がかりに包まれながら、精一杯小学校生活を送っている。単元「ぼくの・わたしの附属福岡小学校」においては、意欲的に学校探検を行い、福岡小学校のもの・人・ことへの気付きや親しみを深めることができた。そして、「附属福岡小学校でもっと楽しいことをしたいな。みんなと一緒にいろいろなことをやってみたいな。」という思いを膨らませてきている。このような子供たちの求めを学習の出発点として、自分を取り巻くもの・人・こととのかかわりを自分の成長という視点から表現していく活動は、自分自身への気付きを深めながら、自分への自信や生活への意欲を高めていく上で価値がある。
- 本単元は、これから大きく成長していこうという思いをもって、「1年1組成長日記」を継続的につけていきながら、大きくなっていることやできることが増えていることに気付き、自分への自信や生活への意欲をもつことをねらいとしている。ここでの主な学習内容は、①これまでの成長を実感し、大きくなったことやできるようになったことを成長日記に表していこうという意欲をもつこと、②成長への自分なりの感じ方や見方・考え方をもち、自分が成長していく存在であることや支えてくれる人々の存在に気付くこと、③成長への気付きや思いを素直に表現し、1年間を通した自分なりの成長日記を作り上げ、成長日記発表会を開くことである。本単元は、2年「ぐんぐんのびる、ぼく・わたしⅡ(生まれてからの成長)」に連続・発展するものである。
- 本単元の指導にあたっては、活動内容設定と活動構成から支援を工夫する。まず、活動内容については、「大きくなったこと」と「できるようになったこと」の2側面から、生活科学学習を中心とした生活場面における自分と対象とのかかわりを年間を通して調べ表現する「1年1組成長日記」の設定を行う。次に、活動構成については、成長を続けている存在としての自分自身に気付き、自分の成長という視点から自分自身を見つめる活動を継続して行い、自分自身の成長を実感できるようにする。具体的な活動展開としては、①アサガオの生長と比較しながら具体物を通して自分の成長を振り返る活動→②年間を通して、自分自身について調べ日記に表現していく活動→③お互いの成長日記を紹介し合い、お互いのよさを認め合う発表会として展開する。

目 標

- 1 「1年1組成長日記」を継続的に積み上げていく活動を通して、自分が伸びていく存在であることを実感するとともに、支えてくれている人々への感謝の気持ちをもつことができる。(人間性)
- 2 自分自身の成長や、それを支えてくれている人々の存在についての気付を、絵や文、写真などを活用しながら、「1年1組成長日記」に進んで表現することができる。(主体性・創造性)

計 画 (約10時間)

階	であう段階(2時間)	ひたる段階(5時間)	いかす段階(3時間)
活動 と 内 容	1 大きくなったことや、できるようになったことについて話し合う。 ① 本時 ○ 大きくなったことや、できるようになったことへの気付き 2 成長日記について話し合う。 ○ 自分の成長日記をつけることへの意欲や見通し ①	3 継続的に成長日記を積み上げる。 (1) 自分の成長への気付きを日記に表現する。 ○ 自分が大きくなったり、できるようになったりしていることへの気付き (2) 友達と成長日記を紹介し合う。 ○ 友達も自分と同じように成長していることや、一人ひとり得意なことなどに違いがあることへの気付き	4 お互いの成長について話し合う「成長日記発表会」を開く。 (1) 成長日記を製本する。 ① ○ これまでの日記の積み上げを通した成長の実感 (2) 成長日記交流会を開く。 ② ○ お互いに成長してきたことの実感、これからの生活への意欲
手 だ て	※ 朝顔の生長と比較しながら、具体物を通して自分自身の成長を振り返る活動の設定	※ 生活科を中心とした活動との関連指導を継続的に図り、自分の日記を積み上げていく満足感を味わわせる。	※ お互いのよさを認め合うことのできる発表会の設定 ※ 2年生への意欲づけ

本時の目標

- 1 自分の成長や自分の成長を支えてくれる人々への気付きを「1年1組成長日記」に表していこうとする意欲や表し方の見通しをもつことができる。
- 2 自分の成長や支えてくれた人々とのかかわりについて成長の様子が分かる具体物を通して調べ、成長し続けている自分自身への気付きを深めることができる。

準 備 児童 — 育てている朝顔

教師 — 朝顔の生長の図、成長を振り返るための具体物、成長日記のモデル

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 自分の成長を振り返り、本時のめあてについて話し合う。 ○ 大きくなったことの実感、自分の成長への興味・関心 ○ 自分の成長には家族の支えがあったことの感じ取り ※ 赤ちゃんの頃の写真提示、赤ちゃんとの出会いの場の設定 ※ 朝顔の生長と自分の成長を比較することで、「大きくなったこと」と「できるようになったこと」の観点を引き出す。 — めあて — おおきくなったり、できるようになったりしたことについてかんがえよう。 2 自分が小さかったころの様子について調べる。 (1) 成長ボックスをあけて、小さかった頃について考える。 ○ 具体物を通した自分の成長への気付きや支えてくれた人々とのかかわりへの意識	○ わあ、赤ちゃんだ。とてもかわいいよ。わたしたちもこんなに小さかったんだね。 ○ ぼくたちもアサガオさんみたいに、大きくなったり、がんばってできるようになったりしていることがあるんだよね。 ○ ぼくの小さい頃はどんなだったのかな。早く成長ボックスを開けてみたいな。
「大きくなったよ・できるようになったよ」体験コーナー 【大きくなったよコーナー】 ○ みんなぐんぐん大きくなってきたんだね。もっともっと大きくなっていくよ。 ○ 家族や身近な人たちの支えのなかで 【できるようになったよコーナー】 ○ できるようになったことには違いがあるけど、みんなたくさんあるんだね。 【身長・体重コーナー】 ◇測ってみよう ・生まれた頃の身長や体重を調べ、砂袋や身長計で体感する。 【衣服コーナー】 ◇重ねてみよう ・小さかった頃の洋服などを今の洋服の上に重ねて大きさを比べる。 【写真・ビデオコーナー】 ◇再現してみよう ・胎内写真や心音、小さかった頃のビデオなどを視聴する。 【ミニ活動コーナー】 ◇表現してみよう ・できるようになったことを紹介したり、実際に表現したりする。 ※ 大きくなったことや、できるようになったことへの気付きや実感を伴う具体物を選定し成長ボックスとして一人一人に提示し、振り返る場を設ける。	
(2) 体験コーナーでの活動をもとに、日記の1ページを作る。 ○ できるようになったことの自覚化、できる存在であることへの気付き、自分の成長日記作りへの意欲や表し方の見通し ※ 活動を終えた子供から、成長日記の1ページを作成させ、活動における気付きを認め価値付けていく。 3 本時の活動を振り返り、次の活動の計画を立てる。 ○ これからも伸びていく存在としての自分への気付き ○ これからの成長を日記に表現していこうという意欲や見通し ※ これからのアサガオの生長へ目を向けさせたり、生活科暦を活用したりして、今後の成長への期待感を膨らませる。	○ みんなもできるようになったことがたくさんあるね。 ○ これからも大きくなって、できることが増えていくと思うよ。成長日記が増えていくのが楽しみだよ。1年たったら、何ページになってるかな。がんばるぞ。

第3学年1・2組 算数科学習指導案

指導者 野 田 真 功

単 元 全部でいくつ（かけ算の交換法則，分配法則，結合法則）

指 導 観

- 本単元は，乗法九九表について調べることを通して自ら直観を働かせながら九九表の構成範囲を拡張，論理的に検証していくことを通して乗法について成り立つ性質についての理解を深めるとともに，（2，3位数）×（1位数）の学習へと発展していくことができるようにすることをねらいとしている。ここでの具体的な内容は，①10や0についての乗法の意味とその計算の仕方について理解すること，②（何十，何百）×（1位数）の乗法の意味とその計算の仕方について理解すること，③乗法において交換法則，分配法則，結合法則が成立することを理解することである。
- 本学級の子供たちは乗法が用いられる場合について知り，それを式で表したり，その式をよんだりすることや，乗法九九について成り立つ性質を調べ，それを乗法九九の構成や計算の確かめに生かすことができるようになってきている。また乗法を用いて求答したり生活場面で活用していこうとしたりする意識も高まっている。そこで本単元では，乗法九九表を拡張していく活動を通して既習の乗法の学習内容を活用したり式や表を用いたりして，1つの数を他の数の積としてみる見方を多様に行う経験を豊かにしていく。
- 本単元の指導にあたっては，既習の乗法九九の習熟をはかるとともに，自分なりに直観を働かせながら分配法則や結合法則を活用し，（2，3位数）×（1位数）の学習へ発展的に関連していくようにしたい。そのために，つかむ・見通す段階では，様々な形にドットの並んでいる図を提示し，直観を働かせて予想したドットの数を説明していくという追究課題を設定する。次に調べる段階では，よりドットの数が多くなった場合に出合わせ，乗数や被乗数が10の場合や何十，何百に一位数をかける場合の計算の仕方について乗法の意味や計算の仕方について調べながら乗法の分配法則や交換法則について考察していく。最後にまとめる段階では，調べてきたことを乗法九九表にまとめ，乗法九九表を拡張していくことで乗法に対する理解を一層深める。

目 標

- 1 乗数や被乗数が10や0の場合の乗法の意味や何十，何百に一位数をかける計算の仕方，乗法における交換法則や結合法則，分配法則をつくりだすことができる。（創造性）
- 2 既習の乗法の計算を活用しながらドットの数を効率的に数えていく方法について調べていこうとすることができる。（主体性・人間性）

計 画（約7時間）

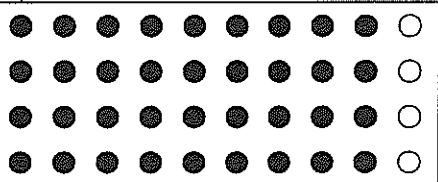
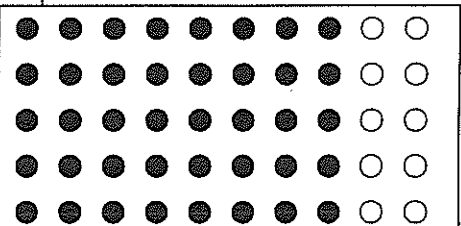
段階	つかむ・見通す段階(1時間)	調べる段階(4時間)	まとめる段階(2時間)
活動と内容	1 様々な形に並んでいるドットの総数を数える。 ○ ドットの数を直観的にとらえること ○ ドットの数を効率的に数えること ○ 乗法の交換法則をつくりだすこと	2 よりドットの多い数の場合の総数を調べる。 (1) 一辺に10並んでいる場合のドットの総数について調べる。（本時1/2） ○ 乗数や被乗数が10の場合の乗法の意味や計算の仕方，乗法の分配法則をつくりだすこと (2) 一辺にドットが200並んでいる場合のドットの総数について調べる。② ○ 乗法の結合法則をつくりだすこと	3 調べてきたことを乗法九九表にまとめる。 ○ 乗法九九表の構成範囲を拡張すること ○ 乗数や被乗数が0の場合の乗法の意味と計算の仕方をつくりだすこと
手だて	※ ドットの数を数える場面の設定 ※ ドットの数が方形に並んだものと不定形に並んだものとの比較提示	※ 全体の数量が視覚的にとらえやすくなるアレイ図の提示 ※ 色や形の異なるドットが混在しているアレイ図の提示 ※ 数が段階的に増えていく場の構成	※ 調べてきたドットの事象の提示 ※ 乗法九九の拡張を視覚的にとらえることのできる九九表の提示

本時の目標

- 1 かけ算の積を分配法則をもちいながら乗数や被乗数が10の場合の乗法の計算の多様な表し方をすることができる。
- 2 式や図を用いた乗法の表し方を多様に行い、乗法に成り立つ性質について調べていく意欲を高めることができる。

準備 ドット、ブロック、アレイ図

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 いろいろな形に並んでいたドットの数を求めてきたことを振り返り、本時学習のめあてを確かめる。 (1) 様々な形に並んでいるドットの数を数える。 ○ アレイ図で表されたドットの数を式の形で表すこと (2) 本時学習のめあてをつかむ。 ○ 本時学習課題を把握すること ※ 一辺にドットが10並んでいるアレイ図を提示する。 めあて かけ算がつかえるようにくふうして調べよう。 2 かけ算の式のいろいろな表し方について調べる。 (1) ドットの数の色々な数え方について見通しをもつ。 ○ 既習のかけ算との違いに着目して総数を式に表す見通しをもつこと $4 \times 9 + 4 = 40$ ※ 既習のかけ算で表すことができる部分がどれにあたるかをアレイ図を使って明確にさせることで、かけ算九九を組み合わせながら総数を式で表していくことができることに気づかせる。 (2) いろいろなアレイ図に表されたドットの数をかけ算の式で表す方法について調べる ○ 乗法の式を分配法則を用いて表すこと $5 \times 9 + 5 = 50$ $5 \times 8 + 5 \times 2 = 50$ ※ 1列にドットが10個並んだものが2列あるカードから9列あるカードまで準備しておき、乗数や被乗数が10の場合の乗法を多様を選択できるようにしておく。 ※ 式と図を関係づけて考察させ、分配法則が成立していることに気づかせる。 3 本時表した図や式について振り返り、学習をまとめる。 ○ かけ算の式を2つ使うことで今までかけ算で表せなかった数も表せるようになること ※ どの式を見ても2つのかけ算の式の中に10を見取ることができることを板書のなかで気づかせる。	○ この前の時間はいろいろな形に並んでいるドットの数を数えることができたな。 ○ いろいろな形に並んでいるときは、いくつかのまとまりごとにまとめて数えればよかったな。 ○ 答えの出し方がいろいろできたな。 ○ 今日は、ドットがきれいな形に並んでいるから数えやすそうだな。 ○ どうすればかけ算を使って数えることができるようになるかな。  ○ どこまでがかけ算九九で数えられるか分かるように分けるといいようだぞ。  ○ 2つのかけ算の式を使えば、今までかけ算を使えなかった式でも表すことができるようになるんだな。 ○ 3と1を合わせれば4になっているし、4と6を合わせれば10になっているぞ。

第4学年2組 体育科学習指導案

指導者 稲 津 一 徳

単 元 4の2オリジナルネットボールを楽しもう（バレーボール型ゲーム）

指 導 観

- 本単元は、2つのチームがネットにより区切られたコートで、打つ・はじく動きを使ってボールをつなぎながら、相手コートに返球し得点を競い合うゲームである。単元を通して自分たちに合った場やルールを工夫しながら、打つ・はじく動きを広げると共に、得意な動きを使った簡単な作戦を立ててゲームを楽しむことをねらいとしている。具体的には、①両手や片手ですくい上げる、打ち下ろすなどの簡単な打つ・はじく動きを身に付け、ラリーの続くゲームを楽しむこと、②自分たちの動きや求める楽しさに応じた場やルールを工夫したり、得意な動きを使った簡単な作戦を立て、練習したりすること、③協力して自分たちのゲームを創りながら、新たなゲームの楽しみ方や動きに気付くと共に、自信をもつこと、この3つが単元で学習できる内容である。
- 本学級の子供たちは、日常の体育学習において、自分たちの力に合ったゲームの場やルール、用具を選択し、今もっている動きを十分に活用しながら意欲的にゲームを楽しむもうとする姿が見られる。そのなかで、今もっている動きを様々な状況に活用しながら、より確かな動きとして獲得したり、自分たちの動きに合ったゲームの楽しみ方を創り出したりしている姿が見られる。そこで、バレーボール型ゲームである本単元を設定し、自分たちの動きや求める楽しさに応じて場・ルールを工夫していくと共に、得意な打つ・はじく動きを生かした簡単な作戦を立て練習しながらゲームを楽しんでいく経験は、新たなゲームの楽しみ方や動きを広げるうえで意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、自分たちの動きや求める楽しさに応じた場やルールを工夫すると共に、簡単な作戦を工夫するなかで、打つ・はじく動きを広げてゲームを楽しむことができるようにする。そのために、つかむ段階では、大小のコートで試しのネットボールを行い、技能の実態と求める楽しさのズレから解決の方向を交流し、追究課題を捉えさせる。うみだす段階では、総当たり戦を通して各自の動きや得点を明らかにするゲームチェック表をもとに、みんなが楽しめる場やルールを自己追究させる。次に、4の2ネットボール大会を活動提案し、作戦や練習への課題意識を高めていく。ここでは、対抗戦を通してドリルゲームと実際のゲーム状況に近いタスクゲームを活用させ、動きを自己追究させる。あじわう段階では、新たなゲームの楽しみ方や広げた打つ・はじく動きのよさを実感できるように、ゲームチェック表を活用させながら、ネットボール大会を行う。

目 標

- 1 自分たちの動きや欲求に応じた場やルールを工夫したり、得意な動きを使った簡単な作戦を立てたりしながら、打つ・はじく動きを広げ、楽しくゲームをすることができる。（主体性・創造性）
- 2 互いに協力して、自分たちに合ったネットボールを創りながら、新たなゲームの楽しみ方や動きを広げていく自分への自信をもつことができる。（人間性）

計 画（約10時間）

階	つかむ（2時間）	うみだす（6時間）	あじわう（2時間）
活動と内容	1 大小のコートで比較ゲームを行い、追究課題を捉える。 ○ 楽しさ・技能実態の把握 ○ 追究課題の明確化（追究課題） ・みんなが楽しめる4の2のオリジナルネットボールにしよう。 ↓ 技能の実態や求める楽しさから場・ルール、練習の工夫	2 自分たちに合った場・ルール、作戦、練習を工夫して楽しくゲームを行う。 (1) ゲームチェック表をもとに、場・ルールを工夫し、総当たり戦を行う。（本時2/3）③ ○ 技能・求める楽しさに応じた場・ルールの工夫と評価 (2) 作戦に応じたドリルゲーム・タスクゲームを選択し、対抗戦を行う。③ ○ 得意な動きを生かした簡単な作戦の立案、練習方法の選択と評価	3 4の2ネットボール大会を行い、学習の成果を交流する。 ○ 打つ・はじく動きの広がりの実感 ○ 工夫した場やルールのよさの実感 ○ 新たなゲームの楽しみ方のよさの交流
手だて	※ 大小のコートで楽しさを比較するゲームを行い、技能の実態と求める楽しさのズレを交流する活動の設定	※ 各自の動きや得点などを記録するゲームチェック表の提示と活用への促し ※ 作戦に応じたドリルゲーム・タスクゲームの提示と活用への促し	※ リーグ総当たり戦で行う4の2ネットボール大会の設定とチェック表によるゲーム評価

本時の目標

- 1 自分たちの動きや求める楽しさに合ったオリジナルルールを工夫し、ルールに応じた打つ・はじく動きをつなげて楽しくゲームをすることができる。 (主体性・創造性)
- 2 新たなルールのよさを実感し、ルールづくりへの意欲を高めることができる。 (人間性)

準 備 可動式ネット、ソフトバレーボール (100g)、ゲームチェック表など

学習指導の過程

活 動 と 内 容		子供の思考の流れ									
1 前時の学習について想起し、本時のめあてを話し合う。 ○ 前時の場の工夫について想起すること ○ 本時のめあてを把握すること ※ 流れ図やゲームチェック表をもとに、前時に行った場の工夫のよさを振り返らせ、本時の見通しを話し合うなかで、本時のめあてをつかませる。 めあて みんなが得点やラリーの楽しさをあじわえるルールを工夫して、ネットボールを楽しもう。 2 新たに考えたルールを付加したゲームを行い、工夫したルールのよさを交流する。 (1) 得点の楽しさにつながるルールを付加したゲーム1を行い、チームごとに評価する。 ○ 得点の楽しさが広がるルールの工夫 ○ 打つ・はじく動きを広げること ※ 各グループを巡視しながら、ゲームチェック表の各自の得点から、付加したルールのよさを意識させ評価へつなぐ。 (2) ラリーの楽しさにつながるルールを付加したゲーム2を行い、チームごとに評価する。 ○ ラリーの楽しさが広がるルールの工夫 ○ 打つ・はじく動きを広げること ※ 各グループを巡視しながら、ゲームチェック表のラリー回数やよい動きを取り上げ、付加したルールのよさを意識させ評価へつなぐ。 【予想されるルール工夫と動きの例】 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th><th>得点の楽しさの追究</th><th>ラリーの楽しさの追究</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ル ル</td><td> ・サーブは2回まで可 ・3人ともパスが回れば1点 ・B君が決めれば2点 など </td><td> ・返球回数は5回まで可 ・ワンバウンドも返球可 ・ドリブルも可 など </td></tr> <tr> <td>動 き</td><td>  ・オーバーハンドとアンダーハンドでの打ち方・はじき方を使い分ける </td><td>  ・走り込んで、低い姿勢から両手や片手ですくうような打ち方・はじき方 </td></tr> </tbody> </table> 3 追究したルールのよさについて話し合い、まとめる。 ○ 工夫したルールや打つ・はじく動きのよさの実感 ○ ルールづくりへの意欲の向上 ※ グループのゲームチェック表をもとによさを交流させる。			得点の楽しさの追究	ラリーの楽しさの追究	ル ル	・サーブは2回まで可 ・3人ともパスが回れば1点 ・B君が決めれば2点 など	・返球回数は5回まで可 ・ワンバウンドも返球可 ・ドリブルも可 など	動 き	 ・オーバーハンドとアンダーハンドでの打ち方・はじき方を使い分ける	 ・走り込んで、低い姿勢から両手や片手ですくうような打ち方・はじき方	○ 前の時間は、サービスラインやネットの高さを変えて、みんなが楽しめる場づくりを工夫して、楽しいゲームができたな。 ○ 今日は特に、ラリーや得点する楽しさが味わえるように、ルールを工夫していくんだな。 ○ ゲーム1では、2回までサーブができるルールを使ってみよう。 ○ サーブが届かなかったB君も、2回打てるので、1回目を思いっきり打って、失敗しても2回目は力入れ具合を考えて得点することができたぞ。 ○ ゲーム2では、ワンバウンドも返球してよいというルールを試してみるのだったな。 ○ ワンバウンドも返球してよいので、ボールをしっかり見て打つゆとりができるし、下からすくうように打てばよいので、コントロールよく打つことができ、ラリーが続くようになって楽しかったな。 ○ ゲームチェック表を見ると、前の時間よりもラリーの回数がずいぶん増えた。もっと、ルールをよいものに見直していきたい。
	得点の楽しさの追究	ラリーの楽しさの追究									
ル ル	・サーブは2回まで可 ・3人ともパスが回れば1点 ・B君が決めれば2点 など	・返球回数は5回まで可 ・ワンバウンドも返球可 ・ドリブルも可 など									
動 き	 ・オーバーハンドとアンダーハンドでの打ち方・はじき方を使い分ける	 ・走り込んで、低い姿勢から両手や片手ですくうような打ち方・はじき方									

第5学年1組社会科学学習指導案

指導者 高野 誠 一

小 単 元 魚の宝庫 博多漁港

指 導 観

- 本小単元は、我が国の水産業の様子について博多漁港を取り上げて、水産業が自然環境を生かして営まれていることや漁業技術の改善に努めていること、新鮮な魚を流通させるための市場の工夫などについて考えることをねらいとしている。水産業の盛んな地域として、本校にほど近い博多漁港を取り上げることで、次のような具体的な内容が考えられる。①我が国の水産業が日本近海や世界各地で行われていること、②海流や大陸棚など自然環境を生かして営まれていること、③あじ・さば巾着網、えびこぎ網漁法など捕る魚に合わせた漁法の工夫をしていること、④移植や放流、栽培といった水産資源を増やす取り組みがなされていること、⑤情報の共有化を図る市場のシステムの工夫によって新鮮に出荷・輸送できるようにしていることなどである。
- 本学級の子供たちは、魚を食べることを好んでおり、水産業が食生活における大きな役割を果たしていることを感じている。中学年での地域学習やあらつ学習などを通して、学校の近くに大きな漁港があることも知っている。また、中学年での社会科学学習を通して、自分の課題に応じて観察や見学などの具体的な調査活動や基本的な資料を活用する情報活用力や地域の一員として自分の行動を考える主体性、地域の産業の特色や人々の働きを考える創造性、地域の人々が自然環境と調和して生活していることや人々の健康や安全などを考えて努力工夫がされていることを感じ取る人間性が育まれてきている。そこで、本小単元では、漁港での具体的な観察や地球儀、世界地図、統計など各種資料を活用する主体性、水産業と自然環境とのかかわりや生産技術、輸送の工夫などを考える創造性、我が国の国土を大切にしようとする人間性を育んでいきたいと考える。
- 本小単元の指導にあたっては、博多漁港での水産業が抱える問題点について追究していくことによって、わたしたちの生活が国土の恵みによって支えられていることに気付き、大切にしたいという思いをもつことができるようにしたい。そこで、「つかむ」段階では、自分の食生活を振り返り、水産物を多く獲っているという日本人の特色があることに気付かせ、それらが九州沿岸の海流や地形の恵まれたところでおこなわれていることを関係的にとらえさせる。「さぐる段階」では、その漁獲量が近年減ってきていることから、現在の水産業の様子や減少の原因、水産資源を守る取り組みについて考えさせる。「生かす」段階では、自分も国土の恩恵を受け、国土に生きる一員として水産資源を守るための海洋保護に関する自分の行動を考えられるようにしたい。

目 標

- 1 博多漁港の水産業とわたしたちの食生活とのかかわりや漁場、漁法の工夫などについて、漁港の見学や各種資料を効果的に活用することを通して追究することができる。(主体性・創造性)
- 2 我が国の食生活を守るために、水産資源の保護や自然環境を守ろうとしている人々の努力を感じ取り、自分も自然環境の保護のためにできることを考えようとすることができる。(人間性)

計 画 (約11時間)

	つかむ(4時間)	さぐる(5時間)	生かす(2時間)
予想される活動内容	1 博多漁港について調べ、追究課題をつくる。 (1) 博多漁港の水揚げを調べる。① ○ 水産物とのかかわりの気づき (2) 博多漁港での水産業の様子を調べる。② ○ 自然環境や漁法の工夫の理解 (3) 水揚げの推移を調べる。① ○ 追究課題の設定	2 博多漁港での水揚げ減少への取り組みを調べる。 (1) 水揚げの減少の原因や現在の取り組みについて調べる。② ○ 海洋環境の変化や養殖・栽培等の工夫の理解 (2) 博多漁港での水産資源を守る工夫を考える。② ○ 栽培の可能性や海洋技術センターでの研究開発の努力をとらえること (3) 博多漁港での水産資源を守る方法を話し合う。① ○ 技術開発と自分たちの生活の見直し 本時	3 自分たちができる海洋環境保護について考え、話し合う。 (1) 自分たちでできそうな海洋保護について調べる。① ○ 台所は海の入り口であることの自覚 (2) 自分の行動計画としてまとめる。① ○ 自分の生活の更新
支援	※ 自分の食生活調べ ※ 国土との関係を示す資料提示	※ 魚っちんぐプラザや漁港での体験的活動 ※ 海洋技術センターでの調査活動	※ まもルーム等での調査活動 ※ 海洋技術センターの資料

本時の目標

- 1 博多漁港での水揚げの減少の問題に対して、海洋技術センターでの調査、資料活用をもとに、減少の原因との関係や実現性、効果性などの面から解決策を考えることができる。(主体性・創造性)
- 2 博多漁港を中心とした水産業が自分の食生活を支える恵みをもたらすものであることに気づき、恵まれた国土の大切さを考えるとともに、漁獲量減少への危機感を感じることができる。(人間性)

準備 児童:自分が考える水産業を守る解決策についての考えを表す資料

教師:海洋技術センターや博多漁港での取り組みについての資料

学習指導の過程

学 習 活 動 と 内 容	子供の思考の流れ								
1 博多漁港と自分の食生活とのかかわりや漁獲量減少について振り返り、本時のめあてを確認する。 ○ わたしたちの食生活が博多漁港での漁獲によって支えられ、それが減少してきていることへの切実感からのめあての把握 めあて わたしたちの食を支える博多漁港の水揚げを守るためにどうしたらよいか考えよう。 ※ 学習の流れ図や子供たちの食生活と博多漁港とのかかわりの資料を提示し、自分の食生活と博多漁港のかかわりを意識させる。 2 博多漁港を中心とした水揚げを守っていくための方法について話し合う。 (1) 海洋環境に目を向けた子供と養殖や栽培といった水産業の方法に目を向けた子供の解決策をもとに話し合う。 ○ 国土を守り生かす観点と産業の工夫の観点からの考えがあることを把握すること ※ 代表児の考えをTPなどの資料をもとに話し合わせ、減少の原因と関係付けて発表できるようにする。 【予想される子供の考え】 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: left;">海洋環境を守る</th><th style="text-align: left;">育てる漁業の方法を工夫する</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・ 原因は海の汚れや海水温の上昇にある。</td><td>・ 減ってきている魚を増やしたり、育てたりすることが必要。</td></tr> <tr> <td>→ 漁場の土砂や海水の汚染を防いでいく方法</td><td>→ 海洋技術センターで育てている魚の種類や研究の進め方</td></tr> <tr> <td>→ 海洋牧場や魚礁の建設などを進める</td><td>→ 栽培漁業センターでの取り組みの成果</td></tr> </tbody> </table> (2) 海洋技術センターの方や博多漁港の方と一緒に話し合う。 ○ 水産業や海にかかわる仕事をしている方の自然環境の恵みを生かしたいという願いへの共感 ※ ゲストに招き、子供たちの考えを自然環境保護と育てる漁業の立場から認めていただく。 3 海洋技術センターや博多漁港の方の話を聞く。 ○ 海洋環境の保護の視点から、自分たちの生活を見直していく必要性を感じる ※ 海洋環境の汚染と人間の生活を結びつけて、具体的な資料をもとに話していただく。	海洋環境を守る	育てる漁業の方法を工夫する	・ 原因は海の汚れや海水温の上昇にある。	・ 減ってきている魚を増やしたり、育てたりすることが必要。	→ 漁場の土砂や海水の汚染を防いでいく方法	→ 海洋技術センターで育てている魚の種類や研究の進め方	→ 海洋牧場や魚礁の建設などを進める	→ 栽培漁業センターでの取り組みの成果	○ わたしたちが購入し、食べているのは、博多漁港で水揚げされている。 ○ 福岡だけでなく、全国に向けて情報システムを活用し、出荷・輸送されている。 ○ わたしたちの食を支える博多の魚が、今危ない。 ○ 自分たちの生活を支える博多漁港の水産業を守る取り組みを考えなければならない。 ○ ぼくは、日本の国土でも学習したように、福岡を含めて日本の水産業がさかんなのは恵まれた自然環境にあります。今、海の汚れが増し、海水温も上昇しています。排水や海底の土砂などについて考えていく必要かあります。 ○ 海に携わっている人は危機感をもっているし、自然のおかげで生活していることを感じている。 ○ わたしたちの生活も魚たちにはやさしくないとこがあるようです。自分の生活について見直していく必要があると思います。
海洋環境を守る	育てる漁業の方法を工夫する								
・ 原因は海の汚れや海水温の上昇にある。	・ 減ってきている魚を増やしたり、育てたりすることが必要。								
→ 漁場の土砂や海水の汚染を防いでいく方法	→ 海洋技術センターで育てている魚の種類や研究の進め方								
→ 海洋牧場や魚礁の建設などを進める	→ 栽培漁業センターでの取り組みの成果								

第6学年2組 あらつ学習指導案

指導者 野 口 信 介

単 元 始めよう！ 附小 I T 革命 （校内 L A N の活用）

単元の構想

- 本学級の子供たちは、これまでにあらつのもつ自然や文化、人々の生き方から課題を発見し、街頭での調査活動やパソコン等での情報収集活動を通して自分なりの応えを導き出し地域に対する愛情や誇りを抱いてきている。そして、それらの活動を通して、コンピューターリテラシーも高まりつつある。また、最上級生となった今、昨年度の卒業生が残してくれた附属福岡小学校に対する思いや願いを受け継ぎ、自分たちの手でさらに地域の人の願いや学校の成員一人一人の願いに応じた学校へと発展させていきたいという期待が高まってきている。
- 本単元は、最上級生としての学校へのかかわり方を考え、自分たちと全校児童との意志の疎通を図るために校内 L A N を生かしたネットワーク体系を構築していく総合的な学習である。学校内のコミュニケーション活性化のための校内ネットワーク構築を追究対象とすることで、①学校の成員の意識を的確に捉えることができる調査方法や表現方法を工夫すること、②学校の成員と意志の疎通を図るための情報機器の活用といったコンピューターリテラシーを高めること、などの、主に情報活用力を高める学習内容を子供たちが生み出し、展開することができると考える。また、この追究内容は、子供たちの自治的活動である委員会活動のあり方を考えることにつながり、あらつ学習と特別活動の連動を図ることによって、より深化されるものとする。
- 本単元の展開においては、子供たちが学校づくりを行う上で、下級生の考えを取り入れていくことの大切さに気づき、情報収集や情報交換の方法として校内 L A N を活用することのよさを実感しながら、コンピューターリテラシーを高めていくように支援していく。目的をもつ段階においては、卒業生の答辞に込められた思いにふれさせ、これからの学校づくりについて意欲を高めていく。その際、学校づくりのために下級生の思いを知ることが不可欠なことに気づかせていく。追究する段階では、情報交換を円滑にするための校内 L A N の活用方法について考え、学内ネットワークづくりを行っていく。ここでは、コンピューターの操作などの技術的な支援を中心に行っていく。実践する段階では、自分たちで作成したイントラネット掲示板やメールボックスの紹介を行い、情報交換ツールを活用した委員会活動の運営や日常のコミュニケーションの活性化を目指していく。

目 標

- 1 自分たちが学校づくりを行う上で必要な情報収集の観点や情報提供の視点にたつて、これまでの活動を見直すことができる。（主体性・創造性）
- 2 情報交換ツールとしてのパソコンのよさに気づき、操作方法を高めることができる。（主体・人間性）

計 画（あらつ学習 約 2 1 時間、特別活動 約 2 時間）

	目的をもつ（4 時間）	追究する（1 3 時間）	実践する（4 時間）
予想される活動と内容	1 学校づくりを行う上で必要なことについて話し合い、下級生が 6 年生に託す願いを調査する。(4 時間) ○ 情報収集の大切さへの気づき ○ 校内 L A N の活用に対する意識化 ○ 活動目標の設定 ☆ 附小「 <u>未来を創る</u> 」①	2 校内 L A N の活用法について話し合い、校内ネットワークづくりを行う。 (1) 意志の疎通を図る内容と方法を話し合う。② ○ 情報交換の内容と方法の選定 (2) 目的に沿ってネットワークづくりを行う。④ ○ 情報機器の活用と操作方法の習得 ☆ 学級活動「委員会を私たちの手で」① (3) 経過を報告し、活動を見直す。(本時 1/2) ② (4) 学校づくりの視点に沿った振り返り (5) 校内ネットワークを完成させる。⑤ ○ 目的に応じた情報機器の活用と技能の習得	3 校内ネットワークを児童集会で紹介し、活用する。(4 時間) (1) 紹介の準備を行う。③ ○ 紹介する内容や方法の検討 (2) 児童集会で、学校づくりの指針と方法について提案する。① ○ 活用へ意識化 ※ 日常的に活用していく機器を活用するためのマニュアルの紹介 ※ 児童集会での提案の場の設定
支援	※ 卒業生の小学校に寄せる思いの紹介 ※ 追究意欲を高めるための学活との連動	※ 目的に応じた情報機器の活用法について示唆してくれる方の招聘 ※ パソコン等の情報機器の操作の援助 ※ 目的意識を高めるための委員会活動との連動	

本時の目標

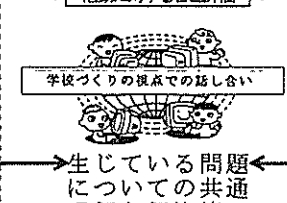
- 1 校内LANを学校のコミュニケーションツールとして、目的に応じて工夫しながら活用しよう และสามารถทำได้ (主体性・創造性)
- 2 活動で生じた問題について、他の考えを取り入れながら解決しよう และสามารถทำได้。(人間性)

準備 児童：地域の方や学校の児童から収集した意識調査をパソコンにまとめた表現物

教師：LAN接続のパソコン21台、画面転送システム(SchoolJoin)、OS(NT, 98)

IE(インターネットブラウザ)、プロジェクター、学習の流れ図

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1 本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 追究活動の振り返りと本時のめあてを確認すること ※ パソコン操作に詳しい方が来ていることを紹介する。 めあて 学校のコミュニケーションを活性化するための校内ネットワークづくりの経過報告を行い、自分の取り組みを見直そう。 2 これまでに取り組んでできていることについて発表し、現在の状況と感じていることや問題点について交流する。 (1) 自分が取り組んでできていることの経過と生じている問題点について発表する。 ○ 意思の伝達手段を高めるための活動に対する自己評価 ○ 学校づくりという視点での交流活動 ※ 必要に応じて画面転送システムを使い、児童(グループ)がつくった校内掲示板等を映し出ししながら発表させていく。	○ これまでに、校内LANを活用してコミュニケーションの活性化を図ろうと思ってきたけど、取り組んでいるうちに不安なところや自分たちで解決できない問題が出てきたよ。 ○ 自分たちが考えていることを知ってもらうために、HPをつくっているけど、書く内容や表示の仕方を見直す必要があるよ。 ○ メールを設定しているけれど、その管理が難しいよ。
現在の取り組み 【イントラネット掲示板】 ・委員会活動の視点からの掲示板作成 ・縦割り清掃に関する掲示板作成 【メールボックス作成】 ・コミュニケーションツールとしてのメール環境の整備 【パソコン使用マニュアル】 ・パソコンの使い方についてのマニュアルの作成 活動に対する自己評価  学校づくりの視点での話し合い 生じている問題についての共通理解と解決策 (2) 現在生じている問題点に対して、解決策を考える。 ○ これからの活動についての見通しをもつこと ※ 改善すべきことを内容的なもの和方法的(技術的)なものに分け、これからの活動の方向付けを行わせる 3 これまでの取り組みで自信がついたことやこれから頑張っていきたいことを発表し、今後の活動について話し合う。 ○ 技術的な面での不安の解消 ○ 校内LAN活用についての見通しの確認と意欲の高揚 ※ ゲストの方に校内LANを活用しようとする試みに対し肯定的な評価をしていただくと共に、技術的な面でのサポートが可能であることを話していただきながら助言をしていただく。	見直す視点と問題点 【イントラネット掲示板】 ・掲示する内容について ・掲示板作成に関わる技術的な問題について 【メールボックス作成】 ・メールアドレスの設定と割り振りに関する問題 【パソコン使用マニュアル】 ・学年に応じた表現内容や表現方法について ○ 誰でも校内LANを使えるようにするために、パソコンの使い方マニュアルを作っているけど、必要なことをわかりやすくまとめるのが難しいな。 ○ これまででだいたいの形はできてきたけど、実際に使えるようにするためには専門の人に相談していくことが必要だよ。

第2学年1組 図画工作科学学習指導案

(ふじ組との交流学习)

指導者 北田 尚雄(T1) 舩元 俊文(T2)

支援者 大学教官教授 吉井 宏

題材名 カラフルいろいろカップがあつまると！(造形遊び)

指導観

- 本題材は、いろいろな色や形のカップの特徴をつかみ、そのよさを生かしながら、変形させたり、組み合わせたり、飾り付けをしたりすることで、自分の求めにあった楽しい形をつくりだし、生み出した形に、新しい意味づけをして表現していくことをねらいとしている。主な学習内容は、①様々な色や形のカップの特徴を多面的にとらえ、自分が生かしていきたい特徴(よさ)から表現方法や表現内容を発想し、自分の求めに応じて表現したものに自分なりの意味づけをしていくこと、②材料のよさから自らの求めをもち、体全体をつかって楽しく表現していくこと、③様々なカップの造形的なよさやおもしろさに関心をもち、新たな見方、考え方ができるようになることを高めていくことができる。
- 本学級の子供たちは、これまでに紙をつかった造形遊びを経験している。そこでは、紙という材料の切ったり、曲げたり、くしゃくしゃにしたりして変形できることや、接着剤をつかって組み合わせられるという材料の独自性から、表現方法や表現内容を思いつき、新しいものを生み出してきている。そのような活動から子供たちは、材料の特徴から発想したり、そのよさを生かして表現したりしていくことに関心をもち、積極的に材料に関わりながら多様な表現をしていく姿が見られる。このようにこれまで培った体全体をつかって表現や、自分の求めから積極的に材料に関わりながら造形遊びをしていくことは、低学年図画工作科の資質・能力を育てる上で価値がある。
- 本題材の指導にあたっては、材料との感動的、体験的な出会いから、そのよさをつかみ表現していくように3段階の活動で構成する。まず、材料のよさに出合う段階では、様々なカップの切ったり曲げたりできる独自性をとらえさせたい。そのために、様々なカップを自由に変形させたりつなげたりして体験的に特徴をとらえさせ、その特徴から表現していきたいよさを考えさせる。次に材料のよさを生かす段階では、材料体験から思いついた材料のよさをもとに発想し、自分の求めに応じて形づくらせていきたい。そのために、体験をもとにした操作方法の交流から、表現方法について明らかにしながら表現させていく。さらに、材料のよさをあたためる段階では、作品展を開いて、自分が生かしてきた材料のよさや、表現内容を紹介しあい、創造する喜びを味わわせていきたい。

目標

- 1 いろいろな色や形のカップに関心をもち、切ったり、曲げたり、つぶしたりできる特徴に気づき、その特徴から発想した材料のよさをもとに、形を構成して表現することができる。(創造性・主体性)
- 2 いろいろな色や形のカップのよさから、自分の求めに応じて形を創り出す楽しさを味わうとともに、友達の発想や活動のよさに気づくことができる。(人間性)

計画(約6時間)

段階	材料のよさに出合う段階(2時間)	材料のよさを生かす段階(3時間)	材料のよさをあたためる段階(1時間)
活動と内容	1 紙コップや透明カップで自由に材料操作をして遊ぶ。② (1) いろいろなカップの特徴をつかみ、自分が生かしていきたいよさを考え材料操作をする。 ○ 材料の特徴に関心をもちこと (2) それぞれの材料操作の方法やできた形について話し合う。 ○ 形や方法から発想すること	2 材料操作から生かしたいよさを明らかにして形づくる。③ (1) いろいろなカップを選び自分なりの方法で形づくる。(本時1/3) ○ 材料の特徴から発想しよさを生かしてつくること (2) 新しくできた形や、表現方法、表現内容について話し合う。 ○ 作品のよさから構想すること	3 みんなで、今までつくった作品発表会をする。① (1) 作品の形や色から、題名や表したかったことを考える。 ○ 材料の形や色から発想すること (2) 作品発表会を開く。 ○ 自分や友達のよさに関心をもちこと
手だて	※ いろいろなカップの材料操作方法などの技能的ヒント提示 ※ 材料操作をするための、はさみなどの用具の提供	※ 表現の意欲と発想を促すため様々なカップの材料提供 ※ 組み合わせていくための、ひもやテープなどの材料提供	※ 題名や表現内容を振り返る学習カードの記入提案 ※ 作品のよさを見つけていくための鑑賞の視点の明確化

本時の目標

- 自分が好きな色や形のコップを選び、そのよさを生かしながら、切ったり、組み合わせたりしながら形づくり、みんなで、できた作品について見立て遊びをすることができる。

準備 色のついた紙コップ(10色×100個)、透明なコップ、様々な形の紙皿、モール、角材、竹ひご、針金、スズランテープ、ひも、接着剤、セロテープ、はさみなど

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ					
1 前時までの活動を想起し、本時のめあてについて話し合う。 (1) 前時までの活動から、新しく発見した、また、おもしろかった操作方法について話し合う。 ○ 材料体験をもとに発想し表現の見通しをもつこと ※ 前時の材料操作でできた形を提示して、これまでの活動について想起させる。 (2) 本時のめあてについて話し合う。 めあて じぶんがすきないろやかたちのコップをつかって、おもしろいかたちをつくろう。	○ 前の時間は、いろいろなカップを切ったり、曲げたりして、いろいろな形をつくって遊んだな。 ○ わたしは、紙コップを切ってその部分を曲げると、紙がカールしておもしろい ○ ぼくは、カラフルな紙コップをたくさんつないでみたいな。 ○ わたしは、好きな色のカップを切って、重ねてみたいわ。 ○ 色つきのカップや透明カップを組み合わせるときれいな。 ○ ぼくは、たくさんの色のカップを、長くつないでいてみよう。					
2 好きな色や形のコップを選んで集め、多様な表現方法で、おもしろい形や見立てた形をつくっていく。 (1) 好きな色や形のコップを集め、どのような表現をしていくか話し合う。 ○ 材料の形や色に関心を持ち、操作体験をもとに表現方法を思いつくこと ※ カラフルな色のコップや、透明なカップ、様々な形のカップと出合わせ、その色と形、材料体験から表現方法を発想させる。 予想される子供の求め <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="width: 20%; vertical-align: top;"> ○ 紙コップをいろいろな形にしてみたい。 </td><td style="width: 20%; vertical-align: top;"> ○ 様々なカップをひもでつないでカラフルな色の輪をつくりたい。 </td><td style="width: 20%; vertical-align: top;"> ○ 透明カップの中に色つきの紙コップを入れて組み合わせたい。 </td><td style="width: 20%; vertical-align: top;"> ○ 紙コップをつぶして、また開いてつなげたい。 </td><td style="width: 20%; vertical-align: top;"> ○ いろいろな色や形のカップを並べて、くくってみたい。 </td></tr></table>		○ 紙コップをいろいろな形にしてみたい。	○ 様々なカップをひもでつないでカラフルな色の輪をつくりたい。	○ 透明カップの中に色つきの紙コップを入れて組み合わせたい。	○ 紙コップをつぶして、また開いてつなげたい。	○ いろいろな色や形のカップを並べて、くくってみたい。
○ 紙コップをいろいろな形にしてみたい。	○ 様々なカップをひもでつないでカラフルな色の輪をつくりたい。	○ 透明カップの中に色つきの紙コップを入れて組み合わせたい。	○ 紙コップをつぶして、また開いてつなげたい。	○ いろいろな色や形のカップを並べて、くくってみたい。		
(2) 思いついた表現方法で、様々なカップを切ったりつなげたりして、思い思いに形づくり。 ○ はさみで切る、接着剤でくっつけるなど、様々なカップから新しい形をつくる技能を生かして造形遊びをすること ※ 多様な表現ができるように、ひもや竹ひご、はさみなどの材料、用具の提供 3 つくりだした形をみんなで見立てて、作品の題名を考える。 ○ 色や形の構成から発想し意味づけしていくこと ※ 作品から何が見えてきたか、工夫して表したことは何か、よさを見つける視点を明らかにして、作品の紹介をさせる。	○ わたしは、紙コップを切り開いて、くるくる曲げてみたいな。 ○ わたしの作品は、いろいろなカップでたくさんのお花ができました。 ○ ぼくの作品は、カラフルなへびです。 ○ もっとお花らしくなるように飾りつけしたいな。					

第1・2学年ふじ組 図画工作科学学習指導案（2年1組との交流学习）

指導者 舩元俊文(T2) 北田尚雄(T1)

支援者 大学教官教授 吉井宏

題材 カラフルいろいろカップがあつまと！（造形遊び）

指導観

- 本学級の子供たちは精神年齢2歳から5歳程度の1年生4名（男3名・女1名）、2年生2名（男2名）の計6名で構成されている。子供たちはこれまでに、クレヨン、パスなどの好きな色を使って、思いのままに絵に表したり、身近にあるものから同じ色や形のものを集めたり、並べたりして遊ぶという経験をしている。しかし、友達の模倣をする子供、決まったように同じことを繰り返す子供、感じたことを工夫して絵に描いたり作ったりする子供など、その活動の様子は様々である。また、色の組み合わせなどを見ても、教師の働きかけを受けて組み合わせる子供から、2種類の色を交互に組み合わせたりできる子供までおり、その楽しみ方も様々である。
- 本題材のねらいは、いろいろな色や形のカップという素材そのものにふれて楽しむような遊びから、つぶす、ならべる、かさねる、つなげる、組み合わせるなど、材料の特徴に気づき、子供たちの思い思いの造形遊びを通して、造形表現についての興味・関心をもち、表現の喜びを味わうことができるようにすることである。具体的な学習内容は、①小集団での行動に慣れ親しみ協調的にかかわること、②教師や友達の働きかけを受け入れること、③ならべる・かさねる・つなげる・組み合わせるといった造形の楽しさを味わうこと、④手順や方法、きまりなどを守って活動することである。このように、意欲的な活動の過程を通じて、感覚、知覚、認知機能を十分に発揮させ、発達させることができる。また、造形活動を通して手指の細かな運動を調整する機能を高めることができ、将来の豊かな生活の基盤となる技能・態度を身につけていく上で意義深い。
- 本題材の指導にあたっては、材料との体験的な出会いから子供たちが材料と遊んだり、作ったりしたいという思い思いの表現欲求を満足させ、友達と共に表現・製作の喜びを味わうことができるようにする。そのために活動構成、教材の選定、個に応じた教師の働きかけの3点から支援を工夫する。具体的には、①材料と出会い、特徴をつかむ→製作する→発表する→つくりかえる（付加修正）という一連の活動を繰り返し、最後に作った作品の発表会をするといった活動を構成する。②子供たちの興味・関心を喚起し、手指の運動調整能力に応じ、簡単な技能で用意に変形できる材料や道具を子供たちの実態に応じて準備する。③ならべる、かさねる、つなげるなどの様々なカップの変形のさせ方を、子供たちが分かりやすく意識できるように提示し、形を作ったり作りかえたりできるような声かけモデル演示を行う。また、毎時間に自分たちで作った作品を紹介する場を設定し、作った作品を紹介したり、アドバイスを受けたりし、実態に応じて子供の要求を代弁するなど、教師が媒介となって、一人ひとりの子供のかかわりをつなぐなどの支援を行う。

目標

- 1 いろいろな色や形のカップに興味・関心をもち、形を変えて楽しく組み合わせることができる。
- 2 形作りを通して、カップを選んだり、つぶしたり、切ったり、つなげたりして作ったものをみんなに発表したり、みんなの作品を見たりすることができる。

計画 画（約6時間）

時	であう（2時間）	つくる（3時間）	いかす（1時間）
活動と内容	1 材料と出会い 変形のさせ方を体験する。 ○ ならべる・かさねる・つなげるなどのやり方きまりを知ること	2 色や形を選んだり、変形させたりして形を作って遊ぶ。 ○ 並べたり組み合わせたりすること ③ (1) いろいろなカップの色や形を選び、自分なりの方法でならべたり、かさねたりつなげたりして形を作る。（本時1/3） ○ 自分なりに形を変形させながら組み合わせること (2) 作った形に名前をつけたり、組み合わせたりしてつくる。 ○ 働きかけを受けて名前をつけたり組み合わせたりすること	3 作った作品を発表する。 ○ できあがった作品を紹介したり、みんなの作品を見たりして表現の喜びを味わうこと
手だて	※ 材料にふれたり、変形させたりできるような材料の提示	※ ならべる・かさねる・つなげる・つぶす、色を選ぶ・形を選ぶ、組み合わせるなど、形のかえ方を意識できるような材料の提示・モデル演示・動作補助 ※ 色や形、作り方を選べるような一人ひとりへの働きかけ	※ 作った作品を発表する場の設定 ※ 作品への賞賛励ましなどの声かけ

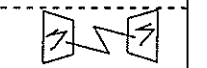
本時の目標

- 自分が好きな色や形のコップを選び、切ったり組み合わせたり、並べたりしながら楽しく活動することができる。

	A児・B児	C児・D児	E児・F児
操作	教師と一緒に材料を選び、ならべることができる。	自分で材料を選び重ねたりしてつなげることができる。	自分で材料を選びつなげたりくっつけたりすることができる。

準備 色つきの紙コップ、透明なコップ、カップ、色々な形の紙皿、モール、角材、竹ひご、針金、ひも、接着剤、セロテープ、はさみなど

学習指導の過程

活 動 と 内 容			個 の 活 動 を 促 す 支 援
1 本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時行った活動を想起する。 ○ 前時学習の想起 (2) 本時学習のめあてについて話し合う。 めあて じぶんのすきないろやかたちのコップをつかっておもしろいかたちをつくろう。 ○ 目的意識をもつこと 2 好きな色や形のコップを選んで、変形させて形を作る。 (1) 好きな色や形のコップを選ぶ。 ○ 並べたり、つなげたりすることを知り、色や形に興味・関心をもつこと (2) 切ったり、つぶしたり、丸めたり、つなげたりして形を作る。 ○ 形を変えて造形遊びをすること			1 形を作ることに對する意欲を引き出す支援 ○ 前時活動を想起できる場の設定 ○ 今まで作った形を発表する場の設定 ○ 材料のよさを提示する場の設定 ○ 切り方やつぶし方まげ方組み合わせ方を意識できるような操作の仕方の提示 2 形を作り上げていく個に応じた支援 ○ 個に応じた教師の働きかけ <u>A児・B児</u>：作品を1つずつ見せたり、色や形のおもしろさが分かるような提示の仕方 形のかえ方を意識できるような、手を引いての操作や動作補助。 友達の働きかけを受け入れるような声かけをする。 <u>C児・D児</u>：材料の色や形、組み合わせ方を実際にさせることで意識できるような体験 つぶす、丸めるなどの操作の仕方側分かるような提示や、動作補助 <u>E児・F児</u>：色や形を意識できるような提示の仕方や、見立てることができるような例示 組み合わせ方のおもしろさや、「これ何に見えるかな」という問いかけなどをもとにした声かけ 3 学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 作った作品を発表する場の設定 ○ 選んだり、形を変えたりできたことに対する賞賛 ※ 教師が子供の様子を見ながら代弁者となってかわりが広がるようにする。
A児・B児	C児・D児	E児・F児	
・ 動作補助を受けながら形を変えること  ・ カップを並べていこう	・ 教師のやり方をみながら自分で形を変えること  ・ カップをつなげよう	・ 自分で変形のかせ方を選んで形を変えること  ・ つぶしてつなげよう	
3 本時学習のまとめをする。 ○ 選んだ材料や作った作品を振り返ること ※ どのようにして作ったのか、どんなものを作ろうとしていたのかを紹介し、友達からのアドバイスや感想を聞く。			

◇ 教育フォーラム

テーマ「実践紹介！特色ある教育課程はこうしてつくる！」

コメンテーター 福岡教育大学 助 教 授 寺 岡 聖 豪

福岡市立博多小学校実践紹介

－「博多学習」を中核にした教育課程の創造－

提案者 研 究 主 任 今 林 康 治

春日市立春日野小学校実践紹介

－総合的な道德教育の展開－

提案者 統括学年主任 田 中 義 人

提案者 研 究 主 任 早 野 年 博

福岡教育大学教育学部附属小倉小学校実践紹介

－学び方を重視した教育課程の展開－

提案者 研 究 主 任 白 石 毅

本校実践紹介

－教科領域・総合的学習が調和的に展開する教育課程の創造－

提案者 本校研究主任 吉 田 正 樹

コーディネーター 本校研究副主任 石 田 耕 一

◇ メ モ

第 2 日 目 午 前 の 部
公 開 授 業 指 導 案

第1学年1組 算数科学習指導案

指導者 野田 真 功

単 元 かずあてあそび（数の合成・分解）

指 導 観

- 本単元は、1～10までの数についての数の合成や分解を行うことを通して1つの数を他の数の和や差としてみるなど他の数と関係づけてみることができるようになること、数を多面的にとらえることができるようにし、数に対する概念を一層豊かなものにすることをねらいとしている。ここでの具体的な内容は、①1から9までの数の合成・分解ができるようになること、②10の合成・分解ができるようになり、10の補数を見つけることができるようになることである。
- 本学級の子供たちは10までの数について、具体物を数えたり、大きさを比べたりする経験をしながらものの集まりと数、数詞、数字の関係や集合数について知り、1から10までの数字を正しくよんだりかいたりすることができるようになっている。また、自分の身の回りのものの個数を進んで数詞や数字で表そうとする意識も高まってきている。そこで本単元では、10までの数の合成や分解を行う活動を通して10までの数を2つの数の和や差として見ていく見方をつくりだし、1つの数を他の数との関係に着目して多面的にとらえていく経験を豊かにしていく。
- 本単元の指導にあたっては、数を視覚的にとらえることのできるブロックやドット図、カード等を使い、その色々な部分に表されたブロックの数について直観を働かせながら見通しをもったり、それが正しいかどうか実際に数えて確かめたりする活動を通して、1から10までの数を2つの数の和や差で表したり（数の合成・分解）、10の補数をつくりだしたりすることができるようにしたい。そのために、つかむ・見通す段階では、2人組になって5個以下のブロックを2つに分け、それぞれの個数を言い当てていくという遊びを行い、1つの数を2つの別の数であらわしていくという追究課題を設定する。次に調べる段階では、ブロックやドットの数を10個まで増やしてある数を2つに分けたときの数を当てる数当て遊びを行い6～10までの数の分解について調べていく。最後にまとめる段階では、ドットや数字がかき込まれた数当てカードを使って数当てあそびを行いながら、6～10の数を合成や10の補数を作ることについて調べ、数の概念に対する理解を一層深める。

目 標

- 1 1から10までの数を2つの数の和や差で表したり（数の合成・分解）、10の補数をつくりだしたりすることができる。（創造性）
- 2 数のカードやブロック等を活用しながら1つの数を2つの数の和や差で表す方法について進んで調べていこうとすることができる。（主体性・人間性）

計 画（約7時間）

段階	つかむ・見通す段階(1時間)	調べる段階(4時間)	まとめる段階(2時間)
活動と内容	1 ブロックの数当て遊びをする。 ○ ブロックの数を直観的にとらえること ○ 5までの数の合成・分解ができること	2 ブロックやカードを使った数当て遊びを行う。 (1) 6個から9個のブロックを2つに分けたときのブロックの数当て遊びを行う。 ③ ○ 6～9の数の分解ができること (2) 10個のブロックで数当て遊びを行う。 ① ○ 10の数の分解ができること	3 「あわせて□をつくらう」遊びをする。2/2(構) ○ 6～10の数の合成ができること ○ 10の補数をつくりだすことができること
手だて	※ ブロックの数を数える場面の設定 ※ 数の分解ができる数当て遊びの提示	※ ブロックの数が段階的に増えていく場の構成 ※ 2人組で分けた数を当てあう活動の設定 ※ もとの数、分解した数を視覚的にとらえるカードの提示	※ 合わせた数をつくるという場面の設定 ※ 数の合成・分解が視覚化できるカードの準備

本時の目標

- 1 9までの数の合成・分解をもとに10の合成・分解を行う場合についての見通しをもち、合わせて10になる数の組を作り出すことができる。
- 2 あわせて10になる数の組合わせについて調べることに興味をもち、色々な合成の仕方に調べていくことができる。

準備 数当てカード

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 数当てカードを使った数当てゲームを行い、本時学習のめあてをつかむ。 (1) 6～9までの数が書き込まれたカード数を使った「あわせて□をつくらう」ゲームについて話し合う。 ○ 6～9までの数はすべていくつかの数の合成した数と見ることができ、しかもそれぞれ何通りずつあることを想起すること (2) 本時学習のめあてをつかむ。 ○ 本時学習課題を把握すること ※ 9の合成の学習と比較させ、数が1増えたことによってどちらか一方の数が1増えることを見通させる。 めあて かずあてカードをつかってあわせて10をつくらう。 2 ドットや数字が記載された数当てカードを使って「あわせて10をつくらう」遊びをする。 (1) ドットが記載されたカードを使って「あわせて10をつくらう」遊びを行う。 ○ 10の合成についての見通しをもつこと ・ 6個と4個、7と3個、8個と2個など ※ ドットが記載され、合わせて10になる数どうしのカードのみが符合するカードを準備し、見通しをもつ際に働かせた直観を遊びの中で確かめていけるようにしておく。 (2) 数字が記載されたカードを使って「あわせて10をつくらう」遊びを行う。 ○ 10の合成を行うことができること ※ 合わせて10になる数どうしのカードのみが符合するカードを準備し、見通しをもつ際に働かせた直観を遊びの中で確かめていけるようにしておく。 3 「あわせて10をつくらう」について振り返り、学習をまとめる。 ○ 合わせて10になる数も色々な組合わせがあることに気づくこと ※ カードの組合わせと板書を関連付けながらまとめさせる。	○ カードを使った数当て遊びは楽しかったな。 ○ 6や8や9をつくるときには、どのカードとどのカードを使えばいいのか、わかるようになったぞ。 ○ 9は、1と8や、2と7や3と6や、4と5があったな。 ○ 最初の数が10になると、カードはどんなふうになるのかな。 ○ 9から10は1多くなっているから、カードもどちらかが1大きくなっているんじゃないかな。 ○ 今日は、あわせて10をつくれるようになりたいな。 ○ どのカードを選んでいけばいいのか。 ○ 9のときとは違うカードを選んでいかないといけないな。 ○ カードにかいてある印で確かめていこう。 ○ 数があっていないとカードがぴったり合わないから、確かめることができるぞ。 ○ 今度は数字しかかかれていないカードだ。うまく10をつくることができるかな。 ○ 数字を見て合わせて10になる数をだんだん言えるようになってきたぞ。 ○ 9をつくる時もいろいろあったけど、10をつくる時もいろいろなつくりかたがあったな。

第2学年1組 学級活動学習指導案

指導者 矢野俊次

題材 みんなでつくろう！「おむかえパーティー2001」

指導観

- 本学級の子供たちは、これまで係の内容を決めたり、遊ぶ日を設定してみんなで遊ぶ活動を行ったりしてきた。その中で、友達の話をしつかりと聞いたり、自分の考えをはっきりと話したりすることができるようになってきている。また、学級生活を楽しくするために係の活動内容を工夫し仲間と協力して取り組んでいる姿も見られる。しかし、自分の考えに固執しがちであったり、自分のやりたいことが先になって友達と協力して活動を行うことが苦手であったりする子供もいる。そこで、本題材を通して、共通の目標を達成するために仲間と共に取り組むすばらしさを味わわせたい。
- 本題材は、教生先生を迎えるための集会活動の計画や実践の過程において、教生先生の立場を考えて集会の内容を決定したり、自分の役割を自覚し責任もって行う実践力を培うことがねらいである。具体的な内容は、①みんなでアイディアを出し合って「おむかえパーティー2001」の計画を立てること、②計画に沿って集会活動を実践すること、③集会活動を振り返って、自分たちで計画を立て実践できたよさを実感することである。子供たちが出会いを楽しみにしている教生先生を活動の対象として取り上げることは、活動目標が明らかになり、低学年らしい自治的な活動を促す上で価値がある。
- 本題材の指導にあたっては、「教生先生をむかえる会をしたい」という子供の思いをもとに、「おむかえパーティー2001」の計画や実践を通して、仲間と力を合わせて活動するすばらしさを感じ取らせたい。そのためにまず、つくる段階では、今年2年1組に来られる教生先生からのメッセージをVTRで観せ活動のめあてを設定する。次に、決める段階では、教生先生を迎える会の内容を決定していく。そこでは、昨年度の教生先生をゲストとして招聘し、活動の内容等についてのアドバイスをしていただく。このことを通して、集団としての活動に対する取り組みを見つめさせていく。そして、行う段階では、役割を分担して集会の準備を行い、計画に沿って集会活動を実践する。最後に、活動を振り返り教生先生からの肯定的評価を得ることで、共通のめあてに向かってみんなで力を合わせて活動できたことを喜び合う。

目標

- 1 「教生先生をみんなでむかえたい」という思いをもとに共通のめあてをもち、みんなで工夫して「おむかえパーティー2001」を実践することができる。(主体性)
- 2 教生先生が喜んでくれるように集会の内容を考えるとともに、友達と仲良く力を合わせて活動するよさを味わうことができる。(創造性、人間性)

計画 (約2時間+課外)

題	第1次 つくる(課)	第2次 決める(1 時間+課)	第3次 行う(課+1 時間)
活動と内容	1 みんなで活動のめあてについて話し合い、試しのゲームを行う。 課外 ○ 活動のめあての設定 ○ 去年の活動を振り返ったり、試しのゲームを行ったりして、自分の考えをつくること	2 「おむかえパーティー2001」の内容について話し合う。 (1) プログラムについて話し合う。 本時① ○ 集会の内容を決めること (2) 迎える会を盛り上げる工夫を話し合い、役割分担する。 課外 ○ 役割分担すること	3 「おむかえパーティー2001」を実践し、活動を振り返る。 (1) 集会の準備をする。 課外 ○ 自分の責任を果たすこと (2) 集会活動を行い、活動を振り返る。 ① ○ 協力するすばらしさの実感
手だて	※ 教生先生からのメッセージ ※ 去年のことを振り返る資料 ※ 試しのゲーム	※ 昨年度の教生先生の招聘 ※ 教生先生からのVTR ※ 学級会ノートの工夫	※ 教生先生の肯定的評価 ※ 活動を振り返る資料の提示・VTR、写真、日記

本時の目標

- 1 「おむかえパーティー 2001」で行うゲームの内容について話し合い、プログラムを決定することができる。 (主体性)
- 2 友達の意見をしっかりと聞きながら、どんなゲームをしたら教生先生に喜んでもらえるかということを考えることができる。 (創造性, 人間性)

準備 教生先生の写真, 教生先生からのVTR, 学級活動ノート

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 「おむかえパーティー 2001」の活動のめあてと本時の議題を確かめ、学級会の進め方について話し合う。 (1) 本時の議題を確認し、学級会の進め方を話し合う。 ○ 本時の議題と学級会の進め方を知ること 議題 「おむかえパーティー2001」のプログラムを決めよう。 学級会の進め方 ① 考えの聞き合い(3分) ② 話し合い・決定(25分) ③ 話し合いの反省(7分) ④ 先生の話(3分) ※ 教生先生からの「おむかえパーティー 2001」を楽しみにしているという趣旨のVTRを視聴させ、話し合いに対して意欲をもたせる。 (2) 友達と本時議題に対する互いの考えを聞き合う。 ○ 支持的な雰囲気をつくること 2 「おむかえパーティー 2001」のプログラムにおいて、どんなゲームにするのか話し合い、集団決定する。 (1) 活動のめあてから、自分の考えのよさや問題点をみんなで話し合う。 ○ どんなことをしたら教生先生が喜んでくれるかについて自分の考えを発言したり、友達の考えを聞くこと <予想されるゲーム> ・自己紹介ゲーム, フルーツバスケットなど ※ 教師は、話し合いの進め方を助言したり、子供の発言を価値付けしたりする。 (2) 教生先生の話参考に、どんなゲームをするのか決定する。 ○ ゲームの内容を集団決定すること ・両方ともやったらどうか ・時間が足りるのか ※ 昨年度の教生先生から、どんなことがうれしかったかを話していただき、集団決定のための情報を提供する。 3 本時の話し合いの反省を学級会ノートに書き、先生の話聞く。 ○ 本時学習の自己評価をすること ○ 集会の実践に向けて意欲をもつこと ※ 教師の話では、活動目標を達成する観点から述べられた意見の賞賛や今後の活動に対する期待について話す。	○ 教生先生をむかえる会でどんなことしたら教生先生は喜んでくれるかな。 ○ ビデオを見たら、教生先生も「おむかえパーティー 2001」を楽しみにしているようだから、楽しいゲームを決めていきたいな。 ○ 今年は、教生先生の人数が少ないから、そのことも考えないといけないな。 ○ とんりの〇〇さんの考えも面白そうだな。でも、ほんとにできるかな。 ○ 名刺交換ゲームは、そのときは覚えられなくても名刺によって後からでもその人のことが分かるのでいいと思うな。 ○ フルーツバスケットは、私たちも楽しいし、去年の教生先生も楽しそうにやっていたからいいと思うよ。 ○ 去年の教生先生は、どのように思ってるかな。聞いてみよう。 ○ どっちもいいところがあるから、2つともしたらどうだろうか。 ○ みんなで協力しないと時間内に終わらないかもしれないぞ。 ○ よーし、教生先生に喜んでもらえるように、ぼくは〇〇に気を付けてがんばるぞ。

第2学年2組 生活科学習指導案

指導者 石 田 耕 一

単 元 みんなのたまり場カランドパーク！ ～唐人町かえっこショップをひらこう～
指 導 観

- 本学級の子供たちは、1年「西公園で遊ぼう」や2年「あらつの町探検」の学習を通して、あらつのもの・人・ことへの親しみをもち、さらなるかかわりへの意欲を高めている。特に、唐人町商店街での買い物探検には意欲的に取り組み、カランドパークに興味をもっている子供たちが多く。そこで、地域の方々が「唐人町商店街にふれ合いの場を！」という思いをもって作られたカランドパークで、芸術家のG. T. が「ふれ合いの少なくなった都市空間に子供たちのたまり場の回復を！」という願いを込めて取り組みを続けられてきた「かえっこショップ」を展開することは、子供たちの求めに応じた自主的な地域活動を地域の人々とともに連続・発展的に展開する面から価値がある。
- 本単元は、「唐人町商店街にみんなが集う楽しいたまり場をつくろう」という願いをもった地域の方々と一緒に力を合わせて、みんなが楽しむことができる唐人町かえっこショップ作りの工夫を行いながら、唐人町かえっこショップを進んで企画・運営することをねらいとしている。ここでの主な学習内容は、①かえっこショップの楽しさを感じ取り、自分たちの手で企画・運営していこうとする意欲をもつこと、②カランドパークにかかわる地域の方々とG. T. と一緒に、かえっこショップを作ること、③唐人町商店街は、地域の人たちにとってとても大切なふれ合いの場であることが分かり、マナーを守った新しい利用の仕方に気付くことである。
- 本単元の指導にあたっては、地域との絆を創り出す活動内容設定と活動構成から支援を工夫する。まず、活動内容については、唐人町商店街への気付きや親しみを深めながら、地域の方々とG. T. との地域における協同活動として展開する唐人町かえっこショップ作りの設定。次に、活動構成については、①カランドパークにおけるかえっこショップ体験→②継続的に唐人町商店街のもの・人・ことにかかわる唐人町かえっこショップ作りの活動（⑦地域の方々とG. T. と唐人町かえっこショップ作りの計画を立てる。→④一緒にかえっこショップを作る。→⑥カランドパークにおいてミニ・オープンし、問題点について調べる。→⑤かえっこショップを作り変える。）→③カランドパークにおける「唐人町かえっこショップ開き」のように行うものとする。

目 標

- 1 地域の方々とG. T. と一緒に力を合わせて唐人町かえっこショップを作り上げるなかで、唐人町商店街への愛着を深めるとともに、唐人町商店街において生活を拓くことの効力感や有用感をもつことができる。（人間性）
- 2 「唐人町かえっこショップを開こう」という願いをもって、地域の方々とG. T. と一緒に準備を進めるなかで、地域の人々にとって大切な商店街であることが分かり、マナーを守った新しい活用の仕方に気付くことができる。（主体性・創造性）

計 画（約15時間）

段階	であう段階（4時間）	ひたる段階（9時間）	いかす段階（2時間）
活動と内容	1 唐人町商店街買い物探検を想起し、話し合う。① ○唐人町商店街の楽しさ 2 唐人町商店街カランドパークでG. T. のかえっこショップを体験する。③ ○自分たちのかえっこショップ作りへの意欲	3 地域の方々とG. T. と一緒に、カランドパークで唐人町かえっこショップを作ったり作り変えたりする。⑨ 本時7/9 ○「みんなが集まる楽しいカランドパークにしよう」という思いからのかえっこショップ作りの工夫、協同活動の積み上げ ○唐人町商店街のもの・人・ことへの気付きや親しみの深まり	4 カランドパークで、唐人町かえっこショップを開く。 (1) ショップの準備をする。① ○見直しをもとにしたショップのセッティング (2) かえっこショップを開く。① ○唐人町商店街を活用する楽しさ、効力感・有用感
手だて	※ カランドパークにおける「かえっこショップ体験」での地域の方々と3年生からの活動提案	※ 地域の方々と協同活動の積み上げを実感できる活動や、自分たちのかえっこショップを見直す活動の設定	※ 子供たちの手による自主的なかえっこショップの運営 ※ 継続的な活動への励まし

本時の目標

- 1 「唐人町かえっこショップ」ミニ・オープンにおける気付きをもとに、よりよいかえっこショップ作りに向けて上原さんと藤さんと一緒に知恵を出し合い、進んで話し合うことができる。
- 2 ミニ・オープンで見出した自分なりの問題点やそれに対する改善の方向性を互いに交流するなかで、唐人町商店街のもの・人・ことへの気付きを深めることができる。

準備 児童 — ミニ・オープン計画書、ミニ・オープン見直しカード、計画書カード

教師 — 流れ図、カランドパーク床地図、上原さんと藤さんへの協力依頼

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 唐人町かえっこショップミニ・オープンを振り返り、本時のめあてについて話し合う。 ○ 自分たちのかえっこショップの問題点や改善への見通し ※ ミニ・オープンにおける問題点を出し合いながら本時への思いを表現する場の設定や、上原さんと藤さんに唐人町かえっこショップ開きへの期待感を話していただく場の設定 めあて 「みんなが楽しく集まる唐人町かえっこショップにするためにはどうしたらいいか。」みんなで一緒に話し合おう。	○ この前のミニ・オープンは、とても楽しかったね。小さな子も喜んでくれたよ。でも、困ったこともあったよ。 【唐人町かえっこショップ】 ・かえっこバンク・かえっこ店員 ・ファクトリー・エージェンシー ・かえっこ運送
2 地域の方々やG.T.、友達と一緒にこれからの唐人町かえっこショップについて話し合う。 ○ 大切にしたい観点の把握や役割ごとの具体的な工夫点 ○ 改善の方向性の根拠や理由から、唐人町商店街のもの・人・ことへの気付きの深まり ※ ミニ・オープンの写真やビデオ、カランドパークの床地図を活用しながら、改善の観点や方向性を具体的にする。	○ みんなに喜んでもらえるかえっこショップになるように上原さんと藤さんたちと一緒にがんばって考えるよ。 ○ 写真やビデオを見ると分かりやすいね。
【予想される子供たちの話し合い】 【ショップの規模・設置場所】 ○ フジヤさんから、「もう少し真ん中でしてね。」とお願いされたよ。フジヤさんのワゴンのじゃまになっていたね。ファクトリーの数を減らさないといけないと思うよ。場所も変えよう。 【多くの人に喜んでもらう】 ・楽しさ、やさしさ、心くばり 【ショップの内容や役割分担】 ○ ファクトリーが混雑していたり、運送の仕事があまりなかったりしたから、仕事や人数を変えたいと思うよ。○○さんが本部を置いた方がいいよと言っていたから、新しい役割も入れるといいね。 ○ アーケードでお客さんをさがしたけど少なかったよ。今度は開店時間を遅くしたほうがいいと思うよ。○○さんに尋ねたら、夕方か催し物がある時がお客さんが多いと教えてもらいました。 ※ 自分の考えを熱心に伝え、一生懸命考える姿を認め励ます。 ○ 唐人町商店街の人やお客さんたちはかえっこショップのことをまだあまり知らないから、宣伝したらいいと思うよ。何回かやっているとだんだん人気がでくるんじゃないかな。 【ショップの開店日・時間】 【ショップの情宣・継続化】	
※ 子供たちの話し合いの流れに応じて、役割分担ごとの話し合いや計画書作りの活動を設定する。 3 本時の話し合いを振り返り、次の活動の計画を立てる。 ○ よりよい唐人町かえっこショップへの気付きの深まり、かえっこショップ開きへの期待感の高まり ※ 地域の方やG.T.に本時の話し合いに対する感想や、今後の活動への見通しについて話していただく場の設定	○ 大事なことや工夫することが分かってきたよ。みんなが楽しめる唐人町かえっこショップになると思うよ。 ○ オープンの日が楽しみだね。成功させるぞ。

第3学年1組 国語科学習指導案

指導者 平 島 健 二

単 元 ぼくの、わたしの冒険ワールド！

指 導 観

- 本単元は、冒険を題材にした本を読む活動を通して、主体的に読書の範囲を広げていくことをねらいとしている。冒険を題材にするといろいろな種類の本を取り上げて読書活動を支援できる。主な学習内容は、①どんな冒険がなのだろうという読書課題をもって意欲的に読むこと、②現実のことが書いてある本、現実とは違う本、不思議な世界の本など読書の範囲を広げること、③自分なりに読み取った冒険の楽しさや感動を適切に書きまとめたり、友達との相違点や共通点を考えながら進んで話し合うことである。
- 本学級の子供たちは、登場人物に視点を置きながら叙述をもとに想像を広げ、物語の世界を読むことができるようになっている。また、本が好きな子供が多く、読んだことを自分なりに感想をまとめたり、発表したりすることもできる。しかし、読書の範囲としては物語を好んで読む傾向があり、説明的な文章などを読むことが多いとは言えない。そこで、読書を通して冒険を味わおうという読書課題を中核に据え、物語以外の冒険作品を追究する読書の楽しさも味わわせながら読書の範囲を広げていくようにさせたい。
- 本単元の指導にあたっては、読書課題をもって意欲的に読み進め、読書の範囲を広げさせていきたい。そのためにまず、「つかむ」段階では、冒険について話し合い、「読書を通して様々な冒険がしたい」という意欲を高め、本を持ち寄り冒険地図を作る。地図にかけるもの、かけそうなもの、かけないものがあることに気づき、それぞれどんな冒険なのか追究しようとする読書課題をとらえ計画を立てる。次に、「広げる」段階では、興味のある本を読み、それぞれの冒険地図の本がどんな冒険だったか話し合うなかでその特徴に気づかせる。そして「生かす」段階では、あまり読まなかった種類の本や興味のある本へ読み広げていくようにさせたい。

目 標

- 1 どんな冒険が書かれているのか意欲をもって読み、物語や事実が書かれた作品などへ読み広げ、読書の範囲を広げることができる。 (主体性・創造性)
- 2 冒険を題材にした作品の場所や出来事から味わえた楽しさや感動などを冒険地図や冒険新聞として書きまとめたり、進んで話し合ったりすることができる。 (人間性)

計 画 (10時間)

時	つかむ段階 (3時間)	広げる段階 (4時間)	生かす段階 (3時間)
活動内容	1 冒険について話し合い、読書による冒険計画を立てる。 (1) 冒険について話し合う。① ○ 読書で様々な冒険がしたいという意欲の喚起 (2) 本を持ち寄り、冒険地図を作る。② ○ 地図にかけるもの、かけそうなもの、かけないものがあることからどんな冒険か追究する読書計画を立てること	2 興味のある本を読み、冒険地図について話し合う。 (1) 興味のある本を読む。② ○ どんな冒険か進んで読むこと (2) 読んだ本がどんな冒険かまとめる。① ○ 適切に書きまとめること (3) それぞれ読んだ本がどんな冒険だったか報告し合う。① (本時4/4) ○ 3枚の冒険地図の本の特徴に気づき、読書への意欲を高めること	3 冒険地図をもとに読み広げる。 (1) 読んだことのない冒険地図や好きな冒険地図の中から本を選び、読み広げる。② ○ 冒険を題材にした読書の範囲を広げること (2) 読み広げた本を冒険新聞に書きまとめ、みんなに知らせる。① ○ 友達に伝えたい冒険を適切に書くこと
支援	※ 実際にはできなくても読書を通して冒険できることに気付かせる。	※ 子供の読みの傾向を把握し、読みの実態に応じ、個別に支援する。	※ ブックリストを配布し、一人一人の子の選択を援助する。

本時の目標

- 3枚の冒険地図の本の特徴に気付き、読書への意欲を高める。(主体性)
- 読み取った冒険の感動を相手に分かりやすいように筋道立てて話したり、話の中心に気をつけて聞いたりしながら進んで話し合うことができる。(創造性・人間性)

準備 学習ノート、冒険地図、ことばカード、流れ図

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ								
1 前時学習を想起し、本時学習のめあてをつかむ。 ○ 3枚の冒険地図の本がどんな本か追究してきたこと ○ それぞれで追究してきた3枚の冒険地図の意味を本時話し合うこと めあて 自分が追究してきた本の冒険を出し合い、3枚の冒険地図の意味を話し合おう。	○ 早く、ぼくの追究を話したいな。 ○ どうして冒険地図が3枚になったのかわかるかな。								
2 一人一人が読んできた本がどんな冒険だったか追究したことを話し合い、3枚の冒険地図の意味について考える。 (1) 一人一人の読んだ冒険について話し合う。 ○ 自分の読んだ本がどんな冒険の本か紹介すること <table border="1" data-bbox="231 1075 1045 1467"> <thead> <tr> <th>冒険地図</th><th>具体的な発表例</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>冒険地図A</td><td>ぼくが読んだ本は、冒険地図Aにあります。危機を知恵で乗り切るような冒険です。現実にはないような冒険です。</td></tr> <tr> <td>冒険地図B</td><td>ぼくが読んだ本は、冒険地図Bにあります。不思議な世界の冒険です。</td></tr> <tr> <td>冒険地図C</td><td>ぼくが読んだ本は、冒険地図Cにあります。実際の人の冒険です。感動的です。</td></tr> </tbody> </table> ※ どの冒険地図の本かはっきりさせる。 ※ 場所や出来事など冒険の楽しさや感動を明らかにする。 (2) 冒険地図の特徴を話し合う。 ○ 自分の考えと比べながら話し合うこと ※ 現実の話、現実に近い話、不思議な世界などの子供の表現で特徴をまとめる。 3 自分がまだ読んだことがない冒険地図の本や興味がある冒険地図の本を選び、冒険読書への意欲を高める。 ○ これから読む本の種類を決め、読み広げる意欲をもつこと ※ 机間指導をしながら、一人一人の読書の傾向や好みを把握し、助言していく。 ※ 本が決められる子供は決めるように助言する。	冒険地図	具体的な発表例	冒険地図A	ぼくが読んだ本は、冒険地図Aにあります。危機を知恵で乗り切るような冒険です。現実にはないような冒険です。	冒険地図B	ぼくが読んだ本は、冒険地図Bにあります。不思議な世界の冒険です。	冒険地図C	ぼくが読んだ本は、冒険地図Cにあります。実際の人の冒険です。感動的です。	○ ぼくが追究した冒険地図の本の冒険と似ている冒険はあるかな。 ○ 冒険地図が違くと本の冒険の特徴も違うみたいだぞ。 ○ 現実の人の話も読んでみたくなかったな。 ○ 不思議な世界の冒険って面白そうだな。 ○ 3枚の冒険地図の特徴がなんとなく分かってきたぞ。 ○ ぼくは、冒険地図Aをあまり読んでなかったみたいだな。今度は、冒険地図Aから選ぼうかな。 ○ 冒険地図Bから選びたいな。早く読んでみたい。 ○ 冒険地図に分けて話し合うといろいろな種類の本があるみたいだ。好きな本も選びやすくなったぞ。
冒険地図	具体的な発表例								
冒険地図A	ぼくが読んだ本は、冒険地図Aにあります。危機を知恵で乗り切るような冒険です。現実にはないような冒険です。								
冒険地図B	ぼくが読んだ本は、冒険地図Bにあります。不思議な世界の冒険です。								
冒険地図C	ぼくが読んだ本は、冒険地図Cにあります。実際の人の冒険です。感動的です。								

第3学年2組 社会科学学習指導案

指導者 藤 野 俊 明

小 単 元 福岡市でつくりだされるもの～小田部の松尾さんのキャベツづくり～

指 導 観

- 本小単元は、福岡市の農業生産に携わる人々が自然環境を生かした農法の工夫や伝統的な農法を守る努力をしていること、出荷などを通して他地域とのかかわりをとらえ、地域の農業生産の大切さを感じたりすることをねらいとしている。具体的には①福岡市の農業生産は都市近郊型であり、農作物は市内だけでなく、他地域にも出荷されているということ②キャベツづくりを営む松尾さんが「出荷の時期」「葉の固さ」「種類」等の工夫をしているという内容について観察・見学したり、白地図にまとめたりして出荷を見越した生産の様子を明らかにしていくことである。このような福岡市の農業生産の様子を松尾さんのキャベツづくりを通して学習することは、福岡市の特色を理解する上からも意義深い。
- 本学級の子供たちは生活科の学習において学校の近くの商店街の様子を調べたり、施設の様子について調べてきている。さらに第3学年の社会科の学習で学校のまわりや公共施設の配置などを白地図に書き込む学習を通して、福岡市という広がりを意識することができるようになってきている。このような時期に本小単元では、福岡市の農作物の栽培を調べることで福岡市の広がりを深めさせるとともに、他地域とのかかわりをとらえさせたい。また社会科初期のこの時期に具体的な活動を通して、地域を学ぶ学習の基礎を培っていききたい。
- 本小単元の指導にあたっては、松尾さんの野菜づくりについて調べ、出荷を見越した栽培について調べることを通して、都市近郊型の福岡市の農業生産の特色を明らかにしていきたい。そのためにはまず、つかむ段階では松尾さんの栽培したキャベツに出合わせ、その葉の厚さから生産方法について調べる学習問題を設定させる。次に調べる段階では松尾さんの栽培の様子について観察・見学により調べさせる。そして松尾さんの生産の工夫を「種類」「点検」「定植時期」「葉の固さ」からしていることをとらえさせる。最後にいかす段階では、キャベツ以外の野菜の生産について調べさせ、野菜生産マップを作成し、近郊型の農業生産についてまとめさせていく。

目 標

- 福岡市でキャベツを栽培する松尾さんは地域での伝統の農法を守りながら、消費者のニーズに応えることができるように定植時期をずらしたり、葉の違う種類を生産したりしていることを考えることができる。(創造性)
- 福岡市の農業生産は都市近郊型であることを身近な野菜作りを調べたり、調べたことを白地図にまとめたりすることを通してとらえることができる。(主体性・人間性)

計 画 (約8時間)

段階	つかむ段階 (2時間)	調べる段階 (4時間)	いかす段階 (2時間)
学習活動と内容	1 松尾さんが生産したキャベツと出合い、学習問題を設定する。 (1) 市販のキャベツと松尾さんのキャベツの違いを話し合う。① ○ 松尾さんのキャベツの特徴 (2) 松尾さんのキャベツ作りを調べる計画を立てる。① ○ 追究の視点の明確化	2 松尾さんのキャベツ作りを調べる。 (1) 松尾さんの畑を見学する。② ○ 松尾さんの栽培の観察調査 (2) 栽培の様子について話し合う① ○ 仕事の内容の様子の共有化 (3) 生産の秘密を話し合う。(株) ① ○ 消費者を大切にしたい工夫	3 福岡市の野菜作りについて調べ、福岡市の農業生産の概要について話し合う。 (1) 福岡市で作られる野菜の生産の様子について調べる。① (2) 野菜地図を作り、福岡市の農業の特色について考える① ○ 福岡市の農業生産の把握
手だて	※ 松尾さんのキャベツと市販のキャベツの提示 ※ 松尾さんの栽培年表の提示	※ 現地での取材や聞き取り ※ 松尾さんの招聘 ※ 小田部地区の土地利用の図	※ 福岡市の拡大地図の提示 ※ 野菜づくり調べカードの提示

本時の目標

- 松尾さんは3種類のキャベツの生産、時期をずらした定植、葉の固さの面で工夫し、よい品質を守り、消費者のニーズに応えようとする願いや地域への愛着があることをとらえることができる。

準備 教師 松尾さんの栽培暦 松尾さんの寒玉種における栽培暦 小田部地区の土地利用の変化を示す資料

児童 自分の考えを説明する資料

学習指導の過程

活 動 と 内 容

子供の思考の流れ

1 本時学習のめあてについて話し合う。

- 松尾さんの生産の工夫について探るめあての確認
めあて

他のキャベツとは違う松尾さんのキャベツづくりのひみつは何かを話し合おう。

2 松尾さんの生産の工夫について話し合う。

(1) 松尾さんの仕事の様子について話し合う。

- 松尾さんの仕事の事実を把握すること

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
			定	消	収					種	
			植	毒	穫					ま	
										き	

※ 農事暦を提示し、仕事の様子について時期を明らかにして出し合えるようにする。

(2) 松尾さんのキャベツづくりのひみつを話し合う。

- 松尾さんの生産の特徴を明らかにすること

3種類作っていることです。種類が楽しめると思います。

時期をずらしての生産です。いつも新鮮なキャベツです。

点検です。病気が広がらないように抜いたりしています。

葉の固さです。虫が近寄りにくく、消毒が少なく、安全です。

品質 ← 消費者のことを考えて → 時期

3 松尾さんの話を聞く。

- 地域の農法に対する愛着についての聞き取り

どの工夫も小田部で長年やっている作り方です。これからも守っていきたいと思います。

※ 小田部地区の変化を示す資料

- 松尾さんのキャベツづくりのひみつはいったい何なのだろう。
- 見学で見つけたことを発表していくぞ。

○ 他の人はどんなひみつを見つけているのかな。

○ 私も土を見たけれど、中が柔らかい土だった。根が張りやすい土だそうです。

○ 全部で5種類くらい肥料を混ぜているそうぞ。

○ だから大きな葉になるのかな。

○ 私は3種類で4万個くらいを2人で作っているのだから、そうでないと大変でやめてしまうと思います。腰も痛くなると言われていました。

○ わたしは時期を少しずつずらすだと思う。そうすればいつも新しいキャベツができます。

○ 新鮮な野菜を少しずつ出せるのは考えた秘密だな。

○ すべてに共通しているのは、お客さんのことを考えていることだな。松尾さんもそう思っているのかな。

○ 松尾さんに聞いてみたいな。

○ 25年前はこの近くは田や畑なんだね。

○ 松尾さんは、小田部の作り方が自慢なんだな。

○ だからこそ、大変でも3種類のキャベツを作っているんだね。

○ 松尾さんってすごいな。何か応援したくなるな。

○ だれかに知らせたいな。

第4学年1組 体育科学習指導案

指導者 岩 城 一 磨

単 元 リズムダンス・レボリューション21(表現運動 リズムダンス)

指 導 観

- 本単元のねらいは、新しい動きを付加していくリズムダンス創りの活動を通して、軽快なロックやサンバなどのリズムに乗って全身で弾んで楽しく踊れるようになることである。また、本単元の主な内容は、①リズムダンスの基本的な各種のステップなどの技能を楽しみながら身に付けていくこと。②友達との活動による曲の選択や人数を変えたリズムダンスの行い方の比較から、リズムダンスの動きの視点を把握し、自分たちのリズムダンスを創っていくことである。
- 本学級の子供たちは、身近に流れる音楽に強い関心を示し、好きな曲や知っている曲を耳にすると、自然と体のどこかでリズムを取ったり、見たことのある踊りをまねてみたりする子供も多い。それは、リズムに乗って気持ちよく踊る快感を無意識のうちに味わおうとしているからであると考えられる。また、子供たちは第4学年までの音楽科の学習で様々な曲想にふれており、ロックや、サンバ、ラテン系の音楽を素直に受け入れることができる。そこで、本単元は、曲のリズムに乗って自由に創作するリズムダンス創りの楽しさを味わい、即興表現と創造表現を繰り返し、楽しく弾んで踊る活動を行い、運動を愛好し、かかわる子供を育てる上で大変意義深いと考える。
- 本単元の指導にあたっては、イメージした動きを広げ、自分たちのリズムダンスを創らせていきたい。そのためにはまず、みいだす段階では、リズムに乗るための動きの特徴を捉え教材化したリズムダンスに出会い、動きのイメージをもつための即興表現を行う。さらに曲の選択や人数の違いによって表出する動きや表現のし方の違いを比較することで時間的、空間的な動きの視点をもつ。次に、ひろげる段階では、つかんだ動きの視点をもとにリズムダンスを創る表現活動をさせていく。そのためには、①曲のリズムを感じて律動的な動きを発揮する即興表現や②活動の場を工夫し、グループでリズムダンスを創る創造表現を行っていく。最後にあじわう段階では、リズムダンス・レボリューション21を開き、イメージした動きの広がりを実感させていく。

目 標

- 1 リズムダンスの動きの視点を把握し、曲想に合わせ、軽快なリズムに乗って踊る中で、律動的な動きを身に付け、自分たちのリズムダンスを創造することができる。 (創造性・主体性)
- 2 友達と協力し、リズムダンス創りを行うことを通して、曲のリズムに乗って踊ることを楽しみ、リズムダンスの動き、行い方を広げ、積極的に運動を愛好しかかわることができる。 (人間性)

計 画 (約9時間)

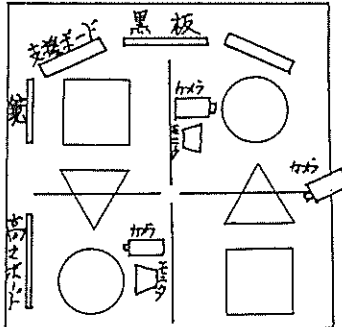
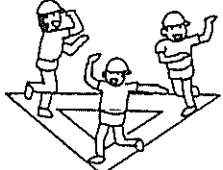
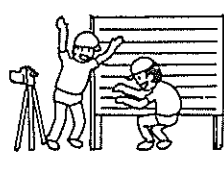
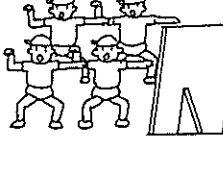
課	第1次みいだす段階(3時間)	第2次ひろげる段階(5時間)	第3次あじわう段階(1時間)
活 動 と 内 容	1 リズムダンスを体験し、ダンス創りを見通す。 (1) 即興表現で楽しむ。① ○ リズムダンスの動きのイメージの把握 (2) 曲・人数などの行い方の比較 ② ○ 時間・空間的視点の把握	2 リズムダンスを創り踊って楽しむ。 (1) いろいろな曲で即興表現を楽しむ ① ○ 即興表現による動きの広がり (2) 活動の場を工夫して創造表現をする③ ○ 創造表現による動きの広がり(本時2/3) (3) リズムダンス・レボリューション21のリハーサルをする。 ① ○ 仕上がった動きの確認・把握	3 リズムダンス・レボリューション21を行い楽しさを実感する。 ① ○ 発表し合い、見通した動きの広がりを実感して評価し運動へのかかわりを更新すること
手 だ て	※ 即興的な動きを体験する活動、動きの視点を取り出し把握する比較活動	※ 動き・行い方を創りかえるために活動の場を自己選択・決定でき、リズムダンス創りができる表現活動	※ 学習を振り返り、自分の広がった動きを見つめる体験的な発表活動

本時の目標

- リズムに乗って踊る動きのイメージを具体化するために、場の工夫を行い、広さ、高さ、隊形などの空間的な動きの視点を自分たちの動きに付加することができる。 (創造性・主体性)
- 友達と楽しくリズムダンスを創り、自分が創った動きの価値を見出すことができる。 (人間性)

準備 支援ボード、学習ノート、テープレコーダー、音楽カセットテープ、ビデオカメラ

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 前時のリズムダンスについて想起し、本時めあてをもつ。 ○ リズムダンスの律動的な動きの想起とめあての把握 ※ 前時を振り返り、本時の課題意識を明確にする。 めあて 広さ、高さ、隊形を工夫し、もっとかっこいいリズムダンスをつくろう。 2 軽快なリズムに乗ってリズムカルに弾んで即興的に踊る楽しさを味わう。 (1) グループで創ったリズムダンスに選択した動きの視点を付加しながら繰り返し創り踊る。 ○ 広さ、高さ、隊形の視点をダンスに付加する創造表現	○ 前の時間は、ロック、サンバ、レゲエ、ヒップホップのリズムに乗る動きの視点をもって踊ったから、今日は、高さ、広さ、隊形を工夫してリズムダンスを創ろう。 [リズムダンスの場の図] 
・フロアのラインを活用した広さの視点の付加 [活動例]  ※ 場にラインを付加したり、ダンスをビデオでとって見たりして広さを意識させる。 ・高さボードとビデオ・モニタを活用した高さの視点の付加 [活動例]  ※ 高さボードの前で踊ったり、ダンスをビデオでとって見たりして高さを意識させる。 ・鏡・ビデオを活用した隊形の視点付加 [活動例]  ※ 鏡の前で踊ったり、高い角度からビデオでとって見たりして隊形を意識させる。	○ 動きは、ステップや上半身の動きを組み合わせよう。 ○ 人数が多いと分かれた動きで踊ることができるぞ。 ○ みんなで同じ動きをしたり違う動きをしたりするとかっこよく踊れるぞ。 ○ 動きの支援ボードを活用すると、今のダンスと比べて動きの視点に合った動きが創れているかわかるぞ。
(2) 創ったリズムダンスを踊り、見合って交流する。 ○ リズムダンスを創り変える新たな動きの視点の把握 ・新たな動きの視点を発見するグループ間交流 ※ 交流の時間を設定し、ダンスを創り変える視点をもたせる。 3 本時学習をまとめ、次回のリズムダンスの予告をする。 ○ 意識がリズムダンス・レボリューション21(発表会)に向かう学習の振り返り ・自分たちのリズムダンス創りのできばえ、工夫 ・リズムダンス創りの感想の発表 ※ モデル演示を交え、達成感が得られるように交流させる。	○ 友達のダンスを見ると隊形の視点を入れて創ると動きが変わることがわかったぞ。 ○ 前のリズムダンスと比べてかっこよくなってきたぞ。 ○ 次の時間は、リズムダンス・レボリューション21に向けてリズムダンスをもっとかっこよく仕上げよう。

第4学年2・3組 音楽科学習指導案

指導者 原 ク ミ

題材 サンバでアミーゴ！われら附小サンバ隊
指導観

- 本題材のねらいは、サンバを特徴づけている要素を感じ取り、自分のリズム伴奏づくりに生かすことで、サンバのリズムの楽しさを味わったり、より楽しいリズム伴奏にするために表現を工夫できるようにしたりすることである。本題材における主な学習内容は、①リズムに合わせて身体表現したり、リズム伴奏をつくったりしてサンバの楽しさを味わうこと②特徴的なリズム、旋律の反復や変化を感じ取ること③リズムパターンの組み合わせ方や重ね方を工夫してリズム伴奏をつくって表現すること④楽器の音色や音の組み合わせに気をつけて聴くことである。
- 本学級の子供たちは、第3学年において、世界の遊び歌を教材とし、みんなが楽しく遊ぶためのリズムうちを自分なりにつくって表現する活動を行っている。その中で、拍を意識したリズムうちや強弱を工夫すれば、みんなで合わせて楽しく遊べることを感じ取っている。また、自分たちの音楽をつくって表現する楽しさを味わい、もっと楽しく遊ぶための表現を工夫しようとする姿も見られた。第4学年においては、日本の祭で用いられる民謡に出合い、その楽しさが太鼓のリズムに表れていることをとらえている。このような子供たちがサンバに出合うことによって、ブラジルのカーニバルのにぎやかさが、サンバの複合リズムに表れていることをとらえることができる。と考える。
- 本題材の指導にあたっては、自分の表したいサンバのイメージを明確にもち、そのイメージを表すために楽曲の特徴を生かしたつくって表現する活動を通して、サンバの楽しさを味わわせていきたい。そのために、各段階において、多文化的にアプローチする次のような活動を設定する。出合う段階では、カーニバルの様子 of VTR、写真、説明資料を見ながらGTが演奏するサンバを聴いたり、日本の民謡と比較して聴いたりする活動。深める段階では、参考曲を聴いて感じ取ったサンバのリズムパターンを組み合わせたり一人一人がリズム伴奏をつくり、それをつなげたり重ねたりしてグループで一つのリズム伴奏をつくる活動。味わう段階では、自分たちがつくった音楽でカーニバルを開き、互いのサンバを聴き合いながら楽しさを十分に味わうことができる活動を設定する。

目 標

- 1 サンバの楽しさを味わうとともに、サンバがブラジルの人々にとってなくてはならない音楽であることをとらえ、音楽活動をより深く楽しもうとすることができる。(人間性)
- 2 自分の表したいサンバのイメージをもち、感じ取った特徴的なリズムを組み合わせたり重ねたりしてサンバのリズム伴奏をつくって表現することができる。(創造性・主体性)

計 画 (約6時間)

階	で あ う (1時間)	ふ か め る (4時間)	あじわう (1時間)
活動と内容	1 楽曲とそれにかかわっている文化的な要素に出合い、自分の表したいイメージを吟味する。 ○ サンバの楽しさを感じ、表現意欲をもつこと ○ 特徴的なサンバのリズムをとらえ、自分が表したいイメージをもつこと	2 サンバの特徴的なリズムを用いて、「おどれサンバ」のリズム伴奏をつくって表現する。 (1) 「おどれサンバ」のリズム伴奏をつくる。 ② ○ リズムパターンを組み合わせたり重ねたりしてリズム伴奏をつくって表現すること (2) つくったリズム伴奏を見なおす。 本時 ① ○ 組み合わせ方や重ね方を工夫して表現すること (3) 自分たちのサンバを完成させる。 ① ○ 表現要素の工夫や音色の工夫をして演奏すること	3 「サンバでアミーゴ！カーニバル」を開く。 ○ サンバの楽しさを味わい、カーニバルで用いられるサンバの文化的な価値をとらえること
手だて	※ GTによる楽曲の演奏とサンバについてのお話 ※ カーニバルの写真、VTR、説明資料の提示	※ 拡大楽譜の提示とリズムパターンカードの提示 ※ 工夫する観点をもつためのモデルの比較 ※ 自分たちのつくった音楽を確かめる録音コーナーの設定 ※ 他の文化とのかかわりをとらえるための場の設定	※ カーニバルの場の設定 ※ GTからの肯定的な評価

本時の目標

- 1 自分たちの表したいサンバのイメージをもとに、リズム伴奏の重ね方を工夫し、よりよくなっている自分たちのリズム伴奏に満足感を味わうことができる。(人間性)
- 2 教材曲とつくったリズム伴奏の比較によって、自分たちのリズム伴奏の重ね方を見なおす観点(一斉に・ずらして・部分的に)をもち、意欲的に表現を工夫しようとすることができる。(創造性・主体性)

準 備 拡大楽譜 学習の流れ図 サンバに使われるリズムと楽器図 工夫する観点のカード
グループ活動のためのヒントボード グループ毎のサンバボード 学習の場の設定図

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 これまでにに出合った鑑賞曲と自分たちのリズム伴奏を聴き比べて、本時学習のめあてを話し合う。 ○ リズムの重ね方を工夫する観点をもつこと ※ 「ブラジル」や「ティコティコ」と自分たちのリズム伴奏を比べることができる場の設定をし、自分たちに足りないことは何かを考えさせる。 ※ 演奏や踊りなどを提示してくださるG Tを招聘する。 めあて リズムの重ね方を工夫して、自分たちのイメージにあったサンバにしよう。 2 グループの友達とリズムの重ね方を工夫して表現する。 (1) 自分たちのつくったリズム伴奏の重ね方を工夫する。 ○ 一人一人がつくったリズム伴奏を一斉にしたり、ずらしたり部分的にしたりして、重ね方を工夫して表現すること ※ グループ活動における支援ボードを提示し、活用を促す。	○ 私がつくりたいサンバはカーニバルなどで踊るときに使うサンバだよ。 ○ 「ブラジル」を聴くと、何だか踊り出したくなるけど、私たちのもそうっているのかな。聴いている人たちがとても楽しくなるようなサンバがつくりたい。 ○ 聴き比べてみると、「ブラジル」がとても楽しい感じだ。どうしてかな。 ○ リズムがたくさんあって一緒にしたり、ずらしていたりするからだな。私たちもやってみりたいな。
【予想される活動と思考】 踊るためのサンバ とにかくにぎやかにしよう。一つ一つのリズムの音がしっかりきこえることが大事でしたね。 歌が始まる前の伴奏はどうする？ リズムの入る順番をずらしてみよう できたら、録音して聴いてみよう 音をはっきりしないところはないかな 「ブラジル」を聴くと、旋律が始まるまでににぎやかなリズム伴奏があったな。そうしよう。 「ティコティコ」では、ある部分だけリズム打ちしていた楽器があったね。カウベルでそうしてみよう。 私たちが表したいカーニバルのイメージは人がたくさん集まっているものだから、どんどん人が集まってくる感じを出すために演奏する人数を増やしたい。	【予想される活動の結果】  前奏がなかったから入れよう。2回目から2人になるといいね。 にぎやかな様子を表したいからここは、4人でやろう。
(2) つくりなおしたリズム伴奏を発表する。 ○ リズムの重ね方が変わると曲の感じが変わることをとらえ自分たちのリズムの重ね方のよさを感じ取ること ※ 本時学習の前のリズム伴奏を録音したテープを聴いて比べる活動を設定する。 3 本時学習の感想を出し合う。 ○ 本時学習での自分の活動のよさを味わい、次時の活動への意欲をもつこと ※ 感想を伝え合う場を設定する。	○ ～グループも私たちと一緒に重ね方を変えたんだね。今の方がカーニバルで踊っている感じがするよ。 ○ みんないろいろなリズムをつくっていて、同じサンバでも違う感じになるね。 ○ ブラジルの人たちが踊っているのが想像できます。

第5学年1・3組 家庭科学習指導案

指導者 木 村 真 美

題 材 家族を喜ばせるものをつくろう ～私のこだわりモーニング～

指 導 観

- 本題材は、家族のために朝食を作ることを通して、栄養的にバランスのとれた調和のよい食事のとり方が分かり、卵と野菜のサラダを作ることができるようにするとともに、主体的に家族に協力しようとする態度を育てることがねらいである。具体的には、①調和のよい朝食のとり方を考えて、パンの副食として卵と野菜を組み合わせた調理の計画を立てること、②卵をゆでたり野菜を切ったりして簡単な調理ができること、③家族のために朝食を作ることは家族の生活を支える仕事であることに気づき、家族の一員としての存在を実感できることである。
- 本学級の子供たちは、家庭科の調理に対する関心が高い。しかし、実際には家庭の食生活に関する仕事を家族からしてもらっていることが多い。自分が分担して実行できる仕事があることに気づかず、仕事をしてもらっている意識で終わってしまっている。家族を楽しませたり家族の健康を考えたりして調理することや自分なりの方法や手順で調理することに気づいている子供は少ない。また、調理をした経験はあっても、食品に合った洗い方や目的に合った切り方ができることに気づいていない。そこで、食事への認識を深め、家族の一員としての自覚を高めたい。
- 本題材の指導にあたっては、つかむ段階では、自分の食生活を振り返り、家族を喜ばせるために家族の好みやこだわりを考えた野菜サラダ作りの計画を立てることから個人課題をつかむ。そして、野菜サラダを家族のために作るのに解決しなければならない個人課題を整理する中で、類似している課題を共通課題として設定する。さぐる段階では、共通課題をみんなで解決・達成していくための野菜サラダ作りの調理実習を行い、解決できた課題と解決できていない課題を整理していく。つくる段階では、獲得した技能を使って自分が考えた野菜サラダを完成させる調理実習を行うことで家族への思いを込めた朝食作りへの自信を高め、家庭で実践ができるようにしていく。

目 標

- 1 朝食を作ることに関心をもって取り組み、材料の洗い方、切り方、盛り付け方、片づけの仕方が分かり、調理のよさや作る楽しさ、食べる喜びを味わうことができる。 (創造性)
- 2 自分の食事調べを通して、調和のよい食事をとることに関心をもち、栄養のバランスや家族の好みなどを考えたサラダ作りを工夫することができる。 (主体性・人間性)

計 画 (約10時間)

段階	第1次つかむ段階 (3時間)	第2次さぐる段階 (4時間)	第3次つくる段階 (3時間)
活動内容	1 自分の家庭生活・食生活を振り返り、家庭生活に参画しよりよくしていく方法をさがす。 (1) よりよい食生活にする方法を見つける。 ① ○ 家族のために健康を考えた食事を作ること (2) 自分で野菜サラダを作れるようになるための調理計画をつくり、個人課題をつかむ。 ① ○ サラダ作りの活動への見通しをもつこと (3) 個人課題を話し合い、共通課題を決める。 ① ○ 包丁の使い方をすること ○ 切り方を考えること	2 共通課題を解決するための試し作りを行い、個人課題を見直す。 (1) やってみたい切り方を考えて、野菜サラダを作る。 (本時2/3) ③ ○ 包丁を安全に使えること ○ 形や大きさを整えること ○ 目的に合った切り方ができること (2) できるようになったこととできないことを整理し、個人課題解決のための計画を立てる。 ① ○ ゆで方を調べること ○ 手順を考えた調理の計画を立てること ○ 家族の好みや考えた盛り付けを考えること	3 個人課題を追究するための調理を行い、家庭実践の計画を立てる。 (1) 卵と野菜のサラダを作る。 ② ○ 家族の好みやこだわりを考えた調理をすること (2) 卵と野菜のサラダの改善レシピを作り、家庭実践のための計画を立てる。 ① ○ 家族のために、休日の朝食を作る計画を立てること
手だて	※ 食事調べの場の設定 ※ サラダの見本の展示 ※ サラダ作りの実演	※ サラダ作りの課題を記入したレシピの作成 ※ 課題別グループ学習の設定	※ 家族からの聞き取り調査の実施 ※ 家族からのメッセージ

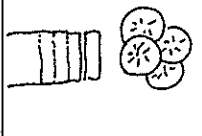
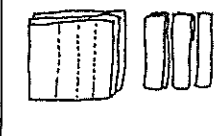
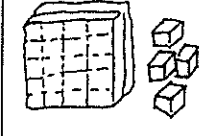
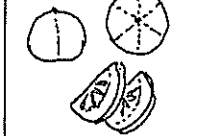
本時の目標

- 1 共通課題に取り組むことを通して、自分が考えた野菜サラダを作るために必要な洗い方、切り方、盛り付け方を工夫した試しの調理をすることができる。
- 2 切り方を考えた野菜サラダ作りを通して、調理することに自信をもち、家族のため自分ができる食事を作っていきたいという意欲をもつことができる。

準 備 児童…作りたいサラダや課題が入っているレシピ、エプロン、帽子

教師…調理に必要な野菜、ゆで卵、調理に必要な用具、ふきん、台ふき、資料

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 自分の作りたいサラダが作れるようになるための共通課題について話し合う。 ○ 前時学習を想起し、本時のめあてを把握すること ※ サラダ作りのレシピを見て、野菜をどんなことに気をつけて洗ったり切ったり盛り付けたりするのかを考えさせる。 めあて 共通課題とした洗い方、切り方、盛り付け方を工夫して、サラダをつくろう。 2 野菜の洗い方、切り方、盛り付け方を考えながら、卵と野菜のサラダの試し作りをする。 (1) 調理に必要な用具の準備をし、野菜を洗う。 ○ 流し洗いができること (2) 野菜の切り方を考えて、形や大きさを整えて切る。 ○ 目的に合った切り方ができること 〈予想される児童の考え〉 輪切り  短冊切り  さいの目切り  くし切り  ※ 同じ切り方の小グループで活動できるようにし、相互評価できるようにする。 ※ 包丁の使い方や野菜の切り方の資料を掲示しておく。 (3) ゆで卵と野菜を盛り付けて、サラダを完成する。 ○ 1人分ずつの盛り付け方が分かること ※ 野菜の切り方に焦点化できるように、卵はゆでたものを用意する。 3 本時学習でできるようになったことや次に解決すべきことをレシピをもとに話し合う。 ○ 本時学習をまとめ、次時の見通しをもつこと ※ レシピにまとめていた課題を見直し、できるようになったこととできないことを整理させる。	○ 野菜サラダが作れるようになるためには、野菜に合った洗い方や目的に合った切り方がある。 ○ 野菜はビタミンが水に流れやすいから、ビタミンが流れないように、手早く流し洗いするようにしよう。 ○ あまり包丁で切ったことがないから、包丁の使い方がうまくなるように輪切りで練習をしよう。 ○ 輪切りに切っても斜めに切れてしまうから、包丁を直角におろすことに気をつけて切ろう。 ○ いつも同じ大きさに切れていないから、同じ大きさになるように気をつけて切ろう。 ○ 食べやすいように一口サイズにするには、さいころ切りにしよう。 ○ 食べたくるように野菜の緑、赤と卵の黄色を色どりよく盛り付けよう。 ○ 輪切りの仕方が分かったから、今度は千切りの仕方や卵のゆで方に挑戦してみよう。

第5学年2組 図画工作科学学習指導案

指導者 北 田 尚 雄

題 材 名 アルミとチューブのファクトリー（造形遊び）

指 導 観

- 本題材は、アルミと透明ビニールチューブ2つの材料のよさをつかみ、そのよさを生かしながら形づくり、空間を構成したり周りの環境との調和を考えて表現したりすることをねらいとしている。主な学習内容は、①アルミやビニールチューブのよさを多面的、比較的に捉え、そのよさから表現内容や表現方法を発想し、自分の求めに応じて、試しながら新しい表現方法を生み出していくこと②材料のよさから自らの求めをもち、よさを生かしながら楽しく表現していくこと、③アルミやビニールチューブの造形的なよさや楽しさおもしろさ、また表現のよさなどに関心をもち、新たな見方、感じ方ができるようになることを高めていくことができる。
- 本学級の子供たちは、これまでに木の枝などをつかった造形遊びを経験している。そこでは、思い思いに切ったり、つないだりできる独自性や組んだり巻き付けたりできる構造的性を生かしながら分解・再構成することで、新しいものを生み出してきている。そのような活動から子供たちは、材料の特徴をもとに発想したり、空間を構成していくよさに興味・関心をもち想像力を発揮しながら、多様な表現をしていく姿が見られる。このような前学年までに培った、材料などから発想し、体全体をつかった表現や、材料の分解・再構成から新しい表現方法を総合的に生かしていけるような造形遊びをしていくことは、高学年図画工作科の資質・能力を育てる上で価値がある。
- 本題材の指導にあたっては、材料や環境とのよさを生かす3段階の活動で構成する。材料のよさを生かす段階では、アルミやチューブの材料の独自性を捉えさせたい。そこで、材料操作活動をさせ、材料のよさをつかむようにする。材料を組み合わせ形を構成するよさを生かす段階では、新たな表現方法、表現内容を発想させたい。そこで、材料の構造的性から発想・表現したことについて友達と交流し、自分の表現内容・方法について考えさせる。環境との調和のよさを生かす段階では、光や風と作品の組み合わせによる表現から、新たな表現方法や表現内容を自己吟味・自己追究しながら表現を高めることで達成感や効力感を感じさせ、創造の喜びを味わわせていきたい。

目 標

- 1 アルミやビニールチューブに関心をもち、その材料のよさに気づき、発想した自分の求めに応じて、これまで培った技能や新しく考えた方法を試しながら表現することができる。（創造性・主体性）
- 2 アルミやチューブのよさから自分の求めに応じて形を創り出す喜びを味わうことができる。（人間性）

計 画（約8時間）

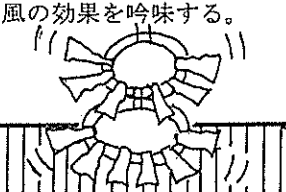
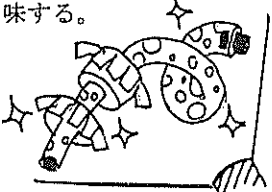
段階	材料そのもののよさを生かす段階（2時間）	材料を組み合わせ空間構成していくよさを生かす段階（3時間）	環境による動きや変化のよさを生かす段階（3時間）
活動と内容	1 アルミとビニールチューブの材料操作をして遊ぶ。 (1) 材料のよさを考えながら材料操作する。① ○ 材料の特徴に関心をもつこと (2) 材料操作の方法やできた形について話し合い、新たな方法や内容を考える。① ○ 形や方法から発想すること	2 2つの材料を組み合わせ形を構成する。 (1) 2つの材料を自分なりの方法で組み合わせ形づくり。② ○ よさを生かして表現すること (2) 作品の題名などについて、友達のよさを参考にしながら新たな方法を考える。① ○ 形や作品の特徴から構想すること	3 光や風をあてたよさを生かしながら表現する。 (1) 光や風をあて、そのよさを生かして表現する。②(本時1/2) ○ 材料と環境の調和を考えて表現していくこと (2) 作品のよさが生きる展示方法を吟味し作品発表会をする。① ○ 作品のよさに気づくこと
手だて	※ アルミやビニールの操作方法などの技能的ヒント提示 ※ 材料の特徴や操作方法について、学習カードの記入提案	※ 材料を組み合わせる方法のヒント資料の提示 ※ 2つの材料を組み合わせ構成したり、彩色したりする用具提供	※ 光や風を加えたよさをつかむための場の設定 ※ 作品のよさを生かした展示方法のヒント提示

本時の目標

- アルミやビニールチューブに光や風をあてたときのよさから発想し、作品と環境の調和を考えて作品のよさが生かされるような付加表現、展示表現を工夫し自分の求めを表現することができる。

準 備 アルミ板・缶、透明ビニールチューブ、スポットライト、展示スペース、OHP

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 前時までの活動を想起し、本時のめあてについて話し合う。 (1) 自分の求めから新たな表現方法について話し合う。 ○ 材料のよさから発想し、環境を生かす見通しをもつこと ※ 作品に光や風をあててみるモデル演示をし、そのときの動きや変化のよさをつかませる。 (2) 本時のめあてについて話し合う。 めあて 光や風などをあてたときのよさを生かして、もっとすてきな作品に仕上げていこう。	○ 前の時間は、2つの材料を色々な方法で組み合わせていくと、すてきなお花畑ができたわ。 ○ 光を当てると、お花がきらきら輝いて、まるで、宇宙にさく未来の花みたい。 ○ 光や風をつかって、もっとおもしろい作品をつくってみたいな。
2 作品に光や風をあてながら、自分の求めに応じて、展示方法を考えたり、付加表現をしたりする。 (1) 作品に、光や風を当てたときの動きや変化から、新たな表現内容を考え、それに応じて表現方法を考える。 ○ 環境による動きや変化の様子から発想すること ※ 参考作品に暗室の中でスポットライトの光をあて、その美しさから活動意欲を喚起させる。	○ 光を当てると、宇宙に浮かぶ未来の宇宙ステーションという感じがでてきたよ。 ○ 風でゆらゆら動くから、深海にすむ不思議な生き物みたいな感じがするよ。 ○ 光をあててみながら、表現していきたいな。
光や風をあてたときの予想される子供の反応 ・暗室で、作品にスポットライトをあててその効果を吟味する。  ・屋上のベランダに作品をつるして展示し、光や風の効果を吟味する。  ・ビニールチューブに水を入れて、光の効果を吟味する。  ・作品全体に水をかけて光をあてたときの効果を吟味する。 	
(2) 光や風の効果をもとに発想した自分の求めにしたがって、展示表現したり、付加表現したりする。 ○ 表現内容に合わせ、新たな表現方法を考え表現すること ※ 屋上ベランダや暗室で多様な展示から、環境の効果を生かせるような場の設定をし、試しながら吟味させる 3 光や風を加えたときの動きや変化から思いついた表現内容や表現方法について意見交流し、次時の課題を考える。 ○ 作品と環境の調和や変化から意味づけしていくこと ※ 前時までの作品と、本時の作品を視覚的に比較させ、表現内容の変化や、新たに考えた表現方法について話し合わせる。	○ すずらんテープを切り裂いて、風でよくなびくように飾り付けしよう。 ○ アルミをくしゃくしゃにして、凹凸をたくさんつくと、もっと光が美しく反射するぞ。 ○ ただの花だったけど、光をあてると、大空に浮かぶ未来の花に見えてきた。

第6学年1組 理科学習指導案

指導者 野 口 信 介

単 元 進む地下水汚染！・・・福岡の水は大丈夫？(私達の生活と水に溶けたものの行方Ⅱ)
指 導 観

○ 本単元は、私達が住む福岡県の環境問題（水質汚染）を起点に学習を構成していくことで、身の回りの水溶液の性質や働きを積極的に調べ、水溶液の性質に対する多面的な見方や考え方をもつと共に、自然と自分とのよりよいかかわり方を考えていく態度を育むことをねらいとしている。ここでの主な学習内容は、①身の回りの水溶液には、酸性、アルカリ性及び中性のものがあること、②水溶液には気体が溶けているものがあること、③水溶液には金属を変化させるものがあること、などである。このような水溶液の性質を身の回りの生活事象と関係づけて捉えていくことは、自然と共に生きる生活者としての自分のあり方を考える上で意義あるものと考えらる。

○ 本学級の子供たちは、5年生単元「私達の生活と水に溶けたものの行方」の中で、水に溶けたものは全て水溶液の中に含まれているという、物質保存の原理についての見方や考え方を身につけてきている。また、自分たちが捨てている水溶液が身の回りの環境に何らかの影響を与えることにつながっているという意識も高まってきている。しかし、現段階の子供たちの水溶液に対する捉え方は、ものが溶けているという視点での見方や考え方であり、溶けるものによって様々な性質の違いがあることや水溶液が身の回りのものの性質を変化させることがあるといった、質変化という視点での見方や考え方は十分にはできていない。

○ 本単元の指導にあたっては、5年生で捉えた水溶液のきまりに、水溶液の性質の違いや水溶液がものを変化させるといった見方や考え方を付加しながら、現在社会問題になっている地下水汚染について考え、これからの自分たちの生活のあり方について意思決定させていきたい。

そこで、「見出す」段階では、5年生の学習で使った地球モデルにたまった水が、普通の水とどう違うのかについて話し合い、水溶液の性質の違いという視点での追究問題を設定していく。「調べる段階」では、身の回りの洗剤等に表示されている酸性、アルカリ性及び中性といった表示をもとに身の回りの水溶液がこのような3つの性質で分類できることを調べ、それらの性質をもった水溶液が金属を変化させることがあることを調べていくことで、水溶液が与える影響についての考えを深める。そして、それらが地中を通ってもそのような性質をもったままであることを捉えさせていく。

「見直す段階」では、身の回りの川等の水質調査を行うことで、身近な環境の状況とこれからの自分の生活と関係づけながら自分のあり方について考えていく。

目 標

- 1 水溶液の性質や働きを、生活場面と関係づけながら科学的に追究することができる。(主観・観測)
- 2 水溶液の性質と環境の変化を関係づけながら、自分の生活を見直すことができる。(人間性)

計 画 (約12時間)

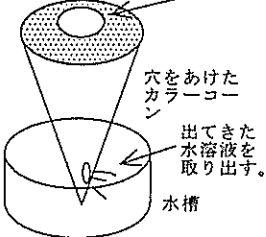
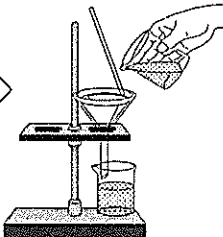
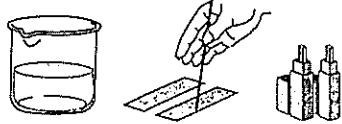
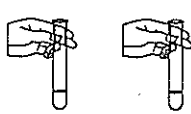
階	第1次 見出す (2時間)	第2次 調べる (7時間)	第3次 見直す (3時間)
活動と内容	1 地球モデルに含まれる水について話し合い、水溶液の性質についての追究問題を設定する。 ○ ものが溶けている水溶液の性質に対する気づき ○ 環境問題に対する意識の高揚	2 身の回りの水溶液の性質について調べる。 ② ○ 水溶液の3つの性質の理解 3 水溶液が与える影響について調べる。 ⑤(本時5/5) ○ 物質の質変化に対する理解	4 身の回りの川等の水質の現状について調べ、これからの自分たちの生活について話し合う。 ○ 水溶液の性質を調べる方法の適用 ○ 環境に対する認識の高まり
手だて	※ 地球モデルを用いた話し合い ※ 身近な洗剤等に表示されている、酸性等の用語の紹介	※ 生活場面と関係づけるための地中モデル等のモデル実験 ※ 実験方法に対する助言	※ 現在問題となっている水質汚染に関する資料の提示 ※ 家庭での調査活動の促し

本時の目標

- 1 水溶液の性質が地面を通して地下水に含まれたときも変わらないことを，現実場面を意識したモデル実験によって調べることができる。(主体性・創造性)
- 2 水溶液の性質が地中の中でも残っていることから，自分たちが捨てているものが地下水に含まれているという現実をとらえ，自分の行いを振り返ることができる。(人間性)

準備 5年生学習の流れ図，前時までの流れ図，身の回りの水溶液，リトマス試験紙，カラーコーンを利用した地中モデル，ホース，濾過器具，ビーカー，攪拌棒，試験管，紫キャベツ液

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1 前時の学習を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 水溶液には，酸性，アルカリ性及び中性があること ○ 地中にしみ込んでいった水溶液の性質を調べること めあて 土を通してしみ出てきた水の中にも水溶液の性質が残っているか調べて，私たちが捨てているものや水溶液がどうなっているのか話し合おう。 2 カラーコーンを用いた地中モデルを使って，地中を通った水溶液の性質について調べる。 (1) 5年生の時の実験をもとに，実験方法について話し合う。 ○ 地中を通ることを想定した実験方法の検討 ○ 酸性やアルカリ性及び中性を調べるための方法の選定 ※ 5年生の時の水溶液の学習を表した流れ図を掲示しておく (2) 自分たちの見通しにそって実験を行い，考えを確かめる。 ○ 目的にあった実験道具を正しく操作すること ○ 水溶液のもつ性質を確かめること	○ 水溶液には，酸性，アルカリ性，中性などの性質があるけれど，地面を通ってもその性質は変わらないのかな。 ○ 5年生の時に土の中を通っても物はなくならないことを調べたから，水溶液の性質も変わらないんじゃないかな。 ○ このことを調べるためには，地中モデルを使うといいよ。 ○ 水溶液の性質は，リトマス試験紙か紫キャベツ液を使うといいね。
予想される実験方法 《水をかける》 土の上に洗剤等を流す  《カラーコーンからでてきた水溶液を濾過して土を取り除く》  ① 出てきた水溶液をリトマス試験紙で調べる。  ② 出てきた水溶液を，紫キャベツ液で調べる。 	
(3) 出てきた結果についてグループで話し合い，自分の考えをまとめる。 ○ 地中を通っても水溶液の性質が残っていることの理解 ○ 自分たちが捨てたものがなくなっていないことの実感 3 実験結果から考えたことについて話し合う。 ○ 水溶液中に含まれるものがなくなっていないことと，その性質もなくなっていないことから自分の生活を見直すこと ※ 5年生の時に学習した物質保存の考え方と本時学習を重ね合わせながら考えさせていく。	○ 土を通して出てきた水溶液の性質は，土を通る前と変わらないよ。 ○ 僕たちが捨てたものは土を通っても無くならないし性質も残るから，簡単には捨てられないよ。 ○ 各々の性質によってどんな影響があるか調べたいな。

第6学年2・3組 道徳学習指導案

指導者 石 硯 昭 雄

主 題 名 学校をわたしたちの手で 【高4－(1)】

指 導 観

- 本学級の子供たちは、4月以来、最上級生として全校のみんなの願いに応じた附属小学校を自分たちの手でつくっていきたいという願いを高めてきている。学級活動やあらつ学習において、卒業生が残してくれた本校に対する思いや願いを受け継いだり下級生が6年生に託す願いを聞いたりして、自分たちの手で学校づくりを行う上での目標を定め、実践を進めるなかで自分への自信を深める姿も見られるようになった。しかし一方では、委員会活動の問題点が解決困難であったり周囲の人間関係の問題をうまく解決できなかったりするために役割意識が十分に高まらず、活動の喜びを十分に味わえなかったり責任感を高められずにいたりする課題ももっている。
- 本主題のねらいは子供が、よりよい学校をつくるためには自分自身が最上級生として果たすべき役割をしっかりと考えることや責任をもって取り組むことが大切であることに気づき、自分たちの学校づくりに向けて積極的に取り組む態度や意欲を高めていくことである。具体的な体験を振り返らせることで、学校への愛着や下級生への思いやり、活動の成果への喜びが自分の役割意識を支えていることに気づかせ、集団の中で役割を受け持つことや、協力して責任を果たすことでもたらされる自分自身の成長の大切さを感じさせていく。このことを通して、よりよい学校生活をつくるために積極的に取り組むことができる実践力を培っていききたい。
- 本主題の指導にあたっては、あらつ学習单元「始めよう！附小IT革命」や学級活動「委員会をわたしたちの手で」の追究と道徳の学習とを連動させた体験深化型の道徳学習を計画する。あらつ学習や学級活動の追究段階に合わせて道徳の時間を設定し、委員会や児童会活動の積極的に参画する上で自分の責任を果たしながらよりよい学校をつくっていくためにどのような見方・考え方・感じ方・行い方が必要なのか考えさせていく。このような学習を通して、学校のなかでの自分の役割や責任を自覚し、学校づくりに積極的に取り組む自分を吟味していくことができるようにする。

目 標

- 最上級生としての自分の役割を自覚し責任を果たすことが、みんなで協力しながらよりよい学校づくりを進めていくことのよさや喜びにつながることを理解し、実践意欲を高めることができる。

計 画 (あらつ学習 約21時間、学級活動2時間と道徳1時間の連動)

道徳	活動と内容	体験中に感じた複数価値の関連を生かして資料中の人物への助言を話し合い、最上級生として自分の役割を考え、責任を果たす行動をすることの大切さを自覚する。
	てだて	資料「飼育委員長のなやみ」の活用、見つめシールの活用、卒業生の話（VTR）

あらつ学習	目的をもつ（4時間）			追究する（13時間）			実践する（4時間）		
	学習活動	1	学校づくりで必要なことを話し合い、下級生の願いを調査する。 ☆学活「委員会を私たちの手で」	2	学校をよくするための校内LANの活用を話し合い、ネットワークづくりを行う。 ○情報機器の活用と操作の習得 ☆学活「委員会を私たちの手で」 ○学校づくりの視点に立った振り返り	3	校内ネットワークを児童集会で紹介し活用する。 ○活用の日常化への意識化	支援	※卒業生の思いの紹介 ※学活との連動

本時の目標

- あらつ学習や学級活動での体験を根拠に主人公明子の心情に共感し、集団の中での自己の役割を考え、最上級生として自らの責任を果たそうとする意欲を高めることができる。

準備 資料「飼育委員長のなやみ」（自作） 見つめシール 卒業生の話（VTR）

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 あらつや学活の追究を想起し、めあてについて話し合う。 (1) 学校を自分たちの手でよりよく運営していくために話し合い、活動してきたことを想起する。 ○ 実践課題の想起と現在のありのままの姿の確認 ※ これまでの問題をどう改善しようとしたのか発表させ、活動の中で実際に責任を果たしているのか考えさせる。 (2) 責任や役割を果たす難しさを確かめ、めあてを話し合う。 ○ 実践を阻害している原因の把握と価値への方向付け めあて 最上級生として自分の責任を果たす上で、大切な心は何か話し合おう。 2 資料「飼育委員長のなやみ」を読み、飼育委員長としての責任に悩む明子の心情を話し合う。 (1) 明子の置かれている立場や状況、悩みの原因について体験をもとに話し合う。 ○ 共感的推しはかりによる主人公の立場・状況の把握 (2) 明子へのアドバイスを、体験を根拠にして表現し、話し合い、自分の役割意識を支えたものが何だったのか考える。 飼育委員長 明子さんへ 委員長を続けてください。なぜなら・・・ 同じような体験が 自分がこの立場なら 最上級生として役割を果たすことには喜びがあるのだから！ 下級生に喜んでもらえる喜びがあるから 自分の努力で学校がよくなる喜びがあるから 友達と協力してやり遂げる喜びがあるから 自分なりに考え、工夫する喜びがあるから ○ 役割意識を支えた関連価値の存在と関係性の把握 ※ あらつ学習や学級活動、日常の委員会活動の体験を根拠に観点シールを用いながらアドバイスをつくらせる。 3 自分の見方・考え方の変容について話し合う。 ○ 自分の役割を知り責任を果たす大切さを見直す自己吟味 ※ 卒業生が葛藤を克服した体験をビデオで提示し、更に取り入れたい見方・考え方を話し合わせ価値の深まりを促す。 4 あらつ学習の追究や日常生活への発展について話し合う。 ○ 獲得した見方・考え方による自己更新 ※ 学校づくり・自分づくりへの意欲を発表させる。	○ 去年の6年生の思いを引き継ぎ、もっとよい学校をつくりたいと考え取り組んできたよ。 ○ でも□□委員会の仕事の中で、同じ6年生でも協力していない友達もいて、みんなの心が一つにならないことが問題だ。 ○ どんな心をもてたら責任を果たせるのだろう。 ○ 私も明子さんと同じように、自信もついたけど、自分だけががんばっているようで、重苦しく感じることもあるよ。 ○ 明子さんが悩んでいるのは自分の自由な時間がなくなり、責任が重くなってしまうからだけだろうか。 ○ そうではなく、みんなが同じように役割や責任を知り協力してくれないからではないか。 ○ 自分の責任や役割を果たすことは学校をよくすることや友達を大切にすることにもつながっているね。 ○ ぼくも自分の力で今よりももっと附属小をよくしたい。そして、最上級生としての自分自身をもっと高めていきたい。

第3・4学年さくら組 算数科学習指導案

指導者 塩 田 利 彦

題 材 すうパズルをして、かみしばいをつくらう

指 導 観

- 本学級の子供たちは、精神年齢3歳から5歳程度の3年生3名、4年生3名の計6名である。子供たちの数える活動の実態は、①ものとことば（数詞）を1つずつ対応させて数える、②既に数えたものとまだ数えていないものをきちんと区別できる、③常に同じ順序で数詞を唱え、ある数の次には決まって別の数がかかることを理解する、④あるものの集合を数えた場合に最後に言った数がその集合の大きさを示す数としてとらえることができる。しかし、数唱できる数の範囲やまとまりでとらえて順序よく並べたり、数えたりすること等について個人差が大きく見られる。
- 本題材のねらいは、お話の国の紙芝居が壊されて元に戻すというストーリー性をもたせた製作活動を通して、数の示す位置を決めたり、順番に敷き詰めたりしながら、個に応じた数の系列を理解することである。具体的には、①隣り合う数の大小を意識し順序づけて考えること、②具体物・数図・数字という抽象化された表現を通して数をまとまりでとらえて数えること、③増え方のきまりに気づき、数を順序よく並べることが主な学習内容である。このような学習は、子供たちが、たし算（数え足し）・ひき算（数え引き）の基礎となる数唱についての能力を身につけるとともに、生活の中で数を活用し計算することができるようになることから意義深い。
- 本題材の指導にあたっては、数パズルのパーツに示した数を手がかりに、各パズルで敷き詰める操作を意欲的に繰り返し、毎時間1つの紙芝居を作ることができるようにしたい。そのために、であう段階では、紙芝居を元に戻すというストーリーとの出会いの中で、1セットの紙芝居づくりを既習の数を使った数パズルで試みることで、順序よく並べる意識と作り方の見通しをもつことができるようにする。つくる段階では、絵や図で表現された数パズル、数の範囲を広げた数パズル、複雑になった数パズルを各時間ごとにさせることで、数の大小をとらえ、順序よく並べることができるようにする。いかす段階は、いろいろな紙芝居の作り方を振り返り、紙芝居の発表をすることで成就感を味わうようにする。

目 標

- 1 進んで数パズルに取り組み、数の大きさをとらえ順序よく並べて紙芝居をつくることができる。
- 2 数パズルのパーツに示す数を、数の集まりや大きさと順番や位置でとらえ理解することができる。

計 画（約5時間）

時 間	であう（1時間）	つ く る（3時間）	いかす（1時間）
活 動 内 容	1 紙芝居を楽しみながら、活動の見通しをもつ。 ○ ストーリー性をつかむこと ○ 数パズルの作り方と活動の流れを試しの活動でつかむこと	2 数パズルをして、各時間一話の紙芝居をつくる。 (1) 絵や図で表現された数パズルをする。 ○ 数をまとまりでとらえること ○ 数相互の大小関係で並べられること ○ 数の線や絵で数の順序を評価すること ○ 数の範囲 A：1～5・絵 B：1～10・絵・図 C：1～20・図 (2) 数の範囲を広げた数パズルをする。 (本時) ○ 抽象化した図や数字でまとまりをとらえ並べること ○ 絵で数の順序を評価すること ○ 数の範囲 A：1～10・図 B：1～20・数字 C：1～100・数字 (3) 複雑になった数パズルをする。 ○ 数字でまとまりや大きさをとらえ並べること ○ 数の線・数の表と絵合わせて評価すること ○ 数の範囲 A：1～10・数字 B：1～20・数字 C：1～100・数字	3 紙芝居をもとに数の順序について振り返り、紙芝居の発表をする。 ○ 順序よく並べると決まり通り増えることに気づくこと ○ ストーリー性の目的達成の成就感を味わうこと
手 だ て	※ ストーリー性のある紙芝居の提示 ※ コーナーを回る動的設定	※ 流れ図・VTRで活動の想起 ※ 紙芝居づくりにおける数パズルの工夫（具体物・絵図・数字の段階的な設定、数系列の正しさの評価設定） ※ 個に応じた支援（数の線・数の表などの補助具、数字積み木、前時への振り返り、数パズルの展示）	※ 順序に対する気づきへ賞賛 ※ 各自の展示コーナーの設定

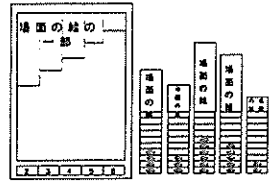
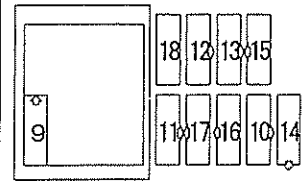
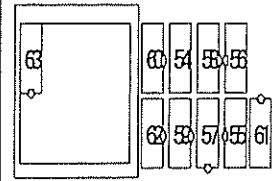
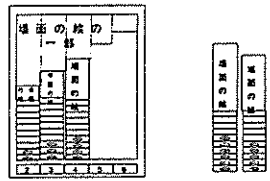
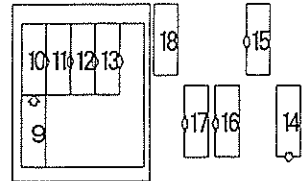
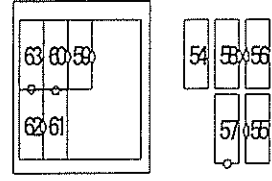
本時の目標

- 敷き詰め活動を振り返り、紙芝居を元に戻したいという思いをもち、数の大小を意識し順序よく正しく並べて数パズルをすることができる。
- 数パズルに示した数を、範囲が広がって絵図から数字に変わっても、順序や位置でとらえ理解することができる。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
・ 1 から 10 までの図で表した数を まとまりでとらえ、大小を意識し て小さい順に順序よく並べる。	・ 1 から 20 までの数字で表した数 を位置や順序を示す数ととらえ、 前後の数の関係を考えて並べる。	・ 1 から 100 までの数字で表した 数を位置や順序を示す数ととらえ 数の範囲を広げ順序よく並べる。

準 備 紙芝居の数パズル、前時のVTR、前時までの流れ図、数の線・数の表

学習指導の過程

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 活動の目的を想起し、紙芝居づくりの数パズルするめあてについて話し合う。 ○ 前時の紙芝居づくりの活動を受けて意欲をもつこと ○ 活動の手順や方法への見通しをもつこと めあて すうパズルをして、かみしばいをもとにもどそう。 2 数パズルをして、「おむすびころりん」の紙芝居をつくる。			1 製作への意欲を引き出す支援 ○ 前時の活動のVTR ○ 前時までの活動の流れ図の提示 ○ コーナーを回る動的な設定 2 数パズル製作への支援
Aグループ	Bグループ	Cグループ	Aグループ
(1) パーツを順序よくあてはめる。			・ パーツの大きさが異なり、数に応じて位置を示したパズル
○ 絵と図の数から並べる順序を考えること	○ 数字と矢印から並べる順番を考えること	○ 範囲を広げた数字で順番を考えること	・ ブロック図による数の大きさの提示
			・ 絵による活動の評価
(2) 絵を見て数の順序を確かめる。			Bグループ
○ パーツの大きさと絵で活動の評価すること	○ 裏の絵によって、活動を評価すること	○ 裏の絵によって、活動を評価すること	・ 数字の大きさをとらえるための数の表の補助具
			・ 繰り返し裏の絵を確認するための評価の設定
(3) できあがった数パズルを展示する。			Cグループ
※ (1)から(3)を6場面以上繰り返し、間違えたら数の表・線を使って確かめ、(2)の活動へ戻る。			・ 数字の大きさをとらえるための数の線の補助具
3 個々の製作した紙芝居を各自のコーナーに並べ紹介する。			・ 繰り返し裏の絵を確認するための評価の設定
○ 本時学習のまとめをする。			3 学習への達成感・成就感を味わわせる支援
※ 次時の紙芝居を伝え、意欲を高める。			○ 製作紙芝居の各自の展示コーナーの設置

第5・6学年梅組 国語科学習指導案

指導者 原 口 和 美

単 元 ぼくのわたしのおはなし絵本をつくろう（『しろくまちゃんのホットケーキ』）

指 導 観

- 本学級の子供たちは、5年生3名6年生4名の計7名で構成されている。子供たちの読むことに対する楽しみ方は、文の読みとりは難しいが、一文字ずつ拾い読みしながら登場人物や事物をとらえている子供、場面の流れの読みとりは難しいが、2・3語文を読んで大まかな登場人物の行為をとらえることができる子供、多くの場面の流れの詳しい読みとりは難しいが、多語文を読んで登場人物の行為をとらえることができる子供など、絵本読みの実態は様々な段階である。しかしどの子供たちも、読み聞かせや簡単な本を自ら読むことは好きで、絵本を読むことを通して、語句や文の意味を理解し、獲得した言葉を生活のなかで使うことが期待できる。
- 本単元のねらいは、『しろくまちゃんのホットケーキ』の絵本を事物や行為や状態を表す言葉等に気をつけながら読み、自分の絵本をつくっていく活動を通して、読みの力を高めることである。具体的な学習内容としては、①語句や文を声に出して読むことで、各場面における様子をとらえること、②語句や文に表されている内容を絵と対応づけたり、絵を構成したりして場面の様子を理解すること、③読みとった事柄をペープサートで表現し楽しむこと、④できあがった絵本をもとに自分なりの表現をしながら絵本を楽しんで読むことである。このような学習は、子供が本を読むことに対する興味・関心を高め、読む楽しさを味わうとともに、文字力・語彙力など、言語の基礎的な力を身につけることができ、実生活において読むことの楽しさを味わう上で意義深い。
- 本単元の指導にあたっては、子供たち一人一人が場面の様子を想像しながら意欲的に絵本づくりをしていく中で、読むことの楽しさを味わえるようにしたい。そのために、「おはなし絵本をつくろう」という目的のもと、語句や文を読みとって、事物や行為や状態等を表す言葉の意味をとらえる活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。そこで、であう段階では、絵本の読み聞かせであらすじをつかませるとともに、おはなし絵本のモデルの掲示で、絵本づくりへの見通しをもたせる。ふかめる段階では、児童の実態に応じた絵本を準備し、語句や文に表された内容と絵を対応づけ、繰り返し活動できるようにする。まとめる段階では、自分の作ったおはなし絵本を発表する場を設定し、絵本を作ったことに対する達成感・成就感を味わえるようにする。

目 標

- 1 語句や文から読みとったことを、挿絵で表現したり構成したりして、おはなし絵本をつくることができる。
- 2 自分のおはなし絵本の読み聞かせをして、人に伝えることを楽しむことができる。

計 画（約5時間）

段階	であう(1時間)	ふかめる(3時間)	まとめる(1時間)
活動と内容	1 『しろくまちゃんのホットケーキ』の絵本のあらすじをつかみ、自分の絵本を作ることを知る。 ○ あらすじを理解すること ○ 絵本づくりへの見通しをもつこと	2 自分のおはなし絵本を作る。(本時2/3) (1) 各自の絵本を音読し、挿絵を貼って絵本をつくる。 ○ 事物や行為、状態等を表す言葉の意味をとらえること (2) ペープサートで絵本の内容を表現する。 ○ 読みとった内容を動作化し理解すること	3 作り上げたおはなし絵本を発表したり、友達の発表を聞いたりする。 ○ 絵本を読み、場面の状況をペープサートで表現し、作り上げた達成感を味わうこと
手だて	※ 場面ごとの様子を意識できるような拡大絵本の提示	※ 個人別の絵本と挿絵の準備 ※ ペープサートの準備	※ 絵本の発表の場の設定 ※ 発表したことへの賞賛

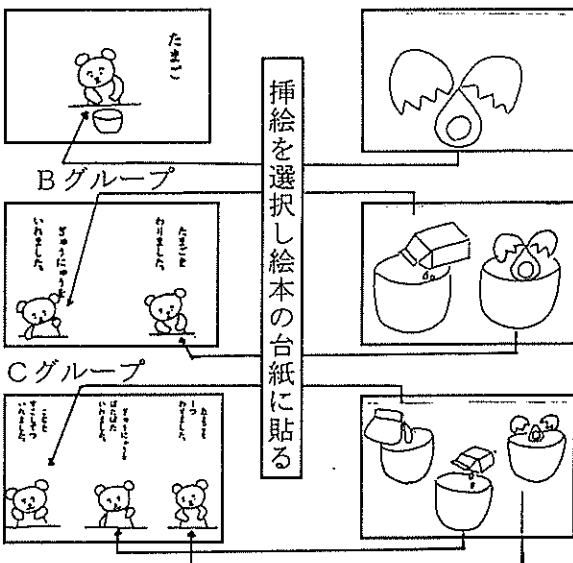
本時の目標

- 語句や文を読み進めながら、挿絵を構成して楽しく絵本をつくり、みんなに読んで聞かせることができる。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
・ 事物を表す語句に着目し、それに対応させて挿絵を選び、絵本をつくることができる。	・ 行為を表す語句に着目し、登場人物と事物を関係づけながら挿絵を選び、絵本をつくることができる。	・ 状態を表す語句に着目し、登場人物と事物を関係づけながら挿絵を構成し、場面を順序づけて絵本をつくることができる。

準備 絵本、ペープサート、個別の絵本、個別の挿絵、ランゲージカード

学習指導の過程

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 ペープサートによるモデル演示を見て、本時絵本作りについて話し合う。 ○ 前時の学習を想起し、本時学習する場面を把握すること ○ 絵本作りの活動手順を意識すること ―― めあて ―― ホットケーキづくりの ばめんの えほんをつくろう 2 ホットケーキづくりの場面の絵本を作る。 (1) 各自の絵本を音読する。 ○ 語句や文の内容に注目して読むこと (2) 語句や文から絵を構成して、絵本をつくる。 ○ 語句や文の内容に合った挿絵を選ぶこと			1 本時学習の意欲を引き出す支援 ○ 前時学習した絵本の場面を振り返ることができるようなペープサートでのモデル演示 ○ 絵本づくりの手順を意識できるような挿絵の提示 2 楽しく読むことに取り組ませる支援 ○ 読みを確認するためのランゲージカードや個に応じた絵本と挿絵カードの準備
Aグループ	Bグループ	Cグループ	Aグループ 選択する挿絵  Bグループ Cグループ
・ 語句の表している登場人物や事物の挿絵を、数枚の絵の中から選び、語句と結びつけて構成すること	・ 行為を表す言葉を読みとって挿絵を構成し、登場人物の行為の順序通りに挿絵を構成すること	・ 状態を表す言葉を読みとり、読みとったことから挿絵を構成し、三場面の登場人物の行為の順序通りに挿絵を貼ること	
(3) 各自の絵本を発表する。 ○ 読みとったことを確かめること 3 作り上げた絵本の場面を発表し、ペープサートで表現する。 ○ 登場人物と事物を関係づけて、ペープサートを動かし、語句や文の理解を深めること			3 学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○ 絵本を読む場の設定 ○ 教師が聞き手になり、正しく読んで絵と文が照合したら、次のページの絵本の台紙を渡し、読みとりの曖昧なところは、教師が助言すること ○ ペープサートの操作化、言語化、動作化への助言

◇ 保健部実践提案協議会

○ 自らよりよい健康生活をつくる保健学習

－生活習慣を調べ，ライフスキルを形成していく活動の展開－

提 案 者	本 校 保 健 部	森田 常子
司 会 者	志 摩 町 立 志 摩 中 学 校	今村 由香
指 導 助 言 者	福 岡 教 育 大 学 教 授	照屋 博行
	福岡県立看護専門学校講師	筑紫 味子

◇ 學習指導協議会

全体会（２日目）

○ あいさつ

初等教育研究部委員長 山 口 喬
学 校 長 中 谷 雅 彦

◇ 主題発表

「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」
—調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化—
研究副主任 石 田 耕 一

◇ 教科等発表

○ 障害児教育

「楽しい生活を共に創り出す生活単元学習」

— 一個の役割が広がる集団活動の展開 —

障害児教育研究部 谷 崎 和 一 郎

○ 理 科

「自然のきまりを思考する楽しさを味わう理科学習」

— 自然とのかかわり方を追究する学習の展開 —

理 科 部 野 口 信 介

○ 児童発表

受け継ぐ我ら 新世紀のハーモニー

— 6年生児童による音楽発表 —

指 導 者 豊 村 雅 義

◇ × 毛

第2日目 午後の部

公開授業指導案

【提案学習指導】

5つの公開学習指導を通して私たちが考える「調和的に展開する教科・総合的学習のあり方（学習像）」を、次の2点から提案いたします。

- ① 総合的学習（あらつ学習）と連動する教科学習のあり方
- ② それぞれの役割や立場を担いながらも、同じ学びで展開する教科・総合的学習のあり方

特に、②の点から、総合的学習（あらつ学習）については、子供たちの学習の成果が最も見とれる終末段階の学習ではなく、子供たちの課題追究をより高める教師の指導性が最も発揮される段階での学習指導を公開いたします。一見、教科学習と同じような展開に思われるかもしれませんが、それも私たちの意図しているところです。

私たちが主張する「同じ学びで展開する学習のあり方」について、先生方のご意見を、後の全体学習指導協議会にていただければ幸いです。

第1学年2組 音楽科学習指導案

指導者 豊村雅義

題材 なかよしおんがくかいをひらこう

指導観

- 音楽科では、音楽の楽しさ・美しさなどのよさを感じ取る感性を深めながら、表現や鑑賞の能力を身に付けていくことが求められている。そこで本題材では、生活の学習で生じた「みんなと仲良くなりたい。」という子供の求めに連動し、歌に合わせて遊ぶ活動を通して、拍をとらえて身体表現できるようにすることをねらっている。具体的な内容は、①拍の流れをとらえて遊んだり身体表現したりする楽しさを感じ取ること、②拍の流れをとらえて意欲的に遊んだり身体表現をしたりすること、などである。拍をとらえて歌い遊ぶことで、友達と心を合わせて動く心地よさを感じさせることができる。教材曲は、拍の流れが明確で、歌詞やフレーズがわかりやすい遊び歌を子供と共に選んでいく。
- 本学級の子供たちは、小学校入学以前にも遊び歌を歌ったり、身体表現をしたりする経験を数多くしてきている。その中で、拍の流れをとらえて身体表現できるようになっている子供も多い。しかし、その表現は、必ずしも歌の拍の流れに合わせ、速度を保って、歌ったり遊んだりできている訳ではない。つまり拍感・速度感・リズム感などの音楽に対する感性や、拍の流れに合わせて身体を動かす音楽活動の基礎的な能力の育ちには不十分な面があると言える。そこで、拍の流れをとらえて歌い遊ぶ活動を通して、歌に合わせた遊びで多くの友達と心を合わせて動くことができ、音楽を通して、友達と楽しく遊べるよさがあることに気付かせていきたい。
- 本題材の指導にあたっては、子供たちが歌に合わせて楽しく遊ぶ「ひたる楽しさ」を追究する音楽活動を展開していく。そのために、1年2組のみんなが仲良くなる音楽会という目的意識をもたせていく。であう段階では、歌を通しての集団遊びを体験させ、もっとみんなで遊びたいという意識をもたせる。そして、遊び歌を出し合ったり新しい遊び歌を聴いたりして、歌い遊ぶ中で「どうすればみんなと仲良く遊べるか」ということを出し合わせ、活動の見通しをもたせる。ふかめる段階では、拍をとらえた遊びや身体表現にひたらせていく。そのために一人で、二人組で、大勢でという具合に人数を増やして、拍の流れをとらえる大切さや楽しさを追究させる。あじわう段階では、まとめの音楽会を開き、音楽を通して共に活動できる楽しさについて振り返らせていく。

目標

- 1 友達と気持ちを合わせて、歌を歌ったり、歌に合わせて身体表現をしたりする活動に意欲的に取り組み、遊び歌を楽しむことができる。 (人間性・主体性)
- 2 拍の流れをとらえて、速度を保って身体表現をしたり歌ったりすることができる。 (創造性)

計画 (約5時間)

階	であう (1時間)	ふかめる (3時間)	あじわう (1時間)
活動と内容	1 様々な遊び歌に出合い、みんなが仲良くなれるための遊び方を出し合い、歌い遊ぶ。 ○ 拍の流れをとらえて遊ぶことの見通し ○ 楽しく遊び歌うことへの意欲	2 色々な楽曲や遊び方で楽しく歌い遊ぶなかよし音楽会を開く。 ○ 身体表現を楽しむこと ○ 拍の流れをとらえた身体表現 (本時2/3) ○ 速度などに気をつけた身体表現	3 まとめの中よし音楽会を開いて歌い遊び、感想を発表し合う。 ○ 拍をとらえて身体表現をしたり歌ったりすることのよさの感受
手だて	※ 集団で遊ぶ遊び歌の紹介 ※ 楽曲や遊び方を紹介し合う場と遊んでみる場の設定	※ 聴き合ったり見せ合ったりする活動の場の設定 ※ 楽器の拍打ちなどの活動設定	※ 発表の場の設定 ※ みんなで楽しく活動できたことへの評価活動の設定

本時の目標

- 1 遊ぶ人数を増やしたり、動きを変えたりして、多くの友達と動きをそろえながら、楽しく歌ったり身体表現したりすることができる。 (人間性・主体性)
- 2 遊び歌の拍の流れをとらえて、一定の速度で身体表現することができる。 (創造性)

準 備 学習の流れ図や情景画（遊びの動き図），拡大歌詞・楽譜，リズム楽器

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ				
1 前時までの活動を振り返り、本時のめあてを話し合う。 (1) 前時までの歌を歌ったり、歌に合わせて遊んだりする。 ○ 遊び歌で楽しく遊んだ前時学習の想起 (2) 人数や動きを変えて遊び、本時のめあてを話し合う。 ○ 歌に合わせ、友達と動きをそろえる本時のめあての把握 ※ 遊びの人数を増やして遊ばせ、みんなの動きがそろうことでさらに楽しくなることに気付かせる。 めあて みんなとうごきをそろえて、たのしくうたってあそぼう。 2 遊ぶ人数を増やしたり、動きを付け加えたりして、遊び歌で歌い遊んでみる。 (1) 遊びを確かめながら、歌いながら遊んでみる。 ○ 遊びの動きを確かめること ・手遊びで手を合わせる場所はどこだろう。 ・踊りで動きをそろえる場所はどこだろう。 ※ 学習の流れ図や拡大楽譜を示し、歌に合わせた遊びの動きについて確かめさせる。 (2) 人数を増やしたり動きを付け加えたりして楽しく遊ぶ。 ○ 拍の流れをとらえて身体表現すること ※ 教師がタンバリンの拍打ちをしたり、子供たちに楽器で拍打ちをさせたりしながら遊ばせ、拍の流れをとらえて動くことの心地よさを感じさせる。 ※ 子供の動きの実態によっては、新しい楽曲や新しい遊びを提示し、歌に合わせて遊ばせる。 (例) 「あんたがたどこさ」で、「さ」のところだけ前に出てみる遊びで、手をつないで動いてみる。 <table border="1" style="border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 30px; height: 30px;"></td> <td style="width: 30px; height: 30px;"></td> </tr> <tr> <td style="width: 30px; height: 30px;"></td> <td style="width: 30px; height: 30px;"></td> </tr> </table> 床に左のようなますを書き、左右と前後に動く目印とする。 3 大勢で歌い遊んでみて、楽しかったことを発表し合う。 ○ 拍の流れをとらえて遊ぶことの心地よさの振り返り ※ 楽しかったことや、どうすれば楽しくなったのかを発表させて遊ばせる。					○ 前の時間は、色々な遊び歌を習って遊んでみたね。 ○ みんなで歌いながら遊ぶと楽しいね。 ○ 人数を増やして遊んでみるとなかなかうまく動きがそろわないね。 ○ 動きがそろうようになると楽しいだろうね。 ○ 大勢でも楽しく遊べるように練習したいね。 ○ 遊びの動きを確かめて、人数を増やして遊んでみよう。 ○ 歌う人と遊ぶ人に分かれて遊んでみよう。 ○ 人数を増やすと動きをそろえるのが難しいから、ゆっくりから練習してみよう。 ○ 動きがそろってきたら楽しくなってきたぞ。 ○ 速く歌うと動きがそろいにくくなるね。 ○ どうすれば動きがそろうようになってくるかな。 ○ 先生が出すタンバリンの合図に合わせると、動きやすくなるね。 ○ ぼくたちもタンバリンを打つ人と遊ぶ人に分かれて遊んでみよう。 ○ 大勢で遊んでも動きがそろってきたぞ。 ○ 歌に合わせて遊びの動きがそろうと楽しいね。

提案学習指導② 総合的学習（あらつ学習）と同じ学びで展開する教科学習

第3学年2組 理科学習指導案

指導者 手 島 宏 樹

単 元 豆電球に明かりをつけよう

指 導 観

- 本単元は、乾電池に導線・豆電球などをつなぎ、電気を通すつなぎ方や電気を通す物を調べ、電気の回路についての考えを深めることをねらいとしている。乾電池と導線を使って豆電球に明かりをつけたり、導線に物をはさんで明かりをつけたりしていく本単元には、次のような内容がある。
 - ①豆電球が点灯するつなぎ方と点灯しないつなぎ方を比べ、回路ができると電気が流れ豆電球が点灯すること、②回路の中にいろいろなものを入れ豆電球が点灯するときとしないときを比べ、物には電気を通す物と通さない物があること、③回路についての考えや物の性質を活用しておもちゃづくりを行うことである。
- 本学級の子どもたちは、生活の中で乾電池を使うことが多い。乾電池製品は、スイッチを入れると動いたり明かりがついたりするものにとらえており、それがどのようにつながっているかについての意識はうすい。また、生活経験からある程度電気を通す物と通さない物を区別している。特に金属的な光沢のある物は電気を通すのではないかと考えている。これらの上に立って本単元では、子供が自分なりの見方や考え方でつなぎ方や電気を通す物についての見通しを立て、比較しながら追究することによって、電気を通す回路についての考えを深めることができるようになる。
- 本単元の指導にあたっては、乾電池と導線をうまくつなぐと豆電球に明かりがつくという考えをもとに、回路のつなぎ方や物の性質についての考えを深めることができるようにする。そのために、まず、見出す段階では、乾電池と豆電球、導線を使って自由に明かりをつける活動を行わせる。そして、点灯するつなぎ方と点灯しないつなぎ方を比べ、つなぎ方の共通点を取り出し回路についての考えをつくる。次に、調べる段階では、導線を長くしたりねじったり、導線の途中に物を入れたりしても点灯することから、回路についての考えや電気を通す物の性質についての考えを深める。最後に、生かす段階では、それらの考えを使ってもものづくりを行わせる。

目 標

- 1 乾電池に導線・豆電球などをつなぎ、電気を通すつなぎ方や電気を通す物を調べ、電気の回路についての考えを深めることができる。 (創造性)
- 2 回路のつなぎ方や電気を通す物に対する自分なりの見通しをもとに追究し、結果を吟味したり再追究したりする主体的な態度を育てる。 (主体性・人間性)

計 画 (約9時間)

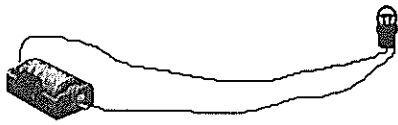
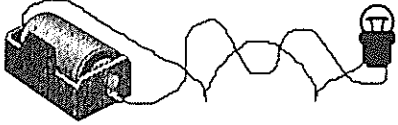
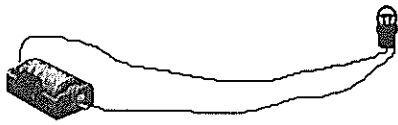
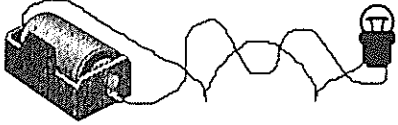
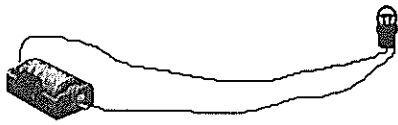
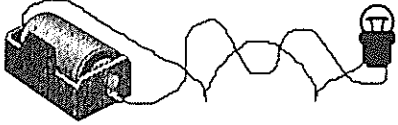
段階	見出す (3時間)	調べる (3時間)	生かす (3時間)
活動と内容	1 豆電球に明かりをつけて遊ぶ。 (1) 乾電池とソケットで豆電球に明かりをつけて遊ぶ。 ② ○ 決まったところにつなぐと電気が通り、豆電球に明かりがつくこと (2) ソケットを使わないで豆電球に明かりをつけて遊ぶ。① ○ 乾電池・導線・豆電球が一つの輪になると豆電球に明かりがつくこと	2 回路を変形させたり回路に物をはさんだりして豆電球に明かりがつくか調べる。 (1) 導線をねじったり長くしたりして豆電球に明かりがつくか調べる。 ① (本時) ○ 豆電球に明かりがつく回路についての考えの深まり (2) 回路に物をはさみ、電気を通す物と通さない物を調べる。 ② ○ 豆電球が点灯する物は電気を通す物であること	3 電気を通す物の性質や回路の考えを生かして、ものづくりを行う。 (1) 生活の中で豆電球を利用する計画をたてる。 ① ○ きまりの活用の計画 (2) 乾電池と豆電球を使ったおもちゃづくりや道具づくりを行う。 ② ○ 生活における回路や物の性質の活用 ○ きまり活用の満足感・達成感
手だて	※ 乾電池、豆電球、ソケット導線の準備 ※ 豆電球と導線断面の拡大図の準備と提示	※ 導線がねじれたり長くなったりした回路の提示 ※ 被覆線や塗料の金属などの準備 ※ テスターでの探索活動の場	※ 自由な製作活動の場の設定 ※ おもちゃづくりや道具づくりに必要な材料の準備

本時の目標

- 1 導線がねじれたり折れ曲がったり長くなったりしても、乾電池・豆電球・導線が一つの輪になると電気が通り、豆電球に明かりがつくという考えを深めることができる。(創造性)
- 2 導線をねじったり曲げたり長くしたりして豆電球に明かりがつくかを調べることができる。(主体性・人間性)

準備 乾電池、豆電球、ビニル導線、延長コード、60wの電球

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ				
1 前時の学習を想起し、本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時の学習内容について確認する。 ○ 乾電池・豆電球・導線が輪になると明かりがつくこと (2) 導線がねじれたり折れ曲がったり長くなったりした回路を見て、本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 導線がねじれたり折れたり長くなったりしても豆電球に明かりがつくか調べること ※ 導線がねじれたり折れ曲がったり長くなったりした回路を提示し、豆電球に明かりがつくか話し合わせる。 めあて 導線が長くなったりねじれたり折れ曲がったりしても豆電球に明かりがつくかを調べよう。 2 導線が長くなったりねじれたり折れ曲がったりしたら豆電球に明かりがつくかを予想し、調べる。 (1) 豆電球に明かりがつくかを予想し調べ方を話し合う。 ○ 電気の流れ方や回路を意識した予想と明るさの違いに着目した予想 ○ 導線をねじったり折れ曲げたり長くしたりしての追究 ※ 導線を長くした回路図とねじった回路図を提示し、豆電球に明かりがつくかについての自分なりの考えを話し合わせる。 (2) 導線をねじったり折れ曲げたり長くしたりしたときの豆電球の点灯について調べる。	○ 乾電池と導線、豆電球が一つの輪になったとき豆電球に明かりがつく。 ○ こんなに長く、ねじれていたり、たるんだり曲がったりした導線でも明かりがつくのかな。 ○ こんなに長いんだから最後まで電気が届かないんじゃないかな。 ○ ねじれたり、たるんだりおれたりしているから、途中までしか電気が流れないと思う。 ○ いや、一つの輪になっていれば豆電球に明かりがついたんだから、長くてもねじれていても電気は流れると思う。 ○ 長くなっても豆電球に明かりがつくと思うけど遠くまで電気を運ぶ力があるから、明かりが弱くなっていると思う。 ○すごい。こんなに長くしてもちゃんと豆電球に明かりがついた。電気が流れているんだ。 ○ どんなにねじっても電気は流れるんだ。 ○ わあ、すごい。こんなに長くなってもちゃんと一つの輪になると電球に明かりがついている。ちゃんと電気が流れているんだ。				
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 50%;">【長くした導線での追究】</th><th style="width: 50%;">【折り・ねじった導線での追究】</th></tr> <tr> <td style="text-align: center;">  ・導線が長くなっても豆電球に明かりがつくこと </td><td style="text-align: center;">  ・導線を折ったりねじったりしても豆電球に明かりがつくこと </td></tr> </table>	【長くした導線での追究】	【折り・ねじった導線での追究】	 ・導線が長くなっても豆電球に明かりがつくこと	 ・導線を折ったりねじったりしても豆電球に明かりがつくこと	
【長くした導線での追究】	【折り・ねじった導線での追究】				
 ・導線が長くなっても豆電球に明かりがつくこと	 ・導線を折ったりねじったりしても豆電球に明かりがつくこと				
○ 豆電球に明かりがつく回路についての考えの深まり ※ 長くしたりねじったりできるような道具の準備と絵図の提示 3 実験結果について話し合い、学習のまとめをする。 ○ どんな場合でも乾電池・豆電球・導線が一つの輪になれば電気が流れ豆電球に明かりがつくことの一般化 ※ 長くのばした延長コードでも1つの輪になると60wの電球が点灯する事象を提示し、回路についての概念を強化する。 ○ 次時の学習内容について把握					

提案学習指導③ 総合的学習(あらつ学習)と連動する教科学習(追究方法の連動)

第4学年1組 国語科学習指導案

指導者 吉田正樹

単元 めざせ！プレゼンター！ー スライドを使って説明文を説明しようー
指導観

- 本単元は、西公園の虫とかかわる総合的学習(あらつ学習)のなかで生じてきた、全校のみんなに呼びかけ訴える発表方法への求めに連動し、スライドを使い視覚に訴える発表方法を追究していく国語科学習である(目標)。スライドのつくり方・使い方を追究する活動を通して、中心や関係を考え理解し表現する力を育てることをねらいとしている。具体的には、①教材文(「キョリユをさぐる」)に即して中心となる語や段落相互の関係を考えながら、教材文を視覚に訴えて説明するためのスライドをつくること、②写真や絵図と言葉、音声言語と文字言語による表現とを比べながら、それぞれの特徴やよさを理解し、補完的に組み合わせた分かりやすい発表方法を見出すことが主な学習内容である。
- 本学級の子供たちは、さまざまな場面で意欲的に言語活動に取り組んでいる。各種の読み物に興味をもって読み進めたり、自分が調べたことや考えたことをくわしく表現したりする力も育てている。しかし、言語活動のなかで、必ずしも目的や相手を意識して理解や表現をしているわけではない。伝える内容を短くまとめすぎたり詳しく述べすぎたりして、十分に伝わらない状況もみられる。学校行事や総合的学習(あらつ学習)などを通して、よりよい発表方法への興味・関心が高まっていることを大切に、目的に応じ中心や関係を考え理解し表現する力をより高めたい。
- 本単元の指導においては、説明文教材(「キョリユをさぐる」)を発表原稿として活用しながら、それを説明するスライドのつくり方・使い方を追究する。つかむ段階では、視覚に訴える発表経験の振り返りと教材文との出会いを通して、よりよい発表方法を考える課題をつかませる。つくる段階では、文章に即して写真や絵図の使い方や文字スライドのつくり方を自分なりに工夫する。その際、教師や子供の作例をモデル化し比べる活動を位置づけ、①写真や絵図を使う発表のよさ、②文字言語を用いた発表のよさを理解したうえで、スライドのつくり方・使い方を吟味させる。いかす段階では、グループで発表会を通して相互によさや改善点を見出させ、あらつ学習で活用できるようにする。

目標

- 1 中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考えながら、教材文を説明するためのスライドをつくり、視覚に訴える分かりやすい発表方法を工夫することができる。(創造性)
- 2 文字のスライド・写真や絵図のスライドのつくり方を友達と比べながら、文字言語と音声言語による表現のそれぞれのよさを理解し、よりよい活用の仕方を追究できる。(主体性・人間性)

計 画 (約9時間+総合「あらつ学習」)

単元	第1次 つかむ段階(2時間)	第2次 つくる段階(6時間)	第3次 いかす段階(1時間+総合)
活動と内容	1. スライドを使った発表方法を追究する学習計画を立てる。 (1)「あらつ学習」での説明や報告の仕方を振り返り、視覚に訴える発表方法を話し合う。① ○ 課題の把握と追究意欲の喚起 (2)教材文(「キョリユをさぐる」)を読み、それを活用しながら、発表方法を考える学習計画を話し合う。① ○ 学習の見通しを立てること 既習の発表方法の自己吟味活動	2. 教材文を説明するためのスライドをつくり、視覚に訴える発表方法を工夫する。 (1)発表原稿として教材文を読み、必要なスライド(写真や絵図・文字のスライド)をつくる。③ ○ 文章に即して、段落ごとの要点をとらえたり、段落相互の関係を考えたりしながら読むこと (2)つくったスライドを比べながら、視覚に訴えるよりよい発表方法について話し合う。(本時2/3)③ ○ 目的に応じ、内容を大きくまとめたり細部に注意したりしながら文章を正しく読むこと 自己追究・自己吟味活動を繰り返す発表づくり	3. スライドを使った発表を相互に試し合い、うまくいった点や今後の改善点などについて話し合う。 ○ つくったスライドを利用しながら相手に分かりやすく話すこと ○ 学習の達成感・成就感の感受 4. 学習したことを生かし、あらつ虫をふやす取り組みについて訴える発表方法を工夫する。(総合) ○ 学習を応用・発展させること 学習成果を確かめる自己更新活動
手だて	※ 発表経験(発表方法)を具体的に想起させる視覚機器の活用 ※ スライド資料のサンプル提示	※ 自己追究を支援する学習ガイドの準備 ※ コンピュータ操作についての個に応じた支援 ※ スライドのつくり方のモデル提示と比較検討	※ 感想メモを活用する話し合い ※ 学習の成果を実感させるための視覚機器(VTR等)の活用

本時の目標

- 1 文字のスライドを使うよさやつくり方・使い方を理解して、教材文の中心となる語や文をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら、自分のスライドを見直すことができる。（創造性）
- 2 友達の発表を比べながら、よい点や改善点について話し合うことができる。（主体性・人間性）

準備 学習の流れ図、モデルスライドや作例の拡大資料、VTR機器、ビデオプロジェクター、LAN接続のコンピュータ23題、OS (NT, 98)、プレゼンテーションソフト など

学習指導の過程

活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 写真や絵図のスライドを使った発表方法について見直したことを話し合い、本時学習のめあてを確かめる。 ○ 前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ・音声による説明と写真・絵図の提示との補完関係 ・教材文（発表原稿）と、写真・絵図スライドの対応 （めあて） 文字のスライドのよさについて話し合い、自分のスライドのつくり方や使い方を見直そう。 ※ 文字のスライドを提示し、その必要性を確かめさせる。 2 モデルや代表児の発表をもとに、文字のスライドを使う発表方法について話し合う。 (1) 文字のスライドを使う発表方法のよさを話し合う。 ○ 文字表現と音声表現のそれぞれの特質（同時性・継続性など）を理解すること ※ 文字のスライドがある場合とない場合とを比べさせる。 (2) 教師が提示するモデルや友達の作例を比べながら、文字のスライドのよりよいつくり方や使い方を話し合う。 ○ 強調する、関係を示すなどの視覚効果に気づくこと ○ 文字言語を活用する発表方法のよさを理解すること ※ モデルや作例は、典型的な例を2ずつ比べ考えさせる。	○ 発表原稿（教材文）のどこで写真や絵図のスライドを見せればいいのか考えた。 ○ ことばで表しにくいことと、絵図だけでは表しにくいことをスライドを使って発表すると、うまく伝えることができる。 ○ ことばで説明しているのに、どうしてことば（文字）のスライドがあった方がよく分かるのか話し合おう。 ○ 説明は前に戻って確かめたり先のことを聞いたりすることはできないけど、文字スライドがあると、それができる。 ○ 説明のなかの大事なことばを一度にまとめて示しながら、発表していくことができる。 ○ 説明の順序や、事柄の関係などを分かりやすく示して発表することができる。
第一の手がかりは、キョウリュウのほねの化石です。 ○ 一頭分の化石がまわって発見されたとすれば、それらを順々に組み立てていけば、そのキョウリュウがどのくらいの大きさで、どういう格好をしていたかが分かります。 ○ 一頭分の化石が発見されたとしても、バラバラになっていてつながり方が分からない場合もあります。 ○ 化石が一頭分そろって見つからず、わずかな化石から想像しなければならないこともあります。	第一の手がかり キョウリュウのほねの化石 ○ 順々に組み立てる → 大きさ・かっこうがわかる ○ つながり方が分からない場合 ○ わずかな化石から想像する場合
【大事な文を取り出した例】 3 話し合った観点で、自分のつくり方・使い方を見直す。 ○ 文章に即して、中心となる語や重要語句相互の関係や段落相互の関係を考え、発表方法を工夫すること ○ 自分や友達のよい点・改善点を確かめること ※ 2人組になって、発表方法の見直しに取り組ませる。	第一の手がかり キョウリュウのほねの化石 ○ 一頭分の化石が発見 ○ わずかな化石 ○ つながり方がわかる ○ つながり方がわからない ○ 想像する ○ 大きさ・かっこう ○ 文字スライドは、できるだけ短いことばで少なくまとめた方が分かりやすい。発表原稿を読み直して、もっとことばを減らそう。関係を矢印で表そう。

提案学習指導④ 共通のテーマをもとに個別追究を行う総合的学習(あらつ学習)

第5学年1組 あらつ学習指導案

指導者 稲 津 一 徳

単 元 給食から見直そう！私たちの日常生活

単元の構想

○ 本学級の子供たちは、元気に明るく学校生活を送るよさを味わっており、自分の健康についても意識しながら生活することができている。また、4年生のゴミの学習などから、身の回りの環境に対するよりよい在り方についても自分なりの考えをもち、日常生活における環境の保護・創造を目的とした実践活動に取り組んでいる子供も見られる。そこで、よりよい健康や環境を志向することが必要となるこの期に、日常の給食へのかかわりから、具体的に自己の健康や身の回りの環境について追究し、日常生活を見直していく本単元は価値がある。

○ 本単元は、給食の残菜という日常の気がかりから共通のテーマと個別の課題を設定し、残菜が健康や環境に及ぼす影響を多面的に調べたり、考えたり、実践したりしながら、よりよい健康や環境を実現していくための自分なりの応えを全校児童に向けて情報発信していく総合的な学習である。

具体的には、①本校の残菜の実態を調べ、残菜減少に向けて健康や環境を視点とした追究課題を捉えること、②健康や環境に与える影響について必要な情報を多面的に収集・整理すること、③健康や環境を取り巻く現代的な課題に気付くこと、④追究してきた内容を計画的・効果的にまとめ、全校児童に情報発信することといった学習内容を子供たちが自ら生み出すことができると考える。

○ 本単元の展開においては、子供たちが残菜減少という目的実現に向けて、健康や環境に与える影響を情報発信するという共通テーマのもと個別の追究ができるように支援する。つかむ段階では、給食の残菜調査を行い、残菜減少に向けた情報発信を共通テーマとして捉えさせる。また、社会科や保健学習などの既習学習の想起から、保健所の健康課や衛生課の方への聞き取りの場を設定し、健康や環境を視点とした追究課題をつかめるようにする。追究する段階では、全校への情報発信に向けて、価値ある内容と効果的な表現方法を追究できるように、あらつガイドを作成し、子供の求めと教師の意図に応じて提示したり、中間報告会での見直しの場を設定していく。発信する段階では、全校朝会やあらつ学習の時間を生かし、多様な情報発信の機会を設定していく。

目 標

- 1 残菜減少に向けて健康・環境への影響から必要な情報を多面的に収集・整理すると共に、効果的な表現を工夫して全校へ情報発信することができる。(主体性・創造性)
- 2 残菜減少に向けて健康・環境の視点から日常生活の在り方を見直すと共に、全校児童に情報発信することへの意欲を高め、自信をもつことができる。(創造性・人間性)

計 画 (約23時間)

階	つかむ(4時間)	追究する(17時間)	発信する(2時間)
活 動 と 内 容	1 附属小学校の残菜量を調べ、追究課題をつくる。 (1) 全校の残菜量を調べ、結果を話し合う。③ ○ 健康・環境への影響の予想と活動目的の把握 (2) 保健所の方にリサーチを行い、追究課題をつくる。① ○ 追究課題の設定	2 残菜減少に向けて、健康・環境への影響から追究課題について調べ、交流する。 (1) 追究課題について体験的に調べる。⑧ ○ 健康・環境の視点での多面的情報収集 ○ 健康・環境を取り巻く現代的課題への気付き (2) 中間報告会を行う。(本時1/2) ② ○ 追究内容の見直しと相互評価 ○ 表現方法の見直しと相互評価 (3) 再追究しまとめる。⑦ ○ 追究内容・表現方法の付加・修正	3 最終報告会を開き、追究した課題について全校児童に向けて情報発信する。② ○ 情報発信に対する自信の高まり ○ 自校への愛着の高まり ○ 自己の生活改善への意欲の高まり
支 援	※ 附属小児童の残菜を調べる活動の設定 ※ G・Tとの交流設定	※ 課題追究に応じた人材バンク・あらつガイドの作成と活用の促し ※ 追究→相互交流・評価→実践の活動の流れ	※ 最終報告会の設定 ※ 追究への肯定的評価の位置づけ

本時の目標

- 1 全校へ発信する追究内容・表現方法について、相互のよさや改善点を検討する観点（重要性・課題性・伝達性）を明確にして相互交流し、よりよいものに見直すことができる。（主体性・創造性）
- 2 自分の発信内容や方法を見直しながら、そのよさや改善点を明確にすると共に、よりよいものとなるよう再追究し、情報発信していこうとする意欲を高めることができる。（主体性・人間性）

準備

各自の表現物、追究内容・表現方法を見直すモデル資料、相互評価カード、学習ノートなど

学習指導の過程

予 想 さ れ る 活 動 と 内 容	子供の思考の流れ
1 これまでの活動状況を出し合い、中間報告会の進め方について話し合う。 ○ 中間報告会の目的意識の明確化 ※ 発表資料から追究した内容・表現方法を振り返り、情報発信に向けて、よい点・改善点を見直すことを押さえながらめあてにつなぐ。 めあて 全校への情報発信に向けて、互いの情報のよい点や改善点を明らかにし、よりよいものに見直そう。 2 モデル資料をもとに、追究内容・表現方法を見直す観点を決定し、互いの情報を検討する。 (1) 代表児と教師のモデル資料をもとに、追究内容・表現方法を見直す観点について話し合う。 ○ よい点・改善点を見直すための観点的把握 ・重要性→自分達の健康や環境への影響がいかに大きい ・課題性→自分達の問題としての切実感がある ・伝達性→計画的・効果的な絵、図、グラフ、文章であるか等 ※ 捉えさせたい観点を内包したモデルとなる代表児の資料を取り上げ、教師のモデル資料と比較させながら観点を明確にさせる話し合いを行う。 (2) 取り出した観点をもちに、健康グループ・環境グループに分かれ、互いの情報について交流する。 ○ 自他の追究内容・表現方法のよい点・改善点の相互評価 ※ 同グループ内で相互評価カードをもとに、捉えた観点から追究内容・表現方法について相互評価する場を設定する。 3 自他のよい点・改善点を出し合い、これからの追究の見通しについて話し合う。 ○ 再追究への必要感・期待感の高まり ○ 追究のよさの実感と自信の高まり ※ 相互評価カードをもとに、自他の追究のよい点・改善点を出し合わせ、これまでの追究のよさと今後の追究の必要性を実感させる。また、次時は、他のグループの追究について、保健所のTさんや下水道局のRさんにも来ていただくことを知らせる。	○ カルシウムやビタミンが不足することで、私達の健康に重大な影響が将来にわたって起こることが分かってきた。 ○ まとめたことがちゃんとみんなに伝わるか、もっと必要な内容はないか見直していきたい。 ○ D君の発表資料と先生の発表資料を比べると、D君のは、残菜の量が学年やおかずの種類で分けられてグラフ化されているので、一目で何が問題なのかわかるし、残菜を出すことがなぜよくないのか健康な成長の面から根拠が明確で説得力があるな。 ○ Bさんの資料は下水処理にかかる費用や新たにできる汚泥についてグラフや写真を入れ効果的に表現している。このような工夫は自分も取り入れたい。 ○ 次の時間は、互いの発表を見合うのでどんな内容か楽しみだ。また、TさんやRさんにもたくさんアドバイスをいただきたい。

提案学習指導⑤ 自由課題選択を重点とする第6学年の総合的学習(あらつ学習)

第6学年1組あらつ学習指導案

指導者 高野 誠 一

単 元 卒業研究をはじめよう

単元の構想

- 本学級の子供たちは、第5学年までの各教科や領域の学習の中で、現代的・社会的課題に遭遇してきている。子供たちの印象に深いものは、社会科での大気汚染や水質汚濁といった生活公害や森林を守る人々などの環境に関する問題、保健学習での自分の生活習慣や家庭科での栄養など、自分自身の健康に関する問題などがある。また、あらつ学習においても、明治通りの車の多さからの車社会の問題やお年寄りの方とのふれあいで学んだ福祉的な問題、外国の方とクリスマスコンサートを開いたことなどからの国際化に関する問題、博多祇園山笠や博多どんたくなどを通しての郷土の伝統・文化に関する問題などである。子供たちは、文化としての各教科・領域、生活現実としての学習など様々な機会を通して、自分の気がかりとなることを見いだしてきていると言える。
- 本単元は、第6学年として重点的に位置付けている自由課題選択型のあらつ学習、つまり総合的学習である。これまでの各教科や領域、あらつ学習での学習経験、日常の生活経験などから気がかりを掘り起こし、自分の持続的・長期的な追究をおこなっていくものである。気がかりとなっている問題を探究していくことで、①自分が気がかりとなっていることを切実な課題として設定し、調べる計画を立て、体験や聞き取り、インターネットなど多様で効果的、長期的な調べ方をする、②自分の気がかりとなっている事柄の原因や背景、問題の解消のための人々の努力などを考えること、③現代的・社会的な課題への人々の共生の生き方に共感し、追究を組み立てた自分に自信をもつといった学習内容を子供自らが生み出すと考える。
- 本単元の展開においては、子供たちが自分の学習経験や生活経験の中から気がかりとなる課題を切実な課題として見つけ、長期的な時間を生かした追究を組み立てることができるよう課題に結びつく先輩の学習体験や大学生の卒業論文の取り組みとの出会い、情報収集の面からの支援を工夫する。課題設定の段階では、学習経験を想起しやすいように、各教科や領域、あらつ学習での資料を提示する。そして、気がかりとなる課題について、予備調査を実施した後、自分の課題や方法への問題点を出し合うとともに卒業研究をしてきた先輩や卒業論文に取り組む大学生と出合わせ、課題の設定や追究方法を吟味していく。次に追究する段階では、追究の方法や情報収集の場所、方法などを考え、自分の追究ができるように、家庭での取り組みを含めて保護者にも依頼していく。そして、卒業研究中間報告会「夏休み自由研究」を開催し、自分の追究成果の中間報告を友達と交流する。さらに達成の段階では卒業研究発表会を開催し、追究への満足感から自信をもたせたい。

目 標

- 1 自分の小学校生活における学習や生活経験から気がかりとなる課題を設定し、課題に応じた追究活動を組み立て、課題の原因や背景を考えていくことができる。 (主体性・創造性)
- 2 気がかりとなる現代的・社会的課題に対する生き方について考えるとともに、自分だけの課題を追究してきた自分への自信をもつことができる。 (人間性)

計 画 (約 42 時間)

	課 題 設 定(11時間)	課 題 追 究(25時間)	課 題 達 成(6時間)
予 想 さ れ る 活 動 内 容	1 自分が気がかりとなる追究課題を設定する。 (1) これまでの学習や生活を振り返る。 ○ 課題の方向性の把握 (2) 気がかりを調べる。 ○ 課題成立を試行すること (3) 課題や方法を見直す。本時① ○ 切実な課題把握と計画立案	2 自分が気がかりとなる課題について調べる。 (1) 自分の課題について追究する計画を立てる。② ○ 自分の課題に応じた追究方法の想定 課題例 ・福岡の水や空気 ・外国の方との交流 ・伝統 (2) 自分の課題について調べる。 ○ 多様で、効果的な情報収集や体験活動 (3) 成果を中間報告会で交流する。 ○ 追究内容や追究方法の見直し	3 卒業研究発表会を行う。 (1) 卒業研究をおこなうための再調査・表現を行う。④ ○ 友達の追究内容や追究方法のよさを取り入れること (2) 卒業研究発表会を開催する。 ○ 追究の達成感
支 援	※ これまでの学習資料の提示 ※ 卒業生や大学生との交流の場	※ 子供たちの追究の場の確保 ※ 中間報告会を自由研究発表会で行わせること	※ 卒業研究発表会への保護者の招聘

本時の目標

- 1 自分の卒業研究の課題について、予備調査したことをもとに、自分が追究する価値や体験的な追究方法の面から計画を見直すことができる。
(主体性・創造性)
- 2 気がかりとなる課題の重要性について、これからの自分の生き方に照らして考え、自分が自力で追究できる見通しをもつことができる。
(人間性)

準備 児童:自分の課題についての追究計画書、予備調査した資料や表現物

教師:学習経験を気がかり課題別にまとめた資料、先輩の研究成果

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1 自分の課題設定や予備調査したことから、追究の見通しについて振り返り、本時のめあてについて話し合う。 ○ 自分が気がかりとなっている課題について追究してきた予備調査などから、自分の追究課題や方法を見直す意識をもつこと めあて 自分の卒業研究の課題や追究方法について、友達の計画や先輩たちの研究を参考にして、自分の卒業研究計画を見直そう。 ※ 第5学年までの学習経験についての資料を課題の方向別「環境」「国際」「福祉」「郷土」「健康」などの視点からまとめたコーナーを振り返らせたり、予備調査を行ってきたの自分の問題点などを出し合ったりできるようにする。 2 自分の課題や追究方法について、友達や先輩と話し合う。 (1) 課題と追究方法、予備調査してみた感想などの点から代表児の発表を聞き、追究課題のあり方や方法について話し合う。 ○ 追究課題としての条件や長期的な時間を生かした追究ができる方法などの面から、課題や追究方法を見直す観点をもつこと 【予想される課題例】 自分の夢を探るA児 きっかけ 先生になりたいと思っていた 方法 先生たちに仕事の様子を聞く、教生先生に聞く 福祉について探るB児 きっかけ 学校近くのふくふくプラザ 方法 ふくふくプラザの利用の様子を観察・調査 ※ 追究課題における「卒業」研究としての価値性の点や追究方法の具体的、実践的な方法といった点から代表児を選定し、発表させ、両者と自分の課題や方法を比較して話し合わせる。 (2) 比較として取り出した課題や方法の条件をもとに、先輩の研究や大学生の卒業論文に向けた取り組みについて話を聞く。 ○ 卒業の意味や長期的な追究の必要性に気付くこと ※ 卒業生からは卒業の意味の入った追究であること、大学生からは長期の追究をどのようにしていくかといった視点から話していただく。 3 自分の課題や追究方法を見直す。 ○ 課題の価値や追究方法の具体性、多様性、時間的な見直し 課題 ・卒業の意味 ・自分にとっての意味 ・社会とのつながり 方法 ・具体的に ・いろいろな方法で ・長い時間をかけて ※ 計画書をもとに、追究計画について見直す観点を整理させる。	○ 環境問題が地球全体の問題として言われていて国語や社会の学習でも取り上げられている。 ○ 自分は外国の様子について調べてみたけど、インターネットなどでは知りたいところが分からない。 ○ 調べてみて、どんなふうに自分の結論をつくていったらいいのかよく分からない。 ○ A君は、自分の夢や希望に向けて、身近なところから調べようとしている。 ○ Bさんは、自分の身近なところから、問題を見つけて、調べようとしている。 ○ 先輩は、卒業という意味を考えて、自分の課題を決めていったんだな。 ○ 教生先生は、1年間をかけて、図書資料や具体的な調査などいろいろな方法を時間をかけてやっていっている。 ○ 私の課題は、卒業の意味や追究して自分にとっての意味を見つけられるかな。方法も図書だけでなく具体的な活動ができるようにしたい。

ふじ・さくら・梅組 合同生活単元学習指導案

指導者 舩 元 俊 文 谷 崎 和 一 郎
塩 田 利 彦 原 口 和 美

単 元 みんなでハーブガーデンをつくろう

指 導 観

- 本校特殊学級の子供たちは、低学年ふじ組 6 名，中学年さくら組 6 名，高学年梅組 7 名の計 19 名で構成されている。子供たちは、4 月からの学校生活において、新しい学年へのやる気や期待をもち、学級の仲間と共に活動する中で、親近感を高めてきている。合同での学習については、学芸会の劇作りに取り組み、低学年の子供は、高学年の子供からの働きかけに応じて行動し、中・高学年の子供は、自分の役割をきちんとやり遂げようとしていたり、低学年の子供に教えたりすることができるようになってきている。
- 本単元のねらいは、みんなでハーブガーデンをつくろうという目的意識をもち、穴の掘り方や苗の植え方などの課題を解決し、異学年の友達と協同でハーブの栽培を行うことである。主な学習内容は、①ハーブに興味・関心をもつこと、②目的や課題を意識し、見通しをもつこと、③異学年の友達とのかかわりを深めること、④苗の植え方など、栽培活動にかかわる知識・技能、態度を身につけること、⑤自分の役割を意識して、進んで集団活動に参加すること、などである。これらの内容を学習することは、課題解決の力、人との協調的なかかわり方などの生活に必要な知識・技能といった生活力を培うとともに、将来の自立的な生活を考える上でも意義深いと考える。
- 本単元の指導にあたっては、異学年の友達と協同で栽培活動に意欲的に取り組むことができるように、目的意識をもって活動に取り組むための活動構成、子供たちどうしのかかわりを促す場の設定、一人一人の活動を促す個に応じた手順表や声かけ、モデル演示などの観点から支援を工夫する。
具体的には、①卒業生のハーブガーデンへの思いや願いを聞く→異学年グループでハーブを植える→ハーブガーデンを卒業生に紹介する、といった一連の活動構成、②異学年で構成したグループで同じ花壇にたくさんの苗を植える場の設定、③苗の植え方や水のやり方などをとらえるための個に応じた手順表や声かけなどの支援を行う。

目 標

- 1 「みんなでハーブガーデンをつくろう」という目的意識をもち、苗植えなどの課題に見通しをもって取り組み、異学年の友達と協力してハーブを栽培し、卒業生に紹介することができる。
- 2 ハーブガーデン作りに取り組む中で、植物への興味・関心、課題解決の力、栽培活動にかかわる知識・技能や態度、異学年の友達とのかかわり方、などを身に付けることができる。

計 画 (約 4 時間＋課外)

段階	であう (1 時間)	ふかめる (2 時間＋課外)	いかす (1 時間)
活動と内容	1 卒業生のハーブへの思いを聞きハーブガーデン作りの計画を立てる。 ○ 卒業生の思いを感じることをガーデ ○ 目的や課題を意識すること	2 ハーブの苗植えや水やりなどの課題に取り組む。 (1) 卒業生と一緒に苗を植える。 ① ○ 植え方を大まかにとらえること (2) 異学年合同でハーブを植える。 ① (体時 ○ 穴の掘り方や苗の扱い方を身に付けること ○ 友達と協調的にかかわること (3) 継続的にハーブの世話をする。 課外 ○ 同じグループの友達と協力すること	3 卒業生を招待して、ハーブの香りを楽しんだり、今までの活動を紹介したりする。 ○ 育てたハーブの名前や香りなどについてくわしく伝えること ○ 目的達成の満足感を味わうこと
手だて	※ 卒業生からのメッセージビデオの提示	※ 穴の位置を設定するための補助具の提示 ※ 個に応じた植え方をまとめたノート ※ 教師によるモデル演示や声かけ	※ 卒業生に活動を紹介する場の設定 ※ 卒業生からの感想

本時の目標

- グループの友達と協力して、ハーブの苗を植えることができる。

	低学年	中学年	高学年
友達のかかわり方	中学年や高学年の友達の働きかけを受けながら活動することができる。	低学年に働きかけるとともに、高学年の働きかけを受け入れて活動することができる。	低学年や中学年の友達に働きかけながら、協力して活動することができる。
課題解決	Aグループ 材料や道具、場ををもとに状況をとらえ、教師や友達の促しを受けながら、苗植えを行う。	Bグループ 苗を植える課題を意識し、手順や友達の行動を見ながら苗植えをする。	Cグループ みんなでハーブを楽しむという目的意識をもって、手順や友達の行動を見ながら苗植えをする。

準備 計画表 穴の場所を設定する補助具 個に応じた手順表 スコップ ハーブの苗など
学習指導の過程 (個の活動を促す支援の※はティームティーチングの教師の動き)

活 動 と 内 容			個の活動を促す支援
1 卒業生からのメッセージを振り返ったり、計画表を見たりして、本時の学習のめあてについて話し合う。 ○ グループの友達と力を合わせてハーブの苗を植えるという意欲をもつこと ○ 活動への見通しをもつこと めあて グループのともだちと ちからをあわせて ハーブをうえよう。			1 本時学習への目的意識を明確化する支援 ○ 卒業生からのメッセージビデオの提示 ○ グループの活動の場や植えるハーブの提示
2 植え方の手順表をもとに、ハーブを植える。			※ T1が説明、T2～T4は注意を促す。 2 意欲的に苗植えに取り組むための支援 ○ 植え方の手順やポイントをとらえるための個に応じた手順表の提示
Aグループ	Bグループ	Cグループ	Aグループ：材料や道具の写真と行動の写真を対応させたもの Bグループ：行動の写真に簡単な文を付け加えたもの、正しく植えた苗の状態の写真 Cグループ：行動を示す文カードを活動順に構成したもの、正しく植えた複数の苗の写真
(1) 分担された場所に穴を掘る。			
○ 自分の場所を意識して、スコップで土を掘ること	○ 苗が入るように穴の深さを意識して掘ること	○ 自分や友達の穴の深さを意識し、苗をおいて確かめること	
(2) ハーブの苗を植える。			
○ 苗を穴に入れ、土をかぶせたりすること	○ ビニールポットを傾けて苗を取り出すこと	○ 苗を軽くもみほぐしてから植えること	
(3) ハーブの名札やグループの名札を立てる。 ○ ハーブの名前が見えるように土にさすこと ※ 3種類のハーブについて、(1)～(3)を行う。			○ 穴の位置を設定するための穴のあいたシートの提示 ○ 個に応じた声かけ、モデル演示、動作援助
(4) ハーブに水やりをする。 ○ 自分や友達の植えた苗に進んでかけること			※ T1は全体的に場をまわって支援を行う。T2～T4は、それぞれの活動の場について支援を行う。
3 グループごとに植えた苗を紹介し合い、本時学習のまとめをする。 ○ 友達の活動のよさを認めたり、自分の活動への自信をもったりすること ○ ハーブを活用する意欲や見通しをもつこと			3 活動への満足感を味わわせる支援 ○ グループごとに植えたハーブを紹介する場の設定

◇ 提案学習指導全体協議会

テーマ「調和的に展開する教科領域・総合的学習像」

－提案学習指導をもとに奈須先生と考える－

提	案	者	手	島	宏	樹	稲	津	一	徳
			高	野	誠	一	豊	村	雅	義

提案・司会者	吉	田	正	樹
--------	---	---	---	---

指導助言者	立教大学	助教授	奈	須	正	裕	先生
-------	------	-----	---	---	---	---	----

◇ 全体講演

演 題 「子供中心で創る調和的カリキュラムと学力保障」

講 師 立教大学 助教授 奈 須 正 裕 先生
(前 国立教育政策研究所 総括研究官)

◇ ム モ

研究紀要の部

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

—調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化—

研究紀要目次

ページ

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ----- 96

—調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化—

教 頭 小 森 晃
研 究 主 任 吉 田 正 樹
研 究 副 主 任 石 田 耕 一

文化課程の学習

ことばと豊かにかかわり伝え合う国語科学習 ----- 122

—読書経験をもとに本と豊かにかかわる読書活動の展開—

国 語 科 部 松 藤 秀 子

自ら数理を求め続ける算数科学習 ----- 129

—自ら考えの一般化を図る算数科学習の展開—

算 数 科 部 加 藤 英 也

—直観を働かせる学習の展開—

算 数 科 部 野 田 真 功

音楽とのかかわりを豊かにする音楽科学習 ----- 141

—自分の楽しみ方をつくりだす音楽活動の展開—

音 楽 科 部 豊 村 雅 義

—多文化的にアプローチする創造的な音楽活動の展開—

音 楽 科 部 原 ク ミ

自ら求め創る喜びを味わう図画工作科学習 ----- 153

—材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの展開—

図画工作科部 北 田 尚 雄

運動へのかかわりを豊かにする体育科学習 ----- 160

—動きをイメージし広げる表現運動の展開—

体 育 科 部 岩 城 一 磨

自然のきまりを思考する楽しさを味わう理科学習 ----- 167

—自然とのかかわり方を追究する学習の展開—

理 科 部 野 口 信 介

共生社会を拓く社会科学習 -----	174
—国土への愛情を深める学習の展開—	

社 会 科 部 猿 樂 隆 司

豊かな家庭生活を創り続ける家庭科学習 -----	181
—家族とのかかわりを見出すもの作り学習の展開—	

家 庭 科 部 篠 原 裕 子

生活課程の学習

心豊かに生活を拓く生活学習（生活科） -----	188
—身近な地域との絆を創り出す学習の展開—	

生 活 科 部 石 田 耕 一

よりよく生活を更新する「あらつ学習」 -----	195
--------------------------	-----

総 合 学 習 部 高 野 誠 一

仲間と共に学校生活を築く特別活動 -----	211
—集団と自己を見つめる学級活動の展開—	

特 別 活 動 部 矢 野 俊 次

自ら未来を拓く道徳学習 -----	218
—自己を問い続ける体験連動型学習の展開—	

道 徳 部 石 硯 昭 雄

自らよりよい健康生活を創る保健学習 -----	225
—生活習慣を調べ、ライフスキルを形成していく活動の展開—	

保 健 部 森 田 常 子

豊かな生活をめざす学習像の明確化 -----	231
—個別の指導計画を生かした指導法の工夫を通して—	

障 害 児 教 育 研 究 部 舩 元 俊 文
 坂 田 佳 美
 早 川 由 洋
 谷 崎 和 一 郎

子供自らが数量や図形へのとらえ方を広げる算数科学習 -----	234
—多様な図形構成を位置づけたかたちあそびを通して—	

障 害 児 教 育 研 究 部（算数科） 坂 田 佳 美

楽しい生活を共に創り出す生活単元学習 -----	242
—個の役割が広がる集団活動の展開—	

障 害 児 教 育 研 究 部（生活単元） 谷 崎 和 一 郎

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

—調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化—

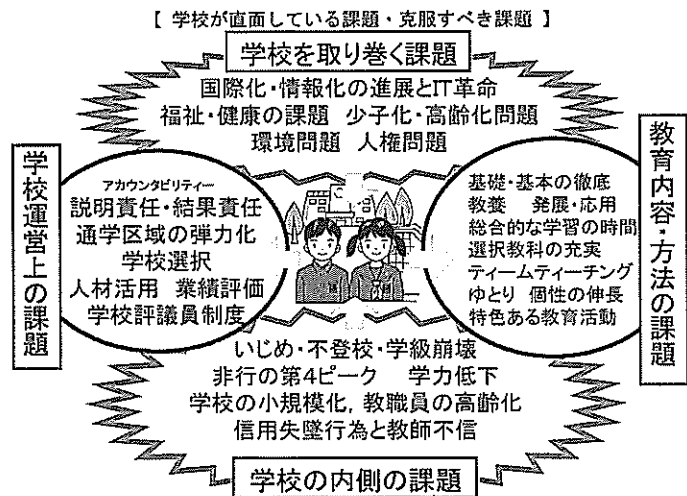
1 主題設定の理由

(1) 地球新時代の学校づくり！そのグランド・デザインを描く！！

21世紀いわば地球新時代を迎え、わが国のみならず多くの国々が教育改革の必要性を痛感している。サミットが設立されて以来初めて教育問題が協議の柱に取り上げられるほど、教育改革は世界的潮流になっている。我が国だけが孤立して教育改革を行っているのではない。しかし、下図のように、わが国の学校教育は、社会の大きな変化が突きつけてくる「待てない課題」と人間の「心の荒廃による課題」、いわば学校の外側と内側からのあまりに多くの緊迫した課題に直面している。また、教育改革のなかで次々に打ち出されてくる、学校運営上の多種多様な課題、教育内容・方法上の課題を克服し実現化していかなければならない。教育改革は一体どこに向かおうとしているのか、学校現場はその進路や方向性に当惑している。

こうした現状のなかで、各学校が取り組まねばならないことは、まずもって学校教育の原点に立ち返り、子供たちをどのように善く育てていかなければならないかを問い直すことである。特に新教育課程においては、授業時数が削減され教科の指導内容も従来に比べて3割ほど削減されたことから「学力低下」が懸念されている。現に大学生の「学力低下」問題は社会的に大きな話題となっている。しかし、こうした学力低下を論じる場合重要なのは、学校で身につけさせる学力の意味をじっくり考えることである。学力のどんな側面を重視するかは、時代とともに変わり得る。その全体像を明示して、それを教育課程のなかでどう保障するかを具体的に提示せねばならない。どんな学力を、どの段階で、どの程度身につけさせるのかを、教育課程のレベルで具体的に示すことである。これは、学校教育自体の基礎・基本は何かを明確にすることに他ならない。

学校は単なる「習い事」の場ではない。学校教育のねらいは「生きる力」の育成である。学校は子供が生涯にわたり学び生きる基礎を獲得する場であり、子供自らが学ぶ力と子供自ら心豊かに生きる力の基礎・基本を調和的に発達させる場でなくてはならない。学校を、よりよい社会と豊かな自己を実現していく人間教育の場にしていくことこそが、信頼される学校を創造することである。子供たちを可能な限り善く成長させていくために、今こそ、各学校は、めざすべき「子供像・学力像・学校像」を再確認・再検討して、地球新時代の学校づくりに向け、そのグランド・デザインをしつかりと描いておかねばならないのである。



子供を善く成長させるために

(2) 地球新時代を豊かに生きる人間の育成を！

一人一人の才能を伸ばし「創造できる人間」の育成を！

地球新時代は、ITや生命科学など、科学技術がかつてない速度で進化し、世界中が直接つながり、情報が瞬時に共有され、経済のグローバル化が進展する時代である。世界規模で社会の構成と様相が大きく変化しようとしており、既存の組織や秩序体制では対応できない複雑さが出現している。しかし、環境問題、国際問題、少子化・高齢化の問題、福祉や健康などの差し迫った「待てない課題」に対しては、未だかつて十分な答えや対策は見出せていない。不易とされてきた秩序や学力観が揺らぎ、伝統的な知の体系そのものも大きな変質を迫られている。もはや従来の学校教育システムでは、このような時代の流れに対応していくことは難しい。教育改革国民会議の中間報告（平成12年9月）にも提案されているように、一人一人の才能を伸ばし、創造性に富む人間を育成することが今求められている。「同じことを同じように」教えてきた一律主義による教育を改め、個に応じ個性を伸ばす教育システムを導入し、数々の「答えの出ない課題」に対し、よりよい「応え」を創造できる人間を育てていかねばならないのである。



社会課題と自分自身に「主体的にはたらきかける人間」の育成を！

社会の大きな変化のなかで、子供たちの知情意も大きく変わっているため、子供と環境の変化に無関係な学習は意味をもたなくなる。ユネスコの「21世紀教育国際委員会」でも指摘されているように、これからは、①知ることを学ぶ、②為すことを学ぶ、③共に生きることを学ぶ、④人間として生きることを学ぶ、といった資質・能力を子供たちに獲得させることが重要になってくる。これらは、環境と自分自身に進んで働きかけ、よりよく更新していくための基礎・基本的学力ともいえる。つまり、自己学習力・自己教育力を育て、それが究極には自己実現の力となるように高めていくのである。



「人間らしく生きる人間」の育成を！

さまざまな社会的課題が山積み膨らみつつある一方で子供たちは、ヴァーチャルな世界では豊かに生きようとしても、社会現実を目を向けるところか遊離しようとしている傾向にある。しかも、自立の遅れ、モラトリアム人間、ジコチュー、すぐムカツキ・すぐキレルと、さまざまに表現されるように、社会的に一人前に育っていない状況が一層強まり、自己感覚や他者感覚、社会的規範軸を喪失した心の空洞世代の増加による、さまざまな問題行動が発生し深刻化している。いじめ、不登校、校内暴力、学級崩壊など、学校教育は、社会課題に対応する以前に、子供の現実に対応できずにいる。21世紀を豊かに生きる力を育てる教育、創造性・主体性に富む人間を育成する教育の土台として、まず人間らしく生きる人間を育てる教育、人間が兼ね備えるべき人間性を育む教育が求められている。



(3) 本校の研究の経過を踏まえて

本校では、平成9年度より「人間教育の在り方を問う！」というスローガンのもと「豊かな人間の育成を目指す教育の創造」を研究主題に掲げ、人間が人間らしく生きる人間存在の原理を想定し、その原理に基づいた学習指導の在り方を研究してきた。そこでは体験など具体的な活動を重視すると同時に教科領域の学習を経験单元的に構成していくことの可能性を探り、「総合的な学習の時間」が導入された後は子供主体の活動から「総合的な学習の時間」の学習の在り方を明らかにしてきた。この「総合的な学習の時間」の学習については、地域名称をもとに「あらつ学習」とネーミングして、できる限り子供の現実的で切実な求めや興味・関心に応じるような活動の展開をめざしてきた。子供たちは福祉施設で働く方、伝統文化を守り続けている方など地域のさまざまな方とかかわりながら、熱心に取材したり、共に体験をさせていただいたり、インターネットや文献で情報



収集をしたりしながら自分なりの追究を展開し「自分なりの応え」を見出していった。このように「あらつ学習」のなかで、旺盛な追究や創造的な思考、工夫された表現など価値ある活動が数多く見られるようになってきた。そこで教科領域の学習においても、このような旺盛な活動や創造的な思考・表現の姿を具現化するために「あらつ学習」の学習原理を取り入れてきた。具体的には、「あらつ学習」で大切にしたい4つの学習活動原理「生活吟味・自己追究・内容創造・生活更新」を、教科領域の学習においても可能な限り取り入れながら経験单元的に単元を構成し、子供の求めに応じる、子供にとって意味のある活動として学習を展開できるようにしてきた。その研究の成果については昨年度の研究発表会で公開し、県内だけでなく全国に情報発信を行った。



本年度は豊かな人間を育成する教科領域・総合的学習を子供の切実な求めのもとに展開するといった「調和的展開」の理念を受け継ぎ、さらに発展させながら、教育課程全体をどう構成していくかといった点に視点を広げた研究を進めていく。また、昨年度の課題として、教科学習の全てを経験単元として構成することの困難さが指摘された。教科学習は子供たちに触れさせるべき文化的な内容から構成されている。それを経験単元として子供の生活現実の課題解決に位置づけることは、教材開発の難しさをともしながら同時に一般的な方法としてまとめにくい結果となっている。この点について、本年度は再度めざす「豊かな人間像」を見直し、そのために各教科領域・総合的学習が担う役割や立場を明らかにすることや、それぞれの学習のなかで特に大切にすべき資質・能力を重点化し、それらをどのように確実に伸ばしていくのか、相互の学習をどう連動させていくかといった、教育課程全体のなかで調和的に展開する学習のあり方の究明に重点を置いて研究実践を進めていく。



2 主題の意味

(1) 「豊かな人間」とは

21世紀を、豊かに生きる人間像を考えるには、まずもって「人間としての在るべき姿」をとらえておかねばならない。本校では、これまでの研究の積み重ねのなかで、人間の生きる環境や働きかけの対象とその環境のなかでの生き方から、次のような人間存在の原理を考え大切にしてきた。

—— 本校が考える人間存在の原理 ——

- 人間は自然と共に生きる存在である。
 - ・「自然と共に生きる」ということは、自然の恵みを受け、生命のつながりを感じながら、自然と調和して生きることである。
- 人間は社会のなかで生きる存在である。
 - ・「社会のなかで生きる」とは、集団や社会の仕組みのなかで、協調し、連帯しながら、人とかかわって生きることである。
- 人間は価値を求めて生きる存在である。
 - ・「価値を求めて生きる」とは、真理や心の充足を求めて、主体的に創造的に自己実現しながら生きていくことである。

そしてこの3つの原理を踏まえ、本校がめざす豊かな人間像（子供像）を次のように考えた。

—— 本校がめざす豊かな人間像 ——

豊かな人間とは、よりよく生きたいという願いをもとに、進んで自然・社会・文化環境とかかわり、生活や文化に対する感じ方・考え方・行い方や人間らしい在り方・自分らしい生き方を見出しながら、自らの生活をよりよく更新するとともに文化をよりよく拡充していく人間である。

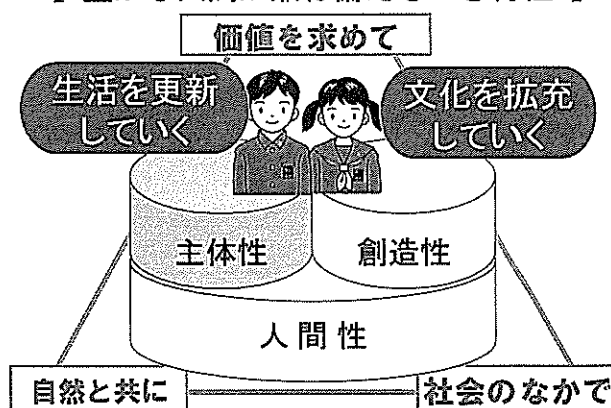
自分の将来をよりよいものにしたいと願い、そのために現在をどうすべきかを考え行動するのは、人間だけがもつ特徴であり、生涯続く欲求である。この欲求は、人間を取り巻く自然・社会・文化環境への積極的なかかわりを生み出していく。人間は、この環境へのかかわりの過程で、さまざまな経験と学びを積み重ね、生活や文化に対する自分らしい感じ方・考え方・行い方と人間らしい生き方を見出し、自己の有能さを高めていく。本校がめざす豊かな人間とは、社会の大きな変化に主体的・創造的に対応

しながら、環境へのかかわりと学びを繰り返し、自分の生活をより納得のいくものへと更新（生活更新）していく人間である。そして、先人の文化財を受け継ぎよりよいものへと拡充（文化拡充）しながら、自己実現していく人間である。具体的には、次の3特性を兼ね備え高めている人間である。

—— 豊かな人間が兼ね備えるべき特性 ——

- よりよく生きたいと願い、人間らしい在り方・自分らしい生き方を求めていく 「人間性」
- 目的や課題の達成・解決をめざし、新しい価値あるもの・ことを創り出していく 「創造性」
- 自然・社会・文化環境と自分自身に進んでかかわり、よりよく変化させていく 「主体性」

【 豊かな人間が兼ね備えるべき特性 】



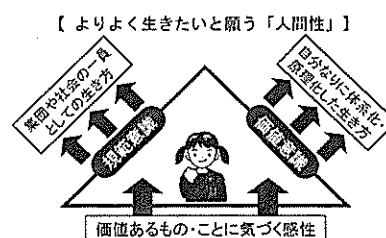
(2) 「豊かな人間の育成」とは

豊かな人間の育成とは

自然・社会・文化環境と自分自身に進んでかかわる体験や活動を通して、生活や文化に対する感じ方・考え方・行い方と人間らしい在り方・自分らしい生き方を自ら見出し変化・向上する学びを繰り返し積み上げながら、子供の「人間性・創造性・主体性」を高めていくことである。

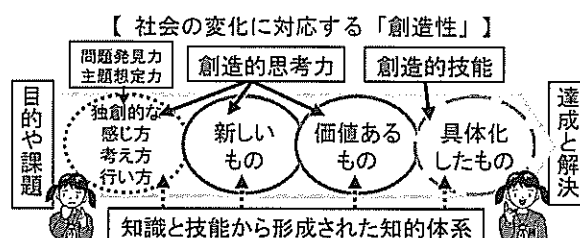
「人間性」は、よりよい生活を維持し発展させようとする願い、人間らしい在り方・自分らしい生き方を見出し実現し続ける心の特性である。具体的には、次の3側面から高まっていく特性である。

- 価値あるもの・ことに気づく感性
- 集団や社会の一員として生きる規範を大切に
考え行動する意識（規範意識）
- 自分が納得のいく生き方を見出し体系化・原理
化しながら考え行動する意識（価値意識）



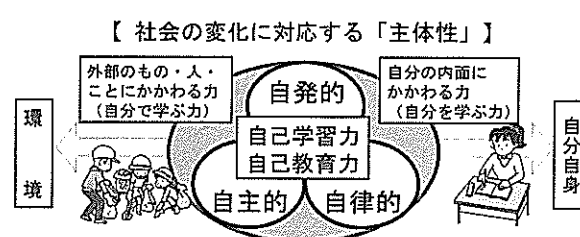
「創造性」は、目的や課題の達成や解決のために、①自分らしい感じ方・考え方・行い方を見出し
ながら、②新しいもの・こと、③価値あるもの・こと、④具体化したもの・こと、を創り出していく
という4つの側面で発揮される特性である。「創造性」は次のような資質・能力として高まっていく。

- 問題を発見する力、^{テーマ}主題を想定する力
- さまざまな思考方略を活用・併用しながら、知
識や情報を関連づけ発想・構想する創造的思考力
- アイデアやイメージを具現化する創造的技能
- 獲得した知識や技能から形成される知的体系



「主体性」は、自らの強い求めや願いをもって（自発的に）、他に強制されたり盲従したりせずに
自分自身の力で（自主的に）、衝動的にならず自分自身を律しながら（自律的に）、自然・社会・文
化環境と自分自身の双方にかかわり、よりよく変化させていく特性である。「主体性」は、次のよう
な資質・能力として高まっていく特性であり、究極には自己実現の力として発揮される特性である。

- 情報活用能力、コミュニケーション能力、観察
力や調査力など、自分を取り巻くもの・人・こと
へのかかわり方（学び方）を獲得し活用する力
- 自己統制力、自己評価力など、自分の内面への
かかわり方（学び方）を獲得し活用する力



このように、人間を人間たらしめている「人間性」の育ちを基盤に、社会の変化に対応していく特
性ともいえる「創造性・主体性」を高めていくことで、豊かな人間の育成をめざしていくのである。

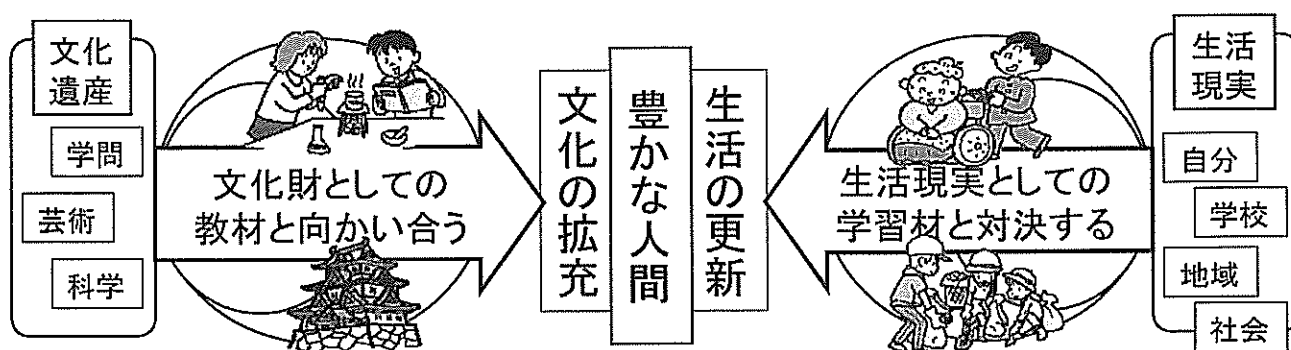
(3) 豊かな人間を育成する教育課程の創造とは

「人間性・創造性・主体性」を高めていくために、各教科領域・総合的学習は、それぞれどん
な資質・能力を育ていかなければならないかを明確にするとともに、その資質・能力が、生活の更
新や文化の拡充に向けて、バランスよく総合的に生きて働く資質・能力として高まるよう、教科
領域・総合的学習を調和的に展開していく教育課程と学習指導の在り方を究明することである。

3 副主題の意味

(1) 「調和的に展開する教科領域・総合的学習」とは

教科とは、先人が築き上げてきた学問・科学・芸術などの文化遺産を、学習者である子供の発達に応じて、最も効果的に習得し得るように系統化・組織化した教育内容のまとまりである。したがって、教科学習では、文化遺産としてまとまった教材と向かい合うなかで、文化を享受し拡充していく豊かな人間の育成をめざすことになる。これに対して、総合的学習や領域の学習において子供の学習材となるのは、日常生活・学校生活・社会生活などの生活現実には他ならない。総合的学習や領域の学習では、生活現実との対決を通じて、生活をよりよく更新していく豊かな人間の育成をめざすことになる。



つまり、教科学習は文化の拡充の側面から、総合的学習と領域の学習は生活の更新の側面から豊かな人間の育成をめざす重要な役割を担っているのである。こう考えると、総合的学習を主に位置づけ、教科学習を知識・技能の習得学習として融合・内包したり、あるいは教科学習を主として総合的学習や領域の学習をその発展学習として請け負的に位置づけたりするのは望ましくないこと、教科領域・総合的学習のいずれかが主となったり、あるいは相対立したりするような教育課程を編成することは好ましくないことがわかる。教科領域・総合的学習は、それぞれに固有の役割と立場を担いながらも、豊かな人間の育成をめざす教育課程のなかで調和的に展開させていかねばならないのである。

—— 調和的に展開する教科領域・総合的学習とは ——

文化の拡充と生活の更新という役割や立場を担い、それぞれの学習が充実するとともに、相互補完的・相互促進的な関係を構築しながら、豊かな人間の育成をめざし展開することである。

(2) 「調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化」とは

本年度は、次の３点から、調和的に展開する教科領域・総合的学習の単元構想や年間計画作成の在り方を明らかにして、豊かな人間の育成をめざす特色ある教育課程を創造していく。

—— 学習像を明確化する３つの観点 ——

○ 教科領域・総合的学習が担う役割・立場の明確化

文化の拡充と生活の更新の２つの側面から豊かな人間の育成をめざす学習として、各教科領域・総合的学習が担う役割・立場と、各学習で特に大切にすべき資質・能力を明らかにする。

○ 相互に連動する教科領域・総合的学習像の明確化

教育課程全体のなかで、各教科領域・総合的学習を連動させ、相互補完的・相互促進的に資質・能力を高めていくための、単元や題材の系統や配列の在り方を明らかにする。

○ 同じ学びで展開する教科領域・総合的学習像の明確化

教科領域・総合的学習のいずれも、人間性・創造性・主体性を高めていく学習として展開していくための単元構想の在り方を明らかにする。

4 研究の具体的構想

(1) 教科領域・総合的学習が担う役割・立場の明確化

豊かな人間を育成する2側面（「文化の拡充」と「生活の更新」）から、教科領域・総合的学習を、「文化課程」と「生活課程」の2つの課程としてとらえ（右図参照）、教育課程を編成する。「文化課程」には生活科を除く8つの教科学習を位置づける。「生活課程」には、生活学習（生活科）を低学年の総合的学習ととらえ「あらつ学習（本校の総合的な学習の時間）」、領域の学習である特別活動と道徳学習（道徳の学習の時間）とともに位置づける。そして社会科学習・理科学習は生活学習から、家庭科学習は「あらつ学習」から分化し立ち上がる教科学習としてとらえる。

【「文化課程」と「生活課程」】

課程	低学年	中学年	高学年
文化課程	国語・算数		
	音楽・図画工作		
	体育		
生活課程	生活学習 (生活)	社会・理科	
		あらつ学習 (総合的な学習の時間)	家庭
	特別活動（学級活動）		
	道徳学習（道徳の学習の時間）		

このように、教科学習と領域・総合的学習とを2つの課程としてとらえ、文化課程は教科の論理を基準とした教科・分化カリキュラムとして、生活課程は子供と生活の論理を基準とした経験・総合カリキュラムとして構成していくことで、従来相対立していた教育課程編成の原理のそれぞれのよさを採用した、豊かな人間の育成をめざす本校の特色ある教育課程の創造が可能となるのである。

「文化課程」の学習において、子供たちがかかわる学習対象は、日常生活ではなかなか出合えない、学問・科学・芸術などの「文化材」と呼び得るほどに高度に洗練されたもの・ことである。しかし、それらは親学問や文化領域をもとに、すでに組織化・体系化されたもの・ことであり、子供の発達段階を考慮して系統化され、その原理・法則が見えやすいように単純化・捨象化された「教材」である。子供たちは、この「教材」とのかかわりを通して、先人の文化創造の過程を経験する。そして、人間が長年に渡って築き上げてきた文化を継承し新たな問題に適用し解決を図りながら文化を拡充していく資質能力を高めていくのである。したがって、文化課程においては、各教科固有の知識や技能による知的体系を形成するとともに、それを活用する各教科独自の普遍的・論理的・分析的な問題解決の方法を学ぶことによって、文化を拡充する創造性を高めることが特に重要となる。それと併せて、教科独自の環境へのかかわり方・学び方（自己学習能力）を獲得し活用していく主体性と、真理や真実、美などを求め、人間らしい生き方の規範や原理を大切にする人間性を高めていくのである。

これに対し「生活課程」の学習において、子供たちがかかわる学習対象は、ごく日常の生活現実や社会現実である。それは、子供がとらえた一部分ではあっても、あくまで現実の環境の一部であり、相当に複雑で社会的機能も多数担っている。生活学習と「あらつ学習」では身近な生活現実・地域の生活現実が、特別活動では学級生活・学校生活の現実が、道徳学習では自分自身の心の現実が、その学習対象となる。子供たちはこの現実の学習材との対決を通して、自らの願いの実現や問題の解決に向けて、自らの生活そのものをより納得のいくものへと更新していく資質・能力を高めていくのである。したがって、生活課程においては、生活現実から自分が抱いた気かきの解消や願いの実現にむけて、現実のもの・人・ことに、自発的・自主的・自律的に、さまざまな学習活動を選択し組み合わせながらかかわり、対象と自分を更新していく主体性を高めることが特に重要となる。それと併せて、生活現実から課題を見出し、既得の知識や情報を組み合わせ活用して総合的・実践的に問題解決する創造性と、よりよい自分の生き方を求め体系化・原理化していく人間性を高めていくのである。

【文化課程と生活課程における内容構成・系統化の原理】

課 程	文 化 課 程	生 活 課 程
内容構成	文化領域や親学問を背景に，現代社会に必要な共通教養として内容構成する。 (教科・分化カリキュラムとして構成)	生活現実や社会現実のなかで生まれてくる問題から価値ある内容を構成する。 (経験・総合カリキュラムとして構成)
人間性	真理や真実，美などを求め，人間らしい生き方の規範や原理を大切に作る人間性	よりよい自分の生き方を求め体系化・原理化し大切にしていける人間性
創造性	教科独自の知識・技能による知的体系とそれを活用する教科独自の問題解決力	既得の知識や情報を組み合わせ活用しながら総合的・実践的に問題解決する力
主体性	教科独自の，環境への研究的・文化的なかわり方と学び方（自己学習能力）	さまざまな学びを組み合わせ，対象と自分を更新するかわり方（自己実現力）
内容系統	文化領域や親学問による系統性と子供の発達段階から，明確な系統化が図れる。 (特に創造性の育ちから系統化を図る。)	子供の資質能力の育ちと他学習との関連や連動を考慮して，系統化を工夫する。 (特に主体性の育ちから系統化を図る。)

このような各学習の役割・立場を踏まえ，豊かな人間の育成のために各学習で特に大切にすべき資質・能力を，「人間性・創造性・主体性」の高まりから具体的に重点化・系統化した。(次頁表参照)

「人間性」の点からは，自己を意識し始める発達段階を考慮し系統化を考えていく。「創造性」の点からは，特に問題発見力と思考方略の傾向から系統を考える。

○ 具体化→抽象化→一般化

○ 事物・現象の関係づけ

→事象，知識や情報の関係づけ

「主体性」の点からは，一人学びとしての基本的な自己学習能力から，それらを組み合わせ応用し続ける自己教育力，生き方の課題をもち自己実現する力へ高める。

【「人間性」の育ちによる系統化】

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
自分への気づき					
人間らしい在り方(規範意識)					
自分らしい生き方(価値意識)					
価値あるものに気づく感性					

【「創造性」の育ちによる系統化】

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
具体化					
知識・情報の関係づけ					
事物・現象の関係づけ					
抽象化					
一般化					
具体的事物・現象の問題発見					
抽象的な事象の問題発見					
複雑な事象相互の問題発見					

【「主体性」の育ちによる系統化】

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
自己学習力					
自己教育力					
自己実現力					

【教科領域・総合的学習の授業時数 ※学習指導要領に準拠】

課 程		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
文化課程	国 語	272	280	235	235	180	175
	算 数	114	155	150	150	150	150
	音 楽	68	70	60	60	50	50
	図画工作	68	70	60	60	50	50
	体 育	90	90	90	90	90	90
	理 科			70	90	95	95
	社 会			70	85	90	100
	家 庭					60	55
生活課程	総 合 的 学 習	生活学習（生活）		あらつ学習（総合的な学習の時間）			
		102	105	105	105	110	110
	特別活動	34	35	35	35	35	35
	道徳学習	34	35	35	35	35	35
総授業時数		782	840	910	945	945	945

【教育課程と教育内容の重点化】（○は主体性，◎は創造性，●は人間性の観点から重点化した内容）

課程		低 学 年	中 学 年	高 学 年	課程
文 化 課 程	国 語	◎ 課題を解決するために、言葉を手がかりに論理的に思考したり理想像を広げたりしながら、自分の思いや考えを創り出しまとめていく能力 (言葉で考える力) ○ 目的に応じて必要な言語情報を取捨選択したり、目的や意図・状況に応じて自分の思いや考えを相手に分かるよう効果的に表現したりして、言葉で伝え合う能力 (言葉で伝え合う力) ● 互いに理解し合うために、自他の言葉と国語を尊重しながら、よりよい言語生活・言語文化を築いていこうとする態度 (言葉を大切にすること)			文 化 課 程
	算 数	◎ 出合った事象と類似した経験や学習を関連づけながら見通しをもち、演繹・機能・類推などの論理的な思考力を駆使しながら数理を発見し再構成していく能力 ○ より包括的で一般性のある法則や解決方法を求め、高めていこうとしたり、獲得した数理を活用したりする能力 ● 数理を生み出す活動や数理を活用し自分の生活を高める活動を通して、自他のよさや可能性に気づき、自分への自信を高めていく態度			
	音 楽	◎ 様々なジャンルの音楽や様々な音楽活動の美しさや楽しさを感じるとともに、それらをよりよく表現・鑑賞しようとする方法を考え、音楽活動を進める能力 ○ 様々な音楽に関心をもち、音楽活動への意欲を高めながら、音楽文化とかかわり、生き生きと表現したり鑑賞したりする能力 ● 自分にとっての音楽の価値を見出す感性をもち、よりよい音楽や新たな音楽を求め、音楽経験を生かして自分の生活をより潤いのあるものにしようとする態度			
	図 工 芸	◎ 材料や造形対象に対する見方・考え方・感じ方などから、自分らしい求めをもち、その求めから関連づけて新しい発想や方法などを創り出す能力 ○ 自分の求めから積極的に材料や造形対象にかかわり、表現や鑑賞の活動をよさを味わいながら自分らしさを発揮して造形活動に取り組む能力 ● ものの本質や美しさなど価値あるものに気づく感覚と深く感じ取ろうとする態度			
	体 育	◎ 運動の行い方から自分の動きの視点をとらえ技能を高めながら、自ら考えたり工夫したりする新たな運動のかかわり方を創り出す能力 ○ 友達と仲良く活動しながら協力して課題解決を行ったり、自ら積極的に運動にかかわりながら、自分の運動課題の達成を味わったりする能力 ● 運動に繰り返しかかる体験を通して、運動の楽しさや喜びを味わうとともに、運動を生涯にわたって愛好していこうとする態度			
生 活 課 程	生 活 学 習	○ 諸感覚を働かせながら、対象に敏感に反応し、自分なりのかかわり方、調べ方、表し方、伝え方などを工夫しながら、思いの実現に向け、身の回りのもの・人・ことに働きかけを行っていく能力 ◎ 具体的な活動や体験において自分なりの気づきや行動の仕方を見出し、それを自分と身近な人々、社会および自然とのかかわりのなかで活用しようとする能力 ● 身近な人々、社会および自然に愛着をもち、あらゆる他者への優しさを発揮しながら、他者と協調的に活動し自分を高めていこうとする態度	◎ 自然現象の性質や決まりに対して問題意識をもち、眼前の現象を、自分の考えに即した観察・実験の結果をもとに客観的に解釈し、さまざまな視点から捉える能力 ○ 見出した問題に対して、解決の見通しに沿ってねばり強く追究する能力 ● 自然への畏敬の念をもつとともに、自然のなかで生活していることの意味や価値を見出そうとする態度		理 科 社 会 家 庭
			◎ 社会場面での課題や自分が抱いた問題の解決に向けて、多面的に考え公正に判断しながら、社会的事象の意味や相互関係などについて実感的に理解する能力 ○ 観察・資料活用・表現の技能を発揮しながら、社会事象と進んでかかわり、進んで解決に取り組む能力 ● 公民として社会義務や責任を果たしていく態度		
			○ 自分の課題追究を構想して、情報活用や表現を繰り返しながら、自らの応えを見出し生き方を定める能力 (学習構想力・情報活用・総合表現力・自己決定力) ◎ 自分の課題を見出し、その解決のために、既知の知識や技能を総合的に活用・応用しながら、多面的に考える能力 (多面的・総合的な見方・考え方) ● 共生の生き方のよさを実感し、自分の課題追究活動への成就感や効力感から自分に自信をもつ態度		
			◎ 家庭生活に関する様々な課題を科学的に解決するために、実践的な知識や技能を獲得し活用していく能力 ○ 生活をよりよくしようと、進んで家庭生活に参画し実践していく能力 ● 家族の一員として家庭生活を大切にしていこうとする態度		
	特 別 活 動	○ 集団の目標を達成するために、合意を生み出す討議能力と、決定したことを役割を分担して責任をもって遂行・実践する能力 ◎ よりよい学校生活を創り出すために、生活上の諸問題に気づいたり、自分や集団の在り方や行い方を考えたりする能力 ● 友達や他者の考えや行動を共感的に理解したり、集団の目標達成のために自分を律して友達と協調・協力する態度			あ ら つ 学 習 特 別 活 動
道 徳 学 習	● 真摯に誠実に生きる人や自分を支えるもの・人・ことのすばらしさを感じ取り、よさを追究したり発揮したりして生きることの憧れや喜びを感じる態度 ○ 自分の生活や体験を振り返り、自他共によりよく生きる上で大切な行為を積極的に実践しようとする能力 ◎ 具体的な道徳的問題場面において、状況をとらえ、他者の心情を推し量ったり価値への理解を深めたりしながら、自らの為すべき行為を判断する能力			道 徳 学 習	

(2) 相互に連動する教科領域・総合的学習像の明確化

教育課程全体のなかで各教科領域・総合的学習の役割・立場を明確化した上で、それぞれの学習の関連を考慮し、学年系統や年間配列・実施時期等を工夫した相互補完的・相互促進的な展開を考える。ただし、先の考え方にに基づき、各学習の境をなくし融合・統合することはできるだけ控え、あくまで「関連的指導」の範疇で考える。本校では、これを「学習の連動」と称し次の4つに類型化している。

学習の連動を考える4類型

A 資質能力の連動

教科領域の学習・総合的学習で培った資質・能力が相互に生かされ高められるように、単元や題材の系統や配列（年間計画）を考え、系統的・計画的に学習を展開する。

B 追究課題の連動

総合的学習の追究課題を生かす教科領域の学習の実施時期や位置づけ方を工夫したり、教科領域の追究課題を発展させて総合的学習を立ち上げたりすることによって、学習に対する強い求めを生かした学習を展開できるようにする。

C 追究方法の連動

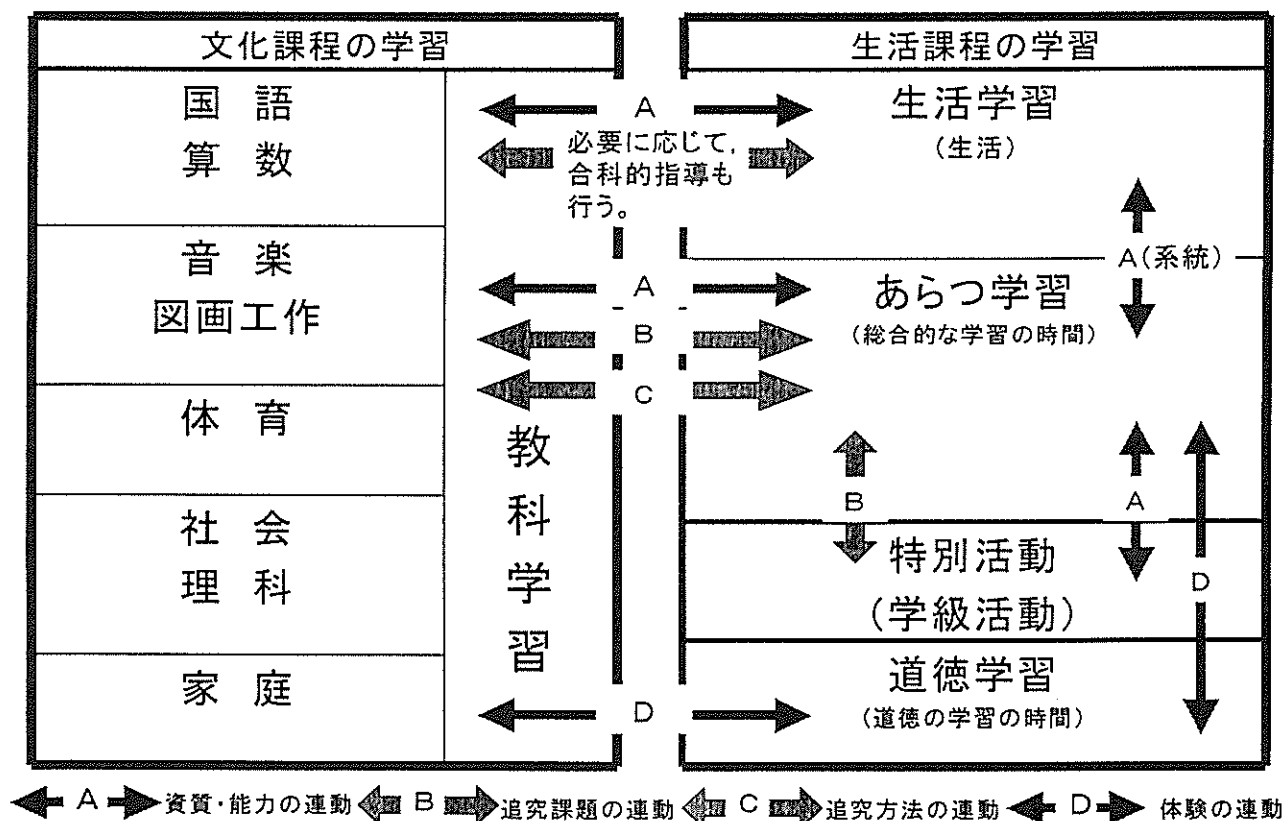
総合的学習の追究過程のなかで生じる、追究方法への子供の求めを生かした教科学習を同時期に展開していくことで、相互に学習が高まるようにする。

D 体験の連動

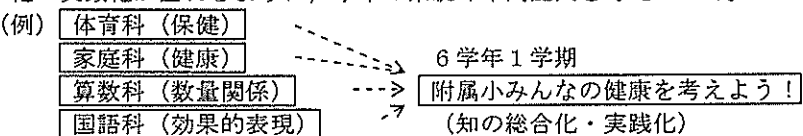
各教科領域・総合的学習における体験を通して、自分の心を見つめ直す学習を展開する。

学習の連動を考える上で、特に重視していくのは、特色ある教育活動を実施する時間として設定され、内容設定や配列に自由性がある総合的学習、つまり生活学習と「あraft学習」である。そこで、特に、総合的学習と各教科・領域の学習とが相互補完的・相互促進的に高まり合う連動のあり方を明確化して、単元設定とその学年系統や年間配列を工夫していく。（具体的には年間指導計画を参照）

【特に重視していく「学習の連動」】



【教科領域の学習と総合的学習の連動】

特に大切にする連動		学習の連動を図るポイント
教科 学習と 総合的 学習	A 資質・能力の連動	○ 教科学習で獲得した知識・技能が、総合的学習で発揮・活用され、知の総合化・実践化が図れるように、学年の系統や年間配列を考えていく。 (例) 
	B 追究課題の連動 C 追究方法の連動 ※ 低学年では、 合科的指導も大切にする。	○ 総合的学習における追究課題や追究方法への子供の求めを教科学習の側から大いに生かしていく、同時的・並行的な単元展開を工夫する。 ○ ただし、文化課程と生活課程の学習の境をなくしたり融合したりして一つの単元にまとめることはできるだけ避けるようにする。 4年 お隣の国・韓国調べ隊！ 4年 節約・リサイクルに挑戦！ 同時に追究 -----> 追究方法を教科学習で学ぶ 国語科 日韓昔話研究 算数科 表とグラフ
特別 活動と 総合的 学習	B 追究課題の連動	○ 両者は、同じ「生活課程」の学習として、生活更新を担う点では類似しているが、それぞれ独自なねらう内容を担っている。特別活動で特にねらうのは、集団として自治的・組織的に課題を追究・実践する力であり、総合的学習でねらうのは、自力で課題を見出し追究していく力である。 ○ それぞれの学習の固有の役割・立場を大切にするためには、両者を融合・統合するのではなく、「追究課題の連動」を図ることが望ましい。総合的学習の追究のなかで生じた学級全体の共通の願いから、集団で実践する活動として学級活動を立ち上げたり、学級活動のなかで生じた、個の気がかりや疑問から、個々に課題を設定し追究する「あらつ学習」を立ち上げ展開していく。 3年 あらつの虫たち(あらつ) → 西公園にカブトムシを復活させよう(学級活動) 4年 4の1がーデーをつくろう(学級活動) → 樹木マップをつくろう(あらつ)
総合的 学習相互	生活学習とあらつ学習 A 資質・能力の連動 (系統的な連動)	○ 「あらつ学習」では、生活学習における活動の様相を大切にしていく。中学年では、特に具体的な体験を重視した追究活動を展開し、それが高学年になるにつれ、より研究的な追究活動に高まっていくようにする。 ○ これに対し、生活学習の方も「あらつ学習」を立ち上げていく学習として、内容設定や学び方の見直しを行っていく。 (特に、地域社会への参画を重視した、単元設定を工夫していく。)
	あらつ 学習相互 A 資質・能力の連動	○ 「資質・能力の連動」としては、まず、「あらつ学習」で育てる資質・能力を系統化・重点化し、その高まりを考慮しながら、特に子供たちの追究がより高度な追究になるように、単元の系統や年間配列を考えていく。 ○ また、各学年に1つ、6学年には、2つの自由課題による単元を位置づけてあらつ学習で獲得した資質・能力を、活用・応用の活動のなかでさらに高めていく学習として配列していく。 4年 あらつのふしぎ発見(地域の点的追究) → 6年 あらつ遊学ツアー(地域の線的・構造的追究)
	B 追究課題の連動	○ 「追究課題の連動」としては、学習で最終的に子供が迫っていくことを期待している、「国際理解・協力、環境、情報、福祉・健康、郷土の歴史伝統」といった社会課題の高まりやバランスから、学年系統や年間配列を工夫する。 ○ また、過去に取り組んだ「あらつ学習」における体験を、より発展・深化していく方向で展開する単元を位置づけ、年間、複数年間に渡る連動も大切にしていく。
道徳 学習	D 体験の連動 ※ 特に、人間性 に重点を置いた 連動を図る。	○ 各教科領域・総合的学習における具体的な体験や活動を積極的に生かしながら、各体験のなかで高まってくる規範意識・価値意識を、かけがえのない自分の生き方として、より深化・補充・統合していく学習として連動を考えていくようにする。

(3) 同じ学びで展開する教科領域・総合的学習像の明確化

豊かな人間の育成において教科領域・総合的学習はそれぞれに固有の大切な役割と立場を担っている。しかし「人間性・創造性・主体性」を高める学習として展開していくためには、どの学習においても、自分との強いかかわりを重視した学びが必要となる。自分自身を対象化しながら、対象化した自分自身に働きかけ、生活や文化に対する感じ方・考え方・行い方を自ら変化させ、よりよく更新していく活動のなかでこそ、子供は「人間性・創造性・主体性」を十分に発揮しながら、より高めていくことができるのである。そこで、教科領域・総合的学習のいずれの学習においても、「自己追究・自己吟味・自己更新」の3つの活動による、同じ学びを大切にしたい学習像を明確化し単元を構想する。

「自己追究」とは、自分の強い求めを土台に、学習対象と自分自身に自ら働きかけていく活動である。自分にとって意味のある、自分の力で取り組んでいく問題解決的活動・体験的活動である。

「自己吟味」とは、「自己追究」の過程と結果とを、目的や課題と照応しながら検討していく活動である。自分の追究のよさや改善点などを明らかにして、今後の見通しを立てたり新たな課題を設定したりする、自己内対話としての表現活動や相互評価・自己評価につながる交流活動である。

「自己更新」とは、追究したことのよさを確かめる実践活動や発信活動である。「自己追究」のなかで見出した自分の感じ方・考え方・行い方のよさに気づいたり、自分の特性や能力を理解し、自分への自信を高める活動である。また、自分なりに取り組んだ成果あるいは努力の結果を再確認して、効力感や有用感を味わう活動である。教科領域・総合的学習のいずれの学習にも、「自己追究」を中軸に「自己吟味・自己更新」を位置づけながら、同じ学びで調和的に展開していくのである。ただし、同じ学びで展開するといっても、それぞれの学習が担う役割や立場の違いによって、3つの活動の位置づけ方（単元構成・活動構成）は異なってくる（次頁参照）。また、3つの活動自体も、下表のような点で質的に異なる点も生じてくる。3つの活動を大切にしながらも、具体的に、どう単元や題材を構想していくか、単元構成・活動構成と支援をどのように工夫していくかを究明していくことで、教育方法的には同じ学びで調和的に展開していく各教科領域・総合的学習像を明確化できるのである。

【どの学習も同じ学びを大切にする】



【文化課程と生活課程の学習の役割や立場から見た3つの活動の違い】

文化課程（教科学習）	3つの活動	生活課程（総合的学習・領域の学習）
○ 教科の基礎・基本的な内容から自己追究の活動を構想する。（基本的活動→応用・実践的な活動へ） ○ 追究方法の違いにおいてのみ、活動が複線化する場合がある。	自己追究	○ まず子供の活動が先行し、価値ある内容が生まれるように支援していく。（応用・実践的な活動→基本的活動へ） ○ 追究課題・追究内容・追究方法の違いから追究が複線化する。
○ 共通の目的や課題に照応しての吟味を大切にする。	自己吟味	○ 自分の目的や課題と照応しての学習履歴の吟味を大切にする。
○ 文化材としての教材から見出した原理や法則の有効性を、生活の実の場で試してみる。（文化から生活へ）	自己更新	○ 生活現実から見出した自分の応えの有効性を、より拡大した場で試しながら一般化する。（生活から文化へ）

【文化課程・生活課程の各学習像の明確化】

教科等		3つの活動を大切にした学習像		
文化課程	国語 算数 音楽 図工 体育	文化課程の学習は、優れた文化財との出会いから、目的や課題をつかみ、それを享受・拡充していく自己追究の活動の中軸に、自己吟味と自己更新の活動を組み合わせて、達成や解決に取り組む。 ただし、生活課程から分化する学習の場合は、生活現実のなかから、文化性を焦点化して取り出し、それについての科学的・文化的な追究活動を行う。そして、最後に再び生活現実に立ち返る学習となる。		
	理科 社会 家庭	(学習の入口・出口は生活課程の学習に近い)		
生活課程	総合的学習	生活学習	自分への気づき	総合的学習の場合、自己追究・自己吟味の活動は、自らの生活現実そのものを更新していく活動となる。自らが設定した目的や課題の達成・解決のなかで、自分への気づきや、自ら見出してくる「応え」を通して自己更新が行われる。
		あらつ学習	社会課題 地域生活・社会生活の更新	特に「あらつ学習」の場合は、地域・社会生活へと更新を拡げ、社会課題に迫っていく個の追究が大切となる。
	特別活動 (学級活動)	学校・学級生活の更新	現実の学校・学級生活のなかでの活動や実践そのものが、集団と自己の追究活動であり、学級活動の時間は、その吟味・更新活動として位置づくことになる。	
	道徳学習	(道徳の学習の時間)	生活体験や各学習での体験を土台に、自分の心のあり方を吟味する活動に取り組む。さまざまな価値に気づき、意味や大切さを考えることで、自己更新と後の実践（自己追究）を促す。	

5 障害児教育研究部と帰国子女教育研究部の研究

本校では、特殊学級を3学級、帰国子女学級を3学級設置している。そして、全体主題としている「豊かな人間の育成」をめざしながら、障害児教育研究部と帰国子女教育研究部のそれぞれが担う立場と役割から研究を進めている。具体的には、次のような点から研究を焦点化して、子供たち一人一人のもつ特性や能力に応じた特色ある教育実践に取り組んでいる。

(1) 障害児教育研究部

障害児教育研究部では、平成10年度・11年度にわたって、文部省特殊教育課程研究指定を受けながら、「豊かな生活をめざす教育課程の編成」を研究主題として設定し、生活力を培うための「指導の重点化を図った個別の指導計画作成」の在り方について研究を進めてきた。本年度は、この研究の成果を土台に、子供たち一人一人がもつ特性に照らして教育内容を精選し、豊かな生活をめざすことのできる教育課程を編成している。また、できる・わかる状況設定を工夫して、子供たちの主体的な活動の繰り返しを促しながら、調和的に展開する教科領域の学習像の明確化にも取り組んでいる。国語科や算数科などの教科学習においては、子供たちの主体性を引き出すための題材開発と、個に応じた教材・活動構成の工夫を進めている。生活単元学習においても、子供がやる気をもって、自力でそして共同で、年間を通じて取り組み続けることができる単元の開発を進めている。



(2) 帰国子女教育研究部

帰国子女教育研究部では、海外生活で得た語学力、国際感覚などを生かし、その特性を伸ばしていく特性伸長の面と、日本の教育課程に照らして、学習状況が不十分である点を補う適応指導の面との2つの柱で研究を進めている。特性伸長の面では、総合的学習「国際交流タイム」をより充実させながら、海外体験で身につけた語学力を生かす個性の伸長、国際理解教育の具現化、他の学習との意図的・計画的な連動、の3点から学習像の明確化を進めている。適応指導の面では、個別の指導計画と個の実態に応じた支援体制を行い、教科指導を中心として学習の適応が図れるようにすることをめざしている。特に本年度は、教科学習と国際交流タイムの調和的に展開する教育課程を創造し情報メディア教育なども取り入れながら支援体制をより充実させ、適応指導と個性伸長の相互促進的な指導の在り方を重点的に研究している。



参考文献

文 部 省 「小学校学習指導要領解説 総則編」 1998

奈須正裕他編「総合的学習のカリキュラム・プランニング」東京書籍 2000

梶田毅一 「生き方の人間教育を-自己実現の力を育む-」 金子書房 1993

第 1 学 年 年 間 指 導 計 画

【文化課程】

5つの教科学習（国語科・算数科・音楽科・図画工作科・体育科学習）は、1学年の子供たちにとって、「環境による教育」を教育原理とした幼稚園教育から分化して位置づく学習といえる。国語科・算数科学習では、これからの学習の基盤となる基礎的な資質・能力を、言語や数理のよさや面白さを実感する楽しい活動を通して体得させていく単元づくりを工夫する。音楽科・図画工作科・体育科学習においては、遊びの原理を加味した活動を通して造形文化・音楽文化・運動文化などに出合わせて、それらに進んでかかわっていく態度の育成に重点を置く。

【生活課程】

学校生活における自立の面から生活更新に取り組む学習を展開する。はじめての学校生活や学級の仲間との集団生活のなかで生じる思いや願いや気がかりを出発点にして、それをよりよく解決したり実現したりしていくための「遊び・探検」を中軸とした楽しい生活学習・学級活動を展開する。

【学習の連動】

発達段階として、まだ未分化な状態にあることを考慮し、文化課程・生活課程相互のみならず、文化課程のなかにおいても、合科的な指導を工夫していかねばならない。特に表現活動においては、言語・造形・音楽・身体表現などを総合的に発揮できる活動を大切にする。また、さまざまな学習の成果や自分への気づきを、言葉や絵に表すことで実感できるように、国語科や図画工作科学習との連動を工夫する。

課程	単元	4月	5月	6月	7月
文化課程	国語 272 単元	えをみてはなそう ⑩	あいさつをしよう ⑩	よみましょ ⑩	みんなにおしえよう ⑭ なかよし のどうぶ つさん たち ⑫ ほんよみ っぱよう いをしよ ⑭
	算数 114 単元	なかよしのおはなしをしよう ⑥	10までのかずをかぞえよう ⑮	かずあてあそび ⑧	かたちをしらべよう ⑥ いくつになるのかな ⑫
	音楽 68 単元	はるかぜさんとうたおう ④	なかよしおんがくかいをひらこう ⑤	おんがくの森であそぼう ⑦	どうぶつランドであそぼう ④ けきをうたおう ②
	図工 68 単元	すきなものがつまったポケット 【絵に表す】 ②	にしこうえんのしぜんともだち 【造形遊び】 ④	ふわふわもこもこから〇〇がうまれたよ 【絵に表す】 ⑥	かぜとおともだち 【つくりたいものをつくる】 ④ ここはぼくのおたしのいきものランド 【絵に表す】 ⑧
	体育 90 単元	遊具で遊ぼう ④	鉄棒で遊ぼう ⑥	運動のテスト ②	ブロックボールを楽しもう ⑧ ウォーターランドで遊ぼう ⑩
生活課程	生活学習 102 単元	ぼく・わたしの附属福岡小学校 ～とびだせ！ 福岡小探検隊～ ⑧	みんな仲良し1年生 ～仲良しおもちゃ図書館をひらこう～ ⑧ ・附属小を花いっぱいにして	生き物大好き！（継続で） ⑩ ・動物村で動物たちと遊ぼう	西公園で遊ぼう ⑩
	学級活動 34 単元	○ 学校のいきかえり ○ 学校のきまり ①	◎ 係と当番を決めよう ② ○ 給食のようい ○ よいあいさつ ①	○ むしばきんをやっつける ① ○ 雨の日の過ごし方 ① ◎ 雨の日遊びをしよう ②	◎ 学級の歌をつくらう ① ○ 水はこわいぞ ① ○ はじめての夏休み ①
	道徳学習 34 単元	・たのしいがっこう ① ・チャイムがなりました ① ・あいさつ ①	・ハイキング ① ・はしのうえのおおかみ ①	・ぼくのあさが お ① ・おれたグレ ① ・でてるち ① ・ぼくのはな ①	・ハムスターのあかちゃん ① ・うがんだう ① ・できるようになったよ ①

※ 特に追究課題（内容）の運動を図る ←→ 追究方法（方法）の運動を図る ←----->

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
げきをしよう 大きなかぶ ⑭	くらべてみよう じどう車くらべ ⑮	おんどくはっ びょうかい くじらぐも ⑮	ふぞくし がっく ふようがっく をう ⑮	本は ともだち ⑮	おみせや さんごっ をしよう ものの名 まえ ⑮	かみしばい をしよう たぬきの糸 車 ⑮	みんなは しつて るかな おしえ たいな ⑮	かわいい 赤ちゃん 動物の 赤ちゃん ⑮	ふぞくしょうが っこうカレンダー をつくらう ⑮
おもちゃ発表会をしよう ⑩									
20までの かぞえよ ⑨	ろぼっ とを つく ろう ⑥	わかざ りを つく ろう (ながさ) ⑥	たしざ んを しよ う ⑮	ひきざ んを しよ う ⑮	すご ろく づく り を しよ う (100 まで の数) ⑮	シルエ ット を つく ろう (100 まで のた し ざ ん・ ひき ざ ん) ⑮	リズムにの つてあそ ぼう ⑤	うたの おい か し よ う ⑤	おんが くの よう す を おも い う か べ よう ⑨
かめい じん めざ う ④	まね つ つし よう ③	どれ みた い そう を つく ろう ⑤	おと と お そ ぼ う ⑤	おは な し を お ん が く で あら わ そう ⑦	きせ つ を う た おう ②	リズムにの つてあそ ぼう ⑤	うたの おい か し よ う ⑤	おんが くの よう す を おも い う か べ よう ⑨	おんが くの よう す を おも い う か べ よう ⑨
むらみ 川の 石を なら べて 、 なら べて 【造形 遊び】 ⑥	みんな あつ ま れ！ どう ぶつ ラン ド 【立体 に表す】 ⑥	くしゃ くしゃ が み から す て き な もの が 【絵に 表す】 ⑥	ぼく の わ た し の す て き な 絵 本 【絵に 表す】 ④	かみ の つ つ か ら う ま れた よ 【つ く り た い も の を つ く る】 ⑥	べっ たん こ ろ こ ろ 【造形 遊び】 ④	すき な も の あ つ ま れ 【絵に 表す】 ⑥	たの しい す ご ろ く づ く り 【つ く り た い も の を つ く る】 ⑥	1ねん〇く み アル バ ム を つく ろう 【絵 や 立 体 に 表 す】 ④	1ねん〇く み アル バ ム を つく ろう 【絵 や 立 体 に 表 す】 ④
宝島 を ば う けん し よ う ④	マッ ト・ び ば こ で 遊 ぼう ⑦	ドレ ミ た い そ う ⑥	も み じ の 虫 な ら う ⑥	と び ご ん で 遊 ぼう ⑥	けり つ こ 遊 び を 楽 し ま う ⑧	リズムに のつて あそ ぼう ⑦	な わ と び 遊 び か け つ こ 遊 び ⑧	シュ ー ト ボ ー ル を 楽 し ま う ⑧	シュ ー ト ボ ー ル を 楽 し ま う ⑧
動くおも ちゃ で遊 ぼう ⑧	大好き家 族 ⑩	西公園の 秋と 遊 ぼう ⑮	幼稚園 さん と 仲 良 し ⑮	あら つ の 輝 く お じ い ち ゃ ん ・ お ば あ ち ゃ ん ⑩	みんな大 好き 西公園 ⑥	成長日 記を 紹介 しよう (③)	あら つ の 輝 く お じ い ち ゃ ん ・ お ば あ ち ゃ ん ⑩	みんな大 好き 西公園 ⑥	成長日 記を 紹介 しよう (③)
○ 2学期 のめ あ て を 決 め よ う ① ◎ 2学期 の係 を 決 め よ う ① ○ はじ め て の 運 動 会 ①	○ みんな 友 だ ち ① ◎ 西公 園 ゲ ー ム 大 会 を し よ う ② ○ た だ し い し や い ①	○ 本 の か り 方 ① ◎ か え し 方 ① ◎ 好 き な 本 の 紹 介 を し よ う ② ○ 楽 し く 遊 ぼう ①	◎ 幼 稚 園 さん と な か よ し 集 会 を し よ う ② ○ 冬 休 み の く ら し ①	◎ 3学期 の係 を 決 め よ う ① ◎ あり が と う 給 食 ①	○ もし 火 事 に な っ た ら ① ○ き れ い な か ① ○ た づ け ① ○ も う す ぐ 2 年 生 ①	◎ 新1年 生 へ の プ レ ゼ ン ト ②			
・おじ さん に や つ て る の ① ・か ぼ ち ゃ の ① ・へ い の ら く き ①	・げん か ん の そ う じ ① ・ど ん ぐ り ① ・あ ぶ な い あ ぶ な い ①	・に ち よ う び の さ ん ぼ み ち ① ・も ん た ど お じ ① ・ぞ う さ ま の え ん ① ・う さ ぎ の そ く ①	・こ ぐ ま の ら っ ぱ ① ・た け し の で ん わ ① ・で き る よ う に な っ た よ Ⅱ ①	・あり が と う ① ・た げ し の で ん わ ① ・み ん な の ボ ー ル ①	・お お か み が き た ① ・き て よ か っ た ① ・き が つ い た と の さ ま ① ・か や ね ず み の お か あ さん ①	・も う す ぐ 2 ね ん せ い ① ・ほ じ の ふ る も り ① ・で き る よ う に な っ た よ Ⅲ ①			

第 2 学 年 年 間 指 導 計 画

【文化課程】

2 学年になると、表現力（特に言語による表現力）や思考力がより高まってくる。具体的・体験的な活動は 1 学年同様大切にしていけるが、思いや願いを達成していく単元に加え、問題解決的な活動として構成した単元も位置づけるようにする。活動構成においては、課題に対して、まず自分の考えをつくり、その後友達と交流し深め確実にしていく。ただし、1 学年同様に文化に進んでかわる態度の育成に最も重点を置き、反復的・螺旋的な学習を通じて、より高めていけるようにする。

【生活課程】

生活学習では、学習の対象を学校から学校の周りへと徐々に広げていくとともに、具体的な事物とのかかわりもより切実なものになるようにして、理由や背景についても追究していく活動を展開していく。また、3 学年より、教科学習（理科・社会科）にも分化していくことを考慮し、自然事象や社会事象における文化性にも出合わせ、かかわらせていく。学級活動においては、みんなで単純に力を合わせる活動から、役割や分担を位置づけて、次第に組織的に力を合わせていく活動へ高めていく。

【学習の連動】

2 学年においては、知識の総合化よりも、各教科のなかで獲得した技能をより総合的に応用発揮できるように、生活学習と教科学習との連動を重視する。ただし、1 学年同様にまだ未分化性が残る発達段階であることを考慮し、追究課題・追究方法の連動ではなく、できるだけ合科的な指導形態による学習展開を工夫していく。

課程	単元	4 月	5 月	6 月	7 月
文化課程	国語 280 冊	よんであそぼう「ふきのとう」 ^{②⑩}	ぼくの・わたしのとおきニュース（春号） ^⑬	ちえをしらべよう「たんぼのちえ」 ^{②⑩}	じぶんだけのお話絵本をつくろう「スイミー」 ^{②⑩}
	算数 155 冊	まとあてゲームをしよう ^⑧	時計を見ながら生活しよう ^⑤	たし算をしよう ^⑫	長さを量ってコピーしよう ^⑬
	音楽 70 冊	おんがくかくれんぼをしよう ^③	楽しい歌のおいかけっこをしよう ^⑦	体でリズム、楽器でリズムを感じよう ^⑥	音楽であそぼう ^④ きせつをうたおう（随時題材） ^④
	図工 70 冊	にじのせかいへようこそ「絵に表す」 ^⑥	どろどろ絵の具でカラフルなおえかき「絵に表す」 ^⑥	カラフルいろいろカップがあつまれば！「造形遊び」 ^⑥	おしゃれなすてきななみテープ「つくりたいものをつくる」 ^⑧
生活課程	体育 90 冊	鉄棒で遊ぼう ^④ 運動のテスト ^②	ドッジボールを楽しもう ^⑥ 鉄棒名人になろう ^③	遊ぼう！まねっこパーク ^⑦	ウォーターランドで遊ぼう ^⑩
	生活学習 105 冊	あらつ町の町を探索しよう ^⑪	大きくなれ、みんなの野菜 I（継続で） ^⑧ 集まれみんなのたまり場！～唐人町かえっこショップを開こう～ ^⑫	夏を楽しく～伊崎の浜で遊ぼう～ ^⑥	
	学級活動 35 冊	○ 学級目標を決めよう ^① ◎ 係を決めよう ^① ○ 学習中のやくそく ^①	◎ グループのメンバー紹介をしよう ^② ○ チャイムの合図 ^① ○ さそいにのらない ^①	◎ 教生先生をむかえる会をしよう ^② ○ 雨の日の遊び方 ^① ○ プールの使い方 ^①	◎ セ夕集会をしよう ^② ○ もうすぐ夏休み ^①
道徳課程	道徳学習 35 冊	・ 2ねんせいになって ^① ・ ずるいずるい ^① ・ ムーミンとことりのおやこ ^①	・ だっておにちゃんだもん ^① ・ うれしい気持ち ^① ・ わたしのしごと ^①	・ こうえんの花 ^① ・ 赤いふね ^① ・ ぼく ^① ・ おじいさん、はい、お水 ^①	・ さかあがりできたよ ^① ・ ともだちだものね ^① ・ ぼく・わたしのせいちょう I ^①
		※ 下線は、特に体験の連動を図るもの			

※ 特に追究課題（内容）の連動を図る ←——→ 追究方法（方法）の連動を図る ←----->

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
シリーズ読書 をしよう ⑮ 「王さま」	説明絵本 をつくろ う ⑮	物語絵 本をつく ろう ⑮	シリーズ読書をし ようⅡ 「お手紙」 ⑮ 「お手紙」 ⑮	日本のむかし話を よもう 「力太郎」 ⑮	手作り絵本 を作ろう ⑮	成長の記録を まとめよう ⑮
ぼくの・わたしのとっておきニュース（秋号） ⑮				ぼくの・わたしの とっておきニュースをつくろう（冬号） ⑮		
大きい数を数えよう ⑮	さんかくとしかくで めいろをつくろう ⑮	かけ算をし よう（Ⅰ） ⑮	かけ算をし よう（Ⅱ） ⑮	かけ算をし よう（Ⅲ） ⑮	長いものをは かろう ⑮	たしざんかなひきざ んかな ⑮
きもちを想像 してよう ⑮	すてきな音 を見つけよう ⑮	おはなしを音楽であ らわそう ⑮	けしき をうた おう ⑮ リズムに 合わせて ⑮	タンタンタンのリズム にのろう ⑮	きせつ を歌お う ⑮	お気に入り の歌を しよう ⑮
パタパタふねをう べたら つくりたいもの をつくる ⑮	あきをあつめ て楽しく遊ば う 「造形遊び」 ⑮	うわしてみたら いきものが 「絵（版）で表す」 ⑮	むろみ川のわたり 鳥のゆめ 「絵で表す・つ くりたいものをつくる」 ⑮	きらきらシャ ボンから何が 見えた 「絵に表す」 ⑮	手作り布絵本 を作ろう 「つくりたい ものをつくる」 ⑮	光をたべた生き物 たち 「造形遊び」 ⑮
ぼくのわたしのアルバム作り 「つくりたいものをつくる」 ⑮						
ジャングル リレーを楽し よう ⑮	ポンポン ボールゲーム をしよう ⑮	おしあひきあひ 遊び ⑮	お話から動きを つくろう ⑮	もみじ 谷で鬼 遊びを しよう ⑮	チャレ ンジラ ンドで 遊ぼう ⑮	なわとび遊び かけっこ遊び ⑮
大きくなれ、みんなの野菜Ⅱ （継続で⑮）				博多ごまで遊 ぼう ⑮		
おもちゃランド で遊ぼう ⑮				みんな大好き 福岡市総合図 書館 ～手作り布絵 本展示発表会 を開こう～ ⑮		
みんな大好き！ 当仁公民館 ⑮				ぐんぐんのび る、ぼく・わ たしⅡ ⑮		
世界のひとと仲良 くならう ⑮						
○ 2学期のめ あてを立てよ う ⑮ ○ 楽しい係を 決めよう ⑮ ○ おじいちゃ んおばあちゃ ⑮	○ 友だちに してあげたい こと ⑮ ○ 2のひみ つきちに1年 生を招待し よう ⑮	○ 言葉のひみ つ ⑮ ○ 学習への心 がまえの まわりをし よう ⑮	○ 世界の遊び 集会をし よう ⑮	○ 新年の係を 決めよう ⑮ ○ 楽しくな る 食事 ⑮	○ 心の鬼をお いだそう ⑮ ○ お別れ会を しよう ⑮	○ さよなら6 年生 ⑮ ○ もうすぐ3 年生 ⑮
・「あいさつ」 っていいな ⑮ ・もとのうみべ にえりた い ⑮ ・がつきゅうえ んのさつまい も ⑮	・空をとべな かったピーす け ⑮ ・さるへいと 立てふだ ⑮ ・どうしたの かな、ぼく ⑮	・きいろいべ んち ⑮ ・雨の日のそ く ⑮ ・おれたもの さし ⑮	・7つのほし ⑮ ・わすれもの た ⑮ ・いじ ⑮ ・ぼく・わた しのせいち ょうⅡ ⑮	・町のひみつ わ かったよ ⑮ ・グレンはし れ ⑮ ・森のともだ ち ⑮	・おいたてら れた2ひきの カエル ⑮ ・おとうさん へ ⑮ ・じぶんがし ん ごうきに ⑮ ・ガラスの中 の ⑮	・たんじょう 日 ⑮ ・ぼんぼん山 の 月 ⑮ ・ぼく・わた しのせいち ょうⅢ ⑮

第3学年 年間指導計画

【文化課程】

3学年になると、徐々に抽象思考も育ちはじめ、調べたり観察・見学したりといった追究活動自体へ興味・関心が増してくる。そこで、遊びの原理を取り入れた活動を通じて文化とかかわってきた低学年の教科学習に対して、3学年からは、文化そのものと向き合いかかわっていく学習を展開していく。つまり、言語や数理、芸術や運動文化そのものの機能や特質を考え、価値を見出していく文化探究の学習である。また、生活学習から分化した理科・社会科学学習においては、地域の自然事象・社会事象を対象に具体的な活動を展開していく。ただし、対象とするのは生活まるごとではなく、そのなかの文化性を取り出して、科学的・文化的な追究を行っていく。

【生活課程】

3学年より位置づく「あらつ学習」では、理科・社会科とは異なり、地域社会の生活現実そのものを学習対象とする。生活現実のなかで子供たちが抱いた素朴な願いや気付きを出発点に、それを自分なりの力で追究し自分なりの応えを見出す学習を展開する。個々の求めに応じた支援は何より大切であるが、特に学習の手引き（あらつ学習ガイド）を効果的に活用させる。①手引きをもとに活動を促したり、②反対に、子供たちの活動を手引きにまとめていくことを大切にするのである。

【学習の連動】

学習対象は同じ地域であるが、それを科学的・文化的に追究する理科・社会科と、生活更新過程として追究する「あらつ学習」との連動を特に大切にする。知や学び方の連動を図るとともに、それぞれの学習のよさや意味を十分に理解できるようにする。

課程	単元	4月	5月	6月	7月
文化課程	国語	本にしたしもう「森に生きる」など ②⑤	ぼくの、わたしの冒険ワールド 読書交流会 ⑦⑪	図鑑を読んで調べよう ②	音読発表会をひこう
	算数	たし算をひっ算でしよう ⑨	ひき算をひっ算でしよう ⑨	水のかさを調べよう ⑩	全部でいくつ・かけ算九九 ⑧
	音楽	きせつを歌おう ②	楽ふを見て歌おう ②	リコーダーにちようせん！ ④	同じ数ずつわけよう ⑭
	図工	くねくね、ぐにょぐにょ絵の具のダンス [絵に表す] ⑥	紙バックから生まれるふしぎな形 [造形遊び] ④	動物曲芸ワールド [立体に表す] ④	生活の時間時刻を調べよう
	体育	スポーツテスト ③	チャレンジつぼう ⑤	毎日生活と健康 ②	川跳び遊びに挑戦しよう ⑤
	理科	草花を育てよう (種から発芽へ) ②	豆電球に明かりをつけよう ⑩	草花を育てよう (草花の成長) ③	昆虫と仲良くしよう (昆虫の成長と体のつくり) ⑦
	社会	あらつ探検～附属小のまわりの特色を見つけよう ⑩	探検！福岡市～福岡市の特色のある場所を見つけよう ⑥	さぐる福岡市の仕事～福岡市でつくりだされるもの～	福岡市の仕事をつくりだされるもの～
	あらつ学習	あらつウォークラリー ⑩	博多のおもしろ外国人さんとふれあおう ⑪	カブトムシ牧場をつくらう ⑫	カブトムシ牧場をつくらう ⑫
	学級活動	○ 僕は○○です ① ○ 学級目標を決めよう ① ◎ 係を決めよう ①	◎ 仲良し集会をしよう ② ○ 健康な歯 ①	◎ 学級のシンボルをつくろう ④ ○ 雨の日の過ごし方 ①	◎ 1学期の活動発表会しよう ① ○ 夏休みの生活 ①
	道徳学習	・新しい気持ちで ① ・一週間の歌 ① ・きまりじゃないか ①	・ごめんねももちゃん ① ・家族ってなあに ②	・見つめようわたしたちの国日本 ② ・しあいの日 ①	・生き物の声を傾けて ① ・一輪車にのた ① ・心の成長を振り返って ①

※ 下線は、特に体験の連動を図るもの

(※ 特に追究課題の連動を図る ←————→ 特に追究方法の連動を図る <----->)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月														
語から きをつく う ②⑩	自然のふしぎを調 べよう ②⑤	説明書をつくら う ②⑤	戦争文学を読もう 「いちばんのかおくり」 ②⑩	朗読会を開こう 「モチモチの木」 ②⑤	詩を書こう ⑩	調べたことをまと めよう ②⑤														
きつめ模 きをつくろ う ⑩	かけ算九九表を 広げよう! ⑩	調べたこと を分りや すく表そう ④	同じ数ず つわけよ う (2) ⑧	大きな数を 調べよう ⑧	重さを調べよ う ⑩	宝箱をつくろ う (立体を調 べよう) ⑫	長いものさ しづくりを しよう ⑧	そろ ばんで計 算しよう ⑥												
らべ いたをも し ⑤	リコー ダーに ちよう せんⅢ ②	ふしの流れ やリズムに のって歌お う ⑤	場面を 音楽で 感じ取ら う! ④	曲の気持 ちを感じ て歌おう ⑤	けしを 歌おう ②	お話を音 楽で表そう ⑥	リコー ダーに ちよう せんⅢ ③	声を重 ねて歌 おう ③	ふしや音 を選んで 表そう ⑤	みんなでコン サートを開 こう ⑥										
もとかげのハー ミニ 造形遊び・絵 に表す ⑥	くちばしの大き なわたしのわたり 鳥 [絵 立体に表 す] ⑥	2つのつつを 組み合わせる と[つくりた いものをつく る] ⑥	西公園のふしぎな 生き物 [絵(版)に表す] ⑦	お城にゆき がふってきた [絵に表す] ④	宝箱をつくろう [造形遊び・つ くりたいもの をつくる] ④	みんなでいこう南 の島へ [立体に表す] ⑦	毎日 の生 活と 健康 ②	楽しく 表現・ ダンス をしよう ⑦	遊ぼう! チャレ ンジェ ット ⑦	3年①組 ペー スルを 楽しもう ⑧	あらつ 障 物リ レー に挑 戦しよう ⑤	チャレ ン ジと びば こで 遊ば う ⑥	挑戦! なわとび遊び かけっこ遊び ⑦	ラインサッカ ーを楽しもう ⑨	つくろう! リズムムーブ ⑦					
なたと日かけ と比べよう ⑧	草花を育 ててみよう (種 取りと球根 取り) ②	昆虫や植物の成 長図鑑をつくら う ⑧	光といっしょに生活 しよう ⑩	磁石の不思議を見つけよう ⑫	昆虫と仲良 くしよう (自分たち が育てた昆 虫は今...) ④	博多明太子の 味のひみつ 〜川原さんの仕事に ちようせんしよう〜 ⑩	楽しい買い 物 唐人町商店街 〜元気な唐人町商店 街のひみつを見つ けよう〜 ⑩	世界と つながる 福岡の商店街 〜福岡に来るお 客さんや品物 を調べよう〜 ⑤	探検 福岡市の 水の旅 〜福岡市の水を調べ よう〜 ⑩	福岡市民の ごみはどこへ 〜わたしたちのごみ減量 作戦をしよう〜 ⑩	ふやそう! 守ろう! カブトムシ ⑩	ボランティアサークル あらつっ子 ⑩	伝えよう! わたしたちのまち福岡 ⑩	○ 2学期のめ あてを決めよ う ① ○ 2学期の係 を決めよう ① ○ 運動会に向 けて ①	○ 正しい言葉 使い ① ○ 学年集会を しよう ② ○ 忘れ物をな くそう ①	○ カブトムシ 復活大作戦 ④	○ ぼく・私の いいところ ① ○ ふれあい集 会をしよう ②	○ 3学期の係 を決めよう ① ○ 給食への感 謝 ①	○ 3年わんぱ くクラブをつ くろう ④	○ 4年生に向 けて ①
・月曜日の朝① ・ありがとうお じいさんおば あさん ① ・黄色いかさ①	・あめだま ① ・ぬれた本 ① ・スプーンレー ス ①	・なかよしだか ら ① ・2つの声 ①	・心でつなごう ② ・幸せの王子① ・心の成長を振 り返ってⅡ①	・たまちゃんだ いすき ① ・ゆきえの手術 ① ・ある日曜日①	・ぼくらは3年 ○組号 ② ・百羽のツル① ・負けるものか ①	・ふるさとい い とこさがし② ・心の成長を振 り返ってⅢ②														

第4学年年間指導計画

【文化課程】

4学年になると、集団性と個性とが共に育ってくる。そこで、個の追究と集団（グループ）追究を補完的に位置づけた活動構成の工夫をする。教科学習であるため、学習内容は共通であっても、その追究の仕方については、より個性が発揮されるよう複線化した学習展開も取り入れていく。特に、理科・社会科学習においては、追究の目を身近な自然・社会事象からより広げていくとともに、追究の仕方もより科学的になるようにする。課題に対して自分なりの仮説と解決の見通しを明確にした追究活動を行えるようにする。

【生活課程】

知識・技能の総合化だけでなく、これまでに教科学習のなかで身につけてきた学び方（追究方法）も総合的に発揮されるような「あらつ学習」を位置づける。つまり、追究方法が具体的な体験活動だけでなく、情報活用やデータ分析など多種多様になる学習を構想するのである。また、追究もより複線化してくるため、グループ活動を取り入れ、友達と協力しながら個の追究ができるようにする。特別活動においては、4学年より委員会・クラブ活動に参画することを生かし、学級生活から学校生活にも目を向けた集団活動が展開できるようにする。

【学習の連動】

教師側からでなく、子供の側から「追究課題の連動・追究方法の連動」による学習を求めてくることを大切にする。特に生活課程の学習から、教科学習への連動が子供の側から生じるように仕組む。

課程	時数	4月	5月	6月	7月		
文化課程	国語 235時間	みんなで動物園物語をつくろう⑮	韓日昔話をしよう⑮	詩の発表会しよう⑤	めざせプレゼンター⑨	松井さんはどんな人か考えよう⑮	とんち話のおもしろさを読みべよう⑮
	算数 150時間	大きな数を表そう⑧	コマをつくろう⑭	概数で表そう⑩	整数のわり算をしよう⑮	表とグラフに表そう⑭	
	音楽 60時間	日本のふし韓国ふしを比べよう⑥	カーニバルの音楽をしよう⑧	歌声をひびかせよう④	ふしのまじりやをしよう④		
	図工 60時間	まほうのつぼから夢がとびだす【絵に表す】⑥	ダンボールの魔術師【造形遊び】④	西公園の木と遊んだよ【絵に表す】⑥	ストローと針金のダンス【つくりたいものをつくる】④		
	体育 90時間	スポーツテスト③	3種競技に挑戦しよう⑤	4の○オリジナルネットボールを楽しもう⑤	リズムダンスレクリエーション⑦	いろいろな泳ぎの種目に挑戦しよう！⑩	
	理科 90時間	春の生き物を調べよう⑨	身近な電気の働きを調べよう⑫	夏の生き物を調べよう⑤	夏の星の神秘さにふれよう⑦		
	社会 85時間	つくろう火災ゼロのまち福岡～荒戸出張所の人々の働き～⑫	まじりやの人々の働き⑫	ストップ、交通事故～中央署の人々の働き～⑥	山笠のあるけん博多たい～山笠一筋の人々の生き方～⑨		
	あらつ学習 105時間	ぼくはわたしはあらつ子⑧	おとなりの国韓国調べ隊⑨	あらつの虫がたくあん住める西公園によう⑮	楽しさいっぱい！夏休み自由研究⑮		
	学級活動 35時間	○ 学級目標を決めよう① ○ 係を決めよう① ○ はじめての委員会①	○ ふれあい大作戦をしよう② ○ 学習のかまへ①	○ 学級のガーデンをつくろう④	○ けがの予防係活動発表会をしよう④ ○ チャレンジ夏休み④		
	道徳学習 35時間	・ なりたいわたし① ・ 空き缶の投げ捨て② ・ ふるさとのサクラ①	・ 病気の人を助けたい① ・ ヤゴを救いたい① ・ にじ①	・ 新しい学校① ・ 小さな心づかい① ・ 飛べないホテル①	・ ナシの実① ・ リサイクル運動に参加して① ・ なりたいわたしに向かって①		

※下線は、特に体験の連動を図るもの

(※ 特に追究課題の連動を図る ←→ 特に追究方法の連動を図る <----->)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
夏休みの特大ニュースを発表しよう ②⑩	心をむすぶ新聞をつくろう 「手と心で読む」 ②④	戦争文学の読書会をしよう 「一つの花」 ②④	オペレッタをつくろう 「ごんぎつね」 ②②	本を通して世界に目を向けよう 「一本の鉛筆の向こうに」 ①⑤	感じたことを表そう ⑩	あらつニ番組をつくろう ①⑧	情報ガイドブックをつくろう ②⑩		
考え方を式に表そう ⑧	はしたの数の表し方を調べよう ⑭	三角形のなかまを調べよう ⑭	いろんな数で等分しよう ⑩	角の大きさを測定しよう ⑩	変わり方のきまりを見つけよう ⑧	面積を求めよう ⑩			
景色を歌おう ②	カーニバルの音楽を楽しもう ⑧	曲の気持ちを生かして演奏しよう ⑥	景色を歌おう ③	ふしのちがいを感ぜよう ②	みんなでカーニバルを開こう ⑨	音の組み合わせのさ味をう ②	コンサートをこ ②		
もみじ谷からのおくりもの【立体に表す】 ⑧	藤とかずらの空中曲芸【立体に表す】 ⑥	形や色からうまれたものは【絵に表す】 ⑥	空を見て感じたことを表そう 【つくりたいものをつくる】 ⑥	銀色のアルミから生まれたものは【造形遊び】 ⑥	オリジナルタンバラムをつくろう 【つくりたいものをつくる】 ④	ありがとうの心をこめて【絵に表す】 ④			
育ちゆく体とわたし ②	マッポンピック ⑤	オリジナルゲームを楽しもう ⑧	力試しバック ⑤	挑戦！君も鉄棒名人 ⑦	障害物リレーに挑戦しよう ⑦	縄跳び・持久走に挑戦しよう ⑥	育ちゆく体とわたし ②	君も跳び箱マスター ⑤	スリーゴールサッカーを楽しもう ⑨
空気と水の不思議を調べよう ⑩	月の不思議な月を調べよう ⑥	秋の生きた物を調べよう ④	ものの温度と体積の関係を調べよう ⑫	冬の星の神秘にふれよう ④	冬の生き物を調べよう ⑦	自然の中の水の行方を探ろう ⑭			
あらつの今と昔～あらつ昔探検～ ⑨	ちんちん電車と地下鉄～明治通りの変化～ ⑩	福岡 お国自慢！～福岡の名物を探そう～ ⑨	民芸の里 小石原村へ行こう ⑪	探検 どんこ舟で 柳川をさぐる ⑧	挑戦！ 博多人形作り ⑪				
お年寄りと一緒に楽しもう ⑩	長浜ラーメン紀行 ⑩	あらつの正月から21世紀へ ⑭	附小樹木調査隊 ⑩	あらつお宝探検隊 ⑮					
○ めあてをもった生活 ① ◎ 2学期の係を決めよう ①	◎ 低学年をよろこばそう ③ ○ 友だちのよいところ ①	◎ 係活動を見直そう ② ○ 目を大切に ① ◎ 学級文庫をつくろう ②	○ 男女なかよく ① ◎ ラーメンパーティをしよう ②	◎ 3学期の係を決めよう ① ○ 食物のひみつ ①	◎ 樹木ウォークラリーを企画しよう ④	○ もうすぐ高学年 ①			
・となりのせき ① ・やさしいなみだ ① ・ぼくの部屋 ①	・ぼくのへんしん ① ・ドクターマジックとおどし ② ・琴の音 ①	・ごめんねサリ ① ・ドッジボール ① ・どっちにしようか ①	・お母さんのせいきゅう書 ① ・女医をめざして ① ・なりたいたわしに向か ①	・年老いた旅人 ① ・ぼくたちの多摩川 ①	・大きな絵はがき ① ・人間愛の金メダル ① ・もったいないの心で ① ・どれが一番 ①	・花さき山 ① ・いなくなったライチョウ ① ・なりたいたわしに向か ①			

第 5 学 年 年 間 指 導 計 画

【文化課程】

国語科・算数科・音楽科・図画工作科・体育科学習においては、低学年からの積み上げをもとに、より文化追究の学習としての役割や立場を強めていく。例えば国語科学習では、生活に生きて働く言語の指導を踏まえ、探究活動や文化活動に生きて働くように、言語の論理性や虚構性を追究できる単元を配列する。社会・理科とこの学年から分化し位置づけられる家庭科学習については、中学年における地域や身近な自然についての学習をもとに、学習対象を時空間的に広げるとともに、生活現実の追究ではなく、より高次な内容についての科学的・文化的追究を大切にする。内容的に高度になるため、教材化の工夫が大切となる。

【生活課程】

高学年の「あらつ学習」においては、生活現実を学習のスタートとしながらも、追究活動がしだいに社会課題に迫っていけるように支援していかなければならない。つまり、具体的な体験活動は大切にしながらも、その背景にあるさまざまな構造に迫っていく情報活用などにも十分に取り組むことができるようにする。

【学習の連動】

これらのことから、5 学年においては、特に教科学習と「あらつ学習」との連動を重視していく。文化の学習で得た知による高度な生活現実の追究ができる「あらつ学習」と、教材から学んだことを生活をくぐらせながら文化として確かめ高めていけるような教科学習とを展開していく。

課程	単元	4 月	5 月	6 月	7 月
文化課程	国語 180 時間	高学年になった自分を考えよう ⑨	詩の朗読会をしよう ⑧	見方を変えて考えよう ⑮	レポートをまとめよう ⑬ 宇宙人を読み比べよう ⑮ ・おみやげ ・宇宙人の宿題
	算数 150 時間	整数と小数の関係を調べよう ⑩	小数のかけ算をしよう ⑫	小数のわり算をしよう ⑭	いろいろな四角形を調べよう ⑯ 見積もりを立てよう ⑥
	音楽 50 時間	歌い継ごう！博多の歌・博多の心 ⑥	音楽の形や仕組みを生かそう ⑤		アンサンブルを楽しもう ⑤
	図画工作 50 時間	ギザギザペックンから生まれたものは ④	アルミとチューブのファクトリー ⑧		ベニヤ板のカーニバル ⑥
	体育 90 時間	スポーツテスト ④	短距離走リレーをしよう ⑦	心の健康 ③ マット・鉄棒運動に挑戦しよう ⑦	距離に挑戦！ 2001 世界水泳 ①
	理科 95 時間	植物の成長の秘密を調べよう ⑥ ・発芽と養分 ・肥料と日光	こちらあつちの気象台 ⑦	植物の成長の秘密を調べよう ②	生命のつながりを探ろう（動物の誕生と成長） ⑪ 生活のなかで生きるてことてんびん ⑥
生活課程	社会 90 時間	国土に生きる人々 (15) ・発見！日本の地形 ⑤ ・探ろう！国土に生きる人々 ⑩		国土を生かし、食料生産に励む人 ・発見！食のふるさと ⑤ ・魚の宝庫 博多漁港 ⑩	
	家庭 60 時間	わが家を探検しよう ②	家族を喜ばせるものをつくろう (20) ・私の家のこだわりモーニングサラダ ⑩ ・すてきな小物づくり ⑩		
	あらつ学習 110 時間	発見！博多の心 (16) 一調べよう！博多の祭り！一		給食から見直そう！ 私たちの日常生活 (23)	個性豊かな夏休み 由研究 ⑧
活動課程	学級活動 35 時間	○ 上級生になって学級目標を決めよう ① ○ 学級の組織をつくろう ①	◎ 学級イベントをつくろう ② ◎ 我慢できる学級のシンボルをつくろう ④	◎ 雨の日サークルをつくろう ②	○ 夏季集落について ① ○ 夏季集落を盛り上げよう ① ○ 夏休みの計画 ①
	道徳学習 35 時間	・上級生の私 ① ・友の命 ① ・見えた答案 ①	・伝えよう！日本の心 ② ・世界を感じる ② ・当たり前のルール ①	・見つめよう私と家族 ② ・星野君の 2 塁 ① ・打たばくは司会者なんだから ①	・ふるさとと心 ② ・私の成長を見つめる I ①

※ 下線は、特に体験の連動を図るもの

(※ 特に追究課題の連動を図る ←→ 特に追究方法の連動を図る <----->)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
めざせ！ プレゼンター Ⅱ ㉔	動物文学の読書 会を開こう ㉔	子供地球環境会 議を開こう ㉔	宇宙の未来や神 秘を考えよう ⑮	自分の大切なも のを考えよう ⑮	言葉の働きを考 えて、メッセー ジをつくろう ⑮	あらつニュース 番組をつくろう Ⅱ ⑮		
平面図形と角 のきまりをみ つけよう ⑩	整数の仲間 づくりをし よう ⑥	分数で表そう ⑩	分数のたし 算・ひき 算をし よう ⑨	面積を求 めよう ⑮	円を調べよう ⑩	2量の関係を式 に表そう ⑧	割合で表そう ⑮	
豊かな表現をつくり出そう ⑨		日本の「子守歌」の旅を つくり出そう ⑥	情景を歌 おう ④	日本のふ しに親し もう ②	世界の「子守歌」の発 表会をしよう ⑥	コンサートを開 こう ⑦		
夏の思い出 を絵手紙で 届けよう ②	ゆっくり転がれ、 ビー玉の散歩道 ⑥	ペットボトルとスチ レンボールから生ま れたものは ⑧	これぞ版 画のパズ ル ④	ストローと針金の動きから ⑧	想像の世界に翼を 広げて ④			
スピード の秘密を 探ろう ⑤	ダンスを 楽しもう ⑤	バスケット ボールを 楽しもう ⑩	けがの防 止 ④	ソフトバレー ボールを 楽しもう ⑦	リラックス運 動をつくろう ⑧	クロスカン トリーに 挑戦しよう ⑦	ジャンプの秘 密を探ろう ⑥	サッカーを 楽しもう ⑥
生命のつなが りを探ろう (植物) ⑪	自然災害から 生活を守ろう ⑮	おもりの動きや 働きを探ろう ⑭		私たちの生活と溶けたものの行方 ⑮				
☆ (25) ・これからの 米作り ⑩	国土を生かし工業生産に励む人々・ (20) ・発見！くらしのなかの工業製品 ⑤ ・探ろう！これからの 自動車生産 ⑮	国土を結ぶ人々 (15) ・発見！情報とくらしのかかわり ⑤ ・探ろう！これからの情報産業 ⑩	国土を創る人々 (15) ・創ろう！「我が国の 水と緑 ⑮					
わが家の快適を 追究しよう ⑧	わが家の掃除名人に なろう ⑩	大切な場所に布の贈り物 をしよう ⑩	家族のひとときを大切にしよう ⑩					
く 自	未来に残そう！きらめく 博多湾 (16)	健康への扉を開こう (16) ～あらつ健康 ウォッチング～	探検！発見！ ほっとけん！ ぼくらの食の ふるさと (14)	明治通りは 車がいっぱい (17) 一道路から調べよう 博多の環境～				
○ 2学期の目 標を立てよう ① ○ 2学期の学 級組織をつ くろう ① ○ 男女の協力 ①	◎ 係新聞コン クールをし よう ① ◎ 委員会自 慢をしよう ① ○ 清掃班長 としての自 覚 ①	◎ リサイクル 集会をし よう ④	○ 健康につ いて考え よう ① ◎ 学年で新年 を迎える準備 をしよう ②	◎ 3学期の学 級組織をつ くろう ①	◎ 環境保全大 作戦をし よう ④	◎ 学級ので きごとベスト10 を決めよう ① ○ 最上級生に 向けて ①		
・命いっぱい ① ・おくびょうも のの長ズボン ① ・手探りの日々 ①	・名医、順庵 ① ・ひさの星 ・緑よみがえ れ！ ①	・きらめく自然 を感じて ② ・オーズドラ アで学んだ と ①	・この水のため に ① ・駅前広場はだ れのもの ① ・私の成長を見 つめるⅡ ①	・学校自慢 ① ・私は広がる ① ・母さんの歌 ①	・自分らしさを 求めて ② ・ボールの魔術 師ペレ ① ・インスタント ラーメンの誕 生 ①	・男らしさ女ら しさって何だ ろう ② ・私の成長を見 つめるⅢ ①		

第 6 学 年 年 間 指 導 計 画

【文化課程】

各教科学習では、文化の学習としての集大成を意図した、①教科学習のなかで系統的に培ってきた資質・能力が総合的に発揮される学習、②教科の本質により個性的に迫っていけるような学習を設定する。例えば、国語科学習では、「話すこと・聞くこと、書くこと読むこと」の3領域1事項の指導内容を、子供自身が必然的に統合していくような単元学習を設定する。また、自分が追究した教科の本質（文化）と、生活や自分とのつながりを吟味させ、意味や価値を考える活動を大切にする。

【生活課程】

6学年では、特に課題設定力に重点を置きながら主体性を高めていく。「あらつ学習」では、自由課題設定型の単元として、「夏休み自由研究」とともに、「卒業研究」を年間を通じ帯単元的に位置づける。6カ年の教科学習で獲得した知識・技能の総合化を図るとともに、「あらつ学習」で獲得した見方・考え方・学び方なども総合化されるよう支援していく。テーマ設定型の単元においても、社会課題により迫っていく単元を設定する。また、特別活動では、最上級生として学校生活の更新に取り組ませていく。学校行事や委員会活動・児童会活動などとの関連を図った題材を設定していく。

【学習の連動】

年間を通じての学習の連動のみならず、学年間での連動も重視する。例えば、5学年の学習から課題が連動したり、先輩の学習を受け継ぎより発展させたりするような単元も位置づける。また、複数教科等と連動するダイナミックな展開も工夫し、それぞれの学習の有用性を実感させる。

課程	単元	4月	5月	6月	7月	
文 化 課 程	国語 175 時間	新しい世界を求めよう 「南に帰る」⑮	短歌・俳句集をつくろう⑩	漫画文化研究会を開こう⑩	学校生活を紹介するホームページを創ろう⑮	古典への旅⑳
	算数 150 時間	整数の仲間づくりをしよう⑫	分数のたし算・ひき算をしよう⑮	立体について調べよう⑫	ならして調べよう(平均)⑮	
	音楽 50 時間	情景を歌おう⑤	音楽の形や仕組みを研究しよう⑥		創り出そう！私達の筑前今様⑤	
	図工 50 時間	すてきな花がさく世界 [絵に表す]④	形と色のファンタジー [絵(版)に表す]⑥	光と透明の世界へようこそ [造形遊び]⑧		
	体育 90 時間	スポーツテスト④	フープリレー⑤	健康な生活④	ソフトボールを楽しまう⑨	記録に挑戦！2001世界水泳⑪
	理科 95 時間	私たちの周りの環境を見つめよう④	私たちの暮らしと環境④	進む地下水汚染… 福岡の水は大丈夫？ (私たちの生活と水にまつわるもの)⑭	生きるために必要な養分の作られ方について考えよう(植物)⑩	生きるために必要な養分の作られ方について考えよう(動物)⑮
課 程	社会 100 時間	I 日本のあゆみ(67) 福岡市博物館探検④ 古代都市板付遺跡④ 大宰府と鴻臚館分寺④ 菅原道真と国風文化④ 源頼朝と鎌倉幕府④ 北条時宗と元寇⑥ 現代に生きる室町文化④ 秀吉と博多町⑥ 福岡藩黒田如水長政⑧				
	家庭 55 時間	家事に役立つものを作ろう 「エプロンを作ろう」⑩		季節に合わせた生活をしよう I 「夏のくらしを考えよう」⑫		
生 活 課 程	あらつ学習 110 時間	希望と誇り⑮		始めよう！ 附小IT革命 校内LANの活用②①		夏休み自由研究(卒業研究中間報告会にむけて)
	学級活動 35 時間	卒業研究をはじめよう⑪				
		学級活動 35 時間	○ 最高学年としての役割① ○ 学級目標を決めよう① ○ 学級組織をつくろう①	◎ 1年生のお世話をしよう① ◎ 学級のシンボルをつくろう④	○ 振り返ろう！自分の健康生活① ◎ 委員会を私たちの手で②	○ 夏季集落について① ○ ぼくらの夏季集落① ○ 夏休みの計画①
道徳学習 35 時間	・わたしってなんだろう① ・言葉のおくりもの① ・白神山地①		・葉っぱのフレディ① ・義足の聖火ランナー① ・まんがに命を① ・幸せをおくるリーダーに①	・ぼくは後悔しない学校を私たちの手で① ・天からのおそなえ① ・先ばいの心を受け継いで①	・祖父の生きがい① ・東京大空襲の中で① ・何のために生きる！①	

(※ 特に追究課題の連動を図る ←→ 特に追究方法の連動を図る <----->)

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
戦争文学を読み わおう 「石臼の歌」 ⑫	宮沢賢治の世界 を研究しよう ⑳	旅行記をまとめ よう ㉑	人間の生きる姿 を考えよう 「待る、みんなの尻顔」 「梅の命」 ⑮	外来語と日本文 化を調べよう ⑩	めざせ！プレゼ ンターⅢ ⑮	卒業論文をまと めよう ⑩		
積み立てを立 よう ⑧	分数のかけ算・わり 算の仕方を調べよう 22	単位量あたりの 大きさで比べよ う ⑮	比を使っ て比べよ う ⑧	比例するもの を調べよう ⑫	算数のまとめ ⑮			
クラスの表現 を創ろう ③	豊かな表現をめ ざそう ⑥	心を音楽に託して 感じ取ろう・伝え よう ⑥	私たちの音楽アルバム 発表会をしよう ⑥	クラスの表現を創 ろう ③	たずねよう！ 世界の音楽 ⑥	卒業式の歌の表現 を創り出そう ④		
パチンボードと リングのタイアッ ク 「立体に表す」 ⑧	思い出の一枚をか ざろう 「つくりたいもの をつくる」 ⑥	伝えよう！ぼくのわたし の好きなあの場面 「絵に表す」 ⑥		学校アートプロジェクト 「造形遊び」 ⑥	12年間をありがとう ～お世話になった人に 絵手紙をおくろう～ 「絵に表す」 ⑥			
テーマ 表現 21 ⑤	器械運動 発表会を開 こう ⑧	ソフトバ レーボールを 楽しもう ⑧	健康な 生活 ④	バスケットボ ールを楽しも う ⑩	縄跳び・持久 走 ⑦	力試しア スレッチ ⑤	サッカーを楽し もう ⑩	
地球の神秘を探ろう (土地のつくりと変 化) ⑫	火を使い生活する私 たち ⑮	私たちの体の不思議 を探ろう ⑬		生活の中で生かされる電気 エネルギーを調べよう ⑫	私たちの周りの環境 を見つめよう ⑥			
江戸の 「人文化」 ④	平野 国臣と 明治維 新 ⑤	近代化 と西郷 隆盛 ④	川上 音次郎 と自由 民権 ④	地域の 人に学 ぶ15年 戦争 ⑥	II 生活と政治(15) ふくふく プラザが できるま で ⑦	日本国憲 法と国 会 ⑧	III 世界の中の日本(18) 世界の国を 訪ねよう ⑩	世界は1つ 国際連合 の働き ⑧
自分のできることは自分でしょう 「こだわり和食にチャレンジし よう」 ⑧	身近な衣服の手入れをしよう ⑦			季節に合わせてく らしをしようII 「あたたかい住まい方 を考えよう」 ④	鍋物にチャ レンジしよ う ⑥	6年間の小学校生活 に感謝を込めて 「家族へのプレゼン トをしよう」 ⑧		
あらつ游学ツアー ぼくのわたしの こだわり情報 ⑮	健康から見直そう！ ぼくのわたしの 附属小学校 ⑮			卒業研究発表会をしよう 23				
卒業研究を進めよう ⑧								
○ 2学期のめ あてを立てよ う ①	○ 学習環境を つくろう ①	○ あらつの町 への恩返し ④	○ 振り返ろう 自分の健康生 活II ①	○ 3学期の学 級組織をつ くろう ①	○ 中学校へむ けて ①	○ さよならパ ーティーをし よう ②		
○ 2学期の学 級組織をつ くろう ①	○ 卒業文集の 計画 ②		○ 学級ギネス ブックをつ くろう ②	○ 自分を見 つめて ①	○ 附属小あり がとう ②			
○ 最後の運動 会・月見学 芸会 ①	○ 思い出をつ くる修学旅行 ①							
・手品師 ・愛華さんか らのメッセー ①	・修学旅行の夜 ①	・白旗の少女 ①	・お母さんへの 手紙 ①	・法隆寺 ①	・青の洞門 ①	・自分への手紙 ①		
・どうすれば いいの ①	・厚生園での体 験 ①	・うちらネコの 手ボランティア ①	・空きかんのゆ くえ ①	・かたうでの名 コーチ ①	・かけがえのな い地球 ①	・ぼくの進む道 ①		
・「すんまへ ん」でいい ④			・銀のしょく台 ①		・相手のことを 考えて ①	・何のために生 きるIII ①		
			・何のために生 きるII ①					

文化課程の学習

ことばと豊かにかかわり伝え合う国語科学習

国語科部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う国語科学習の役割・立場

今日、情報化が急激に進展し、経済、社会、文化の面において交流が進み、国際的な相互依存関係が深まってきている。また、世界的規模の情報通信ネットワークを通じて、不特定多数のものが、双方向に文字・音声・映像等の情報を融合して交換することが可能になってきている。子供たちの生活のなかにも、テレビ、新聞、書物、インターネット等による情報があふれている。しかし、これらの情報を的確に能動的に受信しかつ発信しながらことばのやりとりを行っている子供は少ない。また、ことばを通して互いの思いや考えを理解し合い、よりよい人間関係を築くことを苦手とする子供が多い。そこで、国際化・情報化の時代である21世紀を生きる豊かな人間の育成をめざすために国語科学習の役割とは、音声言語や文字言語とかかわり自分の目的や意図に応じた必要な情報を取捨選択して自分の考えを創り出し、ことばで自分の思いや考えを表現したり相手の思いや考えを理解したりして互いの考えを高めたり新たな考えを生み出したりする力を育てていくことである。

○ ことばと豊かにかかわり考えを深める国語科学習とは

ことばとかかわるとは、自分の目的に応じて言語による情報を取捨選択・整理しながら、自分の経験や既存の情報と結びつけて考えたり想像したりして自分なりの思いや考えを創り出すことである。ことばと豊かにかかわるとは、自分の体験や既存の情報とことばを結びつけて考えたり、ことばを吟味しことばとことばを関連づけて考えたりすることである。伝え合うとは、読んだり聞いたりしたことをもとにことばで考えたりことばから想像したりしたこと（認識力・思考力・想像力）を自分なりに書いたり話したりして他者に自分の思いや考えをわかってもらい（表現力）、さらに協同で新たな考えを生み出すことである。つまり、伝え合うとは、「読むこと」という文字言語による理解力、「書くこと」という文字言語による表現力、「話すこと・聞くこと」という音声言語能力を総合的にはたらかせた言語活動である。ことばと豊かにかかわり伝え合う国語科学習とは、以下のような資質・能力をはたかせながら言語活動を展開していく学習である。

- ことばでとらえる力（認識力）、ことばで考える力（思考力）、ことばをもとにイメージを膨らませる力（想像力）
- ことばを通して互いの思いや考えを他者の向かって表現する力
- 自他のことばや考えを大切にしていこうとする心情や態度

国語科学習ではことばでとらえ考えたり想像したりする創造性を基盤にしながら、自分の思いや考えをことばで表現しようとする主体性が育まれていく。そして、創造性・主体性を発揮していく過程で、互いのことばを大切にしようという人間性が育っていくと考える。特に、国語科では、ことばで自分の思いや考えを創り出し、その思いや考えを他者に向かって表現したり相手の思いや考えを理解したりしながら高め合っていく創造性や主体性を育てることが大切である。このような創造性、主体性、人間性を育てていくことは、既存の言語文化を継承し、さらによりよく拡充していくことができるとともに、他教科やあらかず学習での学びの素地となる。

○ ことばと豊かにかかわり考えを深める子供とは

- 課題を解決するために、ことばを手がかりに論理的に思考したり想像を広げたりして、自分の思いや考えを創り出している子供（創造性）
- 目的に応じて必要な情報を取捨選択したり、目的や意図、状況に応じて自分の思いや考えを相手にわかるように表現したりして、ことばで表現し合う子供（主体性）
- 互いに理解し合うために、自他の立場や考えを大切にしていこうとことばのやりとりを行い、よりよい人間関係を築こうとしている子供（人間性）

【国語科学習で育てたい資質・能力の系統】

学 年		低 学 年	中 学 年	高 学 年
創 造 性 (こ と ば で 考 え る 力)	認 識 力	○ ことばの意味を理解したり、文字（平仮名・片仮名・漢字）を覚えたりすることができる。		
	思 考 力	○ 表現されている事柄を知ることができる。	○ 表現されている内容を知ることができる。	○ 表現されている内容の述べ方を知ることができる。
	想 像 力	○ ことばと自分の経験を結びつけて考えたり、表現されていることを比較・類別したりすることができる。	○ ことばとことばを結びつけて考えたり、大事なことに気をつけて伝えようとしていることを考えたり、自分の考えと比べたりすることができる。	○ 自分の見方・考え方と比べ、相手の見方・考え方に共感したり反論したりして、自分の考えを広げ深めることができる。
主 体 性 (こ と ば で 表 現 す る 力)	音 声 表 現 力	○ 自分が考えたことを簡単にまとめて話すことができる。	○ 自分の考えを整理して要点をはっきり明確にして話すことができる。	○ 相手の興味・関心に応じた内容をよく伝えるように効果的に話すことができる。
	文 字 表 現 力	○ 相手の話をよく聞いて、それを受けて話を続けたりすることができる。	○ 場や展開に応じて自分の考えが通じるように工夫して話し合うことができる。	○ 計画に沿って考えを発展させたり集約したりしながら話し合うことができる。
人 間 性	こ と ば を 大 切 に す る 心 情 ・ 態 度	○ 相手や目的を考えながら文と文のつながりに注意して簡単な組立てで文章を書くことができる。	○ 相手や目的に応じて中心に伝えたいことを明確にして文章を書くことができる。	○ 目的や意図に応じて、考えたことを整理して筋道立てて書くことができる。
		○ 相手の気持ちを考えながらことばのやりとりをし、互いに分かり合おうとすることができる。	○ 相手や目的に応じた表現のよさに気付き、自分をより分かりやすく表現することばを選んで使おうと努めたり、相手の気持ちを理解しようとする努めたりすることができる。	○ ことばを通して相手の意図を推察し、互いの理解を深め人間関係をよりよくしていくことができる。
人 間 性	こ と ば を 大 切 に す る 心 情 ・ 態 度	○ ことばには気持ちがこめられていることに気付き、相手のことばをしっかりと受けとめることができる。	○ 言葉を通して、自他の生活を楽しくしていくことができる。	○ 自他のことばが問題解決や創造生産に寄与する価値に気付き、ことばを通してもの・人・こととのかかわりを深めていくことができる。

読書経験をもとに本と豊かにかかわる読書活動の展開

国語科部 松 藤 秀 子

1 主題の意味

(1) 読書経験をもとに本と豊かにかかわるとは

読書とは、書かれたことばとそれがもっている意味内容を理解し、ことばが伝える内容を理解し、反応したり活用したりしながら自分の見方・考え方を深めていくことである。読書活動を子供自らが展開していくためには、読書の目的を明確にすることが大切である。そこで、本研究では、目的をもった意味のある読書活動を展開していくために、子供たちの読書経験を大切にしてお本とのかかわりを強め、本のよさを味わうことができるようにしたいと考える。

読書経験をもとにとは、今までに読んだ本を振り返り、本を通して味わった面白さや収集した情報や考えたことなどを吟味することによって、もっと面白さを味わいたい、もっと詳しく知りたいという本への興味・関心を高めることである。本への興味・関心を高めた子供たちは、自分の欲求を満足させるために目的をもって本を選択し読み広げることができ、既読の本と比較しながら読み進めることができる。本と豊かにかかわるとは、自分の目的を達成させるために既読の本と比較しながら読み、ことばに着目して想像したり思考したりしながら自分に必要な情報を選択し、本の楽しさを味わったり本のすばらしさを感じたりするとともに、文字を中心として文化を享受したり創造したりすることである。読書経験をもとに本と豊かにかかわるとは、子供自らが本を読む目的をもって本を選択して読み広げ、読み方を身につけたり本に親しむ態度を育てたりすることである。

(2) 読書経験をもとに本と豊かにかかわる読書活動の展開とは

子供たちが本を読む目的を明確にもって読み広げ、文化を享受したり創造したりしていく過程に、次のような自己吟味、自己追究、自己更新の活動を位置づけることにより、目的をもって本と豊かにかかわる力を身につけていくことである。

【自己吟味】—読書によって得た楽しさや情報、自分の読書の仕方や傾向などの読書経験を振り返り、自分の読書の不十分さや問題点に気づき、読書の課題を明確にする活動

【自己追究】—目的を達成するために既読の本と比較しながら読み、新たな面白さや情報を発見したり新たな考えを生み出したりする読み方を調べる活動

【自己更新】—読み広げを行い、自分の読み方の伸びを実感するとともに、味わった面白さや新たに知ったことなどについて話し合い、本の楽しさやすばらしさを実感する活動

このような活動によって、本と豊かにかかわるなかで、子供たちは自ずと①ことばをもとに思考・想像し、面白さを発見したり考えを深めたりする力（創造性）、②自分が得た面白さや情報について分かりやすく書いたり話したりする力（主体性）を身につけていくことができる。つまり、読書経験をもとに本と豊かにかかわる読書活動の展開とは、自分と本とのかかわりを振り返り自らの読書課題に気づき、ことばと豊かにかかわりしながら読んだり既読の本と比較しながら読んだりして新たな面白さや情報を収集し、自分の読書生活を豊かにしていくことである。

(3) 本研究で期待する子供の姿

読書経験をもとに本と豊かにかかわる読書活動を行っている子供の姿は、以下の通りである。

- 自分の読書の仕方や傾向、味わった面白さなどを振り返り、本を読む目的を見出し、読書への意欲をもつことができる子供 (自己吟味)
- 目的達成に向けて、既読の本と比較しながら読み進め自分の考えをもつとともに、それを交流し合い、さらに自分の考えを深めていくことができる子供 (自己追究)
- 目的に応じた本を選択し読書活動を広げるとともに、目的に応じた読書の仕方を身につけることができる子供 (自己更新)

2 学習の具体的構想

(1) 読書経験を生かすための共通教材の選定条件について

子供たちの読書経験を以下のように分類し、本の面白さや楽しさ、読んでいる種類（傾向）、本を読んで考えたことなどについて吟味し、読書経験によって共通教材を設定することで子供たちが目的に応じた読み方を身につけ、読書活動を広げていくことができるようにする。

	読書経験の種類		共通教材の設定条件	読書の広がり
主に 低学年	本の面白さや楽しさの経験が少ない場合	⇒	○ ストーリー展開や表現に面白さを見出すことができる教材文	○ 楽しみ読み (物語を中心に)
	本の面白さや楽しさの経験をもっている場合	⇒	○ 同じ題材や文種で面白さの種類を広げることができる教材文	
主に 中学年	本の種類（傾向）に偏りがある場合	⇒	○ 同一題材で具体的に比較することができる異なった文種の教材文	○ 調べ読み (文学的文章から説明的文章へ)
	複数の種類（傾向）の本を読んでいる場合	⇒	○ 興味の対象を広げることができる教材文	
主に 高学年	本から生き方や考え方について考えた経験が少ない場合	⇒	○ 人物の生き方や考え方に着目し自分と比較しやすい教材文	○ 考え読み (より多様な文章へ)
	本から生き方や考え方について考えた経験が多い場合	⇒	○ 生き方や考え方を比較し、考えを深めることができる教材文	

(2) 読書経験を生かした読書活動の単元構成について

単元を既読本の振り返り→読み方や読み広げる観点を見出し共通教材の読書→目的に応じた自己選択読書という3段階から構成し、各段階に自己追究の活動として読書を通して生まれた思いや考えを表現活動、本を読んだことによって生まれた思いや考えを交流する活動を設定する。

		つかむ段階	しらべる段階	ひろげる段階
学習活動と内容	読	既読本を再読し振り返る活動 自己吟味 ○ 自分の読書経験の吟味 ○ 既読の本の内容や面白さを捉え、読書課題を設定すること	共通教材を読む活動 自己追究 ○ 叙述に即して想像したり考えをもったりして読むこと ○ 読書計画を立てること	自己選択読書活動 自己更新 ○ 共通点や相違点を見つけながら読むこと ○ 自分の考えを深めること
	表	既読の読書記録の整理 ○ 読んだ本の内容や感想を想起すること	読書記録の作成 ○ 考えたことや調べたことを分かりやすくまとめること	読書記録の作成 ○ 自分の考えや感想を目的に応じてまとめること
	交流	課題づくりをする読書交流会 ○ 既読本の内容を伝え合うこと ○ 目的を明確にして読書課題を設定すること	既読本と比較した読書交流会 ○ 感想や調べたことを伝え合い、考えの違いに気付くこと ○ 読書計画を立てること	自他の本を比較する交流会 ○ 考えや感想について話し合い、自他の考えを深めること
	支援	○ 既読本の想起 ○ 読み広げる本の方向性の提示（ジャンル、内容など）	○ 読み方や読み広げ方を考える共通教材の提示 ○ 読書記録の吟味と図書リストの提示	○ 目的に応じて自己選択できる読書コーナーの設置 ○ 本の共通点や相違点について交流する場の設定

(3) 読書課題のもたせ方について

子供たちが目的をもって意欲的に読書活動を展開することができるように、次の2段階で読書課題を設定し、課題づくりを以下のように工夫する。

「つかむ」段階から「しらべる」段階への読書課題づくり	「しらべる」段階から「ひろげる」段階への読書課題づくり
○ 読書経験をもとに課題づくり をする。 【楽しみ読み】—既読の本の面白さを振り返り、新たな面白さに気付かせ、面白さを追究する目的をもつ。 【調べ読み】—既読の本で得た情報を振り返り、知らないことに気付かせ、情報を収集する目的をもつ。 【考え読み】—既読の本の人物の生き方や考え方の違いに気付かせ、生き方を追究する目的をもつ。	○ 共通教材をもとに課題づくり をする。 【楽しみ読み】—面白さを類別して面白さを見つめる観点を明確にし、自分が味わいたい面白さを見出す。 【調べ読み】—共通教材で不十分なことに気付かせ、関連したことを見出したりして調べる目的をもつ。 【考え読み】—生き方に対する読みの違いに気付かせ、同じ境遇にある生き方を追究する目的をもつ。

3 指導の実際

(1) 単元名 第2学年 日本昔話のおもしろさ発見！

(2) 本単元の考え方

本単元は、昔話の面白さを見つけていくという目的をもって、様々な昔話を読んでいくことがねらいである。具体的な学習内容としては、①ことばに着目して人物や場面の様子を想像しながら読むこと、②粗筋をとらえ、昔話の面白さを見つけながら読むこと、③自分が読んだ昔話の粗筋や面白さについて書きまとめ、伝え合うこと、④楽しく読書する態度を育てること、などである。これらの学習内容を身につけていくことで、次の創造性、主体性、人間性を育てていくことができると考える。

創造性	○ ことばや文をもとに、場面や登場人物の様子について想像を膨らませる。(想像力) ○ 話の展開をとらえたりことばをむすびつけて人物像をとらえたりしながら、昔話の面白さをとらえる。(思考力)
主体性	○ 昔話の粗筋や面白さについてカタログに書きまとめる。(文字言語による表現) ○ 友達の求めに応じて自分が読んだ昔話について話したり、友達の話を自分が読んだ昔話と比べてきたりして、読みたい本を見つける。(音声言語による表現)
人間性	○ 自他のことばを大切にしながら、友達が見つけた昔話の面白さを認め合う。(心情) ○ ことばが醸し出す味わいを感じ取り、昔話に親しむ態度が育つ。(態度)

日本の昔話を教材化し、読書活動を展開していく価値は、次の3点である。

- 話の展開がわかりやすいので、低学年の子供にとって面白さを読み取ることができること
- 独特の語り口がされているために、ことばの面白さを味わうことができること
- 人物像や展開に似ているところがあり、類似点や相違点を見つけながら読むことができること

そこで、本単元の指導にあたっては、子供たちが知っている昔話から入り、面白さを追究することを目的として読書活動発展させていくことができるように単元を構成し、昔話を読み広げるために、読んだ昔話の面白さをカタログに表現し、友達と面白さについて伝え合う活動を位置づける。具体的には、次の3段階で構成する。「つかむ」段階では、子供たちが知っている昔話の粗筋や面白さについて話し合わせ、昔話の類似点や相違点に気付かせる（自己吟味）。「しらべる」段階では、昔話の面白さの見つけ方やカタログの書き方を調べるために、共通教材「力太郎」を読み、展開や人物像、ことば遣いの面白さについて話し合い（自己追究）、自分の読書生活を振り返り追究したい面白さを選択し、読書計画を立てる。「ひろげる」段階では、自分の読書計画にそって昔話を読み広げ、ポスターセッション形式でカタログを紹介し合い、昔話の様々な面白さに気付く（自己更新）。

(3) 目標

- ① ことばや文から場面や人物の様子を想像したり粗筋をとらえたりしながら様々な昔話を読み、面白さについてカタログに書きまとめ伝え合うことができる。(創造性、主体性)
- ② 互いのことばを大切にしながら昔話の面白さについて伝え合い自他が見つけた面白さを認め合うとともに、本に親しむ態度を育てることができる。(人間性)

(4) 計画（12時間）

時間	つかむ段階（3時間）	しらべる段階（3時間）	ひろげる段階（6時間）
活動と内容	1 知っている昔話の面白さについて話し合う。 (1) 既読の昔話を紹介し、面白さについて話し合う。① ○ 粗筋や面白さについて話すこと (2) 昔話の本を集め、学習課題について話し合う。② ○ 類似点や相違点について話し合い、課題をもつこと	2 共通教材「力太郎」を読み、面白さについて話し合う。 (1) 「力太郎」を読み、面白さについてカタログにまとめる。② ○ 粗筋をとらえ、場面や人物の様子を想像して読むこと ○ 粗筋や面白さを書くこと (2) 面白さについて話し合う。① ○ 様々な面白さに気付き、読書計画を立てること	3 自分の計画にそって昔話を読み広げ、面白さ見つけをする。 (1) 追究する類話を読み広げ、カタログにまとめる。③ ○ 面白さを見つめながら読み、カタログにまとめること (2) 面白さを紹介し合い、さらに読み広げる。③ ○ 自分が読んだ昔話の面白さと比較し、読書計画を見直すこと
手だて	※ 既読の昔話の提示 ※ 図書紹介用のカタログの提示	※ 既読の昔話との比較 ※ モデルカタログの提示 ※ 面白さの分類	※ 昔話コーナーの設置 ※ 面白さ別のシール貼り ※ ポスターセッション形式の交流

(4) 指導の実際

① 既読の昔話について話し合い、学習計画を立てる段階（1～3 / 12 時間）

この段階のねらいは、自分と昔話とのかかわりを振り返り、昔話には面白さがあることに気づき、面白さを見つけていくために昔話を読んでいきたいという意欲をもつことである。そのために、聞いたり読んだりしたことのある昔話の面白さについて話し合うという自己吟味を設定した。「桃太郎」や「一寸法師」の粗筋や面白さについて話し合いながら（写真①）、鬼を退治するところが似ていること、桃太郎は仲間といっしょに退治する



【写真① 既読の昔話を振り返って】

が一寸法師は一人で退治したことなど昔話の類似点や相違点に気付くことができた（資料①）。昔話に興味をもった子供たちは、既読の昔話を登場人物や話の展開から昔話を分類し（資料②）、もっと昔話を読んで面白さを見つけたらという意欲を高め、家庭や図書館から昔話を集めた。

な「にたいは○面仲びした桃ん○
る一似とる「鬼白間だ、とからだ「桃
と寸てところし「をかつにん犬ころ桃と
ころ法師いまは「桃法つなことろが太
が違は「から師つけたやと面郎あ
います。でぐ生とたこたジか生は私
す。大でやま似こらがっますは
きも、姫れてとも、きたれ。読

【資料① 昔話を比べてのT児の発言】

- ・悪者退治の昔話
- ・変身する昔話
- ・仲間ができる昔話
- ・恩返しをする昔話
- ・不思議なことが起こる昔話
- ・こわい昔話
- ・かわいそうな昔話
- ・しかえしをする昔話
- ・やさしい人が出てくる昔話
- ・欲張りな人が出てくる昔話
- ・意地悪な人が出てくる昔話

【資料② 昔話の分類】

介し合っていききたいです。ログをつくって友達に紹介したいです。面白さを見つけて、カタ面白さがあるか読んでみました。昔話には、どんな面白さがあるか読んでみました。私が読んだことのない昔話がいっぱいあります。本が読みたいなら、昔話の本をもってきました。今日、家から昔話の本をもってきました。

【資料③ T児のノート】

【考察①】

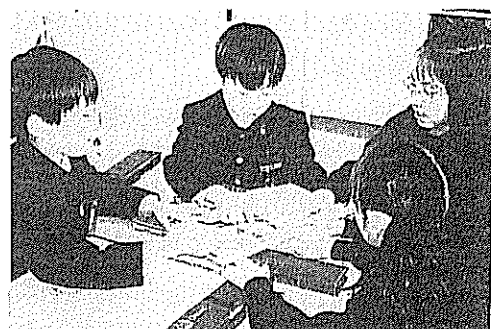
資料①から、T児は昔話の面白さに気付いたり、既読の昔話を比べて類似点や相違点があることに気付いたりすることができた。また、資料②のように昔話の筋や登場人物から既読の昔話を分類し、自分が知らない昔話を読み、面白さを調べていきたいという目的をもち、面白さを紹介しながら昔話を読み広げていこうとしていることがわかる（資料③）。これは、子供たちの読書経験を振り返り、自分が感じた面白さを友達が感じた面白さと比較するという自己吟味が有効であった。

② 共通教材「力太郎」を読み、面白さを伝え合う段階（4～6 / 12 時間）

この段階のねらいは、「力太郎」の面白さについて書きまとめて話し合い、自分が読み広げる昔話の計画を立てることができることである。資料②の分類別に色シールを貼りながら「力太郎」の面白さを見つける自己追究を設定した。子供たちは作成したカタログを読み合いながら（写真②）、「力太郎」には、いろいろな面白さがあることにあることに気づき（資料④）、自分の読書生活を振り返り、これから読んでいきたい昔話を決めた（資料⑥）。

- C1:「えいえいおう。」と急に大きくなって、こんび太郎が力太郎に変身するところが面白い。
C2:「のっしじゃんがずしん」「のっしじゃんがずしん」という足音が面白い。3人は、すごく大きかったらうな。3人が歩くと、まわりの家がゆれたかもしれないな。
C3: 化け物がぼわんと出てくるところがとてもこわかった。みどろっこ太郎と石こ太郎が化け物に食べられたとき、力太郎はびっくりしたらうな。こわくてドキドキしたので、面白い。
C4:「あねこ」や「けれ」など昔のことばが出てきて面白かった。
C5: 力太郎はみどろっこ太郎や村の娘を助けたので、とてもやさしいと思った。

【資料④ 「力太郎」の面白さの話し合い】



【写真② 「力太郎」の面白さの話し合い】

【考察②】

資料④の C2C4 から昔話独特の言葉遣いの面白さを、C2C3 からことばに着目して場面の様子を想像していること、C5 からことばをもとに人物像をとらえていることがわかる。これは、創造性の育ちである。また、資料④や写真②からカタログ交流を通して面白さの分類別に貼ったシー

ルの色から「力太郎」の面白さについて話し合い、主体性が育っている。このことから、共通教材「力太郎」を通して昔話の面白さを調べているという自己追究が有効であったと考える。

③ 計画に沿って読書活動を行う段階（7～12 / 12 時間）

この段階のねらいは、自分が読みたい面白さの昔話を選んで読書活動を広げていくことができることである。そのために、昔話リストを準備したり昔話コーナーを設置したりして、目的の応じて本を選び、昔話の面白さを読み広げる自己更新に取り組ませた。こわい話を読んでいくことを目的としたT児は、同じ分類の昔話を選んだ子供たちと交流しながら「食わず女房」「馬方山姥」「のっぺらぼう」「雪女」「へびむろや」「きのこお化け」「三枚のお札」を読み、こわさを伝えるカタログをつくった（資料⑥）。そして、それぞれのカタログを分類ごとに掲示し、ポスターセッション形式でカタログの交流を行った（写真③）。その結果、T児は、優しい人が出てくる昔話や不思議な出来事のある昔話に興味をもち、「いもごころ」「はなたれこぞうさま」「まめ太郎」「きき耳ずきん」などを読み広げをいった。

「力太郎」のお話は、化物が出てくるところがとてもこわかったです。私は、今までに悪者を退治する話や意地悪な人と優しい人が出てくる昔話を読んだことがありません。「力太郎」のように、化物が出てきて、みどうつこ太郎と石こ太郎が飲み込まれたとき、ドキドキしたので、こわい昔話を読んで、面白さを見つけていきたいです。「食わず女房」「馬方山姥」「のっぺらぼう」を読みたいです。

【資料⑤ T児の感想】

【資料⑥】
T児が昔話のこわさ紹介の一部
私が読んだ「うまかたやまんば」は、とてもこわいお話でした。やまんばが出てきて、魚をばりばり食うところや「お前をとって食うぞ」と言うところがこわかったです。でも、馬方が大事な馬の足を一本ずつ切っていくところがもつとこわかったです。馬は、足を切られて痛くてたまらなかつたと思います。それなのに、走らされてすごくいたかつたと思います。馬方もやまんばに追いかけて食べられないかなとドキドキしながら読みました。



【写真③ 昔話の面白さについてのカタログ交流】

Mさんのカタログを見て、「いもごころ」が面白そうだなと思いました。Mさんが、「いもごころ」の面白さを話してくれました。しよやさんがとても面白そうでした。「いもごころ」を読んでみたところ、とても面白かったです。しよやさんも大阪に行ったことがないので、「まかせなさい。」と言ったところが面白いです。Mさんが教えてくれたように、知ったかぶりのしよやさんがいもを転がしたところも面白かったです。そして、他の人もみんな、しよやさんのまねをしていもを転がすところがとても面白かったです。

【資料⑦ 「いもごころ」の感想】

【考察③】 自分が味わいたい面白さについての昔話を読み広げていくという自己更新の活動に取り組ませた結果、資料⑥⑦からは、場面の様子を想像し面白さを味わいながら読んでいることや、自分が感じた面白さを自分のことばで表現したり、友達と伝え合うことができたことがわかる。これらのことから、創造性や主体性を育てることができたと考える。また、資料⑦から友達が紹介してくれた面白さを認め、さらに自分なりの面白さを見つけ、人間性も育っていると考える。

4 全体考察

「つかむ」段階の自分の読書経験を振り返って自分と昔話のかかわりによる自己吟味によって、昔話を読み広げる目的をもつことができた（考察①）。「しらべる」「ひろげる」段階では、面白さを追究していくことによって、自分が読んだ昔話の面白さは、どんな面白さなのかを考えながら読んだり、ことばの表現の面白さを味わったりすることができた（創造性）。また、カタログづくりを通して面白さを友達に分かりやすく表現し友達と伝え合うことができた（主体性）（考察②③）。これらのことから、昔話の教材化、読書活動において自分の読みを表現し伝え合う活動の位置づけ、既知書の振り返り→共通教材読書→選択読書という活動構成が有効であったと考える。

今後の課題としては、読書記録等の振り返りによって読み広げの傾向を自ら見出していくような自己吟味の場を設定すること、物語から科学的読み物へと発展させていくことである。

自ら数理を求め続ける算数科学習

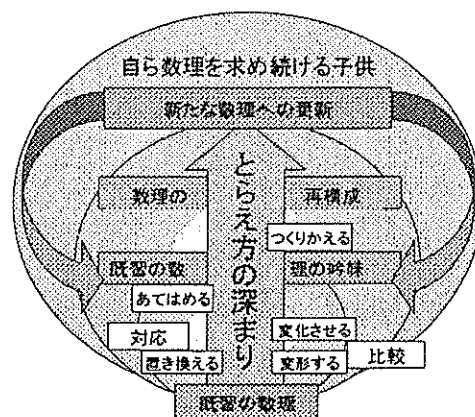
主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う算数科学習の役割・立場

激動するこれからの社会の変化に対応し主体的に生き抜いていくためには、学習したことを単に知識として身につけておくだけではなく、その知識を新たな場面で活用したり、活用したことをもとに更新したりする経験を積み重ねることが必要である。この経験の積み重ねによって物事の本質をとらえ、予測しにくい変化の動向を見抜くことができるようになる。つまりこのような経験を積み重ねることは、将来子供たちが出会うであろう様々な問題に対して自ら解決の方法を模索したり目的にあった解決方法を選択したりして、よりよい生き方をつくり出す原動力となる。以上のように考えると、豊かな人間の育成を目指す上での算数科学習の役割は、数理が新しい問題の解決に生かされたり、新しい数理をつくり出すことのできる自分のよさを感得したりしながら、事物・現象のうらにひそむ数量的な関係や数量や図形の意味を捉え続けようとする子供を育てていくことである。そのためには、身の回りの物事の状態や変化の様子を数量的に表現したり、表現したことから解決の糸口をつかんだりする算数的活動を通した問題解決を数多く経験させることが必要である。

○ 自ら数理を求め続ける算数科学習とは

自ら数理を求め続けるとは、出合った事象に対する強い興味・関心や自分なりの思い・願いに支えられて、事象を変形したり、変化させたり他のものと置き換えたりする算数的な追究を旺盛に行いながら、既習の数理をあてはめたりつくりかえたりといった吟味を繰り返し、新たな数理へと更新していくことである。ここでは、これまでに処理してきた事象と新たに出合った事象を比較したり、対応づけたりするなかで、既習の数理の構造を吟味して、より一般性の高い数理へと更新していく姿が見られる。このような既習の数理の吟味→再構成→新たな数理への更新を繰り返すことで、数学的な処理の仕方をつかひこなす自分への自信を高め、自ら数理を求め続ける態度が高められていく。つまり自ら数理を求め続ける算数科学習とは、未知の事象に出合ったときに既知の事象と関係づけて見通しをうみ出し、うみ出した見通しをもとに未知の事象にねばり強くかわる算数的活動を通して、見通した内容や方法の確かさを検証し、新たな数理へとまとめあげていく学習である。このような学習を通すことで身につけた数理を活用して新たな数理をうみ出しながら、自分の生活を高めていくことができる。と考える。



このような既習の数理の吟味→再構成→新たな数理への更新を繰り返すことで、数学的な処理の仕方をつかひこなす自分への自信を高め、自ら数理を求め続ける態度が高められていく。つまり自ら数理を求め続ける算数科学習とは、未知の事象に出合ったときに既知の事象と関係づけて見通しをうみ出し、うみ出した見通しをもとに未知の事象にねばり強くかわる算数的活動を通して、見通した内容や方法の確かさを検証し、新たな数理へとまとめあげていく学習である。このような学習を通すことで身につけた数理を活用して新たな数理をうみ出しながら、自分の生活を高めていくことができる。と考える。

○ 自ら数理を求め続ける子供とは

- 出合った事象と類似した経験や学習を関連づけながら見通しをもち、演繹、帰納、類推などの論理的な思考力を駆使しながら数理を再構成していくことができる子供 (創造性)
- より包括的で一般性のある法則や解決方法を求め、高めていこうとしたり、獲得した数理を活用しようとしたりすることができる子供 (主体性)
- 数理をうみ出す活動や自分の生活を高める活動を通して自他のよさや可能性に気づき、うみ出した自分への自信をもつことができる子供 (人間性)

【算数科学習で大切に資質・能力の重点化・系統化】

学年		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年		
創造性	数と計算	数の見方	○ 数の大きさを相対的にとらえること 他の数の和や差でみること		他の数の積でみること	十や百を単位としてみること	概数を用いてみること		
			○ 数のきまりを拡張していくこと 1, 2 位数		4 位数	万の位	億, 兆の位	小数, 分数	
			○ 数を類別すること					奇数・偶数	倍数・約数
			○ 数を統一的にとらえること						
	数感覚	直覚的な数の把握	結果の大まかな見積もり	桁数の見積もり	目的に応じた概数による見積もり	整数, 分数 目的に応じた和や差の見積もり	分数 ←→ 分数 目的に応じた積や商の見積もり		
	量と測定	測定	単位のいくつ分で測定すること 量を数値化して表すこと 別の量に置き換える間接測定の考え 測定に必要な部分を取り出して測定すること					2 量に依存した内包量の一方を固定して比較・測定すること	
		量感覚	量を取り出すことができること -----> 基本単位の大きさを示したり, 量の見当づけができること ----> 対象に応じて適切な単位や計器の選択ができること ----->						
	図形	分析の観点	身の回りの形を取り出したり仲間分けしたりすること	形を構成・分解する。約束(定義)に基づいて考えること	点, 線, 面などの構成要素に着目して, 基本的な図形の性質を考えること		構成要素間の位置関係に着目して基本的な図形の性質を考えることができること		
		図形感覚	ものの形を認めたり特徴をとらえたりすることができること	図形を構成したり分解したりする見通しをもつことができること		図形を多様な観点からみることができること			
	主体性	数量関係	統計的思考		目的をもって資料を集め, 観点を決めて分類, 整理すること	目的に応じて数量の依存関係を考察すること	集団の特徴や傾向を知するために統計的な処理の考察をすること	2 量を変化と対応という関数の考えを用いて考察すること	
思考方法		具体物に置き換えて考えること -----> 絵図を用いて考えること -----> 式変形を用いて考えること ----->							
数理の追究		簡潔性, 明瞭性, 一般性, 効率性の視点から自分の活動をふり返り, 適切な方法を判断・選択すること 簡潔性 -----> 明瞭性 -----> 多様性 -----> 一般性 -----> 的確性 -----> 効率性 ----->							
			正しいかどうか確かめること	他にもないか考えること	決まりがないか考えること	関係がないか考えること	原理や法則に照らして考えること	統一した原理や法則から考えること	
人間性	数理活用	生活場面につくり出した数理が使われていることに気づき, 積極的に活用しようとする		数理を生活場面に積極的に活用することで, 生活をよりよくしようとする		数理の活用によって生活がよりよくなることを目指して自分のあり方を決定すること			
	価値感得	学習で学んだことが新しい学習に使えたことに気づくこと		既習の内容との違いや類似点に気づき, 既習の内容に帰着できることに価値を感じる		数理の抽象性が高まるにつれて一般化が広がることに感動を味わうこと			

自ら考えの一般化を図る算数科学習の展開

算数科部 加 藤 英 也

1 主題の意味

(1) 考えの一般化とは

子供たちが事象にかかわるなかで生みだした数学的な考えや思考方法を含む解決の仕方を他の事象にも活用することができるかどうかを判断・吟味し、汎用化することである。このことによって、その解決の仕方がその事象だけにあてはまる特殊なことなのか、一般的にいえることなのかを自己決定し、自分のものとして身につけ、ほかの学習に転移させようとする態度を培うことができると考える。

(2) 自ら考えの一般化を図るとは

問題解決に至った子供たちが、その解決だけで満足せず、さらにその解決に用いた考えの一般性を検証する（自己吟味）ために、当てはめる事象を自分で作り出したり選択したりして次々に設定し、それらの事象に試すことを繰り返す（自己追究）ことによって、活用した考えのよさを実感する（自己更新）ことである。

子供が自ら考えの一般化を図るようになるためには、子供が主体的に考えようとする必然性をもっていなければならない。考える必然性をもつには、①考えるに値する疑問や矛盾や願いをもつことと②それらを追究するための対象が必要である。そこで活用可能性を追究する活動を設定することによってこの2つの条件を満たすようにする。すなわち、自らつくりだした事象は、解決の必然性をもっているから、うまく解決できればそれは自信となり、さらに別の事象で適用できるかどうかを考えることへと連続する。そのことは1つの事象であてはまる考えを多数の事象に演繹的に活用することになるので一般性を増し、考えのよさを強く実感することにつながる。子供たちの考えは多様であるがゆえに活動と追究対象は多様化し、妥当性や一般性を求めるがゆえに友だちとの交流活動を自ら求めていく。その中でより洗練された考えは共有化され、学習の方向性を見定めるための学び方を形成していく。

(3) 自ら考えの一般化を図る算数科学習の展開とは

単元を通して、数学的考えの一般性を追究するために子供たちが見通しをもって主体的に学習を進めていくことができるように次の3つの活動を仕組むことである。①子供たちが事象にかかわりながら、そこで用いた考え方をとりだし、その考えが一般性をもっているのかを追究することを課題として取り出す活動（自己吟味）、②課題を追究するために、活用する事象を自分で作ったり、選択したりして、考えが活用できるかどうかを繰り返し追究する活動（自己追究）、③活用した考えのよさを味わい、学習した意義を価値づける活動（自己更新）

(4) 本研究で期待する子供の姿

自ら考えの一般化を図る子供の姿は次のようなものである。

- 事象にかかわることから自分なりの考えを生み出し、それがほかのことにもあてはまるかを調べたいという課題意識をもったり、活用した事象を振り返りそれで一般的にいえるかどうかを判断したりする子供（自己吟味）
- 課題を解決するのに適した事象や活動を選択・決定することができる子供（自己追究）
- 一つの事象で検証するだけでなく、繰り返しねばり強く追究し、考えが活用できる範囲を吟味したり、一般性を確かめたりする子供（自己追究）
- 身につけた考えのよさを自分の財産として価値づける子供（自己更新）

2 学習の具体的構想

何もないところから考えは生まれないし、考えを生み出すための事象をはじめから子供たちに取り出させるということは難しい。子供たちが新たな考えを生み出し、その活用を主体的に図ることができるようにするためには、①教師による最初の事象提示が子供たちにとって、未知の内容や考え方を含み、知的好奇心が生起するような教材の開発、②考えの一般化を指向するようにさせる支援、③考えを活用していくのにふさわしい単元構成や学習過程の工夫を行わなければならない。

(1) 考えを生み出すための教材化の視点

- 単元を通して身につけたり、活用したりする考え方が内包されていること（包括性）
- 子供の生活の中で無意識に活用していることや曖昧さを感じていること（生活性）
- 既知の内容だけでは解決できない適度な困難性を含むこと（抵抗性）
- 追究したいという意欲が高まったり、活用できた効力感を味わったりできるような新奇さを含むこと（新奇性）
- 子供たちが自分で追究する事象を多様に作れるようなこと（活動性）

(2) 考えの一般化を指向させる支援の工夫

- 単元でねらう考え方が先見えする事象提示

単元の導入時にその単元で最終的に何ができるようになればよいのかというねらいが子供たちにとらえられるような事象を提示し、活動と学習の方向性を指し示す支援を行う。そして、単元のおのこの時間には、その活動をふりかえり、目標像と照らし合いながら次に自分が何をすればよいかという見通しをもてるようにする。

- 特殊な事象の提示

子供たちが主体的に一般化を行うためには、はじめから一般的な事象を提示したり、複数の事象を提示したりするのは意味がない。意図的に特殊な事象を1つだけ提示することによって、子供たちが演繹的に、（あるいは帰納的に）推論を進めることができるようにする。

(3) 考えの一般化に向かう追究が生じる単元構成と学習過程の工夫

- 単元構成

段階	気づく（自己吟味）	追究する（自己追究）	味わう（自己更新）
ねらい	考えの取り出し	考えの一般化と発展	考えの統合と評価
活動	○ 1つの事象に解決するのに用いた考えを取り出して単元の課題を見通す。	○ 派生した考えを含め、発想が一般的に成り立つのかを自分で設定したいろいろな事象で追究する。	○ 考えのよさを味わい、自分を振り返る。

- 活動から始まる学習過程の工夫

考えが一般化するように追究するためには、1つの事例で解決した後で、次の事例を設定する行為を一連の活動として行う方が子供の意識のつながりから考えて自然である。そこで1単位時間の過程は、柔軟に取り扱い、以下のような学習過程を仕組む。

過程	【見通し・調べる】	【深める】	【味わい・つかむ】
活動	前時に作った事象をもとに考えを活用する活動	友だちの解決方法と比較し考えの交流を行う活動	活動を振り返り、新たな事象を生み出す活動
振り返り	活用した考えを記録する学習ノートの活用	解決の背景にある思考法やアイデアへの着目	次に解決すべきことを問う発問や事象の提示

このことによって、子供の問いに対する内容や方法、教具などの支援を円滑に行うことができる。

3 指導の実際と考察

(1) 単元名 第5学年 面積

(2) 本単元の考え方

本単元は、三角形や四角形などの平面図形の求積活動を通して、1つの図形を求積する際に生み出した考えを他の図形に用いて一般化しようとする態度を育成することをねらいとしている。具体的には、①求積の仕方が未知の図形を面積が既知の図形に変形することによって、求積が可能になる考え（帰着させる考え）に気づくこと（創造性）、②求積に必要な構成要素を取り出したり、図形を分解・合成したり、動的にとらえたりして図形感覚をさらにのばすこと（創造性）、③考えのよさを帰納的に実感するために、自分で事象を作って活用を図ろうとすること（主体性）、④自他の求積方法が全て求積公式に結びつくという共通性に感動を味わうこと（人間性）である。

子供たちは、生み出した数理や考えを自ら他の算数の事象に活用しようとすることは少ない。また、見方・考え方は身につけてきているが、結果や具体的なやり方だけを表現し、その過程で用いた考えを明らかにして表現することは少ない。そして、1つの特殊な事象で成り立つ性質を全ての事象にあてはまると判断したり、理解できたと早計に考えたりする姿（類推による転導）が見られる。そこで、考えを一般化させるために繰り返し自己追究活動を行うことで、思考自体を楽しんだり、自分が気づかなかった考えのよさに感動する体験を豊かにしたい。

本単元の指導にあたっては、追究の過程で用いた考え方を取り出し、そのよさを子供たちが主体的に他の事象に活用しながら（自己吟味・自己追究）感動として味わうことができる（自己更新）ようにしたい。そのためにまず、気づく段階でタングラムを用いて、いろいろな三角形や四角形を取り出す。そして、それぞれの面積に着目させ、面積が既習のものと未習のものに分類し、単元全体の学習の方向性をもたせる。次に、追究する段階では、求積する事象を自分で作り、順次既習の図形に帰着できるような変形の仕方を考えながら求積に用いた考え方をとりだし、帰納的に公式化へ導いていく。最後に、味わう段階では、ひし形や台形、一般四角形にこれまで用いてきた考え方が活用できるかどうかを自分で作った事象で試す活動を設定する。そのなかで、特に一般四角形は頂点を移動させる考えが測定箇所が少なくてできることのよさを感じ取らせたい。

(3) 目 標

- ① 三角形や四角形を既習の図形に変形する方法を生み出し、自ら他の図形に試すことで、面積を求めるために必要な部分の長さを取り出すことができる。（主体性・創造性）
- ② 求積する際に用いた考えのよさを味わうとともに、自分の気づかなかった考えや求積公式に共通の法則に感動し、それを自分のものとして活用しようすることができる。（人間性）

(4) 計 画（9時間）

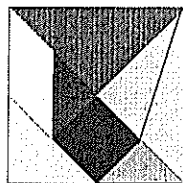
階	気づく（2時間）	追究する（5時間）	味わう（2時間）
活動と内容	1. タングラム遊びをしながら、それぞれのピースの面積を求め、学習課題をつくる。 ○ いろいろな図形の取り出しと分類	2. 追究する事象を自分で作図しながら、三角形、平行四辺形の面積を求め方を調べる。 (1) 三角形の求積の仕方を調べ、公式を作る。③ ○ 等積変形、倍積変形、増積変形、平行移動変形 (2) 平行四辺形の求積の仕方を調べる。②	3. その他の四角形の求積の仕方を調べる。 ○ 台形、菱形、一般四角形をいろいろな変形を用いて求積すること ○ 求積公式の共通点を取りだし、統一性の美しさに感動を味わうこと
手だて	※ タングラムの提示 ※ 面積を求めることへの方向付け	※ 既習の図形に帰着させることの意識化 ※ タングラムで構成した図形を導入素材として提示し一般化への意識をつなげること	※ 測定箇所の数を比較することによって平行移動変形の簡潔性を味わわせること ※ 測定箇所の共通性の取り出し

(5) 指導の実際

① タングラムのピースの求積方法に気づき、単元の課題をつかむ段階（1，2／9時間）

この段階のねらいは、タングラムのピースを組み合わせて、いろいろな三角形や四角形を構成しながら既習の図形に変形する方法に気づくとともに、各々のピースの面積を求める活動を通して、ピース以外の一般的な図形でも使える求積の方法を明らかにしたいという目的意識をもつことである。

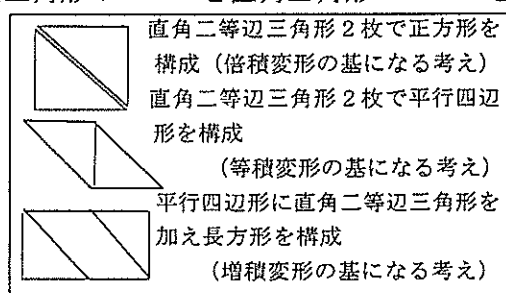
そのために、資料①のタングラムを提示して、それらのピースを組み合わせていろいろな三角形や四角形が構成できるようにし、求積を行う際に必要な変形操作（例えば、



直角二等辺三角形2枚を組み合わせて正方形を構成する）が生み出せるようにした。

子供たちは、タングラムのピースを組み合わせ様々な三角形や四角形を構成して、既習の図形の仲間には分類した。そのなかで、資料②のように次時以降で用いる求積【資料① タングラム】

の仕方の基になる構成をした。ピースの求積にあたって子供たちは、等積変形や倍積変形を生み出して既習の図形に変形した。A児は、既に求積した直角二等辺三角形のピースと直角三角形のピースを利用して、底辺の外側に高さがある三角形のピースを求積した。（写真①）B児は、底辺外に高さがある三角形のピースを2枚組み合わせて平行四辺形をつくり、それと合同な平行四辺形を既に求めた直角三角形を2枚組み合わせてつくり、直角三角形と底辺外に高さがある三角形が等しい面積であることを導き出した。（写真②）



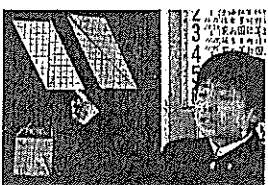
【資料② 求積方法の基になる構成】

考察①

タングラムを教材化し、そのピースの求積を行うという、単元でねらう考え方が先見えする事象提示を行ったことが、面積が既習の図形に変形すれば、求積できるという帰着させる考えを自ら生み出すこと（自己追究）につながった。しかも、等積変形や倍積変形という変形の仕方だけでなく、A児が行った余分な面積を加えて既習の図形に帰着させる方法（増積変形）やB児の合同な図形の等積性を利用した方法を生み出すことができたことはタングラムのピースを組み合わせて形作りを行った活動の有効性を物語っている。

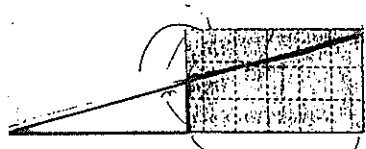


【写真① A児の増積変形】

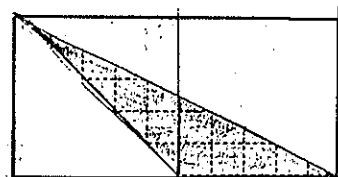


② 三角形や平行四辺形の求積方法を追究する段階（3～7／9時間）

この段階のねらいは、タングラムピースの求積でつくった考えを他の三角形や四角形に試しながら、自ら求積方法を一般化できるようにするとともに【写真② B児の等積性の説明】に頂点を底辺に平行移動させても面積が不変であることを利用した変形の仕方（平行移動変形）に感動することである。そのために、方眼紙を与え、自分が求積しようとする図形を自由に作れるように教材を工夫し、平行移動変形が活用しやすいように、直角三角形→三角形→平行四辺形という追究順序を設定した。B児は、写真③のような直角三角形を作図し、タングラムのピースと同様に等積変形を行い、既習の長方形に変形して求積を行った。続いて写真④のような底辺から高さがはみ出した三角形を作図し、等積変形をしようとしたが、うまくいかなかったので、増積変形を用いて長方形に帰着させ、余分な直角三角形の面積をのぞいて求積することができた。こうして、どんな三角形でも底辺と高さがわかれば面積が求まることをとらえた。

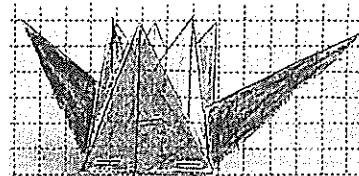


【写真③ 直角三角形の等積変形】

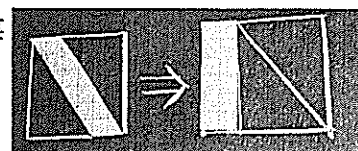


【写真④ 三角形の増積変形】

求めにくいという意見が出たため、B児が等積性を説明した底辺と高さが等しいタングラムの2つのピース（直角三角形と底辺外に高さがある三角形）のように、同じ底辺と高さをもつ三角形をたくさん作図し、底辺を重ねて頂点の位置についてのきまりを見つけさせることで平行移動変形に気づいた。（写真⑤）この変形の仕方についてC児は資料③の感想を述べた。そして平行四辺形を求積するなかでC児は、平行四辺形を増積変形して長方形に【写真⑤ 平行移動変形の考え】



したものを写真⑥のように移動させた。そして自分が行ったことが実は平行移動変形になっていることに気づき、資料④の感想を述べた。



考察②

B児の活動から、気づく段階で生み出した等積変形の考え

【写真⑥ 平行四辺形の平行移動変形】

を自ら作った事象にあてはめ、他の三角形へ一般化し

底辺と高さを変えなければどんな三角形でも面積が

ている自己追究の姿とうまくいかないときに増積変形

同じになるという平行移動変形のやり方に驚きました。

をあてはめてみようとする自己吟味・自己更新の姿が

これは四角形に使えるのではないかなと思いました。

うかがえる。さらに資料③④のC児の感想から平行移

【資料③ C児の平行移動変形に対する感想】

動変形という新しい求積方法に感動し、考えを

前の時間にやった平行移動変形がこの平行四辺形に使えたの

一般化させようとする意欲と一般化ができた充

がすごと思いました。他の四角形でもためしてみたいです。

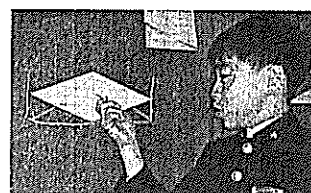
実感が読みとれる。これは、新しいものを取り入

【資料④ C児の平行四辺形の平行移動変形に対する感想】

れようとしている自己更新の姿であるといえる。これらのことから、追究事象を自分で作らせ、新たな平行移動変形という考えが生み出されるように、先に三角形を追究した単元構成が有効であった。

③ その他の四角形に求積方法を一般化させ、そのよさを味わう段階（8, 9 / 9時間）

この段階のねらいは、これまでに生み出したいろいろな求積の仕方を使って、どんな四角形でも面積が求められることをとらえることである。そこで、一般的な台形、ひし形、四角形、凹四角形のなかから、自分で選択して追究する活動を仕組んだ。D児は、平行移動変形を一般化しようとしてひし形の2つの頂点を写真⑦のように平行移動させて三角形に帰着させ、友達から喝采を浴びた。そして、一般四角形の求積において、平行移動変形を使うと一般四角形も三角形に変形できて、求積するのに必要な部分が2カ所ですむという効率的な求積方法であるという考えに高めていった。



考察③

【写真⑦ ひし形の平行移動変形】

平行四辺形以外の四角形について、自由に選択させ、自分の考えが使えるかどうかを追究する活動を仕組んだことは、D児のように1つの変形にこだわりながら追究し、考えを一般化させ（自己追究）、その考えのよさを味わっている（自己更新）姿を生み出すことにつながった。資料⑤の感想からも、自己追究を経た結果としてそれぞれの考え

- どんな形でもいろいろな考え方ができ、公式を知らなくてもいろいろな形の面積がすぐに求められるのですごいなと感じました。（E児）
- ぼくは平行四辺形が平行移動で三角形になることにすばらしいと思いました。（F児）

【資料⑤ 学習後の感想】

のよさやF児のように予想もしなかったことがわかったことに感動している姿が受け取られる。

4 全体考察

本単元の学習を通して、自分の考えをつくり、それを一般化させるために特殊な図形で構成されたタングラムという教材化が有効であった。（考察①）そして、追究する対象を子供自身につくらせたり、選択させたりする活動を設定した単元構成を工夫したことが、子供たちを主体的に活動させ、新しいものを創造しようという意欲を生み出すことにつながったと考える。（考察②、③）

直観を働かせる学習の展開

算数科部 野田 真 功

1 主題の意味

(1) 直観を働かせるとは

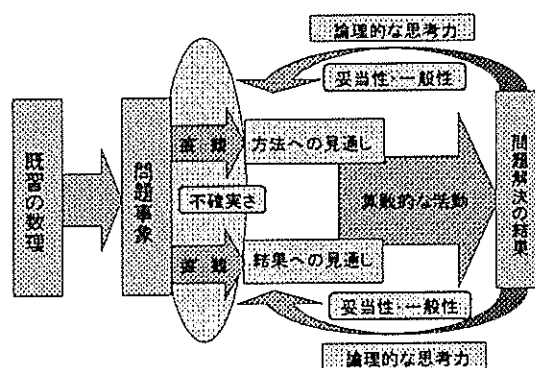
直観とは、考察の対象を柔軟にとらえたり問題の構造や規則性などを見抜く力である。論理的な思考力が一つ一つの考えを確実に繋げていく過程で働く力であるのに対し、直観は、既知の知識、体験を根拠にしながら十分な検討を経ることなく概括的に推論を働かせる力である。直観を働かせるとは、出合った事象と類似した既知の知識、体験、学習などを想起し問題解決の見通しをもったり、事象の事象との関係を把握しそのなかにある法則や原理を見抜いて統合したりしていくことである。算数科の学習においては、次のような姿として見ることができる。

考察の対象を柔軟にとらえる際に働く直観…出合った対象を解決可能なものとなるように別のものに見立て直していく際に働く。

問題の構造や規則性などを見抜く際に働く直観…追究した結果を振り返り、類似した概念や法則と関係づける際に働く。

(2) 直観を働かせる学習の展開とは

直観を働かせる学習の展開とは、子供たちがもっているが活用しきれしていない数学的な見方・考え方を、算数的な活動を旺盛に行うことによって論理的に考えていくことと連動して働くような学習を行っていくことである。直観を働かせることと論理的な思考力とは相補的な関係にあり、数学的に思考する場合には、欠かせないものである。算数科の学習では、問題解決の過程で直観を働かせることによって見通しが生まれ、論理的な思考力を働かせることによって一つ一つの考えを整理し繋げていく。それがさらに新たな直観をうみだすことになる。また直観は論理的な思考力を働かせることを繰り返すことで瞬時的、概括的に働くようになった思考力であるので、直観を働かせる場と論理的な思考力を働かせる場を繰り返すことによってそれぞれが交互に機能し合い、高め合っていくことができると考える。そこで直観を働かせる学習においては、活動のなかで生まれ、働かせていった見通しを自ら振り返り（自己吟味）、検討を重ね（自己追究）、根拠を明確にしていく（自己更新）活動が繰り返されるのである。この直観を働かせる学習は、問題解決への強い求め（知的的好奇心）に支えられて子供の自身の手で展開されていく。この過程で、自己の問題解決についての明確な根拠をもち、うまくいかなかった場合でもその原因を探りながら、様々な事象を関係づけながら考え、友達の考えと比較・検討しながら目的に照らし合わせてより簡潔で、的確な方法へと高め、数理をつくることのできた自分自身の価値を実感していくのである。



(3) 本研究で期待する子供の姿

- 自分が出合った問題に対する内容や方法についての見通しをもち、納得いくまで問題に働きかける子供 (自己追究)
- 自分がもった見通しについての妥当性や一般性について検討していく子供 (自己吟味)
- 自分が生みだした数理に対するよさと、数理を生みだした自分自身に対するよさについて意味づけを行い、自分の高まりを実感していく子供 (自己更新)

2 学習の具体的構想

(1) 既習の学習内容や方法と比較する場の設定

これまでの学習活動の過程やそのなかでつくりあげてきた結果と、これから解決していこうとしている事象とを共通性・差異性の観点から比較する場の設定を行い、解決の方向性を焦点化する。

(2) 視覚化された問題事象に出合わせる

文字や数字、記号のみによって表された問題事象は、子供たちにとって具体的に数理の構造や関係が捉えることが容易ではない場合がある。しかし、視覚化された状態で子供が問題事象に出合うことができるようにすることで思考が焦点化され、方向性が定められ、比較的短時間の間に問題の構造や関係を概括的に把握していく。具体的な事象に置き換えることで大きさをともなった量としてとらえる直観が触発され、発動していく。

- ・式（記号や数値によって表されたもの）→（視覚化）→（図、具体物での表現）
→数の概括的把握
- ・見ることのできない量（重さ）→（視覚化）→（単位とするものの数量で表す）
→量の概括的把握

(3) 直観を働かせる場と論理的思考力を働かせる場を繰り返す活動構成

直観を働かせることによって立てた見通しをもとに一つ一つの考えを整理し繋げていくことで数理をつくりだしていくことができる。それをもとにさらに新たな直観を働かせる場がうまれていく。このように直観を働かせる場と論理的な思考力を働かせる場を連続・発展的に繰り返すことで直観の働きがより高まることにつながる。

① 直観を働かせて問題解決への見通しをもつ場

問題解決をする際の方法への見通しと結果への見通しをもつことができるように、出合った対象を既知の知識や体験と類似したものとして見立て直していけるようにする。

② 論理的な思考力を働かせて妥当性や一般性の検討をおこなっていく場

追究対象や追究方法に多様性、発展性をもたせ、直観を働かせてもった見通しを生かしながら追究活動を繰り返していくことができるようにする。その過程で論理的な思考力を働かせ、妥当性や一般性について検討していけるようにする。

③ 直観を働かせて問題の構造や規則性を見抜く場

追究した結果を総合的に振り返り、類似した概念や法則と共通性の観点から関係づけを行うことで一般化を図っていく。

(4) 直観を働かせる学習過程と支援

階層	つかむ	調べる	まとめる
活動と内容	1. 算数の内容を豊かに含んだ学習場面に出合い、追究課題をつかむ。 ○ 学習場面の中から算数的な課題を見いだすこと ○ 自分の追究していく課題つかむこと	2. 追究活動を繰り返し行い、数理をつくりだす。 ○ 既習の内容を活用しながら数理をつくりだすこと ○ 他者の意見との比較・検討による方法や考え方の深化 ○ 課題追究の実感	3. つくりだした数理を活用し、課題をまとめる。 ○ あらたな数理への更新と一般化 ○ つくり出した数理を活用することによる充実感 ○ 課題達成の実感
手だて	※ 知的な好奇心を喚起する場面や題材の提示 ※ 直観の働きを触発するような視覚的な事象の提示	※ 一人一人の活動を支える具体的なものや体験的な活動の提示 ※ 多様性、発展性のある活動	※ 活用の場の設定 ※ 学習をふり返り、達成の実感を味わうことのできる交流の場の設定

3 指導の実際と考察

(1) 単元名 第3学年 重さ調べ(重さ)

(2) 本単元の考え方

本単元は、①重さは、もとなる単位を決めてそのいくつ分で表すと、分かりやすく表せることに気づくことができるようにすること(創造性)②身の回りのいろいろなものの重さを工夫して調べようとし、重さを任意単位や普遍単位を使って分かりやすく表せるようにすること(主体性・人間性)をねらいとしている。本単元の指導にあたっては、重さを単位となるもの幾つ分かで見ていくことを単元の中核となる考え方とし、子供たちが課題を発見し直観を働かせながら重さの測定についての考え方を深めていくことができるようにする。まず、つかむ・見通す段階では、重さについて調べていく追究課題をつかみ、単元全体の活動の見通しをもてるようにする。そのために、「同じおもさになっているのはどれだ」大会を行い、ブロックの幾つ分で重さを置き換えればよいことに気づかせる。調べる段階では、測定単位や測定器具を選択していくことができるようにする。そのために、前回より重くなったものを測定していく場を設定し、測定器具や単位を更新していく必要が生じるようにする。まとめる段階では、重さの単位であるkgやgを使って重さを表すことができるようにする。そのために、様々な測定対象を多様な測定器具で量る場を設定する。

(3) 目 標

- ① 重さは、もとなる単位を決めてそのいくつ分で表すと、分かりやすく表すことができることに気づくことができる。(創造性)
- ② 身の回りのいろいろなものの重さを工夫して調べようとし、重さを任意単位や普遍単位を使って分かりやすく表そうとすることができる。(主体性・人間性)

(4) 計 画 (5時間)

段階	つかむ・見通す	調べる	まとめる
活動と内容	1 同じ重さのものを 見つけ出す「同じ重 さになっているのは どれだ」大会をする。 (自己吟味・自己追 究・自己更新) ① ○ 物の重さは単位と するものを決めて、 その幾つ分で考えて いくと分かりやすい こと	2 測定対象や測定に用いる器具や任意単位を 変えながら身の回りの重さを量る。 (1) 「同じ重さになっているのはどれだ part II」 を行う(自己追究・自己吟味・自己更新) ① ○ 複数単位を用いて重さを量るとより少ない 数値で表すことができるようになること ○ 測定する対象によって適切な測定単位や測 定器具を選択すること (2) 「ぴったり同じ重さをつくれるのはだれ だ！」大会を行う。(自己追究) ① ○ 1kgの重さをつくりだすこと	3 「いろいろなものをgや kgをつかって表そう」大会 を行う。(自己追究・自己 吟味・自己更新) ② ○ 自動上皿秤の目盛りのよ み方 ○ 測定したい対象と測定器 具の感量・秤量によって適 切な測定器具を選択するこ と ○ 長さ・かさとの関連づけ
手だて	※ 外観だけでは重さ の判別が困難かつ軽 量なものの提示 ※ 測定対象を両手に 同時に持てない条件 の設定	※ 重量のかさむものの測定を繰り返す活動の 設定 ※ 重さを測定する任意単位としての1立方cm のブロックと乾電池の準備 ※ 重量物でも測定可能となるような大型天秤 の準備	※ 1リットルの水、1円玉 1000個などの提示 ※ 様々な感量、秤量をもつ た測定器具である自動上皿 秤、ばね秤、体重計の準備

(5) 指導の実際

① 重さ調べについての課題と見通しをもつ段階（1／5時間）

ここでのねらいは、ものの重さに対する関心を高め、重さを早く正確に量るためにはどうすればいいのかという追究課題をつかみ、重さを量っていくときの見通しをもつことができるようにすることである。そのためにまず、大きさと密度の異なる大小2種類のブロックを提示した（写真①）。子供たちは重さを手で比較するなかで見た目の判断と実際に手にした感覚の違いに驚き、重さの不思議さを実感した。そこで、2つの離れた場所においてあるものの中から同じ重さのものをできるだけたくさん見つけていくという「同じ重さになっているのはどれだ」大会の提案を行った。子供たちは、まず一方のコーナーで物を手に取って重さの感覚を覚え、もう片方のコーナーで同じような重さのものを探し、それらの重さが等しいか天秤で確かめるという活動を繰り返していった。しかし、等しい重さのものをを見つけることが簡単にはいかないことから、「もっと早く正確に見つけられる方法はないのかな。」という意識をもちはじめた。するとそれまで使用していなかったブロックに目を向け、「これを使えばいいんじゃないかな。」という直観を働かせながらブロックを手にとり始めた。そして、量りたいものと同じような重さになるまでブロックを手に取り、次にそのブロックの重さにあうようなものを反対側のコーナーから選んでいくようになっていった。こうして子供たちは、より早く正確に同じ重さのものをみつけるためには、重さをブロックの何個分かで量っていけばいいのではという見通しがもつことができた。

考察①

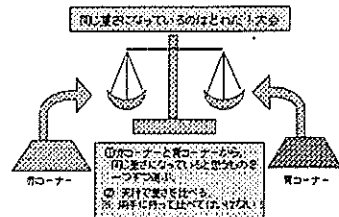
ここでは、資料②のように自分の測定の方法を振り返り、より効率的な測定の方法について考え、ブロックの何個分で重さを置き換えていけばよいというこの単元を貫く重さに対する見通しをもつことができた。このような子供の姿がでてきたわけは、「同じ重さになっているのはどれだ」大会（資料①）を行い、重さを直接比較することのできない条件のなかで重さの等しいものになるべく多く見つけるという場の設定をしたこと、そこで目に見えない重さをブロックの数量で置き換えることができるのではないかと直観が働くように（写真②）視覚化された問題事象と出会わせ、子供が活動を繰り返し行うことができるようにしたことが有効であったからだと考える。

② 測定対象や測定器具を変えながら重さについて調べていく段階（2～3／5時間）

ここでのねらいは、身の回りにある比較的軽量なものを単位とするものの幾つ分で重さをとらえていくことができるようになった子供たちがより測定の範囲を広げながら測定器具や単位とするものの重さを測定対象によって変えていく必要があること、複数単位を用いることで重さをより分かりやすく表せることをとらえられるようにすることである。そこでまず、身の回りから重さが100gを越えるようなものを提示し、「同じ重さになっているどれだパート2」を設定した。測定対象の重さが重くなったことでブロックの数が増えて天秤からこぼれ落ちそうになったり（写真③）、重い測定物で壊れそうになる天秤を使いな



【写真① 重さを比べる子供】



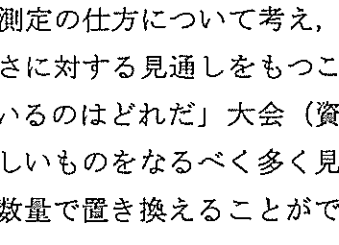
【資料① 大会のルール】



【写真② ブロックで量る子供】

さいしよは、かたほうのものを手でもってだいたいの重さおぼえた後、もう一つのものをもってえらんでいました。でもずっとしていると、ブロックの数で考えるというしかたに変わりました。いちいちもっていきのはいへんだし、ブロックを使うと早くつりあわせることができるので、ブロックをつかうのはいいと思いました。

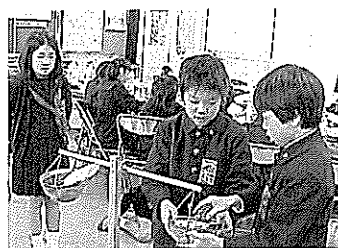
【資料② 測定方法を更新した子供】



【写真③ 不十分さの実感】

がら子供たちは「重いものでも量れるような、もっと丈夫な天秤があったらいいのに。」「もっと一つ一つが重いブロックがあったらいいのに。」

という願いをもった。そこで大型の天秤と乾電池を提示すると、子供たちはブロックより重い乾電池で測定対象の重さを置き換えると少ない数量で測定可能になるのではないかという直観を働かせ、頑丈な天秤を使ってこれまででは測定できないような重さのものまで測定を繰り返してい



【写真④ 大型天秤を使う子供】
った。そしてさらに、更に乾電池とブロックを併用することで乾電池だけでは表すことのできない細かな重さまで表せるようになることのよさを実感していった。

考察②

ここでは資料④のように測定対象にあわせて適切に測定単位や測定器具を選択し、複数単位によって表現し、重さを単位とするもので置き換えていくことに対する見方を一層高めていくことができた。それは、より重いものをより早く正確に測定する場の設定を行い、より重いもので置き換えればいいのではないか、より重いものまで測定できる器具を使えばいいのではないかという直観が働くよう測定対象、器具、単位とするものを準備したことが有効であったからであると考え。

今日は、ブロックをつかったけれど重いものを使うときは何10こもとらないといけなくてたいへんでした。でも、電池を使っただけで1～2こぐらいでいいやつりあったのでよかったです。電池は重くててんびんがこわれてしまうから、次に使ったのは大きくなってんびんです。重いものでもはかれてんびりでした。

【資料③ 電池、天秤のよさ】

③ 普遍単位を使って重さを表し、学習をまとめる段階（4～5／5時間）

ここでのねらいは、測定対象にあわせて適切に測定単位や測定器具を選択できるようになった子供たちが、普遍単位を活用しながら測定したい対象と測定器具の感量・秤量によって適切な測定器具選択できるようにすることである。まず子供たちは自分が重さを量ってみたい様々な重さをもつ対象を収集してきた。そしてそれらの重さを測定するものとして準備された上皿自動量り、バネ量り、体重計を使いながら重さを測定していった。その活動のなかで秤量や感量に気をつけながら測定していく必要性があることに気づいていった。



【写真⑤ 測定対象、器具を選択しながら測定する子供】

今日ははかりのえらび方が分かりました。まずたしかめることは、何gまではかれるか、何gからはかれるかです。軽いものをはかるときでも、何gからはかれるか見ておけば、せいかくにはかれていいと思います。kgとgの2つのたんいを使ってはかるのもいいとおもいます。それは、電池だけではつりあわない場合、ブロックを入れたように、もとにするものを2つ使うことができると思うからです。

【資料④ 測定の考えを高めた子供】

考察③

資料④に見られるように、測定対象によって測定器具や測定単位を使い分けていくことを、これまでの重さの学習と繋げながら捉えていくことができた。これは、これまでよりさらに広い重さの範囲をもつものを測定する場の設定を行い、様々な秤量、感量をもつ測定器具と測定対象を準備し、見通しを確かめる場を繰り返したことが有効であったからであると考え。

4 全体考察

本単元の学習を通して子供たちは見通しをもったり既習の数理と結びつけたりしながら数理を再構成していくことができた。これは視覚化された問題事象に出合わせ、直観を働かせる場と論理的思考力を働かせる場を連続的に繰り返す活動構成が有効であったからであると考え。今後の課題は、他領域において直観を働かせる学習展開のあり方について究明していくことである。

音楽とのかかわりを豊かにする音楽科学習

音楽科部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う音楽科学習の役割・立場

青少年の犯罪の多発に見られるように、子供の心の荒廃が大きな社会問題として顕在化し、豊かな心、柔らかな感性を育むことが大きな教育課題の一つとなっている。子供と音楽とのかかわりを見ると、多様化・情報化された音楽的環境のなかにある子供たちであるが、ともすればその嗜好に偏りが見られ、音楽の美しさに感動したり、自分から進んで音楽活動に取り組み、そのよさを味わおうとしたりすることは十分とは言い難い。本来音楽は、感動をもたらしたり言葉では表せない深い感情を表したりして、豊かな心を育み、人格の形成上、非常に重要な働きをもつものである。したがって、これからの音楽科の学習指導においては、美的情操を養うのに必要な音楽に対する感性の育成を重視することが大切になってくる。音楽に対する感性とは、音楽の美的質（理性だけではとらえられない音楽固有の意味・価値）に気付く感覚的な能力である。音楽に対する感性を育てるためには、情意面と能力面を同時に育てていくことが必要である。即ち、自分にとって価値あるものとして音楽をとらえるための、音楽を愛好する心情と音楽活動の基礎的な能力を身に付けながら、音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養うことを目指していくことが音楽科の役割であると考える。

○ 音楽とのかかわりを豊かにする音楽科学習とは

音楽とのかかわりを豊かにするとは、音楽や音楽活動についての見解を深めたり広げたりして、様々な音楽や音楽活動に価値を見出し、生活を明るくしていく次のような資質・能力をもつことである。

- ① 様々な音楽の楽しさや美しさ・音楽活動のよさを感じ取る音楽に対する感性
- ② よりよい音楽・音楽活動をつくりだす意欲と音楽的構想力に支えられた音楽活動の基礎的な能力
- ③ 自分にとって価値あるものとして音楽をとらえることによって育まれる音楽を愛好する心情

まず、様々な音楽の特徴をとらえたり、よさに気づいたりする感性(①)が重要である。それは、表現や鑑賞の活動を進める意欲と、よりよい音楽表現をつくりだす音楽活動の基礎的な能力(②)の育ちによって深まっていく。その両者の育ちによって、音楽を愛好する心情(③)が育っていくのである。この①③は、音楽を自分の生活や成長にとって価値あるものとしてとらえるために必要な人間性であり、②の創造性・主体性ととともに育成されていく。音楽とのかかわりを豊かにする音楽科学習とは、人間性を中核に創造性・主体性を育て、子供自身が自分にとっての音楽の価値を見出していく学習である。そのためには、子供の音楽への思いや願いを大切にしたい鑑賞と表現の一体的な指導が必要となる。歌唱・器楽表現においては、音楽表現の方途とそこから伝わる表情の関係を実感しながらとらえていく活動を展開していく。つくって表現する活動では、子供が自分の思いを音・音楽に託して表現していく方法を選択・決定し、音楽を創りだしていくよさを味わっていく活動を展開していく。

○ 音楽とのかかわりを豊かにする子供とは

- 様々なジャンルの音楽や様々な音楽活動の楽しさや美しさを感じ取るとともに、それらをよりよく表現・鑑賞する方法を考え、音楽活動を進めることができる子供 (創造性)
- 様々な音楽に関心をもち、音楽活動への意欲を高めながら、生き生きと表現したり鑑賞したりすることができる子供 (主体性)
- 自分にとっての音楽の価値を見出す感性をもち、よりよい音楽や新たな音楽を求め、音楽経験を生かして自分の生活をより潤いのある明るいものにしようとする子供 (人間性)

【音楽科において大切に資質・能力の重点化・系統化】

		低 学 年	中 学 年	高 学 年
主 体 性	創造性	○ 歌詞の表す情景や拍の流れやフレーズを直観的にとらえて、表現の仕方を考えることができる。	○ 歌詞の内容にふさわしい表現の仕方を見出したり、強弱や速度を変化させたりして、よりよい表現を考えることができる。	○ 歌詞の内容や楽曲の構成を生かす表現や、音の重なりを生かした表現をある程度の見通しをもって考えることができる。
	音楽活動の基礎的能力	○ 自分の思いをもって楽しく表現の工夫を行うことができる。 ○ リズム、旋律と速さ、楽器の音色に気を付けて聴くことができる。	○ 自分から表現を工夫する活動に取り組み、発声や奏法、強弱や速度の変化などに留意して表現を工夫することができる。 ○ 曲想の変化や旋律の美しさ、楽器の音色や人の声の特徴に気を付けて聴くことができる。	○ 今までの音楽経験で得られた力を発揮し、自分らしい工夫をしながら音楽をつくりあげることができる。 ○ 曲想の味わいや楽曲の構成などのかかわりに気を付けて聴くことができる。
	音楽への関心・意欲	○ 音楽に対する興味・関心をもち、楽しく音楽活動を進めていくことができる。	○ 進んで音楽活動に取り組み、活動への意欲を高めていくことができる。	○ 音楽を心の中に創造しながら音楽活動に取り組み、活動への意欲を高めていくことができる。
	音楽に対する感性	○ 楽曲の気分や、リズムを中心とした音楽を特徴付けている要素を感じ取り、音楽的に反応することができる。 ・拍の流れ、フレーズ ○ 音楽の楽しさを感じ取ることができる。	○ 曲想や、旋律を中心とした音楽を特徴付けている要素を感じ取り、音楽的に反応することができる。 ・拍の流れ、フレーズ ・強弱、速度 ○ 音楽の楽しさ・美しさを感じ取ることができる。	○ 曲想の味わいや、音の重なりを中心とした音楽を特徴付けている要素を感じ取り、音楽的に反応することができる。 ・拍の流れ、フレーズ ・強弱、速度 ・音の重なりや和声の響き ○ 音楽の美しさを深く感じ取ることができる。
	音楽の鑑賞態度・習慣	○ 表現や鑑賞をしていく心地よさを感じ取り、音楽活動を楽しもうとする。	○ 表現や鑑賞をしていく心地よさを感じ取り、音楽活動をより深く楽しもうとする。	○ 様々な音楽的要素の織りなしが醸し出す美しさを味わい、創造的な音楽活動を求めようとする。
	音楽への態度・習慣	○ 「音楽は楽しい。」という気持ちで、愛唱歌を増やして歌うなど、 音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする。	○ よりよい音楽を求めて、機会をとらえて音楽活動を行おうとするなど、	○ 自分の興味・関心に基づいて、音楽へのかかわりを深めていこうとするなど、

自分の楽しみ方をつくりだす音楽活動の展開

音楽科部 豊村雅義

1 主題の意味

(1) 自分の楽しみ方をつくりだすとは

音楽の楽しみ方とは、音楽のよさ（楽しさや美しさ）をとらえていく方法である。音楽の楽しさや美しさは、それを感受する子供の内面に存在している。自分の楽しみ方をつくりだすとは、音楽と出合った時の感受をもとに、自分の音楽的実態に応じて、調べたり考えたりしながら表現や鑑賞を意欲的に行い、感受を深める活動を進めることである。そこでは、子供が音楽と出合ったときに働かせた感性を引き出し、伸ばしていく活動を行い、音楽のよさを表現・鑑賞する方法を経験化していくことが大切である。そのためには、子供が目的意識と見通しをもって表現・鑑賞の活動を連続的に進めていくことと、自分の活動の在り方を振り返って価値付けていくことが必要であるとする。

(2) 自分の楽しみ方をつくりだす音楽活動の展開とは

自分の楽しみ方をつくりだす音楽活動とは、調べたり考えたりする思考的な活動を含めた、子供の課題解決的な表現・鑑賞の活動である。この活動は、①子供が自分と音楽とのかかわりを見つめ（自己吟味）課題を設定する活動、②課題解決に向けて音楽のよさを感受したことをもとに追究する活動（自己追究）や、自己の活動の進め方を振り返る活動（自己吟味）③自分にとっての価値を見出していく（自己更新）活動、で構成される。これらの活動は、発達段階に応じた、子供が感じ取る音楽の楽しさの内容によって、感覚的な楽しみ方から論理性を加味した楽しみ方まで、下表のように類型化され、目的や課題と見通しをもって連続的に展開する。またこの一連の活動には、音楽そのもののよさを楽しむこと（下表○）に迫るだけでなく、音楽を楽しむ活動ができているか、活動の進め方を吟味し付加・修正していくこと（下表●）も含まれている。このことは、自分にとっての音楽の価値を見出し、音楽とのかかわりを豊かにする上で意義深い。

目的や課題 楽しみ方 の内容	探る楽しさ	求める楽しさ	ひたる楽しさ
	楽曲の構成やその背景などを探り、知的理解をもとに表現を工夫したり聴き味わったりする。 《論理性の加味》←-----→《感覚的》	よりよい表現、より美しい表現を求めて、音楽的要素に働きかけ工夫する。	楽曲のもつ特徴的な音楽的要素にひたる心地よさを感じる。
音楽的要素への着目（自己吟味・自己追究）	○ 自分の音楽経験をもとに音楽的要素にかかわる課題を見出す。 ● 自分の音楽経験を生かした音楽活動の進め方を考える。	○ 自分が表したい表現についての思いや見通しをもつ。 ● 自分の音楽経験をもとに音楽活動の進め方を考える。	○ 楽曲の特徴的な音楽的要素を感じ取る。 ● 自分の音楽経験・生活経験をもとに活動のめあてや進め方を考える。
各要素への働きかけ（自己追究・自己吟味）	○ 自分の課題に基づいて調べたり考えたりする。 ○ 調べたことをもとに表現・鑑賞を進める。 ● 活動をうまく進める方法を考えたり新しい方法を考えたりする。	○ 音楽的要素を変えて、伝わる表情の違いを感じ取る。 ○ お互いに聴き合い、よりよい表現を考える。 ● 活動をうまく進める方法を考えたり新しい方法を考えたりする。	○ 身体表現など音楽的要素に反応する楽しさを味わう。 ○ 音楽的要素によりよく反応する方法を考える。 ● めあてにそった活動になっているか考える。
各要素の働きの把握（自己更新）	○ 楽曲の背景と表情を結びつけていくよさを振り返る。 ● 自他の活動を価値付ける。	○ 音楽的要素によって表情が変化することを振り返る。 ● 自分の活動を価値付ける。	○ 音楽的要素に反応する楽しさを振り返る。 ● 活動のよさを振り返る。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 感受したことや経験をもとに音楽のよさを追究する活動の見通しをもつ子供 （自己追究）
- 音楽的要素に着目して自分らしい表現・鑑賞の活動を意欲的に深める子供 （自己追究）
- 自分の活動の進め方や追究内容について振り返り、よりよい活動を見出す子供 （自己吟味）
- 音楽のよさ（楽しさ・美しさ）を見出し、自他の音楽活動を価値付ける子供 （自己更新）

2 学習の具体的な構想

(1) 教材化の工夫

子供の感性を中心とした音楽的実態（嗜好／感受／技能など）の違いに応じた活動ができるように複数の楽曲を教材化する。その条件を発達段階に即して以下のように考える。

○ 一人一人の感性が活かされた音楽活動の基礎的な能力の伸長につながるようにする。

	子供が把握できる構造をもつこと（構造的性）	自分の表現を振り返り価値付けられること（評価性）	音楽的要素による表情を感じ取れること（内面性）
低	拍の流れや拍子などの変化が少なく単純なもの	身体表現などの直接的な活動を通して	拍やリズムなどの刻みが明確なもの
中	拍子や旋律感などの印象の違いが比較できるもの	音色や強弱などの要素と身体表現などの活動を結びつけて	拍子やフレーズなど流れやまとまりを感じ取れるもの
高	様式や表現方法等、背景などが異なるもの	自分が表したいイメージと比べて	音の重なりや形式など、全体的な表情を感じ取れるもの

○ 発達段階に応じて次のような目的や課題が生じるようにする。

低……音楽を直接体験する心地よさを生み出せる目的や課題（ひたる楽しさ）

中……生活体験の中にある音楽を取り出し、そのよさを見出していく目的や課題（求める楽しさ）

高……音楽体験を生かして音楽生活を豊かにしていくこと目指すを目的や課題（探る楽しさ）

(2) 楽しみ方に応じた活動構成

子供の発達段階と教材となる楽曲の特徴に応じ、自己吟味・自己追究・自己更新の活動が連続していくように、次のように、学年段階で重点化した活動構成を行う。

学年段階	高学年から重点化	中学年から重点化	低学年から重点化
活動の型	研究的な音楽活動	表現の工夫にむかう音楽活動	遊び的な音楽活動
であう段階	○楽曲と出会い、感受したことや疑問などを話し合う ●調べることや工夫を考える	○色々な表現を聴いたり表現したりする ●表現を工夫するよさを考える	○拍やリズムを感じて遊ぶ ●遊び方を考える
目的や課題	(～を研究して)発表会をしよう・伝えよう 等	(～を工夫して)歌集をつくろう・発表会をしよう 等	(音楽を使った)遊び発表会をしよう・遊び大会をしよう 等
ふかめる段階	○楽曲について調べたことをもとに表現方法を追究する ●活動の進め方を考える	○よりよい表現になるための工夫を追究する ●工夫の仕方を考える	○楽曲に合わせて遊びひたる ●楽しく遊ぶ方法を考える
あじわう段階	○楽曲の味わいを発表し合う ●活動の進め方を振り返る	○工夫したよさを発表し合う ●工夫の手順を振り返る	○音楽の楽しさを発表し合う ●楽しく遊ぶ方法を振り返る

(3) 自分の楽しみ方をつくりだすための支援

○ 活動を円滑に進めていくための支援

- ・発表会、歌集作成、音楽での交流会などの目的をもたせるためのもの・人・こととのであいの場
- ・子供の音楽的実態などを考慮したグループ構成や活動手順が明確になるような資料提示
- ・自他の活動のよさが見出せるような助言や交流の場の設定 等

○ 楽しみ方や楽曲の特徴に応じた音楽的要素の味わいを深める支援

- ・演奏的要素……奏法や発声に関する資料や活動モデルの提示、表現形態が異なるものの提示 等
- ・文学的要素……読み物資料（作曲者・作詞者について、歌詞の意味、等）や情景面の準備 等
- ・構成的要素……聴き比べや聴き合いの場の設定、同一曲で表現方法が異なるものの提示 等
- ・美的要素……聴き比べや聴き合いの場の設定、自己・相互評価を取り入れた表現の場の設定 等

○ 表現・鑑賞活動を進めていくための音楽的技能についての支援

- ・演奏技能や発声法についての助言や範奏・範唱、資料の提示 等

3 指導の実際と考察

(1) 題材名 第3学年 3の1・3 日本と世界の遊び歌集をつくろう（中学年実践）

(2) 本題材の考え方

本実践は、中学年で「求める楽しさ」をつくりだす「表現の工夫にむかう」活動を位置付けた題材である。本題材のねらいは、日本と世界の遊び歌を遊びながら鑑賞したり、遊びやすいように表現を工夫したりする中で、拍子感・旋律感などを深め、遊び歌の楽しさを味わったり、音色や強弱を変化させるよさを感じ取りながら打楽器を演奏できるようになることである。主な学習内容は、①日本と世界の遊び歌の表現方法やふしの感じへの関心を高めること、②遊びやすいように拍子や拍を感じながら、強弱や音色に気をつけて表現を工夫すること、③自然な発声で歌ったり打楽器を演奏したりすること、④ふしの感じの違いを感じ取ったり、拍をとらえて身体表現をしながら楽しく聴くこと、などである。遊び歌は、子供たちの生活経験から親しみやすいジャンルの楽曲である。また、遊びやすいように表現するために工夫する活動によって、拍子をとらえて音色や強弱を考えて表現するよさを感じ取らせることができる。教材として、次のような日本と世界の遊び歌を取り上げた。

世界の遊び歌

「ロンドン橋」(イギリス) …… 2/4 拍子、くぐらせ遊び
「うさぎ」(中国) …… 4/4 拍子・中国音階、手遊びなど
「おうむの歌」(インドネシア) …… 3/4 拍子、手遊びなど

日本の遊び歌

「おちゃらか」 …… 2/4 拍子、じゃんけん遊びなど
「あんたがたどこさ」 …… 混交拍子、まりつき遊びなど
「とおりゃんせ」 …… 4/4 拍子・陰音階、くぐらせ遊び

これらの遊び歌は、遊び方の違いによる拍子感や、音階構成からくる旋律感の違いを比較することができ（構造的）、音色や強弱を工夫したリズム表現を「遊び易さ」という点で確かめることができる。（評価性）また、遊び歌は拍子やフレーズをとらえた身体の動きが要求される。（内面性）そこで、「自分たちの遊び歌集をつくろう」という目的のもと、遊びやすい演奏の仕方を追究させていく。

(3) 目 標

- ① 日本と世界の遊び歌に親しみ、音楽で生活が明るくなることを感じ取り音楽を愛好する心情を育むとともに、拍子・旋律・音色などについての感性を深めていくことができる。（人間性）
- ② 遊びやすい表現になるように、速度や打楽器の選び方や演奏の仕方を工夫する活動に意欲的に取り組み、拍子を感じながら音色や強弱を考えて表現することができる。（創造性・主体性）

(4) 計 画（8時間）

階	であう（2時間）	ふかめる（4時間）	あじわう（2時間）
活動と内容	1 日本と世界の遊び歌を歌ったり遊んだりして、演奏を録音する遊び歌集をつくる計画を立てる。 ○ふしの表情の違いの感受 ○拍やリズムを取って表現するよさの感受	2 世界と日本のそれぞれの歌を選んで、グループごとに、遊びやすい速度やリズム伴奏などを工夫する。 ○遊びやすい強弱や速度の工夫 ○打楽器の音色や奏法に気を付けたリズム伴奏の工夫	3 遊び歌集を完成させ、遊んだり他の学級に紹介したりして、お互いの活動のよさを振り返る。 ○打楽器の演奏で遊びやすくなることの実感 ○自他の音楽活動の価値付け
手だて	※ 帰国子女学級の子供も含め体験を発表させる場 ※ 速度を変えたり、打楽器の拍打ちを入れたりして遊ぶ場	※ 多様な打楽器を選択するコーナーや録音コーナーの設置 ※ 遊びながら打楽器演奏の評価ができるグループ内役割分担 ※ 打楽器の奏法の助言	※ 演奏を録音・発表する場 ※ 工夫したこととそのよさについて交流し合う活動設定

(5) 指導の実際

① 日本と世界の遊び歌に出合い、楽しく遊べる遊び歌集をつくる目的をもつ段階 (1~2/8時)

この段階のねらいは、速度や音色に気を付けて遊び歌を表現する楽しさを感じ取り、表現の工夫についての見通しをもたせることである。まず「おちゃらか」「通りゃんせ」など知っている遊び歌を出し合わせた。帰国子女学級の子供にも海外で歌い遊んだ曲を発表させ(写真①)、手遊びやつかまえ遊びなどで歌に合わせて遊ばせた。「色々な速さで遊んでみよう」と教師が呼び掛け、速度を変えて遊ぶことで「速さを変えると、動きを変えないといけないから、面白くなるね」という意見が出された。また、楽器の拍打ちを入れて遊ばせた。(写真②)。そこでは、「楽器が入ると動きがはっきりして遊びやすい」という意見が出された。「もっと色々な遊び歌を聞いて遊んでみたい」という求めに応じて、郷土に伝わるわらべうたや、他の外国の子供の歌を鑑賞させた。そこでは「日本の歌と外国の歌は、曲の雰囲気は違っているけどどちらも楽しい」という意見が出された。さらに、カセットテープとセットになっている遊び歌集を提示し、「楽しく遊べるように、3の1・3で遊び歌集をつくろう」と提案したところ、「楽しそうだ」「やってみたい」という意見が出された。(資料①)そこでまず、世界の歌からやってみたい楽曲と遊び毎にグループをつくり、表現の計画を立てさせた。



【写真① 中国の遊び歌の紹介】



【写真② 楽器を入れて遊ぶ】

ぼくは、みんなが歌を聞いて遊べたり、自分たちが何を伝えたいかが分かる「遊び歌集」をつくりたいです。

ロンドン橋を速いつかまえ遊びで遊べるようにしたいです。

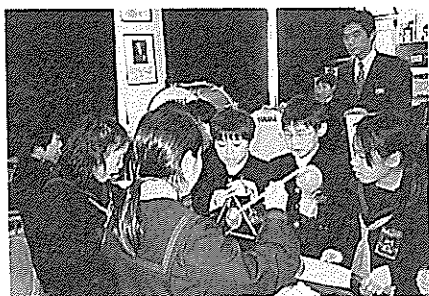
【資料① K児の学習ノート】

考察①

つかむ段階では、拍の流れをとらえるとともに、速度を変化させたり、打楽器の拍打ちを入れたりすることで遊び歌が楽しく遊べることに気付かせることができた。子供の感性を中心とした音楽的実態と、楽曲の特徴から、子供が着目すべき音楽的要素(速度・楽器の音色)を絞り込んで出合わせる活動設定が有効であった。また、市販の遊び歌集の提示等で、活動目的を明確にすることもできた。

② 楽しい遊び歌集を作るために、速度や楽器を工夫しながら表現を深める段階 (3~6/8時)

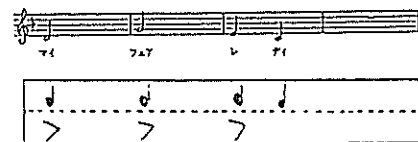
この段階のねらいは、拍・拍子を感じて強弱や音色を工夫して打楽器のリズム伴奏をつけることである。打楽器のリズム伴奏を入れて、表現を工夫しようというめあてをもった子供たちに、各グループ内をABCの3チームに分け、旋律(歌か鍵盤ハーモニカ)、リズム、遊びを分担し、役割を交代しながら表現の工夫を考えさせた。そこでは、多様な打楽器を用意して音を出したり選んだりできる「打楽器コーナー」を設け、強弱や音色を吟味させた(写真③)。その際、遊びの動きのポイントを拡大楽譜にシールをはって確かめ、遊びやすい演奏になっているかどうかを、お互いに評価し合いながら、表現を練り上げていった。例えばK児はカウベルの奏法を工夫し(写真④)、拍子を意識した強弱表現を考えた。(資料②)世界の遊び歌と日本の遊び歌の表現の双方を比較した子供たちは、「同じように楽しく遊ぶんだけど、日本の遊び歌は外国の歌に比べると、しずんだ感じがする」という旋律感の違いに気付いた発言が出された。子供たちは、録音したテープを開き返し、リズム伴奏の在り方や速度設定などが遊びやすいものになっているか、遊びを交えてお互いに評価し、表現の工夫を完成させていった。「強いところと弱いところを区別してたたくと遊びやすい」「太鼓で強いところをたたいて、ウッドブロックと合わせと楽しく遊べる」と自分たちの表現を価値付ける発言が出された。



【写真③ 強く打つところを考える】



【写真④ 奏法を研究する】



2. 今日の学習で分かったことや感想を書きましょう。

前の楽はただ同じテンポだけ今日の学習で強くたく所と弱くたく所をわけるリズムがはまりて遊びやすくなりました。

【資料② K児の書き込み楽譜】

考察②

ふかめる段階では、拍の流れを打楽器の演奏の強弱や音色の変化に置き換えて表現できるよさをとらえ、音楽活動の基礎的能力を高める姿がみられた。これは、子供の生活体験の中にある「遊び歌」の教材化と、遊びの動きを打楽器で表現する「遊び歌集づくり」という目的な活動が有効であったと考える。また、遊びを通して打楽器表現の評価ができる教材曲と活動構成により、拍・拍子・強弱・音色などの表現の工夫を価値付けることができた。また、活動の目的と表現の工夫の見通しをもたせて、遊び歌集づくりの活動に取り組ませたことで、主体的な活動を生み出すことができた。

③ 遊び歌集を完成させ、遊んだりお互いの活動を認め合ったりしてよさを味わう段階 (7~8時)

この段階のねらいは、遊び歌集を完成させ、成就感を味わうとともに、表現を工夫した自分たちの活動のよさを振り返らせることである。子供たちは遊び方を書いた冊子をつくり(課外)、各グループの表現の工夫をテープに録音した。(写真⑤)そして、各自が調べてきた遊び歌も録音し、テープを使って実際に遊んでみた。子供たちから、「曲に合わせて打楽器を強くしたり弱くしたりしてリズム伴奏をつけると遊びがはつきりする」「日本の歌と外国の歌は雰囲気が違うけど、楽器の演奏を工夫すると遊びやすくなって楽しい」「この遊び歌集を隣のクラスにもプレゼントしたい」という感想が出された。



【写真⑤ 遊び歌集の録音】

考察③

楽器の奏法の工夫で音楽を楽しめることを感じるように、遊びの動きで打楽器の演奏を自己評価・相互評価をしたり、録音したものを振り返ったりする活動構成により、味わう段階で、「楽器の音色と強弱の工夫で歌が楽しくなる」など、音楽を愛好する心情の育ちを見ることができた。

4 全体考察

「求める楽しさ」をつくりだす「表現の工夫にむかう音楽活動」を展開するために、音楽的要素を工夫すると音楽の表情が変化することをとらえ(速度や強弱など)、そこから表現の工夫を考えさせ、納得のいく表現をさせていくように活動を構成した。そのことにより、「打楽器の音が入ると遊びやすくなる」「速さが変わると遊び歌の楽しさも変わる」など、音楽に対する感性の育ちが見られた。

(人間性) また、そこから打楽器の奏法を追究したり、強拍と弱拍の打ち方を工夫したりする音楽活動の基礎的な能力を培うこともできた。(創造性) さらに、であう段階で、活動目的をもたせる資料提示と演奏の工夫についての見通しをもたせる活動を設定することで、音楽活動への意欲を高めていくことができた。(主体性) 以上のように、子供と音楽とのかかわりを豊かにすることができたと考ええる。中学年では、以上のような活動構成とともに、生活体験が生かされる音楽(構造化・内面性)で、遊び・身体表現を通しての評価ができる(評価性)楽曲の教材化が有効であったと考える。今後は学年の幅を広げ、教材化と活動構成の有効性を検証し、実践を積み重ねていきたい。

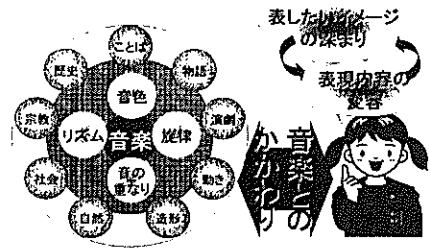
多文化的にアプローチする創造的な音楽活動の展開

音楽科部 原 ク ミ

1. 主題の意味

(1) 多文化的にアプローチする創造的な音楽活動とは

音楽とのかかわりを豊かにするためには、様々な音楽の美しさや楽しさを追究し、自分にとっての音楽の価値を見いだす活動が必要である。そこで、様々な様式をもつ音楽に出合い、音楽的な特徴を感じ取ったり、その特徴を自分の音楽活動に生かしたりして、音楽に敏感に反応する感性を育むことを大切にしていきたい。本研究では、子供の自己表現への意欲を高め、音楽に対するイメージを広げながら音楽とのかかわることができるつくって表現する活動に重点をおいた活動を展開させていく。多文化的にアプローチするとは、音楽を特徴づけている音色や音の重なり、旋律、リズムなどの構成要素は音楽のみで独立しているものではなく、他の文化的な要素と相互に影響し合って成り立っていることをとらえることによって、自分自身の表現の内容を変容させていくことを表している。よって、多文化的にアプローチする創造的な音楽活動とは、



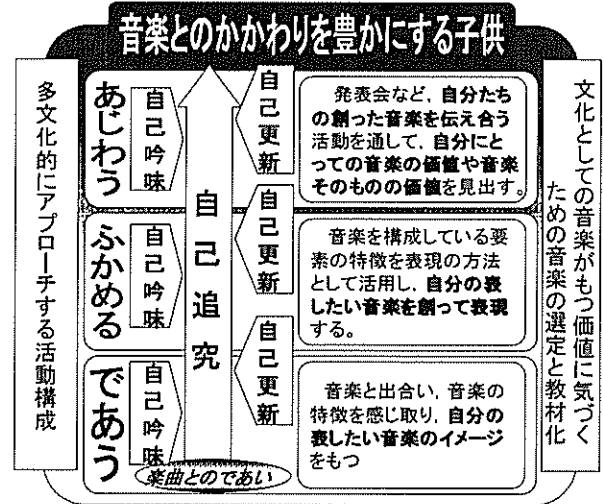
【多文化的にアプローチするとは】

音楽と出合い、旋律やリズム、音の重なりなどの構成要素が他の文化的な要素とのかかわって生み出されていると感じ取り、感じ取った特徴を新たな表現の方法として活用し、表現を追究していく中で、自分の表したいイメージと音楽表現を一体的に変容させていくことである。

この多文化的にアプローチすることは、子供たちが音楽に対するイメージをもちやすいものであり、創って表現する際の方法を明確に提示するという点によさがある。

(2) 多文化的にアプローチする創造的な音楽活動の展開とは

多文化的にアプローチする創造的な音楽活動の展開とは、①「新たに出合った音楽」と共通点がありながらも「様式が異なる音楽」とを比較してその特徴を感じ取り、他の文化的要素とのかかわりから表したいイメージをもつ鑑賞・表現活動（であう段階）②感じ取った特徴を活用して自分の表したい音楽をつくって表現し、表したいイメージと表現の内容を一体的に深めていく活動（ふかめる段階）③自分たちのつくった音楽のよさを味わうための発表会を開いたり伝え合ったりする活動（あじわう段階）を展開させていくことである。これらの活動を展開させていくためには、子供の実態をふまえ、文化としての音楽がもつ価値（美しさや楽しさ）に気づく音楽の選定と教材化を行い、「こんな音楽が表したい」という思いをもとに、つくって表現する自己追究活動の中で、表現の内容を吟味し、表現欲求としての思いを更新していくような活動構成を行うことが必要となってくる。



【多文化的にアプローチする創造的な音楽活動の展開】

(3) 本研究で期待する子供像

- 音楽を構成している特徴的な要素を感じ取り、その特徴を活用して表したいイメージや自分なりの構想をもとに工夫して表現する子供（自己追究）
- 様々な音楽と出合い自分と音楽とのかかわりを振り返ったり、つくって表現した音楽を相互に聴き合い、表現の高まりを感じ取ったりすることができる子供（自己吟味）
- 「こんな音楽が表したい」という思いを持ち続けるとともに、表現が高まった喜びを味わい、文化としての音楽がもつ楽しさや美しさに気づくことができる子供（自己更新）

2. 学習の具体的構想

(1) 教材とする音楽の選定と教材化について

教材選定の条件	教材化の方途
その国の人々の生活と結びついていることがとらえやすい音楽であること	着目させる内容を明確にし、音楽の特徴とその国の人々の生活とのかかわりがとらえられるようにする。
それまでに出了った同じテーマの楽曲と比べ様式の違ひがわかる音楽であること	身につけさせたい資質や能力に応じて、つくって表現する学習内容と、着目させる構成要素との関連を図る。
子供の発達段階に応じており、創造的な表現に結びつく要素をもっていること	その音楽が生み出された背景や人々の生活とのつながりなどに対して興味関心が持てるようにする。
	・伴奏を加える ・再構成する ・楽譜化する ・複数の楽曲を用いる

(2) 低・中・高学年の系統性について

低学年においては、発達段階から考え、文化としての音楽の価値をとらえていくことを直接にねらう創造的な音活動ではなく、多文化としての音楽に意図的に出合わせ、リズム問答やふし遊びなどを通して中学年以降の学習の素地としてのリズム感やフレーズ感を身につけさせるようにする。

	題材とする音楽	文化としての価値	創造的な音楽活動の内容
中学年	楽しさを追究するための遊びやお祭りをテーマにした音楽	音楽は人々の生活を明るく楽しくする文化の一つであること	リズムの組み合わせや音の重なりを工夫したり簡単な旋律を創ること
高学年	その土地の人々の生き方や習慣、環境などをテーマにした音楽	音楽は昔から人々の生活や習慣と深く結びついていること	中学年の内容に加えて、音楽全体のまとまりに着目して創ること

(3) 活動構成について

基本的な活動構成を次のように行い、自己吟味・自己追究・自己更新する活動が位置付くようにする。

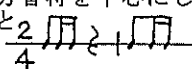
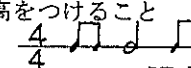
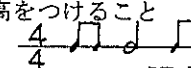
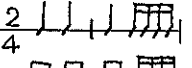
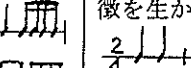
段階	主な学習活動	内容	教師の支援
表現意欲をもつ	1 教材曲となる音楽にかかわっている人と出合ったり楽しく鑑賞や表現を行い、音楽の特徴を感じ取ったりする。 自己追究 ← これまでに出了った音楽と比較しながら、鑑賞・表現を行い、音楽的な特徴を感じ取る。 自己更新 ← これからの活動について話し合ったり表したい音楽のイメージを出し合ったりして、表現意欲をもつ。 自己吟味 ← GTや友達と一緒に音楽を楽しみ、自分とのかかわりを吟味する。	○ 出合った音楽への関心を深め、表現意欲をもつこと ○ 出合った音楽の特徴とその音楽の背景にある文化的要素とのかかわりをとらえること ○ 創って表現したい音楽のイメージをもつこと	※ 楽曲の選定と教材化 ※ 表現意欲を生み出すためのGTとの出合いの場を設定する ※ 人々の生活や文化に触れる学習環境の整備や資料の提示 ※ それまでに出了った音楽との比較活動の設定
ふかめる	3 教材曲の様式をもとに、音楽（リズムや旋律）を創って表現する。 自己追究 ← 出合った音楽の特徴を表現の方法として活用し、表したい音楽にするための工夫をしたり、聴き合い活動を通して出てきた課題を解決するための工夫をしたりする。 自己更新 ← 聴き合い活動において、特徴的な要素をもとに表現を工夫したよさや、高まった表現を認め合ったりする。 自己吟味 ← 友達や自分の表現を聴き合い、表したい音楽になっているのかを吟味する。	○ 出合った音楽の特徴（構成要素など）を生かして、創って表現すること ○ 表したいイメージをもとにして、音を組み合わせたり重ねたりして自分なりの音楽を創って表現すること ○ 教材曲の様式をもとに、自分の音楽を見なおし、表現の工夫をすること	※ 子供がつくったリズムパターンや旋律の楽譜化 ※ 各グループの課題に応じた支援の工夫 ※ 録音コーナーや音色の工夫コーナーなど選択できる〇〇コーナーの設定 ※ 他のグループの音楽を聴き合う場の設定 ※ 工夫する観点をつかむモデル提示
あじわう	4 自分の創った音楽を伝え合ったり、他者へと広めたりする。 自己追究 ← 自分たちがつくった音楽を発表し合う。 自己更新 ← 自分にとっての音楽の価値を見出す。 自己吟味 ← つくった音楽を相互に評価する。	○ 音楽活動の楽しさや自分たちの活動に対する満足感を味わうこと ○ 他の音楽と比較して音楽の文化としての価値をとらえること	※ 自分たちの活動を伝える場の設定 ※ 他の音楽との比較活動の設定 ※ 自己評価できる活動の工夫

3. 指導の実際と考察

(1) 題材名 第4学年 「みんな集まれ！ 附小カーニバル」～メレンゲの音楽をつくろう～
(教材曲 GTが創ったオリジナル曲「さとうきび畑」, 「メレンゲ」)

(2) 本題材の考え方

本題材のねらいは、メレンゲの音楽を聴いて、創造性を発揮しながら音楽的な要素（リズムや旋律）の特徴を感じ取り、その特徴を活用して自分が表したいメレンゲの音楽をつくって表現する主体性を発揮することと、これまでに合ったサンバやカリプソの音楽と比較したり、つくって表現した音楽でカーニバルを開いたりして、身体が思わず動き出しそうな音楽の楽しさを味わい、音楽そのもののもつ価値をとらえる人間性を育んでいくことにある。ここでいう価値とは、サンバもカリプソもメレンゲもカーニバルで用いられる音楽であり、人々の生活と結びついて生まれ、その土地の人々にとってはなくてはならない文化の一つであるということである。このねらいをふまえ、サンバ・カリプソ・メレンゲを用いた学習内容を次の表のように構成している。

共通性	様式	活動	鑑賞の内容	リズムづくり	旋律づくり	演奏形態や使用する楽器
カーニバルで演奏したり歌ったり踊ったりして楽しむ音楽	サンバ	リズム伴奏創り	教材曲「ブラジル」を聴いて、サンバの特徴的なリズムを感じ取ること	感じ取ったリズムを教師がリズムパターンとして提示し、それを組み合わせてリズム伴奏づくりをすること、4分音符と8分音符を中心にした複合リズムを用いること 	教材曲の旋律を歌唱したり、自分たちの生活を表して踊れサンバの歌詞を変えていく。	「おどれサンバ」にリズム伴奏を加え、自分たちの生活を歌詞に表して歌唱したりリズム打楽器を用いて演奏したりすること
	カリプソ	旋律創り	教材曲「シュガーバム」を聴いて、カリプソの流れる特徴的な流れを感じ取ること	旋律づくりをした後に旋律に合わせて拍を刻んだり、マラカスを叩いて8分音符で刻んだりしてリズム伴奏すること。 	リズムパターンを用いてできた旋律のリズム音型に鍵盤ハーモニカで音を確認しながら音高をつけ、旋律をつくって表現することや明るい感じになるように音高をつけること 	鍵盤楽器や旋律打楽器を用いた旋律の演奏を行い、自分たちが表したい音楽のイメージに近づけるための表現の工夫をすること
	メレンゲ	リズム伴奏と旋律創り	教材曲「メレンゲ」を聴いて、大里先生がくさくさとしたリズムを聴いて、メレンゲの流れる特徴を感じ取ること	感じ取った旋律のリズムと伴奏のリズムをリズムパターンとし、教師がリズム譜に表して、それを組み合わせて旋律と伴奏のリズムをつくること 八分音符が中心となるリズムパターンを組み合わせてつくること 	自分たちがつくったリズムに音高を加えて旋律をつくったり、リズム伴奏を加えたりして音楽をつくること 旋律のリズム音型がリフレインされることや音の進行が3度を中心に行われている特徴を生かしてつくること 	リズム打楽器と鍵盤楽器・旋律打楽器を組み合わせて演奏し、自分たちが表したい音楽に近づけるように、つくった旋律とリズム伴奏を合わせて表現の工夫をすること

(3) 目標

- ① 自分や友達がつくった音楽のよさや表したいイメージの音楽をつくることができた満足感を味わい、身体全体でカーニバルの音楽を楽しむことができる。(人間性)
- ② メレンゲの特徴をもつ教材曲のリズムや旋律などの要素の特徴を感じ取り、リズムパターンを組み合わせてリズム伴奏をつくったり、旋律のリズムを構成して音高をつけ、旋律をつくったりして自分の表したい音楽をつくることができ。(創造性・主体性)

(4) 計画 (9時間；A表現(4)-ア…⑤ A表現(2)-イ・(3)-イ…② B鑑賞(1)-ア、イ…②)

	であう(2時間)	ふかめる(6時間)	あじわう(1時間)
活動と内容	1. メレンゲに出会い、これからの活動について話し合う。 (1) メレンゲに出会う。 ① ○ 表現への意欲をもつこと (2) 音楽の特徴を調べる。 ① ○ メレンゲの特徴を感じ取り、表したいイメージをもつこと	2. 教材曲や参考曲の特徴を生かし、つくって表現する。 (1) 一人一人が8小節のメレンゲをつくったあと、グループで一つのメレンゲに組み合わせる。 ② ○ 音を組み合わせてつくって表現すること (2) 表したいイメージをもとに表現の工夫をする。 ① ○ 音高や音色に気をつけて表現すること (3) 他のグループとの聴き合い活動を行い、さらに表現を練り上げる。 ② ○ 強弱や速度の変化に気をつけて表現すること	3. 自分たちがつくったメレンゲでカーニバルを開く。 ○ 楽しく音楽活動を行っていることの価値をとらえる ○ メレンゲの文化的な価値をとらえる。
手だて	※ 演奏者としてのGT招聘 ※ 比較活動の設定 ※ 写真や資料の提示	※ リズムパターンのカード化とメレンゲボードの活用 ※ 表現を工夫する観点を生み出すモデル提示 ※ 主体的な活動を促す支援ボードや～コーナーの設定	※ 場の設定 ※ 他の文化的要素とのかかわり図の活用

(5) 指導の実際

① であう段階；他の文化的な要素とのかかわりや音楽様式の特徴をとらえる段階（1～2／9時）

ここでのねらいは、「サンバやカリプソの時のように音楽をつくって表現したいな」という表現欲求を生みだし、メレンゲのリズムや旋律の流れの特徴を感じ取ることができるようにするとともに、自分の表したいイメージをもつことができるようにすることである。

これまでのサンバやカリプソでの学習を通して、資料①に見られるような思いをもった子供たちは、GTの大里先生が演奏する教材曲「メレンゲ」のリズムに合わせて身体を揺らしたり、手拍子をしたりして楽しく聴く活動を行った。（写真①）この活動において、リズムの楽しさという点での共通性や、音楽様式に違いがあることを感じ取っていた。次に、大里先生方がメレンゲの特徴を用いてリズム伴奏と旋律（「さとうきび畑」）をつくる姿に出合ったことから、表現欲求をもち、題材全体のめあて「メレンゲの旋律とリズム伴奏をつくり、サンバやカリプソと合わせて附小カーニバルをひらこう」を設定した。そして、音楽を聴いて想像したことと合わせて、大里先生の話の聞いたり、ドミニカ共和国の人々の様子や風土が分かる写真を見たりして、自分が表したい音楽のイメージを明確にし（資料②）、教師が提示した拡大楽譜を見ながら「旋律にタイが多い」「リズム伴奏が繰り返されている」「四分音符や八分音符が中心になっている」などの音楽的な要素の特徴をとらえていった。

考察①

ここでは、大里先生のサンバやカリプソの演奏とメレンゲの演奏を聴き、似ているところや違うところを感じ取り、身体表現してリズムの楽しさを味わったり、どんな特徴があるのかを何度も繰り返して聴いたりする音楽に対する感性を発揮する姿が見られた。また、「大里先生たちのようにメレンゲをつくりたい」という思いから、資料②のような表したいイメージを鑑賞活動を通して明確にしている。このことから、音楽と他の文化的な要素（さとうきびの収穫が多いことや熱帯雨林が広がっている自然、踊りは腰を回すことが特徴であること、カーニバルの時だけではなく日常の中で用いられているなど）とのかかわりをとらえる大里先生の話やドミニカ共和国の写真・資料を楽曲と合わせて提示したことがメレンゲに対する興味関心や感じ方を深めることに有効に働いたと考える。

② ふかめる段階；表現の内容や、音楽と他の文化的な要素とのかかわりのとらえを相互に深めながらつくって表す段階（3～8／9時）

ここでのねらいは、表したい音楽のイメージに迫るための工夫をして、表現の内容と同時に他の文化的な要素と音楽とのかかわりのとらえを相互に深めることができるようにすることである。

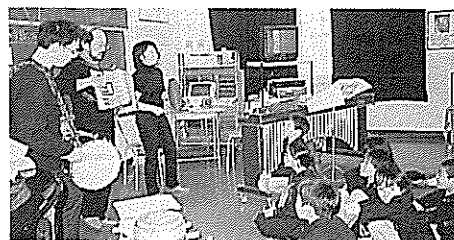
まず、表したい音楽のイメージを表すために、一人一人が資料③にあるリズムパターンを組み合わせ、8小節の旋律のリズム音型とリズム伴奏をつくる活動を行った後、それをグループの友達と組み合わせ、一つの曲として構成していった。この活動を通して、表したい音楽のイメージが次のように深まっていった。そして、子供た

「たくさんのさとうきびを列車で運ぶ様子」

たくさんのさとうきびを積んでいる列車が、出発するときはゆっくりだけど、どんどん速くなっていく。それでもたくさんのさとうきびを積んでいるので進み方が力強くなってきて、線路がゆらゆらするので、列車もゆらゆらゆれていく。最後は、市場の近くの駅につく。

前よりもリズムが分かるようになり、前は恥ずかしくて躍れなかったけど、カリプソのおかげで楽しく躍れるようになったので、次の学習でも楽しく踊りたいです。それに、今までやったことがある合奏と楽器はほとんど同じなのに、全然違う音楽がつけれるなんて不思議です。だから、もっと違うリズムの音楽もやってみたいです。

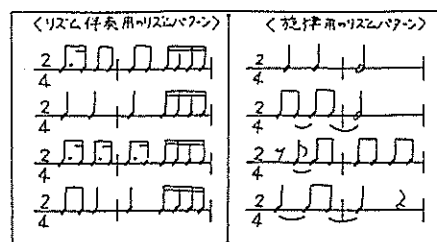
【資料① これまでの学習でのA児の思い】



【写真① GTの演奏を聴く様子】

- すぐ近くには、ジャングルがある
透明で静かなきれいな海
- たくさんの珍しい動物がいるジャングル
- さとうきびを列車で運んでいる
- さとうきび畑で働いている
- カーニバルで楽しく踊っている
- にぎやかな街中で踊っている人

【資料② 子供が表したい音楽のイメージ】



【資料③ カード化したリズムパターン】



【写真② 一つの曲にする様子】

ちは、録音コーナーで自分たちがつくった音楽を聴いたことから「もっと表したいイメージに合うような表現をしていきたい。」という思いをもった。そこで、自分たちにとって何が課題なのか、何を工夫していけばよいのかをつかむことができるように、モデルグループの演奏と教師が課題を生み出すために意図的につくった音楽を聴かせ、どちらがメレンゲの特徴をつかんで自分たちの表したいイメージに合っているかを交流し、表現を追究する観点（①明るい感じがする音高に変える②くり返す部分を増やす③タイを使う所を考える④終止・半終止を区別する）をつかめるようにした。A児のグループは、①と②を課題としてもち、課題を解決するために工夫して、資料④のように表現を変容させた。

考察②

資料④を見ると、メレンゲの音楽的な要素の特徴を生かして自分の表したい音楽をつくって表現し、より表したいイメージに合う音楽にするための工夫をしたことが分かる。カーニバルで躍れるような明るい感じを出すために音高を変えたり、繰り返しが多いという特徴を生かしたりできたのは、メレンゲの特徴的なリズムパターンを用いてつくって表現する活動を仕組んだことや、モデル提示をして自分たちが工夫する観点を見いださせたことが有効であったと考える。

③ あじわう段階：文化としての音楽の価値をとらえる段階（9／9時）

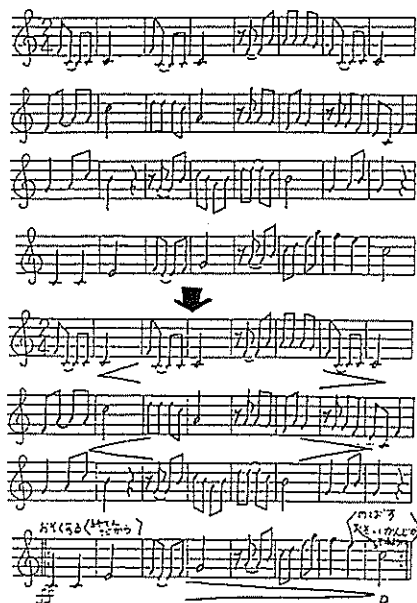
ここでのねらいは、つくった音楽でカーニバルを開き、サンバもカリプソもメレンゲもその土地の人々の生活を楽しんでいるという文化としての音楽の価値をとらえられるようにすることである。題材全体のめあてであるサンバやカリプソと合わせて、自分たちがつくったメレンゲでカーニバルを開く活動を行った。グループ毎にどんな音楽をつくったのか、どのようにして音楽を楽しむのかを説明して演奏し、聴く側は、踊ったり行進したりしてカーニバルを楽しみ（写真③）、A児は活動後に資料⑤のような感想をもった。

考察③

ここでの活動を通して、資料⑤に見られるような活動に対する満足感を味わったり、自分たちの音楽の高まりを感じ取り、文化としての音楽の価値をとらえる姿が見られた。これは、サンバやカリプソと合わせてカーニバルを開いたことや、自分たちがつくった音楽を聴いている人にも楽しんでもらえるように聴き方を提示させたことが有効であったと考える。

4. 全体考察

本題材の学習活動において、メレンゲの特徴を活用し、自分が求める音楽をよりよく表現する方法を考える創造性や意欲的につくって表現する主体性を発揮する姿が見られた。これは、「こんなメレンゲをつくって表現したい」という思いをもとに、表現を吟味し追究していったことが有効であったからだと考える。また、資料⑤の感想に見られるようなメレンゲの文化としての価値をとらえたり、自分にとっての音楽の価値を見いだしたりしている人間性の育ちが見られたのは、これまでの学習経験を生かすことができる活動構成や、サンバやカリプソと比較することができるメレンゲの教材選定と題材配列が有効であったからだと考える。



【資料④ 子供の表現の変容】



【写真③ カーニバルをする子供たち】

私は、サンバ・カリプソ・メレンゲの特徴がわかりました。その特徴をつかって音楽をつくると本当にメレンゲのような音楽ができて嬉しかったです。…（中略）…音楽を工夫しているとイメージもどんどん詳しくなって音楽も変わっていきました。その国の様子も想像できました。サンバもカリプソもメレンゲもみんな生活の中で踊ったりしていることが共通しています。他の地域にもこんな音楽があると思います。その人たちにとってはとても大切な音楽なんだと思いました。

【資料⑤ 学習後のA児の感想】

自ら求め創る喜びを味わう図画工作科学習

(図画工作科部 北 田 尚 雄)

主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う図画工作科学習の役割・立場

図画工作科における豊かな人間とは、子供が本来もっている表現欲求にもとづいて、主体的に材料や造形対象にかかわりながら、豊かな感動体験をし、感受力や発想力といった創造的な造形思考を生かしながら、もてる力を思いのままに働かせ、よさや美しさなどを見つけたり、新しいことを進んで試みたり、創造的にものをつくりだす楽しさや喜びを味わう子供である。

現在、子供たちを取り巻く社会の現実を見てみると、映像文化の発達で、ビジュアル化された社会にあって、即座に映像が目の中に飛び込んでくることにより子供たちは、もの、人、ことについて、想像力を働かせ、イメージ化する経験が乏しくなっている。また、ものの豊かさは、子供たちが本来もっている想像性や表現欲求を衰退させ、創造性の欠如をもたらしている。

そこで、これからの図画工作科学習の役割・立場としては、材料や造形対象または芸術文化と主体的に触れ合い、そのよさや美しさを感じ、そこから表現したいものを発想・構想していく創造的な造形思考を高めることにある。それにより、材料や造形対象の美しさや美的価値や芸術文化に対する感性などの美的情操を高め、ものに対する感じ方、考え方、表現の仕方など、自分のよさを生かし自己実現していく資質や能力を育て、創る喜びを味わうことができると考える。

○ 自ら求め創る喜びを味わう図画工作科学習とは

「自ら求め」とは、子供たちが造形活動に向かうとき、「～したい」というような表現欲求を心に抱くことであり、この表現欲求の中味は、内容的欲求と方法的欲求とに分けられる。「創る喜びを味わう」とは、造形活動の段階において造形への求めが連続発展しながら、表現を深化・拡充させ、自分の思いを実体化していく自己実現的な楽しさや喜びを味わうことである。造形活動における求めについては、材料や造形対象と出合い、その美しさやおもしろさなどから感動し、そのよさや特徴をつかむことで、「形や色で自分の思いを表現してみたい。」といった造形的な表現欲求が発現する。この表現欲求から、材料を変形したり、絵で表したりしていく表現活動へと展開していく。ここでの求めの連続発展は、表現領域によって異なる。「絵や立体に表す」「つくりたいものをつくる」領域では、初めに表したいことのイメージや構想、つまり、表現内容があって、それをもとに方法的欲求が発現し表現活動が展開される。それに対し、「材料などをもとにした造形遊び」では、材料などに進んで働きかけ、形や色などの特徴から自由に発想し、初めはぼんやりしていたイメージが、活動が展開されるたびに、内容的欲求が明確に、または、強調され、それにより方法的欲求が発展しながら表現活動が展開される。ゆえに造形遊びでは、子供たちの遊び性が発揮され、より自発的、主体的な活動が期待できる。よって、造形遊びの展開には、より子供自らの求めが表現活動を展開していく上で重要になってくる。

○ 自ら求め創る喜びを味わう子供とは

- | | |
|--|-------|
| ○ 材料や造形対象に対する見方、考え方、感じ方などから、自分らしい求めをもち、その求めから関連づけて新しい発想や方法などをつくりだす子供 | (創造性) |
| ○ 自分の求めから積極的に材料や造形対象にかかわり、表現や鑑賞の活動を楽しみながら、造形活動に取り組む子供 | (主体性) |
| ○ ものの本質や、よさや美しさなど価値あるものに気づく感覚を鋭くし、さらにそのよさを求めていく子供 | (人間性) |

【図画工作科において大切にしたい資質・能力】

学 年		低 学 年	中 学 年	高 学 年
主 体 性	創造性	身近な材料や造形対象について、自分らしい見方で、興味や関心をもって見ることで、自分なりのとらえ方ができる。	かかわった材料や造形対象について、よさや美しさ、おもしろさなどに関心をもって見ることで、自分らしいとらえ方ができる。	かかわった材料や造形対象について、よさや美しさ、おもしろさに関心をもって、多面的、比較的にとらえることができる。
	創造的発想力	身近な材料や造形対象の形や色から、自分なりに表したいことを楽しく思いつくことができる。	かかわった材料や造形対象に興味・関心を抱き、その特徴から思いや願いをもち、自分らしい表し方を思いつくことができる。	かかわった材料や造形対象、その周囲の様子に興味・関心をもち、その特徴から多様な表現方法や、表現内容を思いつくことができる。
	造形思考や構想力	見たことや、感じたことから、よさや美しさ、おもしろさを生かして表し方やつくり方を考えることができる。	材料などの特徴から、見たことや、感じたことについて、自分の思いと関連させながら、よさや美しさを生かした表し方やつくり方を考えることができる。	材料などの特徴を生かしながら、自分なりに主題性や調和性などを考え、自分の思いを確かめながらデザインの能力を働かせて、表し方を考えることができる。
	表現力・鑑賞力	好きな色や形などを選びながら、自分が見つけた表し方で思いのままに、手や感覚などを働かせて自分らしく表現したり、かいたりつくったりしたもののよさや美しさなどを感じ、楽しく見ることができる。	自分が表したい表現の意図に応じて、身近な造形対象や木ぎれや板材などの材料や用具の特性を生かしながら、自分らしい発想で手を十分に働かせて表現したり、造形作品のよさや美しさ、などを感じ、関心をもって見るすることができる。	様々な材料や造形対象などの特徴や周囲の様子などを考え合わせ、表現の意図に応じて、自分なりの技能や造形感覚などを総合的に生かしながら、造形的な構成を考えて表現したり、造形作品のよさや美しさ、主題などを感じ取り、味わうことができる。
	造形的態度	自分の表し方で、進んでかいたりつくったりすることを楽しむことができる。	自分の思いや願いから、自分らしい発想で想像を広げ、進んで表現や鑑賞の創造活動を楽しみ、その喜びや楽しさを味わうことができる。	自分の思いや願いから、自分らしい発想や、新たな発想で想像を広げ、積極的に表現や鑑賞の創造活動を楽しみ、その喜びや楽しさを味わうことができる。
人 間 性		美的情操	材料や造形対象、造形作品のよさや美しさ、楽しさ、おもしろさなどを感じ、味わうことができる。	材料や造形対象、造形作品のよさや美しさ、楽しさ、おもしろさなどを感じ取り、生かしたり味わったりすると共にそれらを大切にすることができる。

材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの展開

図画工作科部 北 田 尚 雄

1 主題の意味

(1) 材料のよさから表現を練り上げる造形遊びとは

「材料のよさ」とは、材料そのもののもつ特徴と、材料を組み合わせることで空間を構成していく特徴、光や風、水などの空間を構成している環境的要素が加わったときの動きや変化の特徴といった材料の特徴と、子供の「変形させてみたい」「見立ててみたい」などの心理的感情がつながったもののことである。「表現を練り上げる」とは、①材料などに進んで働きかけ、体全体をつかって造形活動すること、②材料のよさから新たな表現方法や表現技法を見つけ試みながら造形活動すること③多様な表現を絡ませながら総合的に働かせまわりとの調和を考えて造形活動することの3つの要素がある。「材料のよさから表現を練り上げる造形遊び」とは、材料のよさから発想を広げ、方法的、内容的欲求を深化・拡充しながら表現活動を練り上げ、主体的造形活動をすることである。子供は材料のよさに気づき、必然的に自発的な材料操作をし、変形したり、組み合わせたり、彩色したりする。この時、発想の能力や創造的な技能が高まり、図画工作科でねらう資質や能力が養われていく。

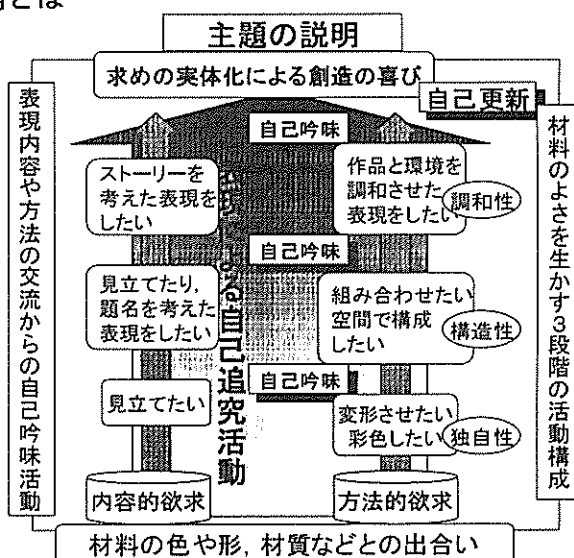
(2) 材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの展開とは

材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの展開とは、子供が「自分が生かしたい材料のよさを駆使しながらよりよい造形活動をしたい。」という求めをもち、自己吟味・追究していくことで、新たなよさの気づきや活動の吟味などから求めを深化・拡充していくことである。このような展開を図るためには、念頭による特徴把握ではなく、五感で感じとり体得していくための体験をもとにつかんだよさから、そのよさを生かした造形活動を展開していく必要がある。このような学習を展開するための方途として、体験的材料操作からよさに出合うために3段階の活動を構成する。つまり、

①材料そのもののもつ特徴のよさ、②材料どおしを組み合わせることで空間を構成したときの特徴のよさ、③光や風といった環境による動きや変化の特徴のよさを生かす段階的な活動を仕組むことである。この各段階において、材料のよさを生かしながら形づくっていきたいという求めが連続し、発展していくと考える。その過程では、表現方法や表現内容に対する発想や構想の自己吟味、その発想や構想から試行錯誤しながら表現していく自己追究、自分の求めと表現活動や作品についての自己吟味から、自分の求めにしたがって表現し、求めの実体化、作品化を図る自己更新から、造形遊びの表現は練り上げられると考える。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 自らの求めをもって、材料とかかわり、自分なりに表したいものや、表したい方法を生み出しながら創造的に造形表現する子供 (自己追究)
- 自分の求めと表現活動の関係を見つめ、さらによりよい表現をしていくために、材料の新たな特徴に気づきながら活動の見通しをもつ子供 (自己吟味)
- 自分の表現過程を振り返りながら、自分の高まりを見つめ、自分らしい見方、感じ方、表し方に気づき、つくる喜びを味わう子供 (自己更新)



2 学習の具体的構想

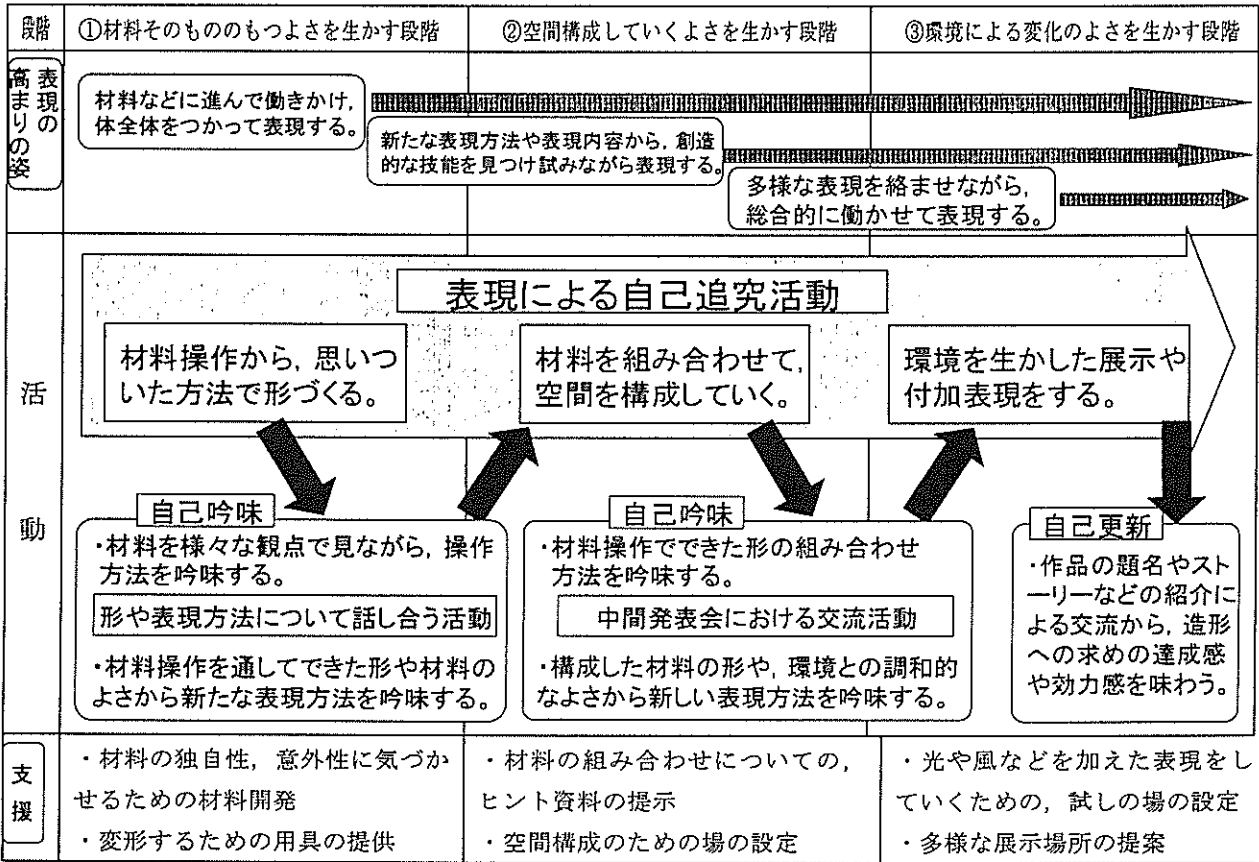
(1) 材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの教材化の視点

材料のよさから表現を練り上げる造形遊びでは、次のような材料の特徴の①独自性②構造性③調和性と子供の求めが繋がった材料のよさを教材化の視点と考える。

独自性	材料そのものが特に顕著にもつ特徴で、造形的な子供の強い求めが生まれ、また発展していくような特徴	例：思い思いに変形できる。 熱などで変形できる。
構造性	形を構成していく際に、多様な形や空間の構成が期待できる構造になっているような特徴	例：空洞になっている。巻き付けられる。結合できる。
調和性	材料や作品にその周りの環境的要素が加わることで、動きや変化が生じ、子供たちの発想を促すような特徴	例：光を反射したり、透きとおったりする。軽量で風によって動く。

(2) 材料のよさから表現を練り上げる造形遊びの、交流活動を位置づけた活動構成と支援

材料のよさから表現を練り上げる造形遊びでは、子供自らの求めが連続発展する過程を、「材料そのもののもつよさを生かす段階」「空間を構成していくよさを生かす段階」「環境による動きや変化のよさを生かす段階」の3段階で構成する。そして、各段階に材料操作活動から生まれた求めや作品について交流する場を設定することで、自らの求めを明らかにした活動が展開できると考える。



(3) 材料の教材化における学年の系統性について

子供たちが、材料体験から、表現活動に生かしていきたい材料のよさに視点をあてた教材化の条件について、次のような学年の系統性を考えていく。

低学年 中学年	主に①の材料そのものの特徴からの発想。特に独自性に視点をあてて材料を教材化。 ①にあわせて、②の材料を組み合わせた空間構成の特徴からの発想。独自性および構造性に視点をあてて材料を教材化。
高学年	①②にあわせて、③の環境（光や風、水などの空間を構成する要素）が加わったときの動きや変化の特徴からの発想。独自性、構造性に調和性を加えた視点で材料を教材化。

3 指導の実際と考察

(1) 題材名 第5学年 ペットボトルとスチレンボールから生まれたものは（造形遊び）

(2) 本題材の考え方

本題材は、ペットボトルとスチレンボールという異質な材料を組み合わせる新しい形をつくり、その形に光や風といった環境の要素を加えることで発想を広げ、材料を付加しながらストーリー性のある楽しい形をつくりだすことがねらいである。主な学習内容は、①ペットボトルとスチレンボールのよさを多面的、比較的に捉え、そのよさから表現内容や表現方法を発想し、試みながら新しい表現を発見していくこと（創造性）、②ペットボトルとスチレンボールのよさから自らの求めをもち、よさを生かしながら自分らしく楽しく表現していくこと（主体性）、③材料の特徴を生かした展示や、自分や友達の表現の工夫など、よさに気づき関心をもってみるとともに、新たなものの見方、考え方、表し方を見つけること（人間性）であり、造形的な創造性を養い求めが連続発展しながら、自らつくりだす喜びを味わうことができると考える。

本題材の指導にあたっては、材料や環境のよさを生かす3段階の活動で構成する。まず、「材料そのもののよさを生かす段階」では、ペットボトルとスチレンボールの2つの材料と出合わせ、それぞれの独自性を捉えさせたい。そのために、材料操作遊びを行わせ、体験的に材料のよさをつかんでいけるようにする。次に、「2つの材料を組み合わせる空間を構成していくよさを生かす段階」では、前段階でつかんだ材料のよさを生かしながら、ペットボトルとスチレンボールを組み合わせ、空間への生かし方を工夫して楽しい形をつくりだすようにする。そのために、材料のよさを生かしながら自分の求めを表現するのに効果的な組み合わせを自己吟味・追究していくために、材料の構造的な発想・表現したことについて、友達と交流しながら、表現方法や表現内容を自己吟味・追究させる。さらに、「環境との調和のよさを生かす段階」では、光や風、水の環境的要素と出合わせ、作品の動きや変化のよさから、作品にストーリー性をもたせ、その求めに合わせて、展示方法や、付加表現方法を自己吟味・追究させていく。そのために、光や風を感じる場所の設定をし、実際に光や風を当てながら表現内容や表現方法の自己吟味をさせたい。そして、最後に展覧会を開き作品を鑑賞しあうことで、効力感や達成感を感じさせ、創造する喜びを味わわせたい。

(3) 目 標

- ① ペットボトルとスチレンボールに関心をもち、そのよさから表現方法や表現内容を発想し、自らの求めから、これまで培った技能を総合的に生かして表現することができる。 （創造性・主体性）
- ② 自分や友達の表現内容や表現方法のよさに気づくとともに、材料のよさから自分の求めに応じて新しい形を創り出す喜びを味わうことができる。 （人間性）

(4) 計 画（8時間）

段階	材料そのもののよさを生かす段階（2時間）	材料を組み合わせ空間構成のよさを生かす段階（3時間）	環境による動きや変化のよさを生かす段階（3時間）
活動と内容	1 ペットボトルとスチレンボールの材料操作をして遊ぶ。 (1) 材料のよさをとらえ材料操作する。 ○ 材料の特徴に関心をもつこと (2) 操作方法やできた形について話し合い、新たな方法や内容を考える。 ○ 形や方法から発想すること	2 2つの材料を組み合わせ構成する。 (1) 2つの材料を組み合わせ形をつくる。 ○ 材料の特徴をもとに発想し、よさを生かしてつくこと (2) 題名などについて交流し、友達のよさを参考にしながら新たな方法を考える。 ○ 形や作品の特徴から構想すること	3 作品に光や風をあてたよさを生かしながら表現する。 (1) 光や風を加えたよさを生かし、自分の表現内容から表現する。 ○ 作品と環境の調和を生かして表現すること (2) 作品発表会を開く。
支援	※ ペットボトルやスチレンボールなどの操作方法などの技能的ヒント提示	※ 2つの材料を組み合わせ、構成したり、彩色したりしていく材料用具の提供	※ 光や風などを加えたときのよさをつかむための試みの場の設定

(5) 指導の実際

① ペットボトルとスチレンボールのよさから材料操作する段階(1～2/8時間)

ここでのねらいは、ペットボトルとスチレンボールの材料操作から、材料そのもののもつ独自性から、材料のよさをつかみ、そのよさを生かしながら形づくることである。そのために、ペットボトルやスチレンボールを、切る、曲げる、熱で変形させる、ねじるなどの自由な材料操作から、思い思いに形をつくり、できた形を見立てながら表現への求めをもたせていった。

I 児は、材料を切ったり、曲げたりしながらする中で、材料の独自性に気づき、その独自性を生かした造形表現を自己追究していった。また、操作方法について友達と話し合う自己吟味から、ペットボトルをおもしろい形に曲げていくときに、「熱で変形する」という特徴に目をつけ、ペットボトルやスチレンボールをドライヤーの熱で変形させるおもしろさを発見していった(写真①)。できた形からは「おもしろい形ができそう。かわいらしいものをつくりたい。」という求めをもつことができた。



【写真① ペットボトルを熱で変形させるI児】

考察①

材料操作をして遊ぶことを通して、その材料の独自性に気づき、そのよさを生かして造形活動していかうとする姿が見られた。それは、材料選択の条件から材料を教材化したことや、材料の特徴に着目しながら材料操作をする活動構成、さらには材料のよさに気づく場の設定をしたことがよかったと思われる。特に、熱コーナーの設置によって、熱可塑性に関心をもち、熱を使ってペットボトルやスチレンボールを思い思いに変形させる新しい表現方法を試し、それにより偶然できたおもしろい形を見立てながら表現するという姿が見られた。

② 2つの材料を組み合わせ、空間を構成するよさから形づくる段階(3～5/8時間)

ここでのねらいは、材料のよさを生かしながら、ペットボトルとスチレンボールの2つの材料を組み合わせいくことで、空間を構成しながら自分の求めにあった形をつくり、その形に題名などをつけて自分なりに意味づけしながら、さらに表現を高めていくことである。そこでI 児は、「かわいいお人形さんをつくりたい。」という求めから、ペットボトルでできた、お人形さんの首にスチレンボールを巻き付けて首飾りをつくったり、お人形さんの部屋を彩色したり、スチレンボールで飾り付けをしたりした(写真②)。ここでは、ペットボトルの透明で空洞である構造的性を生かしながら、ペットボトルの中の空間に、お人形さんに見立てた形を入れ、ペットボトルを部屋に見立てながらスチレンボールの柔軟性を生かして一つの住まいの空間を構成していった(写真③)。



【写真② 2つの材料を組み合わせ方を追究するI児】



【写真③ 2つの材料を組み合わせたI児の作品】

今日、スチレンボールとペットボトルを組み合わせみて、最初は、何となくかわいい形ができていたけど、色をつけたスチレンボールを巻き付けたり中に入れたりすると、カラフルなお部屋にいたってもかわいいお人形さんができました。

【資料① 2つの材料を組み合わせた後のI児の感想】

中間発表会においてI 児は、友達と自分の作品を交流する中で、友達の表現方法や表現内容のよさに気づいたり、自分のよさを再認識する姿も見られ、今後の表現活動のヒントをつかむことができた。そこで、友達の作品から、風で動くところによさを見つけ、「自分がつくってきた作品にも動く仕組みをつくりたい」という求めをもち、ペットボトルを螺旋状に切ったものを組み合わせ「動くドールハウス」という題名をつけることができた。

考察②

ここでは、自分の求めに応じて、材料の構造的性を生かしながら形を構成していったことで、自らの

表現内容が明確になり、その表現内容に合わせた多様な表現の姿が見られた。また、材料の構造的性を生かした2つの材料の組み合わせ方のヒント提示により、多様な組み合わせ方の自己追究活動が展開されたものと思われる。さらに、中間発表会などの交流活動から、できた形について作品の題名などを自己吟味していったことで、作品のイメージが明確になり、彩色や飾り付けなどの表現の高まりが見られたものと思われる。(資料①)

③ 光や風をあてたときの動きや変化のよさから表現を発展させる段階(6～7/8時間)

ここでのねらいは、光や風などを加えたときのよさから、造形への求めを発展させ、その求めに応じて、付加表現、展示表現しながら、作品に新たな意味づけやストーリーを考えることである。



【写真④ 光をあてた効果を吟味する1児】



【写真⑤ ペットボトルに彩色する1児】

I児は、光と水を組み合わせた輝きの美しさに気づき、光と水の効果を生かして展示表現していった(写真④、資料②)。さらに、光がペットボトルを透過するよさを生かして、ペットボトルに彩色しながら、色と形を組み合わせ構成し、自分の求めが効果的に表現できているか自己吟味し、これまで培った創造的な技能を総合的に生かしながら表現していく姿も見られた(写真⑤)。作品展では、太陽の光と水と作品の効果的な調和を考え、作品がより輝くような展示方法を吟味しながら、光がよくあたるベランダに展示し、資料③のようなストーリーを、友達に紹介していった(写真⑥)。

考察③

ここでは、光や風、水を作品に組み合わせたときの動きや変化のよさと出合うことで、その美しさやおもしろさから、子供たちは主体的に光や風を取り入れ、さらに表現への求めを発展させながら、効果的な表現をしていくことができた。また、これらの活動が、展示方法や展示場所の選択のヒントにもつながった。作品発表会では、作品の紹介をカードにまとめて友達に伝えていくことで、自分の求めから材料のよさを生かしながら表現を練り上げていったことを実感していくことができた。

4 全体考察

材料との出会いから、材料のよさを生かす3段階の活動を仕組んでいくことで、材料の独自性、構造的性、調和性をつかむことができた。また、この活動の中で表現内容や表現方法について交流をしていったことが、新たな造形への求めをもち課題を明らかにして、表現を練り上げていくことにつながった。その結果、材料のよさを生かしながら自分の求めを実現していった目の前の作品から、材料のよさやおもしろさ、自分の表現のよさに気づき、ひいては豊かな人間性を高めていくことができたものと思われる。課題としては、独自性や構造的性、調和性を兼ね備えた材料の開発の必要があると考える。

光をあてると、色がペットボトルを透きぬけて裏側に映ってきれいだった。水を垂して光をあてると、きらきら光ってとてもきれいだった。自然の飾りができそうです

【資料② 光や水を加えたときの1児の感想】

「カラフルお部屋とカラフルお人形」

希望の世界から、さみしい世界にカラフル人形がきたよ。光に映し出されたラメのきらきら光る粉で、みんなを希望に包んでくれる。そして明るい希望の世界になったよ。

【資料③ 1児の作品のストーリー】



【写真⑥ 太陽の光を生かした展示方法を吟味する1児】

私は、この学習を終えて、スチレンボールの柔らかいや結べる、彩色できるというよさやペットボトルの熱で変形できる、中が空洞で透きとおっているなどのよさを見つけることができました。このよさを生かして見る人が「いいな」といってくれるようなお部屋とお人形をつくりました。(中略) 図工とは、作品に思いをつくる学習だと思いました。

【資料④ 学習後の1児の感想】

運動へのかかわりを豊かにする体育科学習

主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う体育科学習の役割・立場

豊かな人間の育成のために体育科に求められているのは、「たくましく豊かに生きるために生涯にわたって積極的に運動にかかわるための創造的な技能を中心とした資質や能力を育成すること」である。しかし、豊かな人間性をはぐくむべき小学校期の教育には様々な課題がある。それは、生活様式の変化、少子・高齢化、情報化などの急激な社会の変化や児童生徒の生育環境や生活行動、国民の疾病構造等の変化などからくる生活習慣病の低年齢化、体力・運動能力の低下、運動への取り組み方の二極化、ストレス及び、不安感の高まりなど、児童の心と体の健康にかかわる課題である。

そこで、それらを解決するためのこれからの体育科学習としての役割・立場は、小学校期の発達段階に応じた獲得させたい価値ある動きをもつ運動に出会わせ、成長期における心身ともに健全な発達を促すことにあると考える。つまり、運動の行い方や動きに目を向け、自ら考えたり、工夫したりしながら、運動の楽しさを享受し、運動をつくりかえ、拡充していくなかで基礎的な動き（体力）を身に付けていくことが大切なのである。このことにより、運動の楽しさや喜びを味わい愛好していく資質・能力を育て、運動へのかかわりを豊かにすることができると考える。

○ 運動へのかかわりを豊かにする体育科学習とは

運動を自分なりの楽しみ方や身に付けていきたい動きの視点から捉え直し、課題を解決する活動を繰り返すなかで創造的 skill を中心に身に付け、運動の楽しさや喜びを味わっていく学習である。

子供が運動へのかかわりを豊かにする体育科学習を具現化するためには、創造的 skill を身に付けていくことが大切であると考え。ここでいう創造的 skill とは、運動自体が特徴的にもつ多用で巧みな体の操作を伴う動きを身に付けていくという技能の面と今もっている動きで運動を創り上げたり、創りかえたりするなどして楽しむ行い方の面のことである。また、創造的 skill を身に付けるとは、この技能と行い方の2側面から自ら運動にアプローチし、かかわっていくことができる子供を育てていくことである。そのためには、まず、運動の楽しみ方・行い方を変える（例えば、1人で行うから2人以上で行うへ）ことで比較し、生み出される動きの違いから身に付けるべき動きの視点をもたせる。身に付ける動きの視点を捉えた子供は、自ら考えたり、工夫したりしながら、動きを広げ、高めていく体験を積み重ねていく。また、把握した動きの視点は、子供の運動に対する興味・関心を掻き立て、連続・発展的に創造的 skill を獲得し、活用していくことができるようになることを考える。そしてさらに、直接的な動きの広がり、高まりへの自己追究や体力の向上への取り組みを行う資質・能力が育ち、運動へのかかわりを豊かにする子供が育つと考えるのである。

○ 運動へのかかわりを豊かにする子供とは

- 運動の行い方から自分の動きの視点を捉え、技能を高めるとともに、自ら考えたり、工夫したりする新たな運動のかかわり方を創り出すことができる子供（創造性）
- 友達と仲よく活動し、協力して課題解決を行ったり、自ら運動課題の達成に向かって運動に積極的にかかわったりすることができる子供（主体性）
- 運動に繰り返しかわる体験を通して一人一人が運動の楽しさや喜びを味わい、運動を愛好していこうとする子供（人間性）

【体育科で大切にする資質・能力の重点化・系統化】

学 年	低 学 年	中 学 年	高 学 年
創造性	動きの把握 運動遊びに出会い、友達との競争の仕方、運動遊びの行い方から身に付けようとする多様な動きに感覚的に気付くことができる。	自分の能力に合った競争の仕方、運動の仕方を考え、身に付けていく多様な動きを明確にイメージすることができる。	自分の体力や体の状態に応じて、自己の能力に適した動きを分析的に捉え、身に付けていく巧みな動きを決めることができる。
	創造的 動きの獲得 体の基本的な動きや各種の運動遊びの基礎となる動きを体験しながら、体を操作する動きを身に付け、より多様な動きの体験を積み上げることができる。	体の基本的な動きや各種の運動の基礎となるよい動きを捉え、身に付けながら、自分の能力に応じた多様な動きのバリエーションを広げることができる。	各運動の基本的な技能を身に付け、動きを広げ、高めるとともに、自己の体を巧みに操作する力を身に付け自己の体力を高めることができる。
	運動の創造 競争や運動遊びがより楽しくなるよう考えたり、工夫したりしながら運動を創り、繰り返し運動にかかわることができる。	多様な動きを広げ、身に付けていくために運動の楽しさを求め活動や場を工夫し自分たちの運動を創り出すことができる。	動きのイメージを広げ、運動の行い方を工夫し、自分たちの運動を創り上げ、運動へのかかわり方を創りかえることができる。
主体性	課題達成 仲間との競争、自己の能力に応じた動きの視点（課題）への取り組みを自ら楽しく続けて行い、今できる動きで課題を達成できる。	仲間との競争、自己の能力に適した動きの視点への取り組みを、自ら楽しく繰り返し行い、自己の動きの課題を十分に達成できる。	常に自己の心と体に関心をもち、動きの視点への取り組みを連続・発展的に行い身に付けた自己の動きを活用し課題を達成できる。
	課題意識 友達意識 順番やきまりを守ったり、安全に気を付けたりしながら、相手にかかわり、誰とでも仲よく運動遊びを楽しむことができる。	みんなでつくったきまりを守って、相手のことを考えながら運動にかかわり、仲よく安全に楽しく運動を行なうことができる。	誰に対しても公正な態度をもち、友達同士で互いに協力したり、励まし合ったりして安全に楽しく運動を行うことができる。
人間性	健康の認識 多様な運動遊びを体験し自分の体の調子への気付きと運動の大切さを体験し、運動遊びへの意欲をもつことができる。	身近な生活における健康の大切さや体の発育・発達について理解し、健康な生活を営むための運動の大切さに気付くことができる。	けがの防止、病気の予防、心の健康について理解し、生涯にわたる健康の保持増進には、運動が必要なことを理解することができる。
	実践的心情 価値ある運動遊びを行うことを通して、運動の楽しさや喜びを繰り返し味わい、運動を継続する意思をもつことができる。	心地よい運動の経験から健康の大切さに気付き、自己の運動に生かしながら運動を継続しようとする心情を育てることができる。	価値ある運動体験を積み上げ、自己の運動を振り返りながら、生涯に渡って運動を愛好していく心情をもつことができる。

動きをイメージし広げる表現運動の展開

体育科部 岩 城 一 磨

1 主題の意味

(1) 動きをイメージし広げるとは

表現対象との出会いで最初に捉えた表したい動きやリズムに乗って踊る自己の動きの心象を繰り返し捉え直し、具体的な動きにかえていくことである。

表現対象との出会いで最初に捉えた、表したい動きやリズムに乗って踊る自己の動きの心象とは、「表現」においては、最初を感じる「感動」や「〇〇の感じ」を含んだ特徴のある動きのことであり、「ダンス」においては、楽曲から捉える律動的な動きのことである。また、表現運動の動きから繰り返し捉え直しとは、自分なりに捉えた動きのイメージを表現運動を構成する基盤となる5つの空間的、時間的、強度的、身体的、集団的視点により具体的な動きに置き換えていくことである。そしてさらに、具体化するときには動きの視点から導き出された動きが自分の動きに加わっていくことで、動きが広がり、新たな表現を創り出していくのである。このことを繰り返すことで、運動へのかかわりを豊かにしていくと考える。

(2) 動きをイメージし広げる表現運動の展開とは

子供が表現運動を楽しむための行い方の比較によってもった動きの視点を自分の動きに付加しながら表現を練り上げる活動を行い、表現の楽しさを味わう発表活動を繰り返すなかで、自己の表現を創造していくことである。

具体的には、比較活動、表現活動、発表活動を通してこの学習の展開を行っていく。そのために①表現運動教材への低学年・中学年・高学年の動きの視点の位置付け、②3つの活動を位置付け連続・発展的に自己追究、自己吟味、自己更新を行う単元構成と場の工夫を支援として行っていく。前述の3つの活動について具体的には、表現運動の展開において、◎比較活動；身近な表現対象に体験的に出会い、いろいろな動きを即興的に踊り楽しむとともに、1人で踊ることと2人以上で踊ること、場の選択、指定した曲と選択した曲との比較といった運動の行い方の比較から表現運動を創るための動きの視点（空間的、時間的、強度的、身体的、集団的視点から捉えた動き）を生み出し、交流を通して吟味し、一人一人が的確に把握する。◎表現活動；動きのイメージをもとに動きを広げる場や場面、リズムに乗って踊ることができる曲を自己選択する。また、動きの積み上げがわかるグループボードと実際のダンスをグループ内比較したり、他のグループとの交流により動きの工夫を取り入れながら表現運動を創ったりするなかで、動きのイメージの広がりを追究していく。◎発表活動；動きのイメージを練り上げた表現運動の発表会・大会の活動を行うことで、表現運動のできばえや動きのイメージの広がりをグループ内で前の時間の動きと比較して自己評価・相互評価し、行い方や動きを更新していく。以上のことから、子供一人一人が動きを創造する体験を通して、積極的に運動を行っていくとする資質・能力を形成し、運動へのかかわりを豊かにする子供を育てることができると考える。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 動きの比較活動から表現運動を創るための動きの視点（課題）を把握し、積極的に自分の動きに付加していく課題解決の活動を繰り返し行う子供（自己追究）
- 動きの視点を付加しながら、連続・発展的に「つくる・おどる・みる」を繰り返し行い、新たな視点により、自分の表現を練り上げる子供（自己吟味）
- 友達と一緒に活動し、自らの表現を創る体験から、動きや行い方、イメージした動きを広げ、自らの動きのよさを捉え運動を楽しむ子供（自己更新）

2 学習の具体的構想

(1) 表現運動教材の動きの視点の低学年・中学年・高学年における位置付け

動きの視点を発達段階に応じて自分の動きに付加していくことで表現する動きがかわり、イメージした動きを広げていく。

	低学年	中学年	高学年
表	【時間的視点】場面の設定	曲の選択（ロック、サンバ、レゲエ、ヒップホップ）	
動	・曲、タイミング	・曲のリズム・速さ・素早さ	・動きの頻度・ズレ
運	――1人の動き――	【空間的視点】人数の変化	
動	・表現する長さ・幅・外形	・フロア上の広さ・高さ・隊形	・群としての動きの方向
の	――1人の動き――	【強度的視点】回数の変化	
動	・動きの回数の増減	・動きの繰り返し・連続	・動きの負荷の増減
き	――1人の動きで――	・人数の比較	【身体的視点】動きの比較
の	・全身の動き	・身体の各部位の動き	・身体の姿勢・動作・変化
視	――1人の動きで――	・人数の比較と動きの関係	【集団的視点】友達との協力
点	・同じ動き	・交互の動き・対応した動き	・集団総体で表現する動き

(2) 表現を創っていくための動きの視点を位置付ける教材化

低・中・高学年の表現運動内容で動きの視点を身に付けることで表現を練り上げていく。

	表現運動の教材と主な学習活動
表	○身近な生活の中からの表現対象と出会い、即興表現を繰り返し、感動や○○の感じを十分につかむ。 ○表現対象になりきって踊るために、遅い動きと素早い動きの動きの比較から自分の動きに付加していく 動きの視点として時間的視点を導き出す。 ○場面を選択し、活動の場を工夫し、動きの視点を身に付けながら踊り楽しむ（遊ぶ）。
ダ	○ロック、サンバなど数種の楽曲に乗って全身で弾んで踊るために、楽曲のリズムの比較や1人でのダンスと複数的人数でのダンスの動きの違いを比較することで時間的視点、空間的視点を導き出す。
ス	○曲を決め、動きの視点をもとに動きを選択、組み合わせながらつくる・おどる・みるを繰り返して自分たちのダンスを創っていく。

(3) 比較、表現、発表活動や具体的支援を位置付けた単元構成

自己の動きのイメージを追究、吟味、更新する即興表現、創造表現を繰り返して動きの視点を付加し、動きのイメージを広げていく。

段階	み い だ す	ひ ろ げ る	あ じ わ う
活動	比較活動(自己追究・吟味)	表現活動(自己追究・吟味・更新)	発表活動(自己追究・更新)
活動内容	1 表現対象に出会い、比較活動を通して動きをイメージし視点を把握する。 ○ 即興表現による表現運動の体験と動きのイメージ、動きの視点把握	2 動きの視点から動きを選択したり、組み合わせたりして表現を練り上げていく。 ○ グループ内比較による自他の新たな動き・行い方の広がりについての気づき ○ 交流による動きの視点を付加して表現運動を構成する動きのイメージの広がり	3 ○○大会、○○発表会を行い、表現運動の楽しさを実感する。 ○ 動きのイメージを広げ、表現運動の楽しさを実感して評価し合うこと
手だて	※ 動きを試行、動きの視点把握のための体験活動 ※ 行い方から動きの視点を把握する比較活動	※ 自己選択・決定でき動きを追究・吟味することで表現運動創りができる表現活動 ※ 即興表現、創造表現を繰り返し、イメージした動きを広げる表現活動	※ ○○大会、○○発表会で自分の動きを見つめ、イメージした動きの広がりを経験する発表活動

3 指導の実際と考察

(1) 単元名 第4学年 リズムダンス・レボリューション21（表現運動）

(2) 本単元の考え方

本単元のねらいは、新しい動きを付加していくリズムダンス創りの活動を通して、軽快なロックやサンバなどのリズムに乗って全身で弾んで楽しく踊れるようになることである。また、本単元の主な内容は、①リズムダンスの基本的な各種のステップなどの技能を楽しみながら身に付けていくこと。②友達との活動による曲の選択や人数を変えたリズムダンスの行い方の比較から、リズムダンスの動きの視点を把握し、自分たちのリズムダンスを創っていくことである。

ここで、リズムダンスを創る体験活動として、リズムに乗って踊る楽しさを様々な曲（ロック、サンバ、レゲエ、ヒップホップ）から体験すると同時に曲を感じて動く即興的な動き、全身で弾む動きや律動的な動き、回り、スキップする、手拍子を付ける動きなどリズムダンスの動きを広げていくことをねらう。さらに、③身に付けた動きをもとに1曲を選び、友達と協力しながらリズムダンスを創っていくなかで、リズムを変えたり、動きを組み合わせたりして、交流を通して動きを広げ高めさせていく。これらの運動体験を通して、心から体を動かす楽しさを体験し、友達と協力してリズムダンスの動きをイメージし広げ、リズムダンスを創造する喜びを見出していくものである。

本単元の指導にあたっては、見通した動きを広げ、自分たちのリズムダンスを創らせていきたい。

そのためにはまず、みいだす段階では、リズムに乗るための動きの特徴を捉え教材化したリズムダンスに出会い、動きの見通しをもつための即興表現を行う。さらに曲の選択や人数の違いによって表出する動きや表現のし方の違いを比較することで時間的、空間的な動きの視点をもち、次に、ひろげる段階では、つかんだ動きの視点をもとにリズムダンスを創る表現活動をさせていく。そのためには、①ロック、サンバ、レゲエ、ヒップホップの曲のリズムを感じて律動的な動きを発揮する即興表現や②活動の場を工夫し、グループでリズムダンスを創る創造表現を行っていく。最後にあじわう段階では、リズムダンス・レボリューション21を開き、イメージした動きの広がりを実感させていく。

(3) 目 標

- ① リズムダンスの動きの視点を把握し、曲想に合わせ、軽快なリズムに乗って踊る中で、律動的な動きを身に付け、自分たちのリズムダンスを創造することができる。（創造性・主体性）
- ② 友達と協力し、リズムダンス創りを行うことを通して、曲のリズムに乗って踊ることを楽しみ、リズムダンスの動き、行い方を広げ、積極的に運動をかかわることができる。（人間性）

(4) 計 画（9時間）

階	第1次みいだす段階(3時間)	第2次ひろげる段階(5時間)	第3次あじわう段階(1時間)
活動と内容	1 リズムダンスを体験し、ダンス創りを見通す。 (1) 即興表現で楽しむ。 ○ リズムダンスの動きのイメージの把握 (2) 曲・人数などの行い方の比較 ○ 時間・空間的視点の把握	2 リズムダンスを創り踊って楽しむ。 (1) いろいろな曲で即興表現を楽しむ。 ○ 即興表現による動きの広がり (2) 活動の場を工夫して創造表現をする。 ○ 創造表現による動きの広がり(本時 3/3) (3) リズムダンス・レボリューション 21 のリハーサルをする。 ○ 仕上がった動きの確認・把握	3 リズムダンス・レボリューション 21 を行い楽しさを実感する。 ○ 発表し合い、見通した動きの広がりを実感して評価し運動へのかかわりを更新すること
手だて	※ 即興的な動きを体験する活動、動きの視点を取り出し把握する比較活動	※ 動き・行い方を創りかえるために活動の場を自己選択・決定でき、リズムダンス創りができる表現活動	※ 学習を振り返り、自分の広がった動きを見つめる体験的な発表活動

(5) 指導の実際

① みいだす段階（1～3／9時間）

ここでのねらいは、リズムに乗る動きを捉え、教材化したリズムダンスに出会い、ロックやサンバの律動的な動きを味わい、運動の行い方の比較から、リズムダンス創りの動きの視点を把握することである。子供たちは、曲に乗ってリズムダンスを即興表現する活動（写真①）において、「曲に乗って自由に体を動かして楽しい」「いろいろな曲でダンスを創って上手に踊りたい」など自分なりの楽しみ方を把握し、全ての曲を体験していく姿が見られた。

次の時間、今まで踊りなれていたロック、サンバに新たにレゲエ、ヒップホップとのリズムによる表出する動き、表現の違いを比較させる活動を行った。ここで子供たちは、キーボードのリズムを聞きながらリズム手打ち～ステップ～リズムダンスの表現へと動きを広げていき、曲想にあったリズムを把握する姿が見られた。



【写真① リズムダンスの体験】

ロック、サンバのリズムダンス 写真②

速い曲（リズム）だけど、体がなれてリズムに乗って調子よく踊れるようになってきたぞ。

比較
⇔

曲（リズム）をかえてのリズムダンス写真③

レゲエはリズムが遅いので、そのリズムに合わせたダンスを創らないといけない。（時間的視点）

【資料① 曲を変える行い方の比較で表出する動きの違いの比較活動】

さらに、友達と一緒に踊ることを楽しむ姿も見られることから、人数の違うリズムダンスでは、どのように動きの表現の仕方が広がっていくかを比較することで動きの視点を付加する活動を行った。

1人のリズムダンス 写真④

ステップを組み合わせリズムに乗って踊り、1人でするいろいろなステップができるようになった。

比較
⇔

2人以上のリズムダンス 写真⑤

友達と四角く並んで、立ったりしゃがんだりする動きで変化をつけて踊りました。（空間的視点）

【資料② 1人と2人以上のリズムダンスで踊る行い方を比較し表出する動きの違いの比較活動】

考察①

本段階を通して、交流において動きの視点を把握することができた。（資料①②）それは、リズムダンスの即興表現の体験を十分に行ったあとに、曲を変えてのリズムをキーボードで体感させて比較したり、人数の違うリズムダンスとの比較を高い角度から撮影し見せたりして比較させたことで、動きをイメージし広げるリズムダンス創りの視点を各自が具体的にもつことができたからだと考える。

② ひろげる段階（4～8／9時間）

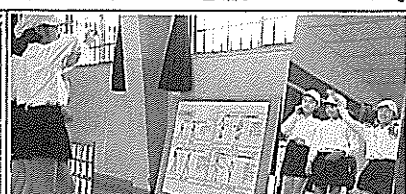
この段階のねらいは、リズムダンスの楽しさを十分に味わいながら、動きの視点をもとにリズムダンス創りを行うことである。子供たちは、前時の運動の比較活動からもった動きの視点から曲を選択し、動きづくりの場を活用したり、つくりにかえたりして友達と一緒にリズムダンスを創っていった。



【写真⑥ AG フロア創り】



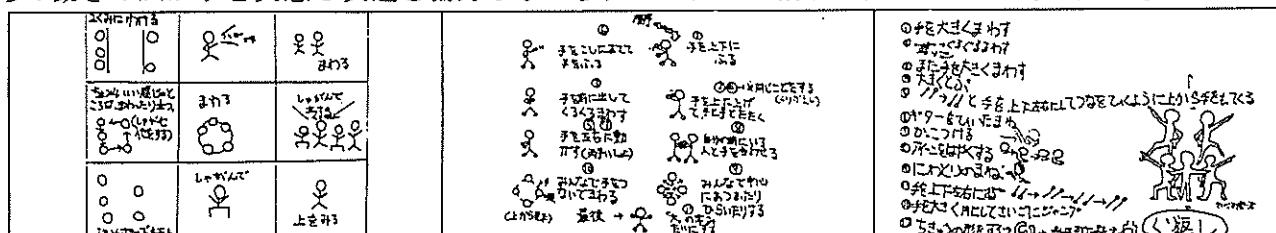
【写真⑦ BG リズム合わせ】



【写真⑧ CG 観によるフィードバック】

フロアを十分に使う姿（自己追究・吟味）が見られた。フロアに引いている円，三角形，四角形などのラインに付加して広さや隊形に意識をもってイメージにあったリズムダンスを創っていた。（自己更新）	レゲエ，ヒップホップを選択しキーボードに合わせてリズム手打ちやステップを踏むこと（自己追究・吟味）で動きの時間的な視点である曲のリズム，パターンを減らした動きを把握していった。（自己追究・更新）	動きを鏡に映したり，ビデオに録画してモニターで見たりして自分たちの動きを明確に捉え（自己吟味・追究），動きの広がり，高さ，リズムに対応した動きをフィードバックできていた。（自己更新）
---	---	---

子供たちは，創った動きをグループボードやノートに記録していくことで足跡として残し，自分たちの動きの広がりを実感し友達と協力しながらリズムダンス創りを行っていった。（資料③）



考察② 【資料③ A(AG)児・B(BG)児・C(CG)児の学習ノート】

子供たちは，各自が捉えた視点の動きを具体的に場をつくりかえるなかで身に付けていった。（資料③）それは，動きの視点として時間的な視点，空間的な視点をしっかりともち，「つくる→おどる→みる」というサイクルで繰り返し交流を行い，グループボードや学習ノートに動きの積み上げをし，連続・発展的な追究・吟味によって生まれる動きの視点を付加するリズムダンス創りに意欲的に取り組むことができたからであると考え。

③ あじわう段階（9／9時間）

この段階のねらいは，動きの視点をもって創ってきたリズムダンスを友達に発表できるリズムダンス・レボリューション21（発表会）を行ない，動きの広がりや自己評価，相互評価し，リズムダンスの楽しさを味わうことである。子供たちは友達とリズムダンスを自分で創って踊る楽しさを味わっていた。（写真⑨）



【写真⑨ リズムダンス・レボリューション21】

考察③

単元を通してリズムダンス創りの視点をもち，追究・吟味するなかで動きをイメージし広げながら，動きの視点を付加することができた。（資料④）そして，自分の動きを見つめ更新していこうとする意欲をもたせることができた。これは，動きの視点を位置付けたリズムダンス創りの活動が有効であったと考える。

4 全体考察

本単元の学習を通して子供たちは，友達と工夫しながらリズムダンス創りにかかわることで動きの視点を

最初，難しそうだなぁと思っていました。けれどどんな動きがいいか話し合ったり音楽をよく聞いてリズムを取ったりいろいろなことができるようになって大好きになりました。
一つ一つの動きを決めたり，どんな隊形でしょうとか一人一人の意見をまとめて創ったりできたところが協力できたところだと思います。「その動きいいね」と取り入れられたのはグループの工夫だと思いました。

【資料④ 活動を振り返っての感想】

把握し，自分の動きに付加し，イメージした動きを広げる（創造性・人間性）ことができた。また，子供の作文（資料⑤）より，自己の活動（行い方・動き）を振り返り，自らリズムダンスを創っていく主体性の育ちが現れていることから，自ら運動へのかかわりを生み出し，動き，行い方，そして運動への意識の更新を行うことができたと考え。これは，リズムダンス創りの比較，表現，発表活動や動きの視点の位置付けが有効であったからだと考える。課題としては，高学年表現運動における比較，表現，発表活動ならびに単元構成の有効性のさらなる追究である。

自然のきまりを思考する楽しさを味わう理科学習

主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う理科学習の役割・立場

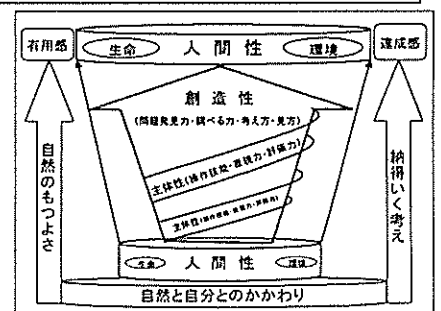
私たちは、自分たちの生活をより便利で快適なものにするために、自然事象を追究し、科学技術の振興に力を注いできた。しかし、子供たちはというと、日々変化する生活環境を受容する姿は見られても、自らの生活を創造するという能動的な姿は見られなくなっている。その結果、自然のもつ素晴らしさや偉大さを自ら発見したり感得したりする事に喜びを感じ、得られたことを積極的に自分の生活に生かそうとする姿も減少してきている。また、新指導要領では、自然とのかかわりの中から、科学的な見方や考え方を構築していくといった直接体験を通した問題解決活動が重要視されている。

このような現状の中、豊かな人間の育成のために理科が担う役割の中心は、身の回りの自然事象に対して問題意識をもち、その問題を解決するために論理的かつ柔軟に思考し、自分の考えを検証するための実験や観察を駆使しながら、事実を基に的確に判断する力を育てることである（創造性の育成）。その過程で、自分の考えを表現したり見直したりする力が身につく（主体性の育成）、自然とのかかわりの中から自然を愛する心情が育まれていくと考えるからである（人間性の育成）。

○ 自然のきまりを思考する楽しさを味わう理科学習とは

自然事象に対して積極的にかかわりをもち、自分の考えと自然事象の様子とを重ね合わせながら納得いく考えを創り出し、自然事象がもつ性質やきまりの素晴らしさ・偉大さなどを、自分の中で意味づけたり価値づけたりすることで、学習の有用さや達成感を感じることである。

子供たちがもつ自然に対する価値観は一面的で主観的なものが多く、自然と共に生活しているという意識は薄い。そこで、それらの一面的な見方や考え方を、科学的な根拠を基に、多面的・総合的に高めることが大切になってくる。そのためには、自然のことをもっと知りたいという思いを基盤に、自然事象から問題を見出す力、自分の考えを他者の考えと比較しながら的確に判断していく考え方、自然事象を様々な角度からとらえる見方、目的に応じて調べる力（創造性）を育てることが必要である。また、その創



【自然のきまりを思考する楽しさを味わう理科学習】
造性を発揮するためには、実験器具を操作する力、自分の考えや事実をわかりやすく表現する力、得られた結果から考えを見直す力（主体性）が大切になってくる。そして、これらの能力を駆使する過程で自然を愛する心情（人間性）が高められ、その結果、学習の有用さや達成感を味わうのである。

このような3つの特性を相互に働かせ伸長していくためには、自然と自分とにかかわりを意識させることが大切であると考えられる。それは、追究することに目的をもたせるとともに価値を抱かせるためである。そして、その目的的な活動の中に、自然のきまりを思考する子供の姿が見られると考える。

○ 自然のきまりを思考する楽しさを味わう子供とは

身近な自然事象に問題意識を抱き、自分の持てる力を十分に発揮しながら問題を解決し、事実から得られた見方や考え方をもとに自然に対する自分のかかわり方を考えようとする子供の姿である。

- 自然事象の性質やきまりに対して問題意識をもち、目の前の現象を自分の考えに即した観察・実験の結果を基に客観的に解釈し、様々な視点からとらえることができる子供（創造性）
- 見出した問題に対し、解決の見通しに沿って粘り強く追究できる子供（主体性）
- 自然界を支える環境や生命に対して畏敬の念をもつと共に、自然の中で生活していることの意味や価値を見出すことで、学習したことのよさを感じ得ている子供（人間性）

【理科学習で大切にする資質・能力の重点化・系統化】

学 年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
創造性 (科学的に思考し確かめる力)	自然の事物・現象を比較して共通点や差異点を整理することで問題を見出すことができる。	自然の事物・現象に含まれる変化の要因を現象面から抽出し問題を見出すことができる。	自然の事物・現象の変化の要因を量的・時間的側面から推測し問題を設定することができる。	自然の事物・現象を多面的にとらえ、変化の要因に対し多視点から問題を設定することができる。
	観察・実験によって得られた事実を自分の考えに照らし合わせて判断し、自分の生活と関係づけながら物質の性質や特徴に対する考えを広げることができる。	観察・実験の結果に対する自他の考えを比較検討しながら、自然事象の性質や変化、規則性に対する考えを客観的で生活に生かせるものへ広げることができる。	観察・実験の結果を筋道立てて整理し、仮説や方法の適切さを見直しながら論理的に解釈し、生命の連続性や変化の規則性に対する考えを深めることができる。	観察・実験の結果を分析的に見つめ、ひとつの事象を多面的に解釈し、事象の相互関係や規則性に対する考えを総合的なものへ深めることができる。
	自然事象に見られる共通性や相互の関わりを自分なりにとらえることができる。	自然事象の変化とそれに関わる要因を関係づけながらとらえることができる。	自然事象を量的変化や時間的変化に着目してとらえることができる。	自然事象の変化や働きをその要因と関係づけて多面的にとらえることができる。
主体性 (自己表現力、観察力、思考力)	目的に応じて比較する対象を絞りながら観察や実験の方法を考えたり、考えた方法を正しく行ったりできる。	自分の考えを検証するために、対象を選定したり、方法を考えたりして継続的に観察・実験を行い、客観的な結果を得ることができる。	目的に応じて条件を制御しながら計画的・定量的に観察・実験を行い、より正確に結果がでる方法について考えることができる。	目に見えない質的变化や時間的な変化に対して観察・実験を企画し、計画的・多面的な観察・実験を実行することができる。
	観察・実験の際に用いる器具を使用目的に合わせて迅速に準備することができる。	観察・実験の際に用いる器具を正しく、安全に操作することができる。	観察・実験の際に使用した器具をきちんと片付けることができる。	
	自分の見通しに沿って調べた事実を、絵や文や表を用いて忠実に記録することができる。	自分の見通しに沿って調べた結果を、表やグラフを用いながら簡潔にまとめることができる。	実証的に調べてきたことを、変化の様子が分かるように数量的な処理を用いてまとめることができる。	質変化や時間的な変化をモデル図や記号を用いながら論理的にまとめることができる。
人間性 (自己理解力、観察力、思考力)	自分の考えと得られた事実を比較し、自分の追究方法の不十分な点について気づくことができる。	観察・実験の結果を基に、自分の方法や結果に対する見通しの不十分な点に気づくことができる。	数量的な結果から考えの妥当性を振り返ると共に、条件統制の観点から方法を見直すことができる。	多面的な視点で観察・実験の結果を解釈し、自分の仮説や追究方法を見直すことができる。
	身近に見られる植物や動物に対して、愛着をもつことができる。	動植物の生と死を実感し、生命を尊重し生物を愛護する態度をもつことができる。	生命の誕生や成長に対し、生命の神秘さを感じ、生命を尊重しようとする態度をもつことができる。	生物のもつ体の仕組みの巧みさから生命の素晴らしさを感じるとともに、生命と環境との関わりから自然を大切にして、自然のエネルギーを有効に活用しようとする態度をもつことができる。
	自然事象のきまりや性質を積極的に生活に生かそうとすることができる。	自然事象のきまりや性質の不思議さや大切さを感じ、生活に有効に活用しようとするすることができる。	自然の普遍的な原理から、身の回りに起きている事象を、よりよくしていこうとすることができる。	

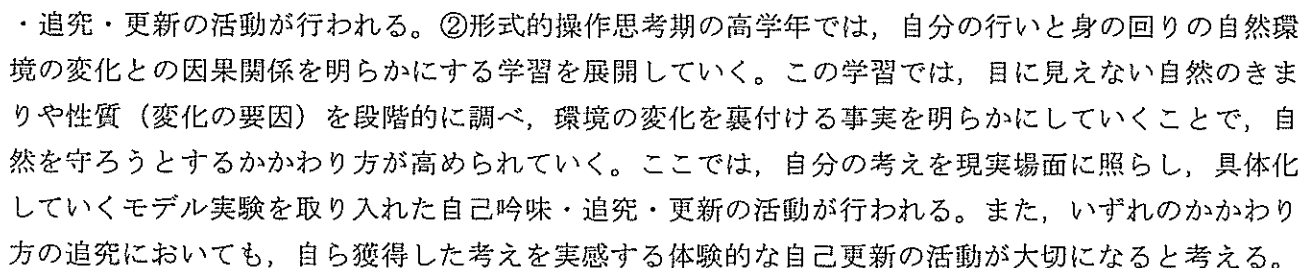
理科部 野口信介

(1) 自然とのかかわり方を追究するとは

私たちは自然の性質やきまりを生かして生活をしているが、そのかわり方を見ると、「電池は便利だ」と言いながら、使用用途に応じたつなぎ方をせずに不効率な使い方をしていたり、使い終わってもスイッチを切らずにエネルギーを無駄に消費したりしている姿を見かける。このような姿から、自然と自分のかかわりには、①自然環境に支えられて生活していること（環境作用）②自分の生活によって自然環境が変化する可能性があること（環境形成作用）という2つの側面があると考えられる。

(2) 自然とのかかわり方を追究する学習の展開とは

子供の発達段階に応じて追究するかわり方と学習像には違いが出てくると考える。①具体的操作思考期の中学年では、自然事象との直接体験から生じた驚きや疑問を大切にしたい学習を展開していく。この学習では、出合った対象に含まれる現象面のきまりや性質をいくつかの観点で調べ、得られたきまりを統合していくことで、自然の性質やきまりを有効に活用するというかわり方が高められていく。ここでは、調べる観点を見出し、事実と事実を比較しながら行う自己吟味



本研究で期待する子供の姿を学習過程にそって考えると、以下のような姿が考えられる。

- 169 -

2 学習の具体的構想

(1) 自然とのかかわり方を追究するための中学年・高学年における教材化の視点

自然とのかかわり方を意識しながら科学的な追究を行うために、中学年では自然のもつよさを感じることができる対象を、高学年では人が自然に与える影響を考える対象を選択し教材化していく。

- | |
|---|
| ① 日常生活の中で経験があるか、これから経験する事が可能なものであること（日常性） |
| ④ 自然がもつ偉大さやすばらしさを容易に体感できるもの |
| ⑤ 自然の性質やきまりを生活場面に活用し、その効果を実感できるもの |
| ⑥ 子供にとって身近な生活環境の問題として意識できるもの |
| ② 子供たちの手で追究方法を考え、繰り返し追究することが可能であること（活動性） |
| ④ 比較する観点を絞り、体験的に比べながら原理や法則を明らかにすることができること |
| ⑥ 実際の現象をモデル化でき、具体的にその仕組みをとらえることができること |
| ③ 得られた事実から追究対象へのかかわり方を考える場面を設定できること（価値性） |

(2) 自然とのかかわり方を追究する活動の構成と支援について

自然とのかかわり方を意識させ問題を見出す活動、自然事象を目的をもって調べる活動、環境作用又は環境形成作用から生活を見直す活動といった3つの段階で活動を構成し、支援を行う。

	見出す段階（記述・映）	調べる段階（自己追究・吟味・更新）	見直す段階（記述・類）
主 な 活 動 と 内 容	生活とかかわりのあるある自然事象に対する解釈を話し合い、追究問題を設定する。 ○生活と自然事象のかかわりの意識化 ○解釈の比較による問題の焦点化	自然の原理・法則を追究し、結果について話し合う。 自分の見通しを確かめる観察・実験の計画 調べる観点を絞った観察・実験の実施 一般化を図る話し合い 方法の焦点化 フィードバック 矛盾	得られた考えを生活場面に適用しながら今後の自分の生活について考える。 ○得られた考えの生活場面への適用 ○環境作用又は環境形成作用といった自然環境とのかかわりの認識の深まり
支 援	○生活事象から自然事象を取り出すための体験の場の設定 ○自然事象と生活のかかわりを感じるための資料の提示 ○事象に対する考えを比較する場の設定	○観察・実験の方法が仮説検証になっているか、比較する対象の選別、仮説を裏付ける要因の抽出、比較する際の条件の統一の観点からの助言 ○自信を持って追究できるようにグループによる追究を行うなどの学習形態の工夫 ○得た結果を多視点で考察するために、違う考え方や方法をしているグループ通しの交流の場の設定 ○追究過程に対する肯定的な評価	○生活に生かせることを実感する体験の場やものづくりの場の設定 ○自然事象が生活に生かせることや、その結果自然環境に与える影響があることを感じるような事例の提示や体験の場の設定

(3) 自然とのかかわり方の違いによる中学年と高学年の活動の違い

子供の発達段階によって、各段階における活動のねらいや具体的な手立てを設定していく。

		見出す段階	調べる段階	見直す段階
中 学 年	ね ら い 手 立 て	自然事象のもつよさに対する気づきと問題設定 ※自然のよさを感じる体験活動 ※追究内容を焦点化するための2元表の提示（要因の取り出し） 追究対象の選定	自然をより有効に活用するための自然（性質やきまり）の追究 ※比較実験の結果を数値化して、客観的に結論づけていく交流活動の設定→再実験へ向かう交流 追究対象・方法の広がり	自然がもつきまりや法則の生活への適用（よさの実感） ※自然事象の性質やきまりを工夫として適応し、学んだよさを実感する体験活動 追究結果の統合
		低	自然と自分のかかわり方に対する認識の深まり	高
高 学 年	ね ら い 手 立 て	生活上の問題と自然事象との関係づけと問題設定 ※環境問題を意識する資料提示 ※環境問題に関わる自然事象の性質やきまりを具体化させるためのモデル実験の場の設定 追究対象の選定	環境問題に直接関係がある自然（性質やきまり）の追究 ※現実に行き起きていることをイメージしながら確かめていくためのモデル実験の実施→時間的・空間的な認識を深めるモデル実験 追究対象・方法の絞り込み	自分の行いから起きる環境問題の検証（働きかけの見直し） ※自分の行為が与える影響を実感する擬似的な体験活動 ※これからの行いについて考える調査活動 追究内容の深化

3 指導の実際と考察

3年－(1) 単元名 第3学年 光といっしょに生活しよう

3年－(2) 本単元の考え方

本単元は、日光の直進性や集光による温まり方の変化日光に当たったものの温まり方などを各々の見通しにそって納得いくまで追究し、生活に光を活用することのよさを実感することで日光の性質を生活に有効に活用していこうとする態度を育むことをねらいながら、次の3つの特性を伸ばしていく。

- ・湯沸かし体験の事実から問題を設定し、日光の性質に対する自他の考えの違いを吟味しながら目的に応じた実験を行い、科学的な見方や考え方へと高めていく資質や能力 (創造性)
- ・水温上昇が違う理由に対して自分の考えを明確にもち、自分の考えと観察や実験の結果の比較から、追究方法の不十分な点を明確にししながらさらに調べていこうとする資質や能力 (主体性)
- ・日光のもつ性質が私たちの生活に多くの恵みをもたらしていること(環境作用)を実感し、日光の性質を生活に有効に活用していこうとする自然を愛する心情 (人間性)

3年－(3) 目 標

- 光の進み方やものの温まり方について、自分の見通しにそって繰り返し追究することで、光の性質についての考えをもち、生活に役立てようとする態度をもつことができる。

3年－(4) 計 画 (11時間)

	見出す (2時間)	調べる (6時間)	見直す (3時間)
活動と内容	1 日光の性質を生かした湯沸かし体験を行い、水の温まり方の違いに対する追究問題を設定する。 ○水温の違いに対する問題設定	2 水の温まり方が違う理由について、観点を決めた比較実験を基に話し合う。 ○ ものの性質による違い ○ 光性質やあたり方による違い ○ 2つの要素を総合して考えること	3 光の性質を適用した体験活動を行い、光に対する自分のかかわり方を話し合う。 ○ 環境作用に対する認識の深まりと自分の生活の振り返り
手立	※光の当たり方とものの性質の違いに気づく、湯沸かし体験と2元表を活用した交流活動	※比較実験の結果を数値化して表にまとめ、その数値の妥当性を考える交流活動の位置づけと再追究の場の設定	※学習したきまりを生かすことで、自然がもつよさを感じ取れるような体験活動の場の設定

5年－(1) 単元名 第5学年 私たちの生活と水に溶けたものの行方

5年－(2) 本単元の考え方

本単元では、自分たちが安易に捨てているものの行方に着目し、ものが水に溶けるときの規則性や水の温度や量による物の溶け方を定量的に調べながら、水溶液が環境に影響を与えていることをとらえ、環境に対する自分の行い方を考えようとする態度を育みながら、次の3つの特性を伸ばしていく。

- ・目に見えない水溶液中の溶質と水質汚濁を関係づけて問題を設定し、水溶液の性質を時間的・空間的な状況を加えた実験によって科学的な見方や考え方へと高めていく資質や能力 (創造性)
- ・目に見えない現象に対する自分の考えを絵図等で表現し、実験結果と自分の考えを比較しながら考えや方法の妥当性を検討すると共に、不十分な点を明らかにしていこうとする力 (主体性)
- ・私たちが生活する上で捨てているものが自然環境に影響を与えていること(環境形成作用)を実感し、自然環境に対して優しい行い方をしていこうとする自然を愛する心情 (人間性)

5年－(3) 目 標

- ものが水に溶けるときのきまりや水溶液の性質を定量的に調べ、調べた結果と水質汚濁とを関係づけながらこれからの自分の生活の仕方について考えることができる。

5年－(4) 計 画 (15時間+課外)

	見出す (3時間)	調べる (10時間)	見直す (2時間+課外)
活動と内容	1 土の上のものに水をかけたときの様子や土の中の様子をモデルを用いて調べ、追究問題を設定する。 ○見えない現象からの問題設定	2 水に溶けたものが、水溶液中でどうなっているか、実験によって確かめる。 ○ ものが水に溶けるという意味の把握 ○ 定量的な実験による飽和量の理解 ○ 物質保存という普遍的な原理の理解	3 水溶液による環境への影響や、身の回りの現状を実験によって確かめる。 ○ 環境形成作用に対する認識の深まりと生活の振り返り
手立	※福岡市の水質汚濁の資料 ※具体的なイメージを持たせるためのモデル実験	※具体的な場面を意識しながら行うモデル実験の位置づけと定量的に測定した客観的な根拠を基にした交流の場の設定	※水溶液が環境に与える影響を感じる擬似的な体験活動や身近な川や池の水質調査の活動

3年-(5) 指導の実際【第3学年 光といっしょに生活しよう】(具体的な体験から抽象的な思考へ発展する追究活動)

① 日光のもつエネルギーを感じ、日光の性質に対する問題を見出す段階(1~3/11時間)

ここでのねらいは、日光のもつエネルギー(環境作用)に気づき、光の性質や温められるものの性質に問題意識をもたせることである。そこで、太陽熱温水器を基に太陽の熱を利用してお湯を沸かす体験活動を行い(資料①)、得られた結果を2元表で表しながら、気がついたことを交流していった。3年生段階では、温度変化の要因抽出が難しいために、2元表の縦軸にテープを貼り、表を縦に見ることで「ものの性質の違い」、横軸にテープを貼り、表を横に見ることで「光のあたり方」が要因としてとらえられるようにしていった。この活動から子供たちに光に対する問題が生じてきた。

【資料① 湯沸かし体験の様子と2元表を用いた交流によって出てきた疑問】 (自己吟味)

アルミを張った傘と黒いペットボトルは水温が上がる

黒い傘とアルミをはったペットボトルは変わらない

① アルミを張った傘
② そのままのペットボトル
③ 黒い紙を張ったペットボトル
④ アルミを張った傘
⑤ 黒い紙を張った傘
⑥ アルミを張った傘
⑦ そのままのペットボトル
⑧ アルミを張った傘
⑨ そのままのペットボトル
※それぞれに①~⑨のペットボトルをつけて行う。

M児「同じペットボトルなのに、水の温度の上がり方が違うのが不思議です。」
Y児「同じ傘を使っているのに水の上がり方が違うのが不思議に思いました。」

考察①

この体験活動は、水を温めることができるという日光の力(エネルギー)を感じさせると共に、温め方によっては温度の上がり方が違うということをとらえさせ、光の性質やものの性質に対する問題意識を抱かせる上で有効であった。また、2元表を用いて交流させたこと(資料①)は、追究していく観点(光の性質・ものの性質)を明確にし、問題を焦点化する上で有効であった。(創造性)

② ものの性質や光のあたり方による温まり方の違いを比較して調べる段階(4~9/11時間)

ここでのねらいは、光の性質やものの性質に対する自分なりの考えを構築していくことである。そのため、自分の考えを実証する方法を吟味するグループを編成し、結果を客観的に判断するために、温度計の数値を比較しながら追究させていった。まず、光を当てるもの(対象)による温まり方の違い(光の吸収・反射・透過)について追究していった。(資料②)

【資料② M児の考えと追究の流れ】 (自己追究) (自己吟味) (自己更新)

【M児の考え】
1番は光を吸収するもの、2番は光を反射するもの、3番は光を通すものだと思う。
それは、当たった光が逃げる逃げないの違いがあると思うからです。(自己吟味)

各自、光を通すものや反射するものを使って調べる。

それぞれに得られた結果を表にまとめて交流する。

考えの見直し
方法の見直し

比較するために実験方法をそろえて再実験をする。

【M児のまとめ】
ほかの班と結果が違ったので、もう一度測ると、予想と違い反射するものと通すものは同じだとわかってびっくりしたけど、方法がわかってよかったです。

このようにして、ものによる温まり方の違いをとらえたM児は、光のあたり方(集光)による水温上昇の違いについて、導入時の傘のモデルの形をヒントに予想し、追究していった。(資料③)

【資料③ M児の考えと追究の流れ】 (自己吟味) (自己追究) (自己更新)

【M児の考え】
傘は丸くなってからこっているようだから、光が逃げないと思います。

① アルミを張った傘
② アルミを張った傘
③ アルミを張った傘
④ アルミを張った傘
⑤ アルミを張った傘
⑥ アルミを張った傘
⑦ アルミを張った傘
⑧ アルミを張った傘
⑨ アルミを張った傘
⑩ アルミを張った傘
⑪ アルミを張った傘
⑫ アルミを張った傘
⑬ アルミを張った傘
⑭ アルミを張った傘
⑮ アルミを張った傘
⑯ アルミを張った傘
⑰ アルミを張った傘
⑱ アルミを張った傘
⑲ アルミを張った傘
⑳ アルミを張った傘
㉑ アルミを張った傘
㉒ アルミを張った傘
㉓ アルミを張った傘
㉔ アルミを張った傘
㉕ アルミを張った傘
㉖ アルミを張った傘
㉗ アルミを張った傘
㉘ アルミを張った傘
㉙ アルミを張った傘
㉚ アルミを張った傘
㉛ アルミを張った傘
㉜ アルミを張った傘
㉝ アルミを張った傘
㉞ アルミを張った傘
㉟ アルミを張った傘
㊱ アルミを張った傘
㊲ アルミを張った傘
㊳ アルミを張った傘
㊴ アルミを張った傘
㊵ アルミを張った傘
㊶ アルミを張った傘
㊷ アルミを張った傘
㊸ アルミを張った傘
㊹ アルミを張った傘
㊺ アルミを張った傘
㊻ アルミを張った傘
㊼ アルミを張った傘
㊽ アルミを張った傘
㊾ アルミを張った傘
㊿ アルミを張った傘

鏡を傘状にして、鏡一枚の時と温度や様子を比較して考えを検証する。

【M児のまとめ】
板を傘と同じ様に並べると、反射した光が黒い紙に重なり合い、たくさん温度が上がっていたので、傘のように面が多いほど反射した光がペットボトルに重なり合い、温かくなる。

考察②

M児は、資料②③にあるように事象と事象の違いや共通点を比較するための方法を考えたり変更したりしながら実験を繰り返し行い、得られた結果を客観的に判断していくことができた。これは、得

られたことを数値化し根拠を明確にした討議が有効に働いたからだと考える。(創造性・主体性)

③ 自ら構築した考えを適用し、自分の生活を見直す段階(10～11/11時間)

ここでのねらいは、得られた考えを他に適応することで見方や考え方を振り返ると共に、太陽光がもつエネルギーの偉大さを実感し、自分の生活を見直すことである。そこで子供たちの願いを基に、太陽エネルギーを実感する活動を行っていった。(資料④)

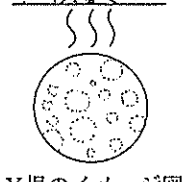
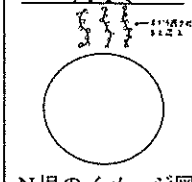
【資料④ 太陽エネルギーを実感する活動と学習後のM児の感想】 【子供の願い】 ①アルミを張った傘でもっと長い時間温めて温度を上げてみたい。 ②クラス全員で光を集めて、黒いものを温めてみたい。	 【傘を使った温水実験】【クラス全員の光集め】 <80℃まで上昇> <70℃まで上昇>	私はこれまでの学習で、光の性質とものの性質について調べました。そして、みんなで鏡を使って黒い段ボールを温めるとすごいことに70℃まで上がりました。またアルミを張った段ボールで光を集めて水を温めると1時間で80℃まで上げることができました。太陽の光でこんなに温度上がるのはすごいと思ったし、太陽の光はとてすばらしい力があると思いました。 そして、太陽の光をうまく利用すれば、このようにすごい温度まで上げられることができるので、生活でもこのことを利用していけることができると思います。
---	---	--

考察③

この活動を通して、M児のように太陽光のもつ力の偉大さを実感するとともに、光の性質を活用すれば生活に生かせるという意識(人間性)をもたせることができた。このことは、70℃や80℃という子供たちの予想を超える温度の上昇を体験させたことが有効であったからだと考える。

5年一(5)指導の実際【第5学年 私たちの生活と水に溶けたものの行方】(抽象的な思考を具体場面に置き換える活動)

具体的操作思考期の第3学年では自然事象を五感を通して直接的に追究していくのに対し、形式的操作思考期に当たる第5学年では、見えない対象に対し自分のイメージをもとに追究していくことが可能になる。本単元では、地下水汚染と自分の生活との因果関係を現実の場面を意識したモデル実験を取り入れながら追究し、物質保存の原理に迫る学習を展開していった(資料⑤、資料⑥)。

【資料⑤ 見出す段階におけるモデル実験の様子とY児の考え】				
 地球モデルの上に食塩や洗剤等の粉を置き水をかける	 土を入れた地中モデルの上に粉を置き、水をかける。	 地中モデルの下にあけた穴から出てくる水を観察する	 地中モデルの土を出し、土の中の様子を観察する	 食塩はほとんど残って出た水はきれいだけれども、食塩は水に溶けて目に見えない粒になって本当はあると思います。
【資料⑥ 調べる段階におけるY児の考えとN児の考えをもとに追究を行っている様子と学習後のY児の感想】				
 Y児のイメージ図	 N児のイメージ図	 地中モデルから出てきた水溶液を濾過して土をとる	 濾液を蒸発乾固し、中に粉が含まれているか調べる	 私は地下水がどのように汚れているかわからなかったけど、溶けた水の中に、まだ物が残っていることがわかり、どんどん汚れていく水にびっくりしました。

考察④

この追究では、自分の考えを確証するための実験を工夫しながら、私たちの生活が環境に与える影響に対する認識を深めている姿が見られた(人間性)(資料⑥)。これは、土の中という見えない状況に対し、具体的なイメージをもたせる地球・地中モデルが有効であったためだと考えている。(創造性・主体性)

4 全体考察

思考することの楽しさを味わわせていくために、3年生では環境作用、5年生では環境形成作用を視点に学習を行ってきた。その際、3年生では、得られた事実を2元表を用い比較しながら追究する活動、5年生では、現実場面に置き換えながら追究する活動を位置づけていった。このことで、自分の考えを意識しながら目的をもって追究でき、学習することの価値や意味を感じられたと考える。

共生社会を拓く社会科学学習

社会科部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成をめざす社会科の役割

社会科における豊かな人間とは、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を身に付けた人間である。具体的には、次の3つの特徴をもつ。第1に、民主的、平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自ら進んで社会にかかわろうとする人間である（主体性）。第2に、社会生活の様々な場面での課題や国家・社会の様々な問題の解決に向けて、多面的に考えたり、公正に判断したりする人間である（創造性）。第3に、自分や他者の人格を互いに尊重したり、社会的義務や責任を果たそうとしたりする人間である（人間性）。上記の人間が求められる背景には、我が国の「公の崩壊、私の蔓延」と言われる状況がある。人間や自然や文化とのかかわりを忘れ、自己中心的な生き方を求める個人には、市民社会の一員としての市民、国家の成員としての国民、国際社会に生きる日本人という性格を併せもつ公民としての自覚が乏しい。21世紀を迎えた今こそ、民主的で平和的な国家・社会の実現を目指す日本人としてのアイデンティティをもちながら、それを土台にして、諸外国の人々や異なる価値観をもつ人々と共に生きる社会を拓く力を育むことが求められると考える。

○ 共生社会を拓く社会科学学習とは

人間・自然・文化との調和を図る社会の実現を願う人々の営みとのかかわりから生じた課題を解決するために、願いや働き、役割などを多面的に考えたり、公正に判断したりして、自らも調和的な社会の実現に向け、社会的義務や責任を果たそうとする活動のことである。

共生社会とは、人間・自然・文化との調和を目指し、公民としての個を確立する生き方が求められる社会の総称である。具体的には、次の3つの様相があると考えられる。第1に、人間と人間との社会的な連帯を目指し、価値観の異なる人々や高齢者や障害者と相互に協調しあう福祉型社会である（人間と人間との共生）。第2に、人間と自然環境との調和的な生き方を旨とし、健全な生態系や自然の循環を保護したり、創造したりする資源循環型社会である（人間と自然との共生）。第3に、人間と歴史や伝統・文化との調和を目指し、多様な価値観を尊重しあう多文化型社会である（人間と文化との共生）。また、共生社会を拓くとは、人間・自然・文化との調和を図る社会の実現に向けて、正しい判断をしたり、行動をしたりすることができる資質・能力を発揮することである。これらの資質・能力は、①社会的事象に進んでかかわる関心・意欲や観察・資料活用・表現力、②願いや働きを公正に考えたり、判断したりする社会的思考力・判断力や社会生活についての理解、③地域社会や国土・歴史に対する愛情をもち、自らも社会生活に適応しながら、人間・自然・文化との調和を図る地域社会や国家の発展に貢献しようとする態度、などで構成される。

○ 共生社会を拓く子供とは

- 社会生活の様々な場面での課題や国家・社会の様々な問題に対して、観察・資料活用・表現力・能力を発揮して、進んで解決することができる子供（主体性）
- 社会とのかかわりのなかで自らの生活が成り立つことを実感的にとらえ、社会生活の様々な場面での課題や国家・社会の様々な問題の解決に向けて、多面的に考えたり、公正に判断したりすることができる子供（創造性）
- 他者の人格を互いに尊重しながら、人間・自然・文化と調和する民主的・平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもって、社会的義務や責任を果たそうとする子供（人間性）

共生社会を拓く社会科学学習の具現化に向けては、次頁に示す発達段階に応じた資質・能力を割り出すとともに、各学年に応じた内容配列の考え方や単元構成を工夫することが大切であると考えられる。

【 共 生 社 会 を 拓 く 資 質 ・ 能 力 の 系 統 】

学 年		中 学 年	第 5 学 年	第 6 学 年
対 象		(人間と人間)		→
		(人間と自然)		→
		(人間と文化)		→
主 体 性	関 心	地域社会への関心	産業国土への関心	歴史政治外国への関心
	観察力	自分たちの地域の社会的 事象を意欲的に観察調査する。	我が国の産業や国土に関 する社会的事象を具体的に 調査する。	我が国の歴史と政治及び国 際理解に関する社会的事象を 具体的に調査する。
	資 料 活 用 力	地図（絵地図）や各種の 具体的資料を効果的に活用 して調べる。	地図や統計などの各種の 基礎的資料を効果的に活用 して調べる。	地図や年表などの各種の基 礎的資料を効果的に活用して 調べる。
	表現力	調べたことを工夫して表 現する。	調べたことを目的に応じ た方法で表現する。	調べたことを目的に応じた 方法で表現する。
	思 考 力 判 断 力 の 方 法	比較 観点を発見して、比較で きる。	それぞれの特徴をとらえ ながら比較できる。	部分と全体を対比して、異 同をとらえることができる。
		関連 具体例を発見してつなげ ることができる。	想像してつなげることが できる。	事象の異同を見極めてつな げることができる。
		条件 資料をもとに、結びつき を発見できる。	様々な資料をもとに結び つきの根拠を明らかにでき る。	様々な条件を結びつけるこ とができる。
		因果 原因と結果に目を向ける ことができる。	間接的な因果関係に目を 向けることができる。	原因・結果の分析ができる。
	創 造 性	発展 変化や発展に目を向ける ことができる。	中心をとらえながらく ることができる。	部分と全体を見極めて全体 をくることができる。
		社会的 内 容 思考力判断力 ○ 地域社会の社会的事象 の特色や相互の関連など について考える。 ・ 市（区、町、村）の中 の異なる場所や県（都、 道、府、県）内の他地域 との比較などによって人 々の生活の特色を明らか にすることや、地域の人 々の生活と自然環境との 関連、願いを実現してい く地域の人々の工夫や努 力、協力と生活の維持と 向上との関連、地域の人 々の生活や産業と国内の 他地域との関連などにつ いて考える。	社会的 内 容 思考力判断力 ○ 社会的事象の意味につ いて考える。 ・ 我が国の農業や水産業 における食料生産にかか わる産業、工業生産にか かわる産業、通信などの 産業が国民生活の維持と 向上に役立っていること を考える。 ・ 国土の環境保全や森林 資源の重要性を国民生活 と結びつけて考える。	社会的 内 容 思考力判断力 ○ 社会的事象の意味をより 広い視野から考える。 ・ 歴史上の主な事象にか かわる先人の業績や代表的 な文化遺産についてそれ らが我が国の国家社会の 発展に果たした役割を考 える。 ・ 国民生活と民主政治の 関係について政治は、国民 生活の安定と向上に役立 っていることを考える。 ・ 我が国と関係の深い国 の人々の生活や国際社会 における我が国の役割に ついて、国際社会の一員 としての立場から平和な 国際社会の実現のための 役割を考える。
		空間 ○ 射影的空間認識 → 座標系をもとにとらえる。	空間 ○ 幾何学的空間認識 → 距離尺度をもとにとらえる。	
	認 識	時間 ○ 今昔の違い ○ 移り変わ り ○ 歴史的因果関係 がわかる。 がわかる。 をとらえる。	時間 ○ 時代構造 ○ 歴史の発展 がわかる。 がわかる。	
		内 容 ・ 地域の産業や消費生活 の様子、人々の健康な生 活や安全を守るための諸 活動について理解できる。 ・ 地域の地理的環境、人 々の生活の変化や地域の 発展に尽くした先人の働 きについて理解できる。	内 容 ・ 我が国の産業の様子、 産業と国民生活との関連 について理解できる。 ・ 我が国の国土の様子に ついて理解できる。	内 容 ・ 国家社会の発展に大きな 働きをした先人の業績や 優れた文化遺産について 興味関心と理解を深める。 ・ 日常生活における政治 の働きと我が国の政治の 考え方及び我が国と関係 の深い国の生活や国際社 会における国の役割を理 解できる。
人 間 性	自 分 知	地域社会の一員としての 自覚をもつ。	国土の保護創造に努める 一員としての自覚をもつ。	地球市民として生きる日 本人の一人としての自覚 をもつ。
	態 度 人 間 知	地域社会に対する誇りと 愛情をもつ。	我が国の産業の発展に関 心をもつ。 環境の保全の重要性につ いて関心を深めるととも に国土に対する愛情をもつ。	我が国の歴史や伝統を大 切にし、国を愛する心情 をもつ。 平和を願う日本人として 世界の国々の人々と共に 生きていくことが大切で あることを自覚できる。

国土への愛情を深める学習の展開

社会科部 猿 樂 隆 司

1 主題の意味

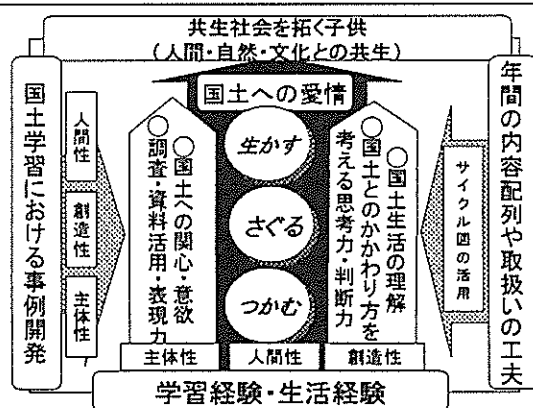
(1) 国土への愛情を深める学習とは

国土への愛情とは、国土とのかかわりで営まれる人間の諸活動に対する関心をもち、見方・考え方を高めながら、国土の上で生きる一員として、国土とのよりよいかかわり方について考え、実践する態度のことである。国土への愛情を深める学習とは、国土の上で生きる一員として、国土とのよりよいかかわり方について考え、実践できるように配列された内容を、調べ方や表現の仕方などを工夫しながら獲得していく活動である。

(2) 国土への愛情を深める学習の展開とは

配列の仕方や取り扱い方が工夫された第5学年の内容を、子供自らが調べ方や表現の仕方などを工夫しながら探究し、国土とのかかわりで営まれる人間の諸活動に対する関心を高め、国土の上で生きる一員として、国土とのよりよいかかわり方を考えたり、実践したりする心情を高める活動のことである。

ここでいう配列を工夫するとは、「国土への愛情」に帰納する年間指導計画の中心概念を、国土の利用と創造にかかわる人間の営みの理解とし、各々の学習内容の中心概念を国土への適応、国土への対応、国土への保護・創造という面から構成して配列することである。また、取り扱い方を工夫するとは、上記の3つの内容理解において、特に国土への対応における第1次産業と第2次産業を国土の環境保全の観点から内容を重点化することである。これらの工夫によって、移行・統合された国土学習と産業学習の相互の関連を図り、新たに「国土学習」として展開し、子供自らが国土への適応・対応・保護・創造する上で生きて働く応用性、転移性のある知識をもち、国土への愛情を一層深めることができると考える。



【主題の構想】

国土への愛情を深める学習を展開する意義としては、次の3点を考える。第1に、自らの生活が営まれる舞台としての国土の環境の特色やよさをとらえる系統的な内容配列により、国土と自分自身とのかかわりを強める活動を生み出すことができる（自己追究）。第2に、国土の環境の特色やよさを守るために工夫や努力している人々の営みをとらえ、国土とのかかわり方をふりかえる活動を生み出すことができる（自己吟味）。第3に、自らも国土に住む一員として、国土の特色やよさを守るために協力しようとする自覚をもったり、他国の環境や人々の生活の特色やよさを尊重したりする活動を生み出すことができる（自己更新）。こうした活動によって、国土の環境と共に生きる社会を拓く資質・能力を高めることができると考える。

国土への愛情を深める学習の具体的な構想としては、次の3点を考える。第1に、国土への愛情を深める内容の配列と取り扱い方の工夫、第2に、国土の環境との共生を図る具体的事例の選定条件の明確化、第3に、国土の環境との共生を図る単元構成の工夫である。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 国土に対応したり、適応したり、保護・創造したりする人々の社会的営みと自分の生活とのかかわりから課題を見出したり、新たな考えを生み出したりすることができる子供（自己吟味）
- 望ましい国土のあり方を求める自らの課題を追究しながら、考えをつくり出すことができる子供（自己追究）
- 人々と協力する大切さを感じ、自分も国土の上で生活を営む一員であることの気付きをもとに、国土の保全に向けた自らの行為を振り返ったり、つくり出したりする子供（自己更新）

2 学習の具体的構想

(1) 国土への愛情を深める内容配列の考え方

内容配列においては、国土の環境と共に生きる資質・能力が高まるように、まず、国土に適応する様子を取り上げ、自然環境の概要をとらえる内容を位置づける。次に、産業にかかわる子供の原体験や生産の仕組みの理解を考慮して、国土を生かす様子を取り上げ、食料生産、工業生産を位置づける。この際、国土の保護・創造にかかわる内容を重点化し、一部を併せて大単元として構成して位置づける。そして、国土を瞬時に結ぶ様子を取り上げ、情報にかかわる内容を位置付ける。最後に、国土を創る様子を取り上げる（下表参照）。

主 題	国土に生きる人々 (国土への適応)	国土を生かす人々 (国土への対応)	国土を結ぶ人々 (国土への対応)	国土を創る人々 (国土の保護・創造)
対 象	○ 国土の環境に適応する営み	○ 国土を生かす生産と運輸・貿易の営み	○ 国土で情報を結びあう営み	○ 国土の環境を保全する営み
内容配列	(4) ア	(1) (4)イ, (2) (4)イ	(3) ア イ	(4) ウ
時 期	1 学 期		2 学 期	
			3 学 期	

(2) 国土学習における具体的事例の選定条件の明確化

- 空間的・精神的に身近であり、国土への適応・対応・保護・創造を目指す人間の願いや工夫・努力を進んでとらえることができること (主体性)
- 我が国の特徴的な社会問題が内包され、解決に向けて、人々の協力が求められていること (創造性)
- 国土への適応・対応・保護・創造を目指す人間の願いや工夫・努力を感動的・共感的にとらえることができ、社会問題の解決に向けた交流・提言・啓発の場や当事者からの応答ができること (人間性)

(3) 具体的事例における学習過程の工夫

国土への愛情を深める単元構成においては、次のねらいをもつ3段階で構成する。

- つかむ段階…国土に適応・対応・保護・創造する人々の願いと工夫・努力の関係や国土の特色やよさを実感したり、問題事象における影響を調べたりして課題をつかむ。
- さぐる段階…問題場面において、人間がどのような問題解決的な行為を行っているのかを追体験するとともに、国土の特色やよさを守り、生かす方途をさぐる。
- 生かす段階…国土の特色やよさを守るための方途を発信したり、実践したりして生活に生かす。

また、各段階に次の3活動を位置づけ、国土と生活の関係をとらえるサイクル図を活用する。

- つくる活動…対象と生活とのかかわりから生じた課題に対する考えをつくる活動 (自己追究活動)
- 表す活動…課題に対する自分の考えを表現し、分析する活動 (自己吟味活動)
- 見直す活動…自分の考えを交流し、付加したり、修正したり、強化したりする活動 (自己更新活動)

※ サイクル図—社会を構成する要素とそれぞれの相互の関連を保持するための働きかけを示した絵図

【具体的事例における基本的な指導の仕組み】

段 階	つ か む 段 階	さ ぐ る 段 階	生 か す 段 階
具 体 的 な 活 動 例	1 国土と自分の生活との関係について調べる。 (1) 国土環境を概観する。 つくる活動 (自己追究) (2) かかわりを調べ、表現する。 表す活動 (自己吟味) (3) 問題事象から課題をつかむ。 見直す活動 (自己更新)	2 国土を創る人々の立場に立った課題解決をする。 (1) 問題の対策を調べる。 つくる活動 (自己追究) (2) 望ましい解決策をまとめる。 表す活動 (自己吟味) (3) 解決策の再交流を行う。 見直す活動 (自己更新)	3 国土の保全を願う望ましいあり方について話し合う。 (1) 解決策の修正・提言・啓発や社会参加を行う。 つくる活動 (自己追究) 表す活動 (自己吟味) (2) 解決策を実践し、評価を得る。 見直す活動 (自己更新)
	← 子供の活動実態に応じて円環的に位置づける →		
手 だ て	※ 対象の選択の場の設定 ※ 対象別追究活動の設定 ※ 問題事象の影響調査 ※ サイクル図の活用の促し	※ 原因や対策の調査の場の設定 ※ 様々な人々 (市民・環境局・事業所) などの立場選択 ※ サイクル図の付加・修正	※ 当事者を招いた解決策の修正・提言・啓発・参加の場の設定 ※ 当事者の応答の場の設定 ※ サイクル図の自己評価の場

3 指導の実際と考察

(1) 小単元名 第5学年 ストップ ザ 福岡市の温暖化 ～つくろう！附小2001アクションプラン～

(2) 本小単元の考え方

本小単元のねらいは、福岡都市圏の大気汚染や温暖化と人々の健康や生活環境とのかかわりを進んで調べ、大気汚染や温暖化から生活環境を守るためには、市民一人一人の協力が必要であることに気づき、生活環境の保全に向けたあり方や行い方を考え、実践しようとする心情を高めることである。

本小単元は、国土への愛情を深める立場から年間の内容配列を工夫し、大単元として構成された「国土を生かす人々」の第二小単元に位置付く（要項及び年間指導計画参照）。

第二小単元として取り上げる学習対象は、福岡都市圏の大気汚染と温暖化問題である。これらを取り上げる価値は次の通りである。①自動車排出ガス等を原因とする二酸化窒素の量は環境基準を満たしておらず、気温もこの100年で約2℃上昇している。これらの問題は、社会生活において重大な影響を及ぼす恐れがあるため、問題の現状や原因、対策にかかわる調査意欲を喚起しやすい（主体性）。②福岡市は環境保護に努める市民・事業所との新たな協働体制の確立を目指している。特に、温暖化防止に対してはライフスタイルの変更や身近な活動への参加を呼びかけており、環境を保護・創造する資質・能力が発揮されやすい（創造性）。③福岡市では、「福岡市環境基本計画」を作成し、自然環境の保全や施策を着実に進めることはもとより、総合的・計画的な展開を図っている。これらの展開を図る環境局の方々の出会いにより、環境との調和を図る大切さを感じ取りやすい（人間性）。

具体的な学習内容を以下のように構成する。

- ① 幹線道路などを中心に福岡都市圏の大気汚染や温暖化などの都市・生活型公害と都市圏の人々の健康や生活環境とのかかわり、問題の原因や対策を進んで調べること
- ② 都市・生活型公害から生活環境を守るために、福岡市の環境局では、福岡環境プランを作成し、事業所や市民の協力をもとにした事業展開を行っていることをもとに、生活環境の保全に向けてこれからの市や市民、事業所の協力の仕方や自らの生活様式の改善の仕方考えること
- ③ 大気汚染や温暖化問題を防止するため、市民一人一人の協力が必要であることを感じ取り、自らも環境を大切にする生き方を求めること

(3) 目 標

- ① 福岡都市圏の大気汚染や温暖化などの都市・生活型公害と都市圏の人々の健康や生活環境とのかかわりや原因・対策を進んで調べることができる。 (主体性)
- ② 福岡市環境局の温暖化対策をもとに生活環境を守る取り組みをとらえ、生活環境の保全に向けた環境局、市民、事業所のあり方を考えることができる。 (創造性)
- ③ 大気汚染や温暖化を防止するためには、住民一人一人の協力が必要であることを感じ取り、環境を大切にする生き方を求める態度を養う。 (人間性)

(4) 計 画 (15時間)

階	つ か む 段 階 (6時間)	さ ぐ る 段 階 (6時間)	生 か す 段 階 (3時間)
具 体 的 な 活 動 例	1 福岡市の大気環境を調査し、追究課題を話し合う。 (1) 大気環境を調査する。② ○ 交通、汚染物質等の把握 (2) 温暖化の原因を調べる。② ○ 生活と温暖化の因果関係 (3) 影響をから課題をつかむ② ○ 生活への危機感の感受	2 地球温暖化対策を調べ、市の立場で課題解決をする。 (1) 福岡市温暖化対策を調べる② ○ 対策の概要の共感的理解 (2) 望ましい対策をまとめる。② ○ 対策の付加・修正・強化 (3) 2001アクションプランを交流する ② ○ 環境負荷や実行可能性の把握	3 福岡の環境へのかかわり方をまとめ、発信・実践する。 (1) 対策の修正・提言・啓発や社会参加を行う。② ○ 内容具体化への成就感の感受 (2) 2001アクションプランを実践する。① ○ 福岡市の温暖化防止に向けた実践意欲
手 だ て	※ 福岡での調査対象の選択 ※ 対象別追究活動の設定 ※ 地球温暖化の影響調査 ※ サイクル図の活用の促し	※ 温暖化の原因や対策の調査 ※ 市民・環境局・事業所などの立場追究 ※ サイクル図の付加・修正	※ 環境局を招いた対策の修正・提言・啓発・参加の場の設定 ※ 環境局の応答の場の設定 ※ サイクル図の自己評価の場

(5) 指導の実際

① つかむ段階（1～6時間）

この段階のねらいは、福岡市温暖化問題に危機感を抱き、解決にかかわろうとする追究課題をつかむことである。

まず、天神地区における自動車の排気ガスを出すVTRを視聴させ、調査の観点や方法を出させた。子供たちは、主要道路における交通量の変化、大気汚染の実態、植物への影響、住民の意識などの観点をもとに幹線道路の大気環境の調査を進んで行い、実態をとらえた（資料1）。

汚染の原因に関心をもった子供たちに、福岡市環境局の山中さんを紹介するとともに、福岡市の過去100年間の気温の上昇を示すグラフを提示していただいた。子供たちは汚染物質は、自動車から排出される窒素酸化物が多く、特に天神周辺が著しいことをとらえると同時に、福岡市の気温が100年間で約2℃も上昇したことに驚きをもった。そして、温度上昇にかかわる原因や影響などの問いをもち、再追究を行った。温暖化の原因の大半は、交通による二酸化炭素の排出が多く、家庭や事業所の割合が増加傾向にあることをとらえた。また、約100年後の2100年には、さらに気温が約2℃上昇し、海面も約1メートル上昇することにより、砂漠化などを引き起こし、生活への影響が極めて大きくなることに驚きと不安をもった。そして、温暖化の影響の大きさをとらえた子供たちは、温暖化防止に向けた福岡市の対策を調べる追究課題を設定した（資料②）。

考察①

資料②の下線部から、T児が福岡における大気汚染や地球温暖化の問題に危機感を抱き、問題に進んでかかわろうとする関心の強さが読みとれる（主体性）。この姿の背景には、①福岡の大気環境の実態を探る観察・調査活動を位置づけたことにより、福岡の大気環境における問題を生活とのかかわりでとらえることができたこと、②福岡の大気環境の変化を示すグラフを提示し、温暖化の原因や影響を探る活動を位置づけたことにより、生活の便利さが二酸化炭素の増大を生み、結果として自らの生活に悪影響を及ぼすということを実感的にとらえること、などが有効に働いたためと考える。

② さぐる段階・生かす段階（7～15時間）

この段階のねらいは、福岡市の地球温暖化対策地域推進計画を調べ、望ましい対策について多面的に考えると同時に、付加・修正した対策を福岡市環境局の山中さんから価値づけて頂いたり、発信・実践したりして、自らも環境保全に希求する生き方を強めることである。

福岡市の温暖化防止対策について関心をもった子供たちに、福岡市環境局の山中さんたちの立場にたって対策を調べることを促した。T児は、山中さんへの聞き取りやパンフレットをもとに、省エネルギー都市への転換、総合交通体系の確立、資源循環型都市への転換、緑豊かな都市への転換など、主に4つを柱とする対策を掲げている福岡市第二次地域推進計画の概要を調べた。

そこで、市の第二次地域推進計画を具体化した附小2001アクションプランの作成を促し、表現・交流活動を設定した。T児は、総合交通体系を重要な対策として取り上げ、考えを表現し（資料③）、交流に臨んだ（資料④）。この交流後に、環境への負荷軽減の有効性や実行可能性などの観点を提示した。T児は「よかネットカード」の使用拡大に伴う渋滞緩和による対策を具体化した。



【資料① 天神地区での大気環境調査】

今日はとても驚いたことがありました。私は、今までも温暖化と聞いていたけれど、あまり危機感をもっていませんでした。でも、二酸化炭素などをどんどん出して、私たち人間が便利さばかりを求めていったらどうなるか、それは、取り返しのつかないことになってしまうことがわかりました。今から私たちが協力してこの温暖化から救う方法を調べ、今すぐ対策に乗り出したいです。

【資料② 温暖化に危機感をもつT児】

私は、交通体系の中でも、自動車の利用から他の交通機関を利用することができるようにすればどうかと。思います。そうすれば、渋滞の防止にもなるからです。今ある「よかネットカード」の利用の範囲をもっと広げることができれば、自動車の利用が減っていくのではないかと思います。大気汚染や温暖化も防ぐことができるのではないかと思います。私達も協力できることをやっていきたいです。

T児：私は交通体系の確立が一番と思います。それは、今大気が排気ガスによって汚れて植物が枯れてきているしインタビューでも大気に関する声が多いからです。また、資料で調べてみると自動車などによる石油の消費量が年々増えてきているからです。

C2：僕も賛成です。地下鉄も省エネ車両があるし、低公害車導入に必要なお金を集めているので実行できると思います。

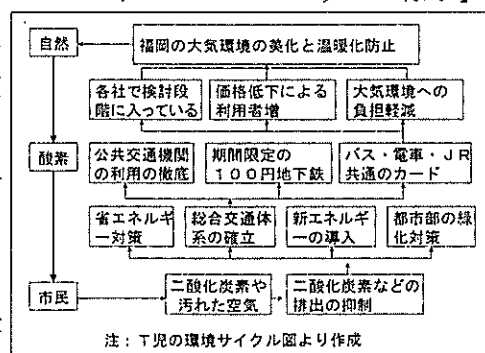
C3：私は、緑豊かな都市づくりが先だと思います。実際に車は減ってきても二酸化炭素は増えているので、二酸化炭素を酸素に変える緑が増えるのが先です。

【資料⑤ 交流前のT児の考え】

【資料⑥ 附小2001アクションプラン・シンポジウムの様子】

さらに、T児は共通カードの具体化に加え、総合交通体系において低公害車の普及や低公害車買い換えに関する財政上の支援、民間路線バスの低公害化の推進を掲げた。

その後、環境局への提言文書と市民への啓發文書を加えた附小2001アクションプランを書き表し、福岡市環境局が求める2010アクションプランに提言することを促した。また、子供たちは、大気汚染や温暖化の防止に向けたエコライフノートを作成し、家庭での省エネルギー対策を日常的に努めた。



【資料⑦ T児作成のサイクル図】

考察②

資料⑦より、T児の総合交通体系の確立にかかわる対策が、環境への負荷軽減や実行可能性の面から次第に具体的になってきていることがわかる。この姿は、福岡市環境局の山中さんらの願いをもとに問題解決を図ろうとする創造性を発揮している姿である。また、資料⑧からは、T児が福岡市の環境保護に努める一員としての自覚が読みとれる。この姿は、福岡の温暖化を防止するためには、市民一人一人の協力が必要であることを感じ取っている人間性を発揮している姿である。これらの姿を生み出したのは、つかむ段階における課題解決の意欲が原動力となり、山中さんら環境局の対策を調査・表現したり、自分とのかかわりで交流するシンポジウムの場を位置づけたりしたことが有効に働いたためと考える。

私は、地球の温暖化で協力しなとおそうと考える分の罰を受けるのは仕方ないけど、何もしていない動植物まで害を及ぼすことを知り、とても恥ずかしく思うようになりました。でも、状況が悪くなってきている今、「協力しなくては」とみんなが思うように、これからももっと深く考えていきたいです。このまま協力しないと手遅れになるかもしれないからです。地球の未来は私たち人類の心がけ一つということがよく分かりました。だから、地球にいる多くの人々や動植物、そして未来のためにもまずは自分ががんばっていかねばなりません。何百年たっても、輝く地球であるようにがんばりたいです。

【資料⑧ 人間性が育つT児】

4 全体考察

成果として、福岡の温暖化の原因や影響を生活とのかかわりでとらえる姿がみられた（考察①）。また、温暖化の対策を第二次地域推進計画を基盤にしながら、多面的に考えたり、環境保護に努める自覚をもったりする姿が見られた（考察②）。これらの姿は、温暖化の解決を願う人間性に支えられ、温暖化の解決にかかわる主体性や、事業体、市民の協力の仕方を多面的に考える創造性を発揮する姿であり、共生社会を拓く子供の姿と言える。この姿の背景には、①国土への愛情が深まるように内容配列を工夫したこと、②主体性、創造性、人間性の面から温暖化を教材化したこと、③温暖化の原因や影響、対策を調べる一連の活動においてサイクル図を重視したつくる・表す・見直す活動を円環的に位置づけたこと、などが有効に働いたと考える。

豊かな家庭生活を創り続ける家庭科学習

家庭科部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う家庭科学習の役割・立場

家庭科における豊かな人間とは、家族の一員としての自覚をもち、家庭生活をよりよくしたいという願いをもつこと、そのための工夫について気づいたり、理解したりすること、自分と家庭生活を営む上でかかわるもの・人・こととのかかわりを見つめて、生活向上に必要な生活技能や知識を主体的に獲得し、活用できることである。今日の家庭における生活は、科学技術の進歩や社会の変化により、豊富な物資に囲まれ、家事労働も外部化、社会化が進んでいる。このような生活環境の中では、子供たちは具体的な活動や体験を通して生活に必要な技能や知を身につける機会も少なくなっている。また、日常生活の中で人と人とのふれあいや人のために行動する場も減っており、人と人との関係を大切にしようとする感性も希薄になってきているといわれている。

このような子供たちを取り巻く状況を受けて、豊かな人間の育成をめざす家庭科学習が担う役割は、家庭生活への関心を高める実践的・体験的な活動を一層取り入れ、生活自立に必要な基礎的な知識と技能（文化）を身につけること、それを応用・活用して自分と家族や近隣の人々とのかかわりを考えながら家庭生活をよりよく工夫しようとする実践的な態度（文化の拡充）を育てることである。

○ 豊かな家庭生活を創り続ける家庭科学習とは

豊かな家庭生活を創り続けるとは、家庭生活をおくる上でかかわってくる様々な条件に出会ったときに、複雑に絡み合うその条件を自分自身のもつ最善の価値観で選択、行為決定しながら自分らしい家庭生活を営みつづけることである。家庭生活とは、家族からなる家庭という共同組織体が日常的な生活の安定・余裕・向上、言い換えれば生活の維持発展をめざして活動している状況をいう。これは、食べること（食生活）や着ること（衣生活）、住まうこと（住生活）を中心とした基本的な生命維持行為から、豊かに人間らしく生きるための文化的な活動まで、多種多様な行為や活動を含む。この行為は、自然、社会、文化的条件、快適性や利便性などの個人個人の要求や欲求などが様々な条件が相互にかかわり合い、どこかで折り合いをつけて行われていく。したがって、豊かな家庭生活を創るためには、家庭生活における事物や現象についての原理・原則を知り、家庭生活上の問題や課題を客観的かつ科学的に観察し、それらの本質を見極めることが重要となる。

このようなことをふまえて、家庭科学習においては子どもたちのよりよい解決方法を見出す思考を深め、生活的な自立の基礎を培う知識や技能を獲得し、子どもたちの価値観の形成や見直しにつながるができる問題解決の過程を位置づける必要がある。

○ 豊かな家庭生活を創り続ける子供とは

豊かな人間の育成を、家庭科学習においては次の様な子供の姿で見とっていく。

- | | |
|---|-------|
| ○ 家族の一員としての自覚をもって、家族や近隣の人々、周りのもの・こととのよりよいかかわりなどを考えながら生活をよりよく工夫しようとする子供 | (創造性) |
| ○ 家庭生活に関する様々な問題や課題を科学的・客観的に解決するために、基本的な知識や技能を実験や実習などの実践的・体験的な活動などを通して獲得し、活用する子供 | (主体性) |
| ○ 自ら獲得した技能を生活実践することで、自分自身の生活向上のよさを実感したり、家庭生活の大切さを実感したりできる子供 | (人間性) |

【家庭科で大切にする資質・能力の重点化・系統化】

学 年		5 年生	6 年生
創 造 性	家 庭 生 活 の 理 解	○ 家族の思いや願いに気づくことができる。 ○ 生活における原理・原則を気づくことができる。 ○ 自分の家庭や地域の伝統や文化に気づくことができる。 ○ 健康へ・安全への配慮をして生活を見つめることができる。	○ 家族の思いや願いを理解することができる。 ○ 生活の原理・原則を理解することができる。 ○ 自分の家庭や地域の伝統や文化を理解することができる。 ○ 健康へ・安全への配慮をして生活を見つめることができる。
	家 庭 生 活 の 考 え 方	○ 家庭生活を科学的に分析してよりよくする工夫を考えることができる。 ○ 自分や家族の身の回りの生活環境をよりよくする工夫を考えることができる。	○ 家庭生活を多面的に分析して考えることができる。 ○ 身の回りの生活環境をよりよくする工夫を近隣の人々との関係を考慮して考えることができる。 ○ 家庭生活を予測したり、構想したりすることができる。
	技 能	○ 生活の自立のために必要な基礎的な技能を身につけることができる。	○ 生活の自立のために必要な基礎的な技能を身につけることができる。
	課 題 解 決 力	○ 家庭生活における自分の関わり方の課題を見出すことができる。 ○ 自分の生活を科学的に分析することができる。 ○ 課題解決のために必要な情報を収集することができる。	○ 家庭生活における自分の関わり方の課題を見出し、自己責任をもって行動することができる。 ○ 自分の生活を科学的に、多面的に分析することができる。 ○ 課題解決のために必要な情報をより多くの観点で収集することができる。
主 体 性	家 庭 生 活 へ の 意 欲	○ 自分が生活をしていることは家族の支えがあることに気づき、自分も家族の一員としての自覚をもち、家族とかかわりを大切にしながらよりよい生活を実現しようとすることができる。	○ 自分の生活は、家族や近隣の人々が支え、築き上げられてきたものであることに気づき、自分も家族や近隣の人々とかかわりながらよりよい家庭生活を創り上げていこうとすることができる。
人 間 性	家 族 の 一 員 と し て の 自 覚	○ 自分で生活を創ることに喜びを感じ、自分の生活について自信をもって対応していこうとすることができる。	○ 自分で生活を創ることに喜びを感じ、自分の生活や家族の生活をよりよくしていくために自信をもって対応していこうとすることができる。

家族とのかかわりを見出すものづくり学習の展開

家庭科部 篠原 裕子

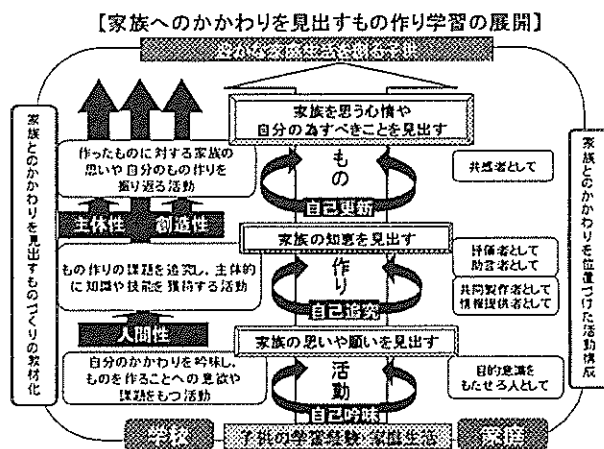
1 主題の意味

(1) 家族とのかかわりを見出すものづくりとは

家庭生活は、着ること、住まうこと、食べることなどの行為が切り離されたものではなく、そこには家族とのつながりや家族の家庭生活に対する思い・願いが複雑に絡み合っている。したがってここでいうものづくりとは、単に被服製作（生活に役立つものの製作）を行うことではなく、家庭生活において食べ方、着方、住まい方とそこにはたらいっている家族とのつながり、自分の家庭背景をとらえてものを作ることである。家族とのかかわりを見出すものづくりとは、ものを作る一連の過程で家族の思いや願い、家族がもっている知恵に気づいたり、自分自身も家族を思う心情を育み、自ら家族の一員としての為すべきことに気づいたりしながら作り続けることである。このことは、子供自身に家族への感謝の気持ちを抱かせるとともに、自分自身も生活の主体者となり知識・技能を提供することで感謝され、その満足感や自己有用感は次の生活行為への原動力となる。人とかかわりの心地よさを感じるこの学習は、これから少子化・高齢化社会を迎えるに当たって子供たちには積極的に家族や近隣の人々とかかわっていく力として大切となる。

(2) 家族とのかかわりを見出すものづくり学習の展開とは

家族とのかかわりを見出すものづくり学習の展開とは、①ものに対する家族の思いや願い、自分のこれまでのかかわりを吟味し、家族への思いを込めてものを作ることへの意欲や課題をもつ活動（自己吟味）、②家族への思いを実現するためのものづくりをする過程で、課題追究し主体的に知識や技能を獲得したり家族の知恵に気づいたりする活動（自己追究）、③作ったものを家庭生活中で使ったり、作ったものに対する家族の思いを聞き取ったりして自分の活動を振り返る活動（自己更新）、を各題材に位置



づけることで、家族とのかかわりを強め、家族の一員として生活を創る力を高めていくことである。また、各活動に家族とのかかわりを次のように効果的に位置づける。課題把握の活動では、「目的意識」をもたせたらうに家族の思い・願いを感じとるようなかかわりをもたせる。追究の活動では、「情報提供者」や「共同製作者」として家族の知恵を見出すことのできるようなかかわりをもたせる。ここでの吟味の際は「評価者・助言者」として次の活動への意欲を見出すようなかかわりをもたせる。更新の際は「共感者」として家族の一員としての自信をつけるようなかかわりをもたせる。このように家族とのかかわりを位置づけることで、作りたいものへこめた自分や家族の願いが連続し、そのために獲得される知識や技能、そこから見出した家族とのかかわりが発展する（強められる）。したがって、この3つの活動が学校だけでなく家庭を結びながらスパイラルに展開する必要がある。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 家族とのかかわりの中で自分も家族も共に喜びを感じることができよう作りたいものを決定し、作るために解決すべき自分の課題に気づく子供（自己吟味）
- 見出した課題を解決するために人とかかわりながらものを作るための知識や技能を獲得したり、家族の知恵に気づいたりする子供（自己追究）
- 目的のものを作り、そのことで自分や家族の生活が共に豊かになったことと家族とのかかわりが深まったことへの喜びを実感できる子供（自己更新）

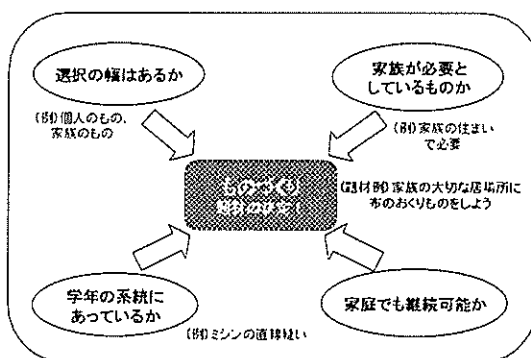
2 学習の具体的構想

(1) もの作りを中核に据えた教材化について

もの作り中核に据える際に、対象となる家族の思いや願い、共有する空間（家族の住まい方）、時間（家族の生活時間や仕事）などを吟味しながら製作を行うようにする。

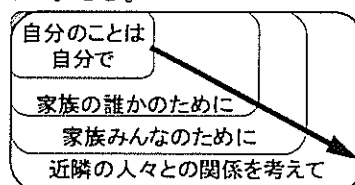
① 題材内で取り上げる「もの作り」の吟味

子供自身が作ることで家族とかかわることができ、家庭生活が更新していくと考えられるものを右図のような4つの視点で吟味する。



② ものを作るためにかかわる対象となる家族のとらえを次のように考える。

家族とのかかわりは、右図のような広がりがあると考える。これは、5学年から6学年へ広がるというものではなく、作る対象とするものによって決めるようにする。そして、2年間繰り返し学習することで、それぞれの家族へのかかわりを強めるようにする。



(例) ランチョンマットを作る→家族の誰かのために、テーブルクロスを作る→家族みんなのために

(2) 活動構成の工夫について

問題解決の3段階の学習過程を設け、各段階で自己吟味・自己追究・自己更新を次のように位置づける。また、学校と家庭の往復的学びを行い、家族とのかかわりを支援する。

① 家族とのかかわりを見出すもの作り学習の基本的な活動構成

階	つかむ段階	さぐる段階	生かす段階
ねらい	対象となる家族とものを作り届けるという目的意識をもつこと	ものを作るための基礎的な知識・技能を獲得して課題を解決すること	家族とのかかわりやもの作りについてのよさを実感すること
活動と内容	1. 対象となる家族にどのようなものを作るかを決める。 (1) 家族やものと出会う。 ○ 目的意識の明確化 (2) 追究の計画を立てる。 ○ 見通しをもつこと —— 自己追究 —— 自己吟味	2. ものを作る。 (1) 目的のものを作るための情報を集める。 ○ 情報収集・選択 (2) 集めた情報をもとに製作する。 ○ 基礎的な知識や技能の獲得 —— 自己追究 —— 自己吟味	3. 作ったものを渡し、学習を振り返る。 (1) 作ったものを効果的に渡したり一緒に楽しんだりする。 ○ 生活更新 (2) 感想を話し合う。 ○ 更新の実感 自己更新 —— 生活更新
家庭	観察、聞き取り	観察、聞き取り 家庭実践	観察、聞き取り 家庭実践

② 家族とのかかわりを見出すための仕組みについて

階	つかむ段階	さぐる段階	生かす段階
仕組み	○ 家族の思いや願いを見出す 目的意識をもたせる人	○ 家族の知恵を見出す 情報提供者、共同製作者、評価者	○ 家族を思う心情や自分の為すべきことを見出す 共感者
支援	○ 自分のかかわりや家族の思いを吟味できる体験の場の設定 ・ 家族に必要なもののアンケート、聞き取り活動の設定 ・ 部屋の観察の促し ・ 家族の行動観察の促し	○ 継続的にもの作りと家庭での吟味をすることができる場の設定 ・ 製作過程で作品の持ち帰り、家族の評価をもらう（聞き取る）ことの促し ・ 家族に使ってもらったり部屋においたりして観察することの促し	○ 家庭生活にもどして活動の達成感や自己有用感をもたせる活動の場の設定 ・ 家族に使ってもらったり部屋においたりして観察したり、家族に感想をもらったりすることの促し（写真やビデオ等に残す）

3 指導の実際と考察

(1) 題材名 第5学年 大切な居場所に布の贈り物をしよう

(2) 本題材の考え方

本題材は、住居空間に目を向け、家族が快適に住まうことができるような空間にするために、自分のできることを見つけ、工夫して布製品を製作していくことをねらいとしている。具体的には、①家族が利用している空間に関心を持ち、その快適さを追究しようとする（人間性）、②住まいを快適にするための布を用いた小物の製作を考える（創造性）、③製作の手順を考えて、計画的にミシンを用いて製作を行うこと（主体性）、などである。自分の家庭を背景とした作品づくりを行うことは、豊かな家庭生活を創り出す力を育てることにつながる。

本学級の子供たちは、これまで家庭の仕事を見つめる中で、家族の中で分担している仕事にかたよりがあることに気づき、自分も家族の一員として関わらなければならないという意識をもっている。しかし、家族がしている仕事の背景にある思いや願いを十分に感じとるまでには至っていない。そこで本題材の指導にあたっては、自分の住まいに役立つ布製品作りを行う過程で、家族からの情報収集や評価を取り入れながら自己追究・自己吟味をくり返し、主体的な技能獲得をめざしたい。まず「つかむ」段階では、住まい観察をしたり、自分が住まいを利用している経験を想起したりさせる（自己吟味）。また、実際に活用されている手作りのものを持ち寄らせて触れさせる体験活動の場を設定し、布製品のよさを実感させる。そして、家族の思いも聞き取る中でわが家の住まいをよりよくしていくために役立つものの製作計画を立てさせる（自己追究）。次に、「さぐる」段階では、住まいに役立つものの製作に取り組む。製作の過程で、家族の思いを聞き取り、自分の住まいにあう形やサイズ、装飾を考えさせる（自己追究・自己吟味）。さらに、「生かす」段階では、家庭実践の結果を持ち寄せ、家族の思いや、住まいの変容に気づかせる相互評価をさせたい（自己更新）。この際、家族の方からの賞賛の声を写真や手紙でいただき、自己有用感や達成感を味わうことができるようにする。

(3) 目標

- ① 家族のことを考えて快適な空間にするために、布を使って生活に役立つものの製作計画を工夫して立て、製作に必要なものの選び方や買い方を考え購入したり、ミシンの直線縫いを用いて製作することができる。
(主体性, 創造性)
- ② 家族が気持ちよく過ごせるように、また家族間の心の触れ合いを考えて住まいを快適にしようすることができる。
(人間性)

(4) 計画 (10 時間 + 課外)

階	つかむ (2 時間 + 課外)	さぐる (7 時間 + 課外)	つくる (1 時間 + 課外)
活動と内容	1. 住まいの中にある布製品について話し合い、課題をもつ。 (1) 住まいの中にある布製品のよさについて話し合う。 ① ○ 家族の思い・願いの見出し (2) 自分の住まいに必要な布製品の計画を立てる。 ① ○ 追究の見通し	2. 自分の住まいに合うように布製品を製作する。 (1) 材料選びの課題解決する。 ② ○ 必要な材料を選ぶこと (2) 家族からの聞き取りを行いながら布製品を製作する。 ⑤ ○ 家族の知恵を見出しながら課題の技能を獲得すること	3. 家庭実践報告会をする。 (1) 家庭に持ち帰り、使ったり、家族からの評価をもらったりする。 (課外) ○ 布製品のよさの実感 (2) 家庭実践報告会をする。 ① ○ 達成感の感受
手だて	※ 各家庭にある布製品の事前調査 ※ 実際の布製品を持ち寄った体験活動の場作り	※ 毎時間の家族からの助言、評価 ※ 縫い方見本、練習コーナーなど技能面での支援コーナー ※ 中間報告会での相互評価の場	※ ビデオや写真など家庭実践の様子と家族の反応がわかる表現物の準備

(5) 指導の実際

① 自分の住まいに必要な布製品に気づき課題をつかむ段階（1～2／10時間）

この段階は、住まいの中にある布製品のよさを感じたり、自分のかかわりについて自己吟味する中で、自分の住まいに必要な布製品を作りたいという意欲をもつことをねらいとしている。そのために、各家庭から布製品を持ち寄って、学校で実際にさわったり、飾ったりしながらよさを味わうことができるようにした。また、この活動を受けて、子供の求めから家庭でも布製品のよさを吟味するようにした。作るものを決定する際には、「自分の住まいにとって必要なものか」「家族の思いや願いを生かしているか」「自分の技能にあっているか」という3点から吟味するようにした。技能面では、ミシンの直線ぬいを中心に行うことを条件とした。



【写真① 布製品の暖かさに気づくN児】

考察①

実際に家庭にある布製品を置いたり触ったりする体験活動を通して、子供たちは布製品のもつ暖かさや、便利さに気づき（写真①）、自分でも住まいに布製品を作って置きたいという意欲をもつことができた。作るものを決める際には、家庭で

私の家でも布製品がたくさんあることがわかりました。手作りの方が側に置いて使ったりするとき、何となくうれしくなりました。でも、それはおばあちゃんやお母さんが作ったもので、私はまだくらしに役立つものは何も作っていないことがわかりました。私は、今わが家にとって必要なものはないか。家族に聞いたり観察をしたりしました。すると、パソコンにほこりがかぶってお父さんが困っているのを、部屋の雰囲気にあった色、柄のすてきなパソコンカバーを作りたいくなりました。

【資料① 布製品へのかかわり方について自己更新したN児】

の吟味活動を通じたことで、家族の思いや願いを感じとり、N児のように自分の家庭に必要な布製品（お父さんのためのパソコンカバー）を見出すことができたと考える（資料①）。また技能面での条件を提示したことで、自己吟味を行い上記のような子供たちの力にあう作品を選定することができた。

② 布のおくりものを仕上げるために作り方を追究する段階（3～9／10時間）

この段階では、自分の布のおくりものを作っていく中で、家族へのかかわりを深めたり、快適な住まいにするための自分のかかわりを深めたりすることや、必要な材料を選ぶこと、ミシンの直線ぬいやそれに伴う裁縫の技能を獲得したりすることをねらいとしている。

○ 第1～2時 作りたいものを決めて必要な材料を揃える

ここでは、自分の作るものの大きさや形、色を決め、型紙作りを行い、それをもとに材料を揃えた。その際、自分の住まいで大きさを実測して決めたり、家族からの聞き取りで形や色を決めたりした。N児は、家にないレースや布を自分で買い物をして揃えていった。

○ 第3～7時 手順を考えて縫う

ここでは、布を裁ち、どこから縫うか、自分の立てた計画に沿って縫い進めた。N児は、縫い進める過程で「上手に直線ぬいができない」「飾りを付けるためのかがり縫いがうまくできない」などの裁縫の技能に関する課題が生まれた。そこで、練習布を使ってミシンやかがり縫いの練習をしたり、上手にできるこつを家族の方から聞き取ってきたりしてねばり強く縫い続けた。また、作品を家族の方に見ていただいたり、住まいに置いてみたりすることで、

	活動	家族からのコメント	自分の感想
2	布端にレースをつける。	まち針のあとにしつけ糸で縫ってみてはどうかしら。だんだん形ができてきて、仕上がりがとても楽しみです。	何度も失敗したけど、しつけ糸でうまくできた。おばあちゃんはいつもこうしていたんだな。すごい！
3	布端を縫う。	方向を変えるところはむずかしいのに、よくできていますね。	ミシンでまっすぐにぬうのはむずかしい。でも、喜んでもらえるようにまっすぐに縫う！
4	ひもを付ける。 (追加)ポケットを付ける。	ミシン掛けが上手になったね。まっすぐに縫えていることに感心しました。ポケットはよいアイデアです。ものや手が入る大きさかどうかを確かめてね。	実際にパソコンにかけたら、マウスを入れるポケットがあると便利なこと気づいた。追加しよう。

【資料② 家族からの助言と作品作り過程の感想（抜粋）】

「もっとまっすぐ縫い直そう」「お父さんが使いやすいように、ポケットをつけよう」など、作品をよりよくするために吟味と追究を繰り返した。途中、中間報告会を行い、互いの工夫点を認めあったり、改良点をアドバイスする時間を設けた。この際の相互評価の観点を、「住まい方をよくしているか」「家族の方と意思を取り入れているか」「そのことが縫い方や飾りにあらわれているか」とした。N児の作品には、「直線がまっすぐ縫ってあり、上手。」「飾りを付けると楽しくなるのでは。」等のコメントが寄せられ、次時からの活動を促していった。

考察②

「であう」段階において、住まいをよりよくするために布製品を作りたいと思った子供たちは、買い物や裁縫に家族の意思を取り入れながらねばり強く取り組むことができた。自分で買い物をしたことは、作品製作への意欲を高めた。裁縫の場面では、家族からの意思（助言や励ましの言葉）の聞き取りや住まいにおいて観察する活動を毎時間後に行ったこと（資料②）、中間交流会で友達との相互評価の場を設けたことで、よりよいものに仕上げたいという追究意欲が継続し、子供たちの主体的な活動を支えたと考える。

③ 作り上げた布のおくりものが生活に生かされていることを実感する段階（10～10/10時間）

ここでは、作品を作り上げた喜びを味わい、手作りの布製品を住まいに置くよさを実感することや、家族とのかかわりが深まったよさを味わうことをねらいとしている。

子供たちは、作品を家庭で飾ったり使ったりして、そのときの様子を写真に撮ったり、家族の方から感想をいただいたりしてきた。それを持ち寄って、作品交流会を行った。N児は、仕上がったパソコンカバーを使っている写真を何枚も撮り、完成した喜びを紹介した。家族からは、「あなたが作ってくれたパソコンカバーのおかげでほこりがつかなくて助かります。それに、お父さんの書斎が明るくなりました。」という感想をいただき、全体場で進んで発表した。



【写真② N児の作品を使っている様子】

考察③

子供たちは、家庭に持ち帰り、使ってみることで布製品をつくったこと（自己更新）への満足感を味わうことができた（写真②）。また、作品交流会では、友達から認められてより達成感を感じたり（自己吟味）、友達の心を込めた作品に触れ、これからも違う布製品を作り続けたいという意欲を持つことができた。これは、住まいで使っている様子や家族が喜んでいる様子を写真記録で持ち寄せたこと、家族の感想をそえて発表させたことが有効であったためと考える。

4 全体考察

この学習中、自分の住まいをよりよくしたい（創造性）、家族のために自分でできることをしたい（人間性）という願いをもち続け、何度も縫い目をほどいてミシンをかけ直し、直線ぬいの知識・技能を獲得した子供の姿が見られた（主体性）。これがものを作ることを通して家族とのかかわりを深め、豊かな家庭生活を創り出していった子供の姿であると考え。本研究を通して、①家族の住まいに必要な布製品という目的意識をもたせて作品の吟味をさせたことが有効であったこと、②作品を仕上げるまでの一連の活動の過程で、その都度家族の方から助言や評価をいただくという活動の構成が、自己吟味・自己追究・自己更新を連続させていく上で有効であったことの2点が明らかになった。

私は、お父さんの書斎のパソコンがほこりがかぶり、いつも掃除が大変そうなので、カバーを作ろうと思いました。布を選ぶときも、家の様子を思い出したりお父さんが好きな色や柄を考えながら買いました。ぬい始めると、なかなかまっすぐ縫えなくて、家族に何度も励ましてもらいました。まっすぐ縫うためのこつや残った布で飾りを作ることなど、お母さんやおばあちゃんはいろんな知恵を持っているのだと改めて感じました。実際に家に置いてみると、（中略）。私はお母さんが手作りのものを作る気持ちが分かりました。（後略）。

【資料③ もの作りを通して家族とのかかわりを見出したN児】

生活課程の学習

心豊かに生活を拓く生活学習(生活科)

生活科部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う生活科学習の役割・立場

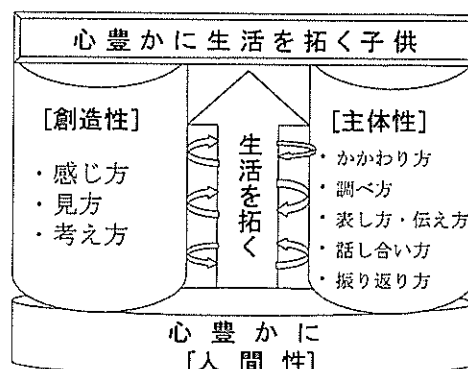
現代社会においては、少子化や高齢化、地域社会の喪失などの状況が子供たちを取り巻いている。さらには、自然体験や勤労体験、人とふれ合う体験など様々な体験不足が指摘されている。子供たちの元来在るべき生活そのものが失われつつある今こそ、自分の生活を切り拓き、たくましく生きていく子供の育成が求められていると言える。しかし、人間はひとりでは生きられるものではない。自然を含めたあらゆる他者と共に生きようとするよりよい感性が、その中核になればならない。つまり、生活科においては、身近な環境に心をくばりながら、他者とのかかわりにおいて自分自身や自分の生活を見直し実践していく生活者としての子供を育成することが重要となるのである。

○ 心豊かに生活を拓く生活科学習とは

心豊かに生活を拓くとは、身近な環境(身近な人々、社会及び自然)に心をくばりながら、具体的な活動や体験における問題解決の過程を通して、自ら環境とのかかわり方を創造していくことである。ここでは、あらゆる他者とのかかわりのなかで、よりよく生きていこうとする心や感性(人間性)を基盤に、身近な環境に進んで働きかけようとする主体性と、自分にとっての課題を自らの力で解決していく創造性を総合的に育てていくことになる。具体的には、

【心豊かに生活を拓く子供】

○多様な調べ方や表し方・伝え方、話し合い方、振り返り方を獲得し、目的や状況に応じて選択したり組み合わせたりしながら、進んで環境に働きかけていく能力や態度(主体性)、
○自分にとっての課題を解決する過程において獲得される気付きや行動の仕方を、自分と身近な環境とのかかわりにおいて活用する能力や態度(創造性)、
○あらゆる他者と調和的に生きようとする心や感性を發揮しながら、よりよい自己を創造していこうとする心や感性(人間性)をめざすものである。



そこで、心豊かに生活を拓く生活科学習とは、このような能力や態度を子供自らが獲得したり發揮したりする子供の学びである。そのためには、学校及び地域の特色や子供の実態を十分に踏まえ、子供の生活現実における切実な課題や子供の求めを大切に、子供たちにとって必然性があり意味のある学習が重要となる。そこで獲得される工夫や気付き、態度こそが生活に生きて働き、生活科の基礎・基本としての学習内容の獲得から、豊かな人間としての自立の基礎を培うことにつながるのである。また、体験的な活動を重視した問題解決的な学びのなかで、このような人間性、主体性、創造性を育てていくことは、総合的な学習「あらつ学習」における学びの素地となり、「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」における生活科の位置づけを明確にするものである。

○ 心豊かに生活を拓く子供とは

- 諸感覚を通して対象に敏感に反応し、自分なりのかかわり方、調べ方、表し方・伝え方などを發揮しながら、思いの実現に向け働きかけを行っていく子供 (主体性)
- 具体的な活動や体験において自分なりの気付きや行動の仕方を見出し、それを自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりのなかで活用しようとする子供 (創造性)
- 身近な人々、社会及び自然に愛着をもち、あらゆる他者へのやさしさを發揮しながら他者と協調的に活動し、自分自身を高めていこうとする子供 (人間性)

【生活科学習で大切に資質・能力の重点化・系統化】

		第 1 学 年	第 2 学 年
主 体 性	かかわり方	○ 自分を取り巻く社会や自然に対する興味・関心、素朴な疑問などから、自分なりの思いをもって、進んで対象に働きかけることができる。 (興味・関心、疑問などからのかかわり)	○ 自分を取り巻く社会や自然が自分自身にとってもつ意味に気付き、身の回りにあるものをもう一度見直し、自分なりの切実な問題意識をもって対象に働きかけることができる。 (切実な問題意識からのかかわり)
	調べ方	○ 見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどの具体的な活動や体験を通して、試したり調べたりすることができる。 ※ 2年生では、より多様な活動を通して、試したり調べたりすることができるようにする。 (観察、調査、実験、探索、製作、飼育、栽培、採集、遊び、模擬活動、実地体験など)	
	伝え方	○ 活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉や絵、動作、劇化などによって進んで表現したり伝えたりすることができる。	○ 活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉や絵、動作、劇化などによって、分かりやすく表現したり伝えたりすることができる。
	話し合い方	○ 自分の考えや思いをみんなの前ではっきり発言することができる。 ○ 友達の話を熱心に聞くことができる。	○ 友達の考えのよさや違いに気付きながら、積極的に話し合おうとすることができる。 ○ 友達の話を熱心に聞くことができる。
	振り返り方	○ 見出した工夫や気付きを表現することで自分の知恵として獲得することができる。	○ 問題を克服している自分自身に気付き、新たな課題追究の方向性を見出すことができる。
	創造性	○ 自分を取り巻く社会や自然との出会いにおける驚きや感動、不思議さを素直に感じ取ることができる。	○ 直接かかわった対象(もの・こと・人)に、興味・関心を抱き、自分なりに不思議さや面白さなどを追究する思いや、達成したいという願いを見つけることができる。
人 間 性	見方	○ かかわった対象について自分にとっての意味や価値を見出すことができる。 (かかわりの発見、こだわりやその根拠)	○ かかわった対象について自分にとっての意味や価値を見出すことができる。 (かかわりの発見、こだわりやその根拠)
	考え方	○ 具体的な活動を通して、自分なりの工夫や気付きをもつことができる。 (工夫や気付き) ・諸感覚を通して ・実感を伴って ・自分とのかかわりにおいて	○ つまづきの場面において、今までの具体的な活動や体験における気付きを自分の知恵として活用しながら、試行錯誤を繰り返し問題解決をすることができる。 (工夫や気付き、問題解決的な学び方)
人 間 性	他者とともによりよく生きようとする感性や態度		
	○ 身近な環境(もの・こと・人)への愛着をもち、調和的に働きかけることができる。 ・「よさを感じる」→「親しみを深める」→「安心感をもつ・心地よさを感じる」(愛着の深まり) ○ 身近な環境とかかわり、生活していく上で必要な習慣や技能を身に付けることができる。 ・健康や安全にかかわる習慣 ・集団生活におけるきまりにかかわる習慣 ・礼儀作法にかかわる習慣 ・手や体などを使って道具を上手に使うこと		
人 間 性	自分自身をよりよくしていこうとする感性や態度		
	○ 自分自身や自分の生活について新たな気付きをすることができ、自分自身これからも伸びていく存在であると感じ取ることができる。 ・集団における自分の存在(集団になじみ、集団の中の自分の在り方に気付くこと、集団における有用感) ・自分の心身の成長(自分の成長、生活環境の変化、家族の支えや家族への感謝) ・自分のよさ(自分ができるようになったことと得意としていること、また、興味・関心をもってることなどに気付く)		

身近な地域との絆を創り出す学習の展開

生活科部 石 田 耕 一

1 主題の意味

(1) 身近な地域との絆を創り出すとは

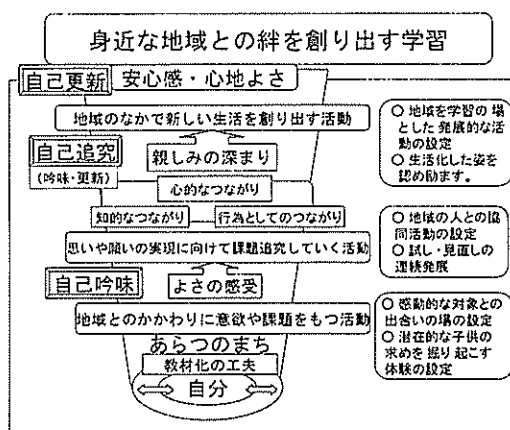
今日、密集と混住、職住分離、生活の私事化など地域社会は変貌し、「元来そこに存在するもの」としての地域から「既にあるものとしてではなく、創り出すもの」としての地域に変化している。その一方では、このような地域社会のなかでたくましく生き抜いていく力が子供たちに求められている。

そこで、子供自らが主体的に地域に働きかけ地域との絆を創り出していく学習を、特に第2学年の地域学習において展開し、心豊かにたくましく生活を拓いていく力の素地を培いたいと考える。

本研究における身近な地域とは、子供の生活空間としての場や子供を取り巻く人間関係のことである。ここでは、子供たちがより一層多様な活動や体験ができるように、「あらつ」地域の特色を十分に生かし、あらつのもの・人・ことを一体的に取り扱っていく。身近な地域との絆を創り出すとは、あらつの地域におけるもの・人・こととの心的なつながり(愛着)や知的なつながり(気付き)、働きかけの行為としてのつながりを子供自らが築いていくことである。そこでは、地域における自己更新に向かう課題解決的な活動において、子供が地域の人々と協同的な活動を展開していくなかで、地域とのかかわりにおける自分なりの応えを探し、地域生活における生き方を創り出すことが大切である。

(2) 身近な地域との絆を創り出す学習の展開とは

身近な地域との絆を創り出す学習の展開とは、「①地域における子供の潜在的な求めや地域のもの・人・こととの感動的な出会いをもとに、地域とのかかわりに意欲や課題(自己吟味から自己更新へ向かう思い)をもつ活動、②地域とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて、地域の人々と力を合わせて課題解決していく協同活動(自己追究・自己吟味・自己更新)、③地域における学びを生活に生かしたり、地域のなかで新しい生活を創り出したりする活動(自己更新)」をそれぞれの単元に位置づけることにより、年間を通じて、地域とのかかわりのなかで生きていく力を高めていくことである。



このことにより、子供たちは地域を思いやり精一杯のやさしさを発揮したり(人間性)、地域における新しい生活づくりをしながら(主体性・創造性の発揮)、心豊かに生活を拓いていくことができるのである。また、このような学習は、①身近な地域とふれ合うという視点からの体験的活動の充実を図ることができる、②身近な地域との新たな絆を創り出していく過程において問題解決的な学びを豊かに経験することができる、③取り上げる地域のもの・人・ことの範囲の広がりにより、子供の追究の結果として環境や福祉、国際理解・協力、郷土の歴史や伝統、健康といった現代社会の課題についてふれることができるという価値がある。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 地域のよさを素直な心で受け止め、地域とのかかわりに意欲や課題をもつ子供 (自己吟味)
- 地域とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて、地域の人々と共に試行錯誤を繰り返しながら課題解決していく子供 (自己追究・自己吟味・自己更新)
- 地域における学びを生活に生かしたり、新しい地域生活を創り出す子供 (自己更新)

2 学習の具体的構想

(1) 教材化について

① 地域環境の価値吟味

- 日常生活における何らかのかかわりや対象に対する潜在的な求めがあること (生活性)
- 活動における楽しさや素晴らしさなど、子供を揺さぶる内面的価値があること (感動性)
- 子供と対象との継続的なかかわりや応答的なふれ合いが可能であること (継続性、応答性)

「あらつ」地域やその周辺の地域の特色を踏まえ、子供たちがより一層多様な活動や体験ができるよう対象の設定を考慮する。そこで、具体的な場としては西公園や当仁公民館、唐人町商店街、総合図書館、福祉プラザ、汀幼稚園などを、人としては障害のある人や高齢者、幼児、異文化の人、地域の伝統を守り続けたりボランティア活動をしたりしている方々を取り上げる。

② 地域との絆を広げ深めていく出合う対象の配列について

地域における心豊かな生活者としての資質・能力の育ちの面から題材の配列を工夫する。

〔主体性〕 地域における学びの意欲やかかわり方としての態度の変容から

- 地域における利用者から、自分の思いや願いをもって進んで働きかける活用者へ

〔創造性〕 感じ方、見方、考え方（工夫や気付き、行動の仕方）の高まりから

- 地域における自分の楽しみから、明確な相手意識や地域の特色を踏まえたものへ

〔人間性〕 地域に対する愛着の深まりと地域における自己実現から

- よさを感じる → 親しみを深める → 安心感をもつ・心地よさを感じる
- 地域における自分の役割に気付く → 地域における有用感・効力感を味わう

※ 子供たちにとって精神的・物理的に身近な対象から始まり、しだいに対象の範囲を広げていくようにするとともに、季節や行事、他教科・領域との関連も考慮していく。また、子供たちの求め(子供たちの実態、興味・関心の傾向、生活における課題など)に応じて地域とのかかわりを広げ深めていくことができるように単元の柔軟な組み替えや新単元の設置を行っていく。

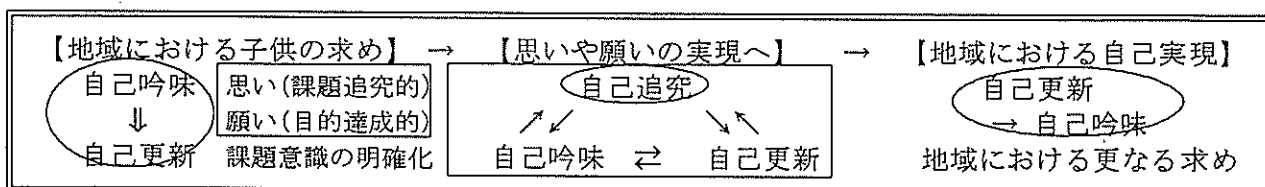
(2) 身近な地域との新たな絆を創り出す活動について

① 身近な地域との絆を創り出す活動の内容

具体的な活動内容としては、年齢や性別、生活習慣、文化などの違いを越えて、子供が地域におけるもの・人・ことと楽しくふれ合うことのできる遊びや探検、飼育・栽培、製作などである。

- 地域生活における自己更新に向かう思いや願いを地域の人と一緒にもちることができる。
- つまずきの克服など問題解決の過程において、子供が進んで地域の人々に働きかける必要が生じたり、地域の人々と力を合わせる楽しさを味わったりすることができる。
- 地域への情報発信や具体的な実践が可能であり、地域への愛着を深めることができる。

② 身近な地域との絆を創り出す基本的な活動構成



③ 身近な地域との絆を創り出す活動づくりのための支援

「であう」段階	「ひたる」段階	「いやす」段階
○ 身近な地域との感動的な出合いの場や体験の設定 ○ 潜在的な子供の求めを掘り起こす体験の設定 ・ 地域の特色、子供の実態把握	○ 継続的に身近な地域とかわることのできる場の設定 ・ 地域の人との協同活動の設定 ・ 「試し活動」⇄「見直し活動」の連続発展的な設定	○ 生活に結び付ける活動の促しや励まし ・ 地域を学習の場とした発表会など発展的な活動の設定 ・ 生活化した姿を認め励ます。

3 指導の実際と考察

(1) 単元名 第2学年 集まれ！みんなのたまり場 ～唐人町かえっこショップを開こう～

(2) 本単元の考え方

本学級の子供たちは、2学期「ぼく・わたしの公民館～2の2とんとん文庫を作ろう～」の学習において、地域の人々と一緒に活動しながら地域の施設を活用する楽しさを味わってきた。そのなかで、「あらつの町でもっと楽しいことをしたいな。」といった身近な地域とのかかわりのなかで自分たちの新しい生活を創り出そうとする求めを高めてきている。そこで本単元では、身近な地域における自己実現への願いを大いに生かし、地域との絆を創り出す活動を展開しながら、「心豊かに生活を拓く子供」として、次のような資質・能力を育みたいと考えた。

- かえっこショップ構想を進んで上原さんに提案し、責任をもって企画・運営することができる。 [主体性]
- 藤さんや上原さんの知恵を自分たちの知恵として活用しながら、みんなが楽しむことのできる唐人町かえっこショップ作りの工夫を行うことができる。 [創造性]
- 「みんなが集う楽しいたまり場をつくろう」という願いをもった地域の方々とともに、かえっこショップ開きを実現し、地域における効力感・有用感を味わうことができる。 [人間性]

そのために、地域との絆を創り出す活動内容設定と活動構成から次のように支援を工夫する。

【活動内容の設定】

- 上原さんや藤さんとの目的的な協同活動として展開するカランドパークにおける唐人町かえっこショップ作り
- ◇カランドパーク（唐人町商店街のふれ合いの場）
- ◇かえっこショップ（たまり場作りのためのかえっこのお店）

- これまでの地域学習について話し合う。 (自己吟味)
- ↓ 「藤さんのかえっこショップ体験(目的意識の自覚化)」
- 上原さんへかえっこショップの提案をする。 (自己更新)
- ↓ 「地域の人たちと力を合わせて課題解決していく協同活動」
- 唐人町かえっこショップ作り→ミニ・オープン→作り変え (自己探究) (自己吟味) (自己探究)
- ↓ (自己探究) (自己吟味) (自己探究)
- 唐人町かえっこショップ開きをする。 (自己更新)

このような活動展開において子供たちが創り出す学習内容は、①かえっこショップの楽しさを感じ取り、自分たちの手でかえっこショップを企画・運営していこうとする意欲をもつこと、②藤浩志さんやカランドパークにかかわる唐人町商店街の方々と一緒に、かえっこショップを作ったり開いたりすること、③唐人町商店街の方々と藤さんたちと一緒に、楽しい唐人町かえっこショップについて考え、唐人町商店街を利用する人たちにとっての楽しいたまり場になる工夫に気付くこと、④唐人町商店街は、地域の人たちにとってとても大切なふれ合いの場であることが分かり、マナーを守って正しく利用したり、自分から進んで働きかけたりすることである。

(3) 目標

- 1 上原さんや藤さんと一緒に力を合わせて唐人町かえっこショップを作り上げるなかで、唐人町商店街への愛着を深めるとともに、生活を拓くことの効力感や有用感をもつことができる。(人間性)
- 2 唐人町商店街の方々に「唐人町かえっこショップ」を提案し、責任をもって企画・運営するなかで、唐人町商店街は地域の人々にとって大切な商店街であることが分かり、マナーを守った正しい利用や活用の仕方に気付くことができる。(主体性・創造性)

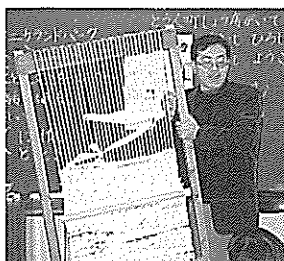
(4) 計画(約15時間)

隣	であう段階(3時間)	ひたる段階(9時間)	いかす段階(3時間)
活動と内容	1. これまでのあらつの町における学習について話し合い、藤浩志さんのかえっこショップを体験する。 ② ○ 地域における活動の求め 2. 上原さんにかえっこショップを提案する。 ① ○ カランドパークでのかえっこショップ作りへの意欲や自覚	3. 上原さんたちや藤さんと一緒に、カランドパークで唐人町かえっこショップを作ったり作り変えたりする。 ⑨ [計画→準備→ミニ・オープン→再準備] ○ 「みんなが集まる楽しいカランドパークにしよう」という思いからのかえっこショップ作りの工夫、協同活動の積み上げ ○ 唐人町商店街のもの・人・ことへの気付きや親しみの深まり	4. カランドパークで、唐人町かえっこショップを開く。 (1) ショップの準備をする。 ① ○ 見直しをもとにしたショップのセッティング (2) かえっこショップを開く。② ○ 唐人町商店街を活用する楽しさ、かえっこショップ開きをやり遂げた効力感・有用感
手だて	※ 藤浩志さんのかえっこショップ体験の設定や、子供の側からの上原さんへの活動提案	※ 地域の方々との協同活動の積み上げを実感できる活動や、自分たちのかえっこショップを見直す活動の設定	※ 子供たちの手による自主的なかえっこショップの運営 ※ 継続的な活動への励まし

(5) 指導の実際

① 唐人町にみんなのかえっこショップを開こうという思いをもつ段階（1～3/15時間）

この段階は、「唐人町でもっと楽しいことをやってみたいな。」という子供たちの求めを出発点とし、唐人町商店街でのさらなる活動への意欲や目的をもつことをねらいとしている。そのために、子供たちの地域における自己実現への願いのモデルとなるような実践をしている藤浩志さんの（街づくり活動を展開している芸術家）かえっこショップ体験をしたり、上原さんにカランドパークでかえっこショップをさせてもらえるよう提案したりした。



私は、藤さんにビニル袋の編み物を教えてもらいました。（中略）そして、「かえっこショップを一緒にやってみませんか。」といわれた時、私は、目をきらきらさせました。私は、お店の遊びが大好きなので、そういうことを唐人町商店街でやりたかったからです。もし、商店街の方がいいと言ってくれたら、お店を大繁盛させたいです。



私は、「かえっこショップをきっと楽しくしますのでどうかカランドパークを使わせて下さい。」と上原さんをお願いしました。（中略）上原さんが一緒にやりましようと言ってくれた時は、とても嬉しくて「やるぞ」と思いました。

【写真① ファクトリー体験】

【資料② かえっこショップへの思い】

【写真② 上原さんへの交渉】

【資料③ K児の感想】

考察①

「唐人町でもっと楽しいことをやってみたいな。」という子供の求めを出発点に、藤さんの街づくりの活動「子供かえっこショップ」と出会い、かえっこショップ体験(写真①)を行ったことにより、唐人町商店街におけるかえっこショップ開きへの意欲や目的をもち(資料②)、上原さんに進んでかえっこショップを提案する姿(写真②)が見られた(主体性)。そこでは、自主的な取り組みとしての意識を強めるとともに、上原さんや藤さんたちと一緒に力を合わせてかえっこショップを作り上げていこうとする思いを膨らませていく子供の姿が見られた。(資料③) (主体性・人間性)

② 上原さんや藤さんと一緒に唐人町かえっこショップを作る段階（4～12/15時間）

この段階は、上原さんや藤さんと一緒に力を合わせて唐人町かえっこショップを作り上げていく協同活動を通して、カランドパークの施設・設備の特徴(もの)や催しなど(こと)、唐人町商店街の方々や利用する人たち(人)への気付きやかかわり方、愛着が一体的に深まるようにした。

子供たちは、友達と協力したり、分からないところは藤さんや街づくりに取り組まれている仲間の方々に進んで尋ねたりしながら、意欲的に準備を行っていった。準備が整うに連れて、「早く唐人町カランドパークでかえっこショップを開きたいな。」という期待感が膨らんでいくと同時に、「本当にうまくいくのかな。喜んでもらえるかな。」といった気がかりな思いも子供たちのなかに生まれ、カランドパークにおいてかえっこショップをミニ・オープンさせようということになった。



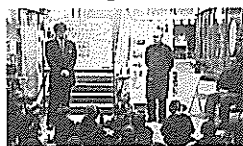
私は、ファクトリーの仕事をがんばります。小さく切ったトレーを針金に通しながら、小物作りをしてもらいます。もし小さな子が来たら手伝ってあげて、少しでもトレーを通せたらポイントあげます。でも、ちょっと不安なのが時間です。朝オープンするので、お客さんがあまり来ないかもしれないからです。

【写真③ カランドパークで作戦会議】

【写真④ 協同製作に取り組むK児】

【資料④ 準備ができたK児の思い】

【資料⑤ 「唐人町かえっこショップ」ミニ・オープン（唐人町商店街カランドパーク、10:30開店）】



・今日はミニ・オープンですね。上原さんや藤さんと一緒にがんばりましょう。



・宣伝係の人がお客さんを連れてきたよ。はじめてのお客さんだよ。さあ、がんばるぞ。



・ここは、ファクトリーだよ。がんばってお仕事しようね。私も手伝ってあげるからね。



・お仕事が終わったから、かえっこカードをもって、ポイントもらいにいくよ。



・3ポイントだから、緑のシールだよ。好きなおもちゃとかえっこしてね。

この試しの活動を通して、子供たちは、自分たちのかえっこショップが楽しく、利用する小さな子供たちやお母さん方にも喜んでもらえることを実感するとともに、かえっこショップのやり方が分かりにくかったり、カランドパークの通り道を塞いでしまったり、お客さんが少なかったりといった問題点があることに気付いていった。そして、子供たちは、オープンの時間帯を変更したり、「小さくする」「まとめる」という方向性でかえっこショップの全体像について考え、より楽しく喜んでもらえる唐人町かえっこショップを工夫していった。

考察②

子供たちは、積極的にかえっこショップの準備に取り組むとともに、上原さんや藤さんや友達と力を合わせてかえっこショップを作り上げる喜びを表現する姿が多く見られた(写真③, ④, 主体性・人間性)。これは、○子供たちの側から上原さんにかえっこショップを提案し、自主的で責任ある取り組みとして活動を展開したことや、○協力や分担が必然的に生じるかえっこショップの内容設定が有効であったためと考える。また、かえっこショップの内容や運営の仕方についての工夫の高めながら、唐人町商店街のもの・人・ことへの気付きや親しみを深めていく子供の姿を引き出すことができた。(資料⑥, 創造性)。これは、「かえっこショップの準備をする。」→「でも本当に楽しんでもらえるかな。」という思いから「唐人町かえっこショップをミニ・オープンをして(資料⑤), 問題点や工夫点を調べる。」→「かえっこショップを作り変える」という活動構成が有効であったためと考える。

③ かえっこショップを開き、カランドパークの利用に心地よさを感じる段階(13~15/15時間)

ここでは、上原さんや藤さんと力を合わせて作り上げてきた唐人町かえっこショップを開く活動を通して、唐人町商店街において生活を拓くことの満足感や有用感を味わうことをねらいとした。



【写真⑤ ショップ開きの様子】

私は、バungkだけではなく、お客さんを連れていったり編み物を教えたり大変でした。でも小さな子が「お姉ちゃんありがとう」と言って喜んでくれたので嬉しかったです。この前は、じゃまになるものが多くて迷惑をかけてしまったけど、今日は小さくしたので、よかったと思います。お店の人たちも来てくれて、「がんばってね」と応援してくれました。みんなの唐人町かえっこショップができてよかったです。

【資料⑦ ショップ開きをした感想】

考察③

かえっこショップオープン当日は、唐人町商店街に来る人たちに楽しんでもらおうと、進んで地域の人たちに働きかける姿やみんなで協力してかえっこショップを運営する姿(写真⑤, 主体性, 人間性)が見られた。これは、○よりよいかえっこショップ開きに向けての工夫を積み上げたことにより、自信や見通しをもってショップ開きを行うことができたこと、○上原さんや藤さんとの継続的なふれ合いの中で、かえっこショップに対する地域の方々の共感や協力が得られたことによるものとする。

4 全体考察

この学習においては、「みんなが楽しむことができる唐人町かえっこショップを上原さんや藤さんと一緒に開こう」という強い願いに支えられて、自分たちから進んでかえっこショップの提案をしたり(主体性)、責任をもって工夫しながら企画・運営をしたりする姿(創造性)が見られた。そこでは、上原さんや藤さんたちと力を合わせてかえっこショップを作り上げる喜びや、唐人町においてかえっこショップをやり遂げた満足感や有用感を味わうことができた(資料⑦)(人間性)。そこで本研究においては、①身近な地域とのかかわりの実態や子供たちの地域生活に対する求めに応じた教材化が有効であったこと、②「『唐人町かえっこショップを開こう』という思いを膨らます→唐人町かえっこショップを練り直しながら、唐人町商店街のもの・こと・人と継続的にかかわる→唐人町かえっこショップを開く」という地域との絆を創り出す活動構成が有効であったことの2点が明らかになった。

よりよく生活を更新する「あらつ学習」

総合部 高野 誠 一

1 主題の意味

○ 豊かな人間の育成を担うあらつ学習(総合的な学習の時間)の役割・立場

豊かな人間の育成をめざす教育課程を創造する上で、総合的な学習の時間は、生活の更新を担う学習である。生活更新の学習では、子供たちの生活現実を基盤とし、子供自身が生活現実を見つめ直し、更新していく資質や能力の育成が重要である。ここに、本校が子供の足下を基盤とした課題を追究していくことを大切にしている理由がある。本校の「あらつ学習」という名称の由来は、本校が位置する環境のすばらしさと環境や国際など社会課題先行の学習ではなく、あくまでも子供自身の生活を大切にしていることからである。総合的な学習の時間に取り扱う事象は、洗練され、捨象された文化とは異なり、極めて生活に近い複雑で総合的なものである。そこで、これらの生活課題を追究するためには、子供が自分の課題に向けて、能力を最大限に発揮することが要求される。子供の社会とのかかわりや自分自身の生活意識が問題とされる今日の現状と、環境問題や国際化など社会課題が山積しているという子供と社会の遊離した状況をふまえると、子供自身が生活を見直し、自分の生き方を考えることを突きつけられている問題であると言える。そこに、自分自身が生活の主体者として、自らの生き方を知の総合化を図りながら追究し続ける態度の育成が求められている。

○ よりよく生活を更新する「あらつ学習」とは

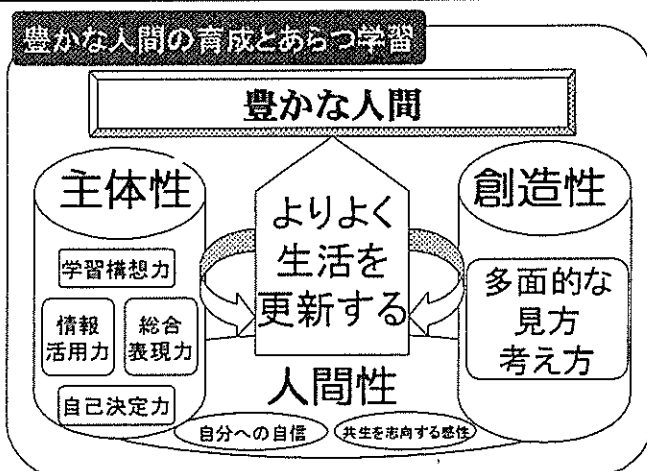
子供自身の身近な地域での生活を出発点とし、生活のなかで直面する疑問や自分自身の願いなど様々な課題について、こだわりや自分自身の能力、見方や考え方を生かし、疑問を追究したり、願いの実現に向けて行動したりする活動を通して、その課題に対して自分の納得のいく考えや行動、つまり自分の応えをつくりし、自分や自分の生活を見直していこうとする学習である。

あらつ学習では、子供の足もとである生活現実を中心に据え、疑問や不安、こうなりたいという願いなど、子供の求めを出発点とし、子供の主体的な追究を通して、自分自身のあり方を吟味、更新していく学習である。このあらつ学習で身に付ける資質能力は、次の3つである。

1つは、自分の追究を組み立て、表現し、生き方を考える力(主体性)。具体的には、自分の課題を追究するための方法や手順を考える学習構想力、課題に向けた追究・表現ができる情報活用力、総合表現力、生き方の方向を定める自己決定力などである。2つは、自分の課題解決のために、働かせる思考力(創造性)。具体的には、既有的知識を活用・応用したり、論理的・分析的に考えたりする多面的な見方・考え方である。3つは、活動の成就感や自分の成長、よさを自覚する自信と人間らしさを求める感性(人間性)。具体的には活動への効力感と「共生」の生き方を志向する感性である。

○ よりよく生活を更新する子供とは

- 自分の課題追究を構想し、情報活用・表現を繰り返し、生き方を定める子供 (主体性)
- 自分の課題解決のために、既有的知識を活用・応用したり、論理的、想像的に考えたりする子供 (創造性)
- 共生の生き方のよさを実感し、活動への成就感や効力感から自分に自信をもつ子供(人間性)



子供が生活現実から課題を設定し、情報を集め考えたり、実践的に活動したりして自分なりの納得いく考えや行動をつくりだしていく追究するなかで、主体性という学び方と創造性という考え方によって、課題解決が図られていくものである。その過程で、人間としてよりよく生きるために大切な感性や自分への自信が育まれていくものと考え。

これらの資質・能力について、系統を次のように考える。

【あらつ学習で大切にする資質・能力の重点化・系統化】

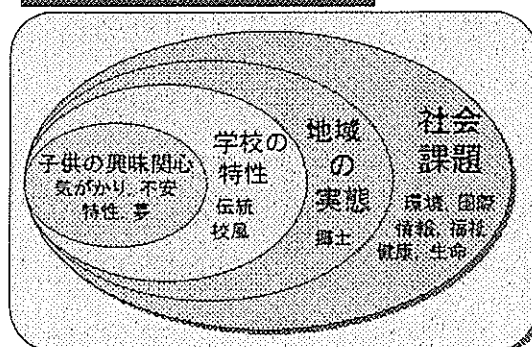
主 体 性	学習構想力	学習の手順や方法について、自分の追究の方向性や得意、興味関心などの傾向性から定めていく資質能力	
	・見通し	・課題解決の予想や手がかりをもとに計画を立てる	・自分の課題を細分化し、どんな応えが出そうなのか予測して計画を立てる。
	・修正	・行き詰まったとき新しい方法を考える。	・行き詰まりや失敗の原因を考えて、新しい方法を生み出す。
	情報活用力	解決したり探究したりする問題についての情報の集め方や整理の仕方に関する資質能力	
	・媒体選択	・身近なところでの取材や体験、図書資料、FAX など多様な媒体を活用して情報を集める。	・必要な情報について多様な施設の利用やインターネットやメールなどを活用して情報を集める。
	・収集技能	・見学や観察、インタビュー、電話の技能を身に付ける。	・施設利用やインターネット、E-mail の技能を身に付ける。
	・情報選択	・自分が進めている課題と情報とを比べて、自分に必要かどうか判断できる。	・自分の課題に合ったものを選んだり、多様な情報の共通点などから大切な部分を選んだりすることができる。
	総合表現力	自分の追究から得たことを伝えたり、目的に応じて発信したりすることに関する資質能力	
	・構成	・伝えたいことを決めて、順序や事実と意見を区別して表現する。	・目的意識や相手意識、状況意識をもち、これまで身に付けた表現を工夫する。
	・表現方法	・目的や相手に応じて、表現物や媒体を考える。	・目的や相手、自分の意図に応じて、効果的な表現方法を駆使する。
創 造 性	自己決定力	自分の生活を見直したり、これからの生き方を定めていく資質能力 他者の生き方のよさを取り入れ、自分の生き方を方向付ける。	
	多面的な見方や考え方	身に付けた知識を場面や状況に応じて、活用・応用することができる。 特色思考、原因と結果の思考、関係的な思考ができる。 直観的・想像的に考え、新しいアイデアや発想を生み出すことができる。	
	・経験的	既存の知識や経験を生かす	知識や経験を場面に応じて活用する。
	・論理的	情報を比べ、考えを広げる	分析、関係付け、構造化する。
人 間 性	・想像的	自分のイメージから新しい方法を考える。	直観的、想像的に、多様に方法を生み出す
	共生を志向する感性	自然や社会とのかかわりやこれからの社会の変化のなかでのよりよい自分の生き方を求めようとする感性 自然や社会と調和する生き方に気付き、規範やルールを自覚する。	
	自分の活動への自信（効力感）	これまでの自分を振り返って、よさを自覚し、これからの自分に希望をもち、よりよい自己をつくることへの自信 自分の考え方や学び方のよさに気付く。	
		様々な社会課題に直面して生きる人間のよりよい生き方について考える。 自分の考えや追究のよさを自覚し、自らの個性を伸長させようとする。	

2 学習の具体的構想

(1)「あらつ学習」の単元設定

本校の対象選定の特徴は、右図に表しているように、それぞれの課題の関連を図っていることにある。①の子供の興味関心や気がかりなどからの求めを中核に据え、②である学校の特色や③の地域の実情を踏まえて、子供の生活のなかでの具体的な場での活動や対象を選定することである。そのことが、結果的に④で表している現代的で総合的な課題へと、体験を伴い実感としてとらえていくことができる学習と成り得ると考える。

あらつ学習を構想する視点



具体的に、子供の身近な生活から学習対象を考えていく視点として、資質能力を高める、自力での追究を保障する、価値ある考えや行動に結びつくという3点から次のように条件を考える。

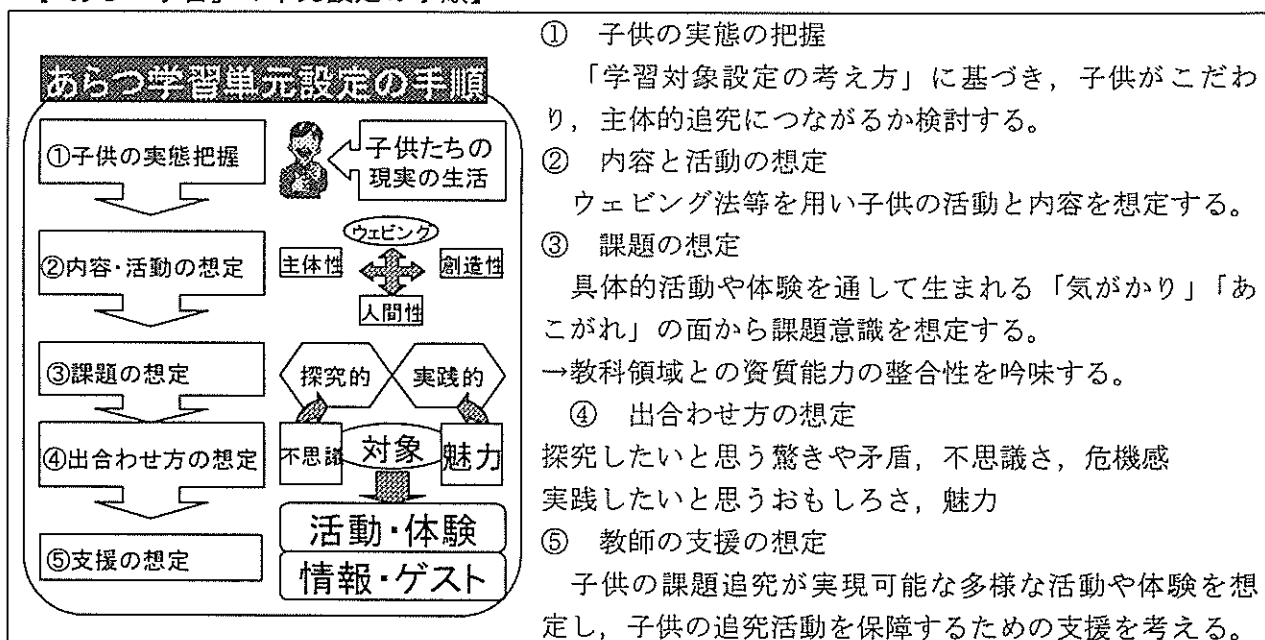
【対象選定の条件】

① 達成可能性	その学習対象との出会いのなかから、「あらつ学習」が目指す資質能力(主体性、創造性、人間性)が高まる追究が生まれるか。
② 追究可能性	その学習対象との出会いのなかから、本当に子供が自分で取り組める追究が生まれるか。追究へ向けての具体性・現実性を備えているか。
③ 社会課題性	その学習対象との出会いのなかから生まれる追究が、価値のある深まりと広がり の可能性をもっているか。
具体的には、今日的・現代的な課題から、次の8つの視点をもとに考える。	
環境	身近な自然環境の素晴らしさや世界的な環境問題へと向かう視点
福祉	身体の不自由な方とのふれあいやバリアフリーに関する視点
健康	自分自身の身体や心、自他の健康にかかわる視点
国際理解・協力	外国の文化の理解や尊重、外国の方との協力に向かう視点
情報	情報活用のリテラシーや情報社会に参画する視点
郷土・歴史・伝統文化	自分の住んでいる地域のよさや歴史、伝統の維持、継承に向かう視点
生命	動植物の生命や自分自身、他の生命を尊重する態度に向かう視点
自分自身	自分の特性、個性や自分の将来への夢や希望に向かう視点

これらの視点から、子供たちの身近な生活におけるもの・ひと・ことを分析し、子供たちがそれらの対象に出会い、追究を進める中で気付いたり、考えたりできる帰納的な学習を目指している。

このような条件から対象が選定され、次のような手順で、単元づくりをおこなっていく。

【「あらつ学習」の単元設定の手順】



(2) あらっ学習の単元づくりと教師の支援

あらっ学習での学習像を明確にすることは、単元で育てる資質能力を具体化し、各教科や領域との連動を明らかにするとともに、教師の支援をどのようにすればよいか想定できると考える。そこで、これまでの実践をもとに、子供のあらっ学習での活動を分析する。これまでの実践から、子供がもつ課題は2通り考えられる。1つは、子供自身が対象と出合ったとき、矛盾や驚き、不思議さを感じ、自分が納得のいく応えができるように探究的に追究する課題である。もう1つは、対象の魅力におもしろさを感じたり、活動の楽しさを感じたり、目的をもって行動したりする実践的な課題である。これらの課題は、出合う対象や自分の願い、活動の進行状況などによって異なり、自己追究、自己吟味、自己更新の学習活動が変わってくる。

【あらっ学習の活動の類型と支援】

	探 究 的 課 題	実 践 的 課 題
課題の内容	「不思議」と思ったことや「不安」に思ったことなどを問いとして構成し、調べ考えていく課題	「やってみたい」と思ったことや「自分もそうになりたい」と思ったことなどを目的として、実践をしていく課題
自己追究	- 対象と出合って、対象の不思議さや気がかりに思うことなどを感じる。 - 体験的な活動や具体的な数量の提示 - 課題に対しての予想をしたり、課題解決の方法を考えたりする。 - 解決方法の交流やあらっガイド - 課題解決のために、多様な情報収集や考え方を生かして自分なりの結論(応え)をつくる。 - 資料収集や見学等の支援	- 対象と出合って、楽しさやあこがれを感じる。 - 魅力的な活動や人などとの出会い - やってみたいことなどに対して、必要なことや準備するものなどを計画する。 - ゲストの招聘や施設等の紹介 - やってみたいと思った自分の目的や意図に応じて、自分の活動をつくる。 - 必要な道具や場所、ゲスト、協力者などの紹介
自己吟味	- 対象と自分とのかかわりなどについて振り返る。 - 自分の経験の掘り起こし - 課題に対して集めた情報を比べて、情報収集の計画などを見直す。 - 友達の追究との相互交流 - 自分の課題に対する応えが納得できるか、曖昧さはないか判断する。 - 中間報告会や課題別の交流	- 自分がやってきたこと、やろうとしていることが目的や意図に合ってるか、実際にできるか、効果的かなどを考える。 - 解決の見通しの交流 - 自分ができそうなことになっているか自分自身の技能と目的に合う行為の関係から判断する。 - 友達の計画との交流、自分自身の技能についての振り返り
自己更新	- 対象に対しての今までの自分の認識やかかわり方を変えていこうとする意識をもつ。 - 自分が追究してきたことを生かして発信したり、行動化したりする。 - 発信対象や場の設定	- 対象のすばらしさや問題を解決しようと目的をもつ。 - 実際に行為を試したり、第三者に評価を受けたりして、自分の行為を修正したり、強化したりする。 - 実現できる場や対象の設定

これらの課題は、単元や子供一人一人によって、その発現の仕方が変わってくると考えられる。具体的に言えば、次のような課題追究として成立すると考える。

- 1つの単元が、どちらか1つの課題として成立する場合
- 1つの単元に複数出てくる場合
 - ・ 順次出てくる場合 探究的課題 → 実践的課題 実践的課題 → 探究的課題
 - ・ 包含している場合 実践的課題の中に探究的課題が成立する

このように、類型して考えることで、子供の学習活動が明確になる。このことは、その対象との出会いによって高められる資質能力を明らかにし、教師の支援を想定することが可能になるのである。また、このような課題の設定は、子供自身によっても異なることも考えられる。

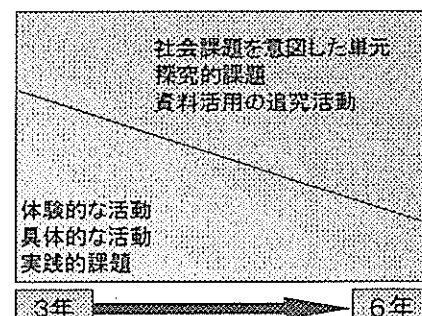
(3) 年間計画の作成について

あらつ学習において育てたい資質能力を重点化・系統化している(紀要参照)。このことで、次の2つの点からの年間計画の作成が可能になる。1つは、あらつ学習の学年配当である。もう1つは、各教科・領域との連動である。

ア あらつ学習の系統と年間配列

あらつ学習での単元の学年配当は、系統化した資質能力に応じて行っていく。具体的には、主体性、創造性、人間性の特性から割り出した資質能力に応じて、単元の学年での妥当性を判断することである。

主体性においては、中学年では、具体的な観察や調査の能力を重視している。また、子供自身の体験や活動を中心として行うことを考えると、単元設定としては、子供自身の身近な生活や対象を取り上げ、見たり聞いたりする具体的な活動を伴う単元を設定することが考えられる。一方、高学年では、具体的な体験もさることながら、インターネットやメールなどのメディアリテラシーを含めた情報活用力の育成が重視される。このことから、子供たちが上記のような情報媒体を活用しながら追究していく単元が望ましいと考えられる。また、自分の具体的な行動を評価できる観点から中学年では実践的な課題が中心となり、高学年に進むに従って自分の課題に応じた追究を自分自身で内省的に評価していくことを要求される探究的課題へと高まっていくものと考えられる。



創造性においては、中学年では自分の体験を基盤とし、見方・考え方の活用・応用の面から考えて比較したり、関係付けたりする見方・考え方が中心になるのに対して、高学年では分析的・科学的な追究を可能にする見方・考え方が要求される。このことは、単元において対象そのもののよさや不思議を追究していくような中学年と対象の背景や対象間の関係に言及する高学年という違いが現れてくると考える。

人間性においては、中学年では対象のもつ価値、伝統や自然などにふれ親しむことを中心にした単元が考えられ、次第に対象から社会課題にふれていくような単元として設定していく必要があると考える。

イ 教育課程全体から見た連動

① 文化課程との連動

教科の学習で獲得した知識・技能が「あらつ学習」が総合的に発揮できるように展開するようにする。言い換えれば、あらつ学習のなかでは、内容的な系統性をもつことはできない。しかし、逆に言うと、教科の内容や方法的な技能からは、あらつ学習での子供たちの追究が保障される必要がある。

また、教科学習とあらつ学習で、類似した対象を追究する場合が考えられる。このことは、子供のあらつ学習における強い求めを各教科の学習に活用するという形で展開されるものとする。これらのことから、次のような3つの連動が考えられる。

【資質能力に基づく連動】

○ 各教科の資質能力が発揮・活用される連動

あらつ学習で追究を進めるとき、各教科で身に付けている資質能力が総合的に発揮される場合

○ あらつ学習から各教科の資質能力を求める連動

あらつ学習で追究を進めるとき、各教科で身に付けるべき新たな資質能力を必要とし、各教科学習へ発展する場合

【追究課題における連動】

○ あらつ学習で追究している対象が各教科の学習へ発展する連動

あらつ学習で取り上げている対象を別の視点から取り上げ、同時並行的に各教科の学習を展開する場合である。このときに、各教科からあらつ学習へという発展や各教科の内容を融合するなどのことがないように配慮し、あらつ学習と各教科の特性に応じて、対象の並列化をする必要がある。

② 生活課程との連動

道徳の時間では、学校の教育活動全体での道徳的な体験やものの見方、感じ方、考え方を補充・深化・統合する役割を担っている。基本的には、子供たちの体験的な学びの中で出合った道徳的体験となり得る体験での道徳性を対象としたり、学習で出会った人物の生き方を自分の中に取り入れていくような学習として連動すると考える。具体的に言えば、次の2通りが考えられる。

○ あらつ学習での子供たちの体験を道徳的体験として、価値の内面的自覚を促し、一般化を図る。

○ あらつ学習で出会った人物の生き方に内在する価値を取り出し、内面的自覚を図る。

特別活動との連動においては、子供たちのあらつ学習から出発した活動が学級や学校全体に共通の課題として成立する場合を考えている。子供たちのあらつ学習の実現への願い、あるいは成果のもとに、学級として共通な役割分担や協力を必要としたり、学校全体への呼びかけをおこなって、全校での活動へと広げたりする場合である。

(4) 自己吟味から自己更新につながる評価

あらつ学習における評価は、評価の主体者によって、子供自身による評価と教師による評価に大別される。

子供自身による評価は、自己追究、自己吟味、自己更新の活動の姿によって明らかになり、自分の追究や生活、生き方を見直す過程そのものが評価機能をもっている。また、教師は子供の具体的な姿や表現物、子供への聞き取りなどをもとに、単元設定と支援の側面からの評価を行うこととする。

ア 子供自身による評価

本校では、あらつ学習においても各教科・領域においても自己追究・自己吟味・自己更新という活動によって学習像を明確にしている。なかでも、自己吟味の活動は自分の活動を目的に照らして評価していくメタ認知の機能をもっている。

この自己吟味は、課題の類型によって異なる。探究的課題の場合は、子供自身の情報活用の方法や自分自身の考え方を吟味していくのに対し、実践的課題の場合は、自分自身の目的達成のための技能や目的に応じた行動になり得ているかどうかを評価していくことになる。

イ 教師による評価

教師による評価は、単元レベルでの評価と教師の各段階での支援の評価の2つを考える。

① 単元の評価

単元の評価は、主体性、創造性、人間性の面から、その単元で育てるべき資質能力として具体化してマトリックスを作成し、評価基準を設定する。

このとき、子供一人一人の追究の活動観察やポートフォリオとして集積された資料等(プロセス)、子供の表現物(プロダクト)、子供の表現や実践的課題における活動(パフォーマンス)から評価していくことになる。このことは、単元の事象選定そのものや学年配当として適切かという年間計画修正の視点としても活用される。

② 支援の評価

子供の課題や追究の進行状況に応じた支援を行ったことと、子供の活動の変容をもとに評価していくものである。このときに、探究的課題と実践的課題など、子供の応えを求める方向に応じた支援が有効であったかを評価していく。このことで、実践的課題や探究的課題の支援のあり方を明確にする。

あらつ学習実践事例（第3学年）

1 単元名 ふやそう！守ろう！カブトムシ！ ～西公園カブトムシ復活大作戦～

2 本単元指導の考え方

本単元は、「西公園にカブトムシをふやしたい」という子供の強い求めを基盤に、計画した「西公園カブトムシ復活大作戦」を創造・実践できるように、子供の思いや願いを中心に課題解決を行うことができる総合的な学習である。学級集団としての活動目標の設定や集団として解決すべき課題が生じたときには、学級活動との連動も図っていく。本単元では、次のような子供の姿をめざす。

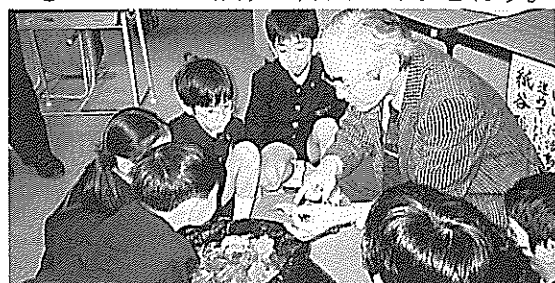
復活大作戦に必要な情報を収集したり、計画した復活大作戦の実践を行ったりする。	(主体性)
西公園の環境創造や環境保護、生命尊重の立場から復活大作戦を考える。	(創造性)
復活大作戦の実践までの過程を振り返り、活動に価値を感じたり自信を高めたりする。	(人間性)

3 学習の流れ(15時間・あつ11時間、学4時間)

(1) 1学期行った「カブトムシを育てよう」の学習を振り返り、活動目標について話し合う。(第1～2/4)

(2) 復活大作戦別のグループを編成し、目的達成のために、復活大作戦の内容の追究・吟味をくり返す。(あつ1～5/11 第3～4/4)

① グループ編成し計画づくりを行う。



【腐葉土の作り方の情報収集】

② 専門的立場の方を交えて計画の調整・吟味を行う。



【植樹、腐葉土場の許可依頼】

(3) 幼虫の放虫や腐葉土場作り、植樹などの復活大作戦の実践を行う。(あつ6～11/11)



【腐葉土場づくりと植樹実践】

4 学習の実際

(1) 活動目標を設定する話し合い活動

カブトムシの幼虫の飼育・観察、西公園の虫探し、育てた成虫を放す活動、夜の昆虫観察会などの活動を振り返った。その中で、西公園にはカブトムシが少ないことやクヌギの木が少ないこと、腐葉土が少ないことに気づき、カブトムシがたくさん住む西公園にしたいという求めを抱くようになった。そこで、活動の方向性についての話し合い、「西公園カブトムシ復活大作戦！」という活動目標を決定した。

(2) 復活大作戦を明らかにする追究活動

植樹、腐葉土場作り、幼虫の放虫、呼びかけという作戦別のグループに分かれて復活大作戦を追究した。

【植樹作戦を追究するT児】

- ・日の当たる植樹場所を調べる。
- ・グリーンマークを集める。



【腐葉土場作りを追究するK児】

- ・西公園に腐葉土場を検討する。
- ・九大の先生に作り方を聞く。



【幼虫を集めるM児】

- ・代表委員会で全校に呼びかける
- ・幼虫の世話を続ける。



【呼びかけ方法を追究するY児】

- ・公園管理課にお願いする。
- ・許可を頂く話し合いを進める。



許可をいただけないことが集団の課題となり、西公園での話し合い活動を行った。

(3) 追究・吟味してきた復活大作戦を実践する活動
復活大作戦の実戦に向けて活動を進めていった。

【K児の作文】カブトムシが好きなかんきょうを作ることができて「やったあ」と思います。

あらつ学習実践事例（第3学年）

1 単元名 博多のおもしろ外国人さんとふれ合おう

2 本単元の考え方

福岡市は昔からアジア交流の窓口として栄え、現在もアジアに開かれた国際都市をめざし発展を続けている。そのため、日常生活における異文化のもの・人・こととのふれ合いの機会も増え、子供たちの異文化に対する興味・関心は強い。そこで本単元では、子供一人一人の異文化への求めを学習の出発点とし、英語を活用しながら異文化のもの・人・こととふれ合っていきたいという思いを高める追究課題から、次のような子供の姿をめざすものである。

- | | |
|---|-------|
| 異文化の人に進んで働きかけたり、異文化について調べたりする。 | (主体性) |
| アジアの様々な国の人たちが英語を使ってコミュニケーションしていることに気づき、簡単な会話や遊びに必要な音声言語を活用することができる。 | (創造性) |
| 異文化の人々とのふれ合いに心地よさを感じ、親しみを深めることができる。 | (人間性) |

3 学習の流れ(12時間)

(1) 博多のおもしろ外国人さん(博多に愛着をもたれている方々の集まり)と出会い、追究課題をつくる。(1~4/12)



(Mさん)



(Rさん)



(Mさん)



(Eさん)

【博多のおもしろ外国人さんとの出会い】

(2) 課題追究を通して、博多のおもしろ外国人さんとふれ合う。(5~9/12)

① 簡単な会話や遊び、歌を通して、ふれ合う。



バンブーダンスに合う
フィリピンの曲を探して
練習しました。Mさんと
楽しく踊りたいです。

【Mさんと一緒にバンブーダンス】

② 異文化について調べる。

※(1)(2)は、並列的に展開する。

(3)「おもしろ外国フェスティバル」を開く。(10~12/12)



違う国の人たちが
お話しするのは、英語が役
立つことが分かりました。

【おもしろ外国フェスティバル】

4 学習の実践

(1) Mさんたちとの出会いから追究課題をつくる活動

子供たちは、博多のおもしろ外国人さんとの出会いのなかで、「アジアの国々の文化や生活、言葉について調べながら、ふれ合っていこう。」という願いをもち、外国語調べや遊び調べ、食べ物調べなど追究課題を決定していった。

(2) 課題追究を通して、異文化のもの・人・こととのふれ合いを深める活動

子供たちは、それぞれの課題について追究を行っていった。



・博多のおもしろ外国人さんたちとふれ合うために、あいさつや遊びなど簡単な英会話やその国の言葉について調べ、ふれ合いにおいて実践する。



・自分が興味をもったその国の特徴的な音楽や遊びなどについて調べたり、博多のおもしろ外国人さんと一緒に工夫したりしながら、継続的にふれ合っていく。

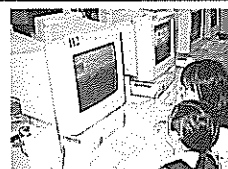


・自分が興味をもった外国の文化や生活などについて調べ、異文化についての感じ方や見方を表現物にまとめたり、友達との情報交換をしたりする。

そこでは、主体的な情報収集の力を発揮する姿も見られた。



福岡市博物館で
のアジア体験



インターネット
で情報収集



フェスタに参加(イン
ターナショナルスクール)

(3)「おもしろ外国フェスティバル」を開く活動

子供たちは、「おもしろ外国フェスティバル」を開いた。そこでは、異文化の人と楽しくふれ合う姿や、英語について学んでいきたいという思いを表現する姿が見られた。

あらつ学習実践事例（第4学年）

1 単元名 調べよう！伝えよう！附小の樹木

2 本単元の考え方

本単元は、校庭の樹木に対する疑問から、樹木の種類や葉の形、実のつき方、樹齢といった樹木の特徴を追究し、校庭の樹木に対する愛着を深めることができる総合的な学習である。校庭の樹木に関心を持ち、追究課題を設定し、追究していくことで、次のような子供の姿をめざすものである。

樹木の観察や図鑑での調査、樹木博士への聞き取りなど多様な調べ方をする。	(主体性)
樹木の特徴や記念樹にこめられた思いといった視点から見る。	(創造性)
校庭の樹木に対する愛着を深め、自分の追究のよさを感じる。	(人間性)

3 学習の流れ（18時間）

- (1) 特徴ある樹木との出会いや樹木ウォークラリーを行い、追究していく課題をつくる。(1～5/18)



【写真① 樹木ウォークラリー体験】

- (2) 自分の課題を追求していく。(6～15/18)

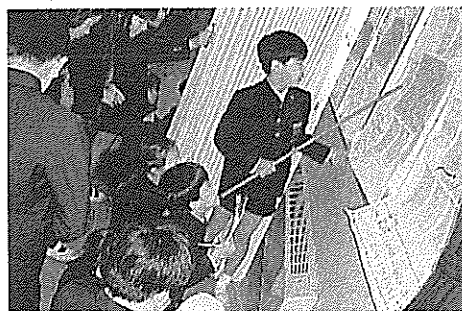
- ① 自分で追究活動を行う。



【写真② 幹を観察するN児】

- ② こだわり樹木マップにまとめる。

- (3) 3年生の児童を招いて、「附属小学校樹木発表会」を行う。(16～18/18)
・校庭の樹木に対する愛着



【写真③ 発表会の様子】

4 学習の実際

- (1) 樹木ウォークラリーを行い、課題をつくる活動

附属小樹木ウォークラリーを行った（自己追究）。子供は、今まで何気なく目にしてきた樹木が、いろんな特徴をもっていることに驚き（自己吟味）、樹木の名前や特徴を調べて他の学級の児童に知らせていきたいという思いをもった（自己更新）。そこで、樹木の種類や葉、実、記念樹といった自分のこだわりをもって調べていくことにした。

- (2) 自分のこだわりを追究する活動

樹木の種類、葉、実、記念樹といった自己の追究課題をを多様な追究方法で追求し、樹木マップにまとめていった。

【課題ごとの子供の追究活動】



＜樹木の葉を追究したI児＞
・葉の大きさや形を調べる。
・葉の紅葉について調べる。
・葉の種類について樹木博士に聞いて調べる。



＜樹木の実を追究したY児＞
・実の形や色、大きさについて調べる。
・図鑑で調べる。
・みどりの相談員に聞く。



＜記念樹を追究したK児＞
・校庭の記念碑を調べる。
・記念樹の名前を図鑑や同窓会誌で調べる。
・卒業生に聞いて調べる。

- (3) 追究をもとに「附小の樹木発表会」を行う活動

調べてきたことをこだわり樹木マップに表した子供たちは、3年生の児童を招いて「附属小学校樹木発表会」を開催した。

学習をする前は、附属小学校にある木は何本しか知りませんでした。でも、今はいろんな木の特徴を知っています。こんなにも木に魅力があるなんて思いませんでした。大切にしたいです。

あらつ学習実践事例（第4学年）

1 単元名 あらつお宝探検隊

2 本単元の考え方

本単元は、あらつにある古物・古美術やそれにかかわる人々の思いや願いに触れることを通して、子供たちが古くから伝わる物や身の回りにある物を大切にし、節度ある生活を過ごすことのよさを感じ取ることができる総合的な学習である。古い宝物が今日まで残り人々に大切にされるのはなぜか関心を持ち、自分なりの追究課題を設定し、追究していくことで次のような子供の姿をめざしている。

古物にかかわる人への聞き取りや観察、リフォーム体験など多様な調査活動を行う。（主体性）
 地域にある古物の意味を地域の独自性や伝統、消費といった多様な視点から考える。（創造性）
 繕いや転用といった行為にこめられた、物を大切にする心や伝統のよさを感じる。（人間性）

3 学習の流れ（19時間）

- (1) 自分たちのお宝集会やあらつお宝探検から、古い宝への興味・関心をもち課題をつくる。（1～5/19）



【第1回あらつお宝探検】

- (2) あらつの古い宝との出会いから生まれた課題について追究する。

- ① 自分の課題に会わせて追究計画を立てる。（6/19）
 ② 自分の課題に応じて追究する。

（7～16/19）



【転用や繕いの美について話を聞く】

- ③ 中間報告会を行い再追究する。

3 「あらつお宝研究会」を開き、結果や考えを発表する。（17～19/19）

- ・古いものを大切にしていこうことのよさについての交流
- ・自己の消費生活の見直し

4 学習の実際

(1) 古いお宝との出会いや探検から課題をつくる活動

自分たちのお宝集会やあらつの古いお宝との出会いから生まれた興味・関心をもち、自ら追究課題を設定させるところ右表のようになった。KJ法をもとに課題別にグループを構成し、調べていくこととした。

【子供が考えた追究課題】

- ・なぜ古くて壊れたものでも宝になるのか
- ・なぜ、あらつの町には古いお宝を扱う店がどこよりも多いのか。
- ・古いお宝を売る人や買う人にはどんな思いや願いがあるのか。

(2) 課題の解明に向け追究する活動

宝物の追究から、ものを大切にする人の生き方にまで多様な方法で追究を重ねていった。

【課題ごとの自己追究の様子】



古い宝物がなぜ大切にされているのか、見たり触ったりして調べるとともに、古い宝を売る人・買う人の思いや願いを聞き取りを通して調べる。



昔の人のものの転用や繕いという考え方や、現代人のリサイクルやリフォームとの違いや共通点、問題点をショップの見学や聞き取りを通して調べる。



あらつ以外ではどんな古いものが大切にされているのか、日本の古い宝・世界の宝について文献を通して調べ、宝物の条件は何かを調べる。

(3) 追究をもとに「あらつお宝研究会」を行う活動

調べてきたことや、自分が実践したこと（繕い・転用など）を、劇化、クイズ化、実物の展示、新聞など多様な方法で発表し、自分の生活を見直す姿が見られた。

【研究会の中での発言】

自分でリサイクルやリフォームをしてみて、「物には命がある」と考えた昔の人の気持ちがよくわかりました。これから、自分とものとのかわりを見直していきたいと思います。

あらつ学習実践事例(第4学年)

1 単元名 あらつの正月から21世紀へ

2 本単元の考え方

本単元は、あらつの正月の様子と自分が過ごす地方の正月の比較から、郷土の歴史・伝統への考え方や新年、とりわけ21世紀を迎える人々の思いを感じ取ることができる総合的な学習である。あらつの正月の様子と自分が正月を過ごす地域の正月との違いに関心を持ち、追究課題を設定し、追究していくことで、次のような子供の姿をめざすものである。

正月料理を作る人への聞き取りや実際に作る体験、図書など多様な調べ方をする。	(主体性)
地域の年中行事を地域の独自性や歴史、伝統、文化といった視点から見直す。	(創造性)
正月に込めた新しい年への希望を感じ取るとともに、自分の追究の成長を感じる。	(人間性)

3 学習の流れ(19時間)

- (1) あらつの雑煮との出会いや唐人町商店街の年末の様子から、追究していく課題をつくる。(1～6/19)



【あらつの博多雑煮の試食体験】

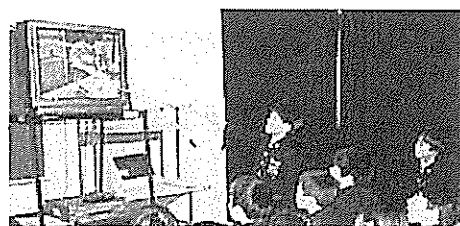
- (2) あらつの正月と自分の地域の正月を比較する課題について追究する。

- ① あらつでの追究を行う。
(7～15/19)



【しめなわづくりの体験】

- ② 自分の地域での追究を行う。
③ 中間報告会を行う。
(3) 保護者を招いて、「21世紀の正月発表会」を行う。(16～19/19)



【21世紀正月発表会の様子】

4 学習の実際

- (1) 博多雑煮や商店街見学から課題をつくる活動

あらつで食べられる博多雑煮の試食体験をおこなった。

子供は、普段自分の地域で過ごすことが多いため、いつも自分が食べている雑煮との違いに驚き、あらつの正月を知らないことを改めて感じ、関心をもっていった。そこで、学校近くの唐人町商店街であらつの正月の様子を調べることにした。唐人町商店街で、子供たちは正月の食べ物や飾り、行事にかかわるものを見つけ、それらを選択して自分の地域と比べていくこととした。

- (2) あらつと地域の正月を比べて課題を追究する活動

食べ物、飾り、行事と選択した課題を多様な追究方法で追究していった。

【課題ごとの子供の追究活動の様子】

	〈食べ物を追究したA児〉
	①唐人町商店街で調べる。
	②料理を作っている人に聞く。
	③料理の本で調べる。
	④正月料理作りを手伝う。
	⑤祖父母に聞く。
	〈飾りを追究したT児〉
	①飾りを売っている店に行き調べる。
	②飾りを作っている人に聞く。
	③飾りを作っている人と一緒に飾り作りをする。
	〈行事を追究したM児〉
	①博多の正月暦について本で調べる。
	②地域の歴史家に尋ねる。
	③行事を見学・参加する。
	④行事の主催者に尋ねる。

- (3) 調べてきたことをもとに発表会を行う活動

調べてきたことを保護者を招き、発表会を行っていった。

あらつと鹿児島では飾りの形や材料が違うけれど、一つ一つの材料に願いを込め飾りをつけることで新しい年への希望をもっています。正月が大切に思えました。

あらつ学習実践事例（第5学年）

1 単元名 探検！発見！ほっとけん！あらつの食のふるさと

2 本単元の考え方

本単元は、給食の食材の産地や流通の関係を調べることをきっかけにして、一食が成り立つまでにかかわる様々な人々の営みに対する感謝の念や安全や環境に配慮した食材選択や栄養摂取の大切さなどを感じ取っていく総合的な学習である。具体的には、給食の食材の生産・流通を主な学習対象とすることで、次のような子供の姿を目指す。

あらつの人々の食に対する願いと生産・流通のシステムのかかわりを調べる。（主体性）
 農薬使用、遺伝子組み替え、食品添加物など食にかかわる問題の解決の仕方を考える。（創造性）
 自分と食とのかかわり方を見直したり、栄養摂取のあり方を全校に発信したりする。（人間性）

3 学習の流れ（20時間）

- (1) 食材の卸元を概観し、追究課題を話し合う。（1～5/20）



【栄養士の先生から話を聞く】

- (2) 課題追究を行う。（6～16/20）

- ① 対象別グループで調べる。
 - ・K 製麺所、Kパン、Y蒲鉾店等の人々の願い
- ② 結果を表現・交流する。
 - ・食材に対する慈しみの心や生産・流通にかかわる人々への感謝の念を抱く。

- (3) 校内発表会に向けて話し合い、実践発表を行う。（17～20/20）

- ① 課題別グループごとに再調査し、発表会を行う。
- ② 食のかかわり方を実践する。
 - ・食とのかかわり方を見直し、実践意欲をもつ。



【校内での「食」探検発表会】

4 学習の実践

- (1) 食材の卸元を概観し、追究課題を話し合う活動

給食の献立調査、素材搬入先への聞き取りや校内搬入の様子を観察などの活動から、食材の生産・流通に関心をもった。さらに、卸元の K 製麺所、Y食品などの食料生産の様子を概観する活動から、「原料の入手先」「食料政策の移り変わり」「生産者の健康や安全への願い」など、主に生産・流通にかかわる疑問を焦点化し、追究課題をつくっていった。

- (2) 対象別グループで調べ、結果を表現・交流する活動

対象別の観察・調査や製作体験を通して、追究内容は食の歴史や添加物等の安全面へと深まっていった。そして、追究結果を表現物にまとめ、ワークショップを行った。

【対象別による追究活動の例】

	<唐人町K製麺所を対象としたI児> ・麺づくり体験 ・天然にがりの価値の追究 
	<博多区Kパンを対象としたY児> ・パンづくり体験 ・原料確保の変遷の追究 
	<港町Y蒲鉾店を対象としたO児> ・かまぼこづくり体験 ・食品添加物の是非の追究 

- (3) 校内発表会に向けて話し合い、実践発表を行う活動

新たに食へのかかわり方を付加した表現物をまとめ、校内発表を行うとともに、給食の残滓ゼロの取り組みを展開した。

【給食の歴史の追究から、捕鯨問題について考えるK児】

給食のメニューの移り変わりを調べると、その時代ごとに目的が違ってくることに気づいた。以前給食に出ていた鯨も今はメニューにはない。外国との食文化の違いからメニューも変わるの不思議だ。おばあちゃんのころの食べ物のメニューを考えると今は豊富だけど、ぼくは、好き嫌が多い。食べ物に感謝し、残さず食べようと思う。

あらつ学習実践事例（第5学年）

1 単元名 発見！博多の心

2 本単元の考え方

本単元は、博多の伝統的な祭りとして全国的に有名な、「博多どんたく」「博多祇園山笠」の歴史や伝統を調べ、祭りに込められた思いを探っていく総合的な学習である。博多の祭りに関心をもち、興味・関心があるテーマを設定し、追究していく中で、祭りにかかわる人の情熱、ものやことに込められた願いなどを自分なりに意味づけていくことで、次のような子供の姿をめざすものである。

- | | |
|---------------------------------------|-------|
| どんたくや山笠にかかわる人や諸行事などからテーマを決め、ねばり強く調べる。 | (主体性) |
| 祭りの成り立ちや時代背景による変容と、人々の願いなどを関係付けて考える。 | (創造性) |
| 博多の祭りに込められた願いに共感し、伝統を受け継ごうという心情を高める。 | (人間性) |

3 学習の流れ（15時間）

- (1) 博多どんたく・博多祇園山笠についての生活経験のふり返りや、祭りにかかわるもの・人・こととのあいをもとに博多の祭りの伝統を追究する課題をつくる。(1~3/15)



【山笠の当番町の方との出会い】

- (2) 博多の祭りについて、気がかりなことやもっと調べてみたいこと追究する。(4~13/15)

- ① 博多どんたくについて、テーマ別に追究する。
- ② 中間報告会を行い、どんたくの歴史と伝統について話し合う。
- ③ 博多祇園山笠について、テーマ別に追究する。



【櫛田神社での取材活動】

- (3) 博多の祭りに受け継がれている心について報告会を開く。(14~15/15)



【平成12年度研究発表会での報告会】

4 学習の実際

- (1) 祭りにかかわる人・もの・こととのあいから課題をつくる活動

どんたくや山笠を見に行ったり参加したりした経験を話し合った後、「地元なのに知らないことがいっぱいある。」という感想をもった。そこで、どんたくや山笠にかかわっておられる方をお招きして、交流を行い、様々な疑問を話し合った。その中で子供たちは自分の経験などから、疑問に思ったことやもっと調べてみたいことを出し合った。

- (2) テーマ別のグループをつくり課題を追究する活動

祭りの時期に応じて「どんたく」から調べていった。伝統的などんたくの踊りやその歴史、花自動車の歴史、どんたくの国際化などをテーマに、電話取材やインタビュー、インターネットでの調査などの取材活動に取り組んだ。

その後、追究方法と内容についての報告会を開き、調べ方について自己評価・相互評価を行った。

続いて、「山笠」のシーズンになると、「どんたく」での経験を生かし、比較しながら課題追究を行っていった。

【子供の追究課題と調べ方の例】

追 究 課 題	調 べ 方
山笠で歌われる「博多祝い歌」はどんな歌か。	・ 山笠の流れのある川端通りな・どに行っ て聞き取りをする。 ・ 全国の祝い歌と比べる。
山笠の流れごとの法被の模様のいわれは何か。	・ 博多町やふるさと館や櫛田神社の資 料館で調べる。 ・ 実際に着ている人に尋ねる。
山笠のかけ声の特徴は？	・ 郷土史研究家の方に尋ねる。

- (3) 祭りにみる「博多の心」発表会を行う活動

調べた時にお世話になった方などを招き、どんな心を発見したか、報告会を行った。「もっと郷土の祭りにかかわっていきたい。」という声が多く聞かれた。

あらつ学習実践事例(第5学年)

1 単元名 明治通りは車がいっぱい

2 本単元の考え方

本単元は、あらつを通る福岡市の主要幹線道路である「明治通り」の交通量の多さに着目し、子供たちが交通や車社会と人間の生活との関係について考えることができる総合的な学習である。あらつの明治通りの交通量からその多さに不思議さを感じたり、車が多いことからの不安を感じたりすることで、探究的な課題を設定する。その探究から次のような子供の姿を目指すものである。

明治通りでの観察、騒音・大気の科学的追究、聞き取りなど効果的な情報収集をする。(主体性)
 車の利用と生活との関係や環境への影響、道のつながりなど、背景を多面的に考える。(創造性)
 車社会の中で環境と調和して生きる大切さを感じるとともに、追究への自信をもつ。(人間性)

3 学習の流れ(14時間)

- (1) 明治通りの交通量調査から、車利用の背景や環境への影響などの不安をもち課題をつくる。(1～4/14)



【明治通り交通量調査】

- (2) 明治通りの交通量の多さから生まれた課題を自分なりに追究する。
- ・車が多い理由は(背景)
 - ・車が多くて大丈夫(影響)
 - ・車は減らせないの(解決)
- ① 自分の課題に合わせた追究計画を立てる。(5/14)
- ② 自分の課題に応じて追究する。(6～11/14)



【大気の調査活動】

- ③ 中間報告会を行う。
- (3) 自分の家庭生活での実践について考え、実践する。(12～14/14)
- ・福岡市や自分の家庭での車利用を減らす取り組み

4 学習の実際

(1) 明治通り交通量調査から課題をつくる活動

あらつの明治通りの黒門、西公園、荒戸の3カ所での交通量調査を実施した。調べた5分間ほどの時間に320台以上の交通量があることに驚きを感じたり、不安感を感じたりしていた。そして、子供たちの不安や疑問をKJ法で整理した。その結果、「車が多い理由」「車が与える環境への影響」「車を減らす取り組み」という大きな課題の方向性をもっていった。

(2) 明治通りが抱える課題を追究する活動

車利用のわけ、車の影響、車を減らす取り組みについて追究していった。

【課題別に取り組んだ追究活動】

	＜車利用のわけを追究したY児＞ ① 明治通りで車を利用する人に尋ねる。 ② 交通量を方向別に調べる。 ③ 明治通りのつながりを地図で調べる。
	＜車の影響を追究したK児＞ ① 車の騒音について、簡易騒音測定器で調べる。 ② 福岡市内の騒音の様子を資料で調べる。 ③ 地域住民にアンケートをする。
	＜減らすことを追究したN児＞ ① 車の利用量の推移について資料で調べる。 ② 車を減らす取り組みを市役所に尋ねる。 ③ バスの運転手さんに尋ねる。

(3) 課題追究をもとに家庭実践を行う活動

調べてきたことを保護者に伝え、車利用について家族で話し合う場を設け、車利用を見直した。

車を利用するよさは分かるけれど、やはり福岡市でおこなっているノーマイカーデーのように、一人一人が気を付けて車の利用を考え直す必要があると思いました。

【家の人と話してみて】

あらつ学習実践事例（第6学年）

1 単元名 地域の魅力発見！再発見！「あらつ遊学ツアー」

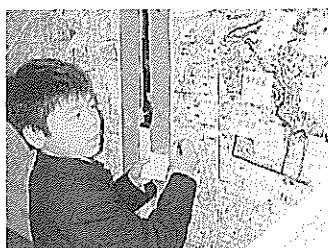
2 本単元の考え方

本単元は、これまでにかかわってきた地域「あらつ」のさまざまな魅力あるもの・人・ことを遊学スポットとして見つめ直ししながら、自分のテーマをもとに遊学コースして関係づけ、地域の魅力を満喫できるあらつ遊学ツアーをつくり上げていく総合的学習である。あらつの魅力を再発見しながら、自分なりに関係づけ・価値づけする追究のなかで、次のような子供の育ちをめざしている。

- ・情報収集・見学調査など多様な方法・効果的な方法を組み合わせ地域に働きかける。（主体性）
- ・既得知識や学習経験を生かしながら地域の魅力を多面的・構造的に考え価値づける。（創造性）
- ・地域のもの・人・ことへの理解や愛着を深め、地域社会へのよりよい参画を求める。（人間性）

3 学習の流れ（20時間）

- (1) 地域の魅力を話し合っ、遊学ツアーのテーマと追究計画を決める。（1～4/20）

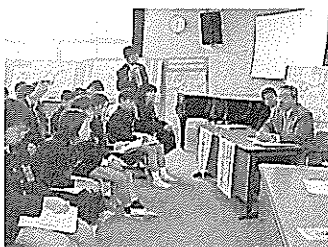


【どんなテーマにしようかな】

地域「あらつ」を、遊学スポットとして見つめ直してみると、新しい魅力発見ができそうだな。

- (2) テーマと計画をもとにツアーをつくる。

- ① 調査見学・情報収集を行いながら遊学スポットとコースを考える。（5～8/20）
- ② 中間報告会を行い、考えたツアーのよさや改善点を相互に話し合う。（9/20）

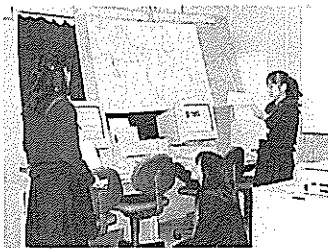


【ゲストを招いて報告会を】

友達のよい点を探り入れたり、自分の不十分などころをよりよくしていくための方法を考えよう。

- ③ 再取材をして遊学マップやガイドをまとめツアーを創り上げる。（10～15/20）

- (3) ツアーを紹介し試し合う。（16～20/20）



【友達のツアーを試したいな】

一つ一つは違ったものでも、どれも共通するあらつのよさやあらつの人々の願いがこもっている。

4 学習の実践

- (1) 遊学ツアーを創る計画を立てる活動

さまざまな観光資料や修学旅行での長崎市遊学体験をもとに、地域「あらつ」の魅力を話し合うなかで、子供たちは地域の魅力を満喫できる遊学ツアーをつくる活動への求めを抱いた。そして、遊学スポットについての情報収集・整理を行い、自分がつくりたい遊学ツアーのテーマと追究方法を見通した。

- (2) 計画をもとに遊学ツアーをつくる活動



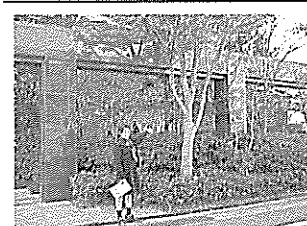
あらつの味と自然追究

古くから続いている菓子づくりとその背景にある自然とを関係づけながら、ツアーを構成していく。



あらつの伝統の追究

あまり知られていない古いものとその価値を見出しながら、その伝統を味わうツアーを構成していく。

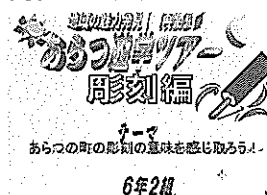


あらつの新しさ追究

百道エリアの新しい施設や建物を調査し、新しい町作りとその意義を味わうツアーを構成していく。

- (3) 遊学ツアー発信したり実践したりする活動

保護者を招いた発表会やそれぞれのツアーを相互に試し合う活動を通して、地域への愛着や活動への自信を高めた。



6年2組

あらつ学習実践事例（第6学年）

1 単元名 第6学年 発信！ぼくの・わたしのあらつこだわり情報

2 本単元の考え方

本単元は、自分の考えるあらつの魅力（テーマ）からあらつのもの・人・ことを関連づけたり、価値づけたりしながらこだわり情報としてまとめ、先輩から受け継いだホームページの内容を更新し、発信していく総合的な学習である。単元を通して、次のような子供の姿を具体化していく。

自分のテーマに沿った魅力が伝わるように、効果的な表現内容や表現方法を工夫すると共にネチケットに留意した情報発信をする。 （主体性）

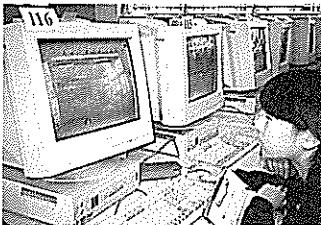
自分のテーマから複数のあらつのもの・人・ことを関連づけ、あらつこだわり情報として再構成していく見方や考え方を深める。 （創造性）

あらつの魅力を再構成し、発信するよりよい学校や地域とのかかわり方に自信を高めると共に、愛着を深める。 （人間性）

3 学習の流れ（27時間）

- (1) 先輩のホームページを閲覧し、あらつの魅力について内容を付加して発信していく活動目的をもつ。

(1～5 / 27)



去年の先輩達のように、ホームページの内容を考えて、附小のホームページを新しくしていきたいな。

【先輩のホームページ閲覧】

- (2) テーマごとにあらつのこだわり情報をまとめた自分のホームページをつくる。 (6～25 / 27)

- ① こだわり情報を取材する。
- ② 企画書にもとづき、効果的な表現方法を工夫しまとめる。
- ③ ページのよさや改善点を見直す中間報告会を行う。



開くのにこんなに時間がかかったら、電話代もかなり高くなる。データの容量を減らさないとイケないな。

【データ容量の吟味活動】

- ④ 再取材・再編集を行う。
- (3) 完成したホームページを先輩と交流し、発信する最終報告会を行う。 (26～27 / 27)

4 学習の実際

- (1) ホームページ作成の目的をもつ活動

本校の先輩がつくったホームページを他校のものと比較する出会いから、あらつの魅力を付加する活動目的をもっていった。さらに、4年生の追究と比較させることで、自分なりのテーマを設定し、あらつの魅力に関連づけたり、価値づけたりする必要性を捉えていった。

- (2) あらつこだわり情報をまとめる活動

自然、歴史・伝統など各自のテーマから、あらつの魅力を再構成しながら、表現内容や表現方法にこだわりを発揮したページを作成した。

【テーマごとの追究活動】

大濠公園ストーリー 大濠公園は昭和2年に作り始めて、昭和メートル、池を中心としてできています…… 大濠公園の生物 	〈自然の魅力を追究したH児〉 ・西公園・大濠公園の動植物や保護する人々の調査 ・先輩から画像処理の仕方を情報収集したページづくり
	〈伝統のよさを追究したK児〉 ・博多手染めの体験や能楽堂で能を守るMさんへの取材 ・クイズ形式でリンクをはったページづくり

また、データ容量を読み込みにかかる時間で計る活動やページの内容や方法を先輩と吟味する活動から、ネチケットに留意した情報発信への意識が高まり、さらに取材・編集を行った。

- (3) 更新したページのよさを交流する活動

先輩へ更新したページを見てもらう最終報告会を行った。そのなかで、ページを更新した価値を感じ、自校への愛着を深める姿が見られた。

仲間と共に学校生活を築く特別活動

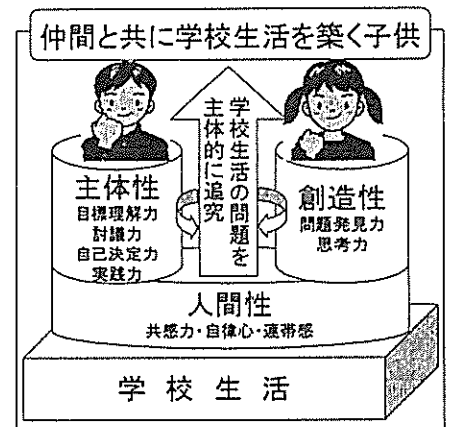
特別活動部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う特別活動の役割・立場

豊かな人間の育成のために特別活動に求められているものは、望ましい集団活動を指導原理とするその特性を生かして、よりよい社会生活を民主的に営んでいくために必要な基礎的な力を育成することである。すなわち、集団を形成する仲間と力を出し合って、自分たちの生活をよりよい生活へと創り直していく自治的な力の育成である。この民主社会を営んでいく上で基礎となる自治的能力を育てる場合は、学校教育においては特別活動が大きな役割を担っているといえる。そこで、こうした自治的能力を育てていくためには、子供たちがしっかりとした問題意識をもち主体性、創造性を発揮しながら自分たちで自分たちの生活を創り出していくという活動を積み重ねることが大切である。その過程において豊かな人間性が培われていくのである。

○ 仲間と共に学校生活を築く特別活動とは

仲間と共に学校生活を築くとは、学校生活の主体者である子供たちが、自分たちの生活の向上をめざして、「やってみたい」とか「解決したい」という問題を取り上げ、それを自分たち自身の力で実際にやったり、解決したりしていくことである。そのためには、子供たちの思いや願いを民主的な手続きを経て調整しながら一つのまとまった合意あるものにする力や、役割を分担しその役割を責任もって果たすといった力が必要となる。そこで、仲間と共に学校生活を築いていく過程において育てたい資質や能力は、集団の目標を理解し、その目標を達成するために自分の意思を決め、集団の合意を生み出す討議力や、役割を分担して活動を遂行する力である。また、その過程においては、生活を創り出すために、諸問題に気づき、自分や集団の在り方を考える力や、友達の考えや行動を共感的に理解し、集団の目標達成のために自分を律して友達と協調する力を育てたい。



仲間と共に学校生活を築く特別活動とは、個や集団の発達段階に応じて、集団として解決していく問題の難易度をやさしいものから難しいものへと段階的に高めながら、その解決のために話し合い、集団決定し、実践するといった活動を積み重ねていくことである。つまり、子供たちが、問題解決のための活動目標を設定し、その目標を達成するために、特に主体性を大切にしながら、創造性を発揮して自分たちの学校生活を自分たちの手で向上させていく活動を積み重ねることで、豊かな人間性を育んでいくことである。しかもその活動は、子供たちにとって必然性があり意味のある活動でなければならない。特に、子供たちの学校生活は、その大部分が学級という集団を基盤にして展開されることを考えると、学級活動においてこれらの資質や能力を育てることが大切である。

○ 仲間と共に学校生活を築く子供とは

- 自分の考えを表出し、友達の考えも受け入れながら集団としての合意を生み出し、決定したことに對して自分の役割を責任もって果たす子供 (主体性)
- 学校生活をよりよくするために学校生活や学級生活上の問題を見つけ出し、それを解決する方法を考えることができる子供 (創造性)
- 友達の考えや行動を共感的に理解しながら、友達と助け合ったり、自分を律したりして協力して活動する子供 (人間性)

【特別活動（自主的活動）で育てたい資質・能力の系統化・重点化】

学年	低学年	中学年	高学年
主体性	目標を共通化する力 みんなで話し合って、共通の目標を決めることができる。	集団で設定した目標を達成するためには、協同で取り組む必要があることをとらえることができる。	集団の目標を達成するために、集団の中で自分は何をすればよいのかとらえることができる。
	集団決定を生む討議力 自分の思っていることをはっきり話したり、友達の話を静かに聞いたりすることができる。	自分の考えの根拠を明らかにし、友達の考えのよさを受け入れながら話し合うことができる。	自分の考えと根拠を論理的に説明し、友達の考えを受け入れながら話し合うことができる。
	集団の中で自己決定する力 目標を達成するためにみんなで何をするのか自分の考えをもつことができる。	目標を達成するための方策を多面的に考えて、自分の意思を決定することができる。	目標を具現化するための効果的な方策を多面的に考えて、自分の意思を決定することができる。
	責任もって実践する力 みんなで決めたことをあきらめないで最後まで行うことができる。	集団で決めたことに対して、自分の役割を理解し、最後まで責任もって行うことができる。	集団で決めたことに対して、自己の役割が集団に及ぼす影響を考え、責任もって行うことができる。
創造性	学校生活上の問題を発見する力 学級生活を送っていく上で、学級の向上につながる身近な問題に気づくことができる。	学級や学校生活を送っていく上で、学級の向上につながる身近な問題に気づき、それを集団に提起することができる。	学級や学校生活を送っていく上で、学級や学校の向上につながる問題に気づき、それを集団に提起することができる。
	問題を工夫して解決する力 学級生活上の問題を解決するために、みんなでどんな活動をすればよいのかを考えることができる。	学級や学校生活上の問題を解決するために、集団でどんな活動をすればよいのかを考えることができる。	学校生活上の問題を効果的に解決するために、集団でどんな活動をすればよいのかを考えることができる。
人間性	相手に共感する力 一人一人の違った感じ方をあたりまえのこととして大切にすることができる。	自分の経験をもとに、友達の気持ちを考えることができる。	相手と同じ立場に自分を置いて友達のことを考えることができる。
	自分を律する力 集団活動や友人関係などを通して、周囲が自分の思いどおりにならないことを知ることができる。	集団の一員として、意見の違う友達とも協調して活動することができる。	集団の目標を達成するために、意見の違う友達とも調整を図りながら活動することができる。
	仲間と連帯する力 みんなで一緒に活動することの楽しさを味わうことができる。	集団だからこそできる活動があることを知りその喜びを味わうことができる。	所属する集団に愛着をもつことができる。

集団と自己を見つめる学級活動の展開

特別活動部 矢野俊次

1 主題の意味

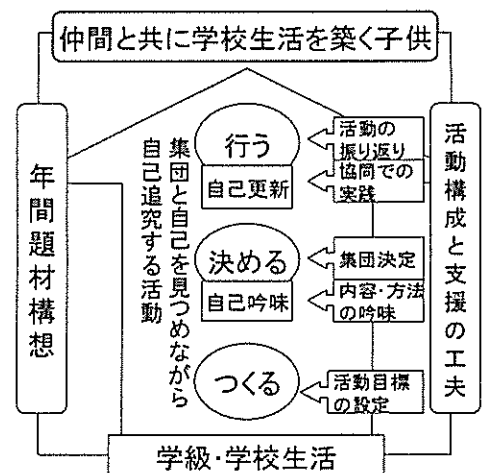
(1) 集団と自己を見つめる学級活動とは

活動目標の達成に向けて、集団の在り方や集団の一員としての自分の在り方を問いながら、自分の役割を自覚し、その責任を果たす活動のことである。

集団と自己を見つめるとは、活動目標の達成に向けた話し合いや実践活動において、学級がどうあらなければならないのか、学級の一員として自分がどうあらなければならないのかを見通したり、振り返ったりすることである。つまり、学級や学級の一員としての自分が、どのようなかわりができるのか自己追究し、どのようにかわっていかなければならないのか自己決定（自己吟味）していくことである。そのためには、活動のイメージをもったり、話し合いを通して多面的な情報を取り入れることが大切になってくる。そして、実践活動を行う中で自己を見つめ直し、自分や学級のよさをとらえ学級の一員としてのほこりをもつことである（自己更新）。このような集団と自己を見つめる学級活動は、仲間と共に学校生活を築いていく資質や能力を育てていくことができると考える。

(2) 集団と自己を見つめる学級活動の展開とは

集団と自己を見つめる学級活動の展開とは、子供の主体性の高まりを見通して、活動に対して一人一人が担う責任の重さが段階的に増していくような年問題材構想を立てる。そして、子供の学級生活上の願いや気がかりを大切にしながら、子供側から立ち上がってくる題材を精選し、重点題材として位置付け活動を積み重ねていくことである。そのために、学級だけの活動から他の学級や学年も巻き込んでいく活動へと段階的に活動の対象を広げていく。このことは、自分の活動に対する責任を重くするだけでなく、自分たちだけの判断だけでは活動の内容や方法を決められない



といった状況が生まれ、体験的な活動を通して情報を集め、自分の考えに明確な根拠をもってから話し合いを行う必要性がでてくる。そして、全員が共通の活動目標の達成をめざして、意見をぶつけ合い、友だちの考えも理解し合いながら活動の内容や方法を集団決定し実践していく。その過程で、集団の一員としての自己の在り方を多面的に見つめて自分の意志を自己決定する力や、決まったことを最後まで責任をもって遂行する力、相手に共感し集団のために自分を律するといった力などを培うことができるのである。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- 学級生活上の問題を見つけ出し、それを学級の一員として協同で解決しながらよりよい学級生活をつくり出している子供。 (自己追究)
- 自分の考えの根拠を明らかにして話し合い、集団で取り組む活動に対して自分がどのようにかわっていかなければならないのか自己決定している子供 (自己吟味)
- 自分の役割を責任をもって遂行し、全員で力を合わせて活動することのよさや、自分や集団の向上を確かめている子供 (自己更新)

2 学習の具体的構想

(1) 主体性の高まりに応じた年問題材構想について

学級生活の中から問題を見つけ出し、それを自分たちの手で解決していくという主体性を大切にしながら題材を構成する。その過程で創造性、人間性を高めていく。1学期は、自分たちのための活動をその内容や方法を決定し最後まで実践するという点を重点にした題材。2学期は、自分たちのことだけでなく他者の立場も考えるという視点を付加した題材。3学期は、他者と一緒に行うという視点を付加した題材を位置付ける。このことで、活動に対して個が担う責任が段階的に大きくなっていくようにする。このような年問題材構想に従って、子供の学校生活から生じる願いや気がかりを大切にしながら、教師の投げかけや出合わせ、活動の振り返り、あらつ学習との連動などを図りながら、子供側から自主的に題材を立ち上げさせて、年間を通して活動を積み重ねていく。

	1学期重点題材	2学期重点題材	3学期重点題材
題材の条件	----- 個が担う責任が段階的に大きくなるように -----> ○ 一人一人に役割とその責任が生じる題材	○ 他の学級や学年とのかかわりがある題材	○ 他の学年の子供を対象とし、学級としての責任を担う題材
話し合いの焦点化	○ 学級の夢や希望が話し合いの中心となる議題	○ 学級外の他者の立場が話し合いの中心となる議題	○ 学級や自分の在り方が話し合いの中心となる議題
内容	○ 自分たちで活動目標、活動内容を決めて実践していくこと	○ 自分たちの活動を、他者の立場も考慮して決定し、実践していくこと	○ 自分の役割を理解して組織的な活動を実践し、その喜びを味わうこと

(2) 集団と自己を見つめる基本的な活動構成

子供の学級生活が、仲間と共に学校生活を築くために自己追究している活動ととらえ、その活動を「つくる」「決める」「行う」の3つの段階から構成する。つくる段階では、共通の活動目標を立て、「学級や自分は何をしたらよいのか」という視点から自分の考えをつくることができるように、実践活動をイメージし自分の考えに根拠をもつ活動を位置付ける。決める段階では、お互いの考えを表出し合い、活動目標の達成という視点から学級が取り組むべき活動を吟味し、集団決定していく（自己吟味）。行う段階では、決定したことに従って実践活動を行い、学級や自分のよさを味わう振り返りの場を設定する（自己更新）。

	子供の学校生活（自己追究）		
	つくる	決める（自己吟味）	行う（自己更新）
見つめる視点	「学級や自分はなにをしたらよいのか」	「学級や自分はどのようにかかわっていかなければならないのか」	「学級や自分はどんなにかかわりができたのか」
ねらい	活動目標を設定し、その目標を達成するための自分なりの考えをつくる。	根拠を明らかにして話し合い、学級として取り組む活動を集団決定する。	役割を分担して実践活動に取り組み、学級が行った活動を価値づける。
主な活動と内容	1 活動目標を設定し、自分の考えをつくる。 (1) 活動目標を設定する。 ○ 活動目標の設定 (2) 活動目標達成のための方法を探る。 ○ 考えをつくること	2 問題の解決策や活動案について話し合い決定する。 ○ 学級集団や自分の在り方を考えること ○ 活動目標の達成という観点から集団決定すること ※ フィードバックして集団決定のための情報を求める。	3 協同で実践し、評価する。 (1) 計画に沿って実践を行う。 ○ 自己の役割の遂行 (2) 学級目標実現の観点から活動を振り返る。 ○ 自己や学級の向上の実感
手だて	※ 活動を自主的に立ち上げさせる工夫 ※ 学級生活上の問題を共通化するための資料の提示 ※ 体験的活動の設定	※ 支持的雰囲気をつくる工夫 ※ 考え表示カードの活用 ※ 集団での対応の仕方を探るための資料の提示 ※ 司会マニュアルの活用	※ 活動状況が分かる掲示物 ※ 向上が分かる資料の提示 ※ 肯定的評価 ※ 自己の向上を見つめ自己評価を促す学習ノート

(1) 題材名	第4学年	1学期重点題材	学級のシンボルとなる4の1ガーデンをつくろう
		2学期重点題材	花キューピット大作戦をしよう
		3学期重点題材	樹木ウォークラリー2001を企画しよう

本学級の子供たちは、4月に、学級目標「財産いっぱい、にこにこ学級」に向けて、みんなで助け合い、鍛え合い、認め合いながら4の1の財産を増やしていこうと財産づくりの旅を出発させた。この目標の具現化に向けて、次のような年間題材構想のもと重点題材を選定し活動を行った。

	1 学期重点題材	2 学期重点題材	3 学期重点題材
	----- 個が担う責任が段階的に大きくなるように ----- ➡		
題材	学級のシンボルとなる 4 の 1 ガーデンをつくろう (4 時間+課外)	花キュービット大作戦をしよう (3 時間+課外)	樹木ウォークラリー 2001 を企画しよう (4 時間+課外)
ねらい	自分たちで活動目標や内容を決 定し、それを粘り強く実践してい くことができる。	他者の立場を考えて活動内容を 決定し、自分の仕事に責任をもっ て実践活動を行うことができる。	自分たちで活動を企画し、組織 的に実践活動に取り組むことがで きる。
活動 と 内 容	1 花係の提案を受け、動物広場 をガーデニングする意義や活動 目標について話し合う。 ○ 活動目標を設定すること 2 4 の 1 ガーデンのガーデンプ ランについて話し合う。 ○ ガーデンプランを決めること ※ 海の中道へガーデニング見学 ○ 役割分担をすること 3 新たな問題を解決しながら協 力してガーデンをつくる。 ○ 新たな問題の解決 ○ 学級のよさの感受 ※ 児童集会の活用	1 1 学期の活動を振り返り、2 学期の活動目標を設定する。 ○ 学級のよさと不十分さをとら えること ※ 活動を振り返る VTR や日記 の活用 2 低学年を喜ばせる活動につい て話し合う。 ○ 低学年の立場になって活動内 容を決めること ※ 低学年へのインタビュー調査 3 分担して花を育て、全校に花 のプレゼントをする。 ○ 自己の責任の遂行	1 12 月に行ったあらつ学習で いただいた思いから活動を立ち上 げ、活動目標を設定する。 ○ 活動目標を設定すること ※ あらつ学習との連動による活 動の立ち上げ 2 学級としてどんな取り組みを 行うのかについて話し合う。 ○ 学級集団や自分の在り方を考 えること 3 準備を行い、樹木ウォークラ リー 2001 を実践する。 ○ 組織的な運営をすること ※ 全校を対象とした集会の運営

-215-

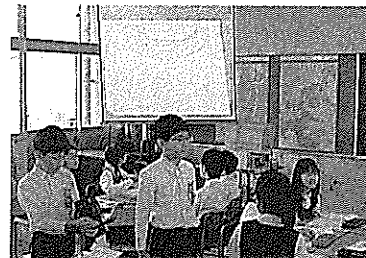
(3) 指導の実際

① 1学期重点題材「学級のシンボルとなる4の1ガーデンをつくろう」

この題材は、子供たちの「学級のシンボルをつくりたい」という願いと花系の「学級の花壇をつくりたい」という願いが融合されて立ち上がった題材である。子供たちは、議題を「4の1の夢や希望を表すガーデンの形を決めよう」に焦点化し、学級会を開いていった。(写真①)

C1 私は、ハート型のガーデンがいいと思います。みんながやさしい心でいっぱいになれるからです。
C2 星型のガーデンがいいと思います。星のようにいつも輝いている4の1になりたいからです。
C3 星型もいいと思うけど、虹型の方がいいと思います。虹は、つながっているの、4の1も夢をもってみんなでつながっていきたいからです。

ぼくの意見に賛成してくれた齊藤君の意見が「すごい」と思いました。「桜型は難しいから協力が生まれてくる」という意見です。最後は、虹型になったけど虹型も難しいと思うのでみんなで協力してつくっていききたいです。



【写真① 考えを述べる様子】

【資料① ガーデンプランを決める話し合いと、授業後のK児の感想】

このようにして、決定した虹型のガーデンを、必要な係を決め、その係ごとにガーデンづくりを行なっていった。(写真②、③)

完成間近になってガーデンが荒らされたとき、4の1ガーデンに対する自分たちの思いを全校に伝えようと自主的に話し合いを行い、児童集会において劇を通して訴えることができた。

考察①

子供たちは途中困難なことに出会っても、あきらめることなく何とか4の1ガーデンを完成させることができ、自分たちで決めたことを最後まで責任をもって実践するという主体性の育ちを見ることができた。これは、学級の一人一人に役割が生じる題材を取り上げ、資料①の子供たちの反応のように、学級に対する夢や希望を話し合い、「難しいから協力が生まれてくる」「みんなでやらないと完成しない」といった活動に対する学級の取り組む姿勢を見つめさせたことが有効であったと考える。



【写真② 耕しの様子】



【写真③ 花植えの様子】

② 2学期重点題材「花キューピット大作戦をしよう」

2学期は、1学期の主体性の育ちの上になって、学級の外へとはたらきかける題材を設定させ、学級としての責任を担うことで、更なる主体性の育ちをねらいたいと考えた。そこで、まず1学期の自分たちの活動の見直しを行い、自分の学級だけの向上を願った活動しか実践できていなかったことに気づかせた。そして、4年生として何ができるのか自己追究し、議題を「低学年に喜んでもらえる活動を決めよう」と焦点化し学級会を行っていった。

C4 低学年にプレゼントするより、一緒に4の1ガーデンで花を植えたり育てたりしたほうがいいと思います。1学期にぼくたちは、4の1ガーデンをつくることでよさをつくれたから、低学年もそのほうがよさがつくれると思います。
C5 でも、低学年と一緒につくる時間はないと思います。休み時間に一緒につくるにしても、低学年はガーデンをつくるより遊んだほうが楽しいと思います。
C6 プレゼントはいきなりもらったほうがうれしいと思うので、4の1で分担して花を育ててプレゼントしたらいいと思います。



【写真④ 育てた花をプレゼントしている様子】

【資料② 具体的な活動内容を決める話し合い】

子供たちは、低学年だけでなく全校に4の1ガーデンで育てた花をプレゼントすることを決定し、実行委員会を中心に自主的に係を分担して花を育て、プレゼント係の子供が写真④のように各学級に花をプレゼントした。

私はプレゼント係だったけど、花のお世話係だった人が一生懸命育てたから喜んでくれたのだと思います。

【資料③ プレゼント後の感想】

考察②

資料②の子供の発言のように、自分たちのクラスのことだけでなく他の学級の友達のことでも考えた発言ができています。また、波線の部分からは、学級でどのように取り組んでいけばよいのか考えている姿が分かる。資料③の感想からは、役割を分担してその分担の仕事を責任もって行ったことが分かる。これは、1学期の活動を見直し、学級としての責任を担うような題材を立ち上げたことが有効であったと考える。

③ 3学期重点題材「樹木ウォークラリー2001を企画しよう」

3学期は、第4学年の集大成として、組織的に実践活動に取り組ませたいと考えた。そこで、「12月のあらつ学習で調べたことを全校に伝え学校の役に立ちたい」という子供の思いから活動を立ち上げていった。写真⑤の樹木ウォークラリーの試行体験、写真⑥のインタビュー調査などを行い、自分なりの考えとその根拠をもって、決める活動での話し合いにのぞんだ。その話し合いでは、樹木マップの作成か樹木ウォークラリーの実施のどちらにするのか決められず両者を折衷して活動を決めていった。

- c 10 僕は樹木マップと樹木ウォークラリーのいいところを取り入れてやればいいと思います。
- c 11 2つを一緒にしたら4年生が終わるまでに間に合わないと思います。
- c 12 みんなが集中してやったら間に合うと思います。

<話し合い後のK児の感想>

僕は、樹木マップがよいと思っていたのだけど、樹木ウォークラリーも活動目標を達成することができると思います。結局、両方するようになったのだけど、ほんとに間に合うか心配です。でも40人いるからみんなでやればできると思います。

【資料④ 話し合いの様子とK児の授業後の感想】

子供たちは、決定した「樹木ウォークラリー2001」に向けて、役割を分担して準備活動を行っていった（写真⑦）。そして、リハーサルを行い、全校にその開催を呼びかけ昼休みを使って「樹木ウォークラリー2001」を開催した（写真⑧）。

考察③

資料④から、子供たちは活動案を折衷させることで学級としてどのように取り組んでいかなければならないのかという学級の在り方を見つめることができていたことが分かる。資料⑤からは、自分たちの力で、何とか樹木ウォークラリーを成功させようと活動し、集団で活動するすばらしさを味わえていることが分かる。このような姿が現れたのは、主体性の育ちをもとに、組織的な活動へとつながる題材をあらつ学習との連動により立ち上げ、他の学級の子供たちを巻き込んだ活動を計画・実践させたことで、学級や自分の在り方を見つめることができたからだと考える。

4 全体考察

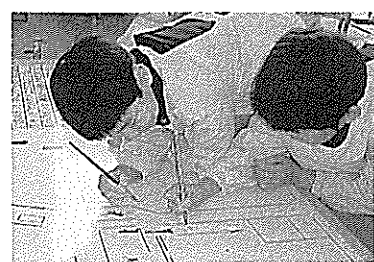
3学期重点題材において、子供たちが組織的な活動を行いながら自分たちの学校生活をつくり出している姿が見られたのは、主体性の育ちを見通した年間題材構想により題材を立ち上げ、活動を積み重ねていったことが有効であったといえる。



【写真⑤ 樹木ウォークラリーの試行体験をするK児】



【写真⑥ インタビューするK児】



【写真⑦ 樹木マップをつくるK児】



【写真⑧ 樹木ウォークラリー2001の様子】

たくさん参加してくれたので、自分たちの力で乗り切るといふ心もふくらみました。～この樹木ウォークラリー2001はみんなで努力すればたいがいのことができるんだということをお教えました。

【資料⑤ ウォークラリー後のK児の感想】

自ら未来を拓く道德学習

道德部主題についての説明

○ 豊かな人間の育成を担う道德学習の役割・立場

道德的に豊かな人間とは、道德的価値に照らして自分が為すべきことを判断し、他者とかかわりながら積極的に道德的実践を行い、よさを追究して生きることへの意志やよさを実現できる自分への自信を深めることのできる人間である。このような豊かさの根は本来、よりよく生きたいという願いとして個々の人間がその内部にもっているものである。しかし物質優先・効率優先の現代社会において功利を追究することに追われる私たちは、他とのかかわりの中で生かし生かされている自己の存在を見失いがちなために、よりよく生きることの価値や意味を見いだしにくい。その結果、虚しさや無力感から自己肯定感をもてない子供や、逆に他者と調和できずに自我肥大に陥る子供が増加している。このような課題を受け、いま道德学習は、子供自身が、人間らしい生き方への憧れや問題意識をもち、よりよい生き方を追究するなかで道德的価値の素晴らしさや自己のよさを感得し、自分自身の生き方の創造へと発展させていく、未来志向的な道德的実践力を育むことが求められている。

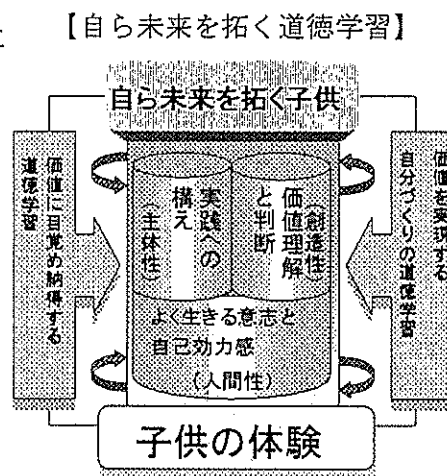
○ 自ら未来を拓く道德学習とは

自ら未来を拓くとは、迫り来る道德的課題に対して、自他共によりよく生きたいという心情（人間性）を発揮して、そのための適切な行為を決定し（創造性）、積極的に実践する（主体性）ことである。自ら未来を拓く子供が育つためには、従来からいわれている道德的実践を志向する力（道德的心情、道德的判断力、道德的実践意欲・態度）に加えて、道德的実践の方法・技術の獲得や、道德的行為や価値についての知識・理解、さらによさを育てていくことに対して喜びを感じる自己効力感をも含んだ多面的な力の育成が必要となる。未来を拓く道德学習とは、子供がこのような力を獲得したり発揮したりすることのできる

学びの姿である。そのためには、道德的価値を自分の日常体験に照らして内面的に自覚し納得する道德学習を行う一方で、他方では教科・特別活動・総合的な学習の時間等との連動を積極的に図り、直面する道德的課題に対して実際に対処していく中で課題の発見と解決のプロセスを志向する問題解決的・実践的な道德学習を行い、身に付けた道德的価値の有用性を実感させることが必要になる。いわば価値に目覚め納得する道德学習と、価値を実現する自分づくりの道德学習が一体となり相互補完的に高め合うことで、子供は自らの生き方・在り方を他者とかかわりや価値理解に照らして吟味し、よりよい自分に向かって自己を更新していくことに意欲や喜びをもつことができるのである。

○ 自ら未来を拓く子供とは

- 真摯に誠実に生きる人や、自分を支えるもの・人・ことの素晴らしさを感じ取り、自分もよさを追究したり発揮したりして生きることの憧れや喜びを感じる子供（人間性）
- 自分の生活や体験を振り返り、自他共によりよく生きる上で大切な行為を積極的に実践しようとする子供（主体性）
- 具体的な道德的問題場面において、状況をとらえ他者の心情を推し量ったり価値への理解を深めたりしながら自らの為すべき行為を判断できる子供（創造性）



【道徳学習で育てたい資質・能力の系統】

学 年	低 学 年	中 学 年	高 学 年
道徳的心情	よいことを行うことの心地よさ、相手が喜んでくれることの喜びを求めてよさを追究したり発揮したりすることができる。	自分と他者のかかわりを意識しながら、共に生きる喜びに向かってよさを追究したり発揮したりすることができる。	自らの理想や目標をもち、自分の夢や希望を育みながら、それらに向かってよさを追究したり発揮したりすることができる。
人間性（よく生きる意志と自己への効力感）	1 主として自分自身に関すること		
	規則正しい生活をすることや素直にのびのびと生活することに心地よさや喜びを感じる。	決めたことはねばり強くやり遂げること、節度ある生活の大切さを感じる。	より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力することへの憧れや展望をもつこと。
	2 主として他の人とのかかわりに関すること		
	幼い人やお年寄りに温かい心で接し、親切にすることや、友達と仲良く助け合うことに心地よさや喜びを感じる。	友達と互いに理解し合い信頼して助け合うこと、周りの人やお年寄りに尊敬と感謝を持って接することの意義を感じる。	誰に対しても思いやりの心を持って親切にすることの大切さを感じ、そのような自分でありたいという願いをもつこと。
	3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること		
	身近な自然に親しみ、優しい心で動植物に接することに心地よさや喜びを感じる。	生命の尊さを感じ、いのちあるものを大切にする大切さを感じる。	人知を越えた美しいものや崇高なものへの畏敬を感じ、尊重しようという願いをもつこと。
	4 主として集団や社会とのかかわりに関すること		
自己効力感	父母・祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いをしたり、先生や学校の人に親しみ学校の生活を楽しんだりすることに心地よさや喜びを感じる。	郷土の文化や人々に親しんだり、日本の文化、伝統に関心をもって、日本の国を大切にしようとする心情をもつこと。	郷土や日本の文化、伝統を大切にし、自分の郷土や国を愛する心情を大事に育みたいと願うこと。
	「相手が喜んでくれた」「こんなことができてうれしかった」という自分の快感情をもとにして自分自身への新たな気づきをもつことができる。	「こんなことが大切なんだ」「こんな心を大切にしたい」という、自分の中にあるよさへの気づきをもとに自身を見つめることができる。	「こんな生き方をしたい」「こんなことに意味がある」という未来志向的な意志を育みながら自分自身を見つめることができる。
	教師や保護者等の大人の賞賛や価値づけを精神的な支えとして、自らがよいと感じることを実践することができる。	相手の喜びや、自らの心のすがすがしさを精神的支えとして、自らがよいと考えることを、進んで実践したり、仲間と協力して計画的に実践したりできる。	自分の役割や責任を自覚するとともに、自らの理想や目標、文化的財産としてのよさの意義を感じながら追究したり実践したりできる。
主体性（実践への構え）	教師や保護者の援助を受けながら具体的な実践方法を理解・獲得し、身近な人に向かって実践することができる。	具体的実践方法について集団で話し合ったり、行為の結果について予測しながら、相手の気持ちを考えて実践できる。	道徳的問題場面における背景や状況を考え、結果の予測など多面的な視点から行為を検討するとともに、広範囲を対象にして実践できる。
創造性（価値理解と判断）	教師や保護者等の大人の支持・援助・意味づけを受けながら自分なりに考え、行ってよいことと悪いことを判断することができる。	他者と比較したり共同したりして判断するとともに、自己の判断の結果にいて内省し、強化や修正を行うことができる。	自律的に判断するとともに、自分の判断を論理的に検討することができる。また、自己の判断に責任をもつことの大切さを自覚する。
	基本的な生活習慣や社会生活上のルールなど、行ってよいことと悪いことの区別が、当事者意識をもってしっかりと自覚できる。	- 自他の行為のもつよさや問題について、周囲に及ぼす影響を加味して検討し、自覚できる。 - 所属集団の価値観を批判的に吟味したり受容したりできる。	- 抽象的・論理的な思考をも取り入れ、価値をより一般化・普遍化して自覚できる。 - 自己の価値観の変容過程を意識して自分にとっての意味づけができる。

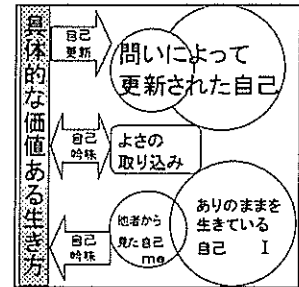
自己を問い続ける体験連動型学習の展開

道徳部 石 硯 昭 雄

1 主題の意味

(1) 自己を問い続けるとは

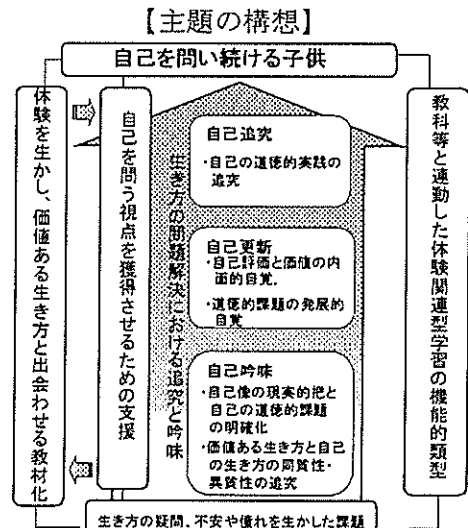
子供が自らの生き方や在り方への問いをもってこれまでの自分を見つめ、【自己を問い続けるとは】 道徳的实践へと向かう自分の構えを探り続けることである。そのために、道徳的課題に直面している子供たちに価値を実現している人の生き方に出会わせ、感動や生き方への驚き、疑問をもって追究させることで翻って自分の姿を見つめさせる。これにより子供は、自分のこれまでの見方・考え方・感じ方・行い方を問い直すための視点を獲得し、価値ある生き方から取り入れたいよさや伸ばしたい自分のよさを明らかにしながら、「自分はどうかあるべきか」という問いをもって道徳的实践へと向かっていくことができる。



(2) 自己を問い続ける体験連動型学習の展開とは

子供自身が自己を問い続けるためには、自分にとって切実な道徳的課題を追究していることが必要である。そこで、念頭による価値理解だけではなく具体的な道徳的課題に対して働きかける体験の場と、そこから自己を見つめ問い直す学びの場を有機的に連動させ、価値追究させることが重要となる。具体的には、教科・特別活動・総合的学習等での体験と道徳の時間との連動を図ることで、具体的な体験をもとに見出した道徳的価値について自覚し納得したり、感得した道徳的価値を生かして問題解決に次の体験へと向かう構えをもたせたりする体験連動型の道徳学習を行う。これにより子供は、道徳的課題を解決するために、繰り返し自己吟味・自己更新し、

具体的実践を通すことでよさを実感し、自己追究する喜びを味わうことができる。特に道徳の時間においては、体験の中で得た価値ある生き方に映して自己を問い直すための視点の獲得を重点化することで、自分を見つめる芽を育て、自らの生き方追究に生かすことができるようにする。これは生き方の学びの基礎となり、人間性を培う基盤へと発展する。このような学習に迫るための方途として、①生き方に映して自己を問い続けるための体験連動型道徳学習の機能面からの類型化、②子供の具体的な体験を生かすとともに、価値ある生き方に出会わせる教材化の工夫、③価値ある生き方に映して自己を問い続ける視点を獲得させるための支援のあり方について究明する。



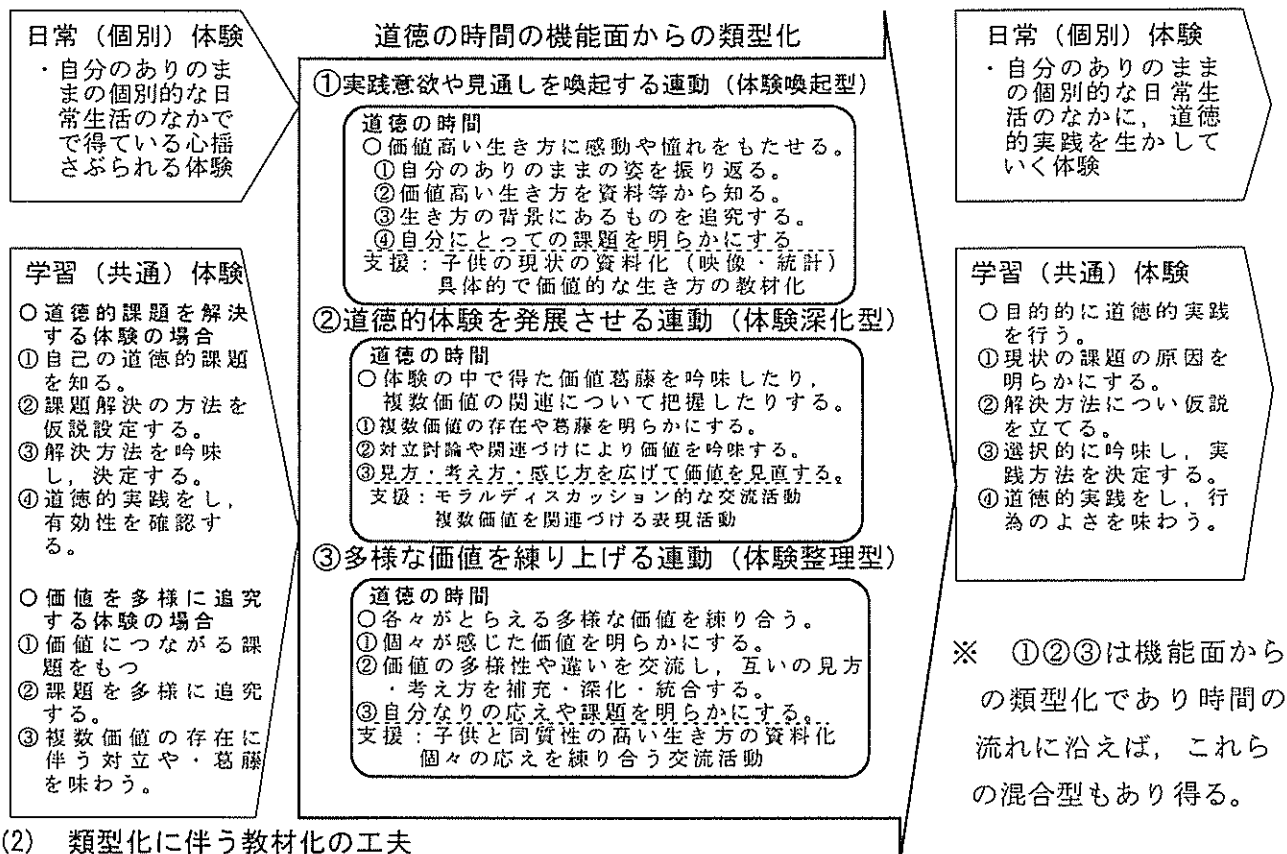
(3) 本研究で期待する子供の姿

- 自らの生き方のなかにある問題に気づき、価値ある生き方に映して自分の心や行いのよさを伸ばしたり不十分さをなくしたりしたいという課題意識をもって追究する子供 (自己吟味)
- 自らの実践を評価し、見方・考え方・感じ方・行い方の広がりや深まりを自己評価するとともに、取り込んだ価値を内面的に自覚し、自分の中にある同質性や異質性と照らしながら、その価値を自分なりに取り込もうとしている子供 (自己更新)
- 取り込んだ価値をもとに自己の道徳的課題の幅を広げたり質を深めたりしながら、自分で、あるいは協力して生活や学習のなかで道徳的实践を成し遂げようとする子供 (自己追究)

2 学習の具体的構想

(1) 自己を問いつける体験運動型学習の機能面からの類型化

子供の体験を生かして価値の補充・深化・統合をはかり、再び子供の体験へと発展させていくという道徳の時間の位置づけから考えた場合、基盤となる体験を子供の日常的な個別体験とするか、或いは学習のなかで意図的・計画的においた共通体験とするかで次のような類型化を図ることができる。



(2) 類型化に伴う教材化の工夫

道徳の時間の機能面からの類型化に適応させて教材化の工夫を以下のように図る。

①体験喚起型の場合	②体験深化型の場合	③体験整理型の場合
こんな教材で ・子供の現状での道徳的課題の資料化 ・道徳的实践の資料化（映像・作文等） ・類似体験の物語化 ・自己の振り返りによる吟味の場の設定	こんな教材で ・モラル・ジレンマ的な資料化により価値の対立や葛藤が明らかになる資料化 ・複数価値の存在が明らかになりその関連性が見える資料化 ・現実的な自己決定の場の設定	こんな教材で ・子供との類似性があると同時に、価値高さにつながる超越性が見とれる資料化（読み物・映像・直接対話等） ・現実的な自己吟味ができる主人公設定

(3) 価値ある生き方に映して自己を問いつづける視点を獲得させるための支援

問いの段階	問いをもつ	問いの視点から価値追究する	問いを見直す
中心となる学習原理	自己吟味	自己吟味 ・ 自己更新	自己更新・自己追究
問いの内容	自分にとって ・何が問題なのか ・なぜそうなるのか ・どうしたいのか (どう変えたいのか)	人物の生き方に潜む価値を探る場面で ・人物と自分の違いや共通点はなにか (対比) ・自分にも同じような体験はなかったか (置き換え) ・自分がその立場ならどうするか (観点変更) ・もし人物がそうしなかったらどうなるだろうか ・探り出した価値を一般化する場面で ・人物の行いや考えに自分は賛成か反対か (原理類推) ・人物の生き方から取り入れたいことは	自分にとって ・大切なことは何か ・何が前と変わったのか ・さらに残る課題は何か
支援	○生活実態の資料化、読み物資料の自作化	○生き方見つけしールや自己内対話ノートの活用 ○役割演技、モラルディスカッション等の交流活動の設定	○ポートフォリオによる振り返り ○対話による評価

3 指導の実際と考察

(1) 主題 第4学年 古いものを大切にするよさを見直そう

主価値 [中1ー(1) 自分でできることは自分でやり、節度のある生活をする。]

関連価値 [中3ー(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。]

(2) 本主題の考え方

本主題は、子供が地域や自分の身近なところにある「古いものを尊び大切にしている生き方」と出会い、日常生活における消費活動や文化継承について関心や疑問をもとに追究する中で（主体性）、身の回りのものを大切にし節度や節制をもった消費生活を送るとはどういうことか、あるいは古くから伝わる伝統や文化を味わい受け継ぎながら生かしていくとはどういうことかを考え（創造性）、古いものにも価値を見いだして生きることや、いまもっているものを十分と感じ、「足るを知る生活」をしていくことのよさを見出し喜びを感じていくこと（人間性）をねらいとしている。

指導にあたっては、あらつ学習单元「あらつお宝探検隊」の学習と2時間の道徳の時間（体験喚起型+体験深化型）を連動させた体験連動型道徳学習を行い、主題「古いものを大切にするよさを見直そう」を構成する。この中で、古物・古美術にかかわる人々やリサイクル・リフォームショップの人々のように、古いものに価値を見いだしたり、古いものにもう一度命を吹き込むことに喜びを感じたりして、ものとの上手なつきあいをしている人がいることを知り、自分たちの消費生活やものとのかわり方について見つめさせ、自分の見方・考え方・感じ方・行い方を問い続けさせていく。

(3) 目標

- 古いものにしかない価値をとらえて大切にすること、古いものにもう一度命を吹き込むことのよさを追究し、節度をもって生活することの大切さや伝統や文化を継承したり発展させたりして生活することの大切さを理解し、日常生活において実践していこうとする態度を育むことができる。

(4) 計画 あらつ学習「あらつお宝探検隊」（19時間）と道徳の時間（2時間）の連動

	課題を設定する（5時間）	課題を追究する（11時間）	課題をまとめる（3時間）
活動と内容	1 あらつの古い宝物を追究する課題を話しあう。 ○興味・関心の喚起 ○追究問題の設定	2 追究課題を多様な方法で追究する。 ○課題解決に向かう個別的追究 3 中間報告会を開き追究を発展させる。 ○交流による追究の吟味と課題の再設定 ○新たな視点を取り込んだ再追究	4 「あらつお宝研究会」を開き追究結果を発表する。 ○追究結果の相互受容 ○自己の見方・考え方の更新
活動の実際	 【写真①自分たちのお宝集会】	  【写真②お宝を売る人に聞く】 【写真③中間報告会】	 【写真④あらつお宝研究会】

体験喚起型

体験深化型

道徳の時間1（資料「生き返ったバケツ」）

主人公よしおがものを大切にする八重ばあちゃんと出会い、「もったいない」に対する見方を「けちくさい」から「すごいことかも」に変えていく自作資料

- 繕いや転用の美を想起する。
- ものを大切にできない主人公の生き方を自分と比べながら追究する。
- 自分の消費生活やものとのかわりについて見直したいことを明らかにし、今後の追究の広がりにも展望をもつ。

道徳の時間2（資料「どちらが一番の宝」）

父の思い出の品を修理して使う小川さんと、伝統的な美術品を守る松本さんのどちらにも価値を感じるか、品評的意見を確立して考える自作資料

- 古い宝に対する自分の見方や考え方を振り返る。
- 古いものを宝物にするよさについて体験を根拠にして対立的に話しあう。
- 自分の生活について見直したいことについて考え、まとめ方を展望する。

(5) 指導の実際

あらつ学習（1～13／20時間）での体験

道徳の時間1に至るまでに子供はあらつ学習の中で次のような追究を行ってきている。まず、自分たちの宝物を持ち寄りお宝集会をすることで、宝物の条件は人によって違うのではないかということに気づいた。さらに壊れた茶碗や古いお菓子の缶など、自分たちの価値観では理解し難い宝物があらつの町でたくさん売られている事実に出会い、あらつお宝探検で感じた古い宝物への興味や関心をもとにつくった追究課題（資料①）に従い、繰り返し調査を重ねていった。この活動の中で共通体験として、昔の人が古い物を何度も修理して活用し、修理不能の物は他に転用して物の命を大切にしていたことを知り、深く感動する子供の姿が見られた。（資料②）

道徳の時間1

ここでは昔の人が繕いや転用により物を最後まで使い切っていたことに対する子供の感動や、そこから生じた自分の生活はこのままでよいのかという子供自身の問いを生かして、身の回りの物を大切にし節度ある生活をする事のよさを自覚させることをねらいとした。子供は、資料「生き返ったバケツ」を読み、生き方見つけめシートを対比・置き換え・観点変更の3視点で操作したり自己内対話ノートを活用したりすることで、主人公の心情を自分の体験に照らして【写真⑤主人公の変容に共感する】推しはかっていった。そして、主人公が、「もったいない」の心で物を大切にしている八重ばあちゃんに出会い、自分の見方や考え方を変容させていく姿に共感し、体験のなかで感じた古いものを大切にするよさへの納得を深めるとともに、昔の人や資料中の八重ばあちゃんの心や行いのよさに照らして日常生活を振り返り、見直すべき自分の姿について明らかにすることができた。

考察①

T児は、主人公の不十分さに「自分とにている」「同じような体験が」のシールを貼り、資料内容の八重ばあちゃんと、あらつ学習の中で追究した昔の人の物を大切にする生き方との共通点を見だし、これをもとに自分の生活の不十分さを見直し、実践への意欲を高め【資料③ T児の自己内対話ノートの内容】ている。あらつ学習の多様な体験の中で、特に子供の感動が得られた繕いや転用の美を実践する昔の人の生き方を八重ばあちゃんに重ねて資料内容に取り上げたことや、子供との同質性や異質性をもつ主人公を設定してその心情を推しはからせた体験喚起型の学習が有効であったためと考える。

あらつ学習（1～13／20時間）での体験

道徳の時間1の後にあらつ学習の追究課題を再検討させたところ、リサイクルやリフォームについて追究する子供がでてきた。リサイクルショップやリフォーム店の人の思いを調べた子供には、昔の人が大切にしていた繕いや転用といった考えが今も息づいていることを知り感動する姿が見られた。さらに一方で、若い人を中心に何でも安易にリサイクルショップに持ち込む傾向があることを知った子供は、リサイクルと言っても物を大切にする心の反映ばかりではないことを知り、本当に物を大切にすることはどういうことか繰り返し追究し、不要な物を購入しないことの大切さに気づいていった。

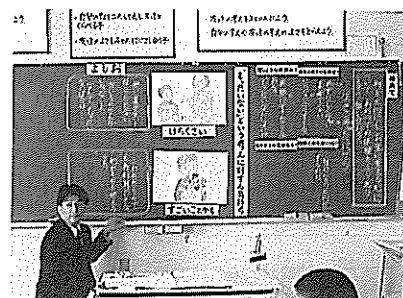
あらつ学習の追究課題

- ・宝物の条件は何だろう（なぜ古くて壊れたものが宝になるのか）
- ・なぜ、あらつの町には古いお宝を扱う店がどこよりも多いのか。また減ってきたのはなぜか。
- ・古いお宝を売る人や買う人の思いや願いは何だろう。
- ・お宝はどこからやってくるのか。
- ・自分の家にも古いお宝があるか。

【資料①あらつ学習の追究課題】

昔の人が今でいうリサイクルやリフォームのようなことをしていたことを知ってびっくりしました。...そこまでして古いものをずっと大切にしていたから、今でも古いものが残っていて、古いお宝が生まれたんだな。古いものは人が大切にしていたから宝になったんだと知り、感動しました。

【資料②T児の追究後の感想】



私はすぐに物を散らかして壊したり、飽きてはったらかきにしたりします。でも、あらつの中で昔の人が繕いや転用をしていたことを知ったり、今日の勉強をしたりして、恥ずかしくなりました。やっぱり物を大切に人、物には命があるということを知っている人が、古いものをお宝に変える心のある人だと思います。昔の人や八重ばあちゃんがしているみたいに、リサイクルやリフォームははととても大事なことを思いました。

【資料③ T児の自己内対話ノートの内容】

道徳の時間2

本時では、個々が多様に、そしてばらばらにもっている古いものを大切にすることのよさについて、価値把握を交流によって吟味し、見方・考え方・感じ方を深めることをねらいとした。子供は、①あらかず学習で追究した宝物に対する価値内容と類似性をもつ2人の人物（伝統的な物を宝物にしている松本さんと一つの物を修理し続けて宝物にしている小川さん）設定を行った自作資料「どちらが一番の宝」を読み、②2人の人物の生き方に対する品評的意見を確立するための生き方見つけシールの操作と自己内対話ノートを活用しながら、③モラルディスカッション的な交流活動によって考えを深めていった。T児はあらかず学習での自分の体験とそこから得た思いを根拠にして一方の立場を選択しながらも、交流によって考えを見直し、考えを広げていった。（資料④）さらに、「自分の物とのつきあい方でこれから大切にしたいことはどんな心や行いですか。」という発問を受けて、資料⑤の

小川さん（修理して使う人）の宝が一番と思う！
それは古々の太田さんが言っていた「転用の美」という言葉を聞いて、古いものでも何度でも使うことが大切だと思ったから。前はいらなくなった物は小さい子にあげればいいと思っていただけ、自分で何度も使うことが大切と思えるようになったから。
みんなと話し合ってみて
逆の立場の人の宝にも人の思いが込められているとわかったからそういうものはみんな宝じゃないかなと思った。

【資料④ T児の考え】

私は今日の学習をして、これから先物を買うときには本当に必要かどうか考えてから買うようにしたいと思いました。いくらリサイクルをしてもむだな物を買ったら本当に物を大切にしたいことにはならないと思います。そして、自分の物になった物は最後まで使い切って物の命を大切にしたいと思いました。

【資料⑤ T児の追究語の感想】

ようにノートに表現した。子供は、節度をもって物を消費することの大切さや、物にこめられた人の思いを感じて扱うことといった価値をとらえることができたと考える。

考察②

T児は何度も修理して使うということだけでなく、むだな物を購入しないことの大切さを感じている。あらかず学習で行ったリサイクルの問題点についての取材から感じたことが、本時に深化されたためと考えられる。見つけシールの使用状況を見ると、道徳の時間1に比べ「同じような体験が」の活用が目立った。以上から、あらかず学習の追究内容との類似性が高い資料を準備したことや、子供があらかず学習の中で感じている多様な見方・考え方をモラルディスカッション的に取り上げ、交流により付加・修正、強化していった体験深化型の学習が有効であったと考える。

あらかず学習（1～13/20時間）への発展

子供は道徳の時間で深まった見方・考え方・感じ方を生かし、道徳的実践をも含んだ、あらかず学習のまとめの仕方を検討していった。転用の美を実践し、生活に生かすリサイクルやリフォームの進め方を発表したり、自分と物との関係を見直して「長持ちコンテスト」を開いたり、新聞や寸劇で物と人間のよりよいかかわり方について訴えようとしたりする子供の姿が見られた。

4 全体考察

あらかず学習と道徳の時間の連動を、節度ある生活という人間性の課題から図ったことで、子供は古いものを大切にできる生き方によさを感じ（人間性）具体的な体験を通して物を大切にできる生き方を考えたり判断したりしながら（創造性）、自分の心や行いを見直していこうとする態度をもつこと（主体性）ができた。（資料⑥）今後は、子供の生き方の問いが、より自分自身に向かっていくようにするための学習

この学習をするまで私はすぐに物を捨て、あまり物を大切にする方ではありませんでした。でも自分はいっと物を大切にすべきだと考えるようになりました。古い着物をほどこいてしきものや飾りししているのを見て、今まですてていた物をリサイクルしたりリフォームしたりできることを知ったからです。私もリサイクルに挑戦してみると「物には命がある」と言っていた太田さんの気持ちや「宝物するかどうかは使う人の心が決める」と言った道徳のお話の八重ばあちゃんの気持ちがよくわかりました。（中略）
捨ててあるような物でももう一度命をあげることができると知って、私はもっと物を大切にしようと思うようになりました。そして、自分の物への接し方が変わったと思います。

【資料⑥ T児のまとめ】

活動や展開の在り方を発達段階に応じてさらに吟味するとともに、体験関連型学習における道徳の時間の機能と構造についてより一般化・普遍化できるよう、さらに実践事例を積んでいく必要がある。

自らよりよい健康生活を創る保健学習

～生活習慣を調べ、ライフスキルを形成していく活動の展開～

保健部 森田 常子

1 主題設定の理由

(1) 子供をとりまく社会の状況から

今日の健康課題を見ると、心の健康や食生活、運動不足などの生活行動に関わる生活習慣病を中心とした慢性疾患が大きな問題となっている。これらの問題に対応するためには、自分の健康を自分で大切にしようとする資質・能力・態度を身につけ、実践することが大切である。今日の健康課題が個人のライフスタイルの変容・改善により解決できるものが多いことを考えれば、小学校期から自分の健康や生活習慣の問題点を明らかにし、改善点に気づき日常生活の中で実行しようとする資質・能力態度を育てていくことは、将来的にも健康な生活を送るうえで大切なことであると考えられる。

(2) 新学習指導要領のねらいから

新指導要領では、社会的要請から様々な改善がなされている。体育科の保健領域が中学年で取り扱われ、また、高学年においては、けがの防止と病気の予防及び心の健康に関する内容で構成され、食生活をはじめとする望ましい食習慣の形成、生活習慣病の予防及び薬物乱用に関する内容が取り上げられている。今回、自らよりよい健康生活を創る保健学習として、自分の生活習慣をふり返り問題点を明らかにし、改善していこうとする態度やスキルを身につけ、実践することを重視した保健教育が充実されなくてはならないと考える。

(3) 本校児童の実態から

現在の子供達の健康問題として、生活習慣の乱れでは“就寝時刻が遅く、睡眠時間が短い”“食習慣の問題”などがあげられている。本校では、進路に関する自分の目的を持ち、下校後に学習塾や習い事に通う子供も多い。そのため食生活に不調和を来している子供も見られる。その結果、保健室で「夜遅く寝たから頭が痛い」とか「朝、トイレ（排便）に行かなかったから、おなかが痛い」等を訴える児童もいる。ところが、その改善のために、健康と生活習慣との関連を把握し、何らかの目標を設定し努力をしている児童は少ない。そこで、「進路に関する夢を実現する」という子供の目標を達成するためにも、自分の生活をふり返る場を設け、健康と生活習慣の関連に気づかせ、自分の生活習慣の問題点を明らかにしその改善に取り組んでいくことは必要である。

2 主題の意味

自らよりよい健康生活をつくるとは、現在の心身の状態に目を向け健康な生活を送るため、自分にあったライフスタイルを作り上げ、楽しく、明るく、生き生きとした生活を実践しようとするものである。

自らよりよい健康生活をつくる保健学習とは、自分の生活のあり方や生活習慣の問題点に気づき、生活習慣に関する知識や行動の変容に必要な知識を獲得し、日常生活における健康問題への改善点を明らかにし、実践しようとする態度を形成していくためである。このような学習を展開することによって、学習で獲得した知識を行動の変容のなかで生かしながら、健康的なライフスタイルを確立していくことになる。具体的に目指す子供の姿を次の3点から考える。

- | | |
|--|-------|
| ○ 自分なりに生きる喜びを感じ、よりよい生き方を求め、生活経験を生かし自分の生活を豊かにしようとする子供 | (人間性) |
| ○ 健康な生活を送る良さを感じ取り、自分の求める生活をよりよくする方法を考え実践する子供 | (創造性) |
| ○ 自らの生活習慣の課題を把握し改善しようとする子供 | (主体性) |

3 副主題の意味

子供達が健康的な生活を送ることに価値を見だし、主体的に生活習慣を改善するために、以下のような副主題「自分の生活を調べ、ライフスキルを形成していく活動の展開」を設定することとした。

生活習慣を調べるとは、自分の生活習慣における問題点をとらえ、具体的なデータをもとに明らかにするとともに、その改善点を抽象的な目標ではなく、具体的な行動目標として設定し改善のための見通しをつかむことである。

ライフスキルを形成していく活動とは、「日常生活において、自分の健康を振り返りよりよくしていこうと実践していく」ための知識や技能を獲得して、それを進んで活動する態度に高めていくことである。具体的には次の3点を高めることである。

- 「自分の生活習慣の問題点をデータをもとに分析する」知識・技能と態度
- 「生活習慣を改善するための具体的な行動計画を立案する」知識・技能と態度
- 「行動計画を長期に渡って実践していくための工夫を行う」知識・技能と態度

生活習慣を調べ、ライフスキルを形成していく学習活動の展開とは、生活習慣に関するライフスキルを獲得していく学習には次のような段階が必要である。まず、科学的な正しい知識を学習すること。次に獲得した知識を活用して健康を維持増進する態度を形成していくことである。自分の生活習慣の問題点を明らかにし改善への動機を持たせることである。

4 具体的構想

- 食品に関する知識や、摂取過剰による健康への影響に関する知識を獲得させるだけでなく、食行動に影響している個人的要因や社会的要因に気づかせる。
- 食品の内容や摂取の仕方について具体的スキルを習得させ、実生活の問題点をとらえ改善する計画を立てさせる。

(1) 教材の条件

- ① 児童の日常生活の中に身近なものであり、健康との関係を理解しやすいものであること。
- ② 児童が自分で用意できて、学習した内容を実際に生活の中に取り入れることができやすいものであること。
- ③ 児童が自分の意思や選択で内容を変えられることができたり、問題点を改善したりすることができるものであること。

(1) 単元の構成

階	学 習 活 動 と 内 容	手 だ て
つ か む	1 健康と生活習慣の関連についての知識を獲得する。 (1) 自分の生活習慣を想起する。 ○ 健康と生活習慣との関係をとらえること (2) 生活習慣の課題を発見する。 ○ 生活習慣の課題をとらえること	※ 自分の生活習慣を振り返る調査 ※ 健康な生活を送るために必要な条件を提示
し ら べ る	2 生活習慣の課題を具体的に把握する。 (1) 影響している要因について話し合う。 ○ 影響している動機をとらえること (2) 動機を分類し問題を把握する。	※ 生活行動とそれに影響する要因を捉えさせる資料の提示 ※ 動機についての問題点の焦点化
お お む	3 生活習慣の問題を改善する計画を立てる。 (1) 問題解決の目標を設定する。	※ 問題を改善する意欲を高めさせる

5 指導の実際

(1) 単元名 食生活 おやつで考える望ましい習慣 (第4学年)

(2) 指導目標

- 砂糖や塩分の摂取と健康との関係について理解し、日常よく食べているおやつにどれくらいの砂糖や塩分が含まれているかを理解することができる。
- 食生活の中でおやつの取り方を自分でコントロールできるようになるために、おやつに影響している要因に気づき、その改善すべき点を明らかにすることができる。
- おやつに取り方について、改善すべき目標を設定し、実行することができる。

(3) 指導の計画

	ね ら い	活 動 と 内 容	手 だ て	配時
事前	○ おやつの食べ方・内容について調べる。	1 「おやつしらべ」の結果から、おやつの食べ方と内容の傾向について調べる。	* 「おやつしらべ」の結果	課外
つかむ	○ 日常食べているおやつに砂糖や塩分が予想以上に含まれていることを知ることができる。 ○ 砂糖や塩分の適正摂取量を把握することができる。 ○ 砂糖や塩分の摂取過剰による健康への害を理解することができる。	1 食品に含まれる砂糖や塩分について調べる。 (1) 清涼飲料水と砂糖水を飲み比べ、清涼飲料水の方が甘く感じないのは何故か話し合う。 ○ 気付かないうちに砂糖を多量に摂取していることを理解すること (2) ポテトチップス等に含まれる塩分の量と適正な塩分の量を比較する。 ○ おやつとして食べている食品の塩分量、適正な塩分摂取量を理解すること 2 砂糖や塩分の摂取過剰による健康への害について話し合う。 (2) 塩分の摂取過剰による健康への害について話し合う。 ○ 過剰摂取による健康への害を理解すること 3 理想的な食べ方になる工夫を話し合う。 ○ おやつを食べる時間・内容・量の工夫	* 砂糖水と清涼飲料水を飲み比べどちらの方が砂糖が多いか予想させる。 * 日常食べているものを例にとって塩分の量を提示する。 * 砂糖や塩分の摂取過剰による健康への害を調べさせる。 * 塩分摂取過剰による害の資料提示 * 時間・内容・量の観点から、おやつの食べ方を考えさせる。	1
ひろげる	○ おやつを食べる行動には、生理的要因・心理的要因・社会的要因等が影響していることを理解することができる。	1 おやつを食べる「きっかけ」を分類し、その傾向を話し合う。 ○ 生理的要因、心理的要因、社会的要因等が影響していることを理解すること	* おなかがすいているとき以外の食べる「きっかけ」についてどのような場合があるのか分類させる。	1
おこなう	○ 自分のおやつの内容や食べ方について改善した方がよいことを明確にすることができる。 ○ 改善点を目標設定できる。	1 おやつの食べ方の問題点と改善策を話し合う。 (1) 自分のおやつの食べ方の問題点を調べる。 ○ 自分のおやつの食べ方の問題点を明確にすること (2) 自分のおやつの食べ方の改善点と目標を設定する。	* 自分のおやつの摂取状況を表に記入させ分析させる。 * 「わたしの目標カード」に改善しようと思うことを記入させる。	1

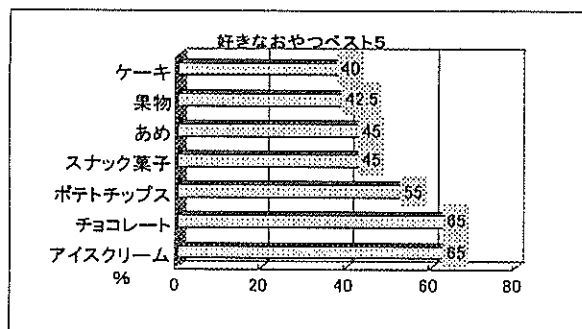
(4) 子供の変容

つかむ段階では、「おやつしらべ」（資料１）で、おやつ好み、内容（資料２・３）、食べ方について記録させ実生活の傾向を把握させておいた。

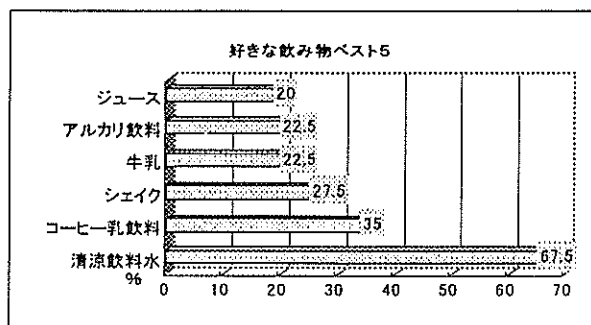
まず、おやつの内容について、清涼飲料水と砂糖水を飲み比べさせてみた（写真1）。32人の児童が砂糖水の方が甘く感じると答え、同じくらい甘いと答えたのは7人であった。このことにより添加物の影響で甘さが抑えられていることを実感として理解する事ができた。次に自分たちがよく食べているおやつについて、

[illegible]

【資料1 おやつしらべ1 a児】



【資料 2 好きなおやつの傾向】



【資料3 好きな飲み物の傾向】

どれくらいの砂糖や塩分が含まれているかを実物の食品と実際の量で提示したことにより、適正な摂取量を超えかなりの摂取過剰になっている現状に気づかせた（写真2）。そこで、「砂糖・塩分の摂取過剰による健康への害を知ろう」というめあてを持たせることにつなげていった。

具体的に健康への害を学習することで、このような生活習慣を続けていくことが将来、生活習慣病と言われる様々な疾病の惹起へつながっていくことを学習した（資料4）。その後おやつの食べ方を工夫することで、砂糖・塩分の摂取過剰を防ぐことができることを理解させていった（資料5）。



【写真1 清涼飲料水と砂糖水を飲み比べ、ポテトチップスを試食してみる】



【写真2 適正な砂糖の量と菓子の砂糖の量を比較してみる】

4. 体への害は？ 砂糖 (自分知っていること) ・糖尿病 ・むし歯 ・太る	塩分 (自分の知っていること) ・高血圧
砂糖 (わかったこと) ・けがをしても治りにくい。 ・病気になるやすい。 ・中々ソライテする。 ・骨が弱くなる。 ・抵抗力がなくなる。	塩分 (わかったこと) ・脳卒中になる。 ・腎臓病 ・いび筋梗塞 ・血かんがけが口が口になる。

- これからおやつを何の気なしに食べるのではなく、きちんと栄養などを考えて、食べたいです。

私は、これから、なるべく食事の前におやつを食べることをさけ、おやつの量はお皿に分けて、量をきめて食べたいです。

【資料5 おやつの食べ方の工夫点】

【資料4 健康への害についての学習から】

【資料4 健康への害についての学習から】 しらべる段階では、「おやつしらべ」から自分はどうなときに食べているのかを把握させ（資料6）、「きっかけ」と言う言葉を使い、「どんなきかけでおやつを食べているのかをさぐろう」というめあてを持たせた。「わたしたちは、おなか

[illegible]

わたしがおやつを食べるのは	いつもほとんど	ときどき	ほとんどない
1. おなほすくと	☐	☐	☐
2. クレビスを食べていると	☐	☐	☐
3. そうじや歯磨きが済んでいないと	☐	☐	☐
4. 家におやつがあると	☐	☐	☐
5. うれしいとき	☐	☐	☐
6. <u>時間がかかると</u>	☐	☐	☐
7. <u>おいしくない</u>	☐	☐	☐
8. <u>まだだから</u>	☐	☐	☐
9. <u>おなかをさくら</u>	☐	☐	☐
10. <u>よく噛みかた</u>	☐	☐	☐

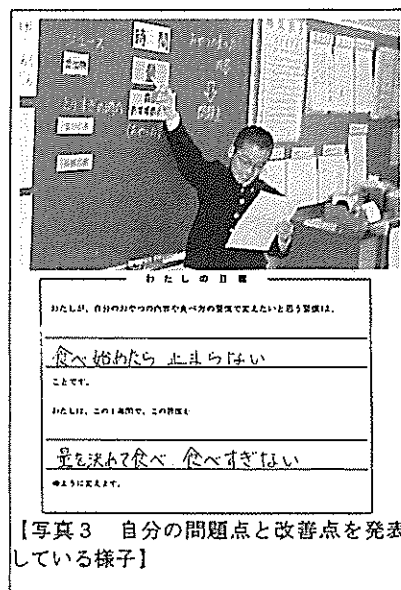
【資料 7 どんなとき食べているのだろう】

子供達が分類したおやつを食べる「きっかけ」	
・希望の要因	大きくなりたいから
・家族や周囲の人々の影響	家族が食べている。
・習慣だから	癖になっている。
・好みによる影響	おいしい、味やにおいがスキ
・生理的要因	おなかがすいた　のどが渇いた
・心理的要因	うれしい、物足りない
・すぐ食べられる・準備不要	テーブルの上にある
・テレビを見ながら	・ ・ ・ ながら
・暇、何となく	ひま・何となく
・メディアの影響	TVの宣伝　雑誌の広告
・もったいないから	ぜんべいが湿気る

・・・・・・それはみんなで、調べてみたように、「おなががすくと・・」「兄弟が食べていると・・」と色々なきっかけがみつかりました。今まで気がついていないきっかけがわかったので、これからこのことを考えて、目標にしたことを習慣にできるようにしていきたいと思います。・・・・・・

ひろげる段階では、めあてを「自分のおやつの問題点を
知り、改善するための目標を設定する」とした。「きっかけ」の分類や「どんなときに食べるのだろ
う」「おやつしらべ」から、自分のおやつを食べ方や内容に対して特にどのようなことが影響してい
るのか、問題点はどのようなことなのかを明らかにさせ、改善の実践を進めるための目標を設定させ、
「わたしの目標カード」に記入させた（写真3）。自分の問題点（変えたいと思う習慣）をあげること
ができた児童39人、問題点にかかわった目標を設定できた児童が37人であった。これがスロー
ン的なもので終わってしまわないように、日常生活に生かしていけるように「わたしの目標実行カー
ド」に、再び記入させ行動化へとつなげていった。

- ・ 食べる時間（食事の直前・寝る前）
- ・ 食べ過ぎる・食べ始めたら止まらない、つい食べ過ぎ
- ・ 誰かが食べていたらいつも一緒に食べてしまう
- ・ 甘いものばかりを食べすぎる
- ・ しおからいものばかり食べてしまう
- ・ 清涼飲料水ばかりを飲み過ぎてしまう
- ・ 家にお菓子があるとだらだらと食べてしまう
- ・ テレビを見ておいしそうだとすぐ買ってしまう
- ・ 食べたいときに食べたいだけ食べてしまう



6 成果と課題

(1) 子供の実態から

学習後の a 児の感想より

私は、この「おやつ」について勉強することを聞いて、「何で、おやつなんか勉強するの？関係ないじゃん」なんて思っていたけどこんなにおやつが私たちの体や生活に影響していることを知って、「こんなにおやつは奥が深くて、いろいろなことに影響しているんだ、すごい！」とおもいました。これから、おやつを食べる量や時間などに気をつけて食べていきたいです。もちろん「おすすめのおやつ」のことも忘れないようにします。

※ おやつを好みだけで食べていたが、おやつの量・食べる時間・内容について意識が及ぶようになっている。

他の児童の感想文

わたしは、この学習を通して砂糖や塩分の害が思っていたよりたくさんあるということがわかりました。また自分のおやつの習慣を知り、いけない食べ方や食べるきっかけについて調べることができました。おかげで自分だけのバナナシェイクをつくったりすることもできて良かったです。

※ おやつの食べ方の問題点に気づき、手作りおやつを作るなどの実生活の中での変容・発展が見られる。

・・・お母さんが「おやつはひかえめに」なんて言っていましたが、ちっとも気にしていませんでした。やっぱり、砂糖や塩分をとりすぎると、体に害を及ぼすことを実感したので、もう、多分おやつを食べ過ぎることはないと思うし、他の人にも教えてあげることができます。・・・

※ 家族の言葉かけの意味に気づき、さらに学習の内容を他の人にまで広めようとしている。

・・・、やっぱりお菓子の食べ過ぎはよくないと思いました。
今日、“わたしの目標”（きちんと量を決めて食べる）を作ったので、それに向かって努力していきたいと思います。
お菓子とのかかわりは、体の健康にもつながるのでぜひ心がけたいです。

※ おやつの食べ方の問題点から課題を見つけ改善するために目標を設定することができている。

(2) 研究の成果

上述の児童らの実態から見られるように、今までの生活経験により、砂糖と塩分の過剰摂取による健康への害については漠然と知っていたこともあったが、具体化した資料を提示したことにより、既存の知識が強化されていった。また、日常、何気なく食べていたおやつが、空腹などの生理的影響だけでなく、家族や周囲の人々の影響、心理的影響などさまざまなことが影響してる事にまで意識をひろげることができた。この保健学習で得た生活習慣に関する知識を活用して、次時の学習の中で、生活習慣を改善する態度－生活習慣に関する態度をつくるスキルが形成され、よりよい健康生活をつくらうとする子供を育成する上で有効であったと考える。

(3) 今後の課題

- おやつ以外の食生活習慣の問題点の分析や改善まで、子供の実践を発展させる方途の解明。
- ライフスキルを支える食や命への感謝の心など感性面や総合的な判断力を培う他教科などの関連の在り方を究明すること。

豊かな生活をめざす学習像の明確化

～個別の指導計画を生かした指導法の工夫を通して～

障害児教育研究部 舩 元 俊 文 坂 田 佳 美
早 川 由 洋 谷 崎 和 一 郎

1 主題設定の理由

(1) 生きる力の育成から

今回の学習指導要領の改訂に伴い、「障害のある児童が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加するための基盤となる【生きる力】を培うこと」を、ねらいとして大きく取り上げている。これは、激しい変化が予想されるこれからの社会において社会の変化を見通しつつ、この変化に柔軟に対応し、主体的に生きていくことができる資質を養うことを学校教育において重視する必要があるということである。そのためには、現在の生活の質を高めることである。これは、質の高い豊かな生活を繰り返し、積み重ねていくことであり、それが子供たちの卒業後の生活及び子供たちの将来の生活を豊かにしていくことにつながると考える。

つまり、通常の学級における教育では十分な教育を期待できない子供に対して、一人一人の障害の状況、発達段階、特性等に応じて、特別な配慮のもとによりきめ細やかな手厚い教育、即ち、適切な教育を行う必要があると考える。

(2) 自立し社会参加する面から

知的障害のある子供たちの教育の目的は、子供たちが将来自立し、社会参加するために必要な知識や技能、態度を身につけることにある。つまり、子供たちがそれぞれの障害の状態や特性に応じて身辺処理の自立や社会的自立、経済的自立を図り、地域社会の一員として生きていくために必要な様々な事柄を学んでいくことである。それは、知的障害のある子供たちの教育において、従来から大切にしてきた「生活する力」や「たくましく生きる力」を育てることであり、今回の学習指導要領改訂のキーワードである「生きる力」そのものである。これらの力が培われるためには、知的障害教育における基礎・基本を身につけることができるように、一人一人の障害の状態を把握し、個に応じたきめ細かな指導を一層充実することが重要である。

(3) 研究の経過及び児童の実態から

本校のこれまでの研究を通して、個別の指導計画を作成し、各教科及び領域・教科を合わせた指導の形態において、生活力として身につけさせるべき内容を明らかにし、その内容を身につけるための指導法を工夫してきた。その結果、子供たちの生活力としての伸びをわずかながらではあるものの育ちとしてみることができた。しかし、日々変化する社会や地域の中で生きる子供たちの実態を踏まえ、何が将来の生活で生きていくのかといったことや、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るための指導法の工夫、子供たちの伸びに対する評価といった点ではまだ不十分さが残っている。

そこで、子供たち一人一人の豊かな生活をめざす上で、子供たちの障害の状態及び発達段階や特性等を十分に考慮し、保護者のニーズや日々変化する社会や地域の実態を考慮した内容の設定。また、その内容を身につけさせる過程における指導法の工夫、及び子供たちの伸びに対する適切な評価の在り方について研究を進めていく必要があると考える。

2 主題についての説明

(1) 豊かな生活をめざす学習像の明確化とは

豊かな生活とは 生活力を身につけ高めていく

豊かな生活とは、子供たちが自分の身の回りのもの・ひと・ことに積極的に働きかけるなかで、自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自分の活動への満足感や充実感を味わうと共に、次の活動への期待感を抱くことである。

そのためには、できる・わかる状況設定を工夫していくことが大切である。なぜなら、子供たちに達成感・成就感の喜びを味わわせることが自信につながり、学習意欲を喚起して、主体的に学習

に取り組むことができるからである。豊かな生活をめざす学習像の明確化とは、学習内容・課題といった点と、教師の援助の方法という2点からできる・わかる状況設定を工夫した学習の在り方を明らかにしていくことである。豊かな生活をめざす上で、身の回りのもの・ひと・ことへ主体的にかかわり、新しいことに挑戦し、できるようになることで、子供たちは自信を深めていく。自信を深めることが次のエネルギーとなり、次の活動への興味・関心につながっていくと考える。この主体的な活動の繰り返しにおいて、生活力を身に付けることが可能となる。

(2) 生活力とは

子供たちに培いたい生活力とは、将来自立し、社会参加するために必要な知識や技能・態度といった資質や能力の基盤となる力である。つまり、子供たちが、個々の障害の状態や特性に応じて周辺処理の自立や社会的自立、経済的自立を図り、地域社会の一員として生きていくために必要な様々な事柄を学んでいくことで身につく資質や能力のことである。

具体的には、①日常生活や社会生活を営む上で、基礎となるたくましく生きるための健康や体力、②興味・関心に伴うやる気や、達成感・成就感による自信、③主体的に取り組む中で最後までやり遂げるねばり強さや集団参加の基礎となる協調性、④生活上の課題を解決するために身の回りの事象にかかわる力、⑤生活上の課題解決や社会の仕組みの変化に対応するための知識・技能などの総体である。

子供たちの豊かな生活をめざす上では、現在の生活の充実が必要である。現在の生活を充実させることが将来の子供たちの豊かな生活につながっていくのである。つまり、子供たちが、主体的に取り組むことができる状況を設定する中で、やる気自信に支えられながら自ら自己決定し、繰り返し取り組み、個に応じた指導法を工夫し取り組ませることにより、将来自立し、社会参加するために必要な知識・技能を身につけていくことができると考える。

具体的には身の回りの事象にかかわる力として、自分に必要な情報を収集する能力や収集した情報（知識・技能）を活用する能力、自分の行動を判断する力、自分の考えを表現する力、などの生活上の課題を解決する力である。また、そのときに駆使される知識・技能として、自分の生活を営むために必要な事柄に加えて、変化する社会の仕組みに対応するための情報機器の初歩的な活用技能、ボランティアなど福祉に対応するための知識、環境を守るための廃棄物の処理の仕方なども含まれてくる。



(3) めざす子供の姿

豊かな生活を営む子供の姿を、具体的に次のように考える。

めざす子供の姿

- 学校の中で、教師や友達と協調的にかかわりながら、日々の活動へ積極的に取り組み、生活への充実感や満足感、期待感をもつ子供
- 家庭の中で、自分のことは自分で行い、家族の一員としての役割を果たすことができる子供
- 地域社会の中で、社会事象のもつ意味や価値を知り、自分の生活向上のためにそれを利用することができる子供

3 副主題についての説明

(1) 個別の指導計画を生かした指導法の工夫とは

子供たち一人一人に生活力を培うためには、子供たちの実態や保護者のニーズをもとにたてた個別の指導計画をもとに、内発的な動機に支えられた学習活動を展開できるような指導内容に基づき、指導法を工夫することである。

個別の指導計画を生かすにあたっては、各教科及び領域・教科を合わせた指導の形態において次のような点から考えていくことができる。

1つには、保護者のニーズに応えることができるような目標の設定をどのように行っていくかである。この目標の設定にあたっては、子供たちのわずかな伸びに着目することができるように、子供たちの興味、集中力、学習方法、1つのことを習得するのに要する時間や期間など、実態を考慮しながら設定する。

2つには、個に応じた内容設定を各教科及び領域・教科を合わせた指導においてどのように行っていくかである。一人一人の子供の発達段階や特性等に応じてどのような内容を設定していくのか、教科特性を考慮しながら設定していく必要がある。各教科と領域・教科を合わせた指導の形態において、一人一人が見通しをもって、主体的な学習活動が展開できるようにしていくことである。

3つには、各教科及び領域・教科を合わせた指導においての関連を図っていくことである。一人の子供の成長や発達を促すために、各教科及び領域・教科を合わせた指導において、目標達成のために、どの場面で、何を、どのようにどのくらい行うかということである。これは、単元の中で具体的に目標を設定し、解決していく場合と、年間を見通して教科及び領域・教科を合わせた指導において考慮し特性を生かしながら計画していく必要がある。

(2) 個別の指導計画を生かす学習像の明確化

個に応じた指導法を講じるにあたっては、障害の状態及び発達段階や特性を考慮し、子供たち一人一人の教育的課題に応えることができるように、つぎの5点から指導法を工夫していくことである。

- ① 学習の様子がイメージできるような、児童の学習の仕方に着目した実態把握
- ② 身につけさせたい生活力をもとに一人一人の伸びを評価する指導内容の設定
- ③ 興味・関心を喚起し、自ら取り組みようとする意欲を引き出す教材の開発
- ④ 個に応じた教具、教師の個に応じた働きかけ方の工夫
- ⑤ 学習過程に、動機・熱中・発展という3段階を位置づけた活動構成
 - 動機段階：学習課題を意識し、学習への動機をもつ。
 - 熱中段階：課題に熱中して取り組み、課題を解決したり、解決達成した成果を実感したりする。繰り返しの活動の中で、学習対象や学習方法を知り、それを使う中で、活動の判断や選択を行っていく。
 - 発展段階：学習してきた成果を日常生活に近い場面で生かしたり、日常生活に生かしたりする。

子供自らが数量や図形へのとらえ方を広げる算数科学習

～多様な図形構成を位置づけたかたちあそびを通して～

障害児教育研究部 坂田 佳美

1 主題の意味

(1) 算数科学習がめざす豊かな生活

子供たちが自立し、社会参加して生活をしていくためには、ものの大きさ、形、個数、順番、時刻、金銭といった、様々な数量や図形の情報をもつ課題に適応していかなければならない。知的障害のある子供たちは、一般的に、抽象的で論理的な思考力を要する課題への取り組みが苦手であると言われ、算数で学んだ知識や技能を生活に役立てていくことは困難であることが多い。これは、子供たちの生活において、事象から数量や図形を抽出し抽象化して筋道立てて考えていくという経験が少ないことや、子供自身が数量や図形の内容を実感に伴いながら身に付け、考える力をはたらかせて課題を解決していくという学習の積み重ねが不十分であるということによるものと考えられる。

このような実態にある子供たちが豊かな生活を築いていくためには、数量や図形に関する理解を広め、物事を数量的に処理する技能・態度を養い、より合理的能率的な生活を送れるようにしていくとともに、思考力を育成することが必要であると考え。子供たちが自分の力で数量や図形の諸概念を形成していき、経験したり、学んだりしたことを生かしながら新しい問題の場に進んでかかわり、自ら考え、判断する過程には、満足感や充実感の伴う生活の質の向上が具現化すると考える。

(2) 子供自らが数量や図形へのとらえ方を広げるとは

数量や図形へのとらえ方とは、数量や図形の情報をもつ事象から課題を見出し、判断し、表現していく際の思考のあり方である。子供自らが数量や図形へのとらえ方を広げるとは、これら算数的な事象へのはたらきかけにおいて、子供たちが、主体的に考える力をはたかせながら新しい考え方や処理の仕方に気付いていくことであり、具体的には次のように広がっていくと考える。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 全体的に対象を見ることで直感的にその性質をとらえようとする。(概括的なとらえ方)② 対象のもついろいろな条件や性質に基づいて分析し、はたらきかけを変え、多様な側面からとらえようとする。(分析的なとらえ方)③ とらえた多様な側面から対象を論理的に考察しようとする。(総合的なとらえ方) |
|---|

このように、子供自らが事象へのとらえ方を広げていくことで、子供たちは、自分なりに考え、試行錯誤しながら対象にかかわり、実感を伴って数量や図形についての概念を獲得していく。主体的に課題を解決するこれらの経験は、子供たちに自信や新たな課題解決へのやる気を育んでいくものと思われる。このような過程で身に付く数量や図形の知識・技能は、単なる内容ではなく、子供自身の内側に組み込まれ、いつでも自分の思いや意思で発揮される生活に生きてはたらくものとなるのである。

(3) 算数科で培う生活力

このような算数科学習において、子供たちは、豊かな生活を支える生活力として次のような資質・能力を身に付けていくことができると考える。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○ 自分の力で操作に取り組み課題を解決することができる有用感(やる気・自信)○ 操作の手順や方法を見通したり、間違いに気付いて試行錯誤したりして数量や図形の課題に主体的に取り組んでいく力(かかわる力)○ 自分で必要なものを数えたり量を調べたりして、実感し、納得しながら身に付けていく数量や図形の知識・技能(生活に生きる知識・技能) |
|---|

(4) めざす子供の姿

以上のような自ら数量や図形へのとらえ方を広げる子供の姿を、具体的に次のように考える。

- 「自分で数がわかった、できた。」「もっと形をつくってみたいな。」などと数量や図形の課題を解決する喜びを味わい、やる気・自信を感じる姿
- 「～するために数を数えてみよう。」「四角の向きを変えてみよう。」などと自分なりに工夫して対象にはたらきかけ、試行錯誤しながらかわる姿
- 「合わせて数えると～だ。」「四角の形は点が四つあるんだ。」などと数量や図形の新たなとらえ方を見出し、数量や図形の知識・技能を実感しながら身に付けていく姿

2 副主題の意味

(1) 多様な図形構成とは

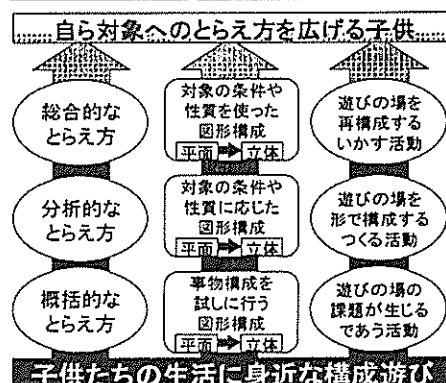
多様な図形構成とは、形の異同・大きさ・向き・構成要素など、形のもついろいろな条件や性質を使って、形を合わせたり組み合わせたりしていくことである。これらの構成に用いる形は、子供たちが視覚的に理解しやすい平面図形から、面を取り出す難易度の高い空間図形へと発展的に設定していく。このような図形構成の過程において子供たちは、ずらしたり回したり裏返したりといった操作概念を駆使しながら、図形対象へのはたらきかけ方を変えてその配置や組み合わせ方を工夫していく。

(2) 多様な図形構成を位置づけたかたちあそびとは

多様な図形構成を位置づけたかたちあそびとは、上述したような図形構成を操作活動の中心に据え、子供たちの生活に身近なものの形をつくりながら構成遊びを行っていく、「図形」領域における一連の学習活動である。これらの活動は、単なるパズル遊び・積み木遊びではない。子供たちが構成遊びのなかでつくるものは、形のもつ条件や性質がその構成の手がかりとなっているもので、図形対象へのはたらきかけ方を変えながら図形概念が獲得されていくものでなくてはならない。

このようなかたちあそびを、具体的には、①いろいろな形を使って遊びの場を構成していく課題とであう活動、②それぞれの形の条件や性質に応じて図形構成を繰り返し、遊びの場をつくる活動、③形への新たなとらえ方を使って再度事物を構成し、遊びの場を作り上げるいかす活動、として段階的に位置づけ、構成遊びを通した活動構成を行う。これらの活動を通して子供たちは、形という情報をもつ対象にはたらきかけ遊びを行うために、考える力を駆使して試行錯誤して対象にかかわり、とらえ方を広げていくことができると考える。

多様な図形構成を位置づけたかたちあそび



3 活動づくりの具体的な方途

(1) 個別の指導計画を生かした年間指導について

- ① 子供たち一人一人の個人目標に基づき、算数科学習における現在の課題を学習場面と日常生活場面における行動観察から明らかにし、個別の指導目標を設定していく。
- ② 算数科学習指導内容表を基に個別の指導内容を重点化して年間に配列し、授業実践を行う。
- ③ 評価観点表を基に子供の変容の姿を評価し、指導計画上の指導目標・指導内容の検討を行う。

(2) 教材化の視点

子供自らが対象へのとらえ方を広げる、多様な図形構成を位置づけたかたちあそびが成立するように、次のような点に留意して教材化を行う。

- 形を組み合わせたり分解したりして遊びの場が構成されるような、子供たちの興味・関心を引

き出し具体的な操作活動が連続する活動を工夫すること（遊びの目的意識）

- 図形の条件や性質に従って図形の配置や構成の仕方を工夫していき、対象への新たな気づきを生み出していく図形操作を設定すること（操作活動）
- 遊びを繰り返しながら、一人一人の発達段階に応じて、図形の操作概念や対象概念を獲得していけるような学習内容を配列すること（個に応じた学習内容の設定）

(3) かたちあそびの図形構成と教材・教具

かたちあそびに位置付く図形の条件や性質に応じて行われる図形構成、それに伴う教材・教具は、具体的には、次のようなものが挙げられる。

条件や性質	主な図形構成	教材・教具
形の異同	異なる形を用いた図柄の構成	形の違いによって色分けした平面・立体図形
形の大きさ	大きさの異なる同じ形を使った図柄の構成図	大きさの違いで色分けした平面・立体図形
形の向き	形の正位置を回転移動させた形の図柄の構成	頂点を強調した図形対象、平面の回転図形板
構成要素(点)	概形から形をつくる複合図形の図柄の構成	頂点を色付けした透明の構成要素シート
構成要素(辺)	辺の異なる長方形や正多角形を使った図柄の構成	異なる辺を色分けした透明の構成要素シート
構成要素(角)	角度の異なる二等辺三角形を用いた図柄の構成	異なる角を色分けした透明の構成要素シート

このような図形構成は、子供たちの個別の指導計画に基づく指導内容に応じて、次のような操作活動として設定し、かたちあそびに位置づけていく。

子供の実態	操作活動	形をみいだす	平面の形をつくる	立体の形をつくる
形や大きさ、向きをとらえる子供		枠線から形を見出す	形に合わせて配置する	平面に合わせて配置する
構成要素をとらえる子供		概形から形を見出す	形を組み合わせて構成する	平面を参照して組み立てる

また、これらのかたちあそびに用いる教材・教具は、次のような点に留意して工夫する。

- 構成する楽しさや操作の多様性のある大きさや材質の素材を選定すること（興味・関心）
- 事物模型の出来上がりや台紙との整合・不整合などにより、構成の正誤に子供自身が気づいて、正しさを確認したりやり直したりできる評価の機能を備えていること（自己評価）
- 形や大きさ、点・辺・角を色などで強調し、図形対象のもつ条件や性質に気づき、はたらきかけを工夫していける支援の機能を備えていること（学習支援）

(4) 活動構成の工夫と基本的な操作活動

かたちあそびを通した活動を次のように「である」、「つくる」、「いかす」の3段階で構成する。

段	で あ う	つ く る	い か す
階	いろいろな図形に出会い、対象のもつ「形」という要素に気づく段階	形の条件や性質に応じて図形対象にはたらきかけながら、丸・四角・三角のそれぞれの形へのとらえ方を広げ、個に応じた図形の概念を形成する段階	見出したとらえ方を使って再度形にはたらきかけ、概念を使う段階
活動と内容	1. 試しの図形構成を体験し、遊びの課題と出合う。 平面 → 立体 ○ 概括的に形をとらえ、活動への目的意識や興味・関心・見通しをもつこと	2. 平面や立体の形を使って生活に身近な事物を構成し、遊びの場をつくる。 (1) 丸の図形を使った構成 平面 → 立体 (2) 四角の図形を使った構成 平面 → 立体 (3) 三角の図形を使った構成 平面 → 立体 ○ 分析的に形をとらえ、丸・四角・三角を識別して平面や立体の図形を構成したり、各図形の名称や特徴を理解したりすること	3. 丸・四角・三角の全ての図形を使って事物を構成して遊びの場を作り上げる。 平面 → 立体 ○ 総合的に形をとらえ遊びを達成した成就感を味わうこと
支援	※事物をつくる必要を感じる遊びの場の設定 ※活動を見通す絵話提示	※図形の条件や性質に応じて事物を構成していく、かたちあそびの活動設定 ※回転図形板や構成要素シートなど支援教具の準備	※丸・三角・四角すべての図形を使った事物を構成する遊びの場の設定

4 指導の実際と考察

(1) 題材名 第3・4学年さくら組 さくらぐみひろばをつくろう (図形)

(2) 本題材の考え方

① 児童の実態について (抽出児2名)

子供たちの個別の指導計画における目標 (資料2参照) に従って図形領域の学習内容を設定するにあたり、本題材にかかわる実態を学習場面や日常生活場面の行動観察から次のように把握している。

	学習への取り組み方	図形の学習段階	図形へのかかわり方
B児	活動への興味・関心はもちやすいが、活動の手順や操作方法をつかみにくい。教師の部分的な補助を受けて課題に取り組んでいく。	Aイ分類: 3-③ Dア形: 2-② Dイ方向: 2-①	マッチングで形を合わせるが、形の向きを変えてずらしたり回したりすることは難しい。
E児	活動への興味・関心や自分なりの見通しをもち、操作の意味をとらえて課題に取り組んでいく。操作の正誤を自分で確認する。	Aイ分類: 5-③ Dア形: 3-① Dイ方向: 3-①	モデル図通りに、形の向きをとらえてずらしたり回したりして構成できる。点や辺の要素に着目し始めている。

② 本題材について

本題材は、「さくらぐみひろばをつくろう」の活動を通して、形の大きさや向きの違いをとらえて平面や立体の形を合わせたり (A児・B児)、点や辺などの構成要素をとらえて平面や立体の形を構成したり (C児・D児・E児) する活動に繰り返し取り組み、図形概念を身に付けていくものである。このような遊びを通した学習場面において、子供たちは、広場を構成するために、図形の大きさや向き、点や辺などに目を向け、図形の配置や構成の仕方を工夫しながら対象にはたらきかけていく。自分自身で形へのとらえ方を広げていくこれらの学習経験を通して子供たちは、図形概念を実感し納得しながら身に付け、考える力を駆使していくことができ、主体的に算数的な事象へ取り組んでいく豊かな生活を考える上で価値があると考えられる。

③ 個別の操作活動について

以上のような実態の子供たちを本題材に取り組ませるにあたって、次のような操作活動を設定した。

B児 ①事物の形を見取る。 ②平面図形を合わせてつくる。 ③立体図形を合わせてつくる。

E児 ①事物の概形を見取る。 ②平面図形を構成してつくる。 ③立体図形を構成してつくる。

(3) 目 標

① 平面や立体の図形を、ずらす・回す・裏返すなどの操作を通して、形を合わせたり (A・B児)、構成したり (C・D・E児) してさくらぐみひろばをつくる。

② 形の大きさや向きをとらえ、立体の中の平面に気付いたり (A・B児)、点や辺などの形の構成要素をとらえ、立体から平面を取り出したり (C・D・E児) する。

(4) 計 画 (5時間)

段階	であう (1時間)	つくる (3時間)			いかす (1時間)
活動と内容	1 さくらぐみひろばづくりを部分的に体験して絵話を見合う。 ○ 形遊びの課題をつかむこと	2 平面や立体の図形を使ってさくらぐみひろばをつくる。 (1) 「丸のひろば」をつくる。 ○ 丸の形の識別や平面・立体の図形構成	(2) 「四角のひろば」をつくる。 ○ 四角の形の識別や平面・立体の図形構成	(3) 「三角」のひろばをつくる。 ○ 三角の形の識別や平面・立体の図形構成	3 「丸・四角・三角のひろば」をつくる。 ○ すべての形の識別や平面・立体の図形構成
支援	※ 絵話、基本図形の提示 ※ 不完全な広場の提示	※ 丸や四角や三角の形で作る事物模型の台紙の準備 ※ 回転図形板、点や辺を強調した構成要素シートの準備 ※ 個に応じた図形構成のかたち遊びの設定 ※ 事物を配置していくさくらぐみひろばの場の設定			※ すべての形を組み合わせて事物をつくるひろばづくりの設定

(5) 指導の実際

① さくらぐみひろばづくりの遊びの課題をとらえるであう段階（1／5時間）

支 援	子 供 の 活 動 の 姿
○ 事物が何もないひろばの設定	教室いっぱい広がったさくらぐみひろばを見た子供たちは、「わー。広いね。」と歓声を上げて喜んだ。場を巡ってみた子供たちは、「おもちゃとか乗り物とかあったらいいな。」とつぶやいた。そこで、Tが次のような絵話を提示すると子供たちは、丸・四角・三角の色板や箱を使って広場の事物をつくろうとした。E児は三角と四角の板を組み合わせて「お家ができるよ。」と言い、B児と立方体の箱に三角柱をのせてみて、「これもお家になる。」と喜んだ。
○ 絵話の提示	～さくらぐみひろばは何もない広場です。そこで、さくら組のみんなは設計図をもらっているいろんなものをつくることにしました。材料は丸や四角や三角の形の色板と箱です。
○ 丸・四角・三角の形の色板や箱の準備	【さくらぐみひろばをつくろう絵話より】

考察①

子供たちは、何もない広場に平面や立体の形を使って事物を構成する、というかたちあそびの課題をとらえ、活動への大まかな見通し・興味・関心をもち、事物構成に用いる色板や箱のもつ「形」という要素に気付き、形を概括的にとらえることができた。これは、構成遊びの課題が生じる場の設定のもと、活動をストーリー化した絵話を提示し、丸・四角・三角など基本的な色板や立体の箱を提示して本題材の図形全体に出合わせたことが有効に働いたためであると考えられる。

② それぞれの形ごとにさくらぐみひろばをつくるつくる段階（2～4／5時間）

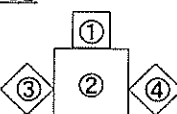
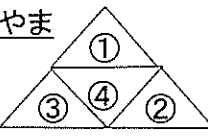
支 援	子 供 の 活 動 の 姿（数字は色板を配置・構成する順番）	
	B児の活動の姿（形の枠線に合わせる）	E児の活動の姿（概形に形を構成する）
「まるのひろば」づくり（丸の形や大きさの識別、円や円柱・球による構成）		
※ 丸の形の事物の台紙の準備	ゆきだるま ② ① B 1色板の構成（平面）①では小さい丸を置いてみて大きい丸に取り替える。②では小さい丸を迷わずに選んで置く。	でんしゃ ① ② E 1色板の構成（平面）①と②に小さい丸を迷わずに選んで置く。
※ 円の色板、円柱、球の準備	球の構成（立体）迷わずに小さい球を大きい球の上にのせて「ほら、雪だるまができたよ！」と喜ぶ。	円柱の構成（立体）円柱の円の面を見つけ、①②の色板の上に合わせて立てて置く。Tが色板と違うことを指摘すると、円柱2本を倒して台車をのせる。
「しかくのひろば」づくり（四角の形や大きさの識別、四角形や四角柱・三角柱を使った構成）		
※ 四角の形の事物の台紙の準備	えき ② ④ ① ③ B 2色板の構成（平面）①②は正方形の大きさを取り出して迷わずに置く。③では正方形小を取り出して裏返したり回転させたりして◇の向きにして置く。④では正方形小を取り出して裏返したり回転させたりして◇の向きにして置く。	もん ③ ② ④ ① ⑤ E 2色立方体・直方体の構成（立体）迷わずに立方体小を4個取り出し、2個ずつ積んで並べてみる。次に直方体を
※ 正方形・長方形の色板、立方体・直方体・三角柱の準備	【写真①回転図形板を使うB児】出すが、回転図形板を取り出しその上で向きを考える。	【写真②辺の長さに注目するE児】辿り「ぴったりよ。」と言い、立方体の上にのせる。
※ 回転図形板構成要素シートの準備		
「さんかくのひろば」づくり（三角の形や大きさの識別、三角形や三角柱・四角錐を使った構成）		
※ 三角の形の事物の台紙の準備	やま ② ① B 3色板の構成（平面）①では三角大を合わせようとするがうまくいかないの	やま ① ② ④ ③ E 3色板の構成（平面）①に三角形小を置いた後活動が進まない。Tが頂点を示したシート
※ 直角二等辺		

三角形・正三角形・の色板 三角柱・四角錐の準備 ※ 回転図形板構成要素シートの準備	Tが回転図形板を提示する。図形板の上で三角を回して①の向きにして合わせる。②でも三角大を取り出し、同様に図形板の上で回転させて向きを変えて合わせる。三角柱の構成（立体）三角柱の色付けした三角の面を見て①の色板の上に置こうとするが向きが合わない。Tと一緒に色付けした面を組み合わせる山を構成する。	を提示して概形に重ねる。①を置いて②の配置で迷っているの、Tが「三角はどこにあるの？点を数えてみよう。」と促すと、②の位置の3つのシールの点を数えて「あ、こうか。」と②③④を次々に構成していく。三角柱の構成（立体）色付けした三角の面を上にして、色板の構成を見ながら三角の面を上に向けて構成する。
---	---	---

考察②

B児は、丸や四角の大きさ、四角や三角の向きという条件をとらえて図形を配置できるようになり、E児は、点や辺の構成要素に着目して形を構成することに気付いていった。このように、子供たちがこれまでの概括的であった図形へのとらえ方を、大きさや向き・構成要素から分析的に広げ、図形概念を形成していったのは、大きさや正位置の異なる図柄構成や、概形からの複合図形の構成といった多様な図形構成を位置づけ、形の向きや点・辺などを強調し操作を支援する回転図形板や構成要素シートを使用したことが有効に働いたためであると考え。

③ 「まる・しかく・さんかくのひろば」をつくり学習を振り返るいかす段階（5／5時間）

支 援	B児の活動の姿	E児の活動の姿
※ 丸・四角・三角の形を使った事物の台紙の準備 ※ 前時までに使った色板や立体の準備	えき  B 1色板の構成（平面） ①と②には正方形大と小を迷わずに置く。③④では、正方形小を裏返したり回したりして◇の向きにして置く。 立方体の構成（立体）立方体大を選んで①の色板の上に置く。次に立方体小の色付けしている面を見て◇の向きにして③④の色板の上に置く。さらに立方体小を選び色付けのない面を見て□の向きにして②の色板の上に置く。	やま  B 1色板の構成（平面） 三角小4枚を取り出すがうまく構成できない。Tが「三角はどこにはいる？」と尋ねると②の部分3点を指さして「ここ、1,2,3。」と答えて三角を置く。③の部分も3点を指さして三角を置く。 三角柱の構成（立体）四角錐や立方体を取り出すが使わず、三角柱を4個取り出して、三角の面を上に向けて構成していき、Tと一緒に起こして立てる。

考察③

B児は、前時までにとらえていった大きさや向きという視点を使って◇を配置しようとし、立方体や三角柱の立体の中にある形の大きさや向きもとらえ始めている。E児は、前時までにとらえていった点の数や辺の長さという構成要素を使って、平面図形の構成や立体からの面の取り出しを行っていくようになった。このように、子供たちが、支援教具なしに、大きさ・向き・構成要素といった形のもつ条件や性質から論理的に考察し、総合的に図形対象へのとらえ方を広げて遊びを達成していったのは、前時までに広げていった新たな図形対象のとらえ方を使って再度遊びの場を作り上げる、丸・四角・三角の全ての図形を用いた図形構成を位置づけたことが有効に働いたためであると考え。

5 全体考察

本題材を通して子供たちは、考える力をはたらかせてさくらぐみ広場づくりを工夫しながら図形対象へのとらえ方を広げていった。その過程では、試行錯誤しながら形にかかわり図形の知識・技能を実感しながら身に付け、自分で課題を解決して自信を深めるという、生活力を培っていく子供たちの姿を見出すことができた。これらの姿からは、多様な図形構成を位置づけたかたちあそびが、図形領域の学習に有効であったことが考察できる。今後は実践を他領域に広げ、子供たちの豊かな生活の実現に向けて、算数科が担う部分をさらに明らかにしていきたい。

資料1 算数科学習指導内容表（①教師と一緒に・②部分的に補助されて・③一人でに細分化する）

領域／段階		1	2	3	4	5
A 数の基礎概念	ア 認識	ものに注意を向ける。	ものの「ある」「なし」がわかる。	目の前に提示されたものを目で追う。	目の前で隠されたものを探す。	ものの名前を聞いてそのものを指さす。
	イ 分類	全く同じものどうしを分ける。	同じ色のものを分ける。	同じ形のものを分ける。	同じ大きさのものを分ける。	用途や種類の同じものを分ける。
	ウ 1対1対応	同じものどうしを対応させる。	関係のあるものどうしを対応させる。	異なるものどうしを対応させる。	1対1対応させて過が分かる。	1対1対応させて不足が分かる。
B 数と計算	ア 数 唱	1～3の数詞を唱える。	1～5の数詞を唱える。	1～10の数詞を唱える。	1～50の数詞を唱える。	1～100の数詞を唱える。
	イ 数 字	1～3の数字を読み書きする。	1～5の数字を読み書きする。	1～10の数字を読み書きする。	1～50の数字を読み書きする。	1～100の数字を読み書きする。
	ウ 1つずつ数える	1～3の個数を数える。	1～5の個数を数える。	1～10の個数を数える。	1～50の個数を数える。	1～100の個数を数える。
	エ 直観的に数える	1を見取って数える。	2までの数を見取って数える。	3までの数を見取って数える。	4までの数を見取って数える。	5までの数を見取って数える。
	オ まとまりで数える	3といくつで4・5を数える。	5といくつで6～10を数える。	10 ずつまとめて数える。	20ずつ・50ずつまとめて数える。	100 ずつまとめて数える。
	カ 順序数	3までの数で順序が分かる。	5までの数で順序が分かる。	10 までの数で順序が分かる。	50 までの数で順序が分かる。	100 までの数で順序が分かる。
	キ 大小比較	1～3の数の大小関係が分かる。	1～5の数の大小関係が分かる。	1～10の数の大小関係が分かる。	1～50の数の大小関係が分かる。	1～100の数の大小関係が分かる。
	ク 数の合成	1～3の具体物を合わせる。	1～3の数字を合わせる。	1～5の具体物を合わせる。	1～5の数字を合わせる。	1～10の具体物や数字を合わせる。
	ケ 数の分解	1～3の具体物を分ける。	1～3の数字を分ける。	1～5の具体物を分ける。	1～5の数字を分ける。	1～10の具体物や数字を分ける。
	コ 加 法	操作を通して「たす」の意味が分かる。	繰り上がりのない1桁のたし算をする。	繰り上がりのない2桁の筆算をする。	繰り上がりのある筆算をする。	桁数の多い筆算に習熟する。
C 量の測定	サ 減 法	操作を通して「ひく」の意味が分かる。	繰り下がりのない1桁のひき算をする。	繰り下がりのない2桁の筆算をする。	繰り下がりのある筆算をする。	桁数の多い筆算に習熟する。
	シ 乗 法	2ずつ、5ずつまとめて数える。	「〇のいくつ分」「何倍」が分かる。	かけ算の意味が分かり立式する。	九九を覚えて計算する。	九九の筆算をする。
	ス 除 法	ある数量を同じ数ずつ分ける。	わり算の意味が分かり立式する。	2桁程度のわり算の計算をする。	わり算の筆算をする。	桁数の多い筆算に習熟する。
	ア 長 さ	並べたり重ねたりして長さを比べる。	「長い」「短い」の意味が分かる。	媒介物を用いて長さを比べる。	任意の単位で「いくつ分」が調べる。	cm、mなどの客観単位が分かる。
	イ 重 さ	手に持って重さを比べる。	「重い」「軽い」の意味が分かる。	天秤ばかりを使って重さを比べる。	計りを使って重さを比べる。	g、kgなどの客観単位が分かる。
	ウ か さ	同じ容器の2つの量のかさを比べる。	「多い」「少ない」の意味が分かる。	異なる容器の2つの量のかさを比べる。	計量器を使ってかさを比べる。	dl、lなどの客観単位が分かる。
	エ 広 さ	重ねて広さを比べる。	「広い」「狭い」の意味が分かる。	媒介物を用いて広さを比べる。	かけ算で面積を計算して広さを比べる。	cm ² 、m ² などの客観単位が分かる。
	オ 時刻・時間	朝・昼・晩の違いが分かる。	時計の数字や針の長さが分かる。	「〇時」の時刻がよめる。	「〇分」の時刻がよめる。	「〇時間」「〇分間」の時間がわかる。
	カ 暦	「今日」「明日」「昨日」の区別ができる。	日付や曜日が分かる。	七曜表の意味が分かる。	日数を数えて何日間が分かる。	簡単な日数計算ができる。
	イ 方 向	上下、左右などの違いが分かる。	自分を基準にして位置関係が分かる。	基準をおさえて位置関係がわかる。	順序数を組み合わせた方向が分かる。	四方位が分かる。
D 図 形	ア 形	丸、三角、四角の弁別、類別ができる。	丸、三角、四角の名称が分かる。	辺や角に着目して形の性質が分かる。	いろいろな立体図形に気づき、親しむ。	定規やコンパスを用いて作図する。
	イ 方 向	上下、左右などの違いが分かる。	自分を基準にして位置関係が分かる。	基準をおさえて位置関係がわかる。	順序数を組み合わせた方向が分かる。	四方位が分かる。
E 数量関係実務	ア 表とグラフ	○・×の簡単な記号の意味が分かる。	ゲームなどの結果を記号に置き換えて表に表す。	表を見て「〇より多い、少ない」が分かる。	表から棒グラフなどのグラフを作る。	グラフを見て「〇より多い、少ない」が分かる。
	イ 金銭処理	金種の違いが分かり買い物に必要なことが分かる。	10円までの等価関係が分かり少額の金額を数える。	100円までの等価関係が分かり金額を取り出す。	1000円までの等価関係が分かり金額を取り出す。	料金の計算をして過不足をとらえる。

資料2 算数科学習における個別の指導計画（第3・4学年さくら組）

		B 児	C 児	E 児
個 人 目 標		○ 排泄や衣服の着脱などの身辺処理の能力を身に付ける。 ○ 成功体験を増やし自信をもって行動する。 ○ 課題解決の方法を工夫して事象にかかわる。 ○ 基本的な文章表現力や数量・図形の概念を身に付け、音楽表現（歌唱・器楽）の技能を高める。	○ 円滑な対人関係を形成し、洗濯・掃除など簡単な日常生活技能を身に付ける。 ○ 事象への興味・感心を高め、自分のしたいことに持続して取り組む。 ○ 課題解決の方法を工夫して事象にかかわる。 ○ 意思を正確に表現する能力や、基本的な計算や実務（時刻・金銭）の力を身に付ける。	○ 場に応じた電話・交通機関の利用など社会生活技能を高め、対人関係を広げる。 ○ 成功体験を増やし自信をもって主体的に行動する。 ○ 課題における問題の所在や解決方法を見通して事象にかかわる。 ○ 感情や思考を表現する力や、基本的な四則計算や実務（時刻・金銭）の力を身に付ける。
算 数 科 学 習 指 導 目 標		○ 身近な50までの数を唱えたり読んだり数えたりする。 ○ 長さや広さを直接比較で比べたり、基本的な図形を名称とむすんでとらえたりする。 ○ 生活場面と関連させて簡単な時刻や日付を読む。	○ 身近な50までの数を10のまとまりで数えたり、簡単なたし算の計算をしたりする。 ○ 長さや広さを間接比較で比べたり、基本的な図形を名称とむすんでとらえたりする。 ○ 生活場面と関連させて簡単な時刻や日付を読む。	○ 身近な100までの数を10のまとまりで数えたり、簡単なひき算・かけ算・わり算の計算をしたりする。 ○ 簡単な長さを定規で測定したり、基本的な図形の性質をとらえたりする。 ○ 時刻を正確に読んだり100円程度のお金処理をしたりする。
年間指導題材と指導時数		算数科学習指導内容表における指導内容		
4月	「おもちゃはいくつ」④ 「すごろくあそび」⑤ グループ別学習⑥	B-ウ-3 B-ア-3 B-イ-3 B-ウ-3 B-エ-2	B-ウ-4 B-ア-4 B-イ-4 B-エ-3 B-オ-2	B-オ-3 B-ク-5 B-コ-2
5月	「さかなつりゲーム」④ 「かたちであそぼう」⑤ グループ別学習⑥	B-カ-2 D-ア-1 B-ウ-3 B-エ-3	B-カ-3 D-ア-2 B-エ-4 B-オ-2	B-カ-4 D-ア-2 B-ケ-3
6月	「あわせていくつ」⑥ 「とけいをよもう1」⑥ グループ別学習⑧	B-ク-3 C-オ-2 B-ウ-4 B-エ-3	B-ク-4 C-オ-3 B-コ-2	B-コ-2 C-オ-4 C-オ-4
7月	「おみせやさんごっこ」⑥ グループ別学習④	B-オ-2 B-ウ-4 B-エ-4	B-エ-5 B-オ-2 C-オ-3	B-シ-1 B-シ-1
9月	「かぞえっこをしよう」⑦ 「のこりはいくつ」⑤ グループ別学習⑧	B-オ-1 B-サ-1 B-ク-3 B-ク-4	B-オ-3 B-サ-2 B-ケ-3 B-コ-2	B-シ-2 B-サ-2 B-シ-2
10月	「はいたつごっこ」⑥ 「ころころゲーム」⑥ グループ別学習⑧	B-オ-2 B-キ-2 B-オ-2	B-オ-3 B-キ-3 B-オ-3	B-シ-3 B-キ-4 B-シ-3
11月	「パズルめいろ」⑦ 「ながさのくらべっこ」⑤ グループ別学習⑧	D-ア-2 C-ア-1 B-コ-1	D-ア-3 C-ア-2 B-コ-2	D-ア-3 C-ア-3 B-シ-4
12月	「とけいをよもう2」⑦ グループ別学習⑧	C-オ-3 C-オ-3	C-オ-4 C-オ-4	C-オ-5 C-オ-5
1月	「かいものごっこ」⑦ 「カレンダーづくり」④ グループ別学習④	E-イ-2 C-カ-2 E-イ-2	E-イ-3 C-カ-3 E-イ-3	E-イ-4 C-カ-4 E-イ-3
2月	「ひろばをつくろう」⑤ 「ボーリングゲーム」⑤ グループ別学習④	D-ア-3 E-ア-1 B-カ-3	D-ア-4 E-ア-2 B-カ-4	D-ア-4 E-ア-3 B-カ-5
3月	「たからさがし」⑥ グループ別学習④	D-イ-1 B-コ-2	D-イ-2 B-サ-2	D-イ-3 B-シ-4

楽しい生活を共に創り出す生活単元学習

～個の役割が広がる集団活動の展開～

障害児教育研究部 谷 崎 和 一 郎

1 主題の意味

(1) 生活単元学習がめざす豊かな生活

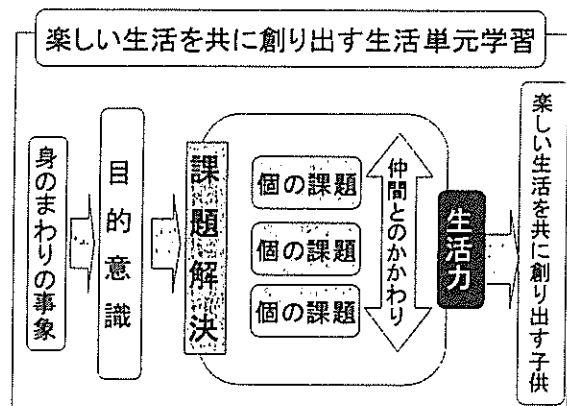
障害のある子供たちの将来の豊かな生活を考えたとき、できるかぎり自立し社会参加することが大きな目標とされている。自立し社会参加するとは、生活の主体者として、日常生活における身の処理をはじめとして、進んで身のまわりの人・もの・ことにかかわり、自分なりに判断して行動することである。また、家庭や学校、地域社会など、様々な集団の中で生活していく中で、人とのコミュニケーションを図りながら、自分なりに意志決定して行動したり、集団の成員として、役割を果たしたり、協力したりして、物事に取り組み、自分の活動への満足感や集団への所属感を味わうことである。そのような生活を目指すためには、現在の生活において、社会や自然における対象への興味・関心をもち、それらに進んでかかわる中で、自分の行動を判断したり、人と協同して活動したりして、生活上の課題を解決していくことが大切になると考える。

(2) 楽しい生活を共に創り出す生活単元学習とは

子供たちにとって楽しい生活とは、身近な社会や自然において、自分一人では経験できないようなことを経験し、その中で自分のもっている力を最大限に発揮しながら、身のまわりのもの・人・ことにかかわり、満足感や成就感を味わうことである。共に創り出すとは、共通の目的意識をもって、仲間と協力しながら、目的達成のための一連の活動に取り組み、新たに創り出した環境や事物を共有することである。仲間と共に取り組む際には、一人一人が実態に応じた活動に精一杯取り組み、課題を首尾よく成就することが必要であり、このことによって、一人一人が自立的な生活に必要な知識・技能、習慣、態度を身に付けていくことになる。楽しい生活を共に創り出す生活単元学習とは、身のまわりの事象へのかかわりから生まれた思いや願いの実現に向けて、仲間と協同で取り組み、集団で取り組んだからこそ創り出せる環境や事物を共有して、活動への満足感や充実感を感じることである。

(3) 生活単元学習で培う生活力

子供たちが身のまわりの事象に積極的にかかわるなかで、豊かな生活を築いていく生活力を培うことができると考える。具体的には、①目的や課題を意識し、見通しをもって取り組む力、②必要な情報を収集・活用する力、③役割意識や人との協調的なかかわり方などの集団参加の力、④生活に生きる知識・技能や態度、⑤課題を解決することで味わうやる気・自信、などの資質や能力を培うことで、子供たちが生活力を身に付け、豊かな生活を創り出すことができると考える。



(4) めざす子供の姿

学習場面での「楽しい生活を共に創り出す」子供の姿を、具体的に次のように考える。

- 「みんなで〇〇をやりたいな。そのために〇〇をつくろう。」と目的や課題を意識し、見通しをもつ姿
- 「〇〇さん、いっしょにがんばろう。」「〇〇さんに教えてあげよう。」など、友達とのかかわりを深める姿
- 「ノートでやり方を確かめよう。友達に聞いてみよう。」など、自分なりに課題に取り組む姿
- 「みんなが頑張ったからできたんだね。」「ぼくも～がじょうずにできたよ。」と、目的達成の満足感を味わう姿

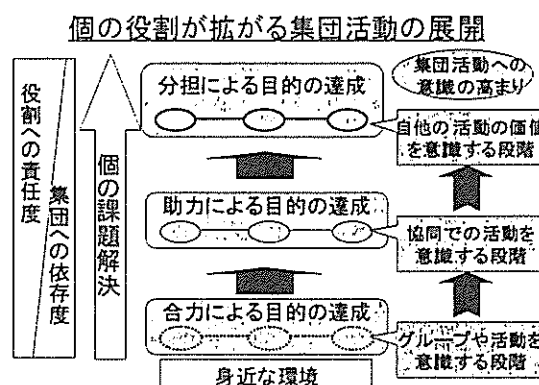
2 副主題の意味

(1) 個の役割が広がる集団活動とは

個の役割が広がる集団活動とは、集団の目的達成に向けて取り組む際に、一人一人が自分に合った課題に取り組んでいくとともに、集団の成員同士がかかわりを強めていくことである。目的の達成のために集団として課題解決に取り組む際には、分担された役割を複数で担うことから始め、その中で、一人一人が役割を意識し、分担された仕事に取り組んでいく。その取り組み方は、単に力を合わせること（合力）から、タイミングを考えて力を合わせること（助力）、そして、一つの仕事をいくつかに分けて取り組むこと（分担）へと段階的に高まっていく。高まった協力の段階では、目的達成のために必要な活動がより細分化され、それぞれが機能的に働きながら、他の活動とつながった一連の活動として行われる。そのような段階的な協力の過程において、個人が担うべき役割の責任が徐々に重くなり、個人の活動の結果が目的の達成に大きな影響を与えるようになる。目的達成に向かうためには、一人一人が積極的に課題に取り組み、必要な情報を収集・活用して、課題を解決しなければならない。

(2) 個の役割が広がる集団活動の展開とは

個の役割が広がる集団活動の展開とは、年間を通じて、集団活動を段階的に位置づけた単位に取り組むことである。具体的には、「①集団の全員が同じ活動を繰り返すこと（合力による目的達成）」、「②タイミングを合わせながら活動すること（助力による目的達成）」、「③集団で役割を分けて活動すること（分担による目的達成）」といった目的達成に向けて中心となる活動を年間を通して順序立てて行うことである。3つの活動において、個の課題解決が繰り返し行われ、一人一人が課題解決に積極的に取り組む中で、生活に必要な知識・技能、態度などを個に応じて身に付けるとともに、役割への意識や集団活動への意欲を高めていくことができる考える。



3 活動づくりの具体的な方途

(1) 教材づくりについて

① 子供たちに出会わせる対象の選定について

子供たちが思いや願いを生み出すことができるものを発達段階や経験の度合い、生活経験や生活の流れから吟味する。さらに、思いや願いの実現に向けて、集団での活動が連続・発展していく可能性を秘めているとともに、課題を解決する際に複数の役割が生じ、友達と力を合わせることのよさを子供たち自身が感受することができるものを選定するようにする。

具体的には次のような点に留意して、学習対象を選定する。

- 子供たちの興味・関心をひき、集団としての目的をもつことができるもの（目的性）
- 多様な活動が発展的に生み出される可能性があるもの（発展性）
- 集団で取り組むことのよさを味わうことができるもの（集団活動の必要性）
- 子供たち一人一人に役割への責任が生じるもの（自己責任の必要性）

② 年間単元構想について

年間を通して子供たちに集団参加や課題解決の力を育てていくために、次のようなねらいと条件をもった集団活動を段階的に位置づけ、年間を通して展開する。

協力の 段 階	合力による目的の達成 ⇄	助力による目的の達成 ⇄	分担による目的達成
	多人数がかかって力を合わせることで、効率的に問題を解決することができる。	二人以上の人が一斉にあるいは順序立てて力を合わせることで可能にすることができる。	一つの仕事をいくつかの部分的な仕事に分けて、それらを二人以上の人たちが分担することができる。
集団活動 の条件	同じ活動を繰り返すことで目的を達成することができるもの	複数の役割を分担して一つの活動を行うことで目的を達成することができるもの	一連のつながりをもつ複数の活動を分担して行うことで早く確実に目的を達成できるもの
活動例	植物の栽培、作業的な活動など（単純な活動）	調理、製作、ゲームなど（複雑な活動）	野外調理、野外活動、集会活動など（組織的な活動）
グルー ピング	・人へのかかわり方の課題が、相手に積極的に働きかける段階の児童と相手からの働きかけに応じる段階の児童との組み合わせ ・方法の見通しをもち、手順表などをもとに課題に試行的に取り組む行う児童と模倣的に課題に取り組む児童との組み合わせ ・相手へのかかわり方の高まりに応じた変動的なメンバー構成		
個に応じた 役割の設定	・個別の指導計画（資料2参照）をもとに、経験の度合いや認識の発達の程度、必要な知識・技能の習得状況、などを考慮し、一人一人が自分の力を最大限に発揮できる役割を設定する。		

(2) 個の活動を促す手順表について

子供たちが自ら課題に取り組むことができるように、個に応じた手順表を提示し、課題解決に必要な情報を収集することができるようにする。手順表の作成については、次のような点に留意する。

- 活動の順番が明確になるように、一連の活動をノート式に表し、各ページに一つの活動を記すようにする。
- 課題解決に必要な情報（数字、言語、記号など）を個の発達段階に応じて、使用する。
- 目的の達成に必要な活動を3～5程度の行程に捨象し、写真→絵→文といった段階で、個に応じて行為を認識させていく。

(3) 活動構成について

子供たち一人一人が集団の一員として目的を共有し、個に応じた課題に取り組み、首尾よく成就するとともに、友達とのかかわりを強めることができるように、次のような一連の活動を構成する。

また、具体的な支援については、次の通りである。

階	つかむ段階(目的の共有)	おこなう段階(活動の共有)	あじわう段階(成果の共有)
活動	集団としての目的をもったり、目的達成への計画をたてたりする。	目的の達成に必要な活動をグループで分担し、グループごとに課題に取り組む。	自分たちの活動を他者に紹介したり、ともに活動したりする。
支 援	※ 対象への興味・関心を引き出す体験的な場の設定 ※ 目的意識や課題意識を生み出す資料の提示（絵図やVTR、写真など） ※ 活動への見通しをもたせる計画表の提示	※ 個の活動を促す手順表の提示 ※ 課題解決のための情報を収集したり活用したりすることのできる場の設定 ※ グループ間の相互交流の場の設定 ※ 主体的な課題解決や人へのかかわりを生み出すグルーピングの工夫 ※ 友達とのかかわりを生み出す状況作りの工夫	※ 活動の過程や結果を発表する場の設定 ※ 活動の成果を生かした発展的な活動の場の設定 ※ 教師や他者による賞賛や励まし

4 指導の実際と考察

(1) 単元名 第5・6学年梅組

(単1) みんなでハーブガーデンをつくろう (単2) みんなでハーブフェスタをしよう (単3) みんなであったかパーティーをしよう

(2) 年間単元の考え方

① 児童の実態(抽出児2名)

	学習への取り組み方	役割意識	人とのかかわり方
D児	教師や友達の行動を見て、模倣的に課題に取り組む。	簡単な役割を意識し、自分なりに取り組んでいく。	困ったときには、友達の働きかけを受け入れて行動する。
F児	目的や課題を意識し、手順表をもとに試行的に取り組む。	自分の役割を責任をもって果たそうとする。	知識や技能を言葉やモデル演示で伝えようとする。

② 年間単元構想について

年間単元は、集団による目的的な活動を通して、子供たち一人一人に、課題解決の力や集団参加の力、生活に生きる知識や技能、態度といった生活力を培うことを大きなねらいとしている。

具体的には、年間を通して、段階的に集団活動を位置づけ、①目的や課題を意識し、見通しをもつことや必要な情報を収集・活用する課題解決の力、②役割を意識したり、人と協調的にかかわったりする集団参加の力、③生活に生きる知識・技能、態度などを高めていくことである。各単元に位置づけた具体的な集団活動は次の通りである。

単元	みんなであってハーブガーデンをつくろう	みんなであってハーブフェスタをしよう	みんなであってパーティーをしよう
活動	たくさんのハーブの苗を協同で植える。	ざるや鍋を同時に使いながら、ハーブティー等を作る。	炭係、穴掘り係などに分かれてやきいもやおしるこを作る。

単元1では、ハーブの栽培活動を生活上の課題として取り上げ、比較的単純な活動を位置付ける。単元2では、ハーブを活用した調理や制作活動を生活上の課題として取り上げ、複数の調理器具を同時に使う複雑な活動を位置づける。単元3では、野外調理を生活上の課題として取り上げ、穴掘りやアルミ巻き、炭おこしなどの仕事を分担した組織的な活動を位置づける。

(3) 年間単元目標

- 友達と協力して課題に取り組む集団活動を通して、課題解決の力、集団参加の力、生活に生きる知識・技能、態度といった生活力を身につける。

(4) 計画(単元1－8時間、単元2－8時間、単元3－9時間)

単元	「みんなであってハーブガーデンをつくろう」	「みんなであってハーブフェスタをしよう」	「みんなであってパーティーをしよう」
学習活動と内容	1 ハーブガーデン作りについて話し合う。 ○ ハーブへの興味・関心をもつこと 2 苗植えや水やりなどの課題に取り組む。 ○ 数種類のたくさんの苗をグループの友達と植えること 3 ふじ組やさくら組に紹介する。 ○ 目的達成の満足感を味わうこと	1 ハーブフェスタをすることについて話し合う。 ○ ハーブの新たな興味・関心をもつこと 2 調理活動や制作活動などの課題に取り組む。 ○ 友達とタイミングを合わせながら、加工品を作ること 3 ふじ組やさくら組を招待して、ハーブフェスタをする。 ○ 自分の役割を進んで果たし、目的の達成を味わう。	1 あったかパーティーをすることについて話し合う。 ○ 焼きいもやおしるこへの興味・関心をもつこと 2 野外調理の課題に取り組む。 ○ 分担された仕事に責任をもつこと 3 あったかパーティーをする。 ○ 身に付けた技能を生かして、満足感を味わうこと
支援	※ ハーブの香りを嗅ぐ場の設定 ※ 個に応じた苗の植え方ノート	※ ハーブの加工品を体験する場の設定 ※ 友達とのかかわりを生み出す教具の工夫 ※ 個に応じた作り方ノート	※ 焼きいもとおしるこを味わう場の設定 ※ 関連する係の設定 ※ 個に応じた作り方ノート

(5) 指導の実際

① みんなでハーブガーデンをつくろう（9月）

子供たちは、ハーブとの出会いから、ハーブガーデン作りの目的を共有し、目的の達成に必要な活動として、苗植えや水やり、看板作りに取り組んでいった。F児は、D児、G児と一緒に3つの畝に5個ずつのハーブの苗を植えていった。F児は、教師の「どんなふうに植えるの？」という問いかけに、「こんなふうに」と手で円を描いてみせた。また、穴と穴の間隔を考えながら、掘る位置を決めていった。そして、同じグループのD児やG児に対して、穴を掘る位置を指示したり（写真①）、代わりに穴を掘ったりしていった。D児は、自分なりに穴を掘っていたが、F児から掘る位置を指示されると、それまで掘っていた位置を変更して掘っていった。苗植えを終えた子供たちは、その後、看板作りや水やりといった課題を解決し、ハーブガーデンを作ることができた。そして、できたハーブガーデンに低学年や中学年の友達を招待して、自分たちが植えたハーブの名前を知らせたり、香りを嗅ぐ体験をさせたりして、自分たちの活動のよさを味わっていった。



【写真① 掘る場所を指示するF児】

考察①

下線部の反応から、友達に苗の植え方を教えたり、代わりにしたりする姿（F児）や友達の働きかけを受け入れながら、課題に取り組む姿（D児）が見られた。このことから、たくさんのハーブの苗を協同で植える状況作りをしたことで、自分の分担以外にも責任をもつ役割意識（F児）や友達の働きかけに応じて行動を修正する協調的なかわり（D児）を生み出すことができたと考える。

② みんなでハーブフェスタをしよう（11月）

子供たちは、ハーブの新たな楽しみ方に出合い、ふじ組やさくら組、家の人などに、ハーブのよさを紹介したいという思いをもち、ハーブフェスタを実行するという目的を共有していった。ハーブの加工品を試しに作る段階でF児は、ハーブティー作りに取り組んだ。その中で、カップにお湯を注ごうとするが、お湯が出てこないで、手順表を見て、ポットのロックをはずしていった。そして、カップの中に記されている線の所までお湯がたまるのを確認しながら注いでいった。ハーブティーの入った鍋を自分一人でもどうとするが、少し傾けて躊躇し、教師を呼んで補助してもらいながら、注意深くハーブティーを容器に移していった。2回目のハーブティー作りの時には、「Dさん、これをもって。」と言ってハーブティーの入った鍋をD児にもたせようとした。しかし、D児が鍋をもつ様子を見て、鍋をG児にもってもらい、自分がD児と一緒にざるをもった。（写真②）。ハーブティーの味を調えるために蜂蜜を入れる際には、「Dさん、これをする？」と言って、D児にスプーンを渡し、手を添えながら一緒に活動していった（写真③）。試しの加工品作りを終えた子供たちは、招待状やハーブフェスタ会場に立てる幟作りに取り組んでいった。ハーブフェスタでは、ふじ組やさくら組を招待して、ハーブクッキーやハーブティーを紹介していった。



【写真② 一緒にハーブティーを注ぐ様子】



【写真③ 一緒に蜂蜜を入れるD児とF児】

考察②

下線部のF児の様子から、複数の調理器具を同時に使わないとハーブティーができないという状況の中で、慎重に鍋を傾けたり、ざるをしっかりともったりするといった、タイミングを考えて力を合わせる姿が見られた。またF児は、同じグループのD児やG児に役割を促し、状況に応じて手を添えるなどの補助的なかわりをする事ができた。ハーブの苗を植えるときには、友達の代わりにするといった役割意識が友達の活動を支えようといったものに高まったことがうかがえる。さらに、D児と一緒にざるをもった姿から、お湯が危険であるという意識やお湯の扱い方の高まりも見ることができると考える。

③ みんなであつたかパーティーをしよう（2月）

子供たちは、実際に焼きいもやおしるこを味わい、野外調理をしてあつたかパーティーをするという目的を共有していった。そして、焼きいもやおしるこを作るために必要な行程を意識し、それらを分担して、同時に行わないといけないという課題意識をもっていった。試しの野外調理の際にF児は、炭を穴に置いたり、さつまいもの上に置いたりする「やきやき係」を担当した。炭の状態がよくなると、穴掘り係の所にいき、「がんばれー」と言って一緒に掘り始めた（写真④）。途中で「ここを掘って。E君」と言ったり、E児がさつまいもの模型を置いて穴の大きさや深さを確かめるのを手伝ったりしていった。その後は、さつまいもをアルミ箔や新聞紙で巻く仕事をするまきまき係の所にいき、D児の包み方を横からじっと見て「OK。OK。」と言った（写真⑤）。その後、再び、穴掘り係の所に行き、「でこぼこになってない？」と穴の状態を尋ねた。穴ができたのを確認すると、急いで自分の手順表を確認しに行き、「ぼくがする」と言って、火ばさみを使って一つ一つ炭を穴に入れていった。試しの野外調理を行った後は、ふじ組やさくら組の友達を招待して、あつたかパーティーを開き、あつたかやきいもとおしるこを味わうことができた。



考察③

下線部のF児の反応から、自分の係の仕事に進んで取り組むとともに、他の係の出来映えや進行状況を気にかけ、励ましたり、手伝ったりする協力の姿（F児）がうかがえる。このことは、焼きいもやおしるこを作るために必要な行程を分担し、穴やさつまいもの準備ができないと炭を入れることが出来ないといった状況を作ったことで、友達に役割を促すといったかわりをしていたF児が他の係の友達の様子を意識し、必要に応じて手伝ったり、友達の活動を尊重して励ましたりするといった、全体の様子を気にかける役割意識をもつことができたと考えられる。

5 全体考察

年間を通した子供の姿から、友達の活動に注目したり、友達に活動を促したり、友達の課題解決を励ましたりするといった役割意識、友達の働きかけに応じたり、状況に応じて補助したりするといった人とかかわり方、手順表をもとにした課題解決、調理器具の扱い方や危険なものに対する注意、などの生活力の育ちを見ることができた。このことから、①年間を通して段階的に集団活動を位置づけたこと、②集団活動が成り立つような状況作りを行ったこと、などが有効であったと考える。

資料1 生活単元学習指導内容表(①教師と一緒に・②部分的に補助されて・③一人でに細分化する)

段階		1	2	3	4	5
領域	ア	「おはよう」「さようなら」等に対応する。	「ありがとう」等のお礼を言う。	「ごめんなさい」等の詫言を言う。	簡単な日常の挨拶をする。	日常の挨拶や会話を
	イ	相手の投げかけに応える。	相手の指示に従って従って行動する。	分からないことを尋ねる。	話題をもちかけて会話を	一緒に行事や会で活動する。
	ウ	年賀状を出す。	招待状を出す。	お礼状を出す。	手紙を出す。	定期的に手紙のやりとりをする。
A 交 際	エ	年賀状や手紙等				
B 役 割	ア	誕生会や遠足、運動会などに参加する。	誕生会や学級会等で、簡単な役割をする。	誕生会や学級会などで司会などの役割をする。	運動会や学芸会などで、自分の係の簡単な仕事をする。	運動会や学芸会などで、自分の係の仕事を責任をもってやり遂げる。
	イ	挨拶の受け付けなどの当番の仕度をする。	黒板ふきなどの学級の清掃活動をする。	教材配りや給食運びをする。	日直、給食当番、掃除当番などをする。	簡単な作業をみんなでする。
C 手 伝 い 仕 事	ア	掃除道具や運動用具の整理整頓	教室や廊下のゴミを拾う。	決められた場所の簡単な掃除をする。	決められた場所の掃除をする。	担当場所以外の掃除を手伝う。
	イ	自分の学習用具の片付けをする。	みんなで使った学習用具の片付けをする。	遊具の後片づけをする。	仕事道具の後片づけをする。	仕事が終わったことを報告する。
	ウ	調理器具を知っている。	簡単な押す調理器具を使える。	押ししたり引いたりする調理器具を使う。	必要な調理器具を選んで使う。	電化製品を使って調理をする。
	エ	裁縫道具を知っている。	目印に沿っているものを通す。	目印に沿って直線をぬう。	目印に沿って直線や曲線をぬう。	自分で目印を決めてぬう。
D 金 銭	ア	お金の扱い方	もらったお年玉や小遣いを大切にする。	生活に必要なことを知り、無駄遣いをしない。	小遣いを自分で考えて使う。	今すぐ使わずにお金は貯金したり、預けたりする。
	イ	買い物の仕方	買うものをレジにもっていく。	買い物に必要な簡単な言葉を使う。	小額で決まった額の買い物を	小額をおつりのないように支払う。
	ウ	硬貨や紙幣の種類	お金にいろいろな種類があることが分かる。	1円、5円、10円が分かり、区別できる。	50円、100円、500円が分かり、区別できる。	1円、5円、10円の価値の大きさが分かる。
	エ	自動販売機の利用	自動販売機を利用しようとする。	お金を入れて自動販売機を利用する。	自分で選んで自動販売機を利用する。	どんな自動販売機でも利用する。
E 自 然	ア	自然との触れ合い	公園、野山、川、海などで遊ぶ。	草花、木の実拾い、落ち葉などをして遊ぶ。	草木の実拾いなど、落ち葉の拾いなどをして遊ぶ。	ありやちようなどを探したり、見たりして遊ぶ。
	イ	身近な植物の栽培	草花に関心をもつ。	草花の種や球根などを植えて育てる。	野菜の種や苗を植えて育てる。	草花や野菜などの成長の様子を観察する。
	ウ	身近な遊びや道具の制作	シャボン玉、風車などの遊びをする。	紙飛行機、舟、こまなどを作って遊ぶ。	水鉄砲、糸電話、たこなどを作って遊ぶ。	鏡や虫めがねを使って遊ぶ。
F 社 会 の 仕 組 み	ア	公共機関	お巡りさん、郵便屋さんに関心をもつ。	学芸会などの行事や、留所があるところがある。	救急車や消防車の名前が言える。	救急車や消防車の仕事を知ることができる。
	イ	社会の行事	身近な社会の行事や、お祭りなどに関心をもつ。	身近な社会の行事に関心をもつ。	社会の行事、祝日のおよそを知ることができる。	テレビや新聞などを通して、身近な社会の大きな行事に関心をもつ。
G 公 共 の 施 設	ア	交通機関の利用	電車やバスの乗り降りの時は、定期券を見せる。	電車やバスの切符カードを改札で出す。	電車やバスの切符やカードを自動改札機で買う。	目的の駅や停留所で降りる。
	イ	電話の利用	公衆電話の扱いに慣れる。	電話の取り次ぎをする。	留守番電話に用件を伝える。	メモを取りながら電話を受ける。
	ウ	郵便の利用	ポストに手紙を投函する。	はがきや切手の種類が分かり、利用する。	宛先や宛名などの必要事項を自分で書く。	いろいろな重さや大きさの封筒を出す。
	エ	交番の利用	学校の近くの交番の場所が分かる。	学校の近くの交番で道を尋ねる。	家の近くの交番の場所が分かる。	家や学校の近く以外の交番で道を尋ねる。
H 運 輸 通 信	ア	公園や遊園地の利用	学校の近くの公園に関心をもつ。	学校の近くの公園の遊具や設備を利用する。	自宅近くの公園に関心をもつ。	自宅近くの公園の遊具や設備を利用する。
	イ	宅配便	宅配便を知る。	宅配便を利用しようとする。	宅配便を利用する。	宅配便のサービスに関心をもつ。
I 社 会 の 変 化	ア	インターネット	インターネットを知る。	インターネットを利用しようとする。	インターネットから情報を収集する。	電子メールを送る。
	イ	ボランティア	ボランティア活動を知る。	ボランティア活動に参加する。	ボランティア活動に参加する。	国際規模のボランティア活動に参加する。

資料2 生活単元学習における個別の指導計画例

個人目標・生活単元の指導目標（年間目標のみ記載）・各月の重点化した学習内容（資料：生活単元学習指導内容表参照）・各月の単元計画を具備した個別の指導計画例として、次のようなものがあげられる（例：5・6学年梅組）

		B 児	E 児	F 児
個人目標		○ 交通機関の利用や地域の行事への参加を一人でする。 ○ 見通しをもって物事にかかわる。 ○ 正確な意志伝達の能力や簡単な金銭処理の力を身につける。 ○ 集団の一員としての自覚を高める。	○ 排泄や衣服の着脱などの身近処理の能力を身につける。 ○ 成功体験を増やし自信をもって落ち着いて行動できる。 ○ 簡単な計算・金銭処理の力を身につける。 ○ 集団の目的や課題を意識して集団に参加する。	○ 買い物や交通機関の利用を一人で行う。 ○ 課題解決の方法を自分なりに判断・選択する。 ○ 正確な意志伝達の力や簡単な金銭処理の力を身につける。 ○ 集団の目的や課題を意識して見通しをもって参加する。
生活単元学習指導目標		○ 目的意識をもって粘り強く活動に取り組む。 ○ 自分の意思を伝えたり相手の投げかけに応えたりして一緒に活動する。 ○ 友達との活動を意識しながら、グループで活動する。	○ 目的意識や課題意識をもって活動に取り組む。 ○ 自分の気持ちを進んで伝えたり相手の様子に関心をもって人とかわる。 ○ 行事や催しで人と一緒に楽しく活動したり、簡単な仕事をしたりする。	○ 課題意識や見通しをもって活動に取り組む。 ○ 自分に必要な情報をめねたり、自分から話題を持ちかけたりして人とかわる。 ○ 集団の中心的な役割を担い、全体の流れを意識する。
年間指導単元と指導時数		生活単元学習指導内容表における指導内容		
4月	「かんげいえんそくにいこう」⑥	A-イ-4	B-ア-2	B-ア-4
	「ふじみがくげいかいをしよう」⑫	B-ア-3	B-ア-3	B-ア-4
5月	「おきなさんをおおきそだてよう」④	E-イ-4	E-イ-5	E-イ-5
	「おきなさんをおおきそだてよう」⑫	D-イ-3	A-ウ-4	D-イ-3
	「さつまいもをうえよう」②	E-イ-4	E-イ-5	E-イ-5
6月	「スーパーマーケットのいものをして」	D-イ-3	D-イ-4	D-イ-3
	「おきなさんをおおきそだてよう」⑫	C-ウ-2	A-イ-3	C-ウ-4
	「バスにのってふくおかタワーにいこう」⑫	G-ア-2	F-ア-5	G-ア-4
7月	「やまがさけんがくにいこう」⑩	G-ア-2	F-イ-3	G-ア-4
	「たなばたかいをしよう」⑧	B-ア-3	F-イ-3	B-ア-4
9月	「つきみがくげいかいをしよう」⑫	B-ア-3	B-ア-3	B-ア-5
	「みんなでハーブガーデンをつくらう」⑧	E-イ-4	A-イ-4	B-ア-5
10月	「うんどうかいをがんばろう」④	B-ア-1	B-ア-4	B-ア-4
	「スケッチかいにいこう」②	G-オ-2	F-ア-5	G-オ-2
	「にしこうえんをたんけんしよう」⑨	E-ア-2	E-ア-2	E-ア-3
	「おいもパーティーをしよう」⑦	B-ア-3	A-イ-4	C-ウ-3
11月	「すもう大会をしよう」⑬	B-ア-1	B-ア-1	B-ア-1
	「みんなでハーブフェスタをしよう」⑧	B-ア-4	A-イ-4	B-ア-5
12月	「もちつきかいをしよう」⑦	F-イ-2	F-イ-3	F-イ-2
	「えんこうかいにいこう」②	G-ア-2	G-オ-2	B-ア-5
	「クリスマス会をしよう」⑨	D-イ-3	C-イ-3	D-イ-4
1月	「あったかパーティーをしよう」⑨	B-ア-4	A-イ-5	B-ア-5
	「これからものがんばろう」⑧	B-ア-4	F-イ-3	D-イ-5
2月	「冬の遊びをしよう」⑥	E-ウ-3	A-イ-5	H-イ-3
	「がくしゅうはっぴようかいをしよう」⑩	B-ア-4	B-ア-4	B-ア-5
3月	「おわかれえんそくにいこう」②	G-ア-2	A-イ-5	G-ア-5
	「おわかれかいをしよう」⑩	D-イ-4	C-イ-4	D-イ-5

◇ ✕ ㊦

お　　わ　　り　　に

平成14年度からの新学習指導要領の完全実施に向けて、新しい教育課程の編成とその実践が求められています。完全学校週5日制の下で、「ゆとり」ある、しかも「特色ある教育」を展開し、自ら学び自ら考える「生きる力」を身につけた子供を育成しなければなりません。とりわけ、新設の総合的な学習の時間の計画と実践は、これから期待される特色ある学校づくりの鍵を握っているといえます。しかしながら、総合的な学習は教科学習と両輪をなし相互に補完し合ってこそ、その理念や指導の効果を発揮できるものであります。教科（文化課程）と総合的な学習（生活課程）のそれぞれの特質と調和的な展開のあり方を明らかにすることがこれからの学校教育の重要な課題であるととらえています。

本校では、今日の教育課題に対応すべき新世紀の教育のあり方を求めて、「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」の研究主題のもと、教育研究と実践を積み重ねて参りました。本校の研究は、「豊かな人間の育成」のために、一調和的に展開する教科領域・総合的な学習像の明確化—という研究の視点を明確にしながら、教科学習と総合的な学習についての調和ある教育課程と子供主体の学習のよりよいあり方を追究するものです。

特に、本年度の研究においては、次の3つの主張を込めました。

- ① 豊かな人間の育成をめざす学習として、教科領域・総合的な学習はそれぞれに固有の大切な役割・立場を担っていることの認識を大前提とする。
- ② 教育課程全体において、各学習が連動し、相互補完・相互促進する中で資質・能力を高めていくような、単元構成や年間配列の工夫をしていく。
- ③ 各学習は、いずれも「人間性」「創造性」「主体性」を高める学習として、自分とのかかわりを強める共通の学びで展開する。

本年度の研究・実践を通して、教育課程全体を見すえ教科領域・総合的な学習が調和的に展開する学習の在り方を明確化することで、子供の課題追究や実践活動の姿の中に「創造性」「主体性」の高まりが、また、よりよい自分なりの応えを求めたり、自分の追究に自信をもったりする「人間性」の育ちが見られるようになりました。成果の一端ととらえています。しかし、さらに自分自身とのかかわりを強めた追究を生み出す学習のあり方や文化課程（教科領域）における学習の連動のあり方の究明など、課題も明らかになりました。今後、一層の研究推進と実践を重ねてまいりたいと考えています。

本校はまた、帰国子女学級及び特殊学級を併設し、それぞれの教育研究と実践をおこなっています。一人一人の子供が学習や生活への適応を図ると同時に、特性伸長の方針のもと、個のよさを生かすべく、独自のカリキュラムの作成と実践に取り組んでいます。

最後になりましたが、本校研究の深化・充実のために、ご指導を賜りました立教大学助教授奈須正裕先生、福岡教育大学の先生方及び本校先輩をはじめ関係の先生方に深く感謝申し上げます。また、わたしたちの研究に各方面から、厳しいご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年5月

副校長　久　門　隆

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人（平成13年度）

◎学 長 菰口 治

◎大学教官

(国語科)	前田 眞澄	(理科)	田中 浩朗	(体育科)	池田 修
(社会科)	山元 悦子	(生活科)	森藤 義孝	(道徳)	林 忠幸
(算数科)	中野 和光	(音楽科)	寺岡 聖豪	(特別活動)	堺 正之
	山下 昭		平井 建二	(障害児教育)	高田 清浩
	飯田 慎司		岩崎 洋一		元兼 正勝
	山口 武志	(図画工作科)	木村 次宏		昇地 人倫
(理科)	清水 紀宏	(家庭科)	吉井 昌子	(養護)	藤金 博行
	中村 重太		柳 純子		照屋 子
	宮脇 亮介				筑紫

◎附小教官

(職名)	(担任)	(専攻)	(氏名)	(出身地区)
校長		国語	中谷 雅彦	大分県
副校長		国算	久門 隆晃	福岡県
教務主任	専任	国理	小森 正樹	福岡県
研究主任	専任	社会	吉田 宏樹	福岡県
教諭	1	数科	手島 誠一	福岡県
教諭	1	工作	高野 重則	福岡県
教諭	2	生活	澤村 尚雄	福岡県
教諭	2	特別	北田 耕一	福岡県
教諭	3	活動	石田 俊次	福岡県
教諭	3	音楽	矢野 俊明	福岡県
教諭	4	体育	藤野 クミ	福岡県
教諭	4	算体	原 津一	福岡県
教諭	4	教育	稲野 真功	福岡県
教諭	5	言語	岩城 一磨	福岡県
教諭	5	家庭	平島 健二	福岡県
教諭	5	音楽	木村 真美	福岡県
教諭	6	理科	豊村 信義	福岡県
教諭	6	徳語	野口 昭雄	福岡県
教諭	6	英語	石硯 儀郎	福岡県
教諭	専任	国語	島崎 和美	福岡県
教諭	ふさ	算数	原口 利彦	福岡県
教諭	く梅	生活	塩田 一郎	福岡県
教諭	専任	体育	谷崎 俊文	福岡県
養護教諭	専任	英語	森田 常子	福岡県
研究員	専任	図画	光延 正次	福岡県
研究員	専任	工作	中山 朗之	福岡県
研究員	専任	社会	大坪 剛克	福岡県
研究員	専任	音楽	石橋 恵美	福岡県
研究員	専任	理科	長濱 智範	福岡県
研究員	専任	英語	河野 智範	福岡県
研究員	専任	徳語	寺本 智範	福岡県

平成12年度 附属福岡小学校転出教官

蔵源一郎 (福岡市)	伊藤 啓二 (筑紫)	加藤 英也 (八女・筑後)
猿樂 隆司 (宗像)	松藤 秀子 (山門・三池・柳川)	篠原 裕子 (福岡市)
坂田 佳美 (福岡市)	早川 由洋 (宗像)	杉原 賢太郎 (福岡市)
古野 晴彦 (飯塚)	牛島 玲 (八女・筑後)	松田 伸治 (福岡市)
日向 ゆう子 (糸島)	山田 耕司 (筑紫)	大辻 祥二 (北九州市)

平成13年 5 月 印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要 No.32

発行者 福岡教育大学教育学部
附 属 福 岡 小 学 校
〒810-0061 福岡市中央区西公園12番 1 号
TEL 092(741)4731(代)

印刷所 (株)ネオ・プリンティング
TEL 092(511)8941(代)

TUZOK
FuKoka

